

吾輩は猫である

夏目漱石



吾輩^{わがはい}は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたかとうと見当^{けんとう}がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩はここで始めて人間というものを見た。しかもあとで聞くとそれは書生という人間中で一番^{どうあく}癡^{つかま}悪な種族であつたそうだ。この書生というのは時々我々を捕^{つかま}えて煮^にて食うという話である。しかしその当時は何^{てのひら}という考もなかつたから別段恐しいとも思わなかつた。ただ彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じがあつたばかりである。掌の上で少し落ちついて書生の顔を見たのがいわゆる人間というものの見始^{みはじめ}であろう。この時妙なものだと思つた感じが今でも残っている。第

一毛をもつて裝飾されべきはずの顔がつるつるしてまるで薬缶やかんだ。その後猫にもだいぶ逢あつたがこんな片輪かたわには一度も出會でくわした事がない。のみならず顔の真中があまりに突起している。そうしてその穴の中から時々ふうふうと煙けむりを吹く。どうも咽むせぼくて実に弱つた。これが人間の飲む煙草たばこというものである事はようやくこの頃知つた。

この書生の掌の裏うちでしばらくはよい心持に坐つておつたが、しばらくすると非常な速力で運轉し始めた。書生が動くのか自分だけが動くのか分らないが無暗むやみに眼が廻る。胸が悪くなる。到底助とうていからなと思つていると、どきりと音がして眼から火が出た。それまでは記憶しているがあとは何の事やらいくら考え出そうとしても分らない。

ふと気が付いて見ると書生はいない。たくさんおつた兄弟が

一疋^{びき}も見えぬ。肝心^{かんじん}の母親さえ姿を隠してしまった。その上今^{いま}までの所とは違つて無暗^{むやみ}に明るい。眼を明いていられぬくらいだ。はてな何でも容子^{ようす}がおかしいと、のそのそ這^はい出して見ると非常に痛い。吾輩は藁^{わら}の上から急に笹原の中へ棄てられたのである。

ようやくの思いで笹原を這い出すと向うに大きな池がある。吾輩は池の前に坐つてどうしたらよかろうと考えて見た。別にこれという分別^{ぶんべつ}も出ない。しばらくして泣いたら書生がまた迎に来てくれるかと考え付いた。ニヤー、ニヤーと試みにやつて見たが誰も来ない。そのうち池の上をさらさらと風が渡つて日が暮れかかる。腹が非常に減つて来た。泣きたくても声が出ない。仕方がない、何でもよいから食物^{くいもの}のある所まであるこうと決心をしてそろりそろりと池を左^{ひだり}りに廻り始めた。どうも非常

に苦しい。そこを我慢して無理やりに這^はつて行くとようやくの事で何となく人間臭い所へ出た。ここへ這入^{はい}つたら、どうにかなると思つて竹垣の崩^{くず}れた穴から、とある邸内にもぐり込んだ。縁は不思議なもので、もしこの竹垣が破れていなかったなら、吾輩はついに路傍^{ろぼう}に餓死^{がし}したかも知れんのである。一樹の蔭とはよく云^いつたものだ。この垣根の穴は今日^{こんにち}に至るまで吾輩が隣家^{となり}の三毛を訪問する時の通路になつてゐる。さて邸^{やしき}へは忍び込んだもののこれから先どうして善^いいか分らない。そのうちに暗くなる、腹は減る、寒さは寒し、雨が降つて来るといふ始末でもう一刻の猶^{ゆうよ}予が出来なくなつた。仕方がないからとにかく明るくて暖かそうな方へ方へとあるいて行く。今から考えるとその時はすでに家の内に這入つておつたのだ。ここで吾輩は彼^かの書生以外の人間を再び見るべき機会に遭遇^{そうぐう}したのである。第一に

逢ったのがおさんである。これは前の書生より一層乱暴な方で吾輩を見るや否やいきなり頸筋をつかんで表へ抛り出した。いやこれは駄目だと思つたから眼をねぶつて運を天に任せていた。しかしひもじいのと寒いのはどうしても我慢が出来ん。吾輩は再びおさんの隙を見て台所へ這い上つた。すると間もなくまた投げ出された。吾輩は投げ出されては這い上り、這い上つては投げ出され、何でも同じ事を四五遍繰り返したのを記憶している。その時におさんと云う者はつくづくいやになつた。この間おさんの三馬を偷んでこの返報をしてやつてから、やつと胸の痞が下りた。吾輩が最後につまみ出されようとしたときに、この家の主人が騒々しい何だといいいながら出て来た。下女は吾輩をぶら下げて主人の方へ向けてこの宿なしの小猫がいくら出しても出しては御台所へ上つて来て困りますという。主人は鼻の

下の黒い毛を撚りながら吾輩の顔をしばらく眺めておったが、やがてそんなら内へ置いてやれといったまま奥へ這入つてしまつた。主人はあまり口を聞かぬ人と見えた。下女は口惜しうに吾輩を台所へ抛り出した。かくして吾輩はついにこの家を自分の住家と極める事にしたのである。

吾輩の主人は滅多に吾輩と顔を合せる事がない。職業は教師だそう。学校から帰ると終日書齋に這入つたぎりほとんど出て来る事がない。家のものは大變な勉強家だと思つてゐる。当人も勉強家であるかのごとく見せてゐる。しかし實際はうちのものがいふような勤勉家ではない。吾輩は時々忍び足に彼の書齋を覗いて見るが、彼はよく昼寝をしてゐる事がある。時々読みかけてある本の上に涎をたらしてゐる。彼は胃弱で皮膚の色が淡黄色を帯びて弾力のない不活潑な徴候をあらわしてゐる。

その癖に大飯を食う。大飯を食った後でタカジヤスターゼを飲む。飲んだ後で書物をひろげる。二三ページ読むと眠くなる。涎を本の上へ垂らす。これが彼の毎夜繰り返す日課である。吾輩は猫ながら時々考える事がある。教師というものは実に楽なものだ。人間と生れたら教師となるに限る。こんなに寝ていて勤まるものなら猫にでも出来ぬ事はないと。それでも主人に云わせると教師ほどつらいものはないそうで彼は友達が来る度に何とかかんとか不平を鳴らしている。

吾輩がこの家へ住み込んだ当時は、主人以外のものにははなはだ不人望であつた。どこへ行つても跳ね付けられて相手にしてくれ手がなかつた。いかに珍重されなかつたかは、今日に至るまで名前さえつけてくれないのでも分る。吾輩は仕方がないから、出来得る限り吾輩を入れてくれた主人の傍そばにいる事をつと

めた。朝主人が新聞を読むときは必ず彼の膝ひざの上に乗る。彼が昼寝をするときは必ずその背せ中なかに乗る。これはあながち主人が好きという訳ではないが別に構かまい手がなかつたからやむを得るのである。その後いろいろ経験の上、朝は飯櫃めしびつの上、夜は炬燵こたつの上、天氣のよい昼は橡側えんがわへ寝る事とした。しかし一番心持の好いのは夜よに入いつてここのうちの小供の寢床へもぐり込んでいっしょにねる事である。この小供というのは五つと三つで夜になると二人が一つ床へ入はいつて一間ひとまへ寝る。吾輩はいつでも彼等の中間おのに己おのれを容いるべき余地を見出みいしてどうにか、こうにか割り込むのであるが、運悪く小供の一人が眼を醒さますが最後大変な事になる。小供は——ことに小さい方が質たちがわるい——猫が来た猫が来たといつて夜中でも何でも大きな声で泣き出すのである。すると例の神経胃弱性の主人は必かならず眼をさまして次の部屋

から飛び出してくる。現にせんだつてなどは物指で尻ぺたをひ
どく叩たたかれた。

吾輩は人間と同居して彼等を観察すればするほど、彼等是我儘わがまま
なものだと言せざるを得ないようになった。ことに吾輩が時々
同衾どうきんする小供のごときに至つては言語同断である。自分の勝手
な時は人を逆さにしたり、頭へ袋をかぶせたり、抛ほうり出したり、
へつついの中へ押し込んだりする。しかも吾輩の方で少しでも
手出しをしようものなら家内総かないがかりで追ひ廻して迫害を加え
る。この間もちよつと畳で爪を磨といだら細君が非常に怒おこつてそ
れから容易に座敷へ入いれない。台所の板の間で他ひとが顫ふるえていて
も一向平気なものである。吾輩の尊敬する筋向すじむこうの白君などは逢あ
う度毎たびごとに人間ほど不人情なものはないと言つておらるる。白君
は先日玉のような子猫を四足産うまれたのである。ところがそこ

の家の書生が三日目にそいつを裏の池へ持つて行つて四足ながら棄てて来たそうだ。白君は涙を流してその一部始終を話した上、どうしても我等猫族が親子の愛を完くして美しい家族的生活をするには人間と戦つてこれを剿滅せねばならぬといわれた。一々もつともの議論と思う。また隣りの三毛君などは人間が所有権という事を解していないといつて大に憤慨している。元来我々同族間では目刺の頭でも鰯の臍でも一番先に見付けたものがこれを食う権利があるものとなつてゐる。もし相手がこの規約を守らなければ腕力に訴えて善いくらいのものだ。しかるに彼等人間は毫もこの觀念がないと見えて我等が見付けた御馳走は必ず彼等のために掠奪せらるるのである。彼等はその強力を頼んで正当に吾人が食い得べきものを奪つてすましている。白君は軍人の家におり三毛君は代言の主人を持つてゐる。吾輩は

教師の家に住んでいるだけ、こんな事に関すると両君よりもむしろ楽天である。ただその日その日がかこうにか送られればよい。いくら人間だつて、そういつまでも栄える事もあるまい。まあ気を永く猫の時節を待つがよからう。

我儘わがままで思い出したからちよつと吾輩の家の主人がこの我儘で失敗した話をしよう。元来この主人は何といつて人に勝すぐれて出来る事もないが、何にでもよく手を出したがる。俳句をやつては、ととぎすへ投書をしたり、新体詩を明星へ出したり、間違いだらけの英文をかいたり、時によると弓に凝こつたり、謡うたいを習つたり、またあるときはヴァイオリンなどをブーブー鳴らしたりするが、気の毒な事には、どれもこれも物になつておらん。その癖やり出すと胃弱の癖にいやに熱心だ。後架こうかの中で謡をうたつて、近所こうかせんせいで後架先生と渾名あだなをつけられているにも関せず一向平いつこう

気なもので、やはりこれは平の宗盛むねもりにて候を繰返そうろうしている。み

んながそら宗盛だと吹き出すくらいである。この主人がどうい
う考になったものか吾輩の住み込んでから一月ばかり後のある
月の月給日に、大きな包みを提さげてあわただしく帰つて来た。
何を買つて来たのかと思うと水彩絵具と毛筆とワットマンとい
う紙で今日から謡や俳句をやめて絵をかく決心と見えた。果し
て翌日から当分の間というものは毎日毎日書斎で昼寝もしない
で絵ばかりかいている。しかしそのかき上げたものを見ると何
をかいたものやら誰にも鑑定がつかない。当人もあまり甘うまくな
いと思つたものか、ある日その友人で美学とかをやっている人
が来た時に下しものような話をしてゐるのを聞いた。

「どうも甘うまくかけないものだね。人を見ると何でもないよう
だが自ら筆をとつて見ると今更いまさらのようにむずかしく感ずる」こ

れは主人の述懐である。なるほど詐りのない処だ。彼の友は金縁の眼鏡越に主人の顔を見ながら、「そう初めから上手にはかけないさ、第一室内の想像ばかりで画がかける訳のものではない。昔し以太利の大家アンドレア・デル・サルトが言つた事がある。画をかくなら何でも自然その物を写せ。天に星辰あり。地に露華あり。飛ぶに禽あり。走るに獣あり。池に金魚あり。枯木に寒鴉あり。自然はこれ一幅の大活画なりと。どうだ君も画らしい画をかこうと思うならちと写生をしたら」

「へえアンドレア・デル・サルトがそんな事をいつた事があるかい。ちつとも知らなかつた。なるほどこりやもつともだ。実にその通りだ」と主人は無暗に感心している。金縁の裏には嘲けるような笑が見えた。

その翌日吾輩は例のごとく椽側に出て心持善く昼寝をしてい

たら、主人が例になく書斎から出て来て吾輩の後ろで何かしきりにやっている。ふと眼が覚めて何をしているかと一分ばかり細目に眼をあけて見ると、彼は余念もなくアンドレア・デル・サルトを極め込んでいる。吾輩はこの有様を見て覚えす失笑するのを禁じ得なかつた。彼は彼の友に擲擧せられたる結果としてまず手初めに吾輩を写生しつつあるのである。吾輩はすでに十分寝た。欠伸がしたくてたまらない。しかしせっかく主人が熱心に筆を執っているのを動いては気の毒だと思つて、じつと辛棒しておつた。彼は今吾輩の輪廓をかき上げて顔のあたりをいろどっている。吾輩は自白する。吾輩は猫として決して上乘の出来ではない。背といい毛並といい顔の造作といいあえて他の猫に勝るとは決して思つておらん。しかしいくら不器量の吾輩でも、今吾輩の主人に描き出されつつあるような妙な姿とは、

どうしても思われない。第一色が違う。吾輩は波斯産ペルシャさんの猫のごとく黄を含める淡灰色うるしに漆のごとき斑入りの皮膚ふいを有している。これだけは誰が見ても疑うべからざる事実と思う。しかるに今主人の彩色を見ると、黄でもなければ黒でもない、灰色でもない。ければ褐色とびいろでもない、さればとてこれらを交ぜた色でもない。ただ一種の色であるというよりほかに評し方のない色である。その上不思議な事は眼がない。もつともこれは寝ているところを写生したのだから無理もないが眼らしい所さえ見えないから盲猫めくらだか寝ている猫だか判然しないのである。吾輩は心中ひそかにいくらアンドレア・デル・サルトでもこれではしようがないと思った。しかしその熱心には感服せざるを得ない。なるべくなら動かずにおつてやりたいと思つたが、さつきから小便が催うみうちしている。身内の筋肉はむずむずする。最早一分も猶予ゆうよが出

来ぬ仕儀しぎとなつたから、やむをえず失敬して両足を前へ存分の
 して、首を低く押し出してあゝあと大なる欠伸だいいをした。さてこ
 うなつて見ると、もうおとなしくしていても仕方がない。どう
 せ主人の予定は打ち壊こわしたのだから、ついでに裏へ行つて用
 を足たそうと思つてのそのそ這い出した。すると主人は失望と怒
 りを搔かき交ぜたような声をして、座敷の中から「この馬鹿野郎」
 と怒鳴どなつた。この主人は人を罵ののるときは必ず馬鹿野郎というの
 が癖である。ほかに悪口の言いようを知らないのだから仕方が
 ないが、今まで辛棒した人の氣も知らないで、無暗むやみに馬鹿野郎
 呼よわりは失敬だと思ふ。それも平生吾輩が彼の背せ中へ乗る時に
 少しは好い顔でもするならこの漫罵まんばも甘んじて受けるが、こつ
 ちの便利になる事は何一つ快くしてくれな事もないのに、小便
 に立つたのを馬鹿野郎とは酷ひどい。元来人間というものは自己の

力量に慢じてみんな増長している。少し人間より強いものが出て来て窘めてやらなくては、この先どこまで増長するか分らない。
我儘もこのくらいなら我慢するが吾輩は人間の不徳についてこれよりも数倍悲しむべき報道を耳にした事がある。

吾輩の家の裏に十坪ばかりの茶園がある。広くはないが瀟洒とした心持ち好く日の当る所だ。うちの小供があまり騒いで楽々昼寝の出来ない時や、あまり退屈で腹加減のよくない折などは、吾輩はいつでもここへ出て浩然の気を養うのが例である。ある小春の穏かな日の二時頃であつたが、吾輩は昼飯後快よく一睡した後、運動かたがたこの茶園へと歩を運ばした。茶の木の間一本一本嗅ぎながら、西側の杉垣のそばまでくると、枯菊を押し倒してその上に大きな猫が前後不覚に寝ている。彼は吾輩の近づくのも一向心付かざることく、また心付くも無頓着なる

ごとく、大きな^{いびき}躰をして長々と体を横^{よこた}えて眠っている。他の庭^{ひと}内に忍^{ひそ}び入りたるものがかくまで平氣に睡^{ねむ}られるものかと、吾輩は窃^{ひそ}かにその大胆なる度胸に驚かざるを得なかつた。彼は純粹の黒猫である。わずかに午^ごを過ぎたる太陽は、透明なる光線を彼の皮膚の上に抛^なげかけて、きらきらする柔毛^{にこげ}の間より眼に見えぬ炎でも燃^もえ出^いずるように思われた。彼は猫中の大王とも云うべきほどの偉大なる体格を有している。吾輩の倍はたしかにある。吾輩は嘆賞の念と、好奇の心に前後を忘れて彼の前に佇立^{ちよりつ}して余念もなく眺^{なが}めていると、静かなる小春の風が、杉垣の上から出たる梧桐^{ごとう}の枝を輕^{かろ}く誘つてばらばらと二三枚の葉が枯菊の茂みに落ちた。大王はかつとその真丸^{まんまる}の眼を開いた。今でも記憶している。その眼は人間の珍重する琥珀^{こはく}というものよりも遙^{はる}かに美しく輝いていた。彼は身動きもしない。双眸^{そうぼう}の奥

から射るとき光を吾輩の矮小^{わいしょう}なる額^{ひたい}の上にあつめて、御めえ、
は一体何だと云った。大王にしては少々言葉が卑^{いや}しいと思つた
が何しろその声の底に犬をも挫^ひしぐべき力が籠^{こも}つていたので吾
輩は少なからず恐れを抱^{いだ}いた。しかし挨拶^{あいさつ}をしないと險^{けん}呑^{のん}だと思
つたから「吾輩は猫である。名前はまだない」となるべく平氣
を装^{よそお}つて冷然と答えた。しかしこの時吾輩の心臓はたしかに平
時よりも烈しく鼓動しておつた。彼は大に輕蔑^{おおいけいべつ}せる調子で「何、
猫だ？ 猫が聞いてあきれらあ。全^{ぜん}てえどこに住^うんでるんだ」随
分傍若無人^{ぼうじやくぶじん}である。「吾輩はこの教師の家^{うち}にいるのだ」「どう
せそんな事だろうと思つた。いやに瘠^やせてるじゃねえか」と大
王だけに氣焰^{きえん}を吹きかける。言葉付から察するとどうも良家の
猫とも思われない。しかしその膏切^{あぶらぎ}つて肥満しているところを
見ると御馳走を食つてゐるらしい、豊かに暮しているらしい。吾

輩は「そう云う君は一体誰だい」と聞かざるを得なかった。「己れあ車屋の黒くろよ」昂然こうぜんたるものだ。車屋の黒はこの近辺で知らぬ者なき乱暴猫である。しかし車屋だけに強いばかりでちつとも教育がないからあまり誰も交際しない。同盟敬遠主義まともの的まとになっている奴だ。吾輩は彼の名を聞いて少々尻こそばゆき感じを起すと同時に、一方では少々輕侮けいぶの念も生じたのである。吾輩はまず彼がどのくらい無学であるかを試ためしてみようと思つて左さの問答をして見た。

「一体車屋と教師とはどつちがえらいだろう」

「車屋の方が強いに極きまつていらあな。御めえのうちの主人を見ねえ、まるで骨と皮ばかりだぜ」

「君も車屋の猫だけに大分強だいぶそうだ。車屋にいと御馳走ごちそうが食えろと見えるね」

「何におれなんぞ、どこの国へ行つたつて食い物に不自由はしねえつもりだ。御めえなんかも茶壺ばかりぐるぐる廻つていねえで、ちつと己の後へくつ付いて来て見ねえ。一と月とたたねえうちに間違えるように太れるぜ」

「追つてそう願う事にしよう。しかし家は教師の方が車屋より大きいのに住んでいるように思われる」

「篋棒め、うちなんかいくら大きくたって腹の足しになるもんか」

彼は大に肝癪に障つた様子で、寒竹をそいだような耳をしきりとびく付かせてあららかに立ち去つた。吾輩が車屋の黒と知己になつたのはこれからである。

その後吾輩は度々黒と邂逅する。邂逅する毎に彼は車屋相当の気焰を吐く。先に吾輩が耳にしたという不徳事件も実は黒か

ら聞いたのである。

或る日例のごとく吾輩と黒は暖かい茶晶ちやばたけの中で寝転ねころびながらいろいろ雑談をしていると、彼はいつもの自慢話じまんばなしをさも新しそうに繰り返したあとで、吾輩に向つて下しものごとく質問した。「御めえは今までに鼠を何匹とつた事がある」智識は黒よりも余程発達しているつもりだが腕力と勇氣とに至つては到底黒の比較にはならないと覚悟はしていたものの、この問に接したる時は、さすがに極きまりが善よくはなかった。けれども事實は事實で詐いつわる訳には行かないから、吾輩は「実はとうとうとうと思つてまだ捕とらない」と答えた。黒は彼の鼻の先からぴんと突張つつばつている長い髭ひげをびりびりと震ふるわせて非常に笑つた。元来黒は自慢をする丈だけにどこか足りないところがあつて、彼の気焰きえんを感心したように咽喉のどをころころ鳴らして謹聴していればはなはだ御ぎよし

やすい猫である。吾輩は彼と近付になつてから直にこの呼吸を飲み込んだからこの場合にもなまじい己れおのを弁護してますます形勢をわるくするのも愚ぐである、いつその事彼に自分の手柄話をしやべらして御茶を濁すに若くしはないと思案さだを定めた。そこでおとなしく「君などは年が年であるから大分だいぶんとつたろう」とそそのかして見た。果然彼は墻壁しょうへきの欠所けつしよに呐喊とつかんして来た。「たとでもねえが三四十はとつたろう」とは得意気なる彼の答であつた。彼はなお語をつづけて「鼠の百や二百は一人でいつでも引き受けるがいたち、つてえ奴は手に合わねえ。一度いたちに向つて酷ひどい目に逢あつた」「へえなるほど」と相槌あいづちを打つ。黒は大きな眼をぱちつかせて云う。「去年の大掃除の時だ。うちの亭主いしばいが石灰の袋を持って椽えんの下へ這はい込んだら御めえ、大きないたちの野郎めんくらが面喰めんくらつて飛び出したと思ひねえ」「ふん」と感心して

見せる。「いたち、つてけども何鼠の少し大きいぐれえのものだ。
こん畜生ちぎしやうつて気で追っかけてとうとう泥溝どぶの中へ追い込んだと
思いねえ」「うまくやったね」と喝采かつさいしてやる。「ところが御め、
えいざつてえ段になると奴め最後さいごつ屁ぺをこきやがった。臭えの
臭くねえのつてそれからつてえものはいたちを見ると胸が悪く
ならあ」彼はここに至つてあたかも去年の臭氣いまを今なお感ずる
ごとく前足を揚げて鼻の頭を二三遍なで廻わした。吾輩も少々
気の毒な感じがする。ちつと景氣を付けてやろうと思つて「し
かし鼠なら君に睨にらまれては百年目だろう。君はあまり鼠を捕とる
のが名人で鼠ばかり食うものだからそんなに肥つて色つやが善
いのだろう」黒の御機嫌をとるためのこの質問は不思議にも反
対の結果を呈出ていしゆつした。彼は喟然きぜんとして大息たいそくしていう。「考かんげえる
とつまらねえ。いくら稼いで鼠をとつたつて——一てえ人間ほ

どふてえ奴は世の中にいねえぜ。人のとつた鼠をみんな取り上げやがつて交番へ持つて行きやあがる。交番じや誰が捕^とったか分らねえからそのたんびに五錢ずつくれるじやねえか。うちの亭主なんか己^{おれ}の御蔭でもう壺円五十錢くらい儲^{もう}けていやがる癖に、碌^{ろく}なものを食わせた事もありやしねえ。おい人間てものあての善^いい泥棒だぜ」さすが無学の黒もこのくらいの理窟^{りくつ}はわかると見えてすこぶる怒^{おこ}った容子^{ようす}で背中^{さかだ}の毛を逆立てている。吾輩は少々気味が悪くなつたから善い加減にその場を胡魔^{ごま}化して家^{うち}へ帰つた。この時から吾輩は決して鼠をとるまいと決心した。しかし黒の子分になつて鼠以外の御馳走を獵^{あさ}つてあるく事もしなかつた。御馳走を食うよりも寝ていた方が気楽でいい。教師の家^{うち}にいと猫も教師のような性質になると見える。要心しないといと今に胃弱になるかも知れない。

教師といえは吾輩の主人も近頃に至つては到底水彩画において望のぞみのない事を悟つたものと見えて十二月一日の日記にこんな事をかきつけた。

○○と云う人に今日の会で始めて出逢であつた。あの人は大分だいぶん放蕩ほうとうをした人だと云うがなるほど通人つうじんらしい風采ふうさいをしている。こう云う質たちの人は女に好かれるものだから○○が放蕩をしたと云うよりも放蕩をするべく余儀なくせられたと云うのが適當であろう。あの人の妻君は芸者だそうだ、羨うらやましい事である。元来放蕩家を悪くいう人の大部分は放蕩をする資格のないものが多い。また放蕩家をもつて自任する連中のうちにも、放蕩する資格のないものが多い。これらは余儀なくされないのに無理に進んでやるのである。あたかも吾輩の水彩画に於けるがごときもので到底卒業する氣づか

いはない。しかるにも関せず、自分だけは通人だと思つて済すましている。料理屋の酒を飲んだり待合へ這入はいるから通人となり得るという論が立つなら、吾輩も一廉ひとかどの水彩画家になり得る理窟りくつだ。吾輩の水彩画のごときはかかない方がましであると同じように、愚昧ぐまいなる通人よりも山出しの大野暮おおやぼの方が遙はるかに上等だ。

通人論つうじんろんはちよつと首肯しゅくこうしかねる。また芸者の妻君を羨しいなどというところは教師としては口にすべからざる愚劣の考であるが、自己の水彩画における批評眼だけはたしかなものだ。主人はかくのごとく自知じちの明めいあるにも関せずその自惚心うぬぼれしんはなかなか抜けない。中二日なかふつか置いて十二月四日の日記にこんな事を書いている。

昨夜ゆうべは僕が水彩画をかいて到底物にならんと思つて、そこ

らに抛^{ほう}つて置いたのを誰かが立派な額にして欄間^{らんま}に懸^かけてくれた夢を見た。さて額になつたところを見ると我ながら急に上手になつた。非常に嬉しい。これなら立派なものだと独^{ひと}りで眺め暮らしていると、夜が明けて眼が覚^さめてやはり元の通り下手である事が朝日と共に明瞭になつてしまつた。

主人は夢の裡^{うち}まで水彩画の未練を背負^{しよ}つてあるいて見える。これでは水彩画家は無論夫子^{ふうし}の所謂通人^{いわゆる}にもなれない質^{たち}だ。

主人が水彩画を夢に見た翌日例の金縁眼鏡^{めがね}の美学者が久し振りで主人を訪問した。彼は座につくと劈頭^{へきとう}第一に「画^えはどうかね」と口を切つた。主人は平気な顔をして「君の忠告に従つて写生^{つと}を力めているが、なるほど写生をすると今まで気のつかかなかつ

た物の形や、色の精細な変化などがよく分るようだ。西洋では昔むかしから写生を主張した結果今日こんにちのように発達したものと思われる。さすがアンドレア・デル・サルトだ」と日記の事はおく、びにも出さないで、またアンドレア・デル・サルトに感心する。美学者は笑いながら「実は君、あれは出鱈目でたらめだよ」と頭を搔かく。「何が」と主人はまだ謔いっふわられた事に気がつかない。「何がって君のしきりに感服しているアンドレア・デル・サルトさ。あれは僕のちよつと捏造ねつぞうした話だ。君がそんなに真面目まじめに信じようとは思わなかったハハハハ」と大喜悅の体ていである。吾輩は椽側しるでこの対話を聞いて彼の今日の日記にはいかなる事が記さるであらうかと予め想像せざるを得あらかじなかった。この美学者はこんな好加減いな事を吹き散らして人を担かつぐのを唯一たのしみの樂たのしみにしている男である。彼はアンドレア・デル・サルト事件が主人の情線じょうせんにいか

なる響を伝えたかを毫も顧慮せざるもののごとく得意になつて
下しものような事を饒舌しゃべつた。「いや時々冗談じょうだんを言うと人が真まに受け
るので大に滑稽おおい こっけいてき的美感を挑撥ちやうはつするのは面白い。せんだつてある
学生にニコラス・ニックルベアがギボンに忠告して彼の一世の
大著述なる仏国革命史を仏語で書くのをやめにして英文で出版
させたと言つたら、その学生がまた馬鹿に記憶の善い男で、日本
文学会の演説会で真面目に僕の話した通りを繰り返したのは滑
稽であつた。ところがその時の傍聴者は約百名ばかりであつた
が、皆熱心にそれを傾聴しておつた。それからまだ面白い話がある。
せんだつて或る文学者のいる席でハリソンの歴史小説はなセ
オフアーノの話はなしが出たから僕はあれは歴史小説うちの中で白眉はくびで
ある。ことに女主人公が死ぬところは鬼氣人ききを襲うようだと評
したら、僕の向うに坐っている知らんと云つた事のない先生が、

そうそうあすこは実に名文だといった。それで僕はこの男もやはり僕同様この小説を読んでおらないという事を知った」神経胃弱性の主人は眼を丸くして問いかけた。「そんな出鱈目^{でたらめ}をいってもし相手が読んでいたらどうするつもりだ」あたかも人を欺^{あざむ}くのは差支^{さしつかえ}ない、ただ化^{ばけ}の皮^{かわ}があらわれた時は困るじゃないかと感じたもののごとくである。美学者は少しも動じない。「なにその時^{とき}や別の本と間違えたとか何とか云うばかりさ」と云ってけけら笑っている。この美学者は金縁の眼鏡は掛けているがその性質が車屋の黒に似たところがある。主人は黙って日の出を輪に吹いて吾輩にはそんな勇氣はないと云わんばかりの顔をしている。美学者はそれだから画^えをかいても駄目だという目付で「しかし冗談^{じょうだん}は冗談だが画というものは実際むずかしいものだよ、レオナルド・ダ・ヴィンチは門下生に寺院の壁のしみを

写せと教えた事があるそうだ。なるほど雪隠せついんなどに這入はいつて雨の漏る壁を余念なく眺めていると、なかなかうまい模様画が自然に出来ているぜ。君注意して写生して見給えきつと面白いものが出来るから」「また欺だますのだろう」「いえこれだけはたしかだよ。實際奇警な語じゃないか、ダ・ヴィンチでもいいそうな事だあね」「なるほど奇警には相違ないな」と主人は半分降参をした。しかし彼はまだ雪隠で写生はせぬようだ。

車屋の黒はその後跋ごびつこになった。彼の光沢ある毛は漸々だんだん色が褪さめて抜けて来る。吾輩が琥珀こはくよりも美しいと評した彼の眼には眼脂めやにが一杯たまっている。ことに著るしく吾輩の注意を惹いたのは彼の元気の消沈とその体格の悪くなつた事である。吾輩が例の茶園ちやえんで彼に逢つた最後の日、どうだと云つて尋ねたら「い、たちの最後屁さいごつべと肴屋さかなやの天秤棒てんびんぼうには懲々こりこりだ」といった。

赤松の間に二三段の紅こうを綴つづった紅葉こうようは昔むかしの夢のごとく散つてつくばいに近く代る代る花卉はなびらをこぼした紅白こうはくの山茶花さざんかも残りなく落ち尽した。三間半の南向の椽側こがらしに冬の日脚が早く傾いて木枯こがらしの吹かない日はほとんど稀まれになってから吾輩の昼寝の時間も狭せばめられたような気がする。

主人は毎日学校へ行く。帰ると書斎へ立て籠こもる。人が来ると、教師が厭いやだ厭だという。水彩画も滅多にかかない。タカジヤスターゼも功能がないといつてやめてしまった。小供は感心に休まないうで幼稚園へかよう。帰ると唱歌を歌つて、毬まりについて、時々吾輩を尻尾しっぽでぶら下げる。

吾輩は御馳走ごちそうも食わないから別段肥ふとりもしないが、まづまづ健康で跛びっこにもならずその日その日を暮している。鼠は決して取らない。おさんは未だいまに嫌きらいである。名前はまだつけてくれ

ないが、欲をいっても際限がないから生涯しょうがいこの教師の家で無名うちの猫で終るつもりだ。

二

吾輩は新年来多少有名になつたので、猫ながらちよつと鼻が
高く感ぜらるるのもとはありがたい。

元朝早々主人の許もとへ一枚の絵端書えはがきが来た。これは彼の交友某

画家からの年始状であるが、上部を赤、下部を深緑ふかみどりりで塗つて、

その真中に一の動物が蹲踞うずくまつているところをパステルで書いて

ある。主人は例の書斎でこの絵を、横から見たり、豎たてから眺めた

りして、うまい色だなという。すでに一応感服したものだから、

もうやめにするかと思うとやはり横から見たり、豎から見たり

している。からだを拗^ねじ向けたり、手を延ばして年寄が三世相^{さんぜそう}を見るようにしたり、または窓の方へむいて鼻の先まで持つて来たりして見ている。早くやめてくれないと膝^{ひざ}が揺れて陰呑^{けんのん}でたまらない。ようやくの事で動揺があまり劇^{はげ}しくなくなったと思つたら、小さな声で一体何をかいたのだらうと云^いう。主人は絵端書の色には感服したが、かいてある動物の正体が分らぬので、さつきから苦心をしたものと見える。そんな分らぬ絵端書かと思ひながら、寝ていた眼を上品^{なか}に半ば開いて、落ちつき払つて見ると紛^{まぎ}れもない、自分の肖像だ。主人のようにアンドレア・デル・サルトを極^きめ込んだものでもあるまいが、画家だけに形体も色彩もちやんと整つて出来ている。誰が見たつて猫に相違ない。少し眼識のあるものなら、猫^{うち}の中でも他^{ほか}の猫じゃない吾輩である事が判然とわかるように立派に描^かいてある。このくら

い明瞭な事を分らずにかくまで苦心するかと思うと、少し人間が気の毒になる。出来る事ならその絵が吾輩であると云う事を知らしてやりたい。吾輩であると云う事はよし分らないにしても、せめて猫であるという事だけは分らしてやりたい。しかし人間というものは到底とうてい吾輩猫属ねこぞくの言語を解し得るくらいに天の恵めぐみに浴しておらん動物であるから、残念ながらそのままにしておいた。

ちよつと読者に断っておきたいが、元来人間が何ぞという猫々と、事もなげに軽侮の口調をもつて吾輩を評価する癖があるははなはだよくない。人間の糟かすから牛と馬が出来て、牛と馬の糞から猫が製造されたごとく考えるのは、自分の無智に心付かんで高慢な顔をする教師などにはありがちの事でもあろうが、はたから見てあまり見つともいい者じゃない。いくら猫だつて、

そう粗末簡便には出来ぬ。よそ目には一列一体、平等無差別、どの猫も自家固有の特色などはないようであるが、猫の社会に這入^{はい}つて見るとなかなか複雑なもので十人十色^{といろ}という人間界の語^{ことば}はそのままここにも応用が出来るのである。目付でも、鼻付でも、毛並でも、足並でも、みんな違う。髯^{ひげ}の張り具合から耳の立ち按排^{あんばい}、尻尾^{しっぽ}の垂れ加減に至るまで同じものは一つもない。器量、不器量、好き嫌い、粹^{すい}無粹^{ぶすい}の数^{かず}を悉^つくして千差万別と云つても差支えないくらいである。そのように判然たる区別が存しているにもかかわらず、人間の眼はただ向上とか何とかいって、空ばかり見ているものだから、吾輩の性質は無論相貌^{そうぼう}の末を識別する事すら到底出来ぬのは気の毒だ。同類相求^{むか}むとは昔^{むか}しからある語^{ことば}だそうだがその通り、餅屋^{もちや}は餅屋、猫は猫で、猫の事ならやはり猫でなくては分らぬ。いくら人間が発達したってこ

ればかりは駄目である。いわんや實際をいうと彼等が自ら信じ
ているごとくえらくも何ともないのだからなおさらむずかしい。
またいわんや同情に乏しい吾輩の主人のごときは、相互を残
りなく解するというが愛の第一義であるということすら分らない
男なのだから仕方がない。彼は性の悪い牡蠣かきのごとく書斎に吸
い付いて、かつて外界に向つて口を開いた事がない。それで自
分だけはすこぶる達観したような面構つらがまえをしているのはちよつと
おかしい。達観しない証拠には現に吾輩の肖像が眼の前にある
のに少しも悟つた様子もなく今年は征露の第二年目だから大方
熊の画えだろうなどと気の知れぬことをいつてすましているの
もわかる。

吾輩が主人の膝ひざの上で眼をねむりながらかく考えていると、や
がて下女が第二の絵端書えはがきを持って来た。見ると活版で舶来の猫

が四五疋ひきずらりと行列してペンを握つたり書物を開いたり勉強けんきうをしている。その内の一疋は席を離れて机の角で西洋の猫じや猫じやを躍おどっている。その上に日本の墨で「吾輩は猫である」と黒々とかいて、右の側わきに書を読むや躍おどるや猫の春はる一日ひとひという俳句さえ認めしたたられてある。これは主人の旧門下生より来たので誰が見たつて一見して意味がわかるはずであるのに、迂濶うかつな主人はまだ悟らないと見えて不思議そうに首を捻ひねつて、はてな今年ことしは猫の年かなと独言ひとりごとを言つた。吾輩がこれほど有名になつたのを未だま気が着かずにいると見える。

ところへ下女がまた第三の端書かたわを持つてくる。今度は絵端書ではない。恭賀新年とかいて、傍かたわらに乍きようしゆくながら恐縮かの猫へも宜よろしくごんせいねがいあげたてまつりそぞ御伝声奉願上候うえんとある。いかに迂遠な主人でもこう明らさまに書いてあれば分るものと見えてようやく気が付いたように

フンと言いながら吾輩の顔を見た。その眼付が今までとは違つて多少尊敬の意を含んでいるように思われた。今まで世間から存在を認められなかつた主人が急に一個の新面目しんめんぼくを施こしたのも、全く吾輩の御蔭だと思えばこのくらいの眼付は至当だろうと考える。

おりから門の格子こうしがチリン、チリン、チリリリリンと鳴る。大方来客であろう、来客なら下女が取次に出る。吾輩は肴屋さかなやの梅公がくる時のほかは出ない事に極めてきいるのだから、平気で、もとのごとく主人の膝に坐つておつた。すると主人は高利貸にでも飛び込まれたように不安な顔付をして玄関の方を見る。何でも年賀の客を受けて酒の相手をするのが厭らしい。人間もこのくらい偏屈へんくつになれば申し分はない。そんなら早くから外出でもすればよいのにそれほど勇氣も無い。いよいよ牡蠣かきの根性こんじょう

をあらわしている。しばらくすると下女が来て寒月かんげつさんがおいでになりましたという。この寒月という男はやはり主人の旧門下生であつたそうだが、今では学校を卒業して、何でも主人より立派になつてゐるという話はなしである。この男がどういふ訳か、よく主人の所へ遊びに来る。来ると自分を恋おもつてゐる女が有りそうな、無さそうな、世の中が面白そうな、つまらなそうな、凄すこいような艶つやっぽいような文句ばかり並べては帰る。主人のようになしなびかけた人間を求めて、わざわざこんな話しをしに来るのからして合点がてんが行かぬが、あの牡蠣かき的主人がそんな談話を聞いて時々相槌あいづちを打つのはなお面白い。

「しばらく御無沙汰をしました。実は去年の暮から大おおに活動おおいしているものですから、出でよう出ようと思つても、ついこの方角へ足が向かないので」と羽織ひもの紐をひねくりながら謎なぞ見たよう

な事をいう。「どっちの方角へ足が向くかね」と主人は真面目な顔をして、黒木綿くろもめんの紋付羽織そでぐちの袖口を引張る。この羽織は木綿でゆきが短かい、下からべんべらが左右へ五分くらいずつはみ出している。「エへへへ少し違つた方角で」と寒月君が笑う。見ると今日は前歯が一枚欠けている。「君歯をどうかしたかね」と主人は問題を転じた。「ええ実はある所で椎茸しいたけを食いましたね」「何を食つたつて?」「その、少し椎茸を食つたんで。椎茸の傘かさを前歯で噛み切ろうとしたらぼろりと歯が欠けましたよ」「椎茸で前歯がかけるなんざ、何だか爺々臭じじいくさいね。俳句にはなるかも知れないが、恋にはならんようだな」と平手で吾輩の頭を軽く叩く。「ああその猫が例のですか、なかなか肥つてるじゃありませんか、それなら車屋の黒にだつて負けそうもありませんね、立派なものだ」と寒月君は太おおに吾輩を賞ほめる。「近頃大分大だいぶん

きくなつたのさ」と自慢そうに頭をぽかぽかなぐる。賞められたのは得意であるが頭が少々痛い。「一昨夜もちよいと合奏会をやりましてね」と寒月君はまた話しをもとへ戻す。「どこで」「どこでもそりや御聞きにならんでもよいでしょう。ヴァイオリンが三挺とピアノの伴奏でなかなか面白かったです。ヴァイオリンも三挺くらいになると下手でも聞かれるものですね。二人は女で私がその中へまじりましたが、自分でも善く弾けたと思ひました」「ふん、そしてその女というのは何者かね」と主人は羨まし^{うらや}そうに問いかける。元来主人は平常枯木寒巖^{こぼくかんがん}のような顔付はしているものの実のところは決して婦人に冷淡な方ではない、かつて西洋の或る小説を読んだら、その中にある一人物が出て来て、それが大抵の婦人には必ずちよつと惚^ほれる。勘定をして見ると往来を通る婦人の七割弱^{れんちやく}には恋着するといふ事が

諷刺的ふうしてきに書いてあつたのを見て、これは真理だと感心したくらいな男である。そんな浮気な男が何故なぜ牡蠣的生涯を送っているかと云うのは吾輩猫などには到底とうてい分らない。或人は失恋のためだとも云うし、或人は胃弱のせいだとも云うし、また或人は金がなく臆病な性質たちだからだとも云う。どっちにしたって明治の歴史に係するほどの人物でもないのだから構わない。しかし寒月君の女連れおんなづを羨ましげ気に尋ねた事だけは事実である。寒月君は面白そうに口取くちとりの蒲鉾かまぼこを箸で挟んで半分前歯で食い切つた。吾輩はまた欠けはせぬかと心配したが今度は大丈夫であつた。「なに二人とも去る所さの令嬢ですよ、御存じの方かたじやありません」と余所余所よそよそしい返事をする。「ナール」と主人は引張つたが「ほど」を略して考えている。寒月君はもう善いい加減な時分だと思つたものか「どうも好い天気ですな、御閑おひまならごいっ

しよに散歩でもしましょうか、旅順が落ちたので市中は大変な景気ですよ」と促^{うな}がして見る。主人は旅順の陥落より女連^{おんなづれ}の身元を聞きたいと云う顔で、しばらく考え込んでいたがようやく決心をしたものと見えて「それじゃ出るとしよう」と思い切つて立つ。やはり黒木綿の紋付羽織に、兄の紀念^{かたみ}とかいう二十年來着^{きふ}古^{ふる}るした結城紬^{ゆうきつむぎ}の綿入を着たままである。いくら結城紬が丈夫だつて、こう着つづけではたまらない。所々が薄くなつて日に透かして見ると裏からつぎを当てた針の目が見える。主人の服装には師走^{しわす}も正月もない。ふだん着も余所^{よそ}ゆきもない。出るときは懷手^{ふところ}をしてぶらりと出る。ほかに着る物がないからか、有つても面倒だから着換えないのか、吾輩には分らぬ。ただしこれだけは失恋のためとも思われない。

ふたり
兩人が出て行つたあとで、吾輩はちよつと失敬して寒月君の

食い切った蒲鉾かまぼこの残りを頂戴ちやうだいした。吾輩もこの頃では普通一般の猫ではない。まず桃川如燕ももかわじょえん以後の猫か、グレーの金魚ぬすを偷ぬすんだ猫くらいの資格は充分あると思う。車屋の黒などは固もとより眼中にない。蒲鉾の一切ひとときれくらい頂戴したって人からかれこれ云われる事もなからう。それにこの人目を忍んで間食かんしよくをするという癖は、何も吾等猫族に限った事ではない。うちの御三おさんなどはよく細君の留守中に餅菓子などを失敬しては頂戴し、頂戴しては失敬している。御三ばかりじゃない現に上品な仕付しつけを受けつつあると細君から吹聴ふいちやうせられている小児こどもですらこの傾向がある。四五日前のことであつたが、二人の小供が馬鹿に早くから眼を覚まして、まだ主人夫婦の寝ている間むかに對むかい合あうて食卓に着いた。彼等は毎朝主人の食う麵麩パンの幾分に、砂糖をつけて食うのが例であるが、この日はちやうど砂糖壺さとうづばが卓たくの上に置かれて匙さじ

さえ添えてあつた。いつものように砂糖を分配してくれるものがないので、大きい方がやがて壺の中から一匙ひとさじの砂糖をすくい出して自分の皿の上へあけた。すると小さいのが姉のした通り同分量の砂糖を同方法で自分の皿の上にあけた。少らくしば兩人はりょうにん睨にらみ合つていたが、大きいのがまた匙をとつて一杯をわが皿の上に加えた。小さいのもすぐ匙をとつてわが分量を姉と同一にした。すると姉がまた一杯すくつた。妹も負けずに一杯を附加した。姉がまた壺へ手を懸ける、妹がまた匙をとる。見ている間に一杯一杯一杯と重なつて、ついには兩人ふたりの皿には山盛の砂糖が堆うずたかくなつて、壺の中には一匙の砂糖も余つておらんようになつたとき、主人が寝ばけ眼まなこを擦こすりながら寢室を出て来てせつかくしゃくい出した砂糖を元のごとく壺の中へ入れてしまった。こんなところを見ると、人間は利己主義から割り出した公平と

いう念は猫より優まさっているかも知れぬが、智慧ちえはかえつて猫より劣なっているようだ。そんなに山盛にしないうちに早く嘗なめてしまえばいいにと思つたが、例のごとく、吾輩の言う事などは通じないのだから、氣の毒ながら御櫃おほちの上から黙もくつて見物してゐた。

寒月君と出掛けた主人はどこをどう歩あ行いたものか、その晩遅く帰つて来て、翌日食卓に就ついたのは九時頃であつた。例の御櫃の上から拝見していると、主人はだまつて雑煮ぞうにを食つてゐる。代えては食ひ、代えては食う。餅の切れは小さいが、何でも六切むきれか七切ななきれ食つて、最後の一切れを椀の中へ残して、もうようそうと箸はしを置いた。他人がそんな我儘わがままをすると、なかなか承知しないのであるが、主人の威光を振り廻まわして得意なる彼は、濁った汁の中に焦こげ爛ただれた餅の死骸を見て平氣ですましている。妻君

が袋戸ふくろどの奥からタカジヤスターゼを出して卓の上に置くと、主人は「それは利きかないから飲まん」という。「でもあなた澱粉でんぷん質のものには大變功能があるそうですから、召し上つたらいいでしょう」と飲ませたがる。「澱粉だろうが何だろうが駄目だよ」と頑固がんこに出る。「あなたはほんとに厭あきつぽい」と細君ひとりごとが独言のようについて。「厭あきつぽいのじゃない葉が利かんのだ」「それだつてせんだつてじゅうは大變によく利くよく利くとおっしゃつて毎日毎日上つたじやありませんか」「こないだうちは利いたのだよ、この頃は利つかないのだよ」と対句ついくのような返事をする。「そんなに飲んだり止やめたりしちや、いくら功能のある薬でも利くきづか気遣いはありません、もう少し辛防しんぼうがよくなくつちやあ胃弱なんぞはほかの病氣たあ違つて直らないわねえ」とお盆を持つて控えた御三おさんを顧みる。「それは本当のところでございます。もう

少し召し上つてご覧にならないと、とても善い薬か悪い薬かわかりますまい」と御三は一も二もなく細君の肩を持つ。「何でもいい、飲まんのだから飲まんのだ、女なんか何がわかるものか、黙っている」「どうせ女ですわ」と細君がタカジヤスターゼを主人の前へ突き付けて是非詰腹を切らせようとする。主人は何にも云わず立つて書斎へ這入る。細君と御三は顔を見合せてにやにやと笑う。こんなときに後からくっ付いて行つて膝の上へ乗ると、大変な目に逢わされるから、そつと庭から廻つて書斎の椽側へ上つて障子の隙から覗いて見ると、主人はエピクテタスとか云う人の本を披いて見ておつた。もしそれが平常の通りわかるならちよつとえらいところがある。五六分するとその本を叩き付けるように机の上へ抛り出す。大方そんな事だろうと思ひながらなお注意していると、今度は日記帳を出して下の

ような事を書きつけた。

寒月と、根津、上野、池いけの端はた、神田へん辺を散歩。池の端の待合の前で芸者が裾模様の春着はるぎをきて羽根をついていた。衣装は美しいが顔はすこぶるまずい。何となくうちの猫に似ていた。

何も顔のまずい例に特に吾輩を出さなくつても、よさそうなものだ。吾輩だつて喜多床きたどこへ行つて顔さえ剃すつて貰もらやあ、そんなに人間ちがと異つたところはあるやしない。人間はこう自惚うぬぼれているから困る。

宝丹ほうたんの角かどを曲るとまた一人芸者が来た。これは背せいのすらりとした撫肩なでがたの恰好かつこうよく出来上つた女で、着ている薄紫の衣服きものも素直に着こなされて上品に見えた。白い歯を出して笑いながら「源ちゃんゆうべ昨夕は——つい忙がしかつたもんだから」

と云つた。ただしその声は旅鴉たびがらすのごとく皺枯しやがれておつたので、せつかくの風采ふうさいも大に下おおい落したように感ぜられたから、いわゆる源ちゃんなるもののいかなる人なるかを振り向いて見るも面倒ふしこころになつて、懐手おなりみちのまま御成道へ出た。寒月は何となくそわそわしているごとく見えた。

人間の心理ほど解げし難いものはない。この主人の今の心は怒おこつているのだか、浮かれていますのだか、または哲人の遺書いちじうに一道の慰安を求めつつあるのか、ちつとも分らない。世の中を冷笑しているのか、世の中へ交まじりたいたいのだか、くだらぬ事に肝癪かんしやくを起しているのか、物外ぶつがいに超然ちやうぜんとしていゝのだかさっぱり見当けんとうがつかぬ。猫などはそこへ行くと単純なものだ。食いたければ食おこい、寝たければ寝る、怒るときは一生懸命に怒り、泣くときは絶体絶命に泣く。第一日記などという無用のものは決してつけない。

い。つける必要がないからである。主人のように裏表のある人間は日記でも書いて世間に出されない自己の面目を暗室内に発揮する必要があるかも知れないが、我等猫属ねこぞくに至ると行住坐臥ぎようじゆうざが、行屎送尿こうしそうにようことごとく真正の日記であるから、別段そんな面倒な手数てかずをして、己おのれの真面目しんめんもくを保存するには及ばぬと思う。日記をつけるひまがあるなら椽側えんさんに寝ているまでの事さ。

神田の某亭で晚餐ばんさんを食う。久し振りで正宗を二三杯飲んだら、今朝は胃の具合が大変いい。胃弱には晩酌が一番だと思ふ。タカジヤスターゼは無論いかん。誰が何と云つても駄目だ。どうしたつて利きかないものは利かないのだ。

ようだ。今朝の肝癰むやみがちよつとここへ尾を出す。人間の日記の本色はこう云う辺へんに存するのも知らない。

せんだつて〇〇は朝飯あさめしを廃すると胃がよくなるにさんちと云うたから二三日朝飯をやめて見たが腹がぐうぐう鳴るばかりで功能はない。△△は是非香こうの物ものを断たてと忠告した。彼の説によるとすべて胃病の原因は漬物にある。漬物さえ断てば胃病の源を涸からす訳だから本復は疑なしという論法であつた。それから一週間ばかり香の物に箸はしを触れなかつたが別段の験げんも見えなかつたから近頃はまた食い出した。××に聞くとそれは按腹揉療治あんぶくもりようぢに限る。ただし普通のではゆかぬ。皆川流みながわりゅうという古流な揉もみ方で一二度やらせれば大抵の胃病は根治出来る。安井息軒やすいそつけんも大変この按摩術あんまじゆつを愛していた。坂本竜馬のような豪傑でも時々は治療をうけたと云うから、早速上根岸かみねぎしまで出掛けて揉もまして見た。ところが骨を揉もまなければ癒なおらぬとか、臟腑の位置を一度顛倒てんととうしなければ根治

がしにくいとかいつて、それはそれは残酷な揉み方をやる。後で身体が綿のようになって昏睡病にかかったような心持ちがしたので、一度で閉口してやめにした。A君は是非固形体を食うなという。それから、一日牛乳ばかり飲んで暮して見たが、この時は腸の中でどぼりとどぼりと音がして大水でも出たように思われて終夜眠れなかった。B氏は横膈膜おうかくまくで呼吸して内臓を運動させれば自然と胃の働きが健全になる訳だから試しにやって御覧という。これも多少やつたが何となく腹中ふくちゅうが不安で困る。それに時々思い出したように一心不乱にかかりはするものの五六分立つと忘れてしまう。忘れまいとすると横膈膜が気になって本を読む事も文章を書く事も出来ぬ。美学者の迷亭めいていがこの体ていを見て、産氣さんけのついた男じゃあるまいし止よすがいいと冷かしたからこの頃は

廃^よしてしまった。C先生は蕎^そ麦^ばを食つたらよかろうと云うから、早速かけ、ともりをかわるがわる食つたが、これは腹^{くだ}が下るばかりで何等の功能もなかった。余は年来の胃弱を直すために出来得る限りの方法を講じて見たがすべて駄目である。ただ昨夜寒月^{ゆうべ}と傾けた三杯の正宗はたしかに利目^{きぎめ}がある。これからは毎晩二三杯ずつ飲む事にしよう。

これも決して長く続く事はあるまい。主人の心は吾輩の眼球^{めだま}のように間断なく変化している。何をやつても永持^{ながもち}のしない男である。その上日記の上で胃病をこんな心配している癖に、表向^{おおい}は大に瘦我慢をするからおかしい。せんだつてその友人で某^{なにがし}という学者が尋ねて来て、一種の見地から、すべての病氣は父祖の罪惡と自己の罪惡の結果にほかならないと云う議論をした。大分研究したものと見えて、条理^{だいいぶ}が明晰^{めいせき}で秩序が整然とし

て立派な説であつた。気の毒ながらうちの主人などは到底これを反駁するほどの頭脳はんぱくも學問もないのである。しかし自分が胃病で苦しんでいる際さいだから、何とかか何とか弁解をして自己の面目を保とうと思つた者と見えて、「君の説は面白いが、あのカーライルは胃弱だつたぜ」とあたかもカーライルが胃弱だから自分の胃弱も名譽であると云つたような、見当違いの挨拶をした。すると友人は「カーライルが胃弱だつて、胃弱の病人が必ずカーライルにはなれないさ」と極きめ付けたので主人は默然もくねんとしていた。かくのごとく虚栄心に富んでいるものの實際はやはり胃弱でない方がいいと見えて、今夜から晩酌を始めるなどというのはちよつと滑稽だ。考えて見ると今朝けう雑煮ぞうにをあんなにたくさん食つたのも昨夜ゆうべ寒月君と正宗をひっくり返した影響かも知れない。吾輩もちよつと雑煮が食つて見たくなつた。

吾輩は猫ではあるが大抵のものは食う。車屋の黒のように横丁の肴屋さかなやまで遠征をする気力はないし、新道しんみちの二絃琴にげんきんの師匠とこの所みけの三毛のように贅沢ぜいたくは無論云える身分でない。従つて存外嫌きらひは少ない方だ。小供の食いこぼした麵麩パンも食うし、餅菓子あんの餡あんもなめる。香こうの物ものはすこぶるまずいが経験のため沢庵たくあんを二切ばかりやつた事がある。食つて見ると妙なもので、大抵のものは食える。あれは嫌いやだ、これは嫌だと云うのは贅沢ぜいたくな我儘で到底教師うちの家にいる猫などの口にすべきところでない。主人の話しによると仏蘭西フランスにバルザックという小説家があつたそうだ。この男が大の贅沢屋ぜいたくで——もつともこれは口の贅沢屋ではない、小説家だけに文章の贅沢を尽したという事である。バルザックが或る日自分の書いている小説中の人間の名をつけようと思つていろいろつけて見たが、どうしても氣に入らない。ところへ

友人が遊びに来たのでいつしよに散歩に出掛けた。友人は固^{もと}より何^{なんに}も知らずに連れ出されたのであるが、バルザックは兼^かねて自分の苦心している名を目付^{めつけ}ようという考えだから往来へ出ると何もしないで店先の看板ばかり見て歩^{ある}行^るいている。ところがやはり氣に入^いった名がない。友人を連れて無暗^{むやみ}にあるく。友人は訳がわからずにくっ付いて行く。彼等はついに朝から晩まで巴^{パリ}理を探險した。その帰りがけにバルザックはふとある裁縫屋の看板が目についた。見るとその看板にマークスという名がかいてある。バルザックは手を拍^うつて「これだこれだこれに限る。マークスは好い名じゃないか。マークスの上へZという頭文字をつける、すると申^{ぶん}し分のない名が出来る。Zでなくてはいいか。N. Marcus は実にうまい。どうも自分で作^{つく}った名はうまくつけたつもりでも何となく故意^{わざ}とらしいところがあつて面白く

ない。ようやくの事で気に入った名が出来た」と友人の迷惑はまるで忘れて、一人嬉しがったというが、小説中の人間の名前をつけるに一日巴理いちんちパリを探険しなくてはならぬようでは随分手数てすうのかかる話だ。贅沢もこのくらい出来れば結構なものだが吾輩のように牡蠣かき的主てき人を持つ身の上ではとてもそんな気は出ない。何でもいい、食べさえすれば、という気になるのも境遇のしからしむるところであろう。だから今雑煮ぞうにが食いたくなつたのも決して贅沢の結果ではない、何でも食える時に食つておこうという考から、主人の食あまい剩した雑煮がもしや台所に残つてはいはすまいかと思ひ出したからである。……台所へ廻つて見る。

今朝見た通りの餅が、今朝見た通りの色で椀の底に膠着こうちやくしている。白状するが餅というものは今まで一辺ぺんも口に入れた事がない。見るとうまさうにもあるし、また少しは気味きびがわるくも

ある。前足で上にかかっている菜つ葉を掻き寄せる。爪を見ると餅の表皮が引き掛つてねばねばする。嗅いで見ると釜の底の飯を御櫃へ移す時のような香がする。食おうかな、やめようかな、とあたりを見廻す。幸か不幸か誰もいない。御三は暮も春も同じような顔をして羽根をついている。小供は奥座敷で「何とおつしやる兎さん」を歌っている。食うとすれば今だ。もしこの機をはずすと来年までは餅というものの味を知らずに暮してしまわねばならぬ。吾輩はこの刹那に猫ながら一の真理を感じ得た。「得難き機会はすべての動物をして、好まざる事をも敢てせしむ」吾輩は実を云うとそんなに雑煮を食いたくはないのである。否、碗底の様子を熟視すればするほど気味が悪くなつて、食うのが厭になったのである。この時もし御三でも勝手口を開けたなら、奥の小供の足音がこちらへ近付くのを聞き得た

なら、吾輩は惜気おしげもなく碗を見棄てたろう、しかも雑煮の事は来年まで念頭に浮ばなかつたろう。ところが誰も来ない、いくらちゅうちよ躊躇ちゅうちよしていても誰も来ない。早く食わぬか食わぬかと催促されるような心持がする。吾輩は碗の中を覗のぞき込みながら、早く誰か来てくれればいいと念じた。やはり誰も来てくれない。吾輩はとうとう雑煮を食わなければならぬ。最後にからだ全体の重量を碗の底へ落すようにして、あぐりと餅の角を一寸いっすんばかり食い込んだ。このくらい力を込めて食い付いたのだから、大抵なものなら噛かみ切れる訳だが、驚いた！ もうよかろうと思つて齒を引こうとすると引けない。もう一边ぺん噛み直そうとすると動きがとれない。餅は魔物だなど疳かんづいた時はすでに遅かった。沼へでも落ちた人が足を抜こうと焦慮あせるたびにぶくぶく深く沈むように、噛めば噛むほど口が重くなる、齒が動かなくなる。

齒答えはあるが、齒答えがあるだけでどうしても始末をつける事が出来ない。美学者迷亭先生がかつて吾輩の主人を評して君は割り切れない男だといった事があるが、なるほどまい事をいったものだ。この餅も主人と同じようにどうしても割り切れない。噛んでも噛んでも、三で十を割るごとく尽未来際方じんみらいざいかたのつく期ごはあるまいと思われた。この煩悶はんもんの際吾輩は覚えず第二の真理に逢着ほうちやくした。「すべての動物は直覺的に事物の適不適を予知す」真理はすでに二つまで発明したが、餅がくつ付いているのでごう毫も愉快を感じない。齒が餅の肉に吸収されて、抜けるように痛い。早く食い切つて逃げないと御三おさんが来る。小供の唱歌もやんだようだ、きつと台所へ馳かけ出して来るに相違ない。煩悶きよくしつぽの極尻尾をぐるぐる振つて見たが何等の機能もない、耳を立てたり寝かしたりしたが駄目である。考えて見ると耳と尻尾しつぽは餅

と何等の關係もない。要するに振り損の、立て損の、寝かし損である。気が付いたからやめにした。ようやくの事これは前足の助けを借りて餅を払い落すに限ると考え付いた。まず右の方をあげて口の周囲を撫なで廻まわす。撫なでたくらいで割り切れる訳のものではない。今度は左ひだりの方を伸のべて口を中心として急劇に円を劃かくして見る。そんな呪まじないで魔は落ちない。辛防しんぼうが肝心かんじんだと思つて左右交かわる交がわるに動うごかしたがやはり依然として齒は餅の中にぶら下つている。ええ面倒あどあしだと両足を一度に使う。すると不思議な事にこの時だけは後足二本で立つ事が出来た。何だか猫でないような感じがする。猫であろうが、あるまいがこうなつた日にやあ構かまうものか、何でも餅の魔が落ちるまでやるべしという意気込みで無茶苦茶に顔中引ひつ搔かき廻まわす。前足の運動が猛烈なのでややともすると中心を失つて倒れかかる。倒れかかる

たびに後足で調子をとらなくてはならぬから、一つ所にいる訳にも行かんのので、台所中あちら、こちらと飛んで廻る。我ながらよくこんな器用に起たつていられたものだと思う。第三の真理が驀ばくち地に現げんぜん前する。「危のぞきに臨めば平常あたなし能わざるところのものを為なし能う。之これを天祐てんゆうという」幸さいわいに天祐を享うけたる吾輩が一生懸命餅の魔と戦っていると、何だか足音がして奥より人が来るような気合けわいである。ここで人に来られては大変だと思つて、いよいよ躍起やつきとなつて台所をかけ廻る。足音はだんだん近付いてくる。ああ残念だが天祐が少し足りない。とうとう小供に見付けられた。「あら猫が御雑煮を食べて踊を踊っている」と大きな声をする。この声を第一に聞きつけたのが御三である。羽根も羽子板も打ち遣やつて勝手から「あらまあ」と飛込んで来る。細君は縮緬ちりめんの紋付で「いやな猫ねえ」と仰せられる。主人さえ

書齋から出て来て「この馬鹿野郎」といった。面白い面白いと云うのは小供ばかりである。そうしてみんな申し合せたようにげらげら笑っている。腹は立つ、苦しくはある、踊はやめる訳にゆかぬ、弱った。ようやく笑いがやみそうになつたら、五つになる女の子が「御かあ様、猫も随分ね」といったので狂瀾きやうらんを既倒きとうに何とかするという勢でまた大變笑われた。人間の同情に乏しい実行も大分見聞だいぶんけんもんしたが、この時ほど恨めしく感じた事はなかつた。ついに天祐もどつかへ消え失うせて、在来の通り四よつ這はいになつて、眼を白黒するの醜態を演ずるまでに閉口した。さすが見殺しにするのも気の毒と見えて「まあ餅をとつてやれ」と主人が御三に命ずる。御三はもつと踊らせようじゃありませんかという眼付で細君を見る。細君は踊は見たいが、殺してまで見える気はないのでだまつている。「取つてやらんと死んでし

まう、早くとつてやれ」と主人は再び下女を顧みる。御三は御馳走を半分食べかけて夢から起きた時のように、気のない顔をして餅をつかんでぐいと引く。寒月君じゃないが前歯がみんな折れるかと思つた。どうも痛い痛くないのつて、餅の中へ堅く食い込んでいる歯を情け容赦もなく引張るのだからたまらない。吾輩が「すべての安樂は困苦を通過せざるべからず」と云う第四の真理を経験して、けろけろとあたりを見廻した時には、家人はすでに奥座敷へ這入つてしまつておつた。

こんな失敗をした時には内において御三なんぞに顔を見られるのも何となくばつが悪い。いつその事気を易えて新道の二絃琴の御師匠さんの所の三毛子でも訪問しようと台所から裏へ出た。三毛子はこの近辺で有名な美貌家である。吾輩は猫には相違ないが物の情けは一通り心得ている。うちで主人の苦い顔を見た

り、御三の險突けんつくを食つて気分が勝すぐれん時は必ずこの異性ほうゆうの朋友ともの許もとを訪問せいせいしていろいろな話をする。すると、いつの間まにか心が晴々せいせいして今までの心配も苦勞も何もかも忘れて、生れ變つたような心持になる。女性の影響えんがわというものは実に莫大ばくだいなものだ。杉垣の隙から、いるかなと思つて見渡すと、三毛子は正月だから首輪の新しいのをして行儀よく椽側えんがわに坐つてゐる。その背中の丸さ加減が言うに言われんほど美しい。曲線の美を尽つしている。尻尾しつぽの曲がり加減、足の折り具合、物憂ものうげに耳をちよいちよい振る景色けしきなども到底とうてい形容が出来ん。ことによく日の当る所に暖かそうに、品ひんよく控ひかえてゐるものだから、身体は静肅端正の態度を有するにも関らず、天鷲毛びろうどを欺あざむくほどの滑らかな満身の毛は春の光りを反射して風なきにむらむらと微動するごとくに思われる。吾輩はしばらく恍惚こうこつとして眺ながめていたが、やがて我に

帰ると同時に、低い声で「三毛子さん三毛子さん」といいながら前足で招いた。三毛子は「あら先生」と椽を下りる。赤い首輪につけた鈴がちらちちらと鳴る。おや正月になつたら鈴までつけたな、どうもいい音ねだと感心している間に、吾輩の傍そばに来て「あら先生、おめでとう」と尾を左りひだへ振る。吾等猫属間ねこぞくで御互に挨拶をするときには尾を棒のごとく立てて、それを左りへぐるりと廻すのである。町内で吾輩を先生と呼んでくれるのはこの三毛子ばかりである。吾輩は前回断わつた通りまだ名はないのであるが、教師の家うちにいるものだから三毛子だけは尊敬して先生先生といつてくれる。吾輩も先生と云われて満更まんざら悪い心持ちもしないから、はいはいと返事をしている。「やあおめでとう、大層立派に御化粧が出来ましたね」「ええ去年の暮御師匠おししょうさんに買って頂いたの、宜いいでしょう」とちやらちやら鳴らし

て見せる。「なるほど善い音ねですな、吾輩などは生れてから、そんな立派なものを見た事がないですよ」「あらいやだ、みんなぶら下げるのよ」とまたちやらちやら鳴らす。「いい音ねでしよう、あたし嬉しいわ」とちやらちやらちやらちやら続け様に鳴らす。「あなたのうちの御師匠さんは大変あなたを可愛がつていると見えますね」と吾身に引きくらべて暗あんに欣羨きんせんの意を洩もらす。三毛子は無邪気なものである「ほんとよ、まるで自分の小供のようよ」とあどけなく笑う。猫だつて笑わないとは限らない。人間は自分よりほかに笑えるものが無いように思つてゐるのは間違まちがいである。吾輩が笑うのは鼻の孔あなを三角にして咽喉のどばとけ仏を震動させて笑うのだから人間にはわからぬはずである。「一体あなたの所ところの御主人は何ですか」「あら御主人だつて、妙なのね。御師匠おししょうさんだわ。二絃琴にげんきんの御師匠さんよ」「それは吾輩も知つています

がね。その御身分は何なんです。いずれ昔むかしは立派な方なんでしょうな」「ええ」

君を待つ間のま姫小松……………

障子の内で御師匠さんが二絃琴を弾ひき出す。「宜いい声でしよう」と三毛子は自慢する。「宜いいようだが、吾輩にはよくわからん。全体何というのですか」「あれ？ あれは何とかつてものよ。御師匠さんはあれが大好きなの。……御師匠さんはあれで六十二よ。随分丈夫だわね」六十二で生きているくらいだから丈夫と云わねばなるまい。吾輩は「はあ」と返事をした。少し間まが抜けたようだが別に名答も出て来なかったから仕方がない。「あれでも、もとは身分が大変好かつたんだって。いつでもそうおつしやるの」「へえ元は何だったんです」「何でも天璋院様てんしょういんのごごゆうひつ御祐筆の妹の御嫁に行つた先さきの御おつかさんの甥おいの娘なんだつ

て」「何ですって?」「あの天璋院様の御祐筆の妹の御嫁にいつた……」「なるほど。少し待って下さい。天璋院様の妹の御祐筆の……」「あらそうじゃないの、天璋院様の御祐筆の妹の……」「よろしい分りました天璋院様でしょう」「ええ」「御祐筆でしよう」「そうよ」「御嫁に行った」「妹の御嫁に行ったですよ」「そうそう間違つた。妹の御嫁に入つた先きの」「御つかさんの甥の娘なんですとき」「御つかさんの甥の娘なんですか」「ええ。分つたでしよう」「いいえ。何だか混雑して要領を得ないですよ。詰つまるところ天璋院様の何になるんですか」「あなたもよつぽど分らないのね。だから天璋院様の御祐筆の妹の御嫁に行つた先きの御つかさんの甥の娘なんだって、先さつきつから言つてるんじゃないませんか」「それはすっかり分つているんですがね」「それが分りさえすればいいでしょう」「ええ」と仕方がない

から降参をした。吾々は時とすると理詰の虚言^{うそ}を吐かねばならぬ事がある。

障子^{うち}の中で二絃琴の音がぱったりやむと、御師匠さんの声で「三毛や三毛や御飯だよ」と呼ぶ。三毛子は嬉しそうに「あら御師匠さんが呼んでいらつしやるから、私^{あた}し帰るわ、よくつて？」わるいと云つたつて仕方がない。「それじゃまた遊びにいらつしやい」と鈴をちやらちやら鳴らして庭先までかけて行つたが急に戻つて来て「あなた大変色が悪くつてよ。どうかしやしくつて」と心配そうに問いかける。まさか雑煮^{ぞうに}を食つて踊りを踊つたとも云われないから「何別段の事ありませんが、少し考え事したら頭痛がしてね。あなたと話してもしたら直るだろうと思つて実は出掛けて来たのですよ」「そう。御大事になさいまし。さようなら」少しは名残り惜し気に見えた。これで

雑煮の元氣もさっぱりと回復した。いい心持になった。歸りに例の茶園ちやえんを通り抜けようと思つて霜柱しもばしらの融けとかかったのを踏みつけながら建仁寺けんにんじの崩れくずから顔を出すとまた車屋の黒が枯菊の上に背せを山にして欠伸あくびをしている。近頃は黒を見て恐怖するよ
うな吾輩ではないが、話をされると面倒だから知らぬ顔をして行き過ぎようとした。黒の性質として他ひとが己おのれを輕侮けいぶしたと認むるや否や決して黙つていない。「おい、名なしの権兵衛ごんべえ、近頃じゃ乙おつう高く留つてるじゃあねえか。いくら教師の飯を食つたつて、そんな高慢つちきな面つらあするねえ。人ひとつけ面白くもねえ」黒は吾輩の有名になつたのを、まだ知らんと見える。説明してやりたいが到底とうてい分る奴ではないから、まず一応の挨拶をして出来得る限り早く御免蒙ごめんこうむるに若くしはないと決心した。「いや黒君おめでとう。不相変あいかわらず元氣がいいね」と尻尾しつぽを立てて左へく

るりと廻わす。黒は尻尾を立てたぎり挨拶もしない。「何おめでてえ？ 正月でおめでたけりや、御めえなんざあ年が年中おめでてえ方だろう。気をつけろい、この吹い子の向う面め」吹い子の向うづらという句は罵詈の言語であるようだが、吾輩には了解が出来なかった。「ちよつと伺がうが吹い子の向うづらと云うのはどう云う意味かね」「へん、手めえが悪体をつかれてる癖に、その訳を聞きや世話あねえ、だから正月野郎だって事よ」正月野郎は詩的であるが、その意味に至ると吹い子の何とかよりも一層不明瞭な文句である。参考のためちよつと聞いておきたいが、聞いたって明瞭な答弁は得られぬに極まつているから、面と対つたまま無言で立つておつた。いささか手持無沙汰の体である。すると突然黒のうちの神さんが大きな声を張り揚げて「おや棚へ上げて置いた鮭がない。大変だ。またあの黒

の畜生ちきしようが取つたんだよ。ほんとに憎らしい猫だつちやありやあ
しない。今に帰つて来たら、どうするか見ていやがれ」と怒鳴どな
る。初春はつはるの長閑のどかな空気を無遠慮に震動させて、枝を鳴らさぬ君
が御代みよを大おおに俗了ぞくりようしてしまふ。黒は怒鳴るなら、怒鳴りたいだ
け怒鳴つていろと云わぬばかりに横着な顔をして、四角な頤あごを
前へ出しながら、あれを聞いたかと合図をする。今までは黒と
の応対で気がつかなかったが、見ると彼の足の下には一切れ二
錢三厘に相当する鮭の骨が泥だらけになつて転がつている。「君
不相変あいかわらずやつてるな」と今までの行き掛りは忘れて、つい感投詞
を奉呈した。黒はそのくらいな事ではなかなか機嫌を直さない。
「何がやつてるでえ、この野郎。し、や、けの一切や二切で相変らず
たあ何だ。人を見縊みくびつた事をいうねえ。憚はばかりながら車屋の黒
だあ」と腕まくりの代りに右の前足を逆さかに肩の辺へんまで搔かき上

げた。「君が黒君だと云う事は、始めから知ってるさ」「知ってるのに、相変らずやつてるたあ何だ。何だてえ事よ」と熱いのを頻りに吹き懸ける。^{しき}人間なら胸倉を^{むなぐら}とられて小突き廻されるところである。少々辟易^{へきえき}して内心困った事になったなと思つていると、再び例の神さんの大声が聞える。「ちよいと西川さん、おい西川さんてば、用があるんだよこの人あ。牛肉を一斤^{きん}すぐ持つて来るんだよ。いいかい、分ったかい、牛肉の堅くないところを一斤だよ」と牛肉注文の声^{しりん}が四隣^{せきばく}の寂寞を破る。「へん年に一遍牛肉を^{あつら}誂えると思つて、いやに大きな声を出しやあがらあ。牛肉一斤が隣り近所へ自慢なんだから始末に終えねえ阿魔^{あま}だ」と黒は嘲りながら四つ足を踏張る^{ふんば}。吾輩は挨拶のしようもないから黙つて見ている。「一斤くらいじゃあ、承知が出来ねえんだが、仕方がねえ、いいから取るときや、今に食つてやらあ」

と自分のために誂あつらえたもののごとくいう。「今度は本当の御馳走だ。結構結構」と吾輩はなるべく彼を帰そうとする。「御めつちの知った事じゃねえ。黙っている。うるせえや」と云いながら突然後足あとあしで霜柱しもばしらの崩れた奴くずを吾輩の頭へばさりと浴あびせ掛ける。吾輩が驚ろいて、からだの泥を払っている間に黒は垣根まを潜くぐつて、どこかへ姿を隠した。大方西川の牛ぎゅうを覘ねらいに行つたものであろう。

家うちへ帰ると座敷の中が、いつになく春めいて主人の笑い声さえ陽気に聞える。はてなと明け放した椽側あがから上つて主人の傍そばへ寄つて見ると見馴れぬ客が来ている。頭を奇麗に分けて、木綿もめんの紋付の羽織こくらに小倉はかまの袴はかまを着けて至極しごく真面目しんめいそうな書生しよせい体の男である。主人の手あぶりの角を見ると春慶塗しゅんけいぬりの巻煙草まきたばこ入れと並んで越智東風君おちとうふうくんを紹介致候そろ水島寒月という名刺があるので、

この客の名前も、寒月君の友人であるという事も知れた。主客しゅかくの対話は途中からであるから前後がよく分らんが、何でも吾輩が前回に紹介した美学者迷亭君の事に関しているらしい。

「それで面白い趣向があるから是非いっしょに來いとおっしゃるので」と客は落ちついて云う。「何ですか、その西洋料理へ行つて午飯ひるめしを食うのについて趣向があるというのですか」と主人は茶を續つぎ足して客の前へ押しやる。「さあ、その趣向というのが、その時は私にも分らなかつたんですが、いずれあの方かたの事ですから、何か面白い種があるのだらうと思ひまして……」「いっしょに行きましたか、なるほど」「ところが驚いたのです」主人はそれ見たかと云わぬばかりに、膝ひざの上に乗つた吾輩の頭をぽかと叩たたく。少し痛い。「また馬鹿な茶番見たような事なんでしょう。あの男はあれが癖でね」と急にアンドレア・デル・

サルト事件を思い出す。「へへー。君何か変ったものを食おう
じゃないかとおっしゃるので」「何を食いました」「まず献立^{こんだて}を
見ながらいろいろ料理についての御話しがありました」「誂^{あつ}らえ
ない前にですか」「ええ」「それから」「それから首を捻^{ひね}つてボー
イの方を御覧になつて、どうも変ったものもないようだなとおつ
しやるとボーイは負けぬ気で鴨^{かも}のロースか小牛のチャップなどは
^{いかが}如何ですと云うと、先生は、そんな月並^{つきなみ}を食いにわざわざここ
まで来やしないとおっしゃるんで、ボーイは月並という意味が分
らんものですから妙な顔をして黙つていましたよ」「そうでしよ
う」「それから私の方を御向きになつて、君仏蘭西^{フランス}や英吉利^{イギリス}へ行
くと随分天明調^{てんめいちよう}や万葉調^{まんようちよう}が食えるんだが、日本じやどこへ行つ
たつて版で圧^おしたようで、どうも西洋料理へ這入^{はい}る気がしないと
云うような大気燄^{だいきえん}で——全体^{かた}あの方は洋行なすつた事がある

のですかな」「何迷亭が洋行なんかするもんですか、そりや金もあり、時もあり、行こうと思えばいつでも行かれるんですがね。大方これから行くつもりのところを、過去に見立てた洒落しやれなんでしょう」と主人は自分ながらうまい事を言つたつもりで誘い出し笑をする。客はさまで感服した様子もない。「そうですか、私はまたいつの間に洋行まなさつたかと思つて、つい真面目に拝聴していました。それに見て来たようになめくじのソップの御話や蛙かえるのシチュの形容をなさるものですから」「そりや誰かに聞いたんでしよう、うそをつく事はなかなか名人ですからね」「どうもそうのようで」と花瓶かびんの水仙を眺める。少しく残念の気色けしきにも取られる。「じゃ趣向しゆかうというのは、それなんですネ」と主人が念を押す。「いえそれはほんの冒頭なので、本論はこれからなのです」「ふーん」と主人は好奇的な感投詞はさきを挟む。「それか

ら、とてもなめくじ、や蛙は食おうつても食えやしないから、まあ、チメン、ボー、くらいなところで負けとく事にしようじゃないか君と御相談なさるものですから、私はつい何の気なしに、それがいいでしょう、といつてしまったので」「へー、とちめんばうは妙ですな」「ええ全く妙なのですが、先生があまり真面目なものですから、つい気がつきませんでした」とあたかも主人に向つて^{そこつ}麁忽を詫^わびているように見える。「それからどうしました」と主人は無頓着に聞く。客の謝罪には一向同情を表しておらん。「それからボーにおいト、チメン、ボーを二人^{ににんまえ}前持つて来いという、ボーがメン、チボー、ですかと聞き直しましたが、先生はますます真^ま面^め目^めな貌^{かお}でメン、チボー、じゃないト、チメン、ボー、だと訂正されました」「なある。そのト、チメン、ボー、という料理は一体あるんですか」「さあ私も少しおかしいとは思いましたがいかにも

先生が沈着であるし、その上あの通りの西洋通でいらつしやるし、ことにその時は洋行なすつたものと信じ切つていたものですから、私も口を添えてト、チメンボーだト、チメンボーだト、ボイに教えてやりました」 「ボイはどうしました」 「ボイがね、今考えると実に滑稽こっけいなんですがね、しばらく思索していましてね、はなはだ御気の毒様ですが今日はト、チメンボーは御生憎様でメ、ン、チ、ボ、ーなら御二人前おふたりまえすぐに出来ますと云うと、先生は非常に残念な様子で、それじゃせつかくここまで来た甲斐かいがない。どうかト、チメンボーを都合つづうして食わせてもらう訳わけには行くまいかと、ボイに二十銭銀貨をやられると、ボイはそれではともかくも料理番と相談して参りましょうと奥へ行きましたよ」 「大変ト、チメンボーが食いたかつたと見えますね」 「しばらくしてボイが出て来て真まことに御生憎で、御誂おあつらえならこしらえますが少々時間がか

かります、と云うと迷亭先生は落ちついたもので、どうせ我々は正月でひまなんだから、少し待って食って行こうじゃないかと云いながらポツケットから葉巻を出してぷかりぷかり吹かし始められたので、私わたくししも仕方がないから、懷ふところから日本新聞を出して読み出しました、するとボーはまた奥へ相談に行きましたよ」「いやに手数てすうが掛りますな」と主人は戦争の通信を読むくらの意気込で席を前すめる。「するとボーがまた出て来て、近頃はトチメンボ一の材料が払底で亀屋へ行っても横浜の十五番へ行っても買われませんから当分の間は御生憎様でと気の毒そうに云うと、先生はそりや困ったな、せつかく来たのになあと私の方を御覧になつてしきりに繰り返さるるので、私も黙つていゝる訳にも参りませんから、どうも遺憾いかなんですな、遺憾きわま極るですなと調子を合せたのです」「ごもつともで」と主人が賛成する。何

がごもつともだか吾輩にはわからん。「するとボーも気の毒だ
と見えて、その内材料が参りましたら、どうか願いますってん
でしょう。先生が材料は何を使うかねと問われるとボーはへへ
へと笑つて返事をしないんです。材料は日本派の俳人だろう
と先生が押し返して聞くとボーはへえさようで、それだものだ
から近頃は横浜へ行つても買われませんので、まことにお気の
毒様と云いましたよ」「アハハハそれが落ちなんですか、こりや
面白い」と主人はいつになく大きな声で笑う。膝ひざが揺れて吾輩
は落ちかかる。主人はそれにも頓着とんじやくなく笑う。アンドレア・デ
ル・サルトに雇かかつたのは自分一人でないと言ふ事を知つたので
急に愉快になったものと見える。「それから二人で表へ出ると、
どうだ君うまく行つたらう、橡面坊とちめんぼうを種に使つたところが面白
かろうと大得意なんです。敬服の至りですと云つて御別れした

ようなもののは実は午飯ひるめしの時刻が延びたので大変空腹になつて弱りましたよ」「それは御迷惑でしたろう」と主人は始めて同情を表する。これには吾輩も異存はない。しばらく話しが途切れて吾輩の咽喉のどを鳴らす音が主客しゅかくの耳に入る。

東風君は冷めなくなつた茶をぐつと飲み干して「実は今日参りましたのは、少々先生に御願があつて参つたので」と改まる。「はあ、何か御用で」と主人も負けずに済すます。「御承知の通り、文学美術が好きなものですから……」「結構で」と油を注さす。「同志だけがよりましてせんだつてから朗読会というのを組織しまして、毎月一回会合してこの方面の研究をこれから続けたいつもりで、すでに第一回は去年の暮に開いたくらいであります」「ちよつと伺つておきますが、朗読会と云うと何か節奏ふしでも附けて、詩歌文章しいかの類るいを読むように聞えますが、一体どんな風にやる

んです」「まあ初めは古人の作からはじめて、追々おいおいは同人の創作
なんかもやるつもりです」「古人の作というはくらくてんと白楽天の琵琶行の
ようなものでもあるんですか」「いいえ」「蕪村ぶそんの春風馬堤曲しゅんふうばていきょくの
種類ですか」「いいえ」「それじゃ、どんなものをやったんです」
「せんだつては近松の心中物しんじゅうものをやりました」「近松？ あ、あの浄瑠璃じようるり
の近松ですか」近松に二人はない。近松といえは戯曲家の近松
に極きまっている。それを聞き直す主人はよほど愚ぐだと思つてい
と、主人は何にも分らずに吾輩の頭を叮嚀ていねいに撫なでている。藪やぶにら睨
みから惚ほれられたと自認ごひんしている人間もある世の中だからこの
くらいの誤謬ごびゅうは決して驚くに足らんと撫でらるるがままにすま
していた。「ええ」と答えて東風子とうふうしは主人の顔色うかがを窺う。「それ
じゃ一人で朗読するのですか、または役割を極きめてやるんです
か」「役を極めて懸合かけあいでやって見ました。その主意はなるべく作

中の人物に同情を持ってその性格を発揮するのを第一として、それに手真似や身振りを添えます。白せりふはなるべくその時代の人を写し出すのが主で、御嬢さんでも丁稚でつちでも、その人物が出てきたようにやるんです」「じゃ、まあ芝居見たようなものじゃありませんか」「ええ衣装いしやうと書割かきわりがないくらいなものですか」「失礼ながらうまく行きますか」「まあ第一回としては成功した方だと思います」「それでこの前やったとおっしゃる心中物という」と「その、船頭が御客を乗せて芳原よしわらへ行く所ところなんです」「大変な幕をやりましたな」と教師だけにちよつと首を傾かたむける。鼻から吹き出した日の出の煙りが耳を掠かすめて顔の横手へ廻る。「なあに、そんなに大変な事もないんです。登場の人物は御客と、船頭と、花魁おいらんと仲居なかいと遣手やりてと見番けんばんだけですから」と東風子は平気なものである。主人は花魁という名をきいてちよつと苦にがい顔を

したが、仲居、遣手、見番という術語について明瞭の智識がなかつたと見えてまず質問を呈出した。「仲居というのは娼家の下婢かひにあたるものですか」「まだよく研究はして見ませんが仲居は茶屋の下女で、遣手というのが女部屋おんなべやの助役じやく見たようなものだろうと思います」東風子はさつき、その人物が出て来るように仮色こわいろを使うと云つた癖に遣手や仲居の性格をよく解しておらんらしい。「なるほど仲居は茶屋に隷属れいぞくするもので、遣手は娼家に起臥きがする者ですね。次に見番と云うのは人間ですかまたは一定の場所を指さすのですか、もし人間とすれば男ですか女ですか」「見番は何でも男の人間だと思ひます」「何を司つかさどつてゐるんですかな」「さあそこまではまだ調べが届いておりません。その内調べて見ましよう」これで懸合をやつた日には頓珍漢とんちんかんなものが出るだろうと吾輩は主人の顔をちよつと見上げた。主人

は存外真面目である。「それで朗読家は君のほかになんな人が加わったんですか」「いろいろおりました。花魁が法学士のK君でしたが、口髯くちひげを生やして、女の甘ったるいせりふを使つかかうのですからちよつと妙でした。それにその花魁かゑが癪しゃくを起すところがあるのです……」「朗読でも癪を起きなくっちゃ、いけないんですか」と主人は心配そうに尋ねる。「ええとにかく表情が大事ですから」と東風子はどこまでも文芸家の氣でいる。「うまく癪が起りましたか」と主人は警句を吐く。「癪だけは第一回には、ちと無理でした」と東風子も警句を吐く。「ところで君は何の役割でした」と主人が聞く。「私わたくしは船頭」「へー、君が船頭」君にして船頭が務つとまるものなら僕にも見番くらいはやれると云ったよな語氣を洩もらす。やがて「船頭は無理でしたか」と御世辞のないところを打ち明ける。東風子は別段癪に障った様子もない。

やはり沈着な口調で「その船頭でせつかくの催しも竜頭蛇尾に
終わりました。実は会場の隣りに女学生が四五人下宿していまし
てね、それがどうして聞いたものか、その日は朗読会があると
いう事を、どこかで探知して会場の窓下へ来て傍聴していたも
のと見えます。私わたくししが船頭の仮色こわいろを使つて、ようやく調子づい
てこれなら大丈夫と思つて得意にやっていると、……つまり身
振りがあまり過ぎたのでしよう、今まで耐こらえていた女学生が
一度にわつと笑いだしたものですから、驚ろいた事も驚ろいた
し、極きまりが悪わるい事も悪わるいし、それで腰を折おられてから、ど
うしても後あとがつづけられないので、とうとうそれ限ぎりで散会し
ました」第一回としては成功だと称する朗読会がこれでは、失
敗はどんなものだろうと想像すると笑わずにはいられない。覺
えず咽喉のどぼとけ仏がごろごろ鳴る。主人はいよいよ柔かに頭を撫なでて

くれる。人を笑って可愛がられるのはありがたいが、いささか無気味なところもある。「それは飛んだ事で」と主人は正月早々ちようじ弔詞を述べている。「第二回からは、もつと奮発して盛大にやるつもりなので、今日出ましたのも全くそのためで、実は先生にも一つ御入会の上御尽力を仰ぎたいので」「僕にはとても癩なんか起せませんよ」と消極的の主人はすぐに断わりかける。「いえ、癩などは起していただかんでもよろしいので、ここに賛助員の名簿が」と云いながら紫の風呂敷から大事そうに小菊版こぎくばんの帳面を出す。「これへどうか御署名の上御捺印ごなつしんを願いたいのので」と帳面を主人の膝ひざの前へ開いたまま置く。見ると現今知名な文学博士、文学士連中の名が行儀よく勢揃せいぞろいをしている。「はあ賛成員にならん事ありませんが、どんな義務があるのですか」とかきせんせい牡蠣先生は掛念けねんの体ていに見える。「義務と申して別段是非願う事も

ないくらいで、ただ御名前だけを御記入下さつて賛成の意さえ御表しおひよう被下くだきればそれで結構です」「そんなら這入はいります」と義務のかからぬ事を知るや否や主人は急に気軽になる。責任さえな
いと云う事が分つておれば謀叛むほんの連判状へでも名を書き入れま
すと云う顔付をする。加之のみならずこう知名の学者が名前を列つらねている
中に姓名だけでも入籍させるのは、今までこんな事に出合つた
事のない主人にとっては無上の光榮であるから返事の勢のある
のも無理はない。「ちよつと失敬」と主人は書齋へ印をとりに入
る。吾輩はぼたりと畳の上へ落ちる。東風子は菓子皿の中の
カステラをつまんで一口に頬張ほおばる。モゴモゴしばらくは苦しそ
うである。吾輩は今朝の雑煮事件ぞうにをちよつと思ひ出す。主人が
書齋から印形いんぎようを持って出て来た時は、東風子の胃の中にカステ
ラが落ちついた時であつた。主人は菓子皿のカステラが一切足ひときれ

りなくなつた事には氣が着かぬらしい。もし氣がつくとすれば
第一に疑われるものは吾輩であらう。

東風子が歸つてから、主人が書齋に入つて机の上を見ると、
いつの間にか迷亭先生の手紙が来ている。

「新年の御慶目出度申納候。……」

いつになく出が真面目だと主人が思う。迷亭先生の手紙に真
面目なのはほとんどないので、この間などは「其後別に恋着せ
る婦人も無之、いず方より艶書も参らず、先ず先ず無事に消光
罷り在り候間、乍憚御休心可被下候」と云うのが来たくらい
である。それに較べるとこの年始状は例外にも世間的である。

「一寸参堂仕り度候えども、大兄の消極主義に反して、出
来得る限り積極的方針を以て、此千古未曾有の新年を迎う
る計画故、毎日毎日目の廻る程の多忙、御推察願上候……」

なるほどあの男の事だから正月は遊び廻るのに忙がしいに違いないと、主人は腹の中で迷亭君に同意する。

「昨日は一刻のひまを偷み、東風子にトチメンボの御馳走を致さんと存じ候処、生憎材料払底の為め其意を果さず、遺憾千万に存候。……」

そろそろ例の通りになつて来たと主人は無言で微笑する。

「明日は某男爵の歌留多会、明後日は審美学協会の新年宴会、其明日は鳥部教授歓迎会、其又明日は……」

うるさいなと、主人は読みとばす。

「右の如く謡曲会、俳句会、短歌会、新体詩会等、会の連発にて当分の間は、のべつ幕無しに出勤致し候為め、不得已賀状を以て拝趨の礼に易え候段不悪御宥恕被下度候。……」

別段くるにも及ばんさと、主人は手紙に返事をする。

「今度御光来の節は久し振りにて晚餐でも供し度心得に御座候。寒厨何の珍味も無之候えども、せめてはト、チメン、ボ、でもと只今より心掛居候。……」

まだト、チメン、ボ、を振り廻している。失敬なと主人はちよつとむつとする。

「然しト、チメン、ボ、は近頃材料払底の爲め、ことに依ると間に合い兼候も計りがたきにつき、其節は孔雀の舌でも御風味に入れ可申候。……」

両天秤をかけたなと主人は、あとが読みたくなる。

「御承知の通り孔雀一羽につき、舌肉の分量は小指の半ばにも足らぬ程故健啖なる大兄の胃囊を充たす為には……」
うそをつけと主人は打ち遣つたようにいう。

「是非共二三十羽の孔雀を捕獲致さざる可らずと存候。然

る所孔雀は動物園、浅草花屋敷等には、ちらほら見受け候
えども、普通の鳥屋杯には一向見当り不申、苦心此事に御
座候。……」

独りで勝手に苦心しているのじゃないかと主人は毫も感謝の
意を表しない。

「此孔雀の舌の料理は往昔羅馬全盛の砌り、一時非常に流行
致し候ものにて、豪奢風流の極度と平生よりひそかに食指
を動かし居候次第御諒察可被下候。……」

何が御諒察だ、馬鹿など主人はすこぶる冷淡である。

「降つて十六七世紀の頃迄は全欧を通じて孔雀は宴席に
欠くべからざる好味と相成居候。レスター伯がエリザベス
女皇をケニルウォースに招待致し候節も慥か孔雀を使用致
し候様記憶致候。有名なるレンブラントが画き候饗宴の図

にも孔雀が尾を広げたる儘卓上に横わり居り候……」

孔雀の料理史をかくくらいなら、そんなに多忙でもなさそうだと不平をこぼす。

「とにかく近頃の如く御馳走の食べ続けにては、さすがの小生も遠からぬうちに大兄の如く胃弱と相成るは必定……」大兄のごときは余計だ。何も僕を胃弱の標準にしなくても済むと主人はつぶやいた。

「歴史家の説によれば羅馬人は日に二度三度も宴会を開き候由。日に二度も三度も方丈の食饌に就き候えば如何なる健胃の人にても消化機能に不調を醸すべく、従つて自然は大兄の如く……」

また大兄のごとくか、失敬な。

「然るに贅沢と衛生とを両立せしめんと研究を尽したる彼

等は不相当に多量の滋味を食むさばると同時に胃腸を常態に保持するの必要を認め、ここに一の秘法を案出致し候そろ……」

はてねと主人は急に熱心になる。

「彼等は食後必ず入浴致候いたしそろう。入浴後一種の方法によりて浴前よくぜんに嚥下えんかせるものを悉く嘔吐おうとし、胃内を掃除致し候そろ。胃内廓清いなかくせいの功を奏したる後又食卓に就つき、飽く迄珍味を風好ふうこうし、風好おわし了れば又湯に入りて之を吐出致候としゆついたしそろう。かくの如くすれば好物は貪むさぼり次第貪り候も毫も内臓の諸機関に障害を生ぜず、一挙兩得とは此等の事を可申もうすべきかと愚考致候いたしそろう……」

なるほど一挙兩得に相違ない。主人は羨うらやましそうな顔をする。

「廿世紀の今日交通の頻繁ひんぱん、宴会の増加は申す迄もなく、軍国多事征露の第二年とも相成候折柄そろおりから、吾人戦勝国の国民は、是非共羅馬人ローマに倣ならつて此入浴嘔吐の術を研究せざるべ

からざる機会に到着致し候事（そろ）と自信致候（いたしそろ）。左もなくば切角（せつかく）の大国民も近き将来に於て悉く大兄の如く胃病患者と相成る事（ひそ）と窃かに心痛罷りあり候（そろ）……」

また大兄のごとくか、癩（しやく）に障る男だと主人が思う。

「此際吾人西洋の事情に通ずる者が古史伝説を考究し、既に廃絶せる秘法を発見し、之を明治の社会に応用致し候わば所謂禍（いわばわざわい）を未萌（みほう）に防ぐの功德にも相成り平素逸楽を擅（いつらくほしいまふ）に致し候御恩返も相立ち可申と存候……」

何だか妙だなと首を捻（ひね）る。

「依て此間中よりギボン、モンセン、スミス等諸家の著述（よつ）を涉猟致し居候えども未だに発見の端緒（たんしよ）をも見出し得ざるは残念の至に存候（ぞんじそろ）。然し御存じの如く小生は一度思い立ち候事は成功するまでは決して中絶仕らざる性質に候え（そろこと）

ば嘔吐方を再興致し候も遠からぬうちと信じ居り候次第。
右は発見次第御報道可仕候につき、左様御承知可被下候。
就てはさきに申上候ト、チメン、ボー、及び孔雀の舌の御馳走も
可相成は右発見後に致し度、左すれば小生の都合は勿論、
既に胃弱に悩み居らるる大兄の為にも御便宜かと存候草々
不備」

何だとうとう担がれたのか、あまり書き方が真面目だものだ
からつい仕舞まで本氣にして読んでいた。新年勿々こんな悪戯
をやる迷亭はよっぽどひま人だなあと主人は笑いながら云った。
それから四五日は別段の事もなく過ぎ去った。白磁の水仙が
だんだん凋んで、青軸の梅が瓶ながらだんだん開きかかるのを
眺め暮らしてばかりいてもつまらなそうと思つて、一両度三毛子を
訪問して見たが逢われない。最初は留守だと思つたが、二返目

には病気で寝ているという事が知れた。障子の中で例の御師匠さんと下女が話しをしているのを手水鉢ちようずばちの葉蘭の影に隠れて聞いているとこうであつた。

「三毛は御飯をたべるかい」「いいえ今朝からまだ何なんにも食べません、あつたかにして御火燵おこたに寝かしておきました」何だか猫らしくない。まるで人間の取扱を受けている。

一方では自分の境遇と比べて見て羨うらやましくもあるが、一方では己おのが愛している猫がかくまで厚遇を受けていると思えば嬉しくもある。

「どうも困るね、御飯をたべないと、身体からだが疲れるばかりだからね」「そうでございますとも、私共でさえ一日御饌ごぜんをいただくないと、明くる日はとても働けませんもの」

下女は自分より猫の方が上等な動物であるような返事をする。

實際この家では下女より猫の方が大切かも知れない。

「御医者様へ連れて行つたのかい」「ええ、あの御医者によつぽど妙でございますよ。私が三毛をだいて診察場へ行くと、風邪かぜでも引いたのかつて私の脈みやくをとろうとするんでしよう。いえ病人は私ではございせん。これですつて三毛を膝の上へ直したら、にやにや笑いながら、猫の病氣はわしにも分らん、抛ほうつておいたら今に癒なおるだろうつてんですもの、あんまり苛ひどいじゃございせんか。腹が立つたから、それじゃ見ていただかなくつてもようございますそれでも大事の猫なんですつて、三毛を懷ふところへ入れてさつさと歸つて参りました」「ほんにねえ」

「ほんにねえ」は到底吾輩とうていのうちなどで聞かれる言葉ではない。やはり天璋院様てんしょういんの何とかの何とかでなくては使えない、はなはだ雅がであると感じた。

「何だかしくしく云うようだが……」「ええきつと風邪を引いて
咽喉のどが痛むんでございますよ。風邪を引くと、どなたでも御咳おせき
が出ますからね……」

天璋院様の何とかの何とかの下女だけに馬鹿ていねいな言葉を使
う。

「それに近頃は肺病とか云うものが出来てのう」「ほんとにこの
頃のように肺病だのペストだのって新しい病氣ばかり殖ふえた日
にや油断も隙もなりやしませんのでございますよ」「旧幕時代に
無い者に碌ろくな者はないから御前も気をつけないといかんよ」「そ
うでございましょうかねえ」

下女おおいは大に感動している。

「風邪かぜを引くといつてもあまり出あるきもしないようだった
に……」「いえね、あなた、それが近頃は悪い友達が出来まして

ね」

下女は国事の秘密でも語る時のように大得意である。

「悪い友達？」「ええあの表通りの教師の所ところにいる薄ぎたない雄猫おねこでございますよ」「教師と云うのは、あの毎朝無作法な声を出す人かえ」「ええ顔を洗うたんびに鵝鳥がちょうが絞め殺されるような声を出す人でござんす」

鵝鳥が絞め殺されるような声はうまい形容である。吾輩の主人は毎朝風呂場で含嗽うがいをやる時、楊枝ようじで咽喉のどをつつ突いて妙な声が無遠慮に出す癖がある。機嫌の悪い時はやけにががあがやる、機嫌の好い時は元氣づいてなおがあがやる。つまり機嫌のいい時も悪い時も休みなく勢よくがあがやる。細君の話ではここへ引越す前まではこんな癖はなかつたそうだが、ある時ふとやり出してから今日きょうまで一日もやめた事がないという。

ちよつと厄介な癖であるが、なぜこんな事を根気よく続けているのか吾等猫などには到底想像もつかん。それもまず善いとして「薄ぎたない猫」とは随分酷評をやるものだとなお耳を立ててあとを聞く。

「あんな声を出して何の呪いになるか知らん。御維新前は中間まじなでも草履取りでも相応の作法は心得たもので、屋敷町などで、あんな顔の洗い方をするものは一人もおらなかつたよ」「そうでございましょうともねえ」

下女は無暗むやみに感服しては、無暗にねえを使用する。

「あんな主人を持つてゐる猫だから、どうせ野良猫のらねこさ、今度来たら少し叩たたいておやり」「叩いてやりますとも、三毛の病気になつたのも全くあいつの御蔭に相違ございせんもの、きつとかたき讐をとつてやります」

飛んだ冤罪えんざいを蒙こうむつたものだ。こいつは滅多めったに近ちか寄よれないと三毛子にはとうとう逢わずに帰った。

帰つて見ると主人は書齋うちの中で何か沈吟ちんぎんの体ていで筆を執とつていにげんきんる。二絃琴の御師匠としさんの所で聞いた評判を話したら、さぞ怒るだろうが、知らぬが仏とやらで、うんうん云いながら神聖な詩人になりすましている。

ところへ当分多忙で行かれないと云つて、わざわざ年始状をよこした迷亭君ひようぜんが飄然とやつて来る。「何か新体詩でも作つているのかね。面白いのが出来たら見せたまえ」と云う。「うん、ちよつとうまい文章だと思ったから今翻訳して見ようと思つてね」と主人は重たそうに口を開く。「文章？ 誰だれの文章だい」「誰れのか分らんよ」「無名氏か、無名氏の作にも随分善いのがあるからなかなか馬鹿に出来ない。全体どこにあつたのか」と

問う。「第二読本」と主人は落ちつきはらつて答える。「第二読本？ 第二読本がどうしたんだ」「僕の翻訳している名文と云うのは第二読本の中にあると云う事さ」「冗談じゃない。孔雀の舌の讐を際どいところで討とうと云う寸法なんだろう」「僕は君のような法螺吹きとは違うさ」と口髯を捻る。泰然たるものだ。「昔しある人が山陽に、先生近頃名文はござらぬかといったら、山陽が馬子の書いた借金の催促状を示して近来の名文はまづこれでしょうと云つたという話があるから、君の審美眼も存外たしかかも知れん。どれ読んで見給え、僕が批評してやるから」と迷亭先生は審美眼の本家のような事を云う。主人は禅坊主が大燈国師の遺誠を読むような声を出して読み始める。「巨人、引力」「何だいその巨人引力と云うのは」「巨人引力と云う題さ」「妙な題だな、僕には意味がわからんね」「引力と云う名を持つ

ている巨人というつもりさ」「少し無理なつもりだが表題だからまず負けておくとしよう。それから早々本文を読むさ、君は声が善いからなかなか面白い」「雑ぜかえしてはいかんよ」と予じめ念を押してまた読み始める。

ケートは窓から外面を眺める。小児が球を投げて遊んでいる。彼等は高く球を空中に擲つ。球は上へ上へとのぼる。しばらくすると落ちて来る。彼等はまた球を高く擲つ。再び三度。擲つたびに球は落ちてくる。なぜ落ちるのか、なぜ上へ上へとみのぼらぬかとケートが聞く。「巨人が地中に住む故に」と母が答える。「彼は巨人引力である。彼は強い。彼は万物を己れの方へと引く。彼は家屋を地上に引く。引かねば飛んでしまう。小児も飛んでしまう。葉が落ちるのを見たらう。あれは巨人引力が呼ぶのである。本を

落す事があるう。巨人引力が来いというからである。球が空にあがる。巨人引力は呼ぶ。呼ぶと落ちてくる」

「それぎりかい」「むむ、甘い^{うま}じゃないか」「いやこれは恐れ入った。飛んだところでト、チ、メン、ボ、の御返礼に預^{あずか}った」「御返礼でもなんでもないさ、實際うまいから訳して見たのさ、君はそう思わんかね」と金縁の眼鏡の奥を見る。「どうも驚ろいたね。君にしてこの伎倆^{ぎりよう}あらんとは、全く此度^{こんど}という今度^{こんど}は担^{かつ}がれたよ、降参降参」と一人で承知して一人で喋^{しゃべ}舌る。主人には一向通じない。「何も君を降参させる考えはないさ。ただ面白い文章だと思つたから訳して見たばかりさ」「いや実に面白い。そう来なくつちや本ものでない。凄^{すご}いものだ。恐縮だ」「そんなに恐縮するには及ばん。僕も近頃は水彩画をやめたから、その代りに文章でもやろうと思つてね」「どうして遠近^{えんきん}無差別^{むさべつ}黒白^{こくびやく}平等^{びやうどう}の水

彩画の比じゃない。感服の至りだよ」「そうほめてくれると僕も乗り気になる」と主人はあくまでも^{かんちが}疳違^{かんちが}いをしている。

ところへ寒月君^{かんげつ}が先日は失礼しましたと這^{はい}入^いつて来る。「い

や失敬。今大変な名文を拝聴してト、チ、メン、ボ、の亡魂^{たいじ}を退治^{たいじ}ら

れたところで」と迷亭先生は訳のわからぬ事をほのめかす。「は

あ、そうですか」とこれも訳の分らぬ挨拶をする。主人だけは

左^さのみ浮かれた気色^{けしき}もない。「先日は君の紹介^{おちとうふう}で越智東風と云う

人が来たよ」「ああ上^{あが}りましたか、あの越智東風^{おちこち}と云う男は至つ

て正直な男ですが少し變つているところがあるので、あるいは

御迷惑かと思いましたが、是非紹介してくれというものですか

ら……」「別に迷惑の事もないがね……」「こちらへ上^{あが}つても自分

の姓名のことについて何か弁じて行きやしませんか」「いいえ、

そんな話もなかったようだ」「そうですか、どこへ行つても初対

面の人には自分の名前の講釈こうしゃくをするのが癖でしてね」「どんな講釈をするんだい」と事あれかしと待ち構えた迷亭君は口を入れる。「あの東風こちと云うのを音おんで読まれると大変気にするので」「はてね」と迷亭先生は金唐皮きんからかわの煙草たばこ入から煙草をつまみ出す。わたくし「私わたしの名は越智東風おちとうふうではありません、越智おちこちですと必ず断りますよ」「妙だね」と雲井くもいを腹の底まで呑み込む。「それが全く文学熱から来たので、こちと読むと遠近せいでと云う成語になる、のみならずその姓名せい名が韻いんを踏んでいると云うのが得意なんです。それだから東風こちを音おんで読むと僕がせっかくの苦心を人が買つてくれないといつて不平を云うのです」「こりやなるほど変つてる」と迷亭先生は図に乗つて腹の底から雲井を鼻の孔あなまで吐き返す。途中で煙が戸迷とまじいをして咽喉のどの出口へ引きかかる。先生は煙管きせるを握つてごほんごほんと咽むせび返る。「先日来た時は朗読会で船頭

になつて女学生に笑われたといつていたよ」と主人は笑いながら云う。「うむそれぞれ」と迷亭先生が煙管で膝頭を叩く。きせる ひざがしら たた吾輩は險呑けんどんになつたから少し傍そばを離れる。「その朗読会さ。せんだつてト、チ、メン、ボ、を御馳走した時にね。その話しが出たよ。何でも第二回には知名の文士を招待して大会をやるつもりだから、先生にも是非御臨席を願いたいって。それから僕が今度も近松の世話物をやるつもりかいと聞くと、いえこの次はずつと新しい者を撰えらんで金色夜叉こんじきやしやにしましたと云うから、君にや何の役が当つてるかと聞いたたら私は御宮おみやですといったのさ。東風とうふうの御宮は面白かろう。僕は是非出席して喝采かつさいしようと思つてるよ」「面白いでしょう」と寒月君が妙な笑い方をする。「しかしあの男はどこまでも誠実で軽薄なところがないから好い。迷亭などとは大違いだ」と主人はアンドレア・デル・サルトと孔雀くじやくの舌とト、

チメンボ一の復讐かたきを一度にとる。迷亭君は気にも留めない様子で「どうせ僕などは行徳の俎ぎやうとくと云う格だからなあ」と笑う。「ま
ずそんなところだろう」と主人が云う。実は行徳の俎と云う語
を主人は解かいさないのであるが、さすが永年教師をして胡魔ごま化し
つけているものだから、こんな時には教場の経験を社交上にも
応用するのである。「行徳の俎しんそつというのは何の事ですか」と寒月
が真率しんそつに聞く。主人は床の方を見て「あの水仙は暮に僕が風呂
の帰りがけに買って来て挿さしたのだが、よく持つじやないか」
と行徳の俎を無理にねじ伏せる。「暮といえ、去年の暮に僕は
実に不思議な経験をしたよ」と迷亭が煙管きせるを大神楽だいかぐらのごとく指
の尖さきで廻まわす。「どんな経験か、聞かし玉たまえ」と主人は行徳の俎
を遠く後うしろに見捨てた気で、ほつと息をつく。迷亭先生の不思議
な経験というのを聞くと左さのごとくである。

「たしか暮の二十七日と記憶しているがね。例の東風とうふうから参堂の上是非文芸上の御高話を伺いたいから御在宿を願うと云う先さき触ふれがあつたので、朝から心待ちに待っていると先生なかなか来ないやね。昼飯を食つてストーブの前でバリー・ペーンこつけいものの滑稽物こつけいものを読んでいるところへ静岡の母から手紙が来たから見ると、年寄だけにいつまでも僕を小供のように思つてね。寒中へやは夜間外出をするとか、冷水浴もいいがストーブを焚たいて室へやを暖あたかにしてやらないと風邪かぜを引くとかいろいろの注意があるのさ。なるほど親はありがたいものだ、他人ではとてもこうはいかないと、呑気のんきな僕もその時だけは大おおに感動した。それにつけても、こんなにのらくらしては勿体もったいない。何か大著述でもして家名を揚げなくてはならん。母の生きているうちに天下をして明治の文壇に迷亭先生あるを知らしめたいと云う氣になつ

た。それからなお読んで行くと御前なんぞは実に仕合せ者だ。
露西亞^{ロシア}と戦争が始まって若い人達は大変な辛苦^{しんく}をして御国^{みくに}のた
めに働らいているのに節季^{せつき}師走^{しわす}でもお正月のように気楽に遊ん
でいると書いてある。——僕はこれでも母の思つてるように遊
んじやないやね——そのあとへ以^{もつ}て来て、僕の小学校時代の
朋友^{ほうゆう}で今度の戦争に出て死んだり負傷したものの名前が列挙し
てあるのさ。その名前を一々読んだ時には何だか世の中が味気^{あじき}
なくなつて人間もつまらないと云う気が起つたよ。一番仕舞^{しまい}に
ね。私^{わたし}しも取る年に候^{はつはる}えば初春^{おぞうに}の御雑煮^{おぞうに}を祝い候も今度限りか
と……何だか心細い事が書いてあるんで、なおのこと気がくさ
くさしてしまつて早く東風^{とうふう}が来れば好いと思つたが、先生どう
しても来ない。そのうちとうとう晩飯になつたから、母へ返事
でも書こうと思つてちよいと十二三行かいた。母の手紙は六尺

以上もあるのだが僕にはとてもそんな芸は出来んから、いつでも十行内外で御免蒙^{こうむ}る事に極^きめてあるのさ。すると一日動かずにおったものだから、胃の具合が妙で苦しい。東風が来たら待たせておけと云う氣になつて、郵便を入れながら散歩に出掛けたと思ひ給え。いつになく富士見町の方へは足が向かないで土手^{どて}さんばんちよう三番町の方へ我れ知らず出てしまつた。ちようどその晩は少し曇つて、から風が御濠^{おほり}の向う^{むこ}から吹き付ける、非常に寒い。神楽坂^{かぐらざか}の方から汽車がヒューと鳴つて土手下を通り過ぎる。大変淋^{さみ}しい感じがする。暮、戦死、老衰、無常迅速などと云う奴が頭の中をぐるぐる馳^かけ廻^{めぐ}る。よく人が首を縊^くると云うがこんな時にふと誘われて死ぬ氣になるのじやないかと思ひ出す。ちよいと首を上げて土手の上を見ると、いつの間^まにか例の松の真下^{ました}に来てゐるのさ」

「例の松た、何だい」と主人が断句を投げ入れる。

「首懸くびかけの松さ」と迷亭は領えりを縮める。

「首懸くびかけの松は鴻こうの台だいでしよう」寒月が波紋はもんをひろげる。

「鴻こうの台だいのは鐘懸かねかけの松で、土手三番町のは首懸くびかけの松さ。なぜこう

云う名が付いたかと云うと、昔むかしからの言い伝えで誰でもこの松

の下へ来ると首くびが縊くりたくなる。土手の上に松は何十本となく

あるが、そら首縊くびくりだと来て見ると必ずこの松へぶら下がって

いる。年に二三返べんはきつとぶら下がっている。どうしても他のほか

松では死ぬ気にならん。見ると、うまい具合に枝が往来の方へ

横に出ている。ああ好い枝振りだ。あのままにしておくのは惜

しいものだ。どうかしてあすこの所へ人間を下げて見たい、誰

か来ないかしらと、四辺あたりを見渡すと生憎あいにく誰も来ない。仕方がな

い、自分で下がろうか知らん。いやいや自分が下がっては命が

ない、危あぶないからよそう。しかし昔の希臘人ギリシヤじんは宴会の席で首くび縊くりの真似をして余興を添えたと言ふ話がある。一人が台の上へ登つて縄の結び目へ首を入れる途端に他のものほかが台を蹴返す。首を入れた当人は台を引かれると同時に縄をゆるめて飛び下りるという趣向しゅこうである。果してそれが事実なら別段恐るるにも及ばん、僕も一つ試みようと思ふと枝へ手を懸けて見ると好い具合に撓しわる。撓り安排あんぱいが実に美的である。首がかかつてふわふわするところを想像して見ると嬉しくてたまらん。是非やる事にしようと思つたが、もし東風とうふうが来て待つていると気の毒だと考え出した。それではまず東風とうふうに逢あつて約束通り話をして、それから出直そうと言ふ氣になつてついにうちへ歸つたのさ」

「それで市いちが栄えたのかい」と主人が聞く。

「面白いですな」と寒月がにやにやしながら云う。

「うちへ帰つて見ると東風は来ていない。しかし今日は無拋処こんちち よんどころなき差支さしつかえがあつて出られぬ、いずれ永日御面晤えいじつごめんごを期すという端書はがきがあつたので、やつと安心して、これなら心置きなく首が縊くれる嬉しいと思つた。で早速下駄を引き懸けて、急ぎ足で元の所へ引き返して見る……」と云つて主人と寒月の顔を見てすましている。

「見るとどうしたんだい」と主人は少し焦じれる。

「いよいよ佳境に入りますね」と寒月は羽織の紐ひもをひねくる。

「見ると、もう誰か来て先へぶら下がっている。たつた一足違いでねえ君、残念な事をしたよ。考えると何でもその時は死神しにがみに取り着かれたんだね。ゼームスなどに云わせると副意識下の幽冥界ゆうめいかいと僕が存在している現実界が一種の因果法によつて互に感応かんのうしたんだろう。実に不思議な事があるものじゃないか」迷

亭はすまし返っている。

主人はまたやられたと思ひながら何も云わずに空也餅を頬張つて口をもごもご云わしている。

寒月は火鉢の灰を丁寧^かに掻き馴^ならして、俯向^{うつむ}いてにやにや笑っていたが、やがて口を開く。極めて静かな調子である。

「なるほど伺つて見ると不思議な事でちよつと有りそうにも思われませんが、私などは自分でやはり似たような経験をつい近頃したものですから、少しも疑がう氣になりません」

「おや君も首を縊^くりたくなつたのかい」

「いえ私のは首じゃないんで。これもちようど明ければ去年の暮の事でしかも先生と同日同刻くらいに起つた出来事ですからなおさら不思議に思われます」

「こりや面白い」と迷亭も空也餅を頬張る。

「その日は向島の知人の家^{うち}で忘年会兼合奏会^{けん}がありまして、私もそれへヴァイオリン^{たづさ}を携えて行きました。十五六人令嬢やら令夫人が集つてなかなか盛会で、近來の快事と思うくらいに万事が整つていました。晚餐^{ばんさん}もすみ合奏もすんで四方^{よも}の話しが出て時刻も大分^{だいぶん}遅くなつたから、もう暇乞^{いとまぎ}いをして帰ろうかと思つていますと、某博士の夫人が私のそばへ来てあなたは〇〇子さんの御病氣を御承知ですかと小声で聞きますので、実はその両三日^{りようさんにちまえ}前に逢つた時は平常の通りどこも悪いようには見受けませんでしたが、私も驚ろいて精^{くわ}しく様子を聞いて見ますと、私^{わたくし}しの逢つたその晩から急に発熱して、いろいろな譫語^{うわごと}を絶間なく口走^{くちばし}るそうで、それだけなら宜^いいですがその譫語のうちに私の名が時々出て来るといふのです」

主人は無論、迷亭先生も「御安^{おやす}くないね」などという月並^{つきなみ}は

云わず、静肅に謹聴している。

「医者を呼んで見てもらうと、何だか病名はわからんが、何しろ熱が劇はげしいので脳を犯しているから、もし睡眠剤すいみんざいが思うように功を奏しないと危険であると云う診断だそうで私はそれを聞くや否や一種いやな感じが起つたのです。ちようど夢でうなされる時のような重くるしい感じで周囲の空氣が急に固形体になつて四方から吾が身を締めつけるごとく思われました。帰り道にもその事ばかりが頭の中にあつて苦しくてたまらない。あの奇麗な、あの快活なあゝの健康な○○子さんが……」

「ちよつと失敬だが待つてくれ給え。さつきから伺つていると○○子さんと云うのが二返へんばかり聞えるようだが、もし差支さしつかえがなければ承うけたまわりたいね、君」と主人を顧かえりみると、主人も「うむ」と生返なまへんじ事をする。

「いやそれだけは当人の迷惑になるかも知れませんが、廃しましよう」

「すべて暖々然あたたかいぜんとして昧々然まいまいぜんたるかたで行くつもりかね」

「冷笑なさつてはいけません、極真面目ごくまじめな話しなんですから……

とにかくあの婦人が急にそんな病氣になつた事を考えると、実に飛花落葉ひからくようの感慨で胸が一杯になつて、総身そうしんの活氣が一度にス

トライキを起したように元氣がにわかに入滅めい入つてしまいまし

て、ただ蹠々そうそうとして跟々ろうろうという形かたちで吾妻橋あずまばしへきかかつたので

す。欄干よに倚よつて下を見ると満潮まんちょうか干潮かんちょうか分りませんが、黒い

水がかたまつてただ動いてるように見えます。花川戸はなかわどの方か

ら人力車が一台馳かけて来て橋の上を通りました。その提灯ちようちんの火

を見送っていると、だんだん小さくなつて札幌さつぽろビールの処で消え

ました。私はまた水を見る。すると遙はるかの川上の方で私の名を

呼ぶ声が聞えるのです。はてな今時分人に呼ばれる訳はないが誰だろうと水の面をすかして見ましたが暗くて何にも分りません。気のせいに違いない早々帰ろうと思つて一足二足あるき出すと、また微かな声で遠くから私の名を呼ぶのです。私はまた立ち留つて耳を立てて聞きました。三度目に呼ばれた時には欄干に捕まつていながら膝頭がぐくぐく悸え出したのです。その声は遠くの方か、川の底から出るようですが紛れもない○○子の声なんでしよう。私は覚え「はい」と返事をしたのです。その返事が大きかったものですから静かな水に響いて、自分で自分の声に驚かされて、はつと周囲を見渡しました。人も犬も月も何にも見えません。その時に私はこの「夜」の中に巻き込まれて、あの声の出る所へ行きたいと云う気がむらむらと起つたのです。○○子の声がまた苦しうに、訴えるように、救を

求めるように私の耳を刺し通したので、今度は「今直すぐに行きま
す」と答えて欄干から半身を出して黒い水を眺めました。どう
も私を呼ぶ声が浪なみの下から無理に洩もれて来るように思われまし
てね。この水の下だなと思ひながら私はとうとう欄干の上に乗
りましたよ。今度呼んだら飛び込もうと決心して流を見つめて
いるとまた憐いたれな声が糸のように浮いて来る。ここだと思つて
力を込めて一反いったん飛び上がつておいて、そして小石か何ぞのよう
に未練なく落ちてしまいました」

「とうとう飛び込んだのかい」と主人が眼をぱちつかせて問う。
「そこまで行こうとは思わなかつた」と迷亭が自分の鼻の頭を
ちよいとつまむ。

「飛び込んだ後あとは気が遠くなつて、しばらくは夢中でした。や
がて眼がさめて見ると寒くはあるが、どこも濡ぬれた所ところも何もな

い、水を飲んだような感じもしない。たしかに飛び込んだはずだが実に不思議だ。こりや変だと気が付いてそこいらを見渡すと驚きましたね。水の中へ飛び込んだつもりでいたところが、つい間違つて橋の真中へ飛び下りたので、その時は実に残念でした。前と後ろの間違^{うし}だけであの声の出る所へ行く事が出来なかつたのです」寒月はにやにや笑いながら例のごとく羽織の紐^{ひも}にやつかいを荷厄介にしている。

「ハハハハこれは面白い。僕の経験と善く似ているところが奇だ。やはりゼームス教授の材料になるね。人間の感応と云う題で写生文にしたらきつと文壇を驚かすよ。……そしてその○○○子さんの病気はどうなったかね」と迷亭先生が追窮する。

「二三日前年始に行きましたら、門の内を下女と羽根を突いてにさんちまえいましたから病気は全快したものと見えます」

主人は最前から沈思の体であつたが、この時ようやく口を開いて、「僕にもある」と負けぬ氣を出す。

「あるつて、何があるんだい」迷亭の眼中に主人などは無論ない。

「僕のも去年の暮の事だ」

「みんな去年の暮は暗合で妙ですな」と寒月が笑う。欠けた前齒のうちに空也餅が着いている。

「やはり同日同刻じゃないか」と迷亭がまぜ返す。

「いや日は違うようだ。何でも二十日頃だよ。細君が御歳暮の代りに摂津大掾を聞かしてくれろと云うから、連れて行ってや

らん事もないが今日の語り物は何だと聞いたたら、細君が新聞を参考して鰻谷うなぎだにだと云うのさ。鰻谷は嫌いだから今日はよそうとそ

の日はやめにした。翌日になると細君がまた新聞を持って来て

今日は堀川ほりかわだからいいでしょうと云う。堀川は三味線もので賑やかなばかりで実みがないからよそうと云うと、細君は不平な顔をして引き下がった。その翌日になると細君が云うには今日は三十三間堂です、私は是非せつ摂津つの三十三間堂が聞きたい。あなたは三十三間堂も御嫌いか知らないが、私に聞かせるのだからいっしょに行つて下すつても宜いいでしょうと手詰てづめの談判をする。御前がそんなに行きたいなら行つても宜よろしい、しかし一世一代と云うので大変な大入だから到底突懸とうていつつかけに行つたつて這入はいれる氣遣きづかいはない。元来ああ云う場所へ行くには茶屋と云うものが在あつてそれと交渉して相当の席を予約するのが正当の手続きだから、それを踏まないで常規を脱した事をするのはよくない、残念だが今日はやめようと云うと、細君は凄すじい眼付をして、私は女ですからそんなむずかしい手続きなんか知りませんが、大

原のお母あさんも、鈴木の子代さんも正当の手續きを踏まないで立派に聞いて来たんですから、いくらあなたが教師だからつて、^{てすう}そう手数のかかる見物をしないで済みましよう、あなたはあるまりだと泣くような声を出す。それじゃ駄目でもまあ行く事にしよう。晩飯をくつて電車で行こうと降参をすると、行くなら四時までに向うへ着くようにしなくっちゃいけません、そんなぐずぐずしてはいられませんと急に勢がいい。なぜ四時までに行かなくては駄目なんだと聞き返すと、そのくらい早く行つて場所をとらなくちゃ這入れないからですと鈴木の子代さんから教えられた通りを述べる。それじゃ四時を過ぎればもう駄目なんだねと念を押して見たら、ええ駄目ですとものと答える。すると君不思議な事にはその時から急に悪寒おかんがし出してね」「奥さんがですか」と寒月が聞く。

「なに細君はぴんぴんしていらあね。僕がさ。何だか穴の明いた風船玉のように一度に萎縮いしゆくする感じが起ると思うと、もう眼がぐらぐらして動けなくなつた」

「急病だね」と迷亭が註釈を加える。

「ああ困つた事になつた。細君が年に一度の願だから是非叶かなえてやりたい。平生叱りつけたり、口を聞かなかつたり、身上しんしょうの苦勞をさせたり、小供の世話をさせたりするばかりで何一つ洒掃薪水さいそうしんすいの勞に酬むくいた事はない。今日は幸い時間もある、囊中のうちゆうには四五枚の堵物とぶつもある。連れて行けば行かれる。細君も行きたいだろう、僕も連れて行つてやりたい。是非連れて行つてやりたいがこう悪寒がして眼がくらんでは電車へ乗るところか、靴脱くつぬぎへ降りる事も出来ない。ああ氣の毒だ氣の毒だと思うとなお悪寒がしてなお眼がくらんでくる。早く医者に見てもらつて

服薬でもしたら四時前には全快するだろうと、それから細君と相談をして甘木^{あまき}医学士を迎いにやると生憎^{あいにくゆうべ}昨夜が当番でまだ大
学から帰らない。二時頃には御帰りになりますから、帰り次第
すぐ上げますと云う返事である。困ったなあ、今杏仁^{きょうにんすい}水でも飲
めば四時前にはきつと癒^{なほ}るに極^{きま}っているんだが、運の悪い時に
は何事も思うように行かんもので、たまさか妻君の喜ぶ笑顔を
見て楽もうと云う予算も、がらりと外^{はず}れそうになって来る。細
君は恨^{うら}めしい顔付をして、到底^{とうてい}いらつしやれませんかと聞く。
行くよ必ず行くよ。四時までにはきつと直つて見せるから安心
しているがいい。早く顔でも洗つて着物でも着換えて待つてい
るがいい、と口では云つたようなものの胸中は無限の感慨であ
る。悪寒はますます劇^{はげ}しくなる、眼はいよいよぐらぐらする。
もしや四時までに全快して約束を履行^{りこう}する事が出来なかつたら、

気の狭い女の事だから何をするかも知れない。情けない仕儀になつて来た。どうしたら善かろう。万一の事を考えると今の内に有為転変ういてんぺんの理、生者必滅しょうじやひつめつの道を説き聞かして、もしもの変が起つた時取り乱さなくらいの覚悟をさせるのも、夫の妻おつとつまに対する義務ではあるまいかと考え出した。僕は速すみやかに細君を書斎へ呼んだよ。呼んで御前は女だけれども many a slip 'twixt the cup and the lip と云う西洋の諺ことわざくらいは心得ているだろうと聞くと、そんな横文字なんか誰が知るもんですか、あなたは人が英語を知らないのを御存じの癖にわざと英語を使って人にかうのだから、宜よろしゅうございます、どうせ英語なんかは出来ないんですから、そんなに英語が御好きなら、なぜ耶蘇ヤソがつしう学校の卒業生かなんかをお貰いなさらなかったんです。あなたくらい冷酷な人はありはしないと非常な権幕けんまくなんで、僕もせつかくの

計画の腰を折られてしまった。君等にも弁解するが僕の英語は決して悪意で使った訳じゃない。全く妻を愛する至情から出たので、それを妻のように解釈されては僕も立つ瀬がない。それにさっきからの悪寒おかんと眩暈めまいで少し脳が乱れていたところへもつて来て、早く有為転変、生者必滅の理を呑み込ませようと少し急せぎ込んだものだから、つい細君の英語を知らないと言う事を忘れて、何の気も付かずに使ってしまった訳さ。考えるとこれは僕が悪わるい、全く手落ちであつた。この失敗で悪寒はますます強くなる。眼はいよいよぐらぐらする。妻君は命ぜられた通り風呂場へ行つて両肌もろはだを脱いで御化粧をして、筆筒たんすから着物を出して着換える。もういつでも出掛けられますと云う風情ふぜいで待ち構えている。僕は気がでない。早く甘木君が来てくれれば善いかと思つて時計を見るともう三時だ。四時にはもう一時間

しかない。「そろそろ出掛けましょうか」と妻君が書斎の開き
 戸を明けて顔を出す。自分の妻を褒めるのはおかしいようであ
 るが、僕はこの時ほど細君を美しいと思つた事はなかつた。も
 ろ肌を脱いで石鹼で磨き上げた皮膚がぴかついて黒縮緬の羽織
 と反映している。その顔が石鹼と摂津大掾を聞こうと云う希望
 との二つで、有形無形の両方面から輝やいて見える。どうして
 もその希望を満足させて出掛けてやろうと云う氣になる。それ
 じゃ奮発して行こうかな、と一ふくふかしているとうまく甘
 木先生が来た。うまい注文通りに行つた。が容体をはなすと、
 甘木先生は僕の舌を眺めて、手を握つて、胸を敲いて背を撫で
 て、目縁を引つ繰り返して、頭蓋骨をさすつて、しばらく考え
 込んでゐる。「どうも少し陰呑のような氣がしまして」と僕が云
 うと、先生は落ちついて、「いえ格別の事もございますまい」と

云う。「あのちよつとくらい外出致しても差支さしつかえはございませんま
いね」と細君が聞く。「さよう」と先生はまた考え込む。「御氣
分さえ御悪くなければ……」「気分は悪いですよ」と僕がいう。
「じゃともかくも頓服とんぷくと水薬すいやくを上げますから」「へえどうか、何
だかちと、危あぶないようになりそうですね」「いや決して御心配
になるほどの事じゃございません、神経を御起しになるといけ
ませんよ」と先生が帰る。三時は三十分過ぎた。下女を薬取り
にやる。細君の嚴命で馳かけ出して行つて、馳かけ出して返つてく
る。四時十五分前である。四時にはまだ十五分ある。すると四
時十五分前頃から、今まで何とも無かつたのに、急に嘔はきけ氣もよを催
おして来た。細君は水薬すいやくを茶碗へ注ついで僕の前へ置いてくれた
から、茶碗を取り上げて飲むとすると、胃の中からげーと云
う者が呐喊とつかんして出てくる。やむをえず茶碗を下へ置く。細君は

「早く御飲^{おの}みになつたら宜^いいでしよう」と逼^{せま}る。早く飲んで早く出掛けなくては義理が悪い。思い切つて飲んでしまおうとまた茶碗を唇へつけるとまたゲー^{しゅうねんぶか}が執念深く妨害をする。飲むうとしては茶碗を置き、飲むうとしては茶碗を置いていると茶の間の柱時計がチンチンチンチンと四時を打った。さあ四時だ愚図愚図してはおられんと茶碗をまた取り上げると、不思議だねえ君、実に不思議とはこの事だろう、四時の音と共に吐^はき氣^けがすっかり留まつて水菓が何の苦なしに飲めたよ。それから四時十分頃になると、甘木先生の名医という事も始めて理解する事が出来たんだが、背中がぞくぞくするのも、眼がぐらぐらするのも夢のように消えて、当分立つ事も出来まいと思つた病氣がたちまち全快したのは嬉しかった」

「それから歌舞伎座へいっしょに行つたのかい」と迷亭が要領

を得んと云う顔付をして聞く。

「行きたかつたが四時を過ぎちゃ、這^{はい}入れないと云う細君の意見なんだから仕方がない、やめにしたさ。もう十五分ばかり早く甘木先生が来てくれたら僕の義理も立つし、妻^{さい}も満足したろうに、わずか十五分の差でね、実に残念な事をした。考え出すとあぶないところだったと今でも思うのさ」

語り了^{おわ}った主人はようやく自分の義務をすましたような風をする。これで兩人に対して顔が立つと云う気かも知れん。

寒月は例のごとく欠けた齒を出して笑いながら「それは残念でしたな」と云う。

迷亭はとぼけた顔をして「君のような親切な夫^{おつと}を持った妻君は実に仕合せだな」と独^{ひと}り言^{ごと}のよう^{せきばら}にいう。障子の蔭でエヘンと云う細君の咳^{せきばら}払いが聞える。

吾輩はおとなしく三人の話しを順番に聞いていたがおかしくも悲しくもなかった。人間というものは時間を潰すために強いて口を運動させて、おかしくもない事を笑ったり、面白くもない事を嬉しがったりするほかに能もない者だと思った。吾輩の主人の我儘で偏狭な事は前から承知していたが、平常は言葉数を使わないので何だか了解しかねる点があるように思われていた。その了解しかねる点に少しは恐しいと云う感じもあつたが、今話を聞いてから急に輕蔑したくなつた。かれはなぜ兩人の話しを沈黙して聞いていられないのだろう。負けぬ氣になつて愚にもつかぬ駄弁を弄すれば何の所得があるだろう。エピクテタスにそんな事をしろと書いてあるのか知らん。要するに主人も寒月も迷亭も太平の逸民で、彼等は糸瓜のごとく風に吹かれて超然と澄し切っているようなものの、その実はやはり娑婆氣も

あり慾気よくけもある。競争の念、勝とう勝とうの心は彼等が日常の談笑中にもちらちらとほのめいて、一步進めば彼等が平常罵倒ばとうしている俗骨共と一つ穴の動物になるのは猫より見て気の毒の至りである。ただその言語動作が普通の半可通はんかつうのごとく、文切もんきり形の厭味がたを帯びてないのはいささかの取り得とえでもあろう。

こう考えると急に三人の談話が面白くなつたので、三毛子の様子でも見て来ようかと二絃琴にげんきんの御師匠さんの庭口へ廻る。門松注目飾りはすでに取り払われて正月も早はや十日となつたが、うららかな春日はるびは一流れの雲も見えぬ深き空より四海天下を一度に照らして、十坪に足らぬ庭の面おもも元日の曙光しよこうを受けた時より鮮あざやかな活気を呈している。椽側ざぶとんに座蒲団が一つあつて人影も見えず、障子も立て切つてあるのは御師匠さんは湯にでも行つたのか知らん。御師匠さんは留守でも構わんが、三毛子は少し

は宜い方か、それが氣掛りである。ひっそりして人の氣合もしないから、泥足のまま椽側へ上つて座蒲団の真中へ寝転ろんで見るといい心持ちだ。ついうとうととして、三毛子の事も忘れてうたた寝をしていると、急に障子のうちで人声がする。

「御苦勞だった。出来たかえ」御師匠さんはやはり留守ではなかつたのだ。

「はい遅くなりました、仏師屋へ参りましたらちようど出来上つたところだと申しまして」「どれお見せなさい。ああ奇麗に出来た、これで三毛も浮かばれましょう。金は剥げる事はあるまいね」「ええ念を押しましたら上等を使つたからこれなら人間の位牌よりも持つと申しておりました。……それから猫誉信女の誉の字は崩した方が恰好がいいから少し劃を易えたと申しました」「どれどれ早速御仏壇へ上げて御線香でもあげましょう」

三毛子は、どうかしたのかな、何だか様子が変だと蒲団の上へ立ち上る。チーン南無猫誉信女、南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏と御師匠さんの声がする。

「御前も回向えこうをしておやりなさい」

チーン南無猫誉信女南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏と今度は下女の声がする。吾輩は急に動悸どうきがして来た。座蒲団の上に立ったまま、木彫きぼりの猫のように眼も動かさない。

「ほんとに残念な事を致しましたね。始めはちよいと風邪かぜを引いたんでございましょうがねえ」「甘木さんが薬でも下さると、よかつたかも知れないよ」「一体あの甘木さんが悪うございますよ、あんまり三毛を馬鹿にし過ぎまさあね」「そう人様ひとさまの事を悪く云うものではない。これも寿命じゅめいだから」

三毛子も甘木先生に診察して貰ったものと見える。

「つまるところ表通りの教師のうちの野良猫のらねこが無暗むやみに誘い出したからだ、わたしは思うよ」「ええあの畜生ちきしょうが三毛のかたきでございますよ」

少し弁解したかったが、ここが我慢のしどころと唾つばを呑んで聞いている。話しはしばし途切とぎれる。

「世の中は自由にならん者でのう。三毛のような器量よしは早死はやじにをするし。不器量な野良猫は達者でいたずらをしているし……」
「その通りでございますよ。三毛のような可愛らしい猫は鐘と太鼓で探してあるいたつて、二人ふたりとはおりませんからね」

二匹と云う代りに二ふたりといった。下女の考えでは猫と人間とは同種族ものと思つてゐるらしい。そう云えばこの下女の顔は吾等猫属ねこぞくとはなはだ類似している。

「出来るものなら三毛の代りに……」
「あの教師の所の野良のらが死

ぬと御誂え通りに参つたんでございますがねえ」
おあつら

御誂え通りになつては、ちと困る。死ぬと云う事はどんなものか、まだ経験した事がないから好きとも嫌いとも云えないが、先日あまり寒いので火消壺ひけしつぼの中へもぐり込んでいたら、下女が吾輩がいるのも知らんで上から蓋ふたをした事があつた。その時の苦しきは考えても恐しくなるほどであつた。白君の説明によるとあの苦しみが今少し続くと死ぬのであるそうだ。三毛子の身代みがわりになるのなら苦情もないが、あの苦しみを受けなくては死ぬ事が出来ないのなら、誰のためでも死にたくはない。

「しかし猫でも坊さんの御経を読んでもらつたり、戒名かいみようをこしらえてもらったのだから心残りはあるまい」「それでございますとも、全く果報者かほうものでございますよ。ただ慾を云うとあの坊さんの御経があまり軽少けいせうだつたようでございますね」「少し短か過ぎ

たようだったから、大変御早うございますねと御尋ねしたら、
月桂寺さんは、ええ利目ききめのあるところをちよいとやっておきま
した、なに猫だからあのくらいで充分浄土へ行かれますとおつ
しやったよ」「あらまあ……しかしあの野良なんかは……」

吾輩は名前はないとしばしば断っておくのに、この下女は野
良野良と吾輩を呼ぶ。失敬な奴だ。

「罪が深いんですから、いくらありがたい御経だつて浮かばれ
る事はございませんよ」

吾輩はその後野良ごが何百遍繰り返されたかを知らぬ。吾輩は
この際限なき談話を途中で聞き棄てて、布団ふとんをすべり落ちて椽
側から飛び下りた時、八万八千八百八十本の毛髪を一度にたて
て身震みふるいをした。その後二絃琴ごにげんきんの御師匠さんの近所へは寄りつ
いた事がない。今頃は御師匠さん自身が月桂寺さんから軽少な

御回向ごえこうを受けているだろう。

近頃は外出する勇氣もない。何だか世間が慵ものうく感ぜらる。主人に劣らぬほどの無性猫ぶしょうねことなつた。主人が書斎にのみ閉じ籠こもっているのを人が失恋だ失恋だと評するのも無理はないと思ふようになった。

鼠ねずみはまだ取つた事がないので、一時は御三おさんから放逐論ほうちくろんさえ呈出ていしゅつされた事もあつたが、主人は吾輩の普通一般の猫でないと云う事を知っているものだから吾輩はやはりのらくらしてこの家やに起臥きがしている。この点については深く主人の恩を感謝すると同時にその活眼かつがんに対して敬服の意を表するに躊躇ちゅうちよしないつもりである。御三が吾輩を知らずして虐待をするのは別に腹も立たない。今に左甚五郎ひだりじんごろうが出て来て、吾輩の肖像を楼門ろうもんの柱きざに刻み、日本のスタンランが好んで吾輩の似顔をカンヴァスの上に描えがく

ようになつたら、彼等鈍瞎漢^{どんかつかん}は始めて自己の不明を恥^はずるであ
ろう。

三

三毛子は死ぬ。黒は相手にならず、いささか寂寞^{せきばく}の感はある
が、幸い人間に知己^{ちぎ}が出来たのでさほど退屈とも思わぬ。せん
だつては主人の許^{もと}へ吾輩の写真を送つてくれと手紙で依頼した
男がある。この間は岡山の名産吉備団子^{きびだんご}をわざわざ吾輩の名宛
で届けてくれた人がある。だんだん人間から同情を寄せらるる
に従つて、己^{おのれ}が猫である事はようやく忘却してくる。猫よりは
いつの間^まにか人間の方へ接近して来たような心持になつて、同
族を糾合^{きうごう}して二本足の先生と雌雄^{しゆう}を決しようなどと云^いう量見は

昨今のところ毛頭もうとうない。それのみか折々は吾輩もまた人間世界の一人だと思ふ折さえあるくらいに進化したのはたのもしい。あえて同族を輕蔑けいべつする次第ではない。ただ性情の近きところに向つて一身の安きを置くは勢いきおいのしからしむるところで、これを變心とか、輕薄とか、裏切りとか評せられてはちと迷惑する。かような言語を弄ろうして人を罵詈ばりするものに限つて融通の利きかぬ貧乏性の男が多いようだ。こう猫の習癖を脱化して見ると三毛子や黒の事ばかり荷厄介きぐらいにしている訳には行かん。やはり人間同等の氣位きぐらいで彼等の思想、言行を評隲ひようしつしたくなる。これも無理はあるまい。ただそのくらいな見識を有している吾輩をやはり一般猫児びようじの毛の生はえたものくらいに思つて、主人が吾輩に一言の挨拶もなく、吉備団子きびだんごをわが物顔に喰い尽したのは残念の次第である。写真もまだ撮とつて送らぬ容子ようすだ。これも不平と云え

ば不平だが、主人は主人、吾輩は吾輩で、相互の見解が自然異なるのは致し方もあるまい。吾輩はどこまでも人間になりすましているのだから、交際をせぬ猫の動作は、どうしてもちよいと筆に上りにくい。^{のぼ}迷亭、寒月諸先生の評判だけで御免蒙る事に致そう。

今日は上天氣の日曜なので、主人はそのそ書斎から出て来て、吾輩の傍へ筆硯と原稿用紙を並べて腹這になつて、しきりに何か唸っている。^{うな}大方草稿を書き卸す序開きとして妙な声を発するのだろうと注目していると、ややしばらくして筆太に「香一炷」とかいた。はてな詩になるか、俳句になるか、香一炷とは、主人にしては少し洒落過ぎているかと思う間もなく、彼は香一炷を書き放しにして、新たに行を改めて「さつきから天然居士の事をかこうと考えている」と筆を走らせた。筆はそれだけでは

たと留ったぎり動かない。主人は筆を持つて首を捻^{ひね}ったが別段名案もないものと見えて筆の穂を嘗^なめだした。唇が真黒になつたと見ていると、今度はその下へちよいと丸をかいた。丸の中へ点を二つうつて眼をつける。真中へ小鼻の開いた鼻をかい、真一文字に口を横へ引張った、これでは文章でも俳句でもない。主人も自分で愛想^{あいそ}が尽きたと見えて、そこそこに顔を塗り消してしまった。主人はまた行^{ぎよう}を改める。彼の考によると行きさえ改めれば詩か賛か語か録か何^{なん}かになるだろうとただ宛^{あて}もなく考えているらしい。やがて「天然居士は空間を研究し、論語を読み、焼芋^{やきいも}を食^はい、鼻汁^{はな}を垂らす人である」と言文一致体で一氣呵成^{いっきかせい}に書き流した、何となくごたごたした文章である。それから主人はこれを遠慮なく朗読して、いつになく「ハハハハ面白い」と笑ったが「鼻汁^{はな}を垂らすのは、ちと酷^{こく}だから消そう」とその句

だけへ棒を引く。一本ですむところを二本引き三本引き、奇麗な併行線へいこうせんを描くか、線がほかの行まで食はみ出しても構わず引いている。線が八本並んでもあとの句が出来ないと見えて、今度は筆を捨てて髭ひげを捻ひねつて見る。文章を髭から捻り出して御覧に入れますと云う見幕けんまくで猛烈に捻つてはねじ上げ、ねじ下ろしているところへ、茶の間から妻君さいくんが出て来てぴたりと主人の鼻の先へ坐すわる。「あなたちよつと」と呼ぶ。「なんだ」と主人は水中で銅鑼どらを叩くたたような声を出す。返事が氣に入らないと見えて妻君はまた「あなたちよつと」と出直す。「なんだよ」と今度は鼻の穴へ親指と人さし指を入れて鼻毛をぐつと抜く。「今月はちつと足りませんが……」「足りんはずはない、医者へも薬礼はすましたし、本屋へも先月払ったじゃないか。今月は余らなければならん」とすまして抜き取った鼻毛を天下の奇観のごとく眺ながめ

ている。「それでもあなたが御飯を召し上らんで麵麴^{パン}を御食^{おた}べになつたり、ジャムを御舐^{おな}めになるものですから」「元来ジャムは幾缶舐^{いくかん}めたのかい」「今月は八つ入り^いしましたよ」「八つ？　そんなに舐めた覚えはない」「あなたばかりじゃありません、子供も舐めます」「いくら舐めたつて五六円くらいなものだ」と主人は平気な顔で鼻毛を一本一本丁寧に原稿紙の上へ植付ける。肉が付いているのでぴんと針を立てたごとくに立つ。主人は思わぬ発見をして感じ入った体^{てい}で、ふつと吹いて見る。粘着^{ねんちやくりよく}力が強いので決して飛ばない。「いやに頑固^{がんこ}だな」と主人は一生懸命に吹く。「ジャムばかりじゃないんです、ほかに買わなけりや、ならない物もあります」と妻君は^{おおい}大に不平な^{けしき}気色を両頬^{みなぎ}に漲らす。「あるかも知れないさ」と主人はまた指を突つ込んでぐいと鼻毛を抜く。赤いのや、黒いのや、種々の色^{まじ}が交る中に一本真白な

のがある。大に驚いた様子で穴の開くほど眺めていた主人は指の股へ挟んだまま、その鼻毛を妻君の顔の前へ出す。「あら、いやだ」と妻君は顔をしかめて、主人の手を突き戻す。「ちよつと見ろ、鼻毛の白髪だ」と主人は大に感動した様子である。さすがの妻君も笑いながら茶の間へ這入る。経済問題は断念したらしい。主人はまた天然居士に取り懸る。

鼻毛で妻君を追払った主人は、まずこれで安心と云わぬばかりに鼻毛を抜いては原稿をかこうと焦る体であるがなかなか筆は動かない。「焼芋を食うも蛇足だ、割愛しよう」とついにこの句も抹殺する。「香一炷もあまり唐突だから已めろ」と惜気もなく筆誅する。余す所は「天然居士は空間を研究し論語を読む人である」と云う一句になつてしまった。主人はこれでは何だか簡単過ぎるようだと考えていたが、ええ面倒臭い、文章は御廃

しにして、銘だけにしろと、筆を十文字に揮^{ふる}つて原稿紙の上へ下手な文人画の蘭を勢よくかく。せつかくの苦心も一字残らず落第となつた。それから裏を返して「空間に生れ、空間を究^{きわ}め、空間に死す。空たり間たり天然居士噫^{てんねんこじあゐ}」と意味不明な語を連^{つら}ねているところへ例のごとく迷亭が這^{はい}入つて来る。迷亭は人の家^{うち}も自分の家も同じものと心得ているのか案内も乞^ひわず、ずかずか上つてくる、のみならず時には勝手口から飄^{ひよう}然^{ぜん}と舞い込む事もある、心配、遠慮、氣^き兼^{かね}、苦勞、を生れる時どこかへ振り落した男である。

「また巨人引力かね」と立つたまま主人に聞く。「そう、いつでも巨人引力ばかり書いてはおらんさ。天然居士の墓銘を撰^{せん}しているところなんだ」と大袈裟な事を云^{おおげさ}う。「天然居士と云うなあやはり偶然童子のような戒名かね」と迷亭は不相^{あい}変^{かわ}出^で鱈^{たら}目を云

う。「偶然童子と云うのもあるのかい」「なに有りやしないがまずその見当けんとうだろうと思つていらあね」「偶然童子と云うのは僕の知つたものじゃないようだが天然居士と云うのは、君の知つてる男だぜ」「一体だれが天然居士なんて名を付けてすましているんだい」「例の曾呂崎そろさきの事だ。卒業して大学院へ這入つて空間論と云う題目で研究していたが、あまり勉強し過ぎて腹膜炎で死んでしまった。曾呂崎はあれでも僕の親友なんだからな」「親友でもいいさ、決して悪いと云やしない。しかしその曾呂崎を天然居士に変化させたのは一体誰の所作しよさだい」「僕さ、僕がつけてやつたんだ。元来坊主のつける戒名ほど俗なものはないからな」と天然居士はよほど雅がな名のように自慢する。迷亭は笑いながら「まあその墓碑銘ぼひめいと云う奴を見せ給え」と原稿を取り上げて「何だ……空間に生れ、空間を究めきわ、空間に死す。空たり

間たり天然居士噫あゝ」と大きな声で読み上る。あげ「なるほどこりやあ
善い、天然居士相当のところだ」主人は嬉しそうに「善いだろ
う」と云う。「この墓銘ぼめいを沢庵石たくあんいしへ彫り付けて本堂の裏手ちからいしへ力石
のように抛り出して置くんだね。雅がでいいや、天然居士も浮か
ばれる訳だ」「僕もそうしようと思つてゐるのさ」と主人は至極しごく
真面目に答えたが「僕あちよつと失敬するよ、じき帰るから猫
にでもからかつていてくれ給え」と迷亭の返事も待たず風然ふうぜんと
出て行く。

計らずも迷亭先生の接待掛りを命ぜられて無愛想ぶあいそな顔もして
いられないから、ニヤーニヤーと愛嬌あいぎょうを振り蒔まいて膝ひざの上へ這は
い上あがつて見た。すると迷亭は「イヨー大分肥だいぶんふとつたな、どれ」と
無作法ぶさほうにも吾輩えりがみの襟髪つかを攫つかんで宙へ釣つるす。「あと足をこうぶら
下げては、鼠ねずみは取れそうもない、……どうです奥さんこの猫は

鼠を捕りますかね」と吾輩ばかりでは不足だと見えて、隣りの室の妻君に話しかける。^{へや}「鼠どころじゃございません。御雑煮を食べて踊りをおどるんですもの」と妻君は飛んだところで旧悪を暴く。^{あは}吾輩は宙乗りをしながらも少々極りが悪かった。迷亭はまだ吾輩を卸して^{おろ}くれない。「なるほど踊りでもおどりそうな顔だ。奥さんこの猫は油断のならない相好^{そうごう}ですぜ。昔^{むか}しの草双紙にある猫又^{ねこまた}に似ていますよ」と勝手な事を言いながら、しきりに細君^{さいくん}に話しかける。細君は迷惑そうに針仕事の手をやめて座敷へ出てくる。

「どうも御退屈様、もう帰りましょう」と茶を注ぎ^つ易^かえて迷亭の前へ出す。「どこへ行つたんですかね」「どこへ参るにも断わつて行つた事の無い男ですから分りかねますが、大方御医者へでも行つたんでしょう」「甘木さんですか、甘木さんもあんな病人

に捕ま^{つち}つちや災難ですな」「へえ」と細君は挨拶のしようもないと見えて簡単な答えをする。迷亭は一向頓着^{いつこう}しない。「近頃はど
うです、少しは胃の加減が能^いいんですか」「能^いいか悪いか頓^{とん}と分
りません、いくら甘木さんにかかったつて、あんなにジャムばか
り嘗^なめては胃病の直る訳がないと思います」と細君は先刻^{せんこく}の不
平を暗^{あん}に迷亭に洩^もらす。「そんなにジャムを嘗^なめるんですかまる
で小供のようですね」「ジャムばかりじゃないんで、この頃は胃
病の薬だとか云つて大根卸^{だいこおろ}しを無暗^{むやみ}に嘗^なめますので……」「驚ろ
いたな」と迷亭は感嘆する。「何でも大根卸^{だいこおろし}の中にはジャスター
ゼが有るとか云う話を新聞で読んでからです」「なるほどそれ
でジャムの損害を償^{つぐな}おうと云う趣向^{うつつえ}ですな。なかなか考えてい
らあハハハハ」と迷亭は細君の訴^{うったえ}を聞いて大に愉快な気色^{けしき}であ
る。「この間などは赤ん坊にまで嘗^なめさせまして……」「ジャム

をですか」「いいえ大根卸を……あなた。坊や御父様がうまいものをやるからおいででつて、——たまに小供を可愛がつてくれるかと思うとそんな馬鹿な事ばかりするんです。二三日前には中の娘を抱いて筆笥たんすの上へあげましてね……」「どう云う趣向がありました」と迷亭は何を聞いても趣向づくめに解釈する。「なに趣向も何も有りやしません、ただその上から飛び下りて見ろと云うんですわ、三つや四つの女の子ですもの、そんな御転婆おてんばな事が出来るはずがないです」「なるほどこりや趣向が無さ過ぎましたね。しかしあれで腹の中は毒のない善人ですよ」「あの上腹きえんの中に毒があつちや、辛防しんぼうは出来ませんわ」と細君は大に気焰きえんを揚げる。「まあそんなに不平を云わんでも善いでさあ。こうやって不足なくその日その日が暮らして行かれれば上の分じょうぶんですよ。苦沙弥君くしゃみくんなどは道楽はせず、服装にも構わず、地味に

世帯向きに出来上つた人でさあ」と迷亭は柄がらにない説教を陽気な調子でやつている。「ところがあなた大違いで……」「何か内々でやりますかね。油断のならない世の中だからね」と飄然ひようぜんとふわふわした返事をする。「ほかの道楽はないですが、無暗むやみに読みもしない本ばかり買いましたね。それも善い加減に見計みはからつて買つてくれると善いんですけれど、勝手に丸善へ行つちや何冊でも取つて来て、月末になると知らん顔をしているんですもの、去年の暮なんか、月々のが溜たまつて大変困りました」「なあに書物なんか取つて来るだけ取つて来て構わんですよ。払いをとりに来たら今にやる今にやると云つていりや帰つてしまひませう」「それでも、そういうまでも引張る訳にも参りませんから」と妻君は慥然ぶぜんとしている。「それじゃ、訳を話して書籍費しよじやくひを削減させるさ」「どうして、そんな言ことを云つたつて、なかなか聞くもので

すか、この間などは貴様は学者の妻にも似合わん、毫も書籍の価値を解しておらん、昔し羅馬にこう云う話しがある。後学のため聞いておくと云うんです」「そりや面白い、どんな話しですか」「迷亭は乗気になる。細君に同情を表しているというよりむしろ好奇心に駆られている。「何んでも昔し羅馬に樽金とか云う王様があつて……」「樽金？ 樽金はちと妙ですぜ」「私は唐人の名なんかむずかしくて覚えられませんわ。何でも七代目なんだそうです」「なるほど七代目樽金は妙ですな。ふんその七代目樽金がどうかしましたかい」「あら、あなたまで冷かしては立つ瀬がありませんわ。知つていらつしやるなら教えて下さればいいじゃありませんか、人の悪い」と、細君は迷亭へ食つて掛る。「何冷かすなんて、そんな人の悪い事をする僕じゃない。ただ七代目樽金は振つてると思つてね……ええお待ちなさいよ羅馬の

七代目の王様ですね、こうつとたしかには覚えていないがタークイン・ゼ・プラウドの事でしよう。まあ誰でもいい、その王様がどうしました」「その王様の所へ一人の女が本を九冊持つて来て買ってくれないかと云ったんだそうです」「なるほど」「王様がいくらなら売るといつて聞いたら大変な高い事を云うんですつて、あまり高いもんだから少し負けないかと云うとその女がいきなり九冊の内の三冊を火にくべて焚やいてしまったそうです」「惜しい事をしましたな」「その本の内には予言か何かほかで見られない事が書いてあるんですつて」「へえー」「王様は九冊が六冊になったから少しは価ねも減つたろうと思つて六冊でいくらだと聞くと、やはり元の通り一文も引かないそうです、それは乱暴だと云うと、その女はまた三冊をとつて火にくべたそうです。王様はまだ未練があつたと見えて、余つた三冊をいく

らで売ると聞くと、やはり九冊分のねだんをくれと云うそうです。九冊が六冊になり、六冊が三冊になつても代価は、元の通り一厘も引かない、それを引かせようとすると、残つてる三冊も火にくべるかも知れないので、王様はどうとう高い御金を出して焚^やけ余^{あま}りの三冊を買つたんですつて……どうだこの話で少しは書物のありがた味^みが分つたろう、どうだと力味^{りき}むのですけれど、私にや何がありがたいんだか、まあ分りませんね」と細君は一家の見識を立てて迷亭の返答^{うた}を促^{うな}がす。さすがの迷亭も少々窮したと見えて、袂^{たもと}からハンケチを出して吾輩をじやらしていたが「しかし奥さん」と急に何か考えついたように大きな声を出す。「あんなに本を買つて矢鱈^{やたら}に詰め込むものだから人から少しは学者だとか何とか云われるんですよ。この間ある文学雑誌を見たら苦沙弥君^{くしゃみくん}の評がでていましたよ」「ほんとに?」

と細君は向き直る。主人の評判が気にかかるのは、やはり夫婦と見える。「何とかいてあつたんです」「なあに二三行ばかりですがね。苦沙弥君の文は行雲流水のごとしとありましたよ」細君は少しにこにこして「それぎりですか」「その次にね——出ずるかと思えば忽ち消え、逝いては長えに帰るを忘るとありましたよ」細君は妙な顔をして「賞めたんでしうか」と心元ない調子である。「まあ賞めた方でしょうな」と迷亭は済ましてハンケチを吾輩の眼の前にぶら下げる。「書物は商買道具で仕方もございますまいが、よつぽど偏屈へんくつでしてねえ」迷亭はまた別途の方面から来たなと思つて「偏屈は少々偏屈ですね、学問をするものはどうせあんなですよ」と調子を合わせるような弁護をするような不即不離の妙答をする。「せんだつてなどは学校から帰つてすぐわきへ出るのに着物を着換えるのが面倒だものですから、

あなた外套がいとうも脱がないで、机へ腰を掛けて御飯を食べるのです。
おぜんこたつやぐら御膳を火燵こたつ櫓の上へ乗せまして——私は御櫃おほちを抱かかえて坐つてお
りましたがおかしくつて……」「何だかハイカラの首実検のよう
ですな。しかしそんなところが苦沙弥君の苦沙弥君たるところ
で——とにかく月並つきなみでない」と切せつない褒ほめ方をする。「月並か月
並でないか女には分りませんが、なんぼ何でも、あまり乱暴で
すわ」「しかし月並より好いですよ」と無暗に加勢すると細君は
不満な様子で「一体、月並月並と皆さんが、よくおつしやいま
すが、どんなのが月並なんです」と開き直つて月並の定義を質
問する、「月並ですか、月並と云うと——さようちと説明しにく
いのですが……」「そんな曖昧あいまいなものなら月並だつて好きそうな
ものじゃありませんか」と細君は女人にょにん一流の論理法で詰め寄せ
る。「曖昧じゃありませんよ、ちゃんと分っています、ただ説明

しにくだだけの事でさあ」「何でも自分の嫌いな事を月並と云う
んでしよう」と細君は我知らず穿つた事を云う。迷亭もこうな
ると何とか月並の処置を付けなければならぬ仕儀となる。「奥さ
ん、月並と云うのはね、まず年は二八か二九からぬと言わず、語
らず物思いの間に寝転んでいて、この日や天気晴朗とくると必
ず一瓢を携えて、墨堤に遊ぶ連中を云うんです」「そんな連中があ
るでしようか」と細君は分らんものだから好加減な挨拶をする。
「何だかごたごたして私には分りませんわ」とついに我を折る。
「それじゃ馬琴の胴へメジヨオ・ペンデニスの首をつけて一二年
欧州の空気で包んでおくんですね」「そうすると月並が出来るで
しょうか」迷亭は返事をしないで笑っている。「何そんな手数のか
かかる事をしないで出来ます。中学校の生徒に白木屋の番頭
を加えて二で割ると立派な月並が出来上ります」「そうでしょう

か」と細君は首を捻ひねつたまま納得し兼ねたと云う風情ふうせいに見える。
「君まだいるのか」と主人はいつの間まにやら帰つて来て迷亭の傍そばへ坐すわる。「まだいるのかはちと酷こくだな、すぐ帰るから待つてい給えと言つたじゃないか」「万事あれなんですもの」と細君は迷亭を顧かえりみる。「今君の留守中に君の逸話を残らず聞いてしまつたぜ」「女はとかく多弁でいかん、人間もこの猫くらい沈黙を守る方がいいがな」と主人は吾輩の頭を撫なでてくれる。「君は赤ん坊に大根卸だいこおろしを管なめさしたそうだな」「ふむ」と主人は笑つたが「赤ん坊でも近頃の赤ん坊はなかなか利口だぜ。それ以来、坊や辛からいのはどこと聞くときつと舌を出すから妙だ」「まるで犬に芸を仕込む氣でいるから残酷だ。時に寒月かんげつはもう来そうなのだな」「寒月が来るのかい」と主人は不審な顔をする。「来るんだ。午後一時までに苦沙弥くしゃみの家うちへ来いと端書はがきを出しておいた

から」「人の都合も聞かんで勝手な事をする男だ。寒月を呼んで何をするんだい」「なあに今日のはこっちの趣向じゃない寒月先生自身の要求さ。先生何でも理学協会で演説をするとか云うのでね。その稽古をやるから僕に聴いてくれと云うから、そりやちようどいい苦沙弥にも聞かしてやろうと云うのでね。そこで君の家へ呼ぶ事にしておいたのさ——なあに君はひま人だからちようどいいやね——差支えなんぞある男じゃない、聞くがいさ」と迷亭は独りで呑み込んでいる。「物理学の演説なんか僕にや分らん」と主人は少々迷亭の専断を憤ったもののごとくに云う。「ところがその問題がマグネ付けられたノZZルについてなどと云う乾燥無味なものじゃないんだ。首、縊りの力学と云う脱俗超凡な演題なのだから傾聴する価値があるさ」「君は首を縊り損くなつた男だから傾聴するが好いが僕なんざあ……」「歌舞

伎座で悪寒おかんがするくらいの人間だから聞かれないと云う結論は出そうもないぜ」と例のごとく軽口を叩く。妻君はホホと笑つて主人を顧みながら次の間へ退く。主人は無言のまま吾輩の頭を撫なでる。この時のみは非常に丁寧な撫で方であつた。

それから約七分くらいすると注文通り寒月君が来る。今日は晩に演舌えんぜつをするというので例になく立派なフロックを着て、洗濯カラし立ての白襟そびを聳やかして、男振りを二割方上げて、「少し後おくれまして」と落ちつき払つて、挨拶をする。「さつきから二人で大待ちに待つたところなんだ。早速願おう、なあ君」と主人を見る。主人もやむを得ず「うむ」と生返事なまへんじをする。寒月君はいそがない。「コップへ水を一杯頂戴しましょう」と云う。「いよー本式にやるのか次には拍手の請求とおいでなさるだろう」と迷亭は独りで騒ぎ立てる。寒月君は内隠うちかくしから草稿を取り出

して徐ろに「稽古ですから、御遠慮なく御批評を願います」と前置をして、いよいよ演舌の御浚いを始める。

「罪人を絞罪こうざいの刑に処すると云う事は重にアンegroサクソン民族間に行われた方法でありまして、それより古代に溯さかのぼって考えますと首縊くびくりは重に自殺の方法として行われた者であります。猶太人中あに在つては罪人を石を抛なげつけて殺す習慣であつたそうでございます。旧約全書を研究して見ますといわゆるハンギングなる語は罪人の死体を釣るして野獸または肉食鳥の餌食えじきとする意義と認められます。ヘロドタスの説に従つて見ますと猶太人ユダヤじんはエジプトを去る以前から夜中死骸を曝さらされることを痛く忌いみ嫌つたように思われます。エジプト人は罪人の首を斬つて胴いだけくぎづを十字架に釘付けにして夜中曝し物にしたそうで御座います。波斯人ペルシャじんは……」寒月君首縊りと縁がだんだん遠くなるようだが

大丈夫かい」と迷亭が口を入れる。「これから本論に這入るところですから、少々御辛防ごしんぼうを願います。……さて波斯人はどうかと申しますとこれもやはり処刑には磔はりつけを用いたようでございませす。但し生きているうちに張付けはりつけに致したもののか、死んでから釘を打ったものかその辺へんはちと分りかねます……」「そんな事は分らんでもいいさ」と主人は退屈そうに欠伸あくびをする。「まだいろいろ御話し致したい事もございますが、御迷惑であらつしやいまいしょうから……」「あらつしやいまいしょうより、いらつしやいまいしょうの方が聞きたいよ、ねえ苦沙弥君くしゃみくん」とまた迷亭が咎とがめ立だてをすると主人は「どつちでも同じ事だ」と気のない返事をする。「さていよいよ本題に入りまして弁じます」「弁じます、なんか講釈師の云い草だ。演舌家はもつと上品な詞ことばを使つて貰いたいいね」と迷亭先生また交まぜ返す。「弁じます、が下品なら何と云つ

たらいいでしょう」と寒月君は少々むつとした調子で問いかける。「迷亭のは聴いているのか、交ぜ返しているのか判然しない。寒月君そんな弥次馬やじうまに構わず、さっさとやるが好い」と主人はなるべく早く難関を切り抜けようとする。「むつとして弁じましたる柳かな、かね」と迷亭はあいかわらず飄然ひようぜんたる事を云う。寒月は思わず吹き出す。「真に処刑として絞殺を用いましたのは、私の調べました結果によりますると、オデイセーの十二巻目に出ております。即ち彼のテレマカスすなわがペネロピーの十二人の侍女を絞殺するという条くだりでございます。希臘語ギリシヤゴで本文を朗読しても宜よろしゅうございますが、ちと銜てらうような気味にもなりますからやめに致します。四百六十五行から、四百七十二行を御覧になると分ります」「希臘語うんぬん云々はよした方がいい、さも希臘語が出来ますと云わんばかりだ、ねえ苦沙弥君」「それ

は僕も賛成だ、そんな物欲しそうな事は言わん方が奥床おくゆかしくて好い」と主人はいつになく直ちに迷亭に加担する。両人りやうにんは毫も希臘語が読めないのである。「それではこの両三句は今晚抜く事に致しまして次を弁じ——ええ申し上げます。

この絞殺を今から想像して見ますと、これを執行するに二つの方法があります。第一は、彼のテレマカスかがユーミアス及びフリーシヤスの援たすけを藉かりて縄の一端を柱へ括くくりつけます。そしてその縄の所々へ結び目を穴に開けてこの穴へ女の頭を一つずつ入れておいて、片方の端はじをぐいと引張つて釣し上げたものと見るのです」「つまり西洋洗濯屋のシャツのように女がぶら下つたと見れば好いんだろう」「その通りで、それから第二は縄の一端を前のごとく柱へ括くくり付けて他の一端も始めから天井へ高く釣るのです。そしてその高い縄から何本か別の縄を下げて、そ

れに結び目の輪になつたのを付けて女の頸くびを入れておいて、いざと云う時に女の足台を取りはずすと云う趣向けしきなのです」「たとえて云うと縄なわ暖簾のれんの先へ提灯玉ちようちんだまを釣したような景色と思えば間違はあるまい」「提灯玉と云う玉は見た事がないから何とも申されませんが、もしあるとすればその辺へんのところかと思っています。——それでこれから力学的に第一の場合は到底成立すべきものでないと云う事を証拠立てて御覧に入れます」「面白いな」と迷亭が云うと「うん面白い」と主人も一致する。

「まず女が同距離に釣つなられると仮定します。また一番地面に近い二人の女の首と首を繋つないでいる縄はホリゾンタルと仮定します。そこで $\alpha_1 \alpha_2 \dots \alpha_6$ を縄が地平線と形づくる角度とし、 $T_1 T_2 \dots T_6$ を縄の各部が受ける力と見做みなし、 $T_1 \parallel X$ は縄のもつとも低い部分の受ける力とします。W は勿論もちろん女の体重と御

承知下さい。どうです御分りになりましたか」

迷亭と主人は顔を見合せて「大抵分った」と云う。但しこの大抵と云う度合は兩人が勝手に作ったのだから他人の場合には応用が出来ないかも知れない。「さて多角形に関する御存じの平均性理論によりますと、下の^{しも}ごとく十二の方程式が立ちます。 $T_1 \cos \alpha_1 = T_2 \cos \alpha_2 \dots\dots (1) T_2 \cos \alpha_2 = T_3 \cos \alpha_3 \dots\dots (2) \dots\dots$ 」
「方程式はそのくらいで沢山だろう」と主人は乱暴な事を云う。
「実はこの式が演説の首脳なんですが」と寒月君ははなはだ残り惜し気に見える。「それじゃ首脳だけは逐^おつて伺う事にしようじゃないか」と迷亭も少々恐縮の体^{てい}に見受けられる。「この式を略してしまうとせつかくの力学的研究がまるで駄目になるのですが……」「何そんな遠慮はいらんから、ずんずん略すさ……」
と主人は平気で云う。「それでは仰せに従つて、無理ですが略し

ましよう」「それがよかろう」と迷亭が妙なところで手をぱちぱちと叩く。

「それから英国へ移つて論じますと、ベオウルフの中に絞首架こうしゆかすなわ

即ちガルガと申す字が見えますから絞罪の刑はこの時代から行われたものに違ないと思われます。ブラクストーンの説によるともし絞罪に処せられる罪人が、万一縄の具合で死に切れぬ時は再度ふたたび同様の刑罰を受くべきものだとしてありますが、妙な事にはピヤース・プローマンの中にはたとい仮令兇漢でも二度絞める法はないと云う句があるのです。まあどっちが本当か知りませんが、悪くすると一度で死ねない事が往々実例にあるので。千七百八十六年に有名なフツ・ゼラルドと云う悪漢を絞めた事がありました。ところが妙なはずみで一度目には台から飛び降りるときに縄が切れてしまったのです。またやり直すと今度は縄が

長過ぎて足が地面へ着いたのでやはり死ねなかつたのです。とうとう三返目に見物人が手伝つて往生おうじようさしたと云う話です。「やれやれ」と迷亭はこんなところへくると急に元氣が出る。「本當に死に損ぞこないだな」と主人まで浮かれ出す。「まだ面白い事があります首を縊くると背せいが一寸いっすんばかり延びるそうです。これはたしかに医者が計つて見たのだから間違はありません」「それは新工夫だね、どうだい苦沙弥くしゃみなどはちと釣つて貰つちやあ、一寸延びたら人間並になるかも知れないぜ」と迷亭が主人の方を向くと、主人は案外真面目で「寒月君、一寸くらい背せいが延びて生き返る事があるだろうか」と聞く。「それは駄目きまに極きまつています。釣られて脊髄せきずいが延びるからなんで、早く云うと背が延びると云うより壊こわれるんですからね」「それじゃ、まあ止やめよう」と主人は断念する。

演説の続きは、まだなかなか長くあつて寒月君は首縊りの生理作用にまで論及するはずでいたが、迷亭が無暗に風来坊のよ
うな珍語を挟むの^{はさ}と、主人が時々遠慮なく欠伸^{あくび}をするので、ついに途中でやめて帰つてしまった。その晩は寒月君がいかなる態度で、いかなる雄弁^{ぶべん}を振つたか遠方で起つた出来事の事だから吾輩には知れよう訳がない。

二三日は事もなく過ぎたが、或る日の午後二時頃また迷亭先生は例のごとく空々^{くうくう}として偶然童子のごとく舞い込んで来た。座に着くと、いきなり「君、越智東風の^{おちとうふう}高輪事件^{たかなわじけん}を聞いたかい」と旅順陥落の号外を知らせに来たほどの勢を示す。「知らん、近頃は合^あわんから」と主人は平生^{いっしょ}の通り陰気である。「きようは^{とうふうし}そ
の東風子の失策物語を御報道に及ぼうと思つて忙しいところをわざわざ来たんだよ」「またそんな^{ぎようさん}仰山な事を云う、君は全体

不埒な男だ」「ハハハハ不埒と云わんよりむしろ無埒の方だろう。それだけはちよつと區別しておいて貰わんと名誉に關係するからな」「おんなし事だ」と主人は嘯うそぶいている。純然たる天然居士の再来だ。「この前の日曜とうふうしに東風子が高輪泉岳寺たかなわせんがくじに行つたんだそうだ。この寒いのによせばいいのに——第一今時泉岳寺などへ参るのはさも東京を知らない、田舎者いなかもののようじゃないか」「それは東風の勝手さ。君がそれを留める権利はない」「なるほど権利は正まさにない。権利はどうでもいいが、あの寺内に義士遺物保存会と云う見世物があるだろう。君知つてるか」「うんにゃ」「知らない？　だつて泉岳寺へ行つた事はあるだろう」「いいや」「ない？　こりや驚ろいた。道理で大変東風を弁護すると思つた。江戸つ子が泉岳寺を知らないのは情けなさない」「知らなくても教師は務つとまるからな」と主人はいよいよ天然居士に

なる。「そりゃ好いが、その展覽場へ東風が這入^{はい}つて見物して
いと、そこへ独逸人^{ドイツじん}が夫婦連^{づれ}で来たんだつて。それが最初は日
本語で東風に何か質問したそうだ。ところが先生例の通り独逸
語が使つて見たくてたまらん男だろう。そら二口三口べらべら
やつて見たとき。すると存外うまく出来たんだ——あとで考え
るとそれが災^{わざわい}の本^{もと}さね」「それからどうした」と主人はついに
釣り込まれる。「独逸人が大鷹源吾^{おおたかげんご}の蒔絵^{まきえ}の印籠^{いんろう}を見て、これを
買^かいたい^いが売^うつてくれるだろうかと聞くんだそうだ。その時東
風の返事が面白いじゃないか、日本人は清廉^{くんし}の君子ばかりだか
ら到底駄目^{とうてい}だと云つたんだとき。その辺は大分景氣^{だいぶん}がよかつた
が、それから独逸人の方では恰好^{かつこう}な通弁^{つうべん}を得たつもりでしきり
に聞くそうだ」「何を?」「それがさ、何だか分るくらいなら心配
はないんだが、早口で無暗^{むやみ}に問い掛けるものだから少しも要領

を得ないのさ。たまに分るかと思うと鳶口や掛矢とびぐちの事を聞かれる。西洋の鳶口や掛矢は先生何と翻訳して善いのか習った事が無いんだから弱よわらあね」「もつともだ」と主人は教師の身の上に引き較くらべて同情を表する。「ところへ閑人ひまじんが物珍しそうにぽつぽつ集ってくる。仕舞しまいには東風と独逸人を四方から取り巻いて見物する。東風は顔を赤くしてへどもどする。初めの勢に引き易かえて先生大弱りの体ていさ」「結局どうなったんだい」「仕舞に東風が我慢出来なくなつたと見えてさいなら」と日本語で云つてぐんぐん帰つて来たそうだ、さいならは少し変だ君の国ではさよならをさいならと云うかつて聞いて見たら何やつぱりさよならですが相手が西洋人だから調和を計るために、さいならにしたんだって、東風子は苦しい時でも調和を忘れない男だと感心した」「さいならはいいが西洋人はどうした」「西洋人はあつけに

取られて茫然ぼうぜんと見ていたそうだハハハ面白おもしろいじゃないか」「別段面白い事もないようだ。それをわざわざ報知しらせに来る君の方がよっぽど面白いぜ」と主人は巻煙草まきたばこの灰を火桶ひおけの中へはたき落す。折柄おりから格子戸のベルが飛び上るほど鳴つて「御免なさい」と鋭えいどい女の声がする。迷亭と主人は思わず顔を見合せて沈黙する。

主人のうちへ女客は稀有けうだなと見ていると、かの鋭えいどい声の所有主は縮緬ちりめんの二枚重ねを畳すへ擦り付けながら這入はいつて来る。年は四十の上を少し超こしたくらいだろう。抜け上った生え際はぎわから前髪が堤防工事のように高く聳そびえて、少なくとも顔の長さの二分の一だけ天に向つてせり出している。眼が切り通しの坂くらいな勾配こうばいで、直線に釣るし上げられて左右に対立する。直線と鯨くじらより細いという形容である。鼻だけは無暗に大きい。人の

鼻を盗んで来て顔の真中へ据え付けたように見える。三坪ほどの小庭へ招魂社の石灯籠を移した時のごとく、独りで幅を利かしているが、何となく落ちつかない。その鼻はいわゆる鍵鼻で、ひと度は精一杯高くなって見たが、これではあんまりだと中途から謙遜して、先の方へ行くと、初めの勢に似ず垂れかかつて、下にある唇を覗き込んでいる。かく著るしい鼻だから、この女が物を言うときは口が物を言うと言わんより、鼻が口をきいているとしか思われない。吾輩はこの偉大なる鼻に敬意を表するため、以来はこの女を称して鼻子鼻子と呼ぶつもりである。鼻子は先ず初対面の挨拶を終つて「どうも結構な御住居ですこと」と座敷中を睨め廻わす。主人は「嘘をつけ」と腹の中で言つたまま、ぶかぶか煙草をふかす。迷亭は天井を見ながら「君、ありや雨洩りか、板の木目か、妙な模様が出ているぜ」と暗に主人

を促^{うな}がす。「無論雨の洩りさ」と主人が答えると「結構だなあ」と迷亭がすまして云う。鼻子は社交を知らぬ人達だと腹の中で憤^{いきどお}る。しばらくは三人鼎坐^{ていざ}のまま無言である。

「ちと伺^{うかが}いたい事があつて、参^{まゐ}つたんですが」と鼻子は再び話の口を切る。「はあ」と主人が極めて冷淡に受ける。これではならぬと鼻子は、「実は私はつい御近所で——あの向う横丁の角屋敷^{かどやしき}なんですが」「あの大きな西洋館の倉のあるうちですか、道理であすこには金田^{かねだ}と云う標札^{ひょうさつ}が出ていますな」と主人はようやく金田の西洋館と、金田の倉を認識したようだが金田夫人に対する尊敬^{どあい}の度合は前と同様である。「実は宿^{やど}が出まして、御話を伺^{うかが}うんですが会社の方が大変忙がしいもんですから」と今度は少し利^きいたろうという眼付をする。主人は一向動^{いっこう}じない。鼻子の先刻^{さつき}からの言葉遣いが初対面の女としてはあまり存在^{ぞんざい}過ぎるの

です。に不平なのである。「会社でも一つじゃ無いんです、二つも三つも兼ねているんです。それにどの会社でも重役なんで——多分御存知でしょうが」これでも恐れ入らぬかと云う顔付をする。元来この主人は博士とか大学教授とかいうと非常に恐縮する男であるが、妙な事には実業家に対する尊敬の度は極めて低い。実業家よりも中学校の先生の方がえらいと信じている。よし信じておらんでも、融通の利かぬ性質として、到底実業家、金満家の恩顧を蒙る事は覚束ないと諦らめている。いくら先方が勢力家でも、財産家でも、自分が世話になる見込のないと思ひ切った人の利害には極めて無頓着である。それだから学者社会を除いて他の方面の事には極めて迂濶で、ことに実業界などでは、どこに、だれが何をしているか一向知らん。知つても尊敬畏服の念は毫も起らるのである。鼻子の方では天が下

の一隅にこんな変人がやはり日光に照らされて生活していようとは夢にも知らない。今まで世の中の人間にも大分接して見たが、金田の妻さいですと名乗って、急に取扱いの変らない場合はない、どこの会へ出ても、どんな身分の高い人の前でも立派に金田夫人で通して行かれる、いわんやこんな燻くすぶり返った老書生においてをやで、私の家うちは向う横丁の角屋敷かどやしきですとさえ云えば職業などは聞かぬ先から驚くだろうと予期していたのである。

「金田つて人を知ってるか」と主人は無雑作むぞうさに迷亭に聞く。「知つてるとも、金田さんは僕の伯父の友達だ。この間なんざ園遊会へおいでになつた」と迷亭は真面目な返事をする。「へえ、君の伯父さんてえな誰だい」「牧山男爵まさやまだんしやくさ」と迷亭はいよいよ真面目である。主人が何か云おうとして云わぬ先に、鼻子は急に向き直つて迷亭の方を見る。迷亭は大島紬おおしまつむぎに古渡更紗こわたりさらさか何か重ねて

すましている。「おや、あなたが牧山様の——何でいらつしやいますか、ちつとも存じませんで、はなはだ失礼を致しました。牧山様には始終御世話になると、宿やどで毎々御尊おうわきを致しております」と急に叮嚀ていねいな言葉使をして、おまけに御辞儀までする、迷亭は「へええ何、ハハハハ」と笑っている。主人はあつけ氣に取られて無言で二人を見ている。「たしか娘の縁辺えんぺんの事につきましてもいろいろ牧山さまへ御心配を願いましたそうで……」「へえー、そうですか」とこればかりは迷亭にもちと唐突過とうとつぎたと思えてちよつと魂消たまげたような声を出す。「実は方々からくれくれと申し込はございますが、こちらの身分もあるものでございまして、滅多めったな所ところへも片付けられませんので……」「ごもつともで」と迷亭はようやく安心する。「それについて、あなたに伺おうと思つて上がったんですがね」と鼻子は主人の方を見て急に

存在ぞんざいな言葉に返る。「あなたの所へ水島寒月みずしまかんげつという男が度々たびたび上うへが
るそうですが、あの人は全体どんな風な人でしょう」「寒月の事
を聞いて、何なんにするんです」と主人は苦々にくにくしく云う。「やはり御
令嬢の御婚儀上の関係で、寒月君の性行せいこうの一斑いつぱんを御承知になり
たいという訳でしょう」と迷亭が氣転きを利きかす。「それが伺えれ
ば大變都合が宜よろしいのでございますが……」「それじゃ、御令嬢
を寒月におやりになりたいとおっしゃるんで」「やりたいなんて
えんじや無いんです」と鼻子は急に主人を参らせる。「ほかにも
だんだん口が有るんですから、無理に貰もらつていただかないだつ
て困りやしません」「それじゃ寒月の事なんか聞かんでも好いで
しょう」と主人も躍起やつきとなる。「しかし御隠しなさる訳もないで
しょう」と鼻子も少々喧嘩腰になる。迷亭は双方の間に坐つて、
銀煙管ぎんぎせるを軍配団扇ぐんぱいうちわのように持つて、心の裡うちで八卦はっけよいやよいや

と怒鳴っている。「じゃあ寒月の方では是非貫いたいとても云ったのですか」と主人が正面から鉄砲を喰くらわせる。「貫いたいと云ったんじゃないんですけれども……」「貫いたいだろうと思っていられしやるんですか」と主人はこの婦人鉄砲に限ると覺さとつたらしい。「話しはそんなに運んでるんじゃないやありませんが——寒月さんだつて満更嬉まんざらしくない事もないでしょう」と土俵際で持ち直す。「寒月が何かその御令嬢に恋着れんちやくしたというような事でもありますか」あるなら云つて見ろと云う権幕けんまくで主人は反そり返る。「まあ、そんな見当けんとうでしようね」今度は主人の鉄砲が少しも功を奏しない。今まで面白おもしろげ氣ぎに行司ぎようじ気取りで見物していた迷亭も鼻子の一言いちごんに好奇心を挑撥ちやうはつされたものと見えて、煙管きせるを置いて前へ乗り出す。「寒月が御嬢さんに付け文ぶみでもしたんですか、こりや愉快だ、新年になつて逸話ふがまた一つ殖ふえて話しの好材料になる」

と一人で喜んでゐる。「付け文じゃないんです、もつと烈しいんです、御二人とも御承知じゃありませんか」と鼻子は乙おつにからまつて来る。「君知つてゐるか」と主人は狐付きのような顔をして迷亭に聞く。迷亭も馬鹿ばか気げた調子で「僕は知らん、知つていりや君だ」とつまらんとところで謙遜けんそんする。「いえ御両人共御存じの事ですよ」と鼻子だけ大得意である。「へえー」と御両人は一度に感じ入る。「御忘れになつたら私わたしから御話をしましょう。去年の暮向島の阿部さんの御屋敷で演奏会があつて寒月さんも出掛けたじゃありませんか、その晩歸りに吾妻橋あずまばしで何かあつたでしょう——詳しい事は言いますまい、当人の御迷惑になるかも知れませんから——あれだけの証拠がありや充分だと思ひますが、どんなものでしょう」と金剛石ダイヤモンド入りの指環はまの嵌はつた指を、膝の上へ併ならべて、つんと居ずまいを直す。偉大なる鼻がますます

す異彩を放つて、迷亭も主人も有れども無きがごとき有様である。

主人は無論、さすがの迷亭もこの不意撃には胆を抜かれたものと見えて、しばらくは呆然として瘡の落ちた病人のように坐っていたが、驚愕の箍がゆるんでだんだん持前の本態に復すると共に、滑稽と云う感じが一度に呐喊してくる。両人は申し合せたごとく「ハハハハハ」と笑い崩れる。鼻子ばかりは少し当てがはずれて、この際笑うのははなはだ失礼だと両人を睨みつける。「あれが御嬢さんですか、なるほどこりやいい、おつしやる通りだ、ねえ苦沙弥君、全く寒月はお嬢さんを恋つてるに相違ないね……もう隠したつてしようがないから白状しようじゃないか」「ウフン」と主人は云つたままである。「本当に御隠しなさつてもいけませんよ、ちゃんと種は上つてるんですからね」

と鼻子はまた得意になる。「こうなりや仕方がない。何でも寒月君に関する事実は御参考のために陳述するさ、おい苦沙弥君、君が主人だのに、そう、にやにや笑っていては埒があかんじやないか、実に秘密というものは恐ろしいものだねえ。いくら隠しても、どこからか露見するからな。——しかし不思議と云えば不思議ですねえ、金田の奥さん、どうしてこの秘密を御探知になったんです、実に驚ろきますな」と迷亭は一人で喋舌しゃべる。「私わたしの方だつて、ぬかりはありませんやね」と鼻子はしたり顔をする。「あんまり、ぬかりが無さ過ぎるようですぜ。一体誰に御聞きになったんです」「じきこの裏にいる車屋の神かみさんからです」「あの黒猫のいる車屋ですか」と主人は眼を丸くする。「ええ、寒月さんの事じゃ、よつぽど使いましたよ。寒月さんが、ここへ来る度に、どんな話しをするかと思つて車屋の神さんを頼

んで一々知らせて貰うんです」「そりや苛い^{ひど}」と主人は大きな声を出す。「なあに、あなたが何をなさろうとおっしゃろうと、それに構つてゐるんじゃないんです。寒月さんの事だけですよ」「寒月の事だつて、誰の事だつて——全体あの車屋の神さんは気に食わん奴だ」と主人は一人怒り出す。^{おこ}「しかしあなたの垣根のそとへ来て立つてゐるのは向うの勝手じゃありませんか、話しが聞えてゐるけりやもつと小さい声でなさるか、もつと大きなうちへ御這入^{おはい}んなさるがいいでしょう」と鼻子は少しも赤面した様子が^{ない}。「車屋ばかりじゃありません。新道^{しんみち}の二絃琴^{にげんきん}の師匠からも大分^{だいぶん}いろいろな事を聞いています」「寒月の事をですか」「寒月さんばかりの事じゃありません」と少し^{すこ}凄^{すこ}い事を云う。主人は恐れ入るかと思うと「あの師匠はいやに上品ぶつて自分だけ人間らしい顔をしている、馬鹿野郎です」「憚^{はばか}り様^{さま}、女ですよ。

野郎は御門違おかどちがいです」と鼻子の言葉使いはますます御里おさとをあらわして来る。これではまるで喧嘩をしに來たようなものであるが、そこへ行くと迷亭はやはり迷亭でこの談判を面白そうに聞いている。鉄拐てつかい仙人せんじんが軍鷄しやもの蹴け合あいを見るような顔をして平気で聞いている。

悪口あっこうの交換では到底鼻子の敵でないと自覺した主人は、しばらく沈黙を守るのやむを得ざるに至らしめられていたが、ようやく思い付いたか「あなたは寒月の方から御嬢さんに恋着こわしたようにばかりおっしゃるが、私わたしの聞きいたんじや、少し違いますぜ、ねえ迷亭君」と迷亭の救いを求める。「うん、あの時の話しじや御嬢さんの方が、始め病氣になつて——何うわごとだか謔語をいつたように聞いたね」「なにそんな事はありません」と金田夫人は判然たる直線流の言葉使いをする。「それでも寒月はたしかに○

○博士の夫人から聞いたと云つていましたぜ」「それがこつちの手なんですか、○○博士の奥さんを頼んで寒月さんの氣を引いて見たんですかね」「○○の奥さんは、それを承知で引き受けたんですか」「ええ。引き受けて貰うたつて、ただじゃ出来ませんやね、それやこれやでいろいろ物を使つてゐるんですから」「是非寒月君の事を根堀り葉堀り御聞きにならなくつちや御歸りにならないと云う決心ですかね」と迷亭も少し氣持を悪くしたと見えて、いつになく手障りのあらい言葉を使う。「いいや君、話したつて損の行く事じゃなし、話そうじゃないか苦沙弥君——奥さん、私でも苦沙弥でも寒月君に関する事実で差支えのない事は、みんな話しますからね、——そう、順を立ててだんだん聞いて下さると都合がいいですね」

鼻子はようやく納得してそろそろ質問を呈出する。一時荒立

てた言葉使いも迷亭に対してはまたものごとく丁寧になる。「寒月さんも理学士だそうですが、全体どんな事を専門にしているのぞいます」「大学院では地球の磁気の研究をやっています」と主人が真面目に答える。不幸にしてその意味が鼻子には分らんものだから「へえー」とは云つたが怪訝な顔を^{けげん}している。「それを勉強すると博士になれましょうか」と聞く。「博士にならなければやれないとおっしゃるんですか」と主人は不愉快そうに尋ねる。「ええ。ただの学士じゃね、いくらでもありますからね」と鼻子は平気で答える。主人は迷亭を見ていよいよいよやな顔をする。「博士になるかならんかは僕等も保証する事が出来んから、ほかの事を聞いていただく事にしよう」と迷亭もあまり好い機嫌ではない。「近頃でもその地球の——何かを勉強しているのぞいますようか」「^{にさんちまえ}二三日前は首縊りの力学と云う

研究の結果を理学協会で演説しました」と主人は何の気も付かずに云う。「おやいやだ、首、縊り、だなんて、よつぽど変人ですねえ。そんな首、縊り、や何かやつてたんじゃ、とても博士にはなれますまいね」「本人が首を縊^くつちやあむずかしいですが、首、縊り、の、力、学なら成れないとも限^{うかが}らんです」「そうでしょうか」と今度は主人の方を見て顔色を窺^{うかが}う。悲しい事に力、学と云う意味がわからんので落ちつきかねている。しかしこれしきの事を尋ねては金田夫人の面目に關すると思つてか、ただ相手の顔色で八卦^{はつげ}を立てて見る。主人の顔は渋い。「そのほかになにか、分り易^{やす}いものを勉強しておりますまいか」「そうですね、せんだつて団、栗^{どんぐり}の、スタビリチーを論じて併せて、天体の運行に及ぶと云う論文を書いた事があります」「団、栗^{どんぐり}なんぞでも大学校で勉強するものでしょうか」「さあ僕も素人^{しろウト}だからよく分らんが、何しろ、寒月君

がやるくらいなんだから、研究する価値があると見えますな」と迷亭はすまして冷かす。鼻子は学問上の質問は手に合わんと断念したものと見えて、今度は話題を転ずる。「御話は違いますが——この御正月に椎茸しいたけを食べて前歯を二枚折つたそうじゃございませんか」「ええその欠けたところに空也餅くうやもちがくつ付いていましてね」と迷亭はこの質問こそ吾輩なわばりうち張内だと急に浮かれ出す。「色気のない人じゃございせんか、何だつて楊子ようじを使わないんでしよう」「今度逢あつたら注意しておきましょう」と主人がくすくす笑う。「椎茸で歯いがかけるくらいじゃ、よほど歯しやうの性が悪いと思われませんが、如何いなものでしょう」「善いとは言われますまいな——ねえ迷亭」「善い事はないがちよつと愛嬌あいぎやうがあるよ。あれぎり、まだ填つめないところが妙だ。今だに空也餅引掛ひっかけどころ所になつてゐるなあ奇観だぜ」「歯を填める小遣こづかいがないので欠けなり

にしておくんですか、または物好きで欠けなりにしておくんでしょうか」「何も永く前齒欠成を名乗る訳でもないでしょうから
まえばかけなり
御安心なさいよ」と迷亭の機嫌はだんだん回復してくる。鼻子はまた問題を改める。「何か御宅に手紙かなんぞ当人の書いたものでもございますならちよつと拝見したいもんでございますが」「はがき端書なら沢山あります、御覧なさい」と主人は書斎から三四十枚持つて来る。「そんなに沢山拝見しないでも——その内の二三枚だけ……」「どれどれ僕が好いのを撰よつてやろう」と迷亭先生は「これなざ面白いでしょう」と一枚の絵葉書を出す。「おや絵もかくんでございますか、なかなか器用ですね、どれ拝見しましょう」と眺めていたが「あらいやだ、狸たぬきだよ。何だつて撰りに撰つて狸なんぞかくんでしょうね——それでも狸と見えるから不思議だよ」と少し感心する。「その文句を読んで御覧なさ

い」と主人が笑いながら云う。鼻子は下女が新聞を読むように読み出す。「旧暦の歳としの夜よ、山の狸が園遊会をやつて盛さかんに舞踏します。その歌に曰いわく、来こいさ、としの夜よで、御山婦美おやまふみも来くまいぞ。スッポポポンノポン」「何ですこりや、人を馬鹿にしているじゃございませんか」と鼻子は不平ていの体である。「この天女てんによは御氣に入りませんか」と迷亭がまた一枚出す。見ると天女が羽衣はごろもを着て琵琶びわを弾ひいている。「この天女の鼻が少し小さ過ぎるようです」「何、それが人並ですよ、鼻より文句を読んで御覧なさい」文句にはこうある。「昔むかしある所に一人の天文学者がありました。ある夜よいつものように高い台に登つて、一心に星を見ていますと、空に美しい天女が現われ、この世では聞かれぬほどの微妙な音楽を奏し出したので、天文学者は身に沁しむ寒さも忘れて聞き惚ほれてしまいました。朝見るとその天文学者の死骸しがい

に霜が真白に降っていました。これは本当の嘶はなしだと、あのうそ
つきの爺じいやが申しました」「何の事ですこりや、意味も何もない
じやありませんか、これでも理学士で通るんですかね。ちつと
文芸倶楽部でも読んだらよさそうなものですがねえ」と寒月君
さんざんにやられる。迷亭は面白半分に「こりやどうです」と三
枚目を出す。今度は活版で帆懸舟ほかけぶねが印刷してあつて、例のごと
くその下に何か書き散らしてある。「よべの泊りとまの十六小女郎じゅうろくこじよう、
親がないとて、荒磯ありその千鳥、さよの寢覚ねざめの千鳥に泣いた、親は
船乗り波の底」「うまいのねえ、感心だ事、話せるじやありません
か」「話せますかな」「ええこれなら三味線に乘りますよ」「三
味線に乗りや本物だ。こりや如何いかです」と迷亭は無暗むやみに出す。
「いえ、もうこれだけ拝見すれば、ほかのは沢山で、そんなに
野暮やぼでないんだと云う事は分りましたから」と一人で合点して

いる。鼻子はこれで寒月に関する大抵の質問を卒おえたものと見えて、「これははなはだ失礼を致しました。どうか私の参まゐつた事は寒月さんへは内々に願います」と得手えて勝手な要求をする。寒月の事は何でも聞かなければならないが、自分の方の事は一切寒月へ知らしてはならないと云う方針と見える。迷亭も主人も「はあ」と氣のない返事をする。「いずれその内御礼は致しますから」と念を入れて言いながら立つ。見送りに出た兩人ふたりが席へ返るや否や迷亭が「ありや何だい」と云うと主人も「ありや何だい」と双方から同じ問をかける。奥の部屋で細君こはらが唸こらえ切れなかったと見えてクツクツ笑う声が聞える。迷亭は大きな声を出して「奥さん奥さん、月並の標本が来きましたぜ。月並もあのくらいになるとなかなか振ふるつていますなあ。さあ遠慮はいらんから、存分御笑いなさい」

主人は不満な口氣で「第一氣に喰わん顔だ」と惡らしそうに云うと、迷亭はすぐ引きうけて「鼻が顔の中央に陣取つて乙に構えているなあ」とあとを付ける。「しかも曲つていらあ」「少し猫背だね。猫背の鼻は、ちと奇抜過ぎる」と面白そうに笑う。
「夫を剋する顔だ」と主人はなお口惜しそうである。「十九世紀で売れ残つて、二十世紀で店曝しに逢うと云う相だ」と迷亭は妙な事ばかり云う。ところへ妻君が奥の間から出て来て、女だけに「あんまり悪口をおつしやると、また車屋の神さんにいつけられますよ」と注意する。「少しいづける方が葉ですよ、奥さん」「しかし顔の讒訴などをなさるのは、あまり下等ですわ、誰だつて好んであんな鼻を持つてる訳でもありませんから——それに相手が婦人ですからね、あんまり苛いわ」と鼻子の鼻を弁護すると、同時に自分の容貌も間接に弁護しておく。「何ひどい

ものか、あんなのは婦人じゃない、愚人だ、ねえ迷亭君」「愚人かも知れんが、なかなかえら者だ、大分引き搔かかれたじやないか」「全体教師を何と心得ているんだらう」「裏の車屋くらいに心得ているのさ。ああ云う人物に尊敬されるには博士になるに限るよ、一体博士になっておかんのが君の不了見ふりようけんさ、ねえ奥さん、そうでしょう」と迷亭は笑いながら細君を顧かえりみる。「博士なんて到底駄目ですよ」と主人は細君にまで見離される。「これでも今になるかも知れん、軽蔑けいべつするな。貴様なぞは知るまいが昔むかしアイソクラチスと云う人は九十四歳で大著述をした。ソフォクリスが傑作を出して天下を驚かしたのは、ほとんど百歳の高齢だった。シモニジスは八十で妙詩を作った。おれだって……」「馬鹿馬鹿しいわ、あなたのような胃病でそんなに永く生きられるものですか」と細君はちゃんと主人の寿命を予算している。

「失敬な、——甘木さんへ行つて聞いて見ろ——元来御前がこんな皺しわくちや苦茶な黒木綿くろもめんの羽織や、つぎだらけの着物を着せておくから、あんな女に馬鹿にされるんだ。あしたから迷亭の着ているような奴を着るから出しておけ」「出しておけて、あんな立派な御召おめしはござんせんわ。金田の奥さんが迷亭さんに叮嚀とうれいになったのは、伯父さんの名前を聞いてからですよ。着物の咎とがじやございませぬ」と細君うまく責任を逃のがれる。

主人は伯父おやさんと云う言葉を聞いて急に思い出したように「君に伯父があると云う事は、今日始めて聞いた。今までついに噂うわさをした事がないじゃないか、本当にあるのかい」と迷亭に聞く。迷亭は待つてたと云わぬばかりに「うんその伯父さ、その伯父が馬鹿に頑物がんぶつでねえ——やはりその十九世紀から連綿れんめんと今日まで生き延びているんだがね」と主人夫婦を半々に見る。「オホホ

ホホホ面白い事ばかりおつしやつて、どこに生きていらつしやるんです」「静岡に生きてますがね、それがただ生きてるんじや無いです。頭にちよん髻まげを頂いて生きてるんだから恐縮しまさあ。帽子を被かぶれてえと、おれはこの年になるが、まだ帽子を被るほど寒さを感じた事はないと威張ってるんです——寒いから、もつと寝ねていらつしやいと云うと、人間は四時間寝れば充分だ。四時間以上寝るのは贅ぜい沢たくの沙汰だつて朝暗いうちから起きてくるんです。それでね、おれも睡眠時間を四時間に縮めるには、永年修業をしたもんだ、若いうちはどうしても眠ねむたくていかなんだが、近頃に至つて始めて随处しよきよう任意の庶境いに入つてはなはだ嬉しいと自慢するんです。六十七になつて寝られなくなるなあ当り前こつきでさあ。修業も糸瓜へちまも入いつたものじゃないのに当人は全く克己こつきの力で成功したと思つてゐるんですからね。それで

外出する時には、きつと鉄扇てつせんをもつて出るんですがね」「なににするんだい」「何にするんだか分らない、ただ持つて出るんだね。まあステッキの代りくらいに考えてるかも知れんよ。ところがせんだつて妙な事がありましてね」と今度は細君の方へ話しかける。「へえー」と細君が差し合あひの合あいのない返事をする。「此年ことしの春突然手紙を寄こして山高帽子とフロックコートを至急送れと云うんです。ちよつと驚ろいたから、郵便で問い返したところろが老人自身が着ると云う返事が来しました。二十三日に静岡で祝捷会しゅくけつかいがあるからそれまでに間まに合うように、至急調達しろと云う命令なんです。ところがおかしいのは命令中にこうあるんです。帽子は好い加減な大きさを買つてくれ、洋服も寸法を見計らつて大丸へ注文してくれ……」「近頃は丸でも洋服を仕立てるのかい」「なあに、先生、白木屋しろぎやと間違えたんだあね」「寸

法を見計つてくれたつて無理じゃないか」「そこが伯父の伯父たるところさ」「どうした?」「仕方がないから見計らつて送つてやつた」「君も乱暴だな。それで間に合つたのかい」「まあ、どうにか、こうにかおつついたんだろう。国の新聞を見たら、当日牧山翁は珍らしくフロックコートにて、例の鉄扇てっせんを持ち……」「鉄扇だけは離さなかつたと見えるね」「うん死んだら棺の中へ鉄扇だけは入れてやろうと思つているよ」「それでも帽子も洋服も、うまい具合に着られて善かつた」「ところが大間違さ。僕も無事に行つてありがたいと思つてると、しばらくして国から小包が届いたから、何か礼でもくれた事と思つて開けて見たら例の山高帽子さ、手紙が添えてあつてね、せっかく御求め被下候くだされそうらえども少々大きく候間、帽子屋へ御遣わしの上、御縮め被下度候くだされたくそうら。縮め賃は小為替こがわせにて此方より御送可申上候とあるのさ」「なる

ほど迂濶^{うかつ}だな」と主人は己^{おの}れより迂濶なもの天下にある事を
発見^{おおい}して大に満足^{てい}の体に見える。やがて「それから、どうした」と聞^きく。「どうするつたつて仕方がないから僕が頂戴^{かぶ}して被^{かぶ}つて
いらあ」「あの帽子かあ」と主人がにやにや笑う。「その方^{かた}が男
爵でいらつしやるんですか」と細君が不思議そうに尋ねる。「誰
がです」「その鉄扇の伯父さまが」「なあに漢学者でさあ、若い時
聖堂^{せいどう}で朱子学^{しゅしきがく}か、何かにこり固^こまったものだから、電気灯の下で
恭^{うやうや}しくちよん髻^{まげ}を頂^まいでいるんです。仕方がありません」とや
たらに頤^{あご}を撫^なで廻す。「それでも君は、さっきの女に牧山男爵と
云ったようだぜ」「そうおつしやいましたよ、私も茶の間で聞い
ておりました」と細君もこれだけは主人の意見に同意する。「そ
うでしたかなアハハハハ」と迷亭は訳^{わけ}もなく笑う。「そりや嘘^{うそ}
ですよ。僕に男爵の伯父がありや、今頃は局長くらいになつて

いまさあ」と平気なものである。「何だか変だと思った」と主人は嬉しそうな、心配そうな顔付をする。「あらまあ、よく真面目であんな嘘が付けますねえ。あなたもよつぽど法螺ほらが御上手でいらつしやる事」と細君は非常に感心する。「僕より、あの女の方が上うわ手てでさあ」「あなただつて御負けなさる氣遣きづかいはありません」「しかし奥さん、僕の法螺は単なる法螺ですよ。あの女のは、みんな魂胆があつて、曰いわく付きの嘘ですぜ。たちが悪いです。猿智慧さるぢえから割り出した術数と、天来の滑稽趣味と混同されちゃ、コメディの神様も活眼の士なきを嘆ぜざるを得ざる訳に立ち至りますからな」主人は俯目ふしめになつて「どうだか」と云う。妻君は笑いながら「同じ事ですわ」と云う。

吾輩は今まで向う横丁へ足を踏み込んだ事はない。角屋敷かどやしきの金田とは、どんな構えか見た事は無論ない。聞いた事さえ今が

始めてである。主人の家で実業家が話頭に上った事は一返もないので、主人の飯を食う吾輩までがこの方面には単に無関係なるのみならず、はなはだ冷淡であつた。しかるに先刻図らずも鼻子の訪問を受けて、余所ながらその談話を拝聴し、その令嬢の艶美を想像し、またその富貴、権勢を思い浮べて見ると、猫ながら安閑として椽側に寝転んでいらなくなつた。しかのみならず吾輩は寒月君に対してはなはだ同情の至りに堪えん。先方では博士の奥さんやら、車屋の神さんやら、二絃琴の天璋院まで買収して知らぬ間に、前齒の欠けたのさえ探偵しているのに、寒月君の方ではただニヤニヤして羽織の紐ばかり気にしているのは、いかに卒業したての理学士にせよ、あまり能がなさ過ぎる。と言つて、ああ云う偉大な鼻を顔の中に安置している女の事だから、滅多な者では寄り付ける訳の者ではない。こう

云う事件に關しては主人はむしろ無頓着でかつあまりに錢ぜにがなさ過ぎる。迷亭は錢に不自由べんぎはしないが、あんな偶然童子かわいそうだから、寒月に援たすけを与える便宜べんぎは尠すくなかろう。して見ると可哀相かわいそうなのは首縊くりの、力学りくがくを演説する先生ばかりとなる。吾輩でも奮発して、敵城へ乗り込んでその動静を偵察してやらなくては、あまり不公平である。吾輩は猫だけれど、エピクテタスを読んで机の上へ叩きつけるくらいな学者の家に寄寓きぐうする猫で、世間一般ちひようの痴猫ぐびよう、愚猫ぐびようとは少しく撰せんを殊ことにしている。この冒険をあえてするくらいの義侠心もとは固より尻尾しつぽの先に畳み込んである。何も寒月君に恩になつたと云う訳もないが、これはただに個人のためにする血氣躁狂けつきそうきようの沙汰ではない。大きく云えば公平を好み中庸を愛する天意を現實にする天晴あつぱれな美挙だ。人の許諾へを経ずして吾妻橋事件などを至る処に振り廻まわす以上は、人の軒下に

犬を忍ばして、その報道を得々として逢う人に吹聴する以上は、
車夫、馬丁ばてい、無頼漢ぶらいかん、ごろつき書生ひやといばあ、日雇婆かえり、産婆、妖婆ようば、按摩あんま、
頓馬とんまに至るまでを使用して国家有用の材に煩はんを及ぼして顧みざ
る以上は——猫にも覚悟がある。幸い天気も好い、霜解しもどけは少々
閉口するが道のためには一命もすてる。足の裏へ泥が着いて、
椽側えんがわへ梅の花の印を押すくらいな事は、ただ御三おさんの迷惑にはな
るか知れんが、吾輩の苦痛とは申されない。翌日あすとも云わずこ
れから出掛けようと勇猛精進ゆうもうしやうじんの大決心を起して台所まで飛んで
出たが「待てよ」と考えた。吾輩は猫として進化の極度に達し
ているのみならず、脳力の発達においてはあえて中学の三年生
に劣らざるつもりであるが、悲しいかな咽喉のどの構造だけはどこ
までも猫なので人間の言語が饒舌しゃべれない。よし首尾よく金田邸
へ忍び込んで、充分敵の情勢を見届けたところで、肝心かんじんの寒月

君に教えてやる訳に行かない。主人にも迷亭先生にも話せない。話せないとすれば土中にある金剛石ダイヤモンドの日を受けて光らぬと同じ事で、せつかくの智識も無用の長物となる。これは愚だぐ、やめようかしらんと上り口で佇たたずんで見た。

しかし一度思い立った事を中途でやめるのは、白雨ゆうだちが来るかと待っている時黒雲共隣国ともへ通り過ぎたように、何となく残り惜しい。それも非がこつちにあれば格別だが、いわゆる正義のため、人道のためなら、たとい無駄死むだじにをやるまでも進むのが、義務を知る男児の本懐であろう。無駄骨を折り、無駄足を汚よごすくらいは猫として適當のところである。猫と生れた因果いんがで寒月、迷亭、苦沙弥諸先生と三寸の舌頭ぜつとうに相互の思想を交換する技倆ぎりょうはないが、猫だけに忍びの術は諸先生より達者である。他人の出来ぬ事を成就じょうじゆするのはそれ自身において愉快である。吾われ一箇

でも、金田の内幕を知るのは、誰も知らぬより愉快である。人に告げられんでも人に知られているなと云う自覚を彼等に与うだけが愉快である。こんなに愉快が続々出て来ては行かずにはいられない。やはり行く事に致そう。

向う横町へ来て見ると、聞いた通りの西洋館が角地面かどじめんを吾物顔わがものがおに占領している。この主人もこの西洋館のごとく傲慢ごうまんに構えているんだらうと、門を這入はいつてその建築を眺めながて見たがただ人を威圧しようと、二階作りが無意味に突つ立つてゐるほかに何等の能もない構造であつた。迷亭のいわゆる月並つきなみとはこれであろうか。玄関を右に見て、植込の中を通り抜けて、勝手口へ廻る。さすがに勝手は広い、苦沙弥先生の台所の十倍はたしかにある。せんだつて日本新聞に詳しく書いてあつた大隈伯おおくまはくの勝手にも劣るまいと思うくらい整然とぴかぴかしている。「模範勝

手だな」と這^{はい}入り込む。見ると漆喰^{しつくい}で叩き上げた二坪ほどの土間に、例の車屋の神^{かみ}さんが立ちながら、御飯^{ごはん}焚^たきと車夫を相手にしきりに何か弁^{へん}じている。こいつは剣呑^{けんおん}だと水桶^{みずおけ}の裏へかくれる。「あの教師あ、うちの旦那の名を知らないのかね」と飯焚^{めしたき}が云う。「知らねえ事があるもんか、この界限^{かいがい}で金田さんの御屋敷を知らなけりや眼も耳もねえ片輪^{かたわ}だあな」これは抱え車夫の声である。「なんとも云えないよ。あの教師と来たら、本よりほかに何にも知らない変人なんだからねえ。旦那の事を少しでも知つてりや恐れるかも知れないが、駄目だよ、自分の小供^{こども}の歳^{とし}さえ知らないんだもの」と神さんが云う。「金田さんでも恐れねえかな、厄介^{とうへん}な唐変木^{ぼく}だ。構^{かま}あ事^{こと}あねえ、みんなで威嚇^{おど}かしてやろうじゃねえか」「それが好いよ。奥様の鼻が大きい過ぎるの、顔が気に喰^くわないのつて——そりやあ酷^{ひど}い事を云うんだよ。自

分の面つらあ今戸焼いまだやきの狸たぬき見たような癖に——あれで一人前いちにんまえだと思つてゐるんだからやれ切れないじゃないか」「顔ばかりじゃない、手拭てぬぐいを提さげて湯に行くところからして、いやに高慢ちきじゃないか。自分くらいえらい者は無いつもりでゐるんだよ」と苦沙弥先生は飯焚おおいにも大に不人望である。「何でも大勢であいつの垣根そばの傍へ行つて悪口をさんざんいつてやるんだね」「そうしたらきつと恐れ入るよ」「しかしこっちの姿を見せちゃ面白くねえから、声だけ聞かして、勉強の邪魔をした上に、出来るだけじらしてやれつて、さつき奥様が言い付けておいでなすつたぜ」「そりや分つてゐるよ」と神さんは悪口の三分の一を引き受けると云う意味を示す。なるほどこの手合が苦沙弥先生を冷やかしに来るなと三人の横を、そつと通り抜けて奥へ這入る。

猫の足はあれども無きがごとし、どこを歩いてても不器用な音

のした試しがない。空を踏むがごとく、雲を行くがごとく、水中
 に磬けいを打つがごとく、洞裏とうりに瑟しつを鼓するがごとく、醍醐だいごの妙味
 を嘗なめて言詮ごんせんのほかれいだんに冷暖れいだんを自知じちするがごとし。月並な西洋館
 もなく、模範勝手もなく、車屋の神さんも、権助ごんすけも、飯焚いひも、御
 嬢ぢやうさまも、仲働なかばたらきも、鼻子夫人も、夫人の旦那様もない。行きた
 いところへ行つて聞きたい話を聞いて、舌を出し尻尾しつぽを掉ふつて、
 髭ひげをぴんと立てて悠々ゆうゆうと帰るのみである。ことに吾輩はこの道
 に掛けては日本一の堪能かんのうである。草双紙くさざうしにある猫又ねこまたの血脈を受
 けておりはせぬかと自ら疑みずかうくらいである。蟪がまの額ひたいには夜光やこうの
 明珠めいしゆがあると云うが、吾輩の尻尾には神祇しんぎ祇教しやつき恋無常こいむじようは無論の
 事、満天下の人間を馬鹿にする一家相伝いつかそうでんの妙薬が詰め込んであ
 る。金田家の廊下を人の知らぬ間まに横行するくらいは、仁王様
 が心太こころてんを踏み潰つぶすよりも容易である。この時吾輩は我ながら、

わが力量に感服して、これも普段大事にする尻尾の御蔭だなど
 気が付いて見るとただ置かれない。吾輩の尊敬する尻尾大明神
 を礼拝らいはいしてニヤン運長久を祈らばやと、ちよつと低頭して見た
 が、どうも少し見当けんとうが違ふようである。なるべく尻尾の方を見
 て三拝しなければならん。尻尾の方を見ようと身体を廻すと尻
 尾も自然と廻る。追付おっつけこうと思つて首をねじると、尻尾も同じ
 間隔をとつて、先へ馳かけ出す。なるほど天地玄黄てんちげんこうを三寸裏うりに収
 めるほどの靈物だけあつて、到底吾輩の手に合わない、尻尾を
 環めぐる事七度ななたび半にして草臥くたびれたからやめにした。少々眼がくら
 む。どこに在るのだからちよつと方角が分らなくなる。構うもの
 かと滅茶苦茶にあるき廻る。障子の裏うちで鼻子の声がする。ここ
 だと立ち留まつて、左右の耳をはすに切つて、息を凝こらす。「貧
 乏教師の癖に生意氣じゃありませんか」と例の金切りかなき声ごえを振り

立てる。「うん、生意気な奴だ、ちと懲らしめのためにいじめてやろう。あの学校にや国のものもいるからな」「誰がいるの？」
「津木^{つき}ピン助^{すけ}や福地^{ふくち}キシヤゴがいるから、頼んでからかわしてやろう」吾輩は金田君の生国^{しやうごく}は分らんが、妙な名前の人間ばかり揃^{そろ}った所だと少々驚いた。金田君はなお語をついで、「あいつは英語の教師かい」と聞く。「はあ、車屋の神さんの話では英語のリードルか何か専門に教えるんだって云います」「どうせ碌^{ろく}な教師じゃあるめえ」あるめえにも慚^{ずく}なからず感心した。「この間ピン助に遇^あったら、私の学校^{わたし}にや妙な奴がおります。生徒から先生番茶は英語で何と云いますと聞かれて、番茶はSavage teaであると真面目に答えたんで、教員間の物笑いとなっています、どうもあんな教員があるから、ほかのものの、迷惑になつて困りますと云ったが、大方^{おおかた}あいつの事だぜ」「あいつに極^{きま}つていま

さあ、そんな事を云いそうな面構えですよ、いやに髭なんか生やして」「怪けしからん奴だ」髭を生やして怪しからなければ猫などは一疋だつて怪しかりようがない。「それにあの迷亭とか、へべれけとか云う奴は、まあ何てえ、頓狂な跳返りはねつかえなんでしょう、伯父の牧山男爵だなんて、あんな顔に男爵の伯父なんぞ、有るはずがないと思つたんですもの」「御前がどこの馬の骨だか分らんものの言う事を真まに受けるのも悪い」「悪いって、あんまり人を馬鹿にし過ぎるじゃありませんか」と大變残念そうである。不思議な事には寒月君の事は一言半句いちごんはんくも出ない。吾輩の忍んで来る前に評判記はすんだものか、またはすでに落第と事が極きまつて念頭ねんずにないものか、その辺は懸念けんねんもあるが仕方がない。しばらく佇たたずんでいると廊下を隔てて向うの座敷でベルの音がする。そらあすこにも何か事がある。後おくれぬ先に、とその方角へ歩を

向ける。

来て見ると女が独りひとで何か大声で話している。その声が鼻子とよく似ているところをもつて推おすと、これが即ち当家の令嬢寒月君をして未遂みすいじゆすい入水をあえてせしめたる代物しろものだろう。惜哉障子越おしいかなしで玉の御姿おんすがたを拝する事が出来ない。従つて顔の真中に大きな鼻を祭り込んでいるか、どうか受合うわさえない。しかし談話の模様から鼻息の荒いところなどを綜合そうごうして考えて見ると、満更まんざら人の注意を惹ひかぬ獅鼻ししばなとも思われない。女はしきりに喋舌しゃべつているが相手の声が少しも聞えないのは、噂うわさにきく電話というものである。御前やまとは大和かい。明日あしたね、行くんだからね、鶉うずらの三を取つておいておくれ、いいかえ——分つたかい——なに分らない？ おやいやだ。鶉の三を取るんだよ。——なんだつて、——取れない？ 取れないはずはない、とるんだよ——へ

へへへへ御冗談をだつて——何が御冗談なんだよ——いやに人をおひやかすよ。全体御前は誰だい。長吉だ？ちようきち 長吉なんぞじゃ訳が分らない。お神さんに電話口へ出ろつて御云いな——なに？わたく 私しで何でも弁じます？——お前は失敬だよ。妾しをあた誰だか知つてゐるのかい。金田だよ。——へへへへ善く存じておりますだつて。ほんとに馬鹿だよこの人あ。——金田だつてえばさ。——なに？——毎度御鼯鼠ごひいきにあずかりましてありがとうございます？——何がありがたいんだね。御礼なんか聞きたかあないやね——おやまた笑つてゐるよ。お前はよつぽど愚物ぐぶつだね。——仰せの通りだつて？——あんまり人を馬鹿にすると電話を切つてしまふよ。いいのかい。困らないのかよ——黙つてちや分らないじゃないか、何とか御云いなさいな」電話は長吉の方から切つたものか何の返事もないらしい。令嬢は癩癩かんしゃくを起

してやけにべルをジャラジャラと廻す。足元で狛が驚ろいて急に吠え出す。これは迂濶うかつに出来ない、急に飛び下りて椽えんの下へもぐり込む。

折柄廊下を近く足音がして障子を開ける音がする。誰か来た

なと一生懸命に聞いていると「御嬢様、旦那様と奥様が呼んでいらつしやいます」と小間使らしい声がする。「知らないよ」と令嬢は剣突けんつくを食わせる。「ちよつと用があるから嬢を呼んで来

いとおつしやいました」「うるさいね、知らないてば」と令嬢は

第二の剣突を食わせる。「……水島寒月さんの事で御用がある

んだそうでございます」と小間使は氣を利きかして機嫌を直そう

とする。「寒月でも、水月でも知らないんだよ——大嫌いだわ、

糸瓜が戸迷へちまいをしたような顔をして」第三の剣突は、憐れなる

寒月君が、留守中に頂戴する。「おや御前そくはついつ束髪そくはつに結いつたの」

小間使はほつと一息ついて「今日」^{こんにち}となるべく単簡^{たんかん}な挨拶をする。「生意気だねえ、小間使の癖に」と第四の剣突を別方面から食わす。「そうして新しい半襟^{はんえり}を掛けたじゃないか」「へえ、せんだって御嬢様からいただきましたので、結構過ぎて勿体^{もったい}ないと思つて行李^{こうり}の中へしまつておきましたが、今までののがあまり汚^{よご}れましたからかけ易^かえました」「いつ、そんなものを上げた事があるの」「この御正月、白木屋へいらつしやいまして、御求め遊ばしたので——^{うぐいすぢや} 鶯茶^{すもう}へ相撲^{ばんづけ}の番附を染め出したのでございます。妾^{あた}しには地味過ぎていやだから御前に上げようとおつしやつた、あれでございます」「あらいやだ。善く似合うのね。にくらしいわ」「恐れ入ります」「褒^ほめたんじやない。にくらしいんだよ」「へえ」「そんなによく似合うものをなぜだまつて貰^{もら}ったんだい」「へえ」「御前にさえ、そのくらい似合うなら、妾^{あた}しにだつてお

かしい事はないだろうじゃないか」「きつとよく御似合い遊ばします」「似あうのが分つてゐる癖になぜ黙つてゐるんだい。そうしてすまして掛けてゐるんだよ、人の悪い」剣突けんつくは留めどもなく連発される。このさき、事局はどう発展するかと謹聴している時、向うの座敷で「富子や、富子や」と大きな声で金田君が令嬢を呼ぶ。令嬢はやむを得ず「はい」と電話室を出て行く。吾輩より少し大きな狎ちんが顔の中心に眼と口を引き集めたような面をして付いて行く。吾輩は例の忍び足で再び勝手から往来へ出て、急いで主人の家に帰る。探険はまず十二分の成績せいせきである。

帰つて見ると、奇麗な家うちから急に汚ない所へ移つたので、何だか日当りの善い山の上から薄黒い洞窟どうくつの中へ入り込んだような心持ちがする。探険中は、ほかの事に氣を奪われて部屋の装飾ふすま、襖しやうじ、障子の具合などには眼も留らなかつたが、わが住居すまいの

下等なるを感じると同時に彼のいわゆる月並つきなみが恋しくなる。教師よりもやはり実業家がえらいように思われる。吾輩も少し変だと思つて、例の尻尾しっぽに伺いを立てて見たら、その通りその通りと尻尾の先から御託宣ごたくせんがあつた。座敷へ這入はいつて見ると驚いたのは迷亭先生まだ帰らない、巻煙草まきたばこの吸い殻を蜂の巣のごとく火鉢の中へ突き立てて、大胡坐おおあぐらで何か話し立てている。いつの間にか寒月君さえ来ている。主人は手枕をして天井の雨洩あまもりを余念もなく眺めている。あいかわらず太平の逸民の会合である。「寒月君、君の事を譚語うわごとにまで言つた婦人の名は、当時秘密であつたようだが、もう話しても善かろう」と迷亭がからかい出す。「御話しをしても、私だけに関する事なら差支さしつかえないんですが、先方の迷惑になる事ですから」「まだ駄目かなあ」「それに○博士夫人に約束をしてしまったもんですから」「他言をしない

と云う約束かね」「ええ」と寒月君は例のごとく羽織の紐をひねくる。その紐は売品にあるまじき紫色である。「その紐の色は、ちと天保調だな」と主人が寝ながら云う。主人は金田事件などには無頓着である。「そうさ、到底日露戦争時代のものではないな。陣笠に立葵の紋の付いたぶつ割き羽織でも着なくつちや納まりの付かない紐だ。織田信長が聶入をするとき頭の髪を茶筌に結ったと云うがその節用いたのは、たしかそんな紐だよ」と迷亭の文句はあいかわらず長い。「実際これは爺が長州征伐の時に用いたのです」と寒月君は真面目である。「もういい加減に博物館へでも献納してはどうだ。首縊りの力学の演者、理学士水島寒月君ともあろうものが、売れ残りの旗本のような出で立をするのはちと体面に関する訳だから」「御忠告の通りに致してもいいのですが、この紐が大変よく似合うと云ってくれる人も

ありますので——」「誰だい、そんな趣味のない事を云うのは」と主人は寝返りを打ちながら大きな声を出す。「それは御存じの方なんじゃないんで——」「御存じでなくてもいいや、一体誰だい」「去る女性によしやうなんです」「ハハハハハよほど茶人だなあ、当てて見ようか、やはり隅田川の底から君の名を呼んだ女なんだろう、その羽織を着てもう一返御駄おだぶつ仏を極め込きんじやどうだい」と迷亭が横合から飛び出す。「へへへへもう水底から呼んではおりません。ここから乾いぬいの方角にあたる清浄しやうじやうな世界で……」「あんまり清浄でもなさそうだ、毒々しい鼻だぜ」「へえ？」と寒月是不審な顔をする。「向う横丁の鼻がさつき押しかけて来たんだよ、ここへ、実に僕等二人は驚いたよ、ねえ苦沙弥君」「うむ」と主人は寝ながら茶を飲む。「鼻つて誰の事です」「君の親愛なる久遠くおんの女性によしやうの御母堂様だ」「へえー」「金田の妻さいという女が君

の事を聞きに来たよ」と主人が真面目に説明してやる。驚くか、嬉しがるか、恥ずかしがるかと寒月君の様子を窺^{うかが}つて見ると別段の事もない。例の通り静かな調子で「どうか私に、あの娘を貰^{もら}ってくれと云う依頼なんでしょう」と、また紫の紐をひねく^くる。「ところが大違^{ちが}ひ。その御母堂なるものが偉大なる鼻の所有主^{ぬし}でね……」迷亭が半ば言^ない懸けると、主人が「おい君、僕はさつきから、あの鼻について俳体詩^{はいたいし}を考えているんだがね」と木に竹を接^ついだような事を云う。隣の室^{へや}で妻君がくすくす笑^{わら}い出す。「随分君も呑氣^{のんき}だなあ出来たのかい」「少し出来た。第一句がこの顔に、鼻祭り^{はなまつり}と云うのだ」「それから?」「次がこの鼻に、神酒^{かみさけ}、供^{とも}えというのさ」「次の句は?」「まだそれぎりしか出来ておらん」「面白いですな」と寒月君がにやにや笑う。「次へ穴、二つ、幽^ゆかなりと付けちゃどうだ」と迷亭はすぐ出来る。すると寒

月が「奥深く、毛も見えずはいけますまいか」と各々出鱈目おのおのでたらめを並べていると、垣根かきに近く、往来で「今戸焼の狸いまどやき たぬき今戸焼の狸」と四人わいわい云う声がする。主人も迷亭もちよつと驚ろいて表の方を、垣の隙すきからすかして見ると「ワハハハハ」と笑う声として遠くへ散る足の音がする。「今戸焼の狸というな何だい」と迷亭が不思議そうに主人に聞く。「何だか分らん」と主人が答える。「なかなか振ふるつていますな」と寒月君が批評を加える。迷亭は何を思い出したか急に立ち上つて「吾輩は年来美学上の見地からこの鼻について研究した事がございますから、その一斑いっぱんを披瀝ひれきして、御両君の清聴を煩わづらわしたいと思ひます」と演舌の真似をやる。主人はあまりの突然にぼんやりして無言のまま迷亭を見ている。寒月は「是非承うけたまわりたいものです」と小声で云う。「いろいろ調べて見ましたが鼻の起源はどうも確しかと分りません。

第一の不審は、もしこれを実用上の道具と仮定すれば穴が二つでたくさんである。何もこんなに横風おうふうに真中から突き出して見る必用がないのである。ところがどうしてだんだん御覧のごとく斯様かようにせり出して参ったか」と自分の鼻を抓つまんで見せる。「あんまりせり出してもおらんじやないか」と主人は御世辞のないところを云う。「とにかく引つ込んではおりませんからな。ただ二個の孔あなが併ならんでいる状態と混同なすつては、誤解を生ずるに至るかも計られませんから、予め御注意をしておきます。――で愚見によりますと鼻の発達は吾々人間が鼻汁はなをかむと申す微細なる行為の結果が自然と蓄積してかく著明なる現象を呈出したものでございます」佯いつわりのない愚見だ」とまた主人が寸評を挿入する。御承知の通り鼻汁はなをかむ時は、是非鼻を抓みます、鼻を抓んで、ことにこの局部だけに刺激を与えますと、進化論

の大原則によつて、この局部はこの刺激に應ずるがため他に比
例して不相当な発達を致します。皮も自然堅くなります、肉も
次第に硬かたくなります。ついに凝こつて骨となります」「それは少し
——そう自由に肉が骨に一足飛に変化は出来ますまい」と理学
士だけあつて寒月君が抗議を申し込む。迷亭は何喰わぬ顔で陳
べ続ける。「いや御不審はごもつともですが論より証拠この通り
骨があるから仕方ありません。すでに骨が出来る。骨は出来
ても鼻汁はなは出ますな。出ればかまずにはいられません。この作
用で骨の左右が削けずり取られて細い高い隆起と変化して参ります
——実に恐ろしい作用です。点滴てんてきの石を穿うがつがごとく、賓頭びんずる顱
の頭おのずが自から光明を放つがごとく、不思議薰不思議臭ふしぎくの喩たとえのご
とく、斯様かように鼻筋が通つて堅くなります」「それでも君のなん
ぞ、ぶくぶくだぜ」「演者自身の局部は回護かいごの恐れがありますか

ら、わざと論じません。かの金田の御母堂の持たせらるる鼻のごときは、もつとも発達せるもつとも偉大なる天下の珍品として御両君に紹介しておきたいと思ひます」寒月君は思わずヒヤヤヤと云う。「しかし物も極度に達しますと偉観には相違ございませんが何となく怖おそろしくて近づき難いものであります。あの鼻梁びりようなどは素晴らしいには違いございませんが、少々峻嶮しゅんけん過ぎるかと思われます。古人のうちにもソクラチス、ゴールドスミスもしくはサツカレーの鼻などは構造の上から云うと随分申し分はございましょうがその申し分のあるところに愛嬌あいぎようがございませす。鼻高きが故に貴たつとからず、奇きなるがために貴しとはこの故でもございましょうか。下世話げせわにも鼻より団子と申しますれば美的価値から申しますとまず迷亭くらいのところが適當かと存じます」寒月と主人は「フフフフ」と笑い出す。迷亭自身も愉

快そうに笑う。「さてただ今^{いま}まで弁じましたのは——」「先生、
じま^いしたは少し講釈師のよう^いで下品ですから、よしていただき
ましょう」と寒月君は先日^{ふくしゅう}の復讐^{ふくしゅう}をやる。「さようしからば顔
を洗つて出直^{けんこう}しましょうかな。——ええ——これから鼻と顔の
権衡^{いぢん}に一言論^{いぢん}及^いしたいと思ひます。他に關係なく単^い独に鼻論を
やりますと、かの御母堂などはどこへ出しても恥^いずかしからぬ
鼻——鞍馬山^{くらまやま}で展覧会があつても恐らく一等賞だろ^いうと思われ
るくらいな鼻を所有していらせられますが、悲しいかなあれは
眼、口、その他の諸先生と何等の相談もなく出来上^いつた鼻であ
ります。ジュリアス・シーザーの鼻は大したもの^いに相違ござい
ません。しかしシーザーの鼻を鋏^{はさみ}でちよん切つて、当家の猫の
顔へ安置したらどんな者でございましょうか。喩^{たと}えにも猫の額^{ひたい}
と云うくらいな地面へ、英雄の鼻柱^{とつこつ}が突^い兀^いとして聳^{そび}えたら、碁

盤の上へ奈良の大仏を据え付けたようなもので、少しく比例を失するの極、その美的価値を落す事だろうと思います。御母堂の鼻はシーザーのそれのごとく、正しく英姿颯爽たる隆起に相違ございません。しかしその周囲を圍繞する顔面的条件は如何な者でありましょう。無論当家の猫のごとく劣等ではない。しかし癩癰病みの御かめのごとく眉の根に八字を刻んで、細い眼を釣るし上げらるるのは事実であります。諸君、この顔にしてこの鼻ありと嘆ぜざるを得んではありませんか」迷亭の言葉が少し途切れる途端、裏の方で「まだ鼻の話をしていゝんだよ。何てえ剛突く張だろう」と云う声が聞える。「車屋の神さんだ」と主人が迷亭に教えてやる。迷亭はまたやり初める。「計らざる裏手にあたって、新たに異性の傍聴者のある事を発見したのは演者の深く名誉と思うところであります。ことに宛転たる嬌音

をもつて、乾燥なる講筵こうえんに一点の艶味えんみを添えられたのは実に望外の幸福であります。なるべく通俗的に引き直して佳人淑女かじんしゅくじょの眷顧けんこに背かざらん事を期しますが、これからは少々力学上の問題に立ち入りますので、勢御婦人方いきおひには御分りにくいかも知れませんが、どうか御辛防ごしんぼうを願います」寒月君は力学と云う語を聞いてまたにやにやする。「私の証拠立てようとするのは、この鼻とこの顔は到底調和しない。ツァイシングの黄金律、を失していると云う事なんで、それを厳格に力学上の公式から演繹えんえきして御覧に入れようと云うのであります。まずHを鼻の高さとします。 α は鼻と顔の平面の交叉より生ずる角度であります。Wは無論鼻の重量と御承知下さい。どうです大抵お分りになりましたか。……」「分るものか」と主人が云う。「寒月君はどうだい」「私にもちと分りかねますな」「そりや困ったな。苦沙弥くしゃみ

はとにかく、君は理学士だから分るだろうと思つたのに。この式が演説の首脳なんだからこれを略しては今までやった甲斐がないのだが——まあ仕方がない。公式は略して結論だけ話そう」「結論があるか」と主人が不思議そうに聞く。「当り前さ結論のない演舌は、デザートのない西洋料理のようなものだ、——いいか両君能く聞き給え、これから結論だぜ。——さて以上の公式にウィルヒョウ、ワイスマン諸家の説を参酌して考えて見ますと、先天的形体の遺伝は無論の事許さねばなりません。またこの形体に追陪して起る心意的状況は、たとい後天性は遺伝するものにあらずとの有力なる説あるにも関せず、ある程度までは必然の結果と認めねばなりません。従つてかくのごとく身分に不似合なる鼻の持主の生んだ子には、その鼻にも何か異状がある事と察せられます。寒月君などは、まだ年が御若いから

金田令嬢の鼻の構造において特別の異状を認められんかも知れませんが、かかる遺伝は潜伏期の長いものでありますから、いなんどきつ何時気候の劇変と共に、急に発達して御母堂のそれのごとく、とつさ咄嗟の間に膨脹するかも知れません、それ故にこの御婚儀は、迷亭の学理的論証によりますと、今の中御断念になつた方が安全かと思われれます、これには当家の御主人は無論の事、そこに寝ておらるる猫又殿ねこまたどのにも御異存は無かろうと存じます」主人はようよう起き返つて「そりや無論さ。あんなものの娘を誰が貰うものか。寒月君もらつちやいかんよ」と大變熱心に主張する。吾輩もいささか賛成の意を表するためにやーにやーと二声ばかり鳴いて見せる。寒月君は別段騒いだ様子もなく「先生方の御意向がそうなら、私は断念してもいいんですが、もし当人がそれを氣にして病氣にでもなつたら罪ですから——」「ハハハハ

ハ艷罪えんざいと云う訳わけだ」主人だけは太おおいにむきになつて「そんな馬鹿があるものか、あいつの娘なら碌ろくな者でないに極きまつてらあ。初めて人のうちへ来ておれをやり込めに掛つた奴だ。傲慢ごうまんな奴だ」と独りひとでふんぷんする。するとまた垣根のそばで三四人が「ワハハハハ」と云う声をする。一人が「高慢ちきな唐変木とうへんぼくだ」と云うと一人が「もつと大きな家うちへ這入はいりてえだろう」と云う。また一人が「御氣の毒だが、いくら威張つたつて蔭弁慶かげべんけいだ」と大きな声をする。主人は椽側えんがわへ出て負けないような声で「やかましい、何だわざわざそんな堀へいの下へ来て」と怒鳴どなる。「ワハハハハハサヴェエジ・チーだ、サヴェエジ・チーだ」と口々に罵ののしる。主人は大に逆鱗おおいげきりんの体で突然起たつてステッキを持つて、往来へ飛び出す。迷亭は手を拍うつて「面白い、やれやれ」と云う。寒月は羽織の紐ひねを擦ひねつてにやにやする。吾輩は主人のあとを付けて

垣の崩れから往来へ出て見たら、真中に主人が手持無沙汰にス
テッキを突いて立っている。人通りは一人もない、ちよつと狐きつね
に抓つままれた体ていである。

四

例によつて金田邸へ忍び込む。

例によつてとは今更いまさら解釈する必要もない。しばしばを自乗じじようし

たほどの度合を示す語ことばである。一度やつた事は二度やりたいも

ので、二度試みた事は三度試みたいのは人間にのみ限らるる好
奇心ではない、猫といえどもこの心理的特権を有してこの世界
に生れ出でたものと認定してただかねばならぬ。三度以上繰
返す時始めて習慣なる語を冠せられて、この行為が生活上の必

要と進化するのもまた人間と相違はない。何のために、かくま
で足繁く金田邸へ通うのかと不審を起すならその前にちよつと
人間に反問したい事がある。なぜ人間は口から煙を吸い込んで
鼻から吐き出すのであるか、腹の足しにも血の道の薬にもなら
ないものを、恥かし気もなく吐吞して憚からざる以上は、吾輩
が金田に出入するのを、あまり大きな声で咎め立てをして貰い
たくない。金田邸は吾輩の煙草である。

忍び込むと云うと語弊がある、何だか泥棒か間男のようで聞

き苦しい。吾輩が金田邸へ行くのは、招待こそ受けないが、決
して鯉の切身をちよろまかしたり、眼鼻が顔の中心に痙攣的に
密着している狎君などと密談するためではない。——何探偵？

——もつてのほかの事である。およそ世の中に何が賤しい家業
だと云つて探偵と高利貸ほど下等な職はないと思つてゐる。な

るほど寒月君のために猫にあるまじきほどの義侠心ぎぎようしんを起して、
一度は金田家の動静を余所よそながら窺うかがつた事はあるが、それはた
だの一遍で、その後は決して猫の良心に恥ちずるような陋劣ろうれつな振
舞を致した事はない。——そんなら、なぜ忍しのび、込こむと云いうよう
な胡乱うろんな文字を使用した？——さあ、それがすこぶる意味のあ
る事だて。元来吾輩の考によると大空たいくうは万物を覆おほうため大地は
万物を載のせるために出来ている——いかに執拗しつような議論を好む人
間でもこの事実を否定する訳には行くまい。さてこの大空たいくう大地
を製造するために彼等人類はどのくらいの労力を費つやしている
かと云いうと尺寸せきすんの手伝もしておらぬではないか。自分が製造し
ておらぬものを自分の所有と極きめる法はなからう。自分の所有
と極きめても差さし支つかえないが他の出入しゆつにゆうを禁きんずる理由はあるまい。
この茫々ぼうぼうたる大地を、小賢こけんしくも垣めぐを囲かこらし棒杭ぼうかうを立てて某々

所有地などと劃し限るのはあたかもかの蒼天に縄張して、この部分は我の天、あの部分は彼の天と届け出るような者だ。もし土地を切り刻んで一坪いくらの所有権を売買するなら我等が呼吸する空気を一尺立方に割って切売をしても善い訳である。空気の切売が出来ず、空の縄張が不当なら地面の私有も不合理ではないか。如是觀によりて、如是法を信じている吾輩はそれだからどこへでも這入って行く。もつとも行きたくない処へは行かぬが、志す方角へは東西南北の差別は入らぬ、平氣な顔をして、のそのそと参る。金田ごときものに遠慮をする訳がない。

——しかし猫の悲しさは力づくでは到底人間には叶わない。強勢は權利なりとの格言さえあるこの浮世に存在する以上は、いかにこつちに道理があつても猫の議論は通らない。無理に通そうとすると車屋の黒のごとく不意に肴屋の天秤棒を喰う恐れが

ある。理はこつちにあるが権力は向うにあると云う場合に、理を曲げて一も二もなく屈従するか、または権力の目を掠めて我理を貫くかと云えば、吾輩は無論後者を択ぶのである。天秤棒は避けざるべからざるが故に、忍ばざるべからず。人の邸内へは這入り込んで差支えなき故に、まざるを得ず。この故に吾輩は金田邸へ忍び込むのである。

忍び込む度が重なるにつけ、探偵をする気はないが自然金田君一家の事情が見たくもない吾輩の眼に映じて覚えたくもない吾輩の脳裏に印象を留むるに至るのはやむを得ない。鼻子夫人が顔を洗うたんびに念を入れて鼻だけ拭く事や、富子令嬢が阿倍川餅を無暗に召し上がらるる事や、それから金田君自身がない。金田君は妻君に似合わず鼻の低い男である。単に鼻のみではない、顔全体が低い。小供の時分喧嘩をして、餓鬼大将のた

めに頸筋くびすじを捉つかまえられて、うんと精一杯に土塀どべいへ圧おし付けられ
た時の顔が四十年後の今日こんにちまで、因果いんがをなしておりはせぬかと
怪あやしまるくらい平坦な顔である。至極しごく穏かで危険のない顔には
相違ないが、何となく変化に乏しい。いくら怒おこつても平たいかな顔
である。——その金田君が鮪まぐろの刺身さしみを食たべて自分で自分の禿頭はげあたま
をぴちやぴちや叩たたく事や、それから顔が低いばかりでなく背が
低いので、無暗に高い帽子と高い下駄はを穿はく事や、それを車夫
がおかしがつて書生に話す事や、書生がなるほど君の觀察は機
敏だと感心する事や、——一々数え切れない。

近頃は勝手口の横を庭へ通り抜けて、築山つきやまの陰から向うを見渡
して障子が立て切つて物静かであるなと見極めがつくと、徐々そろそろ
上り込む。もし人声にやが賑かであるか、座敷から見透みすかさる恐
れがあると思えば池を東へ廻まつて雪隠せついんの横から知らぬ間まに椽えんの

下へ出る。悪い事をした覚はないから何も隠れる事も、恐れる事もないのだが、そこが人間と云う無法者に逢つては不運と諦めるより仕方がないので、もし世間が熊坂長範ばかりになつたらいかなる盛徳の君子もやはり吾輩のような態度に出ずるであらう。金田君は堂々たる実業家であるから固より熊坂長範のよう^{もと}に五尺三寸を振り廻す氣遣^{きづかい}はあるまいが、承^{うけたまわ}る処によれば人を人と思わぬ病氣があるそうである。人を人と思わないくらいなら猫を猫とも思うまい。して見れば猫たるものはいかなる盛徳の猫でも彼の邸内で決して油断は出来ぬ訳である。しかしその油断の出来ぬところが吾輩にはちよつと面白いので、吾輩がかくまでに金田家の門を出入^{しゅつにゅう}するものも、ただこの危険が冒^{おか}して見たいばかりかも知れぬ。それは追つて篤^{とく}と考えた上、猫の脳裏^{のうり}を残りにく解剖し得た時改めて御吹聴^{ごふいちようつかまつ}仕ろう。

今日はどんな模様だと、例の築山の芝生しばふの上に顎あごを押つけて前面を見渡すと十五畳の客間やよいを弥生やよいの春に明け放つて、中には金田夫婦と一人の来客との御話最中である。生憎あいにく鼻子夫人の鼻がこつちを向いて池越しに吾輩の額の上を正面から睨にらめ付けている。鼻に睨まれたのは生れて今日が始めてである。金田君は幸い横顔を向けて客と相對しているから例の平坦な部分は半分かくれて見えぬが、その代り鼻の在所ありかが判然しない。ただ胡麻塩色ごましおの口髯くちひげが好い加減な所から乱雑もせに茂生もせいしているので、あの上に孔あなが二つあるはずだと結論だけは苦もなく出来る。春風はるかぜもああ云う滑なめかな顔ばかり吹いていたら定めて楽らくだろうと、ついでながら想像ようぼうを逞たくましゅうして見た。御客さんは三人の中うちで一番普通の容貌ようぼうを有している。ただし普通なだけに、これぞと取り立てて紹介するに足るような雑作ぞうさくは一つもない。普通と云う

と結構なようだが、普通の極平凡きよくの堂に上り、庸俗の室に入つたのはむしろ憫然びんぜんの至りだ。かかる無意味な面構つらがまえを有すべき宿命を帯びて明治の昭代しょうだいに生れて来たのは誰だろう。例のごとく椽の下まで行つてその談話を承わらなくては分らぬ。

「……それで妻さいがわざわざあの男の所まで出掛けて行つて容子ようすを聞いたんだがね……」と金田君は例のごとく横風おうふうな言葉使である。横風ではあるが毫ごうも峻嶮しゅんけんなところがない。言語も彼の顔面のごとく平板へいばん彪大ぼうだいである。

「なるほどあの男が水島さんを教えた事がございますので——なるほど、よい御思い付きで——なるほど」となるほどずくめのは御客さんである。

「ところが何だか要領を得んので」

「ええ苦沙弥くしゃみじや要領を得ない訳わけで——あの男は私がいつしよ

に下宿をしている時分から実に煮え切らない——そりや御困りでございましたらう」と御客さんは鼻子夫人の方を向く。

「困るの、困らないのつてあなた、私わたししゃこの年になるまで人のうちへ行つて、あんな不取扱ふとりあつかいを受けた事はありやしません」と鼻子は例によつて鼻嵐を吹く。

「何か無礼な事でも申しましたか、昔むかしから頑固がんこな性分で——何しろ十年一日のごとくりードル専門の教師をしているのでも大体御分りになりましたよう」と御客さんは体ていよく調子を合せている。

「いや御話しにもならんくらいで、妻さいが何か聞くとまるで剣もほろろの挨拶だそうで……」

「それは怪けしからん訳で——一体少し学問をしているととかく慢心まんしんが萌もすもので、その上貧乏をすると負け惜しみが出来ますか

ら——いえ世の中には随分無法な奴がおりますよ。自分の働きのないのにや気が付かないで、無暗むやみに財産のあるものに喰くつて掛かるなんてえのが——まるで彼等の財産でも捲まき上げたような気分ですから驚きますよ、あははは」と御客さんは大恐悦の体ていである。

「いや、まことに言語同断ごんごどうだんで、ああ云うのは必竟世間見ずの我儘わがままから起るのだから、ちつと懲こらしめのためにいじめてやるが好かろうと思つて、少し当つてやつたよ」

「なるほどそれでは大分答だいぶんえましたろう、全く本人のためにもなる事ですから」と御客さんはいかなる当り方うけたまわか承うけたまわぬ先からすでに金田君に同意している。

「ところが鈴木さん、まあなんて頑固な男なんでしょう。学校へ出てふくちも福地ふくちさんや、津木つぎさんには口きも利きかないんだそうです。

恐れ入って黙っているのかと思つたらこの間は罪もない、宅たくの書生をステッキを持って追つ懸けたつてんです——三十面づらさげで、よく、まあ、そんな馬鹿な真似が出来たもんじやありませんか、全くやけで少し気が変になつてゐるんですよ」

「へえどうしてまたそんな乱暴な事をやつたんで……」とこれには、さすがの御客さんも少し不審を起したと見える。

「なあに、ただあの男の前を何とか云つて通つたんだそうです、すると、いきなり、ステッキを持って跣足はだしで飛び出して来たんだそうです。よしんば、ちつとやそつと、何か云つたつて小供じやありませんか、髯面ひげづらの大僧おおぞうの癖にしかも教師じやありませんか」

「さよう教師ですから」と御客さんが云うと、金田君も「教師だからな」と云う。教師たる以上はいかなる侮辱を受けても

木像のようにおとなしくしておらねばならぬとはこの三人の期せずして一致した論点と見える。

「それに、あの迷亭って男はよつぽどな酔興人すいきようじんですね。役にも立たない嘘うそ八百を並べ立てて。私わたししやあんな変挺へんてこな人にや初めて逢いましたよ」

「ああ迷亭ですか、あいかわらず法螺ほらを吹くと見えますね。やはり苦沙弥の所で御逢いになったんですか。あれに掛っちゃたまりません。あれも昔むかし自炊の仲間でしたがあんまり人を馬鹿にするものですから能く喧嘩よをしましたよ」

「誰だって怒りまさあね、あんなじゃ。そりや嘘をつくのも宜ようござんしょうさ、ね、義理が悪るいとか、ばつを合せなくっちゃあならないとか——そんな時には誰しも心にない事を云うもんでさあ。しかしあの男のは吐つかなくつてすむのに矢鱈やたらに吐

くんだから始末に了^おえないじゃありませんか。何が欲しくつて、あんな出鱈^{でたらめ}目を——よくまあ、しらじらしく云えると思いますよ」

「ごもつともで、全く道楽からくる嘘だから困ります」

「せつかくあなた真面目に聞きに行つた水島の事も滅茶滅茶^{めちやめちや}になつてしまいました。私^{わたし}や剛腹^{ごうはら}で忌々^{いまいま}しくつて——それでも義理は義理でさあ、人のうちへ物を聞きに行つて知らん顔の半兵衛もあんまりですから、後^{あと}で車夫にビールを一ダース持たせてやつたんです。ところがあなたどうでしょう。こんなものを受取る理由がない、持って帰れつて云うんだそうで。いえ御礼だから、どうか御取り下さいつて車夫が云つたら——悪^にくいじやありませんか、俺はジャムは毎日舐^なめるがビールのような苦^{にが}い者は飲んだ事がないつて、ふいと奥^はへ這^{はい}入つてしまつたつて

——言い草に事を欠いて、まあどうでしょう、失礼じゃありませんか」

「そりゃ、ひどい」と御客さんも今度は本氣に苛いひどと感じたらしい。

「そこで今日わざわざ君を招いたのだがね」としばらく途切れて金田君の声が聞える。「そんな馬鹿者は陰から、からかつてさえいれぱすむようなものの、少々それでも困る事があるじゃて……」と鮪まぐろの刺身を食う時のごとく禿頭はげあたまをぴちやぴちや叩くたた。もつとも吾輩は椽えんの下にいるから實際叩いたか叩かないか見えようはずがないが、この禿頭の音は近来大分聞馴だいにれている。比丘尼びくにが木魚の音を聞き分けるごとく、椽の下からでも音さえたしかであればすぐ禿頭だなと出所を鑑定する事が出来る。「そこでちよつと君を煩わづらわしたいと思つてな……」

「私に出来ます事なら何でも御遠慮なくどうか——今度東京勤務と云う事になりましたのも全くいろいろ御心配を掛けた結果にほかならん訳でありますから」と御客さんは快よく金田君の依頼を承諾する。この口調くちようで見るとこの御客さんはやはり金田君の世話になる人と見える。いやだんだん事件が面白く発展してくるな、今日はあまり天氣が宜いいので、来る気もなしに來たのであるが、こう云う好材料を得えようとは全く思い掛がけなんだ。御彼岸おひがんにお寺詣りてらまいをして偶然方丈ほうじようで牡丹餅ぼたんもちの御馳走になるような者だ。金田君はどんな事を客人に依頼するかなと、椽の下から耳を澄して聞いている。

「あの苦沙弥と云う変物へんぶつが、どう云う訳か水島に入れ智慧ちえをするので、あの金田の娘を貰いつては行いかんなどとほのめかすそうだ——なあ鼻子そうだな」

「ほのめかすどころじゃないんです。あんな奴の娘を貰う馬鹿がどこの国にあるものか、寒月君決して貰っちゃいかんよって云うんです」

「あんな奴とは何だ失敬な、そんな乱暴な事を云ったのか」

「云ったどころじゃありません、ちゃんと車屋の神さんが知らせに来てくれたんです」

「鈴木君どうだい、御聞の通りの次第さ、随分厄介だろうが？」

「困りますね、ほかの事と違って、こう云う事には他人が妄りみだ

に容喙するべきはずの者ではありませんからな。そのくらいな事はいかな苦沙弥でも心得ているはずですが。一体どうした訳なんでしょう」

「それでの、君は学生時代から苦沙弥と同宿をしていて、今はとにかく、昔は親密な間柄であつたそうだから御依頼するのだ

が、君当人に逢つてな、よく利害を論^{さし}して見てくれんか。何か怒^{おこ}っているかも知れんが、怒るのは向^{むこう}が悪^{わる}いからで、先方がおとなしくしてさえいれば一身上の便宜も充分計^{はか}つてやるし、気に障^さわるような事もやめてやる。しかし向^{むこう}が向^{むこう}ならこつちもこつちと云う気になるからな——つまりそんな我^がを張^はるのは当人の損だからな」

「ええ全くおっしゃる通り愚^ぐな抵抗をするのは本人の損になるばかりで何の益もない事ですから、善く申し聞けましょう」

「それから娘はいろいろと申し込もある事だから、必ず水島にやると極^きめる訳にも行かんが、だんだん聞いて見ると学問も人物も悪くもないようだから、もし当人が勉強して近い内に博士にでもなつたらあるいはもう事が出来るかも知れんくらいはそれとなくほのめかしても構^{かま}わん」

「そう云つてやつたら当人も励はげみになつて勉強する事でしよう。
宜よろしゅうございます」

「それから、あの妙な事だが——水島にも似合はん事だと思
うが、あの変物へんぶつの苦沙弥を先生先生と云つて苦沙弥の云う事は大
抵聞く様子だから困る。なにそりや何も水島に限る訳では無論
ないのだから苦沙弥が何と云つて邪魔をしようと、わしの方は
別に差支さしかえもせんが……」

「水島さんが可哀そうですね」と鼻子夫人が口を出す。

「水島と云う人には逢しやうがいつた事もございせんが、とにかくこち
らと御縁組が出来れば生涯しやうがいの幸福で、本人は無論異存はないの
でしょう」

「ええ水島さんは貰いたがつているんですが、苦沙弥だの迷亭
だのつて変り者が何だとか、かんだとか云うものですから」

「そりや、善くない事で、相当の教育のあるものにも似合わん所作しよさですな。よく私が苦沙弥の所へ参つて談じましょう」

「ああ、どうか、御面倒でも、一つ願いたい。それから実は水島の事も苦沙弥が一番詳くわしいのだがせんだつて妻さいが行つた時は今の始末で碌々ろくろく聞く事も出来なかつた訳だから、君から今一応本人の性行学才等をよく聞いて貰いたいて」

「かしこまりました。今日は土曜ですからこれから廻つたら、もう帰つておりました。近頃はどこに住んでおりますか知らん」

「ここの前を右へ突き当つて、左へ一丁ばかり行くと崩れかかつた黒堀のあるうちです」と鼻子が教える。

「それじゃ、つい近所ですな。訳はありません。帰りにちよつと寄つて見ましょう。なあに、大体分りましたよう標札ひょうさつを見れば」

「標札はあるときと、ないときとありますよ。名刺を御饌粒ごぜんつぶで門はへ貼り付けるのでしよう。雨がふると剥はがれてしまいましう。すると御天気の日にもまた貼り付けるのです。だから標札は当あてにやなりませんよ。あんな面倒臭い事をするよりせめて木札きふだでも懸けたらよきそうなんですがねえ。ほんとうにどこまでも気の知れない人ですよ」

「どうも驚きますな。しかし崩れた黒塀のうちと聞いたら大概分るでしょう」

「ええあんな汚ないうちは町内に一軒しかないから、すぐ分りますよ。あ、そうそうそれで分らなければ、好い事がある。何でも屋根に草が生はえたうちを探して行けば間違つこありませんよ」

「よほど特色のある家いえですなアハハハ」

鈴木君が御光来になる前に帰らないと、少し都合が悪い。談話もこれだけ聞けば大丈夫沢山である。椽えんの下を伝わって雪隠せついんを西へ廻つて築山つきやまの陰から往来へ出て、急ぎ足で屋根に草の生えているうちへ帰つて来て何喰わぬ顔をして座敷の椽へ廻る。主人は椽側へ白毛布しろげつとを敷いて、腹這はらばいになつて麗うるわかな春日はるびに甲羅こうらを干している。太陽の光線は存外公平なもので屋根にペンペン草の目標のある陋屋ろうおくでも、金田君の客間のごとく陽気に暖かそうであるが、気の毒な事には毛布けつとだけが春らしくない。製造元では白のつもりで織り出して、唐物屋とうぶつやでも白の気で売り捌さばいたのみならず、主人も白と云う注文で買つて来たのであるが――何しろ十二三年以前の事だから白の時代はとくに通り越してたのうかいしよくだ今は濃灰色なる変色の時期に遭遇そうぐうしつつある。この時期を経過して他の暗黒色に化けるまで毛布の命が続くかどうかは、疑

問である。今でもすでに万遍なく擦り切れて、豎横たてよこの筋は明かに読まれるくらいだから、毛布と称するのはもはや僭上せんじょうの沙汰であつて、毛の字は省はぶいて単にツト、とでも申すのが適當である。しかし主人の考えでは一年持ち、二年持ち、五年持ち十年持った以上は生涯しょうがい持たねばならぬと思つてゐるらしい。随分呑気のんきな事である。さてその因縁いんねんのある毛布けつとの上へ前申ぜんす通り腹這になつて何をしてゐるかと思うと両手で出張あこつた顎を支えて、右手の指の股に巻煙草まきたばこを挟んでゐる。ただそれだけである。もつとも彼がフケだらけの頭の裏うちには宇宙の大真理が火の車のごとく廻転しつゝあるかも知れないが、外部から拝見したところでは、そんな事とは夢にも思えない。

煙草の火はだんだん吸口の方へ逼せまつて、一寸いっすんばかり燃え尽した灰の棒がぱたりと毛布の上に落つるのも構わず主人は一生懸

命に煙草から立ち上る煙の行末を見詰めている。その煙りは春風に浮きつ沈みつ、流れる輪を幾重にも描いて、紫深き細君の洗髪あらいがみの根本へ吹き寄せつつある。——おや、細君の事を話しておくはずだった。忘れていた。

細君は主人に尻しりを向けて——なに失礼な細君だ？ 別に失礼な事はないさ。礼も非礼も相互の解釈次第でどうでもなる事だ。主人は平気で細君の尻のところへ頬杖ほおづえを突き、細君は平気で主人の顔の先へ莊嚴そうごんなる尻を据すえたまでの事で無礼も糸瓜へちまもないのである。御両人は結婚後一カ年も立たぬ間に礼儀作法などと窮屈な境遇を脱却せられた超然的夫婦である。——さてかくのごとく主人に尻を向けた細君はどう云う見か、今日の天気に乗じて、尺に余る緑の黒髪を、魅海苔ふのりと生卵でゴシゴシ洗濯せられた者と見えて癖のない奴を、見よがしに肩から背へ振りかけ

て、無言のまま小供の袖なしを熱心に縫っている。実はその洗髪を乾かすために唐縮緬とうちりめんの布団ふとんと針箱を椽側えんがわへ出して、恭うやうやしく主人に尻を向けたのである。あるいは主人の方で尻のある見当けんとうへ顔を持って来たのかも知れない。そこで先刻御話ごわしをした煙草たばこの煙りが、豊かに靡なびく黒髪くろかみの間に流れ流れて、時ならぬ陽炎かげろうの燃えるところを主人は余念もなく眺めている。しかしながら煙もは固もより一所いっしょに停とどまるものではない、その性質として上へ上へと立ち登るのだから主人の眼もこの煙りの髪毛かみげと纏もれ合う奇観を落ちなく見ようとすれば、是非共眼を動かさなければならぬ。主人はまず腰の辺から觀察を始めて徐々じょじょと背中を伝つたつて、肩から頸筋くびすじに掛ったが、それを通り過ぎてようよう脳天に達した時、覚えずあつと驚いた。——主人が偕老同穴かいろうどうけつを契ちぎつた夫人の脳天の真中には真丸まんまるな大きな禿はげがある。しかもその禿が暖か

い日光を反射して、今や時を得顔に輝いている。思わざる辺に
 この不思議な大発見をなした時の主人の眼は眩まばゆい中に充分の
 驚きを示して、烈しい光線で瞳孔どうこうの開くのも構わず一心不乱に
 見つめている。主人がこの禿を見た時、第一彼の脳裏のうりに浮んだ
 のはかの家伝いえ来の仏壇に幾世となく飾り付けられたる御灯明皿
 である。彼の一家いっけは真宗で、真宗では仏壇に身分不相応な金を
 掛けるのが古例である。主人は幼少の時その家の倉の中に、薄
 暗く飾り付けられたる金箔厚きんぱくき厨子ずしがあつて、その厨子の中に
 はいつでも真鍮しんちゆうの灯明皿がぶら下つて、その灯明皿には昼でも
 ぼんやりした灯ひがついていた事を記憶している。周囲が暗い中
 にこの灯明皿が比較的明瞭に輝やいていたので小供心にこの灯
 を何遍となく見た時の印象が細君の禿に喚よび起されて突然飛び
 出したものであろう。灯明皿は一分立たぬ間まに消えた。この度たび

は観音様の鳩かんのんさまの事を思い出す。観音様の鳩と細君の禿とは何等の關係もないようであるが、主人の頭では二つの間に密接な聯想がある。同じく小供の時分に浅草へ行くと必ず鳩に豆を買つてやつた。豆は一皿ぶんぎゅうが文久二つで、赤い土器かわらけへ這入はいつていた。その土器が、色と云い大さと云いこの禿によく似ている。
「なるほど似ているな」と主人が、さも感心したらしく云うと「何がです」と細君は見向きもしない。

「何だつて、御前の頭にや大きな禿があるぜ。知つてるか」

「ええ」と細君は依然として仕事の手をやめずに答える。別段露見を恐れた様子もない。超然たる模範妻君である。

「嫁にくるときからあるのか、結婚後新たに出来たのか」と主人が聞く。もし嫁にくる前から禿うちげているなら欺だまされたのであると口へは出さないが心の中で思う。

「いつ出来たんだか覚えちゃいませんわ、禿なんざどうだって宜いじゃありませんか」と大に悟ったものである。

「どうだって宜いつて、自分の頭じゃないか」と主人は少々怒気を帯びている。

「自分の頭だから、どうだって宜いんだわ」と云ったが、さすが少しは気になると見えて、右の手を頭に乗せて、くるくる禿を撫でて見る。「おや大分大きくなった事、こんなじゃ無いと思つていた」と言つたところをもつて見ると、年に合わして禿があまり大き過ぎると云う事をようやく自覚したらしい。

「女は髻まげに結うと、ここが釣れますから誰でも禿げるんですわ」と少しく弁護しだす。

「そんな速度で、みんな禿げたら、四十くらいになれば、から葉やかん缶ばかり出来なければならん。そりや病気に違いない。伝染

するかも知れん、今のうち早く甘木さんに見て貰え」と主人はしきりに自分の頭を撫なで廻して見る。

「そんなに人の事をおつしやるが、あなただつて鼻の孔あなへ白髪しらが生はえてるじゃありませんか。禿が伝染するなら白髪だつて伝染しますわ」と細君少々ぷりぷりする。

「鼻の中の白髪は見えんから害はないが、脳天が——ことに若い女の脳天がそんなに禿げちゃ見苦しい。不具かたわだ」

「不具かたわなら、なぜ御貰いになったのです。御自分が好きで貰つておいて不具だなんて……」

「知らなかったからさ。全く今日きょうまで知らなかったんだ。そんなに威張るなら、なぜ嫁に来る時頭を見せなかったんだ」

「馬鹿な事を！　どこの国に頭の試験をして及第したら嫁にくるなんて、ものが在るもんですか」

「禿はまあ我慢もするが、御前は背せいが人並外はずれて低い。はなはだ見苦しくていかん」

「背いは見ればすぐ分るじゃありませんか、背せいの低いのは最初から承知で御貫いになったんじゃありませんか」

「それは承知さ、承知には相違ないがまだ延びるかと思つたから貰つたのさ」

「甘はたちにもなつて背せいが延びるなんて——あなたもよっぽど人を馬鹿になさるのね」と細君は袖そでなしを抛ほうり出して主人の方に振ねじ向く。返答次第ではその分にはすまさんと云う権幕けんまくである。

「甘はたちになつたつて背せいが延びてならんと云う法はあるまい。嫁に來てから滋養分でも食わしたら、少しは延びる見込みがあると思つたんだ」と真面目な顔をして妙な理窟りくつを述べていると門口かどぐちのベルが勢いきおいよく鳴り立てて頼むと云う大きな声がする。いよい

よ鈴木君がペンペン草を目的に苦沙弥先生の臥竜窟を尋ねあてたと見える。

細君は喧嘩を後日に譲つて、倉皇針箱と袖なしを抱えて茶の間へ逃げ込む。主人は鼠色の毛布を丸めて書斎へ投げ込む。やがて下女が持つて来た名刺を見て、主人はちよつと驚ろいたような顔付であつたが、こちらへ御通し申してと言ひ棄てて、名刺を握つたまま後架へ這入つた。何のために後架へ急に這入つたか一向要領を得ん、何のために鈴木藤十郎君の名刺を後架まで持つて行つたのかなおさら説明に苦しむ。とにかく迷惑なのは臭い所へ随行を命ぜられた名刺君である。

下女が更紗の座布団を床の前へ直して、どうぞこれへと引き下がつた、跡で、鈴木君は一応室内を見廻わす。床に掛けた花開ばんこくのはる万国春とある木菴の贗物や、京製の安青磁に活けた彼岸桜な

どを一々順番に点検したあとで、ふと下女の勧めた布団の上を見るというの間にまか一疋びきの猫がすまして坐っている。申すまでもなくそれはかく申す吾輩である。この時鈴木君の胸のうちにちよつとの間顔色にも出ぬほどの風波が起つた。この布団は疑いもなく鈴木君のために敷かれたものである。自分のために敷かれた布団の上に自分が乗らぬ先から、断りもなく妙な動物が平然と蹲踞そんぎよしている。これが鈴木君の心の平均を破る第一の条件である。もしこの布団が勧められたまま、主ぬしなくして春風の吹くに任せてあつたなら、鈴木君はわざと謙遜けんそんの意を表して、主人がさあどうぞと云うまでは堅い畳の上で我慢していたかも知れない。しかし早晚自分の所有すべき布団の上に挨拶もなく乗つたものは誰であろう。人間なら譲る事もあるうが猫とは怪けしからん。乗り手が猫であると云うのが一段と不愉快を感じし

める。これが鈴木君の心の平均を破る第二の条件である。最後にその猫の態度がもつとも癪しやくに障る。少しは気の毒そうにでもしている事か、乗る権利もない布団の上に、傲然ごうぜんと構えて、丸い無愛嬌ぶあいぎょうな眼をぱちつかせて、御前は誰だいと云わぬばかりに鈴木君の顔を見つめている。これが平均を破壊する第三の条件である。これほど不平があるなら、吾輩の頸根くびねつこを捉とらえて引きずり卸したら宜よさそうなものだが、鈴木君はだまつて見ている。堂々たる人間が猫に恐れて手出しをせぬと云う事は有ろうはずがないのに、なぜ早く吾輩を処分して自分の不平を洩もらさないかと云うと、これは全く鈴木君が一個の人間として自己の体面を維持する自重心の故であると察せらるる。もし腕力に訴えたなら三尺の童子も吾輩を自由に上下し得るであろうが、体面を重んずる点より考えるといかに金田君の股肱ここうたる鈴木藤十郎そ

の人もこの二尺四方の真中に鎮座まします猫大明神を如何^{いかん}とも
する事が出来ぬのである。いかに人の見ていぬ場所でも、猫と
座席争いをしたとあつてはいささか人間の威厳に関する。真面
目に猫を相手にして曲直^{きよくちよく}を争うのはいかにも大人気ない。滑稽
である。この不名誉を避けるためには多少の不便は忍ばねばな
らぬ。しかし忍ばねばならぬだけそれだけ猫に対する憎悪^{ぞうお}の念
は増す訳であるから、鈴木君は時々吾輩の顔を見ては苦^{にが}い顔を
する。吾輩は鈴木君の不平な顔を拝見するのが面白いから滑稽
の念を抑^{おさ}えてなるべく何喰わぬ顔をしている。

吾輩と鈴木君の間に、かくのごとき無言劇が行われつつある
間に主人は衣紋^{えもん}をつくろつて後架^{こうか}から出て来て「やあ」と席に
着いたが、手に持っていた名刺の影さえ見えぬところをもつて
見ると、鈴木藤十郎君の名前は臭い所へ無期徒刑に処せられた

ものと見える。名刺こそ飛んだ厄運やくうんに際会したものだと思う間まもなく、主人はこの野郎と吾輩の襟えりがみを攫つかんでえいとばかりに椽側えんがわへ擲たきつけた。

「さあ敷きたまえ。珍らしいな。いつ東京へ出て来た」と主人は旧友に向つて布団を勧める。鈴木君はちよつとこれを裏返した上で、それへ坐る。

「ついまだ忙がしいものだから報知もしなかったが、実はこの間から東京の本社の方へ帰るようになってね……」

「それは結構だ、大分だいぶん長く逢わなかったな。君が田舎いなかへ行つてから、始めてじゃないか」

「うん、もう十年近くになるね。なにその後時々東京へは出て来る事もあるんだが、つい用事が多いもんだから、いつでも失敬するような訳さ。悪わるく思つてくれたもうな。会社の方は君

の職業とは違つて随分忙がしいんだから」

「十年立つうちには大分違ふもんだな」と主人は鈴木君を見上げたり見下ろしたりしている。鈴木君は頭を美麗きれいに分けて、英国仕立のトウイードを着て、派手な襟飾えりかざりをして、胸に金鎖りさえピカつかせている体裁、どうしても苦沙弥君くしゃみの旧友とは思えない。

「うん、こんな物までぶら下げなくちゃ、ならんようになってね」と鈴木君はしきりに金鎖りを氣きにして見せる。

「そりゃ本ものかい」と主人は無作法ぶさほうな質問をかける。

「十八金だよ」と鈴木君は笑いながら答えたが「君も大分年を取ったね。たしか小供があるはずだったが一人かい」

「いいや」

「二人？」

「いいや」

「まだあるのか、じゃ三人か」

「うん三人ある。この先幾人出来るか分らん」

「相変らず気楽な事を云つてるぜ。一番大きいのはいくつになるかね、もうよつぽどだろう」

「うん、いくつか能く知らんが大方六つか、七つかだろう」

「ハハハ教師は呑氣のんきでいいな。僕も教員にでもなれば善かった」
「なつて見ろ、三日で嫌いやになるから」

「そうかな、何だか上品で、気楽で、閑暇ひまがあつて、すきな勉

強が出来て、よさそうじゃないか。実業家も悪くもないが我々のうちは駄目だ。実業家になるならずっと上にならなくっちゃいかん。下の方になるとやはりつまらん御世辞を振り撒まいたり、好かん猪口ちよこをいただきに出たり随分愚ぐなもんだよ」

「僕は実業家は学校時代から大嫌だ。金さえ取れば何でもする、昔で云えば素町人^{すちやうにん}だからな」と実業家を前に控^{ひか}えて太平樂を並べる。

「まさか——そうばかりも云えんがね、少しは下品なところもあるのさ、とにかく金^{かね}と情死^{しんじゆう}をする覚悟でなければやり通せないから——ところがその金と云う奴^{くせもの}が曲者で、——今もある実業家の所へ行つて聞いて来たんだが、金を作るにも三角術を使わなくちゃいけないと云うのさ——義理をかく、人情をかく、恥をかく、これで三角になるそうだ面白いじゃないかアハハハハ」

「誰だそんな馬鹿は」

「馬鹿じゃない、なかなか利口な男なんだよ、実業界でちよつと有名だがね、君知らんかしら、ついこの先の横丁にいるんだが」

「金田か？ 何^なんだあんな奴」

「大変怒ってるね。なあに、そりゃ、ほんの冗談じようだんだろうがね、そのくらいにせんと金は溜らんと云う喩たとえさ。君のようにそう真面目に解釈しちゃ困る」

「三角術は冗談でもいいが、あすこの女房の鼻はなんだ。君行つたんなら見て来たろう、あの鼻を」

「細君か、細君はなかなかさばけた人だ」

「鼻だよ、大きな鼻の事を云ってるんだ。せんだつて僕はあの鼻について俳体詩はいたいしを作ったがね」

「何だい俳体詩と云うのは」

「俳体詩を知らないのか、君も随分時勢に暗いな」

「ああ僕のように忙すがしいと文学などは到底駄目どうていさ。それに以前からあまり数奇すきでない方だから」

「君シャーレマンの鼻の恰好かっこうを知ってるか」

「アハハハ随分気楽だな。知らんよ」

「エルリントンは部下のものから鼻々と異名いみようをつけられていた。

君知ってるか」

「鼻の事ばかり気にして、どうしたんだい。好いじゃないか鼻なんか丸くても尖とんがつてても」

「決してそうでない。君パスカルの事を知ってるか」

「また知ってるかか、まるで試験を受けに来たようなものだ。パスカルがどうしたんだい」

「パスカルがこんな事を云っている」

「どんな事を」

「もしクレオパトラの鼻が少し短かかったならば世界の表面に大変化を来きたしたろうと」

「なるほど」

「それだから君のようにそう無雑作むぞうさに鼻を馬鹿にしてはいかん」

「まあいいさ、これから大事にするから。そりやそうとして、今日来たのは、少し君に用事があつて来たんだがね——あの元君もとの教えたとか云う、水島——ええ水島ええちよつと思ひ出せない。——そら君の所へ始終来ると云うじゃないか」

「寒月かんげつか」

「そうそう寒月寒月。あの人の事についてちよつと聞きたい事があつて来たんだがね」

「結婚事件じゃないか」

「まあ多少それに類似の事さ。今日金田へ行つたら……」

「この間鼻が自分で来た」

「そうか。そうだつて、細君もそう云つていたよ。苦沙弥さんに、よく伺おうと思つて上つたら、生憎迷亭あいにくが来ていて茶々を

入れて何が何だか分らなくしてしまつたつて」

「あんな鼻をつけて来るから悪るいや」

「いえ君の事を云うんじゃないよ。あの迷亭君がおつたもんだから、そう立ち入った事を聞く訳にも行かなかつたので残念だったから、もう一遍僕に行つてよく聞いて来てくれないかつて頼まれたものだからね。僕も今までこんな世話はした事はないが、もし当人同士が嫌やでないなら中へ立つて纏めるのも、決して悪い事はないからね——それでやつて来たのさ」

「御苦勞様」と主人は冷淡に答えたが、腹の内では当人同士と云う語を聞いて、どう云う訳か分らんが、ちよつと心を動かしたのである。蒸し熱い夏の夜に一縷の冷風が袖口を潜つたような気分になる。元来この主人はぶつ切ら棒の、頑固光沢消しを旨として製造された男であるが、さればと云つて冷酷不人情な

文明の産物とは自おのずからその撰せんを異ことにしている。彼が何なんぞと云うと、むかつ腹をたててふんぷんするのでも這裏しやりの消息は会得えとくできる。先日鼻と喧嘩をしたのは鼻が氣に食わぬからで鼻の娘には何の罪もない話である。実業家は嫌いだから、実業家の片割れなる金田某も嫌きらひに相違ないがこれも娘その人とは没交渉の沙汰と云わねばならぬ。娘には恩も恨うらみもなく、寒月は自分が実の弟よりも愛している門下生である。もし鈴木君の云うごとく、当人同志が好いた仲なら、間接にもこれを妨害するのは君子のなすべき所作しよさでない。——苦沙弥先生はこれでも自分を君子と云っている。——もし当人同志が好いているなら——しかしそれが問題である。この事件に対して自己の態度を改めるには、まずその真相から確めなければならぬ。

「君その娘は寒月の所へ来たがつてゐるのか。金田や鼻はどうで

も構わんが、娘自身の意向はどうなんだ」

「そりゃ、その——何だね——何でも——え、来たがつてるんだろうじゃないか」鈴木君の挨拶は少々曖昧である。あいまい実は寒月君の事だけ聞いて復命さえすればいいつもりで、御嬢さんの意向までは確かめて来なかつたのである。従つて円転滑脱の鈴木君もちよつと狼狽ろうばいの気味に見える。

「だ、ろう、た判然しない言葉だ」と主人は何事によらず、正面から、どやし付けないと気がすまない。

「いや、これやちよつと僕の云いようがわるかつた。令嬢の方でもたしかに意があるんだよ。いえ全くだよ——え？——細君が僕にそう云つたよ。何でも時々は寒月君の悪口を云う事もあるそうだがね」

「あの娘がか」

「ああ」

「怪しからん奴だ、悪口を云うなんて。第一それじゃ寒月に意がないんじゃないか」

「そこがさ、世の中は妙なもので、自分の好いている人の悪口などは殊更云つて見る事もあるからね」

「そんな愚な奴がどこの国にいるものか」と主人は斯様な人情の機微に立ち入った事を云われても頓と感じがしない。

「その愚な奴が随分世の中にやあるから仕方がない。現に金田の妻君もそう解釈しているのさ。戸惑いをした糸瓜のようだな、時々寒月さんの悪口を云いますから、よつぽど心の中では思つてゐるに相違ありませんと」

主人はこの不可思議な解釈を聞いて、あまり思い掛けないものだから、眼を丸くして、返答もせず、鈴木君の顔を、大道易者

のように昵じつと見つめている。鈴木君はこいつ、この様子では、ことによるとやり損なうなと瘡かんづいたと見えて、主人にも判断の出来そうな方面へと話頭を移す。

「君考えても分るじゃないか、あれだけの財産があつてあれだけの器量なら、どこへだつて相応うちの家へやれるだろうじゃないか。寒月だつてえらいかも知れんが身分から云や——いや身分と云っちゃ失礼かも知れない。——財産と云う点から云や、まあ、だれが見たつて釣り合わんのだからね。それを僕がわざわざ出張するくらい両親が氣を揉もんでるのは本人が寒月君に意があるからの事じゃあないか」と鈴木君はなかなかうまい理窟をつけて説明を与える。今度は主人にも納得が出来たらしいのでようやく安心したが、こんなところにまごまごしているとまたとっかん呐喊を喰う危険があるから、早く話しの歩を進めて、一刻も早

く使命を完^まうする方が万全の策と心付いた。

「それでね。今云う通りの訳であるから、先方で云うには何も金銭や財産はいらんからその代り当人に附属した資格が欲しい——資格と云うと、まあ肩書だね、——博士になつたらやつてもいいなんて威張つてゐる次第じゃない——誤解しちゃいかん。せんだつて細君の来た時は迷亭君がいて妙な事ばかり云うものだから——いえ君が悪いのじゃない。細君も君の事を御世辞のない正直^{かた}ない方だと賞^ほめていたよ。全く迷亭君がわるかつたんだらう。——それでさ本人が博士にでもなつてくれれば先方でも世間へ対して肩身が広い、面目^{めんぼく}があると云うんだがね、どうだろう、近^{きん}々の内水島君は博士論文でも呈出して、博士の学位を受けるような運びには行くまいか。なあに——金田だけなら博士も学士もいらんのさ、ただ世間と云う者があるとね、そ

う手輕にも行かんからな」

こう云われて見ると、先方で博士を請求するのも、あながち無理でもないように思われて来る。無理ではないように思われて来れば、鈴木君の依頼通りにしてやりたくなる。主人を活かすのも殺すのも鈴木君の意のままである。なるほど主人は単純で正直な男だ。

「それじゃ、今度寒月が来たら、博士論文をかくように僕から勧めて見よう。しかし当人が金田の娘を貰うつもりかどうか、それからまず問い正して見なくちやいかんからな」

「問い正すなんて、君そんな角張った事をして物が纏まるものじゃない。やつぱり普通の談話の際にそれとなく気を引いて見るのが一番近道だよ」

「気を引いて見る？」

「うん、気を引くと云うと語弊があるかも知れん。——なに気を引かんでもね。話しをしていると自然分るもんだよ」

「君にや分るかも知れんが、僕にや判然と聞かん事は分らん」

「分らなけりや、まあ好いさ。しかし迷亭君見たように余計な茶々を入れて打ち壊ぶこわすのは善くないと思う。仮令たとひ勧めないまでも、こんな事は本人の随意にすべきはずのものだからね。今度寒月君が来たらなるべくどうか邪魔をしないようにしてくれ給え。——いえ君の事じやない、あの迷亭君の事さ。あの男の口にかかるのと到底助かりつこないんだから」と主人の代理に迷亭の悪口をきいていると、噂うわさをすれば陰の喩たとえに洩もれず迷亭先生例のごとく勝手口から飄然ひょうぜんと春風しゅんぷうに乗じて舞い込んで来る。

「いやー珍客だね。僕のような狎客こうかくになると苦沙弥くしゃみはとかく粗略にしたがつていかん。何でも苦沙弥のうちへは十年に一遍く

らいくるに限る。この菓子はいつもより上等じゃないか」と藤村ふじむらの羊羹ようかんを無雑作むぞうさに頬張ほおばる。鈴木君はもじもじしている。主人はにやにやしている。迷亭は口をもがもがさしている。吾輩はこの瞬時の光景を椽側えんがわから拝見して無言劇と云うものは優に成立し得ると思つた。禅家ぜんけで無言の問答をやるのが以心伝心であるなら、この無言の芝居も明かに以心伝心の幕である。すこぶる短かいけれどもすこぶる鋭い幕である。

「君は一生旅鳥たびがらすかと思つてたら、いつの間まにか舞い戻つたね。長生ながいきはしたいもんだな。どんな僥倖ぎやうこうに廻めぐり合わんとも限げんらんかだね」と迷亭は鈴木君に対しても主人に対するごとく毫げうも遠慮と云う事を知らぬ。いかに自炊の仲間でも十年も逢わなければ、何となく気のおけるものだが迷亭君に限つて、そんな素振そぶりも見えぬのは、えらいのだから馬鹿なのかちよつと見当がつかぬ。

「可哀そうに、そんなに馬鹿にしたものでもない」と鈴木君は
当らず障さわらずの返事はしたが、何となく落ちつきかねて、例の
金鎖を神経的にいじっている。

「君電気鉄道へ乗ったか」と主人は突然鈴木君に対して奇問を
発する。

「今日は諸君からひやかされに來たようなものだ。なんぼ田舎
者だつて——これでも街鉄がいてつを六十株持つてるよ」

「そりや馬鹿に出来ないな。僕は八百八十八株半持つていたが、
惜しい事に大方虫おおかたが喰つてしまつて、今じゃ半株ばかりしかな
い。もう少し早く君が東京へ出てくれば、虫の喰わないところ
を十株ばかりやるところだつたが惜しい事をした」

「相変らず口が悪るい。しかし冗談は冗談として、ああ云う株
は持つてて損はないよ、年々高ねんねんくなるばかりだから」

「そうだたとい仮令半株だつて千年も持つてゐるうちにや倉が三つくらい建つからな。君も僕もその辺にぬかりはない当世の才子だが、そこへ行くと苦沙弥などは憐れなものだ。株と云えば大根の兄弟分くらいに考えているんだから」とまた羊羹ようかんをつまんで主人の方を見ると、主人も迷亭の食くい氣けが伝染して自おのずから菓子皿の方へ手が出る。世の中では万事積極的のものが人から真似らるる權利を有している。

「株などはどうでも構わんが、僕は曾呂崎そろさきに一度でいいから電車へ乗らしてやりたかつた」と主人は喰はい欠あけた羊羹の齒痕はあとを撫然ぶぜんとして眺める。

「曾呂崎が電車へ乗つたら、乗るたんびに品川まで行つてしまふは、それよりやつぱり天然居士てんねんこじで沢庵石たくあんいしへ彫ほり付けられてる方が無事でいい」

「曾呂崎と云えば死んだそうだな。気の毒だねえ、いい頭の男だった^{ただ}が惜しい事をした」と鈴木君が云うと、迷亭は直ちに引き受けて

「頭は善かったが、飯を焚^たく事は一番下手だったぜ。曾呂崎の当番の時には、僕あいつでも外出をして蕎麦^{そば}で凌^{しの}いでいた」

「ほんとに曾呂崎の焚いた飯は焦^こげくさくつて心^{しん}があつて僕も弱った。御負けに御菜^{おかず}に必ず豆腐をなまで食わせるんだから、冷たくて食われやせん」と鈴木君も十年前の不平を記憶の底から喚^よび起す。

「苦沙弥はあの時代から曾呂崎の親友で每晚いつしよに汁粉^{しるこ}を食いに出たが、その祟^{たた}りで今じや慢性胃弱になつて苦しんでいるんだ。実を云うと苦沙弥の方が汁粉の数を余計食つてゐるから曾呂崎^二より先へ死んで宜^いい訳なんだ」

「そんな論理がどこの国にあるものか。俺の汁粉より君は運動と号して、毎晩竹刀しなひを持つて裏の卵塔婆らんとうばへ出て、石塔を叩たたいてるところを坊主に見つかつて剣突けんつくを食つたじゃないか」と主人も負けぬ氣になつて迷亭の旧惡を曝あばく。

「アハハハそうそう坊主が仏様の頭を叩いては安眠の妨害になるからよしてくれつて言つたつけ。しかし僕のは竹刀だが、この鈴木將軍のは手暴てあらだぜ。石塔と相撲をとつて大小三個ばかり転がしてしまつたんだから」

「あの時の坊主の怒り方は実に烈しかった。是非元のように起せと云うから人足を備やとうまで待つてくれと云つたら人足じやいかん懺悔ざんげの意を表するためにあなたが自身で起きなくては仏の意に背そむくと云うんだからね」

「その時の君の風采ふうさいはなかつたぜ、金巾かなきんのしやつに越中えつちゅう禪ふんどしで

雨上りの水溜りの中でうんうん唸^{うな}つて……」

「それを君がすました顔で写生するんだから苛^{ひど}い。僕はあまり腹を立てた事のない男だが、あの時ばかりは失敬だと心^{しん}から思つたよ。あの時の君の言草をまだ覚えてゐるが君は知つてるか」

「十年前の言草なんか誰が覚えてゐるものか、しかしあの石塔に^{きせんいん}帰泉院殿黄鶴大居士安永五年辰^{たつ}正月と彫^ほつてあつただけはいまだに記憶してゐる。あの石塔は古雅に出来ていたよ。引き越す時に盗んで行きたかつたくらいだ。実に美学上の原理に叶^{かな}つて、ゴシック趣味な石塔だつた」と迷亭はまた好い加減な美学を振り廻す。

「そりやいいが、君の言草がさ。こうだぜ——吾輩は美学を専攻するつもりだから天地間^{てんちかん}の面白い出来事はなるべく写生しておいて将来の参考に供さなければならん、気の毒だの、可哀相^{かわいそう}だ

のと云う私情は學問に忠実なる吾輩ごときものの口にすべきところでないといふ氣で云うのだらう。僕もあんまりな不人情な男だと思つたから泥だらけの手で君の寫生帖を引き裂いてしまつた」

「僕の有望な画才が頓挫して一向振わなくなつたのも全くあの時からだ。君に機鋒を折られたのだね。僕は君に恨がある」

「馬鹿にしちやいけない。こつちが恨めしいくらいだ」

「迷亭はあの時分から法螺吹だつたな」と主人は羊羹を食ひ了つて再び二人の話の中に割り込んで来る。

「約束なんか履行した事がない。それで詰問を受けると決して詫びた事がない何とか蚊とか云う。あの寺の境内に百日紅が咲いていた時分、この百日紅が散るまでに美学原論と云う著述をする」と云うから、駄目だ、到底出来る氣遣はないと云つたのさ。する

と迷亭の答えに僕はこう見えても見掛けに寄らぬ意志の強い男である、そんなに疑うなら賭かけをしようと言うから僕は真面目に受けて何でも神田の西洋料理を奢おごりつこかなにかに極きめた。きつと書物なんか書く気遣はないと思つたから賭をしたようなものの内心は少々恐ろしかつた。僕に西洋料理なんか奢る金はないんだからな。ところが先生一向稿いつこうを起す景色けしきがない。七日立つても二十日はつか立つても一枚も書かない。いよいよ百日紅が散つて一輪の花もなくなつても当人平気でいるから、いよいよ西洋料理に有りついたなと思つて契約履行を逼せまると迷亭すまして取り合わない」

「また何とか理窟りくつをつけたのかね」と鈴木君が相の手を入れる。「うん、実にずうずうしい男だ。吾輩はほかに能はないが意志だけは決して君方に負けはせんと剛情を張るのさ」

「一枚も書かんのにか」と今度は迷亭君自身が質問をする。

「無論さ、その時君はこう云ったぜ。吾輩は意志の一点において
なんびとはあえて何人にも一步も譲らん。しかし残念な事には記憶が
人一倍無い。美学原論を著わそうとする意志は充分あったのだ
がその意志を君に発表した翌日から忘れてしまった。それだから
百日紅の散るまでに著書が出来なかつたのは記憶の罪で意志
の罪ではない。意志の罪でない以上は西洋料理などを奢る理由
がないと威張っているのさ」

「なるほど迷亭君一流の特色を發揮して面白い」と鈴木君はな
ぜだか面白がつている。迷亭のおらぬ時の語気とはよほど違つ
ている。これが利口な人の特色かも知れない。

「何が面白いものか」と主人は今でも怒つておこいる様子である。
「それは御気の毒様、それだからその埋合せをするために孔雀くじやく

の舌なんかを金と太鼓で探しているじゃないか。まあそう怒おこらずに待っているさ。しかし著書と云えば君、今日は一大珍報もたを齎もたらして来たんだよ」

「君はくるたびに珍報を齎らす男だから油断が出来ん」

「ところが今日の珍報は真の珍報さ。正札付一厘も引けなしの珍報さ。君寒月が博士論文の稿を起したのを知っているか。寒月はあるな妙に見識張った男だから博士論文なんて無趣味な労力はやるまいと思つたら、あれでやつぱり色気があるからおかしいじゃないか。君あの鼻に是非通知してやるがいい、この頃は団栗博士どんぐりはかせの夢でも見ているかも知れない」

鈴木君は寒月の名を聞いて、話してはいけぬ話してはいけぬと頤あごと眼で主人に合図する。主人には一向意味が通じない。さつき鈴木君に逢つて説法を受けた時は金田の娘の事ばかりが気の

毒になつたが、今迷亭から鼻々と云われるとまた先日喧嘩をした事を思い出す。思い出すと滑稽でもあり、また少々は悪らしくもなる。しかし寒月が博士論文を草しかけたのは何よりの御見やげで、こればかりは迷亭先生自賛のごとくまずまず近来の珍報である。啻に珍報のみならず、嬉しい快よい珍報である。金田の娘を貰おうが貰うまいがそんな事はまずどうでもよい。とにかく寒月の博士になるのは結構である。自分のように出来損いの木像は仏師屋の隅で虫が喰うまで白木のまま燻くすぶつていても遺憾いかんはないが、これは旨く仕上がったと思う彫刻には一日も早く箔はくを塗つてやりたい。

「本当に論文を書きかけたのか」と鈴木君の合図はそつち除のけにして、熱心に聞く。

「よく人の云う事を疑ぐる男だ。——もつとも問題は団栗どんぐりだか

首縊^{くびく}りの力学だか確^{しか}と分らんがね。とにかく寒月の事だから鼻の恐縮するようなものに違いない」

さつきから迷亭が鼻々と無遠慮に云うのを聞きたんびに鈴木君は不安の様子をする。迷亭は少しも気が付かないから平気なものである。

「その後鼻についてまた研究をしたが、この頃トリストラム・シャンデーの中に鼻論^{はなろん}があるのを発見した。金田の鼻などもスタンに見せたら善い材料になつたろうに残念な事だ。鼻名^{びめい}を千載^{せんざい}に垂れる資格は充分ありながら、あのままで朽^くち果つるとは不憫^{ふびん}千万だ。今度ここへ来たら美学上の参考のために写生してやろう」と相変らず口から出任^{でまか}せに喋^{しゃべ}舌^{しやべ}り立てる。

「しかしあの娘は寒月の所へ来たいのだそうだ」と主人が今鈴木君から聞いた通りを述べると、鈴木君はこれは迷惑だと云う

顔付をしてしきりに主人に目くばせをするが、主人は不導体のごとく一向電氣に感染しない。

「ちよつと乙おつだな、あんな者の子でも恋をするところが、しかし大した恋じゃなからう、大方鼻恋はなごいくらいなところだぜ」

「鼻恋でも寒月が貰えばいいが」

「貰えばいいがつて、君は先日大反対だつたじゃないか。今日はいやに軟化しているぜ」

「軟化はせん、僕は決して軟化はせんしかし……」

「しかしどう、かしたんだろう。ねえ鈴木、君も実業家の末席ばつせきを

汚けがす一人だから参考のために言つて聞かせるがね。あの金田某

なる者さ。あの某なるものの息女などを天下の秀才水島寒月の

令夫人と崇あがめ奉るのは、少々提灯と釣鐘と云う次第で、我々朋友ほうゆう

たる者が冷々れいれい黙過する訳に行かん事だと思ふんだが、たとい実

業家の君でもこれには異存はあるまい」

「相変らず元気がいいね。結構だ。君は十年前と容ようす子が少しも変つていないからえらい」と鈴木君は柳に受けて、胡ご麻ま化かそうとする。

「えらいと褒ほめるなら、もう少し博学なところを御目にかけるがね。昔むかしの希臘人ギリシヤじんは非常に体育を重んじたものであらゆる競技に貴重なる懸賞を出して百方奨励の策を講じたものだ。しかるに不思議な事には学者の智識ちしきに対してのみは何等の褒美ほうびも与えたと云う記録がなかったので、今日こんにちまで実は大に怪しんでいたところさ」

「なるほど少し妙だね」と鈴木君はどこまでも調子を合せる。

「しかるについ両三日前ぎだんに至つて、美学研究の際ふとその理由を発見したので多年の疑團ぎだんは一度に氷解しつぷう。漆桶しつぷうを抜くがごとく

痛快なる悟りを得て歎天喜地の至境に達したのさ」

あまり迷亭の言葉が仰山ぎやうざんなので、さすが御上手者の鈴木君も、こりや手に合わないと云う顔付をする。主人はまた始まつたなと云わぬばかりに、象牙ぞうげの箸はしで菓子皿ふちの縁をかんかん叩いて俯うつ向むいている。迷亭だけは得意で弁じつづける。

「そこでこの矛盾なる現象の説明を明記して、暗黒の淵ふちから吾人の疑せんざいを千載もとの下に救い出してくれた者は誰だと思う。学問あつて以来の学者と称せらるる彼の希臘ギリシヤの哲人、逍遙派しやうようはの元祖アリストートルその人である。彼の説明に曰いわくさ——おい菓子皿などを叩かんで謹聴していなくちやいかん。——彼等希臘人が競技において得るところの賞与は彼等が演ずる技芸その物より貴重なものである。それ故に褒美ほうびにもなり、奨励の具ともなる。しかし智識その物に至つてはどうである。もし智識に対する報

酬として何物をか与えんとするならば智識以上の価値あるものを与えざるべからず。しかし智識以上の珍宝が世の中にあるか。無論あるはずがない。下手なものをやれば智識の威厳を損する訳になるばかりだ。彼等は智識ちしきに対して千両箱をオリムパスの山ほど積み、クリーサスの富を傾け尽かつむしても相当の報酬を与えんとしたのであるが、いかに考えても到底釣り合うはずがないと云う事を観破かんぱして、それより以来と云うものは奇麗さっぱり何にもやらない事にしてしまった。黄白青銭こうはくせいせんが智識の匹敵ひつてきでない事はこれで十分理解出来るだろう。さてこの原理を服膺ふくようした上で時事問題に臨のぞんで見るがいい。金田某は何だい紙幣さつに眼鼻をつけただけの人間じゃないか、奇警なる語をもつて形容するならば彼は一個の活動紙幣かつどうしへいに過ぎんのである。活動紙幣の娘なら活動切手くらいなところだろう。翻ひるがえつて寒月君は如何と見

ればどうだ。辱けなくも学問最高の府を第一位に卒業して毫もごうも倦怠けんたいの念なく長州征伐時代の羽織の紐をぶら下げて、日夜団栗どんぐりのスタビリチーを研究し、それでもなお満足する様子もなく、近々きんきんの中ロード・ケルヴィンを圧倒するほどの大論文を発表しようとしつつあるではないか。たまたま吾妻橋を通り掛つて身投げの芸を仕損じた事はあるが、これも熱誠なる青年に有りがちの発作的所為ほっさてきしよいで毫もごう彼が智識の問屋たるに煩いわづらを及ぼすほどの出来事ではない。迷亭一流の喩たとえをもつて寒月君を評すれば彼は活動図書館である。智識をもつて捏ね上げたこる二十八珊サンチの弾丸である。この弾丸が一たび時機を得て学界に爆発するなら、——もし爆発して見給え——爆発するだろう——」迷亭はここに至つて迷亭一流と自称する形容詞が思うように出て来ないので俗に云う竜頭蛇尾りゅうとうとうだびの感に多少ひるんで見えたがたちまち「活

動切手などは何千万枚あつたつて粉な微塵みじんになつてしまふさ。それだから寒月には、あんな釣り合わない女性によしやうは駄目だ。僕が不承知だ、百獸の中うちでもつとも聡明なる大象と、もつとも貪婪たんらんなる小豚と結婚するようなものだ。そうだろう苦沙弥君」と云つて退のけると、主人はまた黙つて菓子皿を叩き出す。鈴木君は少し凹へこんだ気味で

「そんな事も無かろう」と術じゆつなげに答える。さつきまで迷亭の悪口を随分ついた揚句ここで無暗むやみな事を云うと、主人のような無法者はどんな事を素すつ破ぱ抜くか知れない。なるべくここは好加減に迷亭の鋭鋒をあしらつて無事に切り抜けるのが上分別なのである。鈴木君は利口者である。いらざる抵抗は避けらるるだけ避けるのが当世で、無要の口論は封建時代の遺物と心得ている。人生の目的は口舌こうぜつではない実行にある。自己の思い通り

に着々事件が進捗しんちよくすれば、それで人生の目的は達せられたのである。苦勞と心配と争論とがなくて事件が進捗すれば人生の目的は極樂流ごくらくりゅうに達せられるのである。鈴木君は卒業後この極樂主義によつて成功し、この極樂主義によつて金時計をぶら下げ、この極樂主義で金田夫婦の依頼をうけ、同じくこの極樂主義でまんまと首尾よく苦沙弥君を説き落して当該事件とうがいが十中八九まで成就じょうじゆしたところへ、迷亭なる常規をもつて律すべからざる、普通の人間以外の心理作用を有するかと怪まるる風来坊ふうらいぼうが飛び込んで来たので少々その突然なるに面喰めんくらつているところである。極樂主義を發明したものは明治の紳士で、極樂主義を実行するものは鈴木藤十郎君で、今この極樂主義で困却しつつあるものもまた鈴木藤十郎君である。

「君は何にも知らんからそう、でもな、かう、などと澄し返つて、

例になく言葉寡ことばずくなに上品に控ひかえ込むが、せんだつてあの鼻の主が来た時の容子ようすを見たらいかに実業家びいぎ最負の尊公でも辟易へきえきするに極きまつてるよ、ねえ苦沙弥君、君大おおに奮闘したじゃないか」

「それでも君より僕の方が評判がいいそうだ」

「アハハハなかなか自信が強い男だ。それでなくてはサヴェジ・チーなんて生徒や教師にからかわれてすまして学校へ出ちやいられん訳だ。僕も意志は決して人に劣らんつもりだが、そんなに図太くは出来ん敬服の至りだ」

「生徒や教師が少々愚図愚図言つたつて何が恐ろしいものか、サントブーヴは古今独歩の評論家であるが巴里パリ大学で講義をした時は非常に不評判で、彼は学生の攻撃に應ずるため外出の際必ずあいくちヒ首を袖そでの下に持つて防禦ぼうぎよの具となした事がある。ブルヌチエルがやはり巴里の大学でゾラの小説を攻撃した時は……」

「だつて君や大学の教師でも何でもないじゃないか。高がリードルの先生でそんな大家を例に引くのは雑魚ざこが鯨くじらをもつて自らみずか喩たとえるようなもんだ、そんな事を云うとなおからかわれるぜ」

「黙っている。サントブーヴだつて俺だつて同じくらいな学者だ」

「大変な見識だな。しかし懐剣をもつて歩行あるくだけにはあぶないから真ま似ねない方がいいよ。大学の教師が懐剣ならリードルの教師はまあ小刀こがたなくらいなところだな。しかしそれにしても刃物けんは剣呑のんだから仲見世なかみせへ行つておもちゃの空気銃を買つて来て背負しよつてあるくがよかろう。愛嬌あいぎようがあつていい。ねえ鈴木君」と云うと鈴木君はようやく話が金田事件を離れたのでほつと一息つきながら

「相変らず無邪気で愉快だ。十年振りで始めて君等に逢つたん

で何だか窮屈な路次^{ろじ}から広い野原へ出たような氣持がする。どうも我々仲間の談話は少しも油断がならなくてね。何を云うにも氣をおかなくちやならんから心配で窮屈で実に苦しいよ。話は罪がないのがいいね。そして昔しの書生時代の友達と話すのが一番遠慮がなくつていい。ああ今日は凶^{はか}らず迷亭君に遇^あつて愉快だった。僕はちと用事があるからこれで失敬する」と鈴木君が立ち懸^かけると、迷亭も「僕もいこう、僕はこれから日本橋^{えんげいきようふうかい}の演芸矯風会に行かなくつちやならんから、そこまでいつしよに行こう」「そりやちようどいい久し振りでいつしよに散歩しよ」と両君は手を携^{たずさ}えて帰る。

二十四時間の出来事を洩れなく書いて、洩れなく読むには少なくとも二十四時間かかるだろう、いくら写生文を鼓吹こすいする吾輩でもこれは到底猫の企て及ぶべからざる芸当と自白せざるを得ない。従つていかに吾輩の主人が、二六時中精細なる描写に価値する奇言奇行を弄ろうするにも関かわらず逐一これを読者に報知するの能力と根氣のないのはなはだ遺憾いかんである。遺憾ではあるがやむを得ない。休養は猫といえども必要である。鈴木君と迷亭君の帰つたあとは木枯こがらしのはたと吹き息やんで、しんしんと降る雪の夜のごとく静かになつた。主人は例のごとく晝斎こもへ引き籠る。小供は六畳の間まへ枕をならべて寝る。一間半の襖ふすまを隔てて南向の室へやには細君が数え年三つになる、めん子さんと添乳そえちして横になる。花曇りに暮れを急いだ日は疾とく落ちて、表を通る駒下駄の音さえ手に取るように茶の間へ響く。隣町の下宿で明笛みんてきを吹

くのが絶えたり続いたりして眠い耳底に折々鈍い刺激を与える。
外面は大方臃おぼろであろう。晚餐に半はんぺんの煮汁だしで鮑貝あわびがいをからにした腹ではどうしても休養が必要である。

ほのかに承うけたまわれば世間には猫の恋とか称する俳諧趣味の現象があつて、春さきは町内の同族共の夢安からぬまで浮かれ歩あるく夜もあるとか云うが、吾輩はまだかかる心的變化に遭逢そうほうした事はない。そもそも恋は宇宙的の活力である。上は在天の神ジュピターより下は土中に鳴く蚯蚓みみず、おけらに至るまでこの道にかけて浮身やつを窺うかがうのが万物の習いであるから、吾輩どもが臃おぼろうれしと、物騒な風流氣を出すのも無理のない話しである。回顧すればかく云いう吾輩も三毛子みけこに思い焦こがれた事もある。三角主義の張本金田君の令嬢阿倍川の富子さえ寒月君に恋慕したと云う噂うわさである。それだから千金しゆんしょうの春宵を心も空に満天下の雌猫雄猫が狂

い廻るのを煩惱ぼんのうの迷まよのと輕蔑けいべつする念は毛頭ないのであるが、い
かんせん誘われてもそんな心が出ないから仕方がない。吾輩目
下の状態はただ休養を欲するのみである。こう眠くては恋も出
来ぬ。のそのそと小供の布団ふとんの裾すそへ廻まつて心地こちよ快く眠る。……

ふと眼を開あいて見ると主人はいつの間にか書齋から寢室へ来
て細君の隣に延べてある布団ふとんの中にいつの間にか潜もぐり込んでい
る。主人の癖として寝る時は必ず横文字の小本こほんを書齋から携たずさえ
て来る。しかし横になつてこの本を二頁ページと続けて読んだ事はな
い。ある時は持つて来て枕元へ置いたなり、まるで手を触れぬ
事さえある。一行も読まぬくらいならわざわざ提さげてくる必要
もなさそうなものだが、そこが主人の主人たるところでいくら
細君が笑つても、止せと云つても、決して承知しない。毎夜読ま
ない本をご苦労千万にも寢室まで運んでくる。ある時は慾張つ

て三四冊も抱えて来る。せんだつてじゆうは毎晩ウェブスターの大字典さえ抱えて来たくらいである。思うにこれは主人の病気で贅沢ぜいたくな人が竜文堂りゆうぶんどうに鳴る松風の音を聞かないと寝つかれないごとく、主人も書物を枕元に置かないと眠れないのであろう、して見ると主人に取つては書物は読む者ではない眠を誘う器械である。活版の睡眠剤である。

今夜も何か有るだろうと覗のぞいて見ると、赤い薄い本が主人の口髻くちひげの先につかえるくらいな地位に半分開かれて転がっている。主人の左の手の拇指おやゆびが本の間に挟はさまったままであるところから推おすと奇特にも今夜は五六行読んだものらしい。赤い本と並んで例のごとくニツケルの袂時計たもとどけいが春に似合わぬ寒き色を放っている。

細君は乳呑児ちのみごを一尺ばかり先へ放り出して口を開あいていびき

をかいて枕を外はずしている。およそ人間において何が見苦しいと云つて口を開けて寝るほどの不体裁はあるまいと思う。猫などは生涯しょうがいこんな恥をかいた事がない。元来口は音を出すため鼻は空気を吐とどん吞するための道具である。もつとも北の方へ行くと人間が無精になつてなるべく口をあくまいと儉約をする結果鼻で言語を使うようなズーズーもあるが、鼻を閉塞へいそくして口ばかりで呼吸の用を弁じているのはズーズーよりも見ともないと思う。第一天井から鼠ねずみの糞ふんでも落ちた時危険である。

小供の方とは見るとこれも親に劣らぬ体ていたらくで寝そべっている。姉のとな子は、姉の権利はこんなものだと言わぬばかりにうんと右の手を延ばして妹の耳の上へのせている。妹のすん子はその復讐ふくしゅうに姉の腹の上に片足をあげて踏反ふんぞり返っている。双方共寝た時の姿勢より九十度はたしかに廻転している。しか

もこの不自然なる姿勢を維持しつつ兩人とも不平も云わずおとなしく熟睡している。

さすがに春の灯火は格別である。天真爛漫ながら無風流極まるこの光景の裏に良夜を惜しめとばかり床しげに輝やいて見える。もう何時なんじだろうと室の中を見廻すと四隣はしんとしてただ聞えるものは柱時計と細君のいびきと遠方で下女の齒軋はぎしりをする音のみである。この下女は人から齒軋りをすると云われるといつでもこれを否定する女である。私は生れてから今日に至るまで齒軋りをした覚おぼえはございませんと強情を張って決して直しましようとも御氣の毒でございませうとも云わず、ただそんな覚はございませんと主張する。なるほど寝ていてする芸だから覚はないに違ない。しかし事實は覚がなくても存在する事があるから困る。世の中には悪い事をしておりながら、自分はどこま

でも善人だと考えているものがある。これは自分が罪がないと自信しているのだから無邪気で結構ではあるが、人の困る事實はいかに無邪気でも滅却する訳には行かぬ。こう云う紳士淑女はこの下女の系統に属するのだと思う。——夜は大分更けたようだ。

台所の雨戸にトントンと二返ばかり軽く中つた者がある。はてな今頃人の来るはずがない。大方例の鼠だろう、鼠なら捕らんと事に極めていゝから勝手にあばれるが宜しい。——またトントンと中る。どうも鼠らしくない。鼠としても大変用心深い鼠である。主人の内の鼠は、主人の出る学校の生徒のごとく日中でも夜中でも乱暴狼藉の練修に余念なく、惘然なる主人の夢を驚破するのを天職のごとく心得ている連中だから、かくのごとく遠慮する訳がない。今のはたしかに鼠ではない。せんだつて

などは主人の寢室にまで闖入^{ちんにゆう}して高からぬ主人の鼻の頭を嚙^かんで凱歌^{がい}を奏して引き上げたくらいの鼠にしてはあまり臆病すぎる。決して鼠ではない。今度はギーと雨戸を下から上へ持ち上げる音がする、同時に腰障子を出来るだけ緩^{ゆる}やかに、溝に添うて滑^{すべ}らせる。いよいよ鼠ではない。人間だ。この深夜に人間が案内も乞^{とじまり}わず戸締^はを外ずして御光来になるとすれば迷亭先生や鈴木君ではないに極^{きま}っている。御高名だけはかねて承^{うけたま}わっている泥棒陰士ではないか知らん。いよいよ陰士とすれば早く尊顔^{そんがん}を拝^{あが}したいものだ。陰士は今や勝手の上に大いなる泥足を上げてふたあし二足ばかり進んだ模様である。三足目と思う頃^{あげいた}揚板^{つまず}に蹶^{つまず}いてか、ガタリと夜^{よる}に響くような音を立てた。吾輩の背^せ中の毛^{なか}が靴刷毛^{くつばけ}で逆に擦^こすられたような心持がする。しばらくは足音もしない。細君を見ると未^まだ口をあいて太平の空気を夢中に吐吞^{とどん}している。

主人は赤い本に拇指おやゆびを挟はさまれた夢でも見ているのだろう。やがて台所でマチを擦する音が聞える。陰士でも吾輩ほど夜陰に眼は利きかぬと見える。勝手がわるくて定めし不都合だろう。

この時吾輩は蹲踞うずくまりながら考えた。陰士は勝手から茶の間の方面へ向けて出現するのであるうか、または左へ折れ玄関を通過して書斎へと抜けるであろうか。——足音は襖ふすまの音と共に椽側えんがわへ出た。陰士はいよいよ書斎へ這入はいった。それぎり音も沙汰もない。

吾輩はこの間まに早く主人夫婦を起してやりたいものだとうやく気が付いたが、さてどうしたら起きるやら、一向要領いっとうを得ん考のみが頭の中に水車の勢で廻転するのみで、何等の分別もない。布団ふとんの裾すそを唧くわえて振って見たらと思つて、二三度やつて見たが少しも効用がない。冷たい鼻を頬すに擦り付けたらと思つ

て、主人の顔の先へ持つて行つたら、主人は眠つたまま、手をうんと延ばして、吾輩の鼻づらを否^いやと云うほど突き飛ばした。鼻は猫にとつても急所である。痛む事おびただしい。此度^{こんど}は仕方がないからにやーにやーと二返ばかり鳴いて起こそうとしたが、どう云うものかこの時ばかりは咽喉^{のど}に物が痞^{つか}えて思うような声が出ない。やつとの思いで渋りながら低い奴を少々出すと驚いた。肝心^{かんじん}の主人は覚^さめる気色^{けしき}もないのに突然陰士の足音がし出した。ミチリミチリと椽側^{つた}を伝つて近づいて来る。いよいよ来たな、こうなつてはもう駄目だと諦^{あきら}らめて、襖^{ふすま}と柳行李^{やなぎごうり}の間にしばしの間身を忍ばせて動静を窺^{うか}がう。

陰士の足音は寢室の障子の前へ来てぴたりと已^やむ。吾輩は息を凝^こらして、この次は何をするだろうと一生懸命になる。あとで考えたが鼠を捕^とる時は、こんな気分になれば訳はないのだ、

魂が両方の眼から飛び出しそうな勢である。陰士の御蔭で二度とない悟を開いたのは実にありがたい。たちまち障子の棧の三つ目が雨に濡れたように真中だけ色が変わる。それを透して薄紅なものだんだん濃く写ったと思うと、紙はいつか破れて、赤い舌がぺろりと見えた。舌はしばしの間に暗い中に消える。入れ代つて何だか恐しく光るものが一つ、破れた孔の向側にあらわれる。疑いもなく陰士の眼である。妙な事にはその眼が、部屋の中にある何物をも見ないで、ただ柳行李の後に隠れていた吾輩のみを見つめているように感ぜられた。一分にも足らぬ間ではあったが、こう睨まれては寿命が縮まると思つたくらいである。もう我慢出来んから行李の影から飛出そうと決心した時、寢室の障子がスーと明いて待ち兼ねた陰士がついに眼前にあらわれた。

吾輩は叙述の順序として、不時の珍客なる泥棒陰士その人をこの際諸君に御紹介するの榮譽を有する訳であるが、その前ちよつと卑見を開陳かいちんしてご高慮を煩わづらわしたい事がある。古代の神は全智全能と崇めあがられている。ことに耶蘇教ヤソキョウの神は二十世紀の今日までもこの全智全能の面めんを被かぶつてゐる。しかし俗人の考うる全智全能は、時によると無智無能とも解釈が出来る。こう云うのは明かにパラドックスである。しかるにこのパラドックスを道破どうはした者は天地開闢てんちかいびやく以来吾輩のみであろうと考えると、自分ながら満まんぞく更な猫でもないと言ふ虚栄心も出るから、是非共ここにその理由を申し上げて、猫も馬鹿に出来ないと言ふ事を、高慢なる人間諸君の脳裏のうりに叩き込みたいと考える。天地万有は神が作つたそうな、して見れば人間も神の御製作であらう。現に聖書とか云うものにはその通りと明記してあるそうだ。さてこの人間

について、人間自身が数千年来の観察を積んで、大に玄妙不思議おおいがると同時に、ますます神の全智全能を承認するように傾いた事実がある。それは外ほかでもない、人間もかようにうじゃうじゃいるが同じ顔をしている者は世界中に一人もいない。顔の道具は無論極きまつている、大さおおきも大概は似たり寄つたりである。換言すれば彼等は皆同じ材料から作り上げられている、同じ材料で出来ているにも関わらず一人も同じ結果に出来上つておらん。よくまああれだけの簡単な材料でかくまで異様な顔を思いついた者だと思つと、製造家の伎倆ぎりょうに感服せざるを得ない。よほど独創的な想像力がないとこんな変化は出来なのである。一代の画工が精力を消耗しょうこうして変化を求めた顔でも十二三種以外に出る事が出来んのをもつて推おせば、人間の製造を一手いつてで受負うけおつた神の手際てぎわは格別な者だと驚嘆せざるを得ない。到底人間社会において

て目撃し得ざる底の伎倆であるから、これを全能的伎倆と云つても差し支えないだろう。人間はこの点において大に神に恐れ入っているようである、なるほど人間の観察点から云えばもつともな恐れ入り方である。しかし猫の立場から云うと同一の事実がかえつて神の無能力を証明しているとも解釈が出来る。もし全然無能でなくとも人間以上の能力は決してない者であると断定が出来るだろうと思う。神が人間の数だけそれだけ多くの顔を製造したと云うが、当初から胸中に成算があつてかほどの変化を示したもののか、または猫も杓子も同じ顔に造ろうと思つてやりかけて見たが、とうてい旨く行かなくて出来るのも出来ないものも作り損ねてこの乱雑な状態に陥つたものか、分らんではないか。彼等顔面の構造は神の成功の紀念と見らるると同時に失敗の痕迹とも判ぜらるるではないか。全能とも云えようが、

無能と評したつて差し支えはない。彼等人間の眼は平面の上に二つ並んでいるので左右を一時^{いちじ}に見る事が出来んから事物の平面だけしか視線内に這入^{はい}らんのは気の毒な次第である。立場を換^かえて見ればこのくらい単純な事実は彼等の社会に日夜間断なく起りつつあるのだが、本人逆^{のぼ}せ上がつて、神に吞^のまれているから悟りようがない。製作の上に変化をあらわすのが困難であるならば、その上に徹頭徹尾の模倣^{もこう}を示すのも同様に困難である。ラファエルに寸分違わぬ聖母の像を二枚かけと注文するのは、全然似寄らぬマドンナを双幅^{そうふく}見せろと逼^{せま}ると同じく、ラファエルにとつては迷惑であらう、否同じ物を二枚かく方がかえつて困難かも知れぬ。弘法大師に向つて昨日^{きのう}書いた通りの筆法で空海と願いますと云う方がまるで書体を換^かえてと注文されるよりも苦しいかも分らん。人間の用うる国語は全然模倣^{もこうしゆぎ}主義で伝

習するものである。彼等人間が母から、乳母^{うば}から、他人から実用上の言語を習う時には、ただ聞いた通りを繰り返すよりほかに毛頭の野心はないのである。出来るだけの能力で人真似をするのである。かように人真似から成立する国語が十年二十年と立つうち、発音に自然と変化を生じてくるのは、彼等に完全なる模倣^{もそう}の能力がないと云う事を証明している。純粹の模倣^{もそう}はかくのごとく至難なものである。従つて神が彼等人間を区別の出来ぬよう、悉皆^{しつがい}焼印の御かめのごとく作り得たならばますます神の全能を表明し得るもので、同時に今日^{こんにち}のごとく勝手次第な顔を天日^{てんぴ}に曝^さらさして、目まぐるしきまでに変化を生ぜしめたのはかえつてその無能力を推知し得るの具ともなり得るのである。

吾輩は何の必要があつてこんな議論をしたか忘れてしまった。

もと
本を忘却するのは人間にさえありがちの事であるから猫には当然の事さと大目に見て貰いたい。とにかく吾輩は寢室の障子をあけて敷居の上にぬつと現われた泥棒陰士を瞥見した時、以上の感想が自然と胸中に湧き出たのである。なぜ湧いた？——なぜと云う質問が出れば、今一応考え直して見なければならん。——ええと、その訳はこうである。

吾輩の眼前に悠然とあらわれた陰士の顔を見るとその顔が——
ふだん
平常神の製作についてその出来栄をあるいは無能の結果ではあるまいかと疑っていたのに、それを一時に打ち消すに足るほどな特徴を有していたからである。特徴とはほかではない。彼の^{びもく}眉目がわが親愛なる好男子水島寒月君に瓜二つであると云う事実である。吾輩は無論泥棒に多くの知己は持たぬが、その行為の乱暴なところから平常想像して私かに胸中に描いていた顔は

ないでもない。小鼻の左右に展開した、一銭銅貨くらいの眼をつけた、毬栗頭いがぐりあたまにきまつていると自分で勝手に極めたのであるが、見ると考えるとは天地の相違、想像は決して遅くするものではない。この陰士は背せいのすらりとした、色の浅黒い一の字眉の、意気で立派な泥棒である。年は二十六七歳でもあろう、それすら寒月君の写生である。神もこんな似た顔を二個製造し得る手際てぎわがあるとすれば、決して無能をもつて目する訳には行かぬ。いや実際の事を云うと寒月君自身が気が変になつて深夜に飛び出して来たのではあるまいかと、はつと思つたくらいよく似ている。ただ鼻の下に薄黒く髯ひげの芽生めえが植え付けてないの
でさては別人だと気が付いた。寒月君は苦味にがみばしつた好男子で、活動小切手と迷亭から称せられたる、金田富子嬢を優に吸収するに足るほどな念入れの製作物である。しかしこの陰士も人相

から觀察するとその婦人に対する引力上の作用において決して寒月君に一步も譲らない。もし金田の令嬢が寒月君の眼付や口先に迷ったのなら、同等の熱度をもつてこの泥棒君にも惚れ込まなくては義理が悪い。義理はとにかく、論理に合わない。ああ云う才気のある、何でも早分りのする性質だからこのくらいの事は人から聞かんでもきつと分るであろう。して見ると寒月君の代りにこの泥棒を差し出しても必ず満身の愛を捧げて琴瑟調和の実を挙げらるるに相違ない。万一寒月君が迷亭などの説法に動かされて、この千古の良縁が破れるとしても、この陰土が健在であるうちは大丈夫である。吾輩は未来の事件の発展をここまで予想して、富子嬢のために、やつと安心した。この泥棒君が天地の間に存在するのは富子嬢の生活を幸福ならしむる一大要件である。

陰士は小脇になにか抱えている。見ると先刻主人が書齋へ放り込んだ古毛布ふるげつとである。唐棧とうざんの半纏はんてんに、御納戸おなんどの博多はかたの帯を尻の上にむすんで、生白なましろい脛すねは膝ひざから下むき出しのまま今や片足を挙げて畳の上へ入れる。先刻さつきから赤い本に指を噛かまれた夢を見ていた、主人はこの時寝返りを堂どうと打ちながら「寒月だ」と大きな声を出す。陰士は毛布けつとを落して、出した足を急に引き込ます。障子の影に細長い向脛むこうすねが二本立ったまま微かすかに動くのが見える。主人はうーん、むにやむにやと云いながら例の赤本を突き飛ばして、黒い腕ひぜんやを皮癬病ひぜんやみのようにぼりぼり搔かく。そのあとは静まり返って、枕をはずしたなり寝てしまふ。寒月だと云ったのは全く我知らずの寝言と見える。陰士はしばらく橡側えんがわに立ったまま室内の動静をうかがっていたが、主人夫婦の熟睡しているのを見済みすましてまた片足を畳の上に入れる。今度は寒月

だと云う声も聞えぬ。やがて残る片足も踏み込む。一穂の春灯いつすい しゅんとうで豊かに照らされていた六畳の間は、陰士の影に鋭どく二分せられて柳行李やなぎこりの辺へんから吾輩の頭の上を越えて壁の半なかばが真黒になる。振り向いて見ると陰士の顔の影がちようど壁の高さの三分の二の所に漠然ぼくぜんと動いている。好男子も影だけ見ると、八やつ頭がしらの化け物ばもののごとくまことに妙な恰好かつこうである。陰士は細君の寝顔を上から覗のぞき込んで見たが何のためかにやにやと笑った。笑い方までが寒月君の模写であるには吾輩も驚いた。

細君の枕元には四寸角の一尺五六寸ばかりの釘くぎづ付けにした箱が大事そうに置いてある。これは肥前の国は唐津の住人多々良三平君たたらさんぺいくんが先日帰省した時御土産おみやげに持って来た山の芋いもである。山の芋を枕元へ飾って寝るのはあまり例のない話ではあるがこの細君は煮物に使う三盆さんぼんを用筆筒ようだんすへ入れるくらい場所の適不適と云う

觀念に乏しい女であるから、細君にとれば、山の芋は愚か、沢庵
が寢室に在^あつても平氣かも知れん。しかし神ならぬ陰士はそん
な女と知ろうはずがない。かくまで鄭重^{ていちょう}に肌身に近く置いてあ
る以上は大切な品物であらうと鑑定するのも無理はない。陰士
はちよつと山の芋の箱を上げて見たがその重さが陰士の予期と
合して大分^{だいぶん}目方が懸^かりそうなのですこぶる満足の体^{てい}である。い
よいよ山の芋を盗むなと思つたら、しかもこの好男子にして山
の芋を盗むなと思つたら急におかしくなつた。しかし滅多^{めった}に声
を立てると危険であるからじつと泳^{こら}えている。

やがて陰士は山の芋の箱を恭^{うやうや}しく古毛布にくるみ初めた。な
にかからげるものはないかとあたりを見廻す。と、幸い主人が寢
る時に解^ときすてた縮緬^{ちりめん}の兵古帯^{へこおび}がある。陰士は山の芋の箱をこ
の帯でしつかり括^{くく}つて、苦もなく背中へしよう。あまり女が好^すく

体裁ではない。それから小供のちゃんちゃんを二枚、主人のめり安やすの股引ももひきの中へ押し込むと、股のあたりが丸く膨ふくれて青大將あおだいらしょうが蛙かえるを飲んだような——あるいは青大將の臨月りんげつと云う方がよく形容し得るかも知れん。とにかく変な恰好かっこうになった。嘘だと思ふなら試しにやってみるがよろしい。陰土はめり安をぐるぐる首くびつ環たまへ捲まきつけた。その次はどうするかと思うと主人の紬つむぎの上着を大風呂敷のように拡ひろげてこれに細君の帯と主人の羽織と繻絆じゅばんとその他あらゆる雑物ぞうもつを奇麗に畳んでくるみ込む。その熟練と器用なやり口にもちよつと感心した。それから細君の帶上げとしごきとを続つぎ合わせてこの包みを括くくって片手にさげる。まだ頂戴ちやうだいするものは無いかたと、あたりを見廻していたが、主人の頭の先に「朝日」の袋があるのを見付けて、ちよつと袂たもとへ投げ込む。またその袋の中から一本出してランプに翳かざして火を

点ける。旨まそうに深く吸つて吐き出した煙りが、乳色のホヤを繞つてまだ消えぬ間に、陰土の足音は椽側を次第に遠のいて聞えなくなつた。主人夫婦は依然として熟睡している。人間も存外迂濶なものである。

吾輩はまた暫時の休養を要する。のべつに喋舌つていては身体が続かない。ぐつと寝込んで眼が覚めた時は弥生の空が朗らかに晴れ渡つて勝手口に主人夫婦が巡査と対談をしている時であつた。

「それでは、ここから這入つて寢室の方へ廻つたんですな。あなた方は睡眠中で一向気がつかかなかつたのですな」

「ええ」と主人は少し極りがわるそうである。

「それで盗難に罹つたのは何時頃ですか」と巡査は無理な事を聞く。時間が分るくらいなら何にも盗まれる必要はないのであ

る。それに気が付かぬ主人夫婦はしきりにこの質問に対して相談をしている。

「何時頃かな」

「そうですね」と細君は考える。考えれば分ると思つていらしい。

「あなたは夕べ何時に御休みになつたんですか」

「俺の寝たのは御前よりあとだ」

「ええ私わたくししの伏せつたのは、あなたより前です」

「眼が覚めたのは何時だつたかな」

「七時半でしたらう」

「すると盗賊の這入はいつたのは、何時頃になるかな」

「なんでも夜なかでしょう」

「夜中よなかは分りきつてゐるが、何時頃かと云うんだ」

「たしかなところはよく考えて見ないと分りませんわ」と細君はまだ考えるつもりでいる。巡査はただ形式的に聞いたのであるから、いつ這入ったところが一向痛痒を感じないのである。嘘でも何でも、いい加減な事を答えてくれれば宜いと思つてゐるのに主人夫婦が要領を得ない問答をしているものだから少々焦れたくなつたと見えて

「それじゃ盗難の時刻は不明なんですな」と云うと、主人は例のごとき調子で

「まあ、そうですね」と答える。巡査は笑いもせず

「じゃあね、明治三十八年何月何日戸締りをして寝たところが盗賊が、どこそこの雨戸を外してどこそこに忍び込んで品物を

みぎこくそにおよびそうろうなり

何点盗んで行つたから右告訴及候也という書面をお出しなさい。届ではない告訴です。名宛はない方がいい」

「品物は一々かくんですか」

「ええ羽織何点代価いくらと云う風に表にして出すんです。——いや這^{はい}入って見たって仕方がない。盗^とられたあとなんだから」と平気な事を云って帰って行く。

主人は筆硯^{ふでずり}を座敷の真中へ持ち出して、細君を前に呼びつけて「これから盗難告訴をかくから、盗られたものを一々云え。さあ云え」とあたかも喧嘩でもするような口調で云う。

「あら厭^{いや}だ、さあ云えだなんて、そんな権柄^{けんぺい}づくで誰が云うもんですか」と細帯を巻き付けたままどつかと腰を据^すえる。

「その風はなんだ、宿場女郎の出来損^{できそこな}い見たようだ。なぜ帯をしめて出て来ん」

「これで悪るければ買つて下さい。宿場女郎でも何でも盗られりや仕方がないじゃありませんか」

「帯までとつて行つたのか、苛い奴だ。ひどそれじゃ帯から書き付けてやろう。帯はどんな帯だ」

「どんな帯つて、そんなに何本もあるもんですか、黒縹くろじゆす子と縮緬ちりめんの腹合せの帯です」

「黒縹子と縮緬の腹合せの帯一筋——あたいはいくらくらいだ」

「六円くらいでしょう」

「生意氣に高い帯をしめてるな。今度から一円五十銭くらいのにしておけ」

「そんな帯があるものですか。それだからあなたは不人情だと言うんです。女房などは、どんな汚ない風をしていても、自分さい宜よけりや、構わないんでしよう」

「まあいいや、それから何だ」

「糸織いとおりの羽織こうのです、あれは河野かたみの叔母さんの形身かたみにもらつたん

で、同じ糸織でも今の糸織とは、たちが違います」

「そんな講釈は聞かんでもいい。値段はいくらだ」

「十五円」

「十五円の羽織を着るなんて身分不相当だ」

「いいじゃありませんか、あなたに買っていただきやあしまいし」

「その次は何だ」

「黒足袋が一足」

「御前のか」

「あなたんでさあね。代価が二十七銭」

「それから？」

「山の芋が一箱」

「山の芋まで持って行つたのか。煮て食うつもりか、とろろ汁

にするつもりか」

「どうするつもりか知りません。泥棒のところへ行つて聞いていらつしやい」

「いくらするか」

「山の芋のねだんまでは知りません」

「そんなら十二円五十銭くらいにしておこう」

「馬鹿馬鹿しいじゃありませんか、いくら唐津^{からつ}から掘つて来たつて山の芋が十二円五十銭してたまるもんですか」

「しかし御前は知らんと云うじゃないか」

「知りませんわ、知りませんが十二円五十銭なんて法外ですもの」

「知らんけれども十二円五十銭は法外だとは何だ。まるで論理に合わん。それだから貴様はおタンチン・パレオロガスだと云

うんだ」

「何ですって」

「オタンチン・パレオロガスだよ」

「何ですそのオタンチン・パレオロガスって云うのは」

「何でもいい。それからあとは——俺の着物は一向出て来んじやないか」

「あとは何でも宜うござんす。オタンチン・パレオロガスの意味を聞かして頂戴ちようだい」

「意味も何にもあるもんか」

「教えて下すつてもいいじゃありませんか、あなたはよっぽど私を馬鹿にしていらいっしやるのね。きつと人が英語を知らないと思つて悪口をおつしやつたんだよ」

「愚ぐな事を言わんで、早くあとを云うが好い。早く告訴をせん

と品物が返らんぞ」

「どうせ今から告訴をしたって間に合いやしません。それよりか、オタンチン・パレオロガスを教えて頂戴」

「うるさい女だな、意味も何にも無いと云うに」

「そんなら、品物の方もあとはありません」

「頑愚^{がんぐ}だな。それでは勝手にするがいい。俺はもう盗難告訴を書いてやらんから」

「私も品数^{しなかず}を教えて上げません。告訴はあなたが御自分でなさるんですから、私は書いていたただかないでも困りません」

「それじゃ廃^よそう」と主人は例のごとくふいと立って書斎へ這入^{はい}る。細君は茶の間へ引き下がって針箱の前へ坐る。兩人共十分間ばかりは何にもせず黙って障子を睨^{にら}め付けている。

ところへ威勢よく玄関をあけて、山の芋の寄贈者多々良三平^{たたらさんぺい}

君が上^{あが}つてくる。多々良三平君はもとの家の書生であつたが、今では法科大学を卒業してある会社の鉾山部に雇われている。これも実業家の芽生^{めばえ}で、鈴木藤十郎君の後進生である。三平君は以前の関係から時々旧先生の草廬^{そうろう}を訪問して日曜などには一日遊んで帰るくらい、この家族とは遠慮のない間柄である。

「奥さん。よか天気でござります」と唐津訛^{からつなま}りか何かで細君の前にズボン^{ズボン}のまま立て膝をつく。

「おや多々良さん」

「先生はどこぞ出なすつたか」

「いいえ書齋にいます」

「奥さん、先生のごと勉強しなされると毒ですばい。たまの日曜だもの、あなた」

「わたしに言つても駄目だから、あなたが先生にそうおつしや

い」

「そればつてんが……」と言ひ掛けた三平君は座敷中を見廻わして「今日は御嬢さんも見えんな」と半分妻君に聞いているや否や次の間^まからとん子とすん子が馳け出して来る。

「多々良さん、今日は御^お寿^す司^しを持って来て？」と姉のとん子は先日の約束を覚えていて、三平君の顔を見るや否や催促する。多々良君は頭を搔^かきながら

「よう覚えているのう、この次はきつと持って来ます。今日は忘れた」と白状する。

「いやーだ」と姉が云うと妹もすぐ真似をして「いやーだ」とつける。細君はようやく御機嫌が直つて少々笑顔になる。

「寿司は持つて来んが、山の芋は上げたろう。御嬢さん喰べなさつたか」

「山の芋ってなあに？」と姉がきくと妹が今度もまた真似をして「山の芋ってなあに？」と三平君に尋ねる。

「まだ食いなさらんか、早く御母あさんに煮て御貰い。唐津の山の芋は東京のとは違つてうまかあ」と三平君が国自慢をする
と、細君はようやく気が付いて

「多々良さんせんだつては御親切に沢山ありがとう」

「どうです、喰べて見なすつたか、折れんように箱を誂らえて堅くつめて来たから、長いままでありましたろう」

「ところがせつかく下すつた山の芋を夕べ泥棒に取られてしまつて」

「ぬす盗が？　馬鹿な奴ですなあ。そげん山の芋の好きな男がおりますか？」と三平君大に感心している。

「御母あさま、夕べ泥棒が這入つたの？」と姉が尋ねる。

「ええ」と細君は軽く答える。

「泥棒が這入って——そうして——泥棒が這入って——どんな顔をして這入ったの？」と今度は妹が聞く。この奇問には細君も何と答えてよいか分らんので

「恐い顔こわをして這入りました」と返事をして多々良君の方を見る。

「恐い顔って多々良さん見たような顔なの」と姉が気の毒そうにもなく、押し返して聞く。

「何ですね。そんな失礼な事を」

「ハハハ私の顔わたしはそんなに恐いですか。困ったな」と頭を掻く。多々良君の頭の後部には直径一寸ばかりの禿はげがある。一カ月前から出来だして医者に見て貰ったが、まだ容易に癒なおりそうもない。この禿を第一番に見付けたのは姉のとん子である。

「あら多々良さんの頭は御母さまのように光ひかつてよ」

「だまつていらつしやいと云うのに」

「御母あさま夕べの泥棒の頭も光かつて」とこれは妹の質問である。細君と多々良君とは思わず吹き出したが、あまり煩わづらわしくて話も何も出来ぬので「さあさあ御前さん達は少し御庭へ出て御遊びなさい。今に御母あさまが好い御菓子を上げるから」と細君はようやく子供を追いやって

「多々良さんの頭はどうしたの」と真面目に聞いて見る。

「虫が食いました。なかなか癒りません。奥さんも有んなさるか」

「やだわ、虫が食うなんて、そりや鬚まげで釣るところは女だから少しは禿かげますさ」

「禿はみんなバクテリアですばい」

「わたしのはバクテリアじゃありません」

「そりゃ奥さん意地張りたい」

「何でもバクテリアじゃありません。しかし英語で禿の事を何とか云うでしょう」

「禿はボールドとか云います」

「いいえ、それじゃないの、もつと長い名があるでしょう」

「先生に聞いたら、すぐわかりましょう」

「先生はどうしても教えて下さらないから、あなたに聞くんです」

「私はボールドより知りませんが。長かつて、どげんですか」

「オタンチン・パレオロガスと云うんです。オタンチンと云うのが禿と云う字で、パレオロガスが頭なんでしょう」

「そうかも知れませんか。今に先生の書斎へ行つてウェブス

ターを引いて調べて上げましょう。しかし先生もよほど変つていなさいますな。この天氣の好いのに、うちにじつとして——奥さん、あれじゃ胃病は癒りませんな。ちと上野へでも花見に出掛けなさるごと勧めなさい」

「あなたが連れ出して下さい。先生は女の云う事は決して聞かない人ですから」

「この頃でもジャムを舐めなさるか」

「ええ相変らずです」

「せんだつて、先生こぼしていなさいました。どうも妻が俺のジャムの舐め方が烈しいと云つて困るが、俺はそんなに舐めるつもりはない。何か勘定違いだろうと云いなさるから、そりや御嬢さんや奥さんがいっしょに舐めなさるに違ない——」

「いやな多々良さんだ、何だつてそんな事を云うんです」

「しかし奥さんだつて舐めそうな顔をしていなさるばい」

「顔でそんな事がどうして分ります」

「分らんばつてんが——それじゃ奥さん少しも舐めなさらんか」
「そりや少しは舐めますさ。舐めたつて好いじゃありませんか。
うちのものだもの」

「ハハハハそうだろうと思つた——しかし本の事、泥棒は飛んだ災難でしたな。山の芋ばかり持つて行たのですか」

「山の芋ばかりなら困りやしませんか、不断着をみんな取つて行きました」

「早速困りますか。また借金をしなければならんですか。この猫が犬ならよかつたに——惜しい事をしたなあ。奥さん犬の大奴やつを是非一丁飼いなさい。——猫は駄目ですばい、飯を食うばかりで——ちつとは鼠でも捕とりますか」

「一匹もとつた事はありません。本当に横着な図々ずうずう図々ずうしい猫ですよ」

「いやそりや、どうもこうもならん。早々棄てなさい。私が貰わたしつて行つて煮て食おうか知らん」

「あら、多々良さんは猫を食べるの」

「食いました。猫は旨うもうござります」

「随分豪傑ね」

下等な書生のうちには猫を食うような野蛮人がある由よしはかねて伝聞したが、吾輩が平生けんこ眷顧かたじけのを辱はうする多々良君その人も

またこの同類ならんとは今が今まで夢にも知らなかつた。いわんや同君はすでに書生ではない、卒業の日は浅きにも係かかわらず堂々たる一個の法学士で、六むつ井物産会社いの役員であるのだから吾輩の驚愕きょうがくもまた一と通りではない。人を見たら泥棒と思え

と云う格言は寒月第二世の行為によつてすでに証拠立てられたが、人を見たら猫食いと思えとは吾輩も多々良君の御蔭によつて始めて感得した真理である。世に住めば事を知る、事を知るは嬉しいが日に日に危険が多くて、日に日に油断がなくななる。狡猾こうかつになるのも卑劣になるのも表裏二枚合せの護身服を着けるのも皆事を知るの結果であつて、事を知るのは年を取るの罪である。老人に碌ろくなものがないのはこの理だな、吾輩などもあるいは今のうちに多々良君の鍋なべの中で玉葱たまねぎと共に成仏じようぶつする方が得策かも知れんと考えて隅すみの方に小さくなっていると、最前細君と喧嘩をして一反書齋いつたんへ引き上げた主人は、多々良君の声を聞きつけて、のそのそ茶の間へ出てくる。

「先生泥棒に逢いなさつたそうですな。なんちゆ愚ぐな事です」
と劈頭へきとう一番にやり込める。

「這^{はい}入る奴が愚^ぐなんだ」と主人はどこまでも賢人をもつて自任している。

「這入る方も愚だばつてんが、取られた方もあまり賢^{かし}くはな
かごたる」

「何にも取られるものの無い多々良さんのようなのが一番賢
いんでしよう」と細君が此度^{こんど}は良人^{おつと}の肩を持つ。

「しかし一番愚なのはこの猫ですばい。ほんにまあ、どう云う
了見じゃろう。鼠^{ねずみ}は捕^とらず泥棒が来ても知らん顔をしている。

——先生この猫を私^{わたし}にくんなさらんか。こうしておいたつちや
何の役にも立ちませんばい」

「やつても好い。何にするんだ」

「煮て喰べます」

主人は猛烈なるこの一言^{いちげん}を聞いて、うふと気味の悪い胃弱性

の笑を洩もらしたが、別段の返事もしないので、多々良君も是非食いたいても云わなかつたのは吾輩にとつて望外の幸福である。主人はやがて話頭を転じて、

「猫はどうでも好いが、着物をとられたので寒くていかん」と大に銷沈しょうちんの体である。なるほど寒いはずである。昨日までは綿入を二枚重ねていたのに今日は袷あわせに半袖はんそでのシャツだけで、朝から運動もせず枯坐こざしたぎりであるから、不十分な血液はことごとく胃のために働いて手足の方へは少しも巡回して来ない。

「先生教師などをしておつたちやとうていあかんですばい。ちよつと泥棒に逢つても、すぐ困る——一丁いちちょう今から考を換かえて実業家にでもなんなさらんか」

「先生は実業家は嫌きらいだから、そんな事を言つたつて駄目よ」と細君が傍そばから多々良君に返事をする。細君は無論実業家に

なつて貰いたいのである。

「先生学校を卒業して何年になんなさるか」

「今年で九年目でしよう」と細君は主人を顧みる。かえり 主人はそう

だとも、そうで無いとも云わない。

「九年立つても月給は上がらず。いくら勉強しても人は褒めちや

くれず、郎君独寂寞ろうくんひとりせきぼくですたい」と中学時代で覚えた詩の句を細

君のために朗吟すると、細君はちよつと分りかねたものだから返事をしない。

「教師は無論嫌きらいだが、実業家はなお嫌いだ」と主人は何が好きだか心の裏で考うちえているらしい。

「先生は何でも嫌なんだから……」

「嫌でないのは奥さんだけですか」と多々良君柄がらに似合じようだんわぬ冗談を云う。

「一番嫌だ」主人の返事はもつとも簡明である。細君は横を向いてちよつと澄すましたが再び主人の方を見て、

「生きていらつしやるのも御嫌おきらいなんでしょう」と充分主人を凹へこましたつもりで云う。

「あまり好いてはおらん」と存外のんき呑気な返事をする。これでは手のつけようがない。

「先生ちつと活潑かつぱつに散歩でもしなさらんと、からだを壊こわしてしまいますばい。——そして実業家になんなさい。金なんか儲もうけるのは、ほんに造作ぞうさもない事でござります」

「少しも儲けもせん癖に」

「まだあなた、去年やつと会社へ這入はいったばかりですもの。それでも先生より貯蓄があります」

「どのくらい貯蓄したの？」と細君は熱心に聞く。

「もう五十円になります」

「一体あなたの月給はどのくらいなの」これも細君の質問である。

「三十円ですたい。その内を毎月五円宛会社ずつの方で預つて積んでおいて、いざと云う時にやります。——奥さん小遣錢で外濠線そとぼりせんの株を少し買いなさらんか、今から三四個月すると倍になります。ほんに少し金さえあれば、すぐ二倍にでも三倍にでもなります」

「そんな御金があれば泥棒に逢つたつて困りやしないわ」

「それだから実業家に限ると云うんです。先生も法科でもやつて会社か銀行へでも出なされば、今頃は月に三四百円の収入はありますのに、惜しい事でござんしたな。——先生あの鈴木藤十郎と云う工学士を知つてなさるか」

「うん^{きのう}昨日来た」

「そうでござんすか、せんだつてある宴会で逢いました時先生の御話をしたら、そうか君は苦沙弥君^{くしゃみ}のところの書生をしていたのか、僕も苦沙弥君とは昔^{むか}し小石川の寺でいつしよに自炊をしておつた事がある、今度行つたら宜^{よろ}しく云うてくれ、僕もその内尋ねるからと云つていました」

「近頃東京へ来たそうだな」

「ええ今まで九州の炭坑におりましたが、こないだ東京詰^{づめ}になりました。なかなか旨^{うま}いです。私^{わたし}なぞにでも朋友のように話します。——先生あの男がいくら貰つてると思いなさる」

「知らん」

「月給が二百五十円で盆暮に配当がつきますから、何でも平均四五百円になりますばい。あげな男が、よかしこ取っておるの

に、先生はリーダー専門で十年一狐裘いちこぎゆうじや馬鹿氣ておりますなあ」

「實際馬鹿氣ているな」と主人のような超然主義の人でも金銭の觀念は普通の人間と異なることところはない。否困窮するだけに人一倍金が欲しいのかも知れない。多々良君は充分実業家の利益を吹聴ふいちちやうしてもう云う事が無くなつたものだから

「奥さん、先生のところへ水島寒月と云う人じんが来ますか」

「ええ、善くいらつしやいます」

「どげんな人物ですか」

「大變學問の出来る方だそうです」

「好男子ですか」

「ホホホ多々良さんくらいなものでしょう」

「そうですか、私わたしくらいなものですか」と多々良君真面目であ

る。

「どうして寒月の名を知っているのかい」と主人が聞く。

「せんだつて或る人から頼まりました。そんな事を聞くだけの価値のある人物でしょうか」多々良君は聞かぬ先からすでに寒月以上に構えている。

「君よりよほどえらい男だ」

「そうでございますか、私わたしよりえらいですか」と笑いもせず怒おこ

りもせぬ。これが多々良君の特色である。

「近々博士になりますか」
きんきん

「今論文を書いてるそうだ」

「やつぱり馬鹿ですな。博士論文をかくなんて、もう少し話せる人物かと思つたら」

「相変らず、えらい見識ですね」と細君が笑いながら云う。

「博士になつたら、だれとかの娘をやるとかやらんとか云うて
いましたから、そんな馬鹿があらうか、娘を貰うために博士に
なるなんて、そんな人物にくれるより僕にくれる方がよほどま
しだと云つてやりました」

「だれに」

「私に^{わたし}水島の事を聞いてくれと頼んだ男です」

「鈴木じゃないか」

「いいえ、あの人にや、まだそんな事は云い切りません。向う
は大頭ですから」

「多々良さんは^{かげんけい}蔭弁慶ね。うちへなんぞ来ちや大變威張つても
鈴木さんなどの前へ出ると小さくなつてるんでしよう」

「ええ。そうせんと、あぶないです」

「多々良、散歩をしようか」と突然主人が云う。先刻^{さつき}から^{あわせ}裕一

枚であまり寒いので少し運動でもしたら暖かになるだろうと云う考から主人はこの先例のない動議を呈出したのである。行き当りばつたりの多々良君は無論しゅんじゅん逡巡する訳がない。

「行きましょう。上野にしますか。芋坂いもざかへ行つて団子を食いましょうか。先生あすこの団子を食った事がありますか。奥さん一返行つて食つて御覧。柔らかくて安いです。酒も飲ませます」と例によつて秩序のない駄弁ふるを揮つてうちに主人はもう帽子を被つてくつぬぎ沓脱へ下りる。

吾輩はまた少々休養を要する。主人と多々良君が上野公園でどんな真似をして、芋坂で団子を幾皿食つたかその辺の逸事は探偵の必要もなし、また尾行びこうする勇氣もないからずっと略してその間休養あいだせんければならん。休養は万物の旻天びんてんから要求してしかるべき権利である。この世に生息すべき義務を有してしゅんどう蠢動

する者は、生息の義務を果すために休養を得ねばならぬ。もし神ありて汝は働^{なんじ}くために生れたり寝るために生れたるに非ずと云わば吾輩はこれに答えて云わん、吾輩は仰せのごとく働くために生れたり故に働くために休養を乞うと。主人のごとく器械に不平を吹き込んだまでの木強漢^{ぼくきやうかん}ですら、時々は日曜以外に自弁休養をやるではないか。多感多恨にして日夜心神を労する吾輩ごとき者は仮令^{たとい}猫といえども主人以上に休養を要するは勿論の事である。ただ先刻^{さつき}多々良君が吾輩を目して休養以外に何等の能もない贅物^{ぜいぶつ}のごとくに罵^{のの}つたのは少々気掛りである。とかく物象^{ぶつざう}にのみ使役せらるる俗人は、五感の刺激以外に何等の活動もないので、他を評価^{はしや}するのでも形骸^{けいがい}以外に渉^{わた}らんのは厄介である。何でも尻でも端^{はし}折^よつて、汗でも出さないと働^{はし}らいていないように考えている。達磨^{だるま}と云う坊さんは足の腐るまで座禅

をして澄ましていたと云うが、仮令壁の隙から鳶が這い込んで大師の眼口を塞ぐまで動かないにしろ、寝ているんでも死んでいるんでもない。頭の中は常に活動して、廓然無聖などと乙な理窟を考え込んでいる。儒家にも静坐の工夫と云うのがあるそうだ。これだつて一室の中に閉居して安閑と壁の修行をするのではない。脳中の活力は人一倍熾に燃えている。ただ外見上は至極沈静端肅の態であるから、天下の凡眼はこれらの知識巨匠をもつて昏睡仮死の庸人と見做して無用の長物とか穀潰しとか入らざる誹謗の声を立てるのである。これらの凡眼は皆形を見て心を見ざる不具なる視覚を有して生れついた者で、——しかも彼の多々良三平君のごときは形を見て心を見ざる第一流の人物であるから、この三平君が吾輩を目して乾屎橛同等に心得るのももつともだが、恨むらくは少しく古今の書籍を読んで、や

や事物の真相を解し得たる主人までが、浅薄なる三平君に一も二もなく同意して、猫鍋ねこなべに故障さしはさを挟む景色けしきのない事である。しかし一步退いて考えて見ると、かくまでに彼等が吾輩を軽蔑けいべつするもの、あながち無理ではない。大声は俚耳りじに入らず、陽春白雪の詩には和するもの少なしの喩たとえも古い昔からある事だ。形体以外の活動を見る能あたわざる者に向つて己靈これいの光輝を見よと強しゆるは、坊主に髪を結いえと逼せまるがごとく、鮪まぐろに演説をして見ると云うがごとく、電鉄に脱線を要求するがごとく、主人に辞職を勧告するごとく、三平に金の事を考えるなど云うがごときものである。ひつきよう必竟無理な注文に過ぎん。しかしながら猫といえども社会的動物である。社会的動物である以上はいかに高く自ら標置みずかするとも、或る程度までは社会と調和して行かねばならん。主人や細君や乃至御ないしおさん、三平連づれが吾輩を吾輩相当に評価して

くれんのは残念ながら致し方がないとして、不明の結果皮を剥いで三味線屋に売り飛ばし、肉を刻んで多々良君の膳に上すような無分別をやられては由々しき大事である。吾輩は頭をもつて活動すべき天命を受けてこの娑婆に出現したほどの古今来の猫であれば、非常に大事な身体である。千金の子は堂陞に坐せずとの諺もある事なれば、好んで超邁を宗として、徒らに吾身の危険を求むるのは単に自己の災なるのみならず、また大いに天意に背く訳である。猛虎も動物園に入れば糞豚の隣りに居を占め、鴻雁も鳥屋に生擒らるれば雛鶏と俎を同じゅうす。庸人と相互する以上は下って庸猫と化せざるべからず。庸猫たんとすれば鼠を捕らざるべからず。——吾輩はとうとう鼠をとる事に極めた。

せんだってじゅうから日本は露西亞と大戦争をしているそう

だ。吾輩は日本の猫だから無論日本^{びいき}最負である。出来得べくんば混成^{こんせいねこりよだん}猫旅団を組織して露西亜兵を引つ搔^かいてやりたいと思うくらいである。かくまでに元氣旺盛^{おうせい}な吾輩の事であるから鼠の一疋や二疋はとろうとする意志さえあれば、寝ていても訳なく捕^とれる。昔^{むか}しある人當時有名な禅師に向つて、どうしたら悟れましよう^とと聞いたら、猫が鼠を覘^{ねら}うようにさしやれと答えたそ^うだ。猫が鼠をとるようには、かくさえすれば外^はずれっこはござらぬと云う意味である。女賢^{さか}しゆうしてと云う諺はあるが猫賢^{さか}しゆうして鼠捕^とり損^{そこな}うと云う格言はまだ無いはずだ。して見ればいかに賢^{かし}い吾輩のごときものでも鼠の捕れんはずはあるまい。とれんはずはあるまいどころか捕り損うはずはあるまい。今まで捕らんのは、捕りたくないからの事さ。春の日はきのうのごとく暮れて、折々の風に誘^{はなふぶき}わるる花吹雪が台所の腰障

子の破れから飛び込んで手桶ておけの中に浮ぶ影が、薄暗き勝手用のランプの光りに白く見える。今夜こそ大手柄をして、うちじゅう驚かしてやろうと決心した吾輩は、あらかじめ戦場を見廻つて地形を飲み込んでおく必要がある。戦闘線は勿論もちろんあまり広からうはずがない。畳数にしたら四畳敷もあろうか、その一畳を仕切つて半分は流し、半分は酒屋八百屋の御用を聞く土間である。へつついは貧乏勝手に似合わぬ立派な者で赤の銅壺どうこがぴかぴかして、後ろは羽目板うしの間を二尺遺のこして吾輩の鮑貝あわびがいの所在地である。茶の間に近き六尺は膳碗皿ぜんわんさらこぼち小鉢を入れる戸棚となつて狭き台所をいとど狭く仕切つて、横に差し出すむき出しの棚とすれすれの高さになっている。その下に摺鉢すりばちが仰向けに置かれて、摺鉢の中には小桶の尻が吾輩の方を向いている。大根卸し、摺小木が並んで懸かけてある傍らに火消壺だけが悄然しょうぜんと控ひかえてい

る。真黒になつた樽木たるぎの交叉した真中から一本の自在じざいを下ろして、先へは平たい大きな籠かごをかける。その籠が時々風に揺れておうよう鷹揚おうように動いている。この籠は何のために釣るすのか、この家うちへ来たてには一向いっこう要領を得なかつたが、猫の手の届かぬためわざと食物をここへ入れると云う事を知つてから、人間の意地の悪い事をしみじみ感じた。

これから作戦計画だ。どこで鼠と戦争するかと云えば無論鼠の出る所でなければならぬ。いかにこつちに便宜べんぎな地形だからと云つて一人で待ち構えていてはてんで戦争にならん。ここにおいてか鼠の出口を研究する必要が生ずる。どの方面から来るかなと台所の真中に立つて四方を見廻わす。何だか東郷大将のような心持がする。下女はさつき湯に行つて戻つて来ん。小供はとくに寝ている。主人は芋坂いもざかの団子を喰つて歸つて来て相変

らず書齋に引き籠こもっている。細君は——細君は何をしているか知らない。大方居眠りをして山芋の夢でも見ているのだらう。時々門前を人力じんりきが通るが、通り過ぎた後は一段と淋しい。わが決心と云い、わが意氣と云い台所の光景と云い、四辺しへんの寂寞せきばくと云い、全体の感じが悉く悲壯である。どうしても猫中の東郷大將としか思われない。こう云う境界きょうがいに入ると物凄ものすじい内に一種の愉快を覚えるのは誰しも同じ事であるが、吾輩はこの愉快の底に一大心配よこしたが横わっているのを発見した。鼠と戦争をするのは覚悟の前だから何足来ても恐こわくはないが、出てくる方面が明瞭でないのは不都合である。周密なる觀察から得た材料を綜合そうごうして見ると鼠賊そぞくの逸出いつしゅつするのには三つの行路がある。彼れらがもしどぶ鼠であるならば土管を沿うて流しから、へつついの裏手へ廻るに相違ない。その時は火消壺の影に隠れて、帰り道を絶つ

てやる。あるいは溝へ湯を抜く漆喰の穴より風呂場を迂回して
勝手へ不意に飛び出すかも知れない。そうしたら釜の蓋の上に
陣取つて眼の下に來た時上から飛び下りて一攫みにする。それ
からとまたあたりを見廻すと戸棚の戸の右の下隅が半月形に喰
い破られて、彼等の出入に便なるかの疑がある。鼻を付けて臭
いで見ると少々鼠臭い。もしここから呐喊して出たら、柱を楯
にやり過しておいて、横合からあつと爪をかける。もし天井
から來たらと上を仰ぐと真黒な煤がランプの光で輝やいて、地
獄を裏返しに釣るしたごとくちよつと吾輩の手際では上る事も、
くだる事も出来ん。まさかあんな高い処から落ちてくる事もな
ろうからとこの方面だけは警戒を解く事にする。それにしても
三方から攻撃される懸念がある。一口なら片眼でも退治して見
せる。二口ならどうか、こうにかやつてのける自信がある。

しかし三口となるといかに本能的に鼠を捕るべく予期せらるる吾輩も手の付けようがない。さればと云つて車屋の黒ごときものを助勢に頼んでくるのも吾輩の威厳に関する。どうしたら好かろう。どうしたら好かろうと考へて好い智慧が出ない時は、そんな事は起る氣遣きづかいはないと決めるのが一番安心を得る近道である。また法のつかない者は起らないと考へたくなるものである。まず世間を見渡して見給え。きのう貰つた花嫁も今日死なんともし限らぬではないか、しかし賀殿むこどのは玉椿千代も八千代もなど、おめでたい事を並べて心配らしい顔もせんではないか。心配せんのは、心配する価値がないからではない。いくら心配したつて法が付かんからである。吾輩の場合でも三面攻撃は必ず起らぬと断言すべき相当の論拠はないのであるが、起らぬとする方が安心を得るに便利である。安心は万物に必要である。吾

輩も安心を欲する。よつて三面攻撃は起らぬと極める^き。

それでもまだ心配が取れぬから、どう云うものかとだんだん考
えて見るとようやく分つた。三個の計略のうちいずれを選んだ
のがもつとも得策であるかの問題に對して、自ら明瞭なる答弁を^{みずか}
得るに苦しむからの煩悶^{はんもん}である。戸棚から出るときには吾輩こ
れに応ずる策がある、風呂場から現われる時はこれに對する計^{はかりごと}
がある、また流しから這い上るときはこれを迎うる成算もある
が、そのうちどれか一つに極めねばならぬとなると大に当惑す^{おおい}
る。東郷大將はバルチック艦隊が對馬海峡を通るか、津輕海峡^{つがるかいきよう}
へ出るか、あるいは遠く宗谷海峡^{そうやかいきよう}を廻るかについて大に心配さ
れたそうだが、今吾輩が吾輩自身の境遇から想像して見て、ご
困却の段実に御察し申す。吾輩は全体の状況において東郷閣下
に似ているのみならず、この格段なる地位においてもまた東郷

閣下とよく苦心を同じゅうする者である。

吾輩がかく夢中になつて智謀をめぐらしていると、突然破れた腰障子が開いて御三おさんの顔がぬうと出る。顔だけ出ると云うのは、手足がないと云う訳ではない。ほかの部分は夜目よめでよく見えんのに、顔だけが著るしく強い色をして判然眸底ぼうていに落つるからである。御三はその平常より赤き頬をますます赤くして洗湯から帰つたついでに、昨夜ゆうべに懲りこてか、早くから勝手の戸締とじまりをする。書斎で主人が俺のステッキを枕元へ出しておけと云う声が聞える。何のために枕頭にステッキを飾るのか吾輩には分らなかった。まさか易水えきすいの壮士を気取つて、竜鳴りゅうめいを聞こうと云う酔狂でもあるまい。きのうは山の芋、今日はステッキ、明日あすは何になるだろう。

夜はまだ浅い鼠はなかなか出そうにない。吾輩は大戦の前に

一と休養を要する。

主人の勝手には引窓がない。座敷なら欄間らんまと云うような所が幅一尺ほど切り抜かれて夏冬吹き通しに引窓の代理を勤めている。惜し気もなく散る彼岸桜ひがんざくらを誘うて、颯さつと吹き込む風に驚ろいて眼を覚さますと、朧月おぼろつきさえいつの間に差してか、竈へつの影は斜めに揚板あげいたの上にかかる。寝過ごしはせぬかと二三度耳を振つて家内の容子ようすを窺うかがうと、しんとして昨夜のごとく柱時計の音のみ聞える。もう鼠の出る時分だ。どこから出るだろう。

戸棚の中でことごと音がしだす。小皿の縁ふちを足で抑えて、中をあらしているらしい。ここから出るわいと穴の横へすくんで待っている。なかなか出て来る景色けしきはない。皿の音はやがてやんだが今度はどんぶりか何かに掛つたらしい、重い音が時々ごとごととする。しかも戸を隔ててすぐ向う側でやっている、

吾輩の鼻づらと距離にしたら三寸も離れておらん。時々はちよろちよると穴の口まで足音が近寄るが、また遠のいて一匹も顔を出すものはない。戸一枚向うに現在敵が暴行を逞しくしてゐるのに、吾輩はじつと穴の出口で待つておらねばならん随分気の長い話だ。鼠は旅順りょじゅん碗の中で盛に舞踏会を催うしている。せめて吾輩の這はい入れるだけ御三がこの戸を開けておけば善いのに、気の利かぬ山出しだ。

今度はへつついの影で吾輩の鮑貝あわびがいがことりと鳴る。敵はこの方面へも来たなと、そーつと忍び足で近寄ると手桶ておけの間から尻尾しつぽがちらと見えたり流しの下へ隠れてしまった。しばらくすると風呂場でうがい茶碗が金盥かなだらにかちりと当る。今度は後方うしろだと振りむく途端に、五寸近くある大な奴がひらりと齒磨の袋を落して椽えんの下へ馳かけ込む。逃がすものかと続いて飛び下りたら

う影も姿も見えぬ。鼠を捕^とるのは思つたよりむずかしい者である。吾輩は先天的鼠を捕る能力がないのか知らん。

吾輩が風呂場へ廻ると、敵は戸棚から馳^はけ出し、戸棚を警戒すると流しから飛び上り、台所の真中に頑張^{がんば}つていると三方面共少々ずつ騒ぎ立てる。小癩^{こしやく}と云おうか、卑怯^{ひきよう}と云おうかとうてい彼等は君子の敵でない。吾輩は十五六回はあちら、こちらと氣を疲らし心^{しん}を勞^{つか}らして奔走努力して見たがついに一度も成功しない。残念ではあるがかかる小人^{しょうじん}を敵にしていはいかなる東郷大将も施^{ほど}こすべき策がない。始めは勇氣もあり敵愾^{てきがい}心もあり悲壯と云う崇高な美感さえあつたがついには面倒と馬鹿氣ているのと眠いのと疲れたので台所の真中へ坐つたなり動かない事になった。しかし動かんでも八方睨^{はつぱうにら}みを極^きめ込んでいれば敵は小人だから大した事は出来ないのである。目ざす敵と思つた奴が、

存外けちな野郎だと、戦争が名誉だと云う感じが消えて悪^にくいと云う念だけ残る。悪^にくいと云う念を通り過すと張り合が抜けてぼーとする。ぼーとしたあとは勝手にしろ、どうせ気の利^きいた事は出来ないのだからと輕蔑^{けいべつ}の極眠^{きよくねむ}たくなる。吾輩は以上の徑路をたどつて、ついに眠くなつた。吾輩は眠る。休養は敵中に在^あつても必要である。

横向^{ひさし}に底を向いて開いた引窓から、また花吹雪^{はなふぶき}を一塊^{ひとかたま}りなげ込んで、烈しき風の吾を遶^{めぐ}ると思えば、戸棚の口から彈丸のごとく飛び出した者が、避くる間^まもあらばこそ、風を切つて吾輩の左の耳へ喰いつく。これに続く黒い影は後ろ^{うし}に廻るかと思ふ間もなく吾輩の尻尾^{しつぽ}へぶら下がる。瞬^{またた}く間の出来事である。吾輩は何の目的もなく器械的に跳上^{はねあが}る。満身の力を毛穴に込めてこの怪物を振り落とそうとする。耳に喰い下がったのは中心を

失つてだらりと吾が横顔に懸る。護謨管ゴムかんのごとき柔かき尻尾の先が思い掛なく吾輩の口に這入る。屈竟くつきようの手懸りてがかに、砕けよとばかり尾を啣くわえながら左右にふると、尾のみは前歯の間に残つて胴体は古新聞で張つた壁に當つて、揚板の上に跳ね返る。起き上がるを隙間すきまなく乗のし掛れば、毬まりを蹴けたるごとく、吾輩の鼻づらを掠かすめて釣り段の縁ふちに足を縮めて立つ。彼は棚の上から吾輩を見おろす、吾輩は板の間から彼を見上ぐる。距離は五尺。その中に月の光りが、大幅おおはばの帯を空くうに張るごとく横に差し込む。吾輩は前足に力を込めて、やつとばかり棚の上に飛び上がるうとした。前足だけは首尾よく棚の縁ふちにかかったが後足あとあしは宙にもがいている。尻尾には最前の黒いものが、死ぬとも離るまじき勢で喰い下っている。吾輩は危あやうい。前足を懸かけ易かえて足懸りあしがかを深くしようとする。懸け易える度に尻尾の重みで浅

くなる。二三にさんぶ分滑れば落ちねばならぬ。吾輩はいよいよ危うい。棚板を爪で搔かきむしる音ががりと聞える。これではならぬと左の前足を抜き易える拍子に、爪を見事に懸け損じたので吾輩は右の爪一本で棚からぶら下った。自分と尻尾に喰いつくものの重みで吾輩のからださがりぎり廻わる。この時まで身動きもせずに見ねらいつけていた棚上の怪物は、ここぞと吾輩の額を目懸けて棚の上から石を投ぐるがごとく飛び下りる。吾輩の爪は一縷いちるのかかりを失う。三つの塊かたまりが一つとなつて月の光を豎たてに切つて下へ落ちる。次の段に乗せてあつた摺鉢すりばちと、摺鉢の中の小桶こおけとジャムの空缶あきかんが同じく一塊ひとかたまりとなつて、下にある火消壺を誘つて、半分は水甕みずがめの中、半分は板の間の上へ転がり出す。すべてが深夜にただならぬ物音を立てて死物狂いの吾輩の魂をさえ寒からしめた。

「泥棒！」と主人は胴間声どうまごえを張り上げて寢室から飛び出して来る。見ると片手にはランプを提さげ、片手にはステッキを持つて、寝ぼけ眼まなこよりは身分相応の炯々たる光を放っている。吾輩は鮑貝あわびがいの傍そばにおとなしくして蹲踞うずくまる。二足の怪物は戸棚の中へ姿をかくす。主人は手持無沙汰に「何だ誰だ、大きな音をさせたのは」と怒気を帯びて相手もないのに聞いている。月が西に傾いたので、白い光りの一帯は半切はんぎれほどに細くなった。

六

こう暑くては猫といえどもやり切れない。皮を脱いで、肉を脱いで骨だけで涼みたいものだ。と英吉利イギリスのシドニー・スミスとか云う人が苦しがつたと云う話があるが、たとい骨だけにならな

くとも好いから、せめてこの淡灰色の斑入ふいりの毛衣けごろもだけはちよつと洗い張りでもするか、もしくは当分の中質うちにでも入れたいような気がする。人間から見たら猫などは年が年中同じ顔をして、春夏秋冬一枚看板で押し通す、至つて単純な無事な銭ぜにのかからない生涯しょうがいを送つてゐるように思われるかも知れないが、いくら猫だつて相應に暑さ寒さの感じはある。たまには行水ぎょうずいの一度くらいあびたくない事もないが、何しろこの毛衣の上から湯を使つた日には乾かすのが容易な事でないから汗臭いのを我慢してこの年になるまで洗湯の暖簾のれんを潜くぐつた事はない。折々は団扇うちわでも使つて見ようと云う氣も起らんではないが、とにかく握る事が出来ないのだから仕方がない。それを思うと人間は贅沢ぜいたくなものだ。なまで食つてしかるべきものをわざわざ煮て見たり、焼いて見たり、酢すに漬つけて見たり、味噌みそをつけて見たり好んで余計な

手数てすうを懸けて御互に恐悦している。着物だつてそうだ。猫のよう
に一年中同じ物を着通せと云うのは、不完全に生れついた彼
等にとつて、ちと無理かも知れんが、なにもあんなに雑多なも
のを皮膚かわの上へ載のせて暮さなくてももの事だ。羊の御厄介おなきになつ
たり、蚕かいこの御世話になつたり、綿帛おなきの御情けさえ受けるに至つ
ては贅沢ぜいたくは無能の結果だと断言しても好いくらいだ。衣食はま
ず大目に見て勘弁するとしたところで、生存上直接の利害もな
いところまでこの調子で押して行くのは毫ごうも合点がてんが行かぬ。第
一頭の毛などと云うものは自然に生えるものだから、放ほうつてお
く方がもつとも簡便で当人のためになるだろうと思うのに、彼
等は入らぬ算段をして種々雑多な恰好かつこうをこしらえて得意である。
坊主とか自称するものはいつ見ても頭を青くしている。暑いと
その上へ日傘をかぶる。寒いと頭巾ずきんで包む。これでは何のため

に青い物を出しているのか主意が立たんではないか。そうかと思ふと櫛くしとか称する無意味な鋸のこぎり様の道具を用いて頭の毛を左右に等分して嬉しがつてゐるものもある。等分にしないと七分三分の割合で頭蓋骨ずがいこつの上へ人為的の区劃くかくを立てる。中にはこの仕切りがつむじを通り過して後ろまで食み出しているのがある。まるで贗造がんぞうの芭蕉葉ばしょうのようだ。その次には脳天を平らに刈つて左右は真直に切り落す。丸い頭へ四角な桙わくをはめてゐるから、植木屋を入れた杉垣根の写生としか受け取れない。このほか五分刈、三分刈、一分刈さえあると云う話だから、しまいには頭の裏まで刈り込んでマイナス一分刈、マイナス三分刈などと云う新奇な奴が流行するかも知れない。とにかくそんなに憂身うきみを憂やっしてどうするつもりか分らん。第一、足が四本あるのに二本しか使わないと云うのから贅沢だ。四本であるけばそれだけはおもひ

く訳だのに、いつでも二本ですまして、残る二本は到来の棒鱈ぼうだらのように手持無沙汰にぶら下げているのは馬鹿馬鹿しい。これで見ると人間はよほど猫より閑ひまなもので退屈のあまりかようないたずらを考案して楽しんでゐるものと察せられる。ただおかしいのはこの閑人ひまじんがよると障さわると多忙だ多忙だと触れ廻るのみならず、その顔色がいかにも多忙らしい、わるくすると多忙に食い殺されはしまいかと思われるほどこせ、ついでに。彼等のあるものは吾輩を見て時々あんなになつたら気楽でよからうなどと云うが、気楽でよければなるが好い。そんなにこせこせしてくれと誰も頼んだ訳でもなからう。自分で勝手な用事を手に負えぬほど製造して苦しい苦しいと云うのは自分で火をかんかん起して暑い暑いと云うようなものだ。猫だつて頭の刈り方を二十通りも考え出す日には、こう気楽にしてはおられんさ。

気楽になりたければ吾輩のように夏でも毛衣けごろもを着て通されるだけの修業をするがよろしい。——とは云うものの少々熱い。毛衣では全く熱あつ過ぎる。

これでは一手専売の昼寝も出来ない。何かないかな、永らく人間社会の觀察を怠おこたつたから、今日は久し振りで彼等が酔興あいくに齷齪あくせくする様子を拝見しようかと考えて見たが、生憎主人はこの点に関してすこぶる猫に近い性分しょうぶんである。昼寝は吾輩に劣らぬくらいやるし、ことに暑中休暇後になつてからは何一つ人間らしい仕事をせんので、いくら觀察をしても一向觀察する張合いっそうがない。こんな時に迷亭でも来ると胃弱性の皮膚も幾分か反応を呈して、しばらくでも猫に遠ざかるだろうに、先生もう来ても好い時だと思つていると、誰とも知らず風呂場でざあざあ水を浴びるものがある。水を浴びる音ばかりではない、折々大きな

声で相の手を入れている。「いや結構」「どうも良い心持ちだ」「もう一杯」などと家中に響き渡るような声を出す。主人のうちへ来てこんな大きな声と、こんな無作法な真似をやるものはほかにはない。迷亭に極つてゐる。

いよいよ来たな、これで今日半日は潰せると思つてゐると、先生汗を拭いて肩を入れて例のごとく座敷までずかずか上つて来て「奥さん、苦沙弥君はどうしました」と呼ばわりながら帽子を畳の上へ抛り出す。細君は隣座敷で針箱の側へ突つ伏して好い心持ちに寝ている最中にワンワンと何だか鼓膜へ答えるほどの響がしたのではつと驚ろいて、醒めぬ眼をわざと睜つて座敷へ出て来ると迷亭が薩摩上布を着て勝手な所へ陣取つてしきりに扇使いをしている。

「おやいらしゃいまし」と云つたが少々狼狽の気味で「ちつと

も存じませんでした」と鼻の頭へ汗をかいたまま御辞儀をする。
「いえ、今来たばかりなんですよ。今風呂場で御三おさんに水を掛けて貰つてね。ようやく生き帰ったところで——どうも暑いじゃありませんか」「この両三日りようさんちは、ただじつとしておりまして汗が出るくらいで、大変御暑うございます。——でも御変りもございませんで」と細君は依然として鼻の汗をとらない。「ええありがとう。なに暑いくらいでそんなに変わりやしませんや。しかしこの暑さは別物ですよ。どうも体がだるくつてね」「私わたくしなども、ついに昼寝などを致した事がないんでございますが、こ
う暑いとつい——」「やりますかね。好いですよ。昼寝られて、夜寝られりや、こんな結構な事はないでさあ」とあいかわらず呑気のんきな事を並べて見たがそれだけでは不足と見えて「私わたしなんぞ、寝たくない、質たちでね。苦沙弥君などのように来るたんびに寝て

いる人を見ると羨しいです^{うらやま}よ。もつとも胃弱にこの暑さは答えるからね。丈夫な人でも今日なんかは首を肩の上に載^のせてるのが退儀でさあ。さればと云つて載つてる以上はもぎとる訳にも行かずね」と迷亭君いつになく首の処置に窮している。「奥さんなんざ首の上へまだ載つけておくものがあるんだから、坐つちやいられないはずだ。髻^{まげ}の重みだけでも横になりたくなりますよ」と云うと細君は今まで寝ていたのが髻^{まげ}の恰好^{かつこう}から露見したと思つて「ホホホ口の悪い」と云いながら頭をいじつて見る。

迷亭はそんな事には頓着なく「奥さん、昨日^{きのう}はね、屋根の上で玉子のフライをして見ましたよ」と妙な事を云う。「フライをどうなさったんでございます」「屋根の瓦があまり見事に焼けていましたから、ただ置くのも勿体ないと思つてね。バタを溶かして玉子を落したんでさあ」「あらまあ」「ところがやつぱ

り天日^{てんぴ}は思うように行きませんや。なかなか半熟にならないから、下へおりて新聞を読んでいると客が来たもんだからつい忘れてしまつて、今朝になつて急に思い出して、もう大丈夫だろうと上つて見たらね」「どうなつておりました」「半熟どころか、すっかり流れてしまいました」「おやおや」と細君は八の字を寄せながら感嘆した。

「しかし土用中あんなに涼しくつて、今頃から暑くなるのは不思議ですね」「ほんとでございますよ。せんだつてじゆうは単衣^{ひとえ}では寒いくらいでございましたのに、一昨日^{おととい}から急に暑くなりましてね」「蟹^{かに}なら横^はに這^はうところだが今年の氣候はあ、とびさりをするんですよ。倒行^{とうこう}して逆施^{ぎゃくし}すまた可ならずやと云うような事を言っているかも知れない」「なんでござんす、それは」「いえ、何でもないのです。どうもこの氣候の逆戻りをするとところ

はまるでハーキュリスの牛ですよ」と図に乗つていよいよ変ちきりんな事を言うと、果せるかな細君は分らない。しかし最初の倒行して逆施すで少々懲りてゐるから、今度はただ「へえー」と云つたのみで問い返さなかつた。これを問い返されないと迷亭はせつかく持ち出した甲斐がない。「奥さん、ハーキュリスの牛を御存じですか」「そんな牛は存じませんわ」「御存じないですか、ちよつと講釈をしましょうか」と云うと細君もそれには及びませんとも言ひ兼ねたものだから「ええ」と云つた。「昔しハーキュリスが牛を引っ張つて来たんです」「そのハーキュリスと云うのは牛飼でもござんすか」「牛飼じゃありませんよ。牛飼やいろはの亭主じゃありません。その節は希臘ギリシヤにまだ牛肉屋が一軒もない時分の事ですからね」「あら希臘のお話なの？ そんなら、そうおつしやればいいのに」と細君は希臘と云う国

名だけは心得ている。「だってハーキュリスじゃありませんか」「ハーキュリスなら希臘なんですか」「ええハーキュリスは希臘の英雄でさあ」「どうりで、知らないと思いました。それでその男がどうしたんで——」「その男がね奥さん見たように眠くなつてぐうぐう寝ている——」「あらいやだ」「寝ている間に、ヴァルカンの子が来ましてね」「ヴァルカンて何です」「ヴァルカンは鍛冶屋かじやですよ。この鍛冶屋のせがれがその牛を盗んだんでさあ。ところがね。牛の尻尾しつぽを持ってぐいぐい引いて行つたもんだからハーキュリスが眼を覚さまして牛やーい牛やーいと尋ねてあるいても分らないんです。分らないはずでさあ。牛の足跡をつけたつて前の方へあるかして連れて行つたんじゃないやありませんもの、後ろうしへ後ろうしへと引きずって行つたんですからね。鍛冶屋のせがれにしては大出来ですよ」と迷亭先生はすでに天気の話

は忘れてゐる。

「時に御主人はどうしました。相変らず午睡ひるねですかね。午睡も支那人の詩に出てくると風流だが、苦沙弥君のように日課としてやるのは少々俗気がありますね。何の事もない毎日少しずつ死んで見るようなものでは、奥さん御手数おてすうだがちよつと起していらいしやい」と催促すると細君は同感と見えて「ええ、ほんとにあれでは困ります。第一あなた、からだが悪くなるばかりですから。今御飯をいただいたばかりなのに」と立ちかけると迷亭先生は「奥さん、御飯と云やあ、僕はまだ御飯をいただかないんですがね」と平気な顔をして聞きもせぬ事を吹聴ふいちようする。「おやまあ、時分どきだのにちつとも気が付きませんで——それじゃ何もございませんが御茶漬でも」「いえ御茶漬なんか頂戴しなくつても好いですよ」「それでも、あなた、どうせ御口に

合うようなものはございせんが」と細君少々厭味を並べる。迷亭は悟つたもので「いえ御茶漬でも御湯漬でも御免蒙るんです。今途中で御馳走を誂あつらえて来ましたから、そいつを一つこでいただきますよ」ととうてい素人しろうとには出来そうもない事を述べる。細君はたつた一言ひとこと「まあ！」と云つたがそのままあの中うちには驚ろいたままあと、気を悪くしたままあと、手数てすうが省けてありがたいと云うままあが合併している。

ところへ主人が、いつになくあまりやかましいので、寝つき掛つた眠をさかに扱こかれたような心持で、ふらふらと書斎から出て来る。「相変らずやかましい男だ。せつかく好い心持に寝ようとしたところを」と欠伸交あくびまじりに仏頂面ぶつちようづらをする。「いや御目覚おめざめかね。鳳眠ほうみんを驚かし奉つてはなはだ相済まん。しかしたまには好かろう。さあ坐りたまえ」とどつちが客だか分らぬ挨拶をす

る。主人は無言のまま座に着いて寄木細工よせぎざいくの巻煙草まきたばこ入から「朝日」を一本出してすばすば吸い始めたが、ふと向の隅むこうすみに転がっている迷亭の帽子に眼をつけて「君帽子を買ったね」と云った。迷亭はすぐさま「どうだい」と自慢らしく主人と細君の前に差し出す。「まあ奇麗だ事。大変目が細かくつて柔らかいんですね」と細君はしきりに撫で廻わす。「奥さんこの帽子は重宝ちようほうですよ、どうしても言う事を聞きますからね」と拳骨げんこつをかためてパナマの横ッ腹をばかりと張り付けると、なるほど意のごとく拳こぶしほどな穴があいた。細君が「へえ」と驚く間もなく、この度は拳たび骨を裏側へ入れてうんと突ッ張ると釜かまの頭がばかりと尖とんがる。次には帽子を取つて鏢つばと鏢とを両側から圧おし潰つぶして見せる。潰れた帽子は麵棒めんぼうで延のした蕎麦そばのように平たくなる。それを片端からむしろ席でも巻くごとくぐるぐる畳む。「どうですこの通り」と丸

めた帽子を懷中へ入れて見せる。「不思議です事ねえ」と細君はきてんさいしいういち帰天齋正一の手品でも見物しているように感嘆すると、迷亭もその氣になつたものと見えて、右から懷中に収めた帽子をわざと左の袖口そでぐちから引つ張り出して「どこにも傷はありません」と元のごとくに直して、人さし指の先へ釜の底を載のせてくるくると廻す。もう休やめるかと思つたら最後にぽんと後うしろへ放なげてその上へ堂どつさりと尻餅を突いた。「君大丈夫かい」と主人さえ懸念けんねんらしい顔をする。細君は無論の事心配そうに「せつかく見事な帽子をもし壊こわしでもしちやあ大変ですから、もう好い加減になすつたら宜ようござんしょう」と注意をする。得意なのは持主だけで「ところが壊こわれないから妙でしょう」と、くちやくちやになつたのを尻の下から取り出してそのまま頭へ載せると、不思議な事には、頭の恰好かつこうにたちまち回復する。「実に丈夫

な帽子です事ねえ、どうしたんでしよう」と細君がいよいよ感心すると「なにどうもしたんじやありません、元からこう云う帽子なんです」と迷亭は帽子を被ったまま細君に返事をする。

「あなたも、あんな帽子を御買になつたら、いいでしょう」としばらくして細君は主人に勧めかけた。「だつて苦沙弥君は立派な麦藁むぎわらの奴を持つてゐるじやありませんか」「ところがあなた、せんだつて小供があれを踏み潰つぶしてしまひまして」「おやおやそりや惜しい事ことをしましたね」「だから今度はあなたのような丈夫で奇麗なのを買つたら善かろうと思ひますんで」と細君はパナマの値段ねだんを知らないものだから「これになさいよ、ねえ、あなた」としきりに主人に勧告している。

迷亭君は今度は右の袂たもとの中から赤いケース入りの鋏はさみを取り出

して細君に見せる。「奥さん、帽子はそのくらいにしてこの鋏を御覧なさい。これがまたすこぶる重宝ちやうほうな奴で、これで十四通りに使えるんです」この鋏が出ないと主人は細君のためにパナマ責めになるところであつたが、幸に細君が女として持つて生れた好奇心のために、この厄運やくうんを免まぬかれたのは迷亭の機転と云わんよりむしろ僥倖ぎやうこうの仕合せだと吾輩は看破した。「その鋏がどうして十四通りに使えます」と聞くや否や迷亭君は大得意な調子で「今一々説明しますから聞いていらつしやい。いいですか。ここに三日月形の欠け目がありましよう、ここへ葉巻を入れてぷつりと口を切るんです。それからこの根にちよと細工がありましよう、これで針金をぽつぽつやりますね。次には平たくして紙の上へ横に置くじようぎと定規の用をする。また刃はの裏には度盛どもりがしてあるから物指ものさしの代用も出来る。こちらの表にはヤスリが付い

ているこれで爪を磨りまさあ。ようがすか。この先きを螺旋鉦の頭へ刺し込んでぎりぎり廻すと金槌かなづちにも使える。うんと突き込んでこじ開けると大抵の釘付くぎづけの箱なんざあ苦もなく蓋ふたがとれる。まった、こちらの刃の先は錐きりに出来ている。ここん所ところは書き損いの字を削る場所けずで、ばらばらに離すと、ナイフとなる。一番しまいに——さあ奥さん、この一番しまいが大変面白いんです、ここに蠅はえの眼玉くらいな大きさの球たまがありましよう、ちよつと、覗のぞいて御覧なさい」「いやですわまたきつと馬鹿になさるんだから」「そう信用がなくなつちや困つたね。だが欺だまされたと思つて、ちよいと覗いて御覧なさいな。え？ 厭いやですか、ちよつとでいいから」と鋏はさみを細君に渡す。細君は覚束おぼつかなげに鋏を取りあげて、例の蠅の眼玉の所へ自分の眼玉を付けてしきりに覗ねらいをつけている。「どうです」「何だか真黒ですわ」「真黒じゃいけませ

んね。もう少し障子の方へ向いて、そう鋏を寝かさずに——そう
そうそれなら見えるでしょう」「おやまあ写真ですねえ。どうし
てこんな小さな写真を張り付けたんでしょう」「そこが面白いと
ころでさあ」と細君と迷亭はしきりに問答をしている。最前か
ら黙っていた主人はこの時急に写真が見たくなつたものと見え
て「おい俺にもちよつと覧みせろ」と云うと細君は鋏を顔へ押し
付けたまま「実に奇麗です事、裸体の美人ですね」と云つてな
かなか離さない。「おいちよつと御見せと云うのに」「まあ待つ
ていらつしやいよ。美くしい髪ですね。腰までありますよ。少
し仰向あおむいて恐ろしい背せいの高い女だ事、しかし美人ですね」「おい
御見せと云つたら、大抵にして見せるがいい」と主人は大に急おおい
き込んで細君に食つて掛る。「へえ御待遠さま、たと御覧遊ば
せ」と細君が鋏を主人に渡す時に、勝手から御三おさんが御客さまの

おあつらえ

御誂が参りましたと、二個の笹蕎麦を座敷へ持つて来る。

「奥さんこれが僕の自弁の御馳走ですよ。ちよつと御免蒙つて、

ここであつてつく事に致しますから」と丁寧^{ていねい}に御辞儀をする。真

面目なような巫山戯^{ふざけ}たような動作だから細君も応対に窮したと

見えて「さあどうぞ」と軽く返事をしたがり拝見している。主

人はようやく写真から眼を放して「君この暑いのに蕎麦は毒だ

ぜ」と云った。「なあに大丈夫、好きなものは滅多^{めった}に中^{あた}るもん

じゃない」と蒸籠^{せいろう}の蓋^{ふた}をとる。「打ち立てはありがたいな。蕎麦^{そば}

の延びたのと、人間の間^まが抜けたのは由来たのもしくないもん

だよ」と薬味^{やくみ}をツユの中へ入れて無茶苦茶に掻^かき廻^{まわ}す。「君

そんなに山葵^{わさび}を入れると辛^からいぜ」と主人は心配そうに注意し

た。「蕎麦はツユと山葵で食うもんだあね。君は蕎麦が嫌いなん

だろう」「僕は鰻^{うどん}が好きだ」「鰻^{うどん}は馬子^{まご}が食うもんだ。蕎麦

の味を解しない人ほど気の毒な事はない」と云いながら杉箸を
むぎと突き込んで出来るだけ多くの分量を二寸ばかりの高さに
しゃくい上げた。「奥さん蕎麦を食うにもいろいろ流儀がありま
すがね。初心しよしんの者に限つて、無暗むやみにツ、ユを着けて、そうして口
の内うちでくちやくちややつていますね。あれじゃ蕎麦の味はない
ですよ。何でも、こう、一ひとしやくいに引つ掛けてね」と云い
つつ箸を上げると、長い奴が勢揃せいぞろいをして一尺ばかり空中に釣
るし上げられる。迷亭先生もう善かろうと思つて下を見ると、
まだ十二三本の尾が蒸籠の底を離れないで簀垂すだれの上に纏綿てんめんし
ている。「こいつは長いな、どうです奥さん、この長さ加減は」
とまた奥さんに相の手を要求する。奥さんは「長いものでござ
いますね」とさも感心したらしい返事をする。「この長い奴へ
ツ、ユを三分さんぶいち一つけて、一口に飲んでしまうんだね。嚙かんじやい

けない。囃んじや蕎麦の味がなくなる。つるつると咽喉のどを滑すべり込むところがねうちだよ」と思い切つて箸はしを高く上げると蕎麦はようやくの事で地を離れた。左手ゆんでに受ける茶碗の中へ、箸を少しずつ落して、尻尾の先からだんだんに浸ひたすと、アーキミジスの理論によつて、蕎麦の浸つかつた分量だけツユの嵩かさが増してくる。ところが茶碗の中には元からツユが八分目這入はいつてゐるから、迷亭の箸にかかつた蕎麦の四半分しはんぶんも浸つからない先に茶碗はツユで一杯になつてしまつた。迷亭の箸は茶碗を去さる五寸の上に至つてぴたりと留まつたきりしばらく動かない。動かないのも無理はない。少しでも卸おろせばツユが溢こぼれるばかりである。迷亭もここに至つて少し蹢躅ちゆうちよの体ていであつたが、たちまち脱兎だつとの勢を以て、口を箸の方へ持つて行つたなと思ふ間まもなく、つるつるちゆうと音がして咽喉のど笛が一二度上下じようげへ無理に動いたら箸の先

の蕎麦は消えてなくなつておつた。見ると迷亭君の両眼から涙のようなものが一二滴眼尻から頬へ流れ出した。山葵が利いたものか、飲み込むのに骨が折れたものかこれはいまだに判然しない。「感心だなあ。よくそんなに一どきに飲み込めたものだ」と主人が敬服すると「御見事です事ねえ」と細君も迷亭の手際を激賞した。迷亭は何にも云わないで箸を置いて胸を二三度敲いたが「奥さん箸は大抵三口半か四口で食うんですね。それより手数を掛けちゃ旨く食えませんよ」とハンケチで口を拭いてちよつと一息入れている。

ところへ寒月君が、どう云う了見かこの暑いのに御苦勞にも冬帽を被つて両足を埃だらけにしてやつてくる。「いや好男子の御入来だが、喰い掛けたものだからちよつと失敬しますよ」と迷亭君は衆人環座の裏にあつて臆面もなく残つた蒸籠を平げる。

今度は先刻さつきのように目覚めざましい食方もしなかつた代りに、ハンケチを使つて、途中で息を入れると云う不体裁もなく、蒸籠せいろう二つを安々とやつてのけたのは結構だつた。

「寒月君博士論文はもう脱稿するのかね」と主人が聞くと迷亭もその後あとから「金田令嬢がお待ちかねだから早々そうそう呈出ていしゅつしたまえ」と云う。寒月君は例のごとく薄気味の悪い笑を洩もらして「罪ですからなるべく早く出して安心させてやりたいのですが、何しろ問題が問題で、よほど労力いの入る研究を要するのですから」と本気の沙汰とも思われない事を本気の沙汰らしく云う。「そうさ問題が問題だから、そう鼻の言う通りにもならないね。もつともあの鼻なら充分鼻息をうかがうだけの価値はあるがね」と迷亭も寒月流な挨拶をする。比較的に真面目なのは主人である。「君の論文の問題は何とか云つたつけな」「蛙めだまの眼球の電動作用

に對する紫外光線しがいこうせんの影響と云うのです」「そりや奇だね。さすがは寒月先生だ、蛙の眼球は振ふるつてるよ。どうだろう苦沙弥君、論文脱稿前にその問題だけでも金田家へ報知しておいては」主人は迷亭の云う事には取り合わないで「君そんな事が骨の折れる研究かね」と寒月君に聞く。「ええ、なかなか複雑な問題です、第一蛙の眼球のレンズの構造がそんな単簡たんかんなものでありませんからね。それでいろいろ実験もしなくちゃなりませんがまず丸ガラス硝子の球をこしらえてそれからやろうと思つています」「硝子の球なんかガラス屋へ行けば訳ないじゃないか」「どうして——どうして」と寒月先生少々反身そりみになる。「元来円えんとか直線とか云うのは幾何学的のもので、あの定義に合つたような理想的な円や直線は現実世界にはないもんです」「ないもんなら、廃よしたらよかろう」と迷亭が口を出す。「それでまず実験上差さし支つかえな

いくらいな球を作つて見ようと思ひましてね。せんだつてから
 やり始めたのです」「出来たかい」と主人が訳のないようにき
 く。「出来るものですか」と寒月君が云つたが、これでは少々矛
 盾だと気が付いたと見えて「どうもむずかしいです。だんだん
 磨すつて少しこつち側の半径が長過ぎるからと思つてそつちを心
 持落すと、さあ大変今度は向側むこうがわが長くなる。そいつを骨を折つ
 てようやく磨すり潰つぶしたかと思うと全体の形がいびつになるん
 です。やつとの思いでこのいびつを取るとまた直径に狂ひが出来
 ます。始めは林檎りんごほどな大きさのものがだんだん小さくなつて
 苺いちじくほどになります。それでも根気よくやつていると大豆だいずほどに
 なります。大豆ほどになつてもまだ完全な円は出来ませんよ。
 私も随分熱心に磨りましたが——この正月からガラス玉を大小
 六個磨り潰つぶしましたよ」と嘘だか本当だか見当のつかぬところ

ちようちよう

を喋々と述べる。「どこでそんなに磨っているんだい」「やつぱり学校の実験室です、朝磨り始めて、昼飯のときちよつと休んでそれから暗くなるまで磨るんですが、なかなか楽じゃありません」「それじゃ君が近頃忙がしい忙がしいと云つて毎日日曜でも学校へ行くのはその珠を磨りに行くんだね」「全く目下のところは朝から晩まで珠ばかり磨っています」「珠作りの博士となつて入り込みしは——と云うところだね。しかしその熱心を聞かせたら、いかな鼻でも少しはありがたがるだろう。実は先日僕がある用事があつて図書館へ行つて歸りに門を出ようとしたら偶然老梅君に出逢つたのさ。あの男が卒業後図書館に足が向くとはよほど不思議な事だと思つて感心に勉強するねと云つたら先生妙な顔をして、なに本を読みに来たんじやない、今門前を通り掛つたらちよつと小用がしたくなつたから拝借に立ち寄つ

たんだと云つたんで大笑をしたが、老梅君と君とは反対の好例として新撰蒙求しんせんもうぎゅうに是非入れたいよ」と迷亭君例のごとく長たらしい註釈をつける。主人は少し真面目になつて「君そう毎日毎日珠ばかり磨つてるのもよからうが、元来いつ頃出来上るつもりかね」と聞く。「まあこの容子ようすじゃ十年くらいかかりそうです」と寒月君は主人より呑氣のんきに見受けられる。「十年じゃ——もう少し早く磨り上げたらよからう」「十年じゃ早い方です、事によると廿年くらいかかります」「そいつは大変だ、それじゃ容易に博士にやなれないじゃないか」「ええ一日も早くなつて安心さしてやりたいのですがとにかく珠を磨り上げなくっちゃ肝心の実験が出来ませんから……」

寒月君はちよつと句を切つて「何、そんなにご心配には及びませんよ。金田でも私の珠ばかり磨つてる事はよく承知してい

ます。実は二三日前^{にさんち}行つた時にもよく事情を話して来ました」としたり顔に述べ立てる。すると今まで三人の談話を分らぬながら傾聴していた細君が「それでも金田さんは家族中残らず、先月から大磯へ行つていらつしやるじゃありませんか」と不審そうに尋ねる。寒月君もこれには少し辟易^{へきえき}の体であつたが「そりや妙ですな、どうしたんだろう」ととぼけている。こう云う時に重宝なのは迷亭君で、話の途切^{とぎ}れた時、極^{きま}りの悪い時、眠くなつた時、困つた時、どんな時でも必ず横合から飛び出してくる。「先月大磯へ行つたものに両^{りょうさんち}三日^{さんじつ}前東京で逢うなどは神秘的でいい。いわゆる靈の交換だね。相思の情の切な時にはよくそう云う現象が起るものだ。ちよつと聞くと夢のようだが、夢にしても現実よりたしかな夢だ。奥さんのように別に思いも思われもしない苦沙弥君の所へ片付いて生涯^{しょうがい}恋の何物たるを御解

しにならん方には、御不審ももつともだが……」「あら何を証拠にそんな事をおっしゃるの。随分輕蔑けいべつなさるのね」と細君は中途から不意に迷亭に切り付ける。「君だつて恋煩こいわずらいなんかした事はなさそうじゃないか」と主人も正面から細君に助太刀をする。「そりや僕の艶聞えんぶんなどは、いくら有つてもみんな七十五日以上経過しているから、君方きみがたの記憶には残つていないかも知れないが——実はこれでも失恋の結果、この歳になるまで独身で暮らしているんだよ」と一順列座の顔を公平に見廻わす。「ホホホ面白い事」と云つたのは細君で、「馬鹿にしていらあ」と庭の方を向いたのは主人である。ただ寒月君だけは「どうかその懷旧談こうかくを後学のために伺いたいもので」と相変らずにやにやする。

「僕だいふのも大分神秘的で、故小泉八雲先生に話したら非常に受けるのだが、惜しい事に先生は永眠されたから、実のところ話す張合

もないんだが、せつかくだから打ち開けるよ。その代りしまい
まで謹聴しなくっちゃいけないよ」と念を押していよいよ本文
に取り掛る。「回顧すると今を去る事——ええと——何年前だつ
たかな——面倒だからほぼ十五六年前としておこう」「冗談じや
ない」と主人は鼻からフンと息をした。「大変物覚えが御悪いの
ね」と細君がひやかした。寒月君だけは約束を守つて一言も云
わずに、早くあとが聴きたいと云う風をする。「何でもある年の
冬の事だが、僕が越後の国はかんばらごおりたけのこだに蒲原郡たこつぽとうげ筍谷を通つて、蛸壺峠へ
かかつて、これからいよいよ会津領あいづりょう五へ出ようとするところだ」
「妙なところだな」と主人がまた邪魔をする。「だまつて聴いて
いらつしやいよ。面白いから」と細君が制する。「ところが日は
暮れる、路は分らず、腹は減る、仕方がないから峠の真中にあ
る一軒屋をたた敲いて、これこれかようかようしかじかの次第だか

ら、どうか留めてくれと云うと、御安い御用です、さあ御上がんなさいと裸蠟燭を僕の顔に差しつけた娘の顔を見て僕はぶるぶると悸えたがね。僕はその時から恋と云う曲者の魔力を切実に自覚したね」「おやいやだ。そんな山の中にも美しい人があるんでしようか」「山だつて海だつて、奥さん、その娘を一目あなたに見せたいと思うくらいですよ、文金の高島田に髪を結いましてね」「へえー」と細君はあつけに取られている。「這入つて見ると八畳の真中に大きな囲炉裏が切つてあつて、その周りに娘と娘の爺さんと婆さんと僕と四人坐つたんですがね。さぞ御腹が御減りでしょうと云いますから、何でも善いから早く食わせ給えと請求したんです。すると爺さんがせっかくの御客さまだから蛇飯でも炊いて上げようと云うんです。さあこれからがいよいよ失恋に取り掛るところだからしつかりして聴きたま

え」「先生しつかりして聴く事は聴きますが、なんぼ越後の国だつて冬、蛇がいやしますまい」「うん、そりや一応もつともな質問だよ。しかしこんな詩的な話になるとそう理窟りくつにばかり拘泥こうでいしてはいられないからね。鏡花の小説にや雪の中から蟹かにが出てくるじゃないか」と云つたら寒月君は「なるほど」と云つたきりまた謹聴の態度に復した。

「その時分の僕は随分悪あくもの食いの隊長で、蝗いなご、なめくじ、赤蛙などは食い厭あきていたくらいなところだから、蛇飯は乙おつだ。

早速御馳走なべになろうと爺さんに返事をした。そこで爺さん囲炉裏の上へ鍋なべをかけて、その中へ米を入れてぐずぐず煮出したものだね。不思議な事にはその鍋なべの蓋ふたを見ると大小十個ばかりの穴があいている。その穴から湯気がふうふう吹くから、旨うまい工夫をしたものだ、田舎いなかにしては感心だと見ていると、爺さんふ

と立つて、どこかへ出て行つたがしばらくすると、大きな笹を
 小脇に抱^かい込んで帰つて来た。何気なくこれを囲炉裏の傍^{そば}へ置
 いたから、その中を覗^{のぞ}いて見ると——いたね。長い奴が、寒い
 もんだから御互にとぐろの捲^まきくらをやつて塊^{かた}まつていました
 ね」「もうそんな御話しは廃^よしになさいよ。厭らしい」と細君は
 眉に八の字を寄せる。「どうしてこれが失恋の大原因になるん
 だからなかなか廃せませんや。爺さんはやがて左手に鍋の蓋を
 とつて、右手に例の塊^{ほう}まつた長い奴を無雑作^{むぞうさ}につかまえて、い
 きなり鍋の中へ放^{ほう}り込んで、すぐ上から蓋をしたが、さすがの
 僕もその時ばかりはつと息の穴が塞^{ふさが}つたかと思つたよ」「もう
 御やめになさいよ。気味^{きび}の悪るい」と細君しきりに怖^{こわ}がつてい
 る。「もう少して失恋になるからしばらく辛抱^{しんぼう}していらつしや
 い。すると一分立つか立たないうちに蓋の穴から鎌首^{かまくび}がひよい

と一つ出ましたのには驚ろきましたよ。やあ出たなと思うと、隣の穴からもまたひよいと顔を出した。また出たよと云ううち、あちらからも出る。こちらからも出る。とうとう鍋中蛇なべじゅうの面つらだらけになつてしまつた」「なんで、そんなに首を出すんだい」「鍋の中が熱いから、苦しまぎれに這い出そうとするのさ。やがて爺さんは、もうよかろう、引つ張らつしとか何とか云うと、婆さんははあーと答える、娘はあいと挨拶をして、名々めいめいに蛇の頭を持つてぐいと引く。肉は鍋の中に残るが、骨だけは奇麗に離れて、頭を引くと共に長いのが面白いように抜け出してくる」「蛇の骨抜きですね」と寒月君が笑いながら聞くと「全くの事骨抜きだ、器用な事をやるじやないか。それから蓋を取つて、杓子しゃくしでもつて飯と肉を矢鱈やたらに掻かき交まぜて、さあ召し上がれと来た」「食つたのかい」と主人が冷淡に尋ねると、細君は苦にがい顔をして

「もう廃しになさいよ、胸が悪くつて御飯も何もたべられやしない」と愚痴をこぼす。「奥さんは蛇飯を召し上がりながら、そんな事をおつしやるが、まあ一遍たべてご覧なさい、あの味ばかりは生涯忘れられませんぜ」「おお、いやだ、誰が食べるもんですか」「そこで充分御饌も頂戴し、寒さも忘れるし、娘の顔も遠慮なく見るし、もう思いおく事はないと考えていると、御休みなさいましと云うので、旅の労れもある事だから、仰に従つて、ごろりと横になると、すまん訳だが前後を忘却して寝てしまった」「それからどうなさいました」と今度は細君の方から催促する。「それから明朝になつて眼を覚してからが失恋でさあ」「どうかなさったんですか」「いえ別にどうもしやしませんがね。朝起きて巻煙草をふかしながら裏の窓から見ていると、向うの笥の傍で、葉缶頭が顔を洗っているんでさあ」「爺さんか婆さん

か」と主人が聞く。「それがさ、僕にも識別しにくかったから、しばらく拝見していて、その薬缶がこちらを向く段になって驚ろいたね。それが僕の初恋をした昨夜の娘なんだもの」「だって娘は島田に結いつているときつき云ったじゃないか」「前夜は島田さ、しかも見事な島田さ。ところが翌朝は丸薬缶さ」「人を馬鹿にしていらあ」と主人は例によつて天井の方へ視線をそらす。「僕も不思議の極きよく内心少々怖こわくなったから、なお余所よそながら容子ようすを窺うかがつていると、薬缶はようやく顔を洗おわい了わつて、傍かたえの石の上に置いてあつた高島田の鬢かすらを無雑作に被かぶつて、すましてうちへ這入はいつたんでなるほどと思つた。なるほどとは思つたよ。うなもののその時から、とうとう失恋の果敢はかなき運命をかこつ身となつてしまつた」「くだらない失恋もあつたもんだ。ねえ、寒月君、それだから、失恋でも、こんなに陽気で元気がいいん

だよ」と主人が寒月君に向つて迷亭君の失恋を評すると、寒月君は「しかしその娘が丸薬缶でなくつてめでたく東京へでも連れて御帰りになったら、先生はなお元氣かも知れませんか、とにかくせつかくの娘が禿はげであつたのは千秋せんしゅうの恨事こんじですねえ。それにしても、そんな若い女がどうして、毛が抜けてしまったんでしよう」「僕もそれについてはだんだん考えたんだが全く蛇飯を食い過ぎたせいに相違ないと思う。蛇飯てえ奴はのぼせるからね」「しかしあなたは、どこも何ともなくて結構でございましたね」「僕は禿にはならずですんだが、その代りにこの通りその時から近眼きんがんになりました」と金縁の眼鏡をとつてハンケチで叮嚀ていねいに拭ふいている。しばらくして主人は思い出したように「全体どこが神秘的なんだい」と念のために聞いて見る。「あの髪はどこで買ったのか、拾ったのかどう考えても未だいまに分らないか

らそこが神秘さ」と迷亭君はまた眼鏡を元のごとく鼻の上へかける。「まるで噺はなし家の話を聞くようでごさんすね」とは細君の批評であつた。

迷亭の駄弁もこれで一段落を告げたから、もうやめるかと思いのほか、先生は猿轡さるぐつわでも嵌はめられないうちはとうてい黙っている事が出来ぬ性たちと見えて、また次のような事をしゃべり出した。

「僕の失恋も苦にがい経験だが、あの時あの薬缶やかんを知らずに貫つたが最後生涯の目障りめざわになるんだから、よく考えないと険呑けんのんだよ。結婚なんかは、いざと云う間際になつて、飛んだところに傷口が隠みいれているのを見出す事がある者だから。寒月君などもそんなに憧憬しょうけいしたり憧憬しょうきようしたり独りひとでむずかしがらないで、篤とくと氣を落ちつけて珠たまを磨するがいいよ」といやに異見めいた事を述べる

と、寒月君は「ええなるべく珠ばかり磨っていたいんですが、向うでそうさせないんだから弱り切ります」とわざと辟易へきえきしたような顔付をする。「そうさ、君などは先方が騒ぎ立てるんだが、中には滑稽なのがあるよ。あの図書館へ小便をしに来た老梅君ろうばいなどになるとすこぶる奇だからね」「どんな事をしたんだい」と主人が調子づいて承うけたまわる。「なあに、こう云う訳さ。先生その昔静岡の東西館へ泊った事があるのさ。—— たった一と晩だけ—— それでその晩すぐにその下女に結婚を申し込んだのさ。僕も随分呑気のんきだが、まだあれほどには進化しない。もつともその時分には、あの宿屋に御夏おなつさんと云う有名な別嬪べっぴんがいて老梅君の座敷へ出たのがちようどその御夏さんなのだから無理はないがね」「無理がないどころか君の何とか峠とまるで同じじゃないか」「少し似ているね、実を云うと僕と老梅とはそんなに

差異はないからな。とにかく、その御夏さんに結婚を申し込んで、まだ返事を聞かないうちに水瓜すいかが食いたくなつたんだがね」「何だつて？」と主人が不思議な顔をする。主人ばかりではない、細君も寒月も申し合せたように首をひねつてちよつと考えて見る。迷亭は構わずどんどん話を進行させる。「御夏さん呼んで静岡に水瓜はあるまいかと聞くと、御夏さんが、なんぼ静岡だつて水瓜くらいはありますよと、御盆に水瓜を山盛りにして持つてくる。そこで老梅君食つたそうだ。山盛りの水瓜をこごとく平らげて、御夏さんの返事を待っていると、返事の来ないうちに腹が痛み出してね、うーんうーんと唸うなつたが少しも利目きぎめがないからまた御夏さんを呼んで今度は静岡に医者はあるまいかと聞いたら、御夏さんがまた、なんぼ静岡だつて医者くらいはありますよと云つて、天地玄黄てんちげんこうとかいう千字文せんじもんを盗んだ

ような名前のドクトルを連れて来た。翌朝あくるあさになつて、腹の痛みも御蔭でとれてありがたいと、出立する十五分前に御夏さんきのうを呼んで、昨日申し込んだ結婚事件の諾否を尋ねると、御夏さんは笑いながら静岡には水瓜もあります、御医者もありますが一夜作りの御嫁はありませんよと出て行つたきり顔を見せなかつたそうだ。それから老梅君も僕同様失恋になつて、図書館へは小便をするほか来なくなつたんだつて、考えると女は罪な者だよ」と云うと主人がいつになく引き受けて「本当にそうだ。せんだつてミュッセの脚本を読んだらそのうちの人物が羅馬ローマの詩人を引用してこんな事を云つていた。——羽より軽い者は塵ちりである。塵より軽いものは風である。風より軽い者は女である。女より軽いものは無むである。——よく穿うがつてゐるだろう。女なんか仕方がない」と妙なところで力味りきんで見せる。これを承うけたまわつた

細君は承知しない。「女の軽いのがいけないとおつしやるけれども、男の重いんだって好い事はないでしょう」「重いた、どんな事だ」「重いと云うな重い事ですわ、あなたのようなのです」「俺がなんで重い」「重いじゃありませんか」と妙な議論が始まる。迷亭は面白そうに聞いていたが、やがて口を開いて「そう赤くなつて互に弁難攻撃をするところが夫婦の真相と云うものかな。どうも昔の夫婦なんてものはまるで無意味なものだったに違いない」とひやかすのだから賞めるのだから曖昧な事を言つたが、それでやめておいても好い事をまた例の調子で敷衍して、しも下のごとく述べられた。

「昔は亭主に口返答なんかした女は、一人もなかったんだって云うが、それなら唾おしを女房にしていると同じ事で僕などは一向いっこうありがたくない。やつぱり奥さんのようにあなたは重いじゃあ

りませんかとか何とか云われて見たいね。同じ女房を持つくらいなら、たまには喧嘩の一つ二つしなくっちゃ退屈でしょうがないからな。僕の母などと来たら、おやじの前へ出てはい、といで持ち切っていたものだ。そうして二十年もいっしょになつてゐるうちに寺参りよりほかに外へ出た事がないと云うんだから情けないじゃないか。もつとも御蔭で先祖代々の戒名かいみょうはことごとく暗記している。男女間の交際だつてそうさ、僕の小供の時分などは寒月君のように意中の人と合奏をしたり、霊の交換をやつて朦朧もうろうたい体で出合つて見たりする事はとうてい出来なかつた。「御氣の毒様で」と寒月君が頭を下げる。「実に御氣の毒さ。しかもその時分の女がかなら必ずしも今の女より品行がいいと限らんからね。奥さん近頃は女学生が墮落したの何だのとやかましく云いますがね。なに昔はこれより烈はげしかったんですよ」「そうで

しようか」と細君は真面目である。「そうですとも、出鱈目じやない、ちゃんと証拠があるから仕方ありませんや。苦沙弥君、君も覚えているかも知れんが僕等の五六歳の時までは女の子を唐茄子のように籠へ入れて天秤棒で担いで売つてあるいたもんだ、ねえ君」「僕はそんな事は覚えておらん」「君の国じやどうだか知らないが、静岡じやたしかにそうだった」「まさか」と細君が小さい声を出すと、「本当ですか」と寒月君が本当らしからぬ様子で聞く。

「本当さ。現に僕のおやじが価を付けた事がある。その時僕は何でも六つくらいだったろう。おやじといつしよに油町から通町へ散歩に出ると、向うから大きな声をして女の子はよしかな、女の子はよしかなと怒鳴つてくる。僕等がちょうど二丁目の角へ来ると、伊勢源と云う呉服屋の前でその男に出つ食わした。伊

勢源と云うのは間口が十間で蔵が五つ戸前あつて静岡第一の呉服屋だ。今度行つたら見て来給え。今でも歴然と残っている。立派なうちだ。その番頭が甚兵衛と云つてね。いつでも御袋が三日前に亡くなりましたと云うような顔をして帳場の所へ控えている。甚兵衛君の隣りには初さんという二十四五の若い衆が坐っているが、この初さんがまた雲照律師に帰依して三七二十一日の間蕎麦湯だけで通したと云うような青い顔をしている。初さんの隣りが長どんでこれは昨日火事で焚き出されたかのごとく愁然と算盤に身を凭している。長どんと併んで……」君は呉服屋の話をするのか、人売りの話をするのか」「そうそう人売りの話をやっていたんだつけ。実はこの伊勢源についてもすこぶる奇譚があるんだが、それは割愛して今日は人売りだけにしておこう」「人売りもついでにやめるがいい」「どうして

これが二十世紀の今日こんにちと明治初年頃の女子の品性の比較について大なる参考になる材料だから、そんなに容易たやすくやめられるものか——それで僕がおやじと伊勢源の前までくると、例の人売りがおやじを見て旦那女の子の仕舞物しまいものはどうです、安く負けておくから買っておくんなさいと云いながら天秤棒てんびんぼうをおろして汗を拭ふいているのさ。見ると籠の中には前に一人後ろうしろに一人両方とも二歳ばかりの女の子が入れてある。おやじはこの男に向つて安ければ買つてもいいが、もうこれぎりかいと聞くと、へえ生憎あいにく今日はみんな売り尽つくしてたった二つになつちました。どつちでも好いから取つとくんなさいなと女の子を両手で持つて唐茄子とうなすか何ぞのようにおやじの鼻の先へ出すと、おやじはぼんぽんと頭を叩たたいて見て、ははあかなりな音だと云つた。それからいよいよ談判が始まつて散々さんざ価値切ねぎつた末おやじが、買つて

も好いが品はたしかだろうなと聞くと、ええ前の奴は始終見て
いるから間違はありませんがね後ろうしに担かついでる方は、何しろ眼
がないんですから、ことによるとひびが入ってるかも知れませ
ん。こいつの方なら受け合えない代りに価段ねだんを引いておきます
と云った。僕はこの問答を未だいまに記憶しているんだがその時小
供心に女と云うものはなるほど油断のならないものだと思つた
よ。——しかし明治三十八年の今日こんにちこんな馬鹿な真似をして女
の子を売つてあるくものもなし、眼を放して後ろうしへ担かついだ方は
陰呑けんのんなどと云う事も聞かないようだ。だから、僕の考ではや
はり泰西文明たいせいの御蔭で女の品行もよほど進歩したものだだろうと
断定するのだが、どうだろう寒月君」

寒月君は返事をする前にまず鷹揚おうような咳払せきばらいを一つして見せたが、
それからわざと落ちついた低い声で、こんな觀察を述べられた。

「この頃の女は学校の行き帰りや、合奏会や、慈善会や、園遊会で、ちよいと買つて頂戴な、あらおいや？　などと自分で自分を売りにあるいていますから、そんな八百屋やおやのお余りを雇つて、女の子はよしか、なんて下品な依托販売いたくはんばいをやる必要はないですよ。人間に独立心が発達してくると自然こんな風になるものです。老人なんぞはいらぬ取越苦勞をして何とかとか云います。が、實際を云うとこれが文明の趨勢すうせいですから、私などは大に喜ばしい現象だと、ひそかに慶賀の意を表しているのです。買う方だつて頭を敲たたいて品物は確かかなんて聞くような野暮やばは一人もないんですからその辺は安心なものでさあ。またこの複雑な世の中に、そんな手数てすうをする日にやあ、際限がありませんからね。五十になつたつて六十になつたつて亭主を持つ事も嫁に行く事も出来やしません」寒月君は二十世紀の青年だけあつて、

大に当世流の考を開陳かいちんしておいて、敷島の煙をふうーと迷亭先生おおいの顔の方へ吹き付けた。迷亭は敷島の煙くらいで辟易へきえきする男ではない。「仰せの通り方今ほうこんの女生徒、令嬢などは自尊自信の念から骨も肉も皮まで出来ていて、何でも男子に負けないところが敬服の至りだ。僕の近所の女学校の生徒などと来たらえらいものだけ。筒袖つつそでを穿はいて鉄棒かなぼうへぶら下がるから感心だ。僕は二階の窓から彼等の体操を目撃するたんびに古代希臘ギリシャの婦人を追懐するよ」「また希臘か」と主人が冷笑するように云い放つと「どうも美な感じのするものは大抵希臘から源を発しているから仕方がない。美学者と希臘とはとうてい離れられないやね。——ことにあの色の黒い女学生が一心不乱に体操をしているところを拝見すると、僕はいつでも Agnodice の逸話を思い出すのや」と物知り顔にしゃべり立てる。「またむずかしい名前が出て来

ましたね」と寒月君は依然としてにやにやする。「Agnodice はえらい女だよ、僕は実に感心したね。当時亜典アテンの法律で女が産婆を営業する事を禁じてあった。不便な事さ。Agnodice だつてその不便を感じるだろうじゃないか」「何だい、その——何とか云うのは」「女さ、女の名前だよ。この女がつらつら考えるには、どうも女が産婆になれないのは情けない、不便極まる。どうかして産婆になりたいもんだ、産婆になる工夫はあるまいかと三日三晩手を拱こまぬいて考え込んだね。ちようど三日目の暁方あけがたに、隣の家で赤ん坊がおぎやあと泣いた声を聞いて、うんそうだと豁然大悟して、それから早速長い髪を切つて男の着物をきき終おおて Hierophilus の講義をききに行つた。首尾よく講義をきき終おおせて、もう大丈夫と云うところでもつて、いよいよ産婆を開業した。ところが、奥さん流行はやりましたね。あちらでもおぎやあと

生れるこちらでもおぎやあと生れる。それがみんな Agnodice の世話なんだから大變儲もうかった。ところが人間万事塞翁さいおうの馬、
七転ななころび八起やおき、弱り目に祟たたり目で、ついこの秘密が露見に及んでついに御上おかみの御法度ごはつとを破つたと云うところで、重き御仕置しおきに仰せつけられそうになりました」「まるで講釈見たようです事」「なかなか旨うまいでしょう。ところが亜典アテンの女連が一同連署して嘆願に及んだから、時の御奉行もそう木で鼻を括くくつたような挨拶も出来ず、ついに当人は無罪放免、これからはたとい女たりとも産婆營業勝手たるべき事と云う御布令おふれさえ出でめでたく落着を告げました」「よくいろいろな事を知っていらつしやるのね、感心ねえ」「ええ大概の事は知っていますよ。知らないのは自分の馬鹿な事くらいなものです。しかしそれも薄々は知っています」「ホホホ面白い事ばかり……」と細君そうじう相形を崩して笑って

いると、格子戸こうしどのベルが相変らず着けた時と同じような音を出して鳴る。「おやまた御客様だ」と細君は茶の間へ引き下がる。細君と入れ違いに座敷へ這入はいつて来たものは誰かと思つたらぐに存じの越智東風君おちとうふうであつた。

ここへ東風君さえくれば、主人の家へ出入うちでいりする変人はことごとく網羅し尽つくしたとまで行かずとも、少なくとも吾輩の無聊ぶりようを慰むるに足るほどの頭数あたまたかずは御揃おそろいになつたと云わねばならぬ。これで不足を云つては勿体もったいない。運悪るくほかの家へ飼われたが最後、生涯人間中にかかる先生方が一人でもあるとさえ気が付かずに死んでしまふかも知れない。幸さいわいにして苦沙弥先生門下の猫児びょうじとなつて朝夕虎皮ちようせきの前に侍はんべるので先生は無論の事迷亭、寒月乃至東風などと云う広い東京にさえあまり例のない一騎当千の豪傑連の挙止動作を寝ながら拝見するのは吾輩にとつ

て千載一遇の光榮である。御蔭様でこの暑いのに毛袋でつまれていると云う難儀も忘れて、面白く半日を消光する事が出来るのは感謝の至りである。どうせこれだけ集まれば只事ただごとではすまない。何か持ち上がるだろうと襖ふすまの陰から謹つつしんで拝見する。

「どうもご無沙汰を致しました。しばらく」と御辞儀をする東風君の顔を見ると、先日のごとくやはり奇麗に光っている。頭だけで評すると何か緞帳役者どんちようやくしやのようにも見えるが、白い小倉こくらの袴はかまのゴワゴワするのを御苦勞にも鹿爪しかづめらしく穿はいているところは榊原健吉の内弟子としか思えない。従つて東風君の身体で普通の人間らしいところは肩から腰までの間だけである。「いや暑いのに、よく御出掛だね。さあずつと、こっちへ通りましたまゑ」と迷亭先生は自分の家うちらしい挨拶をする。「先生には大分だいぶ久しく御目にかかりません」「そうさ、たしかこの春の朗読会ぎりだつ

たね。朗読会と云えば近頃はやはり御盛かね。その後御宮にや
なりませんか。あれは旨^{うま}かつたよ。僕は^{おお}大に拍手したぜ、君氣
が付いてたかい」「ええ御蔭で大きに勇氣が出まして、とうと
うしまいまで漕^こぎつけました」「今度はいつ御催しがあります
か」と主人が口を出す。「七八^{ふたつき}兩月は休んで九月には何か賑^{にぎ}やか
にやりたいと思っております。何か面白い趣向はございますま
いか」「さよう」と主人が氣のない返事をする。「東風君僕の創
作を一つやらないか」と今度は寒月君が相手になる。「君の創
作なら面白いものだろうが、一体何かね」「脚本さ」と寒月君が
なるべく押しを強く出ると、案のごとく、三人はちよつと毒氣
をぬかれて、申し合せたように本人の顔を見る。「脚本はえら
い。喜劇かい悲劇かい」と東風君が歩を進めると、寒月先生な
お澄し返つて「なに喜劇でも悲劇でもないさ。近頃は旧劇とか

新劇とか大部だいぶやかましいから、僕も一つ新機軸を出して俳劇はいげきと云うのを作つて見たのさ」「俳劇たどんなものだい」「俳句趣味の劇と云うのを詰めて俳劇の二字にしたのさ」と云うと主人も迷亭も多少煙けむに捲まかれて控ひかえている。「それでその趣向と云うのは？」と聞き出したのはやはり東風君である。「根が俳句趣味からくるのだから、あまり長たらしくつて、毒悪なのはよくないと思つて一幕物にしておいた」「なるほど」「まず道具立てから話すが、これも極ごく簡単なのがいい。舞台の真中へ大きな柳を一本植え付けてね。それからその柳の幹から一本の枝を右の方へヌツと出させて、その枝へ鳥からすを一羽ひととまらせる」「鳥がじつとしていれればいいが」と主人が独り言ひとごのように心配した。「何わけは有りません、鳥の足を糸で枝へ縛しばり付けておくんです。でその下へ行水盥ぎょうずいだらいを出しましてね。美人が横向きになつて手拭を

使っているんです」「そいつは少しデカダンだね。第一誰がその女になるんだい」と迷亭が聞く。「何これもすぐ出来ます。美術学校のモデルを雇ってくるんです」「そりや警視庁がやかましく云いそうだな」と主人はまた心配している。「だって興行さえしなければ構わんじゃありませんか。そんな事をとやかく云った日にや学校で裸体画の写生なんざ出来っこありません」「しかしあれは稽古のためだから、ただ見ているのとは少し違うよ」「先生方がそんな事を云った日には日本もまだ駄目です。絵画だって、演劇だって、おんなじ芸術です」と寒月君大いに気焰きえんを吹く。「まあ議論はいいが、それからどうするのだい」と東風君、ことによると、やる了見りようけんと見えて筋を聞きたがる。「ところへ花道から俳人高浜虚子たかはまきよしがステッキを持って、白い灯心入りの帽子とうしんを被かぶつて、透綾すきやの羽織に、薩摩飛白さつまがすりの尻端折りの半靴しりつばしよと云う

こしらえて出てくる。着付けは陸軍の御用達ごようたし見たようだけれども俳人だからなるべく悠々ゆうゆうとして腹の中では句案に余念のない体ていであるかなくっちゃいけない。それで虚子が花道を行き切つていよいよ本舞台に懸つた時、ふと句案の眼をあげて前面を見ると、大きな柳があつて、柳の影で白い女が湯を浴びている、はつと思つて上を見ると長い柳の枝に烏が一羽とまつて女の行水を見下ろしている。そこで虚子先生大に俳味に感動したと云う思い入れが五十秒ばかりあつて、行水ぎすいの女に惚れる、烏かなと大きな声で一句朗吟するのを合図に、拍子木ひょうしぎを入れて幕を引く。

——— どうだろう、こう云う趣向は。御氣に入りませんかね。君おみや御宮になるより虚子になる方がよほどいいぜ」東風君は何だか物足らぬと云う顔付で「あんまり、あつけないようだ。もう少し人情を加味した事件が欲しいようだ」と真面目に答える。今

まで比較のおとなしくしていた迷亭はそういったつまでもだまつているような男ではない。「たつたそれだけで俳劇はすさまじいね。上田^{うえだびん}敏君の説によると俳味とか滑稽とか云うものは消極的で亡国の音^{いん}だそうだが、敏君だけあつてうまい事を云つたよ。そんなつまらない物をやつて見給え。それこそ上田君から笑われるばかりだ。第一劇だか茶番だか何だかあまり消極的で分らないじゃないか。失礼だが寒月君はやはり実験室で珠^{たま}を磨いてる方がいい。俳劇なんぞ百作つたつて二百作つたつて、亡国の音^{いん}じゃ駄目だ」寒月君は少々憤^{むっ}として、「そんなに消極的でしょうか。私はなかなか積極的なつもりなんですが」どつちでも構わん事を弁解しかける。「虚子がですね。虚子先生が女に惚^{おほ}れる、烏かなと烏を捕^{とら}えて女に惚^{おほ}れさしたところが大に積極的だろうと思います」「こりや新説だね。是非御講釈を伺がいきましょう」

「理学士として考えて見ると烏が女に惚れるなどと云うのは不合理でしょう」「ぶもつとも」「その不合理な事を無雑作に言むぞうさい放つて少しも無理に聞えませんか」「そうかしら」と主人が疑つた調子で割り込んだが寒月は一向頓着しない。「なぜ無理に聞えないかと云うと、これは心理的に説明するとよく分ります。実を云うと惚れるとか惚れないとか云うのは俳人その人に存する感情で烏とは没交渉の沙汰であります。しかるところあの烏は惚れてるなと感じるのは、つまり烏がどうのこうのと云う訳じゃない、ひつきよう必竟自分が惚れているんでさあ。虚子自身が美しい女の行水ぎようずいしているところを見てはつと思う途端にずっと惚れ込んだに相違ないです。さあ自分が惚れた眼で烏が枝の上で動きもしないで下を見つめているのを見たものだから、ははあ、あいつも俺と同じく参つてゐるなと癩かんちが違いをしたのです。癩違いには相

違ないですがそこが文学的でかつ積極的なところなんです。自分だけ感じた事を、断りもなく鳥の上に拡張して知らん顔をしてすましているところなんぞは、よほど積極主義じゃありませんか。どうです先生」「なるほど御名論だね、虚子に聞かしたら驚くに違いない。説明だけは積極だが、實際あの劇をやられた日には、見物人はたしかに消極になるよ。ねえ東風君」「へえどうも消極過ぎるように思います」と真面目な顔をして答えた。

主人は少々談話の局面を展開して見たくなつたと見えて、「どうです、東風さん、近頃は傑作ありませんか」と聞くと東風君は「いえ、別段これと云つて御目にかけるほどのものも出来ませんが、近日詩集を出して見ようと思ひまして——稿本こうほんを幸い持つて参りましたから御批評を願ひましょう」と懷から紫の袱紗包ふくさづつみを出して、その中から五六十枚ほどの原稿紙の帳面を取

り出して、主人の前に置く。主人はもつともらしい顔をして拝見と云つて見ると第一頁に

世の人に似ずあえかに見え給う

富子嬢に捧ぐ

と二行にかいてある。主人はちよつと神秘的な顔をしてしばらく一頁を無言のまま眺^{なが}めているので、迷亭は横合から「何だい新体詩かね」と云いながら覗^{のぞ}き込んで「やあ、捧げたね。東風君、思い切つて富子嬢に捧げたのはえらい」としきりに賞^ほめる。主人はなお不思議そうに「東風さん、この富子と云うのは本当に存在している婦人なのですか」と聞く。「へえ、この前迷亭先生とごいっしょに朗読会へ招待した婦人の一人です。ついこの御近所に住んでおります。実はただ今詩集を見せようと思つてちよつと寄つて参りましたが、生憎^{あいにく}先月から大磯へ避暑に行つ

て留守でした」と真面目くさつて述べる。「苦沙弥君、これが二十世紀なんだよ。そんな顔をしないで、早く傑作でも朗読するさ。しかし東風君この捧げ方は少しまずかったね。このあ、え、か、にと云う雅言^{がげん}は全体何と言う意味だと思つてゐるかね」「蚊弱^{かよわ}いとかたよわくと云う字だと思ひます」「なるほどそうも取れん事はないが本来の字義を云うと危^{あや}う、氣にと云う事だぜ。だから僕ならこうは書かないね」「どう書いたらもつと詩的になりましょう」「僕ならこうさ。世の人に似ずあえかに見え給う富子嬢の鼻の下、に捧ぐとするね。わずかに三字のゆきさつだが鼻の下、があるのとなひのとでは大變感じに相違があるよ」「なるほど」と東風君は解^げしかねたところを無理に納得^{なっとく}した体^{てい}にもてなす。

主人は無言のままようやく一頁をはぐつていよいよ巻頭第一章を読み出す。

倦^うんじて薰^{くん}ずる香裏^{こうり}に君の

霊か相思の煙のたなびき

おお我、ああ我、辛^{から}きこの世に

あまく得てしか熱き口づけ

「これは少々僕には解しかねる」と主人は嘆息しながら迷亭に渡す。「これは少々振り過ぎてる」と迷亭は寒月に渡す。寒月は「なああるほど」と云つて東風君に返す。

「先生御分りにならないのはごもつともで、十年前の詩界と今日^{こんにち}の詩界とは見違えるほど発達しておりますから。この頃の詩は寝転んで読んだり、停車場で読んではとうてい分りようがないので、作つた本人ですら質問を受けると返答に窮する事がよくあります。全くインスピレーションで書くので詩人はその他に何等の責任もないのです。註釈や訓義^{くんぎ}は学究のやる事で私共

の方では頓とんと構いません。せんだつても私の友人で送籍そうせきと云う男が一夜という短篇をかきましたが、誰が読んでも朦朧もうろうとして取り留めとがつかないので、当人に逢つて篤とくと主意のあるところを糺ただして見たのですが、当人もそんな事は知らないよと云つて取り合わないのです。全くその辺が詩人の特色かと思ひます」「詩人かも知れないが随分妙な男ですね」と主人が云うと、迷亭が「馬鹿だよ」と単簡たんかんに送籍君を打ち留めた。東風君はこれだけではまだ弁じ足りない。「送籍は吾々仲間のうちでも取除とりぬけですが、私の詩もどうか心持ちその気で読んでいただきたいの
で。ことに御注意を願ひたいのはからき、この世と、あまき口づけと対ついをとったところが私の苦心です」「よほど苦心をなすつた痕迹こんせきが見えます」「あまいとからいと反照するところなんかじゅうしちみちようとうがらしちよう
十七味調唐辛子調で面白い。全く東風君独特の伎倆で敬々服々

の至りだ」としきりに正直な人をまぜ返して喜んでいる。

主人は何と思つたか、ふいと立つて書斎の方へ行つたがやがて一枚の半紙を持って出てくる。「東風君の御作も拝見したから、今度は僕が短文を読んで諸君の御批評を願おう」といささか本気の沙汰である。「天然居士の墓碑銘てんねんこじ ぼひめいならもう二三遍拝聴したよ」「まあ、だまつていなさい。東風さん、これは決して得意のものではありませんが、ほんの座興ですから聴いて下さい」「是非伺がいきましょう」「寒月君もついでに聞き給え」「ついででなくても聴きますよ。長い物じゃないでしょう」「僅々六十余字さ」と苦沙弥先生いよいよ手製の名文を読み始める。

「大和魂！」
やまとだまし

と叫んで日本人が肺病やみのような咳せきをした」

「起し得て突兀とつこつですね」と寒月君がほめる。

「大和魂！ と新聞屋が云う。大和魂！ と掏摸すりが云う。大和

魂が一躍して海を渡った。英国で大和魂の演説をする。独逸^{ドイツ}で

大和魂の芝居をする」

「なるほどこりや天然居士^{てんねんこじ}以上の作だ」と今度は迷亭先生がそ

り返つて見せる。

「東郷大將が大和魂を有^もっている。肴屋^{さかなや}の銀さんも大和魂を有^もっている。詐偽師^{さぎし}、山師^{やまし}、人殺しも大和魂を有^もっている」

「先生そこへ寒月も有^もっているとつけて下さい」

「大和魂はどんなものかと聞いたら、大和魂さと答えて行き過ぎた。五六間行つてからエヘンと云う声が聞こえた」

「その一句は大出来だ。君はなかなか文才があるね。それから次の句は」

「三角なものが大和魂か、四角なものが大和魂か。大和魂は名前の示すごとく魂である。魂であるから常にふらふらしている」

「先生だいぶ面白うございますが、ちと大和魂が多過ぎはしませんか」と東風君が注意する。「賛成」と云ったのは無論迷亭である。

「誰も口にせぬ者はないが、誰も見たものはない。誰も聞いた事はあるが、誰も遇あつた者がない。大和魂はそれ天狗てんぐの類たぐいか」

主人は一結杳然いっけつようぜんと云うつもりで読み終つたが、さすがの名文もあり短か過ぎるのと、主意がどこにあるのか分りかねるの
で、三人はまだあとがある事と思つて待つてゐる。いくら待つていても、うんとも、すんとも、云わないので、最後に寒月が「それぎりですか」と聞くと主人は軽かろく「うん」と答えた。うんは少し気楽過ぎる。

不思議な事に迷亭はこの名文に対して、いつものようにあまり駄弁を振わなかつたが、やがて向き直つて、「君も短篇を集め

て一卷として、そうして誰かに捧げてはどうだ」と聞いた。主人は事もなげに「君に捧げてやろうか」と聴くと迷亭は「真平^{まっぺら}だ」と答えたぎり、先刻細君^{さつき}に見せびらかした鉢^{はさみ}をちよきちよき云わして爪をとっている。寒月君は東風君に向つて「君はあの金田の令嬢を知つてゐるのかい」と尋ねる。「この春朗読会へ招待してから、懇意になつてそれから始終交際をしている。僕はあの令嬢の前へ出ると、何となく一種の感に打たれて、当分のうちは詩を作つても歌を詠^よんでも愉快に興が乗つて出て来る。この集中にも恋の詩が多いのは全くああ云う異性の朋友^{ほうゆう}からインスピレーションを受けるからだろうと思う。それで僕はあの令嬢に対しては切実に感謝の意を表しなければならんからこの機を利用して、わが集を捧げる事にしたのさ。昔^{むか}しから婦人に親友のないもので立派な詩をかいたものはないそうだ」「そうか

なあ」と寒月君は顔の奥で笑いながら答えた。いくら駄弁家の寄合でもそう長くは続かんものと見えて、談話の火の手は大分下火になった。吾輩も彼等の変化なき雑談を終日聞かねばならぬ義務もないから、失敬して庭へ蟪蛄かまきりを探しに出た。梧桐あおぎりの緑を綴つづる間から西に傾く日が斑まだらに洩もれて、幹にはつくつく法師ぼうしが懸命にないている。晩はことによると一雨かかるかも知れない。

七

吾輩は近頃運動を始めた。猫の癖に運動なんて利きいた風だと一概に冷罵れいばし去る手合てあいにちよつと申し聞けるが、そう云いう人間だつてつい近年までは運動の何者たるを解せず、食つて寝る

のを天職のように心得ていたではないか。無事ぶじ是貴人これきにんとか称となえて、懷手ふししろでをして座布団ざぶとんから腐れかかった尻を離さざるをもつて旦那の名誉と脂下やにさがつて暮したのは覚えてゐるはずだ。運動をし
ろの、牛乳を飲めの冷水を浴びろの、海の中へ飛び込めの、夏
になったら山の中へ籠こもつて当分霞を食くらえのとくだらぬ注文を連
発するようになったのは、西洋から神国へ伝染した輓近ばんきんの病
気で、やはりペスト、肺病、神経衰弱の一族と心得ていいくら
いだ。もつとも吾輩は去年生れたばかりで、当年とつて一歳だ
から人間がこんな病気に罹かかり出した当時の有様は記憶に存して
おらん、のみならずその砌みぎりは浮世の風かざ中なかにふわついておらな
かったに相違ないが、猫の一年は人間の十年に懸かけ合ふと云つ
てもよろしい。吾等の寿命は人間より二倍も三倍も短いに係かから
ず、その短日月の間に猫一疋の発達は十分つかまつ仕るところをもつて

推論すると、人間の年月と猫の星霜せいそうを同じ割合に打算するのはなほだしき誤謬ごびゅうである。第一、一歳何ヵ月に足らぬ吾輩がこのくらいの見識を有しているのでも分るだろう。主人の第三女などは数え年で三つだそうだが、智識の発達から云うと、いやはや鈍いものだ。泣く事と、寝小便をする事と、おっぱいを飲む事よりほかに何にも知らない。世を憂い時を憤いきどおる吾輩などに較くらべると、からたわいのない者だ。それだから吾輩が運動、海水浴、転地療養の歴史を方寸のうちに畳み込んでいたって毫ごうも驚くに足りない。これしきの事をもし驚ろく者があつたなら、それは人間と云う足の二本足りない野呂間のろまに極きまっている。人間は昔から野呂間である。であるから近頃きんぎょうに至つて漸々運動の功こう能を吹聴ふいちようしたり、海水浴の利益を喋々ちようちようして大発明のように考えるのである。吾輩などは生れない前からそのくらいな事はちや

んと心得ている。第一海水がなぜ薬になるかと云えばちよつと海岸へ行けばすぐ分る事じゃないか。あんな広い所に魚が何疋おるか分らないが、あの魚が一疋も病氣をして医者にかかったため試しがない。みんな健全に泳いでいる。病氣をすれば、からだが利かなくなる。死ねば必ず浮く。それだから魚の往生をあがると云つて、鳥の薨去を、落ちると唱え、人間の寂滅を、ごねると号している。洋行をして印度洋を横断した人に君、魚の死ぬところを見た事がありますかと聞いて見るがいい、誰でもいいと答えるに極つてゐる。それはそう答える訳だ。いくら往復したつて一匹も波の上に今呼吸を引き取つた——呼吸ではいかん、魚の事だから潮を引き取つたと云わなければならん——潮を引き取つて浮いてゐるのを見た者はないからだ。あの渺々たる、あの漫々たる、大海を日となく夜となく続けざまに石炭を

焚^たいて探^さがしてあるいても古往今来^{こんらい}一匹も魚が上がつておらんとところをもつて推論すれば、魚はよほど丈夫なものに違ないと云う断案はすぐに下す事が出来る。それならなぜ魚がそんなに丈夫なのかと云えばこれまた人間を待つてしかる後^{のち}に知らざるなりで、訳^{わけ}はない。すぐ分る。全く潮水^{しおみず}を呑んで始終海水浴をやっているからだ。海水浴の機能はしかく魚に取つて顕著^{けんちよ}である。魚に取つて顕著である以上は人間に取つても顕著でなくてはならん。一七五〇年にドクトル・リチャード・ラッセルがブライトンの海水に飛込めば四百四病^{そくせき}即席全快と大袈裟な広告を出したのは遅い遅いと笑つてもよろしい。猫といえども相当の時機が到着すれば、みんな鎌倉あたりへ出掛けるつもりでいる。但^{ただ}し今はいけない。物には時機がある。御維新前^{ごいつしんまえ}の日本人が海水浴の機能を味わう事が出来ずに死んだごとく、今日^{こんにち}の猫はい

まだ裸体で海の中へ飛び込むべき機会に遭遇そうぐうしておらん。せい
ては事を仕損しそんずる、今日のように築地つぎじへ打つちやられに行つ
た猫が無事に帰宅せん間は無暗むやみに飛び込む訳には行かん。進化
の法則で吾等猫輩の機能が狂瀾怒濤きやうらんどうとうに対して適當の抵抗力を生
ずるに至るまでは——換言すれば猫が死んだと云う代りに猫が
上がったと云う語が一般に使用せらるるまでは——容易に海水
浴は出来ん。

海水浴は追つて実行する事にして、運動だけは取りあえずや
る事に取り極きめた。どうも二十世紀の今日運動こんにちせんのはいかに
も貧民のようで人間きがわるい。運動をせんと、運動せんので
はない。運動が出来ないのである、運動をする時間がないのであ
る、余裕がないのだと鑑定される。昔は運動したものが折助おりすけと
笑われたごとく、今では運動をせぬ者が下等と見倣みなされている。

吾人の評価は時と場合に応じ吾輩の眼玉のごとく変化する。吾輩の眼玉はただ小さくなったり大きくなったりするばかりだが、人間の品^{ひんしつ}隋^つとくると真逆^{まつぎ}かさまにひっくり返る。ひっくり返つても差^さし支^{つか}えはない。物には両面^{りやうたん}がある。両端^{りやうたん}を叩^{たた}いて黒白^{こくびやく}の変化を同一物の上に起こすところが人間の融通のきくところである。方^{あいきよう}寸^うを逆^さかさまにして見ると寸^{すん}方^{ほう}となるところに愛嬌^{あいぎよう}がある。天^{あま}の橋立^{はしだて}を股倉^{またぐら}から覗^{のぞ}いて見るとまた格別^{おもしろ}な趣^{おもむき}が出る。セクスピヤも千古万古セクスピヤではつまらない。偶^{たま}には股倉^{またぐら}からハムレットを見て、君こりや駄目だよくらいに云う者がないと、文界も進歩しないだろう。だから運動をわらく云った連中が急に運動がしたくなつて、女までがラケットを持^もつて往来^{わらい}をあるき廻^{まわ}つたつて一向^{いっこう}不思議はない。ただ猫が運動するのを利^きいた風などと笑いさえしなければよい。さて吾

輩の運動はいかなる種類の運動かと不審を抱く者があるかも知れんから一応説明しようと思う。御承知のごとく不幸にして機械を持つ事が出来ん。だからボールもバットも取り扱い方に困窮する。次には金がないから買う訳に行かない。この二つの原因からして吾輩の選んだ運動は一文いらず器械なしと名づくべき種類に属する者と思う。そんなら、のそのそ歩くか、あるいは鮪の切身を啣えて馳け出す事と考えるかも知れんが、ただ四本の足を力学的に運動させて、地球の引力に順つて、大地を横行するのは、あまり単簡で興味が無い。いくら運動と名がついても、主人の時々実行するような、読んで字のごとき運動はどうも運動の神聖を汚がす者だろうと思う。勿論ただの運動でもある刺激の下にはやらんとは限らん。鰹節競争、鮭探しなどは結構だがこれは肝心の対象物があつての上の事で、この刺激を

取り去ると索然^{さくぜん}として没趣味なものになつてしまふ。懸賞的興奮劑がないとすれば何か芸のある運動がして見たい。吾輩はいろいろ考えた。台所の廂^{ひさし}から家根^{やね}に飛び上がる方、家根の天辺^{てっぺん}にある梅花形^{ばいかがた}の瓦^{かわら}の上に四本足で立つ術、物干竿^{ものほしざお}を渡る事——これはとうてい成功しない、竹がつるつる滑^すべつて爪が立たない。後ろ^{うし}から不意に小供に飛びつく事、——これはすこぶる興味のある運動の一だが滅多^{めった}にやるとひどい目に逢うから、高々^{たかだか}月に三度くらいしか試みない。紙袋^{かんぶくろ}を頭^{かぶ}へかぶせらるる事——これは苦しいばかりではなはだ興味の乏^{とほ}しい方法である。ことに人間の相手がおらんと成功しないから駄目。次には書物の表紙を爪で引き搔^かく事、——これは主人に見付かると必ずどやされる危険があるのみならず、割合に手先の器用ばかりで総身の筋肉が働かない。これらは吾輩のいわゆる旧式運動なる者であ

る。新式のうちにはなかなか興味の深いのがある。第一に蠅螂狩^{とうろうが}り。――蠅螂狩りは鼠狩^{ねずみか}りほどの大運動でない代りにそれほど
の危険がない。夏の半^{なかば}から秋の始めへかけてやる遊戯としては
もつとも上乘のものだ。その方法を云うとまず庭へ出て、一匹
の蠅螂^{かまきり}をさがし出す。時候がいいと一匹や二匹見付け出すのは
雑作^{ぞうさ}もない。さて見付け出した蠅螂君の傍^{そば}へはつと風を切つて
馳^かけて行く。するとすわこそと云う身構^{みがまえ}をして鎌首をふり上げ
る。蠅螂でもなかなか健気^{けなげ}なもので、相手の力量を知らんうち
は抵抗するつもりでいるから面白い。振り上げた鎌首を右の前
足でちよつと参る。振り上げた首は軟かいからぐにやり横へ曲
る。この時の蠅螂君の表情がすこぶる興味を添える。おやと云
う思い入れが充分ある。ところを一足飛^{いっそく}びに君^{きみ}の後ろ^{うし}へ廻つて
今度は背面から君の羽根を軽^{かろ}く引き搔^かく。あの羽根は平生大事

に^た畳んであるが、引き掻き方が^{はげ}烈しいと、ぱつと乱れて中から吉野紙のような薄色の下着があらわれる。君は夏でも御苦労千萬に二枚重ねで乙^{おつ}に^き極まっている。この時君の長い首は必ず後ろに向き直る。ある時は向ってくるが、大概の場合には首だけぬつと立てて立っている。こつちから手出しをするのを待ち構えて見える。先方がいつまでもこの態度でいては運動にならないから、あまり長くなるとまたちよいと一本参る。これだけ参ると眼識のある蟪蛄なら必ず逃げ出す。それを我^が無洒落^{むしゃら}に向つてくるのはよほど無教育な野蛮的蟪蛄である。もし相手がこの野蛮な振舞をやると、向つて来たところを^{ねら}覗いすまして、いやと云うほど張り付けてやる。大概は二三尺飛ばされる者である。しかし敵がおとなしく背面に前進すると、こつちは気の毒だから庭の立木を二三度飛鳥のごとく廻ってくる。蟪蛄^{かまきりくん}君はまだ五六

寸しか逃げ延びておらん。もう吾輩の力量を知ったから手向いをする勇氣はない。ただ右往左往へ逃げ惑^{まど}うのみである。しかし吾輩も右往左往へ追っかけるから、君はしまいには苦しがつて羽根を振^{ふる}つて一大活躍を試みる事がある。元来蠅螂の羽根は彼の首と調和して、すこぶる細長く出来上がったものだが、聞いて見ると全く装飾用だそうで、人間の英語、仏語、独逸語^{ドイツ語}のごとく毫^{ごう}も実用にはならん。だから無用の長物を利用して一大活躍を試みたところが吾輩に対してあまり機能のありよう訳がない。名前は活躍だが事實は地面の上を引きずつてあるくと云うに過ぎん。こうなると少々気の毒な感はあるが運動のためだから仕方がない。御免蒙^{ごめんこうむ}つてたちまち前面へ馳^かけ抜ける。君は惰性で急廻転が出来ないからやはりやむを得ず前進してくる。その鼻をなぐりつける。この時蠅螂君は必ず羽根を広げたまま

仆^{たお}れる。その上をうんと前足で抑^{おさ}えて少しく休息する。それからまた放す。放しておいてまた抑える。七擒七縱孔明の軍略で攻めつける。約三十分この順序を繰り返して、身動きも出来なくなつたところを見すましてちよつと口へ啣^{くわ}えて振つて見る。それからまた吐き出す。今度は地面の上へ寝たぎり動かないから、こつちの手で突つ付いて、その勢で飛び上がるところをまた抑えつける。これもいやになつてから、最後の手段としてむしやむしや食つてしまふ。ついでだから螻蛄^{ろうこ}を食つた事のない人に話しておくが、螻蛄^{とうこ}はあまり旨い物ではない。そうして滋養分も存外少ないようである。螻蛄^{とうこ}狩りに次いで蟬^{せみ}取りと云う運動をやる。単に蟬と云つたところが同じ物ばかりではない。人間にも油野郎^{あぶらやろう}、みんな野郎、おしいつくつく野郎があるごとく、蟬にも油蟬、みんな、おしいつくつくがある。油蟬は

しつこくて行かん。みんなは横風おうふうで困る。ただ取つて面白いのはおしいつくつくである。これは夏の末にならないと出て来ない。八やつ口くちの綻ほころびから秋風あきかぜが断わりなしに膚はだを撫なでてはつくしよ風邪かぜを引いたと云う頃熾さかんに尾を掉ふり立ててなく。善よく鳴く奴で、吾輩から見ると鳴くのと猫にとられるよりほかに天職がないと思われるくらいだ。秋の初はこいつを取る。これを称して蟬取り運動と云う。ちよつと諸君に話しておくがいやくも蟬と名のつく以上は、地面の上に転ころがつてはおらん。地面の上に落ちてゐるものには必ず蟻ありがついてゐる。吾輩の取るのはこの蟻の領分に寝転んでゐる奴ではない。高い木の枝にとまつて、おしいつくつくと鳴いてゐる連中を捕とらえるのである。これもついでだから博学なる人間に聞きたいがあればおしいつくつくと鳴くのか、つくつくおしいと鳴くのか、その解釈次第によつて

は蟬の研究上少なからざる関係があると思う。人間の猫に優る^{まさ}ところはこんなところに存するので、人間の自ら誇る点もまたかような点にあるのだから、今即答が出来ないならよく考えておいたらよからう。もつとも蟬取り運動上はどっちにしても差し^さ支え^{つか}はない。ただ声をしるべに木を上^{のぼ}つて行つて、先方が夢中になつて鳴いているところをうんと捕えるばかりだ。これはもつとも簡略な運動に見えてなかなか骨の折れる運動である。吾輩は四本の足を有しているから大地を行く事においてはあえて他の動物には劣るとは思わない。少なくとも二本と四本の数学的智識から判断して見て人間には負けないつもりである。しかし木登りに至つては大分^{だいぶ}吾輩より巧者な奴がいる。本職の猿は別物として、猿の末孫^{ぼつそん}たる人間にもなかなか侮^{あなづ}るべからざる^{てあい}手合^あがいる。元来が引力に逆らつての無理な事業だから出来な

くても別段の恥辱ちじよくとは思わんけれども、蟬取り運動上には少なからざる不便を与える。幸に爪と云う利器があるので、どうか登りはするものの、はたで見るとはほど楽ではござらん。のみならず蟬は飛ぶものである。蟪蛄かまきりくん君と違って一たび飛んでしまつたが最後、せつかくの木登りも、木登らずと何の択えらむところなしと云う悲運に際会する事がないとも限らん。最後に時々蟬から小便をかけられる危険がある。あの小便がややともすると眼を覗ねらつてしよぐつてくるようだ。逃げるのは仕方がないから、どうか小便ばかりは垂れんように致したい。飛ぶ間際まぎわに溺いばりを仕るのつかまつのは一体どう云う心理的状态の生理的器械に及ぼす影響だろう。やはりせつなさのあまりかしらん。あるいは敵の不意に出でて、ちよつと逃げ出す余裕を作るための方便か知らん。そうすると烏賊いかの墨を吐き、ベランメーほりものの刺物を見せ、主人が

ラテン語を弄する類と同じ綱目に入るべき事項となる。これも蟬
学上忽かせにすべからざる問題である。充分研究すればこれだ
けでたしかに博士論文の価値はある。それは余事だから、その
くらいにしてまた本題に帰る。蟬のもつとも集注するのは――
集注がおかしければ集合だが、集合は陳腐だからやはり集注に
する。――蟬のもつとも集注するのは青桐である。漢名を梧桐
と号するそうだ。ところがこの青桐は葉が非常に多い、しかも
その葉は皆団扇くらいな大きさであるから、彼等が生い重なると
枝がまるで見えないくらい茂っている。これがはなはだ蟬取り
運動の妨害になる。声はすれども姿は見えずと云う俗謡はとく
に吾輩のために作った者ではなからうかと怪しまれるくらいで
ある。吾輩は仕方がないからただ声を知るべに行く。下から一
間ばかりのところでは梧桐は注文通り二叉になつてゐるから、こ

ここで一休息ひとやすみして葉裏から蟬の所在地を探偵する。もつともここまで来るうちに、がさがたと音を立てて、飛び出す気早な連中がいる。一羽飛ぶともういけない。真似をする点において蟬は人間に劣らぬくらい馬鹿である。あとから続々飛び出す。漸々ようよう二又ふたまたに到着する時分には満樹寂せきとして片声へんせいをとどめざる事がある。かつてここまで登つて来て、どこをどう見廻わしても、耳をどう振つても蟬氣せみけがないので、出直すのも面倒だからしばらく休息しようと、又またの上に陣取つて第二の機会を待ち合せていたら、いつの間にか眠くなつて、つい黒甜郷裡こくてんきようりに遊んだ。おやと思つて眼が醒さめたら、二又の黒甜郷裡こくてんきようりから庭の敷石の上へどたりと落ちていた。しかし大概是登る度に一つは取つて来る。ただ興味の薄い事には樹の上で口に啣くわえてしまわなくてはならん。だから下へ持つて来て吐き出す時は大方死んでいる。いく

らじやらしても引つ搔かいても確然たる手答がない。蟬取りの妙味はじつと忍んで行つておいしい君くんが一生懸命に尻尾しっぽを延ばしたり縮ちぢましたりしているところを、わつと前足で抑おさえる時にある。この時つくつく君くんは悲鳴を揚げて、薄い透明な羽根を縦横無尽に振う。その早い事、美事なる事は言語道断、実に蟬世界の一偉観である。余はつくつく君を抑おさえる度にいつでも、つくつく君に請求してこの美術的演芸を見せてもらう。それがいやになるとご免を蒙こうむつて口の内へ頬張ほおばつてしまう。蟬によると口の内へ這入はいつてまで演芸をつづけているのがある。蟬取りの次にやる運動は松滑りまつすべである。これは長くかく必要もないから、ちよつと述べておく。松滑りと云うと松を滑るように思うかも知れんが、そうではないやはり木登りの一種である。ただ蟬取りは蟬を取るために登り、松滑りは、登る事を目的として登る。これが両

者の差である。元来松は常磐ときわにて最明寺さいみょうじの御馳走ごちそうをしてから以來今日こんにちに至るまで、いやにごつごつしている。従つて松の幹ほど滑らないものはない。手懸りのいいものはない。足懸りのいいものはない。――換言すれば爪懸りつまがかのいいものはない。その爪懸りのいい幹へ一気呵成いつきかせいに馳け上るあが。馳け上つておいて馳け下がる。馳け下がるには二法ある。一はさかさになつて頭を地面へ向けて下りてくる。一は上のぼつたままの姿勢をくずさずに尾を下にして降りる。人間に問うがどつちがむずかしいか知つてるか。人間のあさはかな了見りようけんでは、どうせ降りるのだから下向したむきに馳け下りる方が楽だと思うだろう。それが間違つてゐる。君等は義経ひよどりごえが鶉越おを落としたことだけを心得て、義経でさえ下を向いて下りるのだから猫なんぞは無論下したた向きでたくさんだと思ふのだろう。そう輕蔑けいべつするものではない。猫の爪はどつちへ向

いて生はえていると思う。みんな後うしろへ折れている。それだから
鳶とびぐち口のように物をかけて引き寄せる事は出来るが、逆に押し出
す力はない。今吾輩が松の木を勢よく馳け登ったとする。する
と吾輩は元来地上の者であるから、自然の傾向から云えば吾輩
が長く松樹の巔いただきとてに留まるを許さんに相違ない、ただおけば必ず
落ちる。しかし手放して落ちては、あまり早過ぎる。だから何
等かの手段をもってこの自然の傾向を幾分かゆるめなければな
らん。これ即すなわち降りるのである。落ちるのと降りるのは大変な
違ちがいようだが、その実思つたほどの事ではない。落ちるのを遅
くすると降りるので、降りるのを早くすると落ちる事になる。
落ちると降りるのは、ちとりの差である。吾輩は松の木の上か
ら落ちるのはいやだから、落ちるのを緩ゆるめて降りなければなら
ない。即すなわちあるものをもつて落ちる速度に抵抗しなければなら

ん。吾輩の爪は前申す通り皆後ろ向きであるから、もし頭を上にして爪を立てればこの爪の力は悉く、落ちる勢に逆つて利用出来る訳である。従つて落ちるが變じて降りるになる。実に見易き道理である。しかるにまた身を逆にして義経流に松の木越をやつて見給え。爪はあつても役には立たん。ずるずる滑つて、どこにも自分の体量を持ち答える事は出来なくなる。ここにおいてかせつかく降りようと企てた者が變化して落ちる事になる。この通り鶉越はむずかしい。猫のうちでこの芸が出来る者は恐らく吾輩のみであらう。それだから吾輩はこの運動を称して松滑りと云うのである。最後に垣巡りについて一言する。主人の庭は竹垣をもつて四角にしきられている。椽側と平行している一片は八九間もあらう。左右は双方共四間に過ぎん。今吾輩の云つた垣巡りと云う運動はこの垣の上を落ちないように一周す

るのである。これはやり損^{そこな}う事もままあるが、首尾よく行くと
お慰^{なぐさみ}になる。ことに所々に根を焼いた丸太が立っているから、
ちよつと休息に便宜^{べんぎ}がある。今日は出来がよかつたので朝から
昼までに三返^{べん}やつて見たが、やるたびにうまくなる。うまくな
る度^{たび}に面白くなる。とうとう四返繰り返したが、四返目に半分
ほど巡^{まわ}りかけたら、隣の屋根から烏が三羽飛んで来て、一間ば
かり向うに列を正してとまった。これは推参な奴だ。人の運動
の妨^{さまたげ}をする、ことにどこの烏だか籍^{せき}もない分在^{ぶんざい}で、人の堀へと
まるといふ法があるもんかと思つたから、通るんだおい除^のきた
まえと声をかけた。真先の烏はこつちを見てにやにや笑つてい
る。次のは主人の庭を眺^{なが}めている。三羽目は嘴^{くちばし}を垣根の竹で拭^ふ
いている。何か食つて来たに違ない。吾輩は返答を待つために、
彼等に三分間の猶^{ゆうよ}予を与えて、垣の上に立つていた。烏は通称

を勘左衛門と云うそうだが、なるほど勘左衛門だ。吾輩がいくら待つてても挨拶もしなければ、飛びもしない。吾輩は仕方がないから、そろそろ歩き出した。すると真先の勘左衛門がちょいと羽を広げた。やつと吾輩の威光に恐れて逃げるなと思つたら、右向から左向に姿勢をかえただけである。この野郎！ 地面の上ならその分に捨ておくのではないが、いかんせん、たださえ骨の折れる道中に、勘左衛門などを相手にしている余裕がない。といつてまた立留まつて三羽が立ち退くのを待つのもいやだ。第一そう待っていては足がつづかない。先方は羽根のある身分であるから、こんな所へはとまりつけている。従つて気に入ればいつまでも逗留するだろう。こっちはこれで四返目だたださえ大分^{だいぶつか}労れている。いわんや綱渡りにも劣らざる芸当兼運動をやるのだ。何等の障害物がなくてさえ落ちんとは保証が出

来んのに、こんな黒装束が、三個も前途を遮さえぎつては容易ならざる不都合だ。いよいよとなれば自ら運動を中止して垣根を下りるより仕方がない。面倒だから、いつそさよう仕ろうか、敵は大勢の事ではあるし、ことにはあまりこの辺には見馴れぬ人体にんていである。口嘴くちばしが乙おつに尖とんがつて何だか天狗てんぐの啓もうし子ごのようだ。どうせ質たちのいい奴でないには極きまっている。退却が安全だろう、あまり深入りをして万一落ちでもしたらなおさら恥辱だ。と思つていと左向をした烏ひだりむけが阿呆あほうと云つた。次のも真似をして阿呆と云つた。最後の奴は御鄭寧ごていねいにも阿呆阿呆と二声叫んだ。いかに温厚なる吾輩でもこれは看過かんか出来ない。第一自己の邸内からすはいで烏輩に侮辱されたとあつては、吾輩の名前にかかわる。名前はまだないから係わりようがなからうと云うなら体面に係わる。決して退却は出来ない。諺ことわざにも烏合うごうの衆と云うから三羽だつて存外

弱いかも知れない。進めるだけ進めと度胸を据^すえて、のそのそ歩き出す。鳥は知らん顔をして何か御互に話をしている様子だ。いよいよ肝癰^{かんしやく}に障^{さわ}る。垣根の幅がもう五六寸もあつたらひどい目に合せてやるんだが、残念な事にはいくら怒^{おこ}つても、のそのそとしかあるかれない。ようやくの事先鋒^{せんぽう}を去る事約五六寸の距離まで来てもう一息だと思つと、勘左衛門は申し合せたように、いきなり羽搏^{はばたき}をして一二尺飛び上がった。その風が突然余の顔を吹いた時、はつと思つたら、つい踏み外^はずして、すたと落ちた。これはしくじつたと垣根の下から見上げると、三羽共元の所にとまつて上から嘴^{くちばし}を揃^{そろ}えて吾輩の顔を見下している。図太い奴だ。睨^{にら}めつけてやつたが一向利^{いっとうき}かない。背を丸くして、少々唸^{うな}つたが、ますます駄目だ。俗人に靈妙なる象徴詩がわからぬごとく、吾輩が彼等に向つて示す怒りの記号も何等の反応

を呈出ししない。考えて見ると無理のないところだ。吾輩は今
で彼等を猫として取り扱っていた。それが悪い。猫ならこの
くらいやればたしかに応^{こた}えるのだが生憎^{あいにく}相手は烏だ。烏の勘公
とあつて見れば致し方がない。実業家が主人苦沙弥^{くしゃみ}先生を圧倒
しようと思はせるごとく、西行^{さいぎよう}に銀製の吾輩を進呈するがごとく、
西郷隆盛君の銅像に勘公が糞^{ふん}をひるようなものである。機を見
るに敏なる吾輩はとうてい駄目と見て取ったから、奇麗さつぱ
りと椽側へ引き上げた。もう晩飯の時刻だ。運動もいいが度を
過ぎずと行^いかぬ者で、からだ全体が何となく緊^{しま}りがない、ぐた
ぐたの感がある。のみならずまだ秋の取り付きで運動中に照り
付けられた毛ごろもは、西日を思ふ存分吸収したと見えて、ほ
つてたまらない。毛穴から染^しみ出す汗が、流れればと思うの
に毛の根^{あぶら}に膏^{あぶら}のようにねばり付く。背^せ中^{なか}がむずむずする。汗で

むずむずするのと蚤のみが這はつてむずむずするのは判然と區別が出来る。口の届く所なら噛かむ事も出来る、足の達する領分は引き搔かく事も心得にあるが、脊髓せきずいの縦に通う真中と来たら自分の及ぶ限かぎりでない。こう云う時には人間を見懸けて矢鱈やたらにこすり付けるか、松の木の皮で充分摩擦術を行うか、二者その一を扱えらばんと不愉快で安眠も出来兼ねる。人間は愚ぐなものであるから、猫なで声で——猫なで声は人間の吾輩に対して出す声だ。吾輩を目安めやすにして考えれば猫なで声ではない、なでられ声である——よろしい、とにかく人間は愚なものであるから撫なでられ声で膝の傍そばへ寄つて行くと、大抵の場合において彼もしくは彼女を愛するものと誤解して、わが為ながすままに任せるのみか折々は頭さえ撫なでてくれるものだ。しかるに近来吾輩の毛中もうちゅうにのみと号する一種の寄生虫が繁殖したので滅多めったに寄り添うと、必ず頸筋くびすじを

持つて向うへ抛り出される。わずかに眼に入るか入らぬか、取るにも足らぬ虫のために愛想をつかしたと見える。手を翻せば雨、手を覆せば雲とはこの事だ。高がのみの千疋や二千疋でよくまあこんなに現金な真似が出来たものだ。人間世界を通じて行われる愛の法則の第一条にはこうあるそうだ。——自己の利益になる間は、すべからく人を愛すべし。——人間の取り扱が俄然豹変したので、いくら痒ゆくても人力を利用する事は出来ん。だから第二の方法によつて松皮摩擦法をやるよりほかに分別はない。しからばちよつとこすつて参ろうかとまた橡側から降りかけたが、いやこれも利害相償わぬ愚策だと心付いた。と云うのはほかでもない。松には脂がある。この脂たるすこぶる執着心の強い者で、もし一たび、毛の先へくっ付けようものなら、雷が鳴つてもバルチック艦隊が全滅しても決して離れない。

しかのみならず五本の毛へこびりつくが早いか、十本に蔓延まんえんする。十本やられたなと気が付くと、もう三十本引つ懸かつてゐる。吾輩は淡泊たんぱくを愛する茶人的猫である。こんな、しつこい、毒悪どくあくな、ねちねちした、執念深しゅうねんぶかい奴は大嫌だ。たとい天下の美猫びみようといえどもご免蒙る。いわんや松脂まつやににおいてをやだ。車屋の黒の両眼から北風に乗じて流れる目糞えらと拭ぬぐぶところなき身分をもつて、この淡灰色たんかいしよくの毛衣けごろもを大だいなしにすると怪けしからん。少しは考えて見るがいい。といったところできやつなかなか考える氣遣きづかいはない。あの皮のあたりへ行つて背中をつけるが早いか必ずべたりとおいでになるに極きまつてゐる。こんな無分別な頓痴奇とんちきを相手にしては吾輩の顔に係わるのみならず、引いて吾輩の毛並に關する訳だ。いくら、むずむずしたつて我慢するよりほかに致し方はあるまい。しかしこの二方法共実行出来んとなるとはな

はだ心細い。今において一工夫ひとくふうしておかんとしまいにはむずむず、ねちねちの結果病氣に罹かかるかも知れない。何か分別はあるまいかなと、後あと足あしを折あしつて思案したが、ふと思ひ出した事がある。うちの主人は時々手拭しやボンと石鹼ひようぜんをもつて飄然ひようぜんといずれへか出て行く事がある、三四十分して帰つたところを見ると彼の朦朧もうろうたる顔色がしよくが少しは活氣を帯びて、晴れやかに見える。主人のような汚苦むさくるしい男にこのくらいな影響を与えるなら吾輩にはもう少し利目ききめがあるに相違ない。吾輩はただでさえこのくらいな器量だから、これより色男になる必要はないようなものの、万一病氣かかに罹かかつて一歳なん何が月げつで夭折ようせつするような事があつては天下の蒼生そうせいに対して申し訳がない。聞いて見るとこれも人間のひま潰つぶしに案出した洗湯せんとうなるものだそうだ。どうせ人間の作つたものだから碌ろくなものでないには極きままっているがこの際の事だから試し

に這入^{はい}つて見るのもよからう。やつて見て功験がなければよすまでの事だ。しかし人間が自己のために設備した浴場へ異類の猫を入れるだけの洪量^{こうりょう}があるだろうか。これが疑問である。主人がすまして這入^{はい}るくらいのところだから、よもや吾輩を断わる事もなからうけれども万一お気の毒様を食うような事があつては外聞がわるい。これは一先^{ひとま}ず容子^{ようす}を見に行くに越した事はない。見た上でこれならよいと当りが付いたら、手拭を啣^{くわ}えて飛び込んで見よう。とここまで思案を定めた上でのそのそと洗湯へ出掛けた。

横町を左へ折れると向うに高いとよ竹のようなものが屹立^{きつりつ}して先から薄い煙を吐いている。これ即ち洗湯^{すなわ}である。吾輩はそつと裏口から忍び込んだ。裏口から忍び込むのを卑怯^{ひきょう}とか未練とか云うが、あれは表からでなくては訪問する事が出来ぬものが

嫉妬しつと半分に囃はやし立てる繰くり言ごとである。昔から利口な人は裏口から不意を襲う事にきまつている。紳士養成方ほうの第二巻第一章の五ページにそう出ているそうだ。その次のページには裏口は紳士の遺書にして自身徳を得るの門なりとあるくらいだ。吾輩は二十世紀の猫だからこのくらいの教育はある。あんまり軽蔑けいべつしてはいけない。さて忍び込んで見ると、左の方に松を割つて八寸くらいにしたのが山のように積んであつて、その隣りには石炭が岡のように盛つてある。なぜ松薪まつまきが山のように、石炭が岡のようかと聞く人があるかも知れないが、別に意味も何もない、ただちよつと山と岡を使い分けただけである。人間も米を食つたり、鳥を食つたり、肴さかなを食つたり、獣けものを食つたりいろいろの悪あくものの食いをしつくしたあげくついに石炭まで食うように墮落したのは不憫ふびんである。行き当りを見ると一間ほどの入口が明け

放しになつて、中を覗く^{のぞ}とがながらがんのがあんと物静かである。その向側^{むこうがわ}で何かしきりに人間の声がする。いわゆる洗湯はこの声の発する辺^{へん}に相違ないと断定したから、松薪と石炭の間に出来てる谷あいを通り抜けて左へ廻つて、前進すると右手に硝子窓^{ガラスまじ}があつて、そのそとに丸い小桶^{こおけ}が三角形^{すなわ}即ちピラミッドのごとく積みかさねてある。丸いものが三角に積まれるのは不本意千万だろうと、ひそかに小桶諸君の意を諒^{りよう}とした。小桶の南側は四五尺の間板^{あいだ}が余つて、あたかも吾輩を迎うるもののごとく見える。板の高さは地面を去る約一メートルだから飛び上がるには御詠^{おあつら}えの上等である。よろしいと云いながらひらりと身を躍^{おど}らすといわゆる洗湯は鼻の先、眼の下、顔の前にぶらついている。天下に何が面白いと云つて、未だ^{いま}食わざるものを食い、未だ見ざるものを見るほどの愉快はない。諸君もうちの主人の

ごとく一週三度くらい、この洗湯界に三十分乃至^{ないし}四十分を暮すならいいが、もし吾輩のごとく風呂と云うものを見た事がないなら、早く見るがいい。親の死目^{しにめ}に逢^あわなくてもいいから、これだけは是非見物するがいい。世界広しといえどもこんな奇観^{きかん}はまたとあるまい。

何が奇観だ？ 何が奇観だつて吾輩はこれを口にするを憚^{はば}かるほどの奇観だ。この硝子窓^{ガラスまど}の中にうじゃうじゃ、があが騒いでいる人間はことごとく裸体である。台湾の生蕃^{せいばん}である。二十世紀のアダムである。そもそも衣装^{いしょう}の歴史を緋^{ひもと}けば——長い事だからこれはトイフェルスドレック君に譲つて、緋^{ひもと}くだけはやめてやるが、——人間は全く服装で持つてゐるのだ。十八世紀の頃大英国バスの温泉場においてボー・ナッシが嚴重な規則を制定した時などは浴場内で男女共肩から足まで着物でかくした

くらいである。今を去る事六十年前ぜんこれも英国の去る都で図案
学校を設立した事がある。図案学校の事であるから、裸体画、
裸体像の模写、模型を買い込んで、ここ、かしこに陳列したの
はよかったが、いざ開校式を挙行する一段になって当局者を初
め学校の職員が大困却をした事がある。開校式をやるとすれば、
市の淑女を招待しなければならん。ところが当時の貴婦人方の
考によると人間は服装の動物である。皮を着た猿の子分ではな
いと思っていた。人間として着物をつけないのは象の鼻なきが
ごとく、学校の生徒なきがごとく、兵隊の勇気なきがごとく全
くその本体を失しつしている。いやしくも本体を失している以上は
人間としては通用しない、獣類である。仮令たとい模写模型にせよ獣
類の人間と伍するのは貴女の品位を害する訳である。でありま
すから妾等しょうらは出席御断わり申すと云われた。そこで職員共は話

せない連中だとは思つたが、何しろ女は東西両国を通じて一種の装飾品である。米春こめつきにもなれん志願兵にもなれないが、開校式には欠くべからざる化粧道具けしやうどうぐである。と云うところから仕方がない、呉服屋へ行つて黒布くろぬのを三十五反八分七買つて来て例の獣類の人間にことごとく着物をきせた。失礼があつてはならんと念に念を入れて顔まで着物をきせた。かようにしてようやくの事滞りとどまりなく式をすましたと云う話がある。そのくらい衣服は人間にとつて大切なものである。近頃は裸体画裸体画と云つてしきりに裸体を主張する先生もあるがあれはあやまつている。生れてから今日こんにちに至るまで一日も裸体になつた事がない吾輩から見ると、どうしても間違つている。裸体は希臘ギリシヤ、羅馬ローマの遺風が文芸復興時代の淫靡いんびの風ふうに誘われてから流行りはやだしたもので、希臘人や、羅馬人は平常ふだんから裸体を見做みなれていたのだから、こ

れをもつて風教上の利害の關係があるなどとは毫（ちよう）も思い及ばなかつたのだらうが北欧は寒い所だ。日本でさえ裸で道中がなるものかと云うくらいだから独逸（ドイツ）や英吉利（イギリス）で裸になつておれば死んでしまふ。死んでしまつてはつまらないから着物をきる。みんなが着物をきれば人間は服裝の動物になる。一たび服裝の動物となつた後（のち）に、突然裸体動物に出逢えば人間とは認めない、^{けだもの}獣と思う。それだから歐洲人ことに北方の歐洲人は裸体画、裸体像をもつて獣として取り扱つていいのである。猫に劣る獣と認定していいのである。美しい？ 美しくても構わんから、美しい獣と見倣（みな）せばいいのである。こう云うと西洋婦人の礼服を見たかと云うものもあるかも知れないが、猫の事だから西洋婦人の礼服を拝見した事はない。聞くとところによると彼等は胸をあらわし、肩をあらわし、腕をあらわしてこれを礼服と称して

いるそうだ。怪^けしからん事だ。十四世紀頃までは彼等の出^いで立^たちはしかく滑稽ではなかった、やはり普通の人間の着るものを着ておった。それがなぜこんな下等な輕^{かる}術^{わじ}師流に転化してきたかは面倒だから述べない。知る人ぞ知る、知らぬものは知らん顔をしておればよろしかろう。歴史はとにかく彼等にかかる異様な風態をして夜間だけは得^{とく}々たるにも係わらず内心は少々人間らしいところもあると見えて、日が出ると、肩をすぼめる、胸をかくす、腕を包む、どこもかしこもことごとく見えなくしてしまふのみならず、足の爪一本でも人に見せるのを非常に恥辱と考えている。これで考えても彼等の礼^{れい}服なるものは一種の頓^{とん}珍^{ちん}漢^{かん}的作用^{てきさよう}によつて、馬鹿と馬鹿の相談から成立したものだと云う事が分る。それが口^く惜^やしければ日中でも肩と胸と腕を出していて見るがいい。裸体信者だつてその通りだ。それほど裸

体がいいものなら娘を裸体にして、ついでに自分も裸になつて上野公園を散歩でもするがいい、できない？ 出来ないのではない、西洋人がやらないから、自分もやらないのだろう。現にこの不合理極まる礼服を着て威張つて帝国ホテルなどへ出懸けるではないか。その因縁を尋ねると何にもない。ただ西洋人がきるから、着ると云うまでの事だろう。西洋人は強いから無理でも馬鹿氣でいても真似なければやり切れないのだろう。長いものには捲まかれろ、強いものには折れろ、重いものには圧おされろと、そうれろ、尽しでは氣が利きかんではないか。氣が利きかんでも仕方がないと云うなら勘弁するから、あまり日本人をえらい者と思つてはいけない。學問といえどもその通りだがこれは服装に關係がない事だから以下略とする。

衣服はかくのごとく人間にも大事なものである。人間が衣服

か、衣服が人間かと云うくらい重要な条件である。人間の歴史は肉の歴史にあらず、骨の歴史にあらず、血の歴史にあらず、単に衣服の歴史であると申したいくらいだ。だから衣服を着けない人間を見ると人間らしい感じがしない。まるで化物に邂逅したようだ。化物でも全体が申し合せて化物になれば、いわゆる化物は消えてなくなる訳だから構わんが、それでは人間自身が大に困却する事になるばかりだ。その昔し自然は人間を平等なるものに製造して世の中に抛り出した。だからどんな人間でも生れるときは必ず赤裸である。もし人間の本性が平等に安んずるものならば、よろしくこの赤裸のまままで生長してしかるべきだろう。しかるに赤裸の一人が云うにはこう誰も彼も同じでは勉強する甲斐がない。骨を折った結果が見えぬ。どうかして、おれはおれだ誰が見てもおれだと云うところが目につくようにし

たい。それについては何か人が見てあつと魂消る物たまげをからだにつけて見たい。何か工夫はあるまいかと十年間考えてようやく猿股さるまたを発明してすぐさまこれを穿はいて、どうだ恐れ入つたらうと威張つてそこいらを歩いた。これが今日の車夫こんちの先祖である。単簡たんかんなる猿股を発明するのに十年の長日月を費ついやしたのはいささか異いな感もあるが、それは今日から古代さかのぼに溯つて身を蒙昧もうまいの世界に置いて断定した結論と云うもので、その当時にこれくらいな大発明はなかつたのである。デカルトは「余は思考す、故に余は存在す」という三みつ子ごにでも分るような真理を考え出すのに十何年か懸つたそうだ。すべて考え出す時には骨の折れるものであるから猿股の発明に十年を費やしたつて車夫の智慧ちえには出来過ぎると云わねばなるまい。さあ猿股が出来ると世の中で幅のきくのは車夫ばかりである。あまり車夫が猿股をつけて

天下の大道を我物顔に横行濶歩かつぽするのを憎らしいと思つて負けん気の化物が六年間工夫して羽織と云う無用の長物を発明した。すると猿股の勢力は頓とみに衰えて、羽織全盛の時代となつた。八百屋、生薬屋きぐすりや、呉服屋は皆この大発明家の末流まつりゅうである。猿股期、羽織期あとの後に来るのが袴期はかまきである。これは、何だ羽織の癖にと癩癩かんしゃくを起した化物の考案になつたもので、昔の武士今の官員などは皆この種属である。かように化物共がわれもわれもと異いを銜てらい新しんを競きそつて、ついには燕つばめの尾にかたどつた畸形きけいまで出現した。退いてその由来を案ずると、何も無理矢理に、出鱈目でたらめに、偶然に、漫然に持ち上がった事実では決してない。皆勝ちたい勝ちたいの勇猛心の凝こつてさまさまの新形しんがたとなつたもので、おれは手前じゃないぞと振れてあるく代りに被かぶつているのである。して見るとこの心理からして一大発見が出来る。それはほかで

もない。自然は真空を忌むごとく、人間は平等を嫌うと云う事だ。すでに平等を嫌ってやむを得ず衣服を骨肉のごとくかようにつけ纏う今日において、この本質の一部分たる、これ等を打ちやつて、元の空阿弥もくあみの公平時代に帰るのは狂人の沙汰である。よし狂人の名称を甘んじても帰る事は到底出来ない。帰った連中を開明人かいめいじんの目から見れば化物である。仮令世界何億万の人口を挙げて化物の域に引ずりおろしてこれなら平等だろう、みんなが化物だから恥ずかしい事はないと安心してもやつぱり駄目である。世界が化物になった翌日からまた化物の競争が始まる。着物をつけて競争が出来なければ化物なりで競争をやる。赤裸あかはだかは赤裸でどこまでも差別を立ててくる。この点から見ても衣服はとうてい脱ぐ事は出来ないものになっている。

しかるに今吾輩が眼下がんかに見下した人間の一団体は、この脱ぐ

べからざる猿股も羽織も乃^{ない}至袴^{しかま}もことごとく棚の上に上げて、無遠慮にも本来の狂態を衆目環視^{しゅうもくかんし}の裡^{うち}に露出して平々然と談笑^{へいへいぜん}を縦^{ほし}ま^{しい}にしている。吾輩が先刻^{さつき}一大奇観と云ったのはこの事である。吾輩は文明の諸君子のためにここに謹^{つつし}んでその一般を紹介するの榮を有する。

何だかごちやごちやして何^なにから記述していいか分らない。化物のやる事には規律がないから秩序立った証明をするのに骨が折れる。まず湯槽^{ゆおね}から述べよう。湯槽だか何だか分らないが、大方湯槽^{おおかた}というものだろうと思うばかりである。幅が三尺くらい、長^{ながさ}は一間半もあるか、それを二つに仕切つて一つには白い湯が這入^{はい}っている。何でも薬湯^{くすりゆ}とか号するのだそうで、石灰^{いしがい}を溶かし込んだような色に濁っている。もつともただ濁っているのではない。膏^{あぶら}ぎつて、重^げた氣に濁っている。よく聞くと

腐つて見えるのも不思議はない、一週間に一度しか水を易^かえないのだそうだ。その隣りは普通一般の湯の由^{よし}だがこれまたもつて透明、瑩^{えいてつ}徹などとは誓つて申されない。天水桶^{てんすいおけ}を攪^かき混^まぜたくらいの価値はその色の上において充分あらわれている。これ^からが化物の記述だ。大分^{だいぶん}骨が折れる。天水桶の方に、突つ立つている若造^{わかぞう}が二人いる。立つたまま、向い合つて湯をざぶざぶ腹の上へかけている。いい慰^{なぐさ}みだ。双方共色の黒い点において間然^{かんぜん}するところなきまでに発達している。この化物は大分^{だいぶん}逞ましいなと見ていると、やがて一人が手拭で胸のあたりを撫^なで廻しながら「金さん、どうも、ここが痛んでいけねえが何だろう」と聞くと金さんは「そりや胃さ、胃て云う奴は命をとるからね。用心しねえとあぶないよ」と熱心に忠告を加える。「だってこの左の方だぜ」た左肺^{さはい}の方を指す。「そこが胃だあな。左が胃で、

右が肺だよ」「そうかな、おらあまた胃はここいらかと思つた」と今度は腰の辺を叩いて見せると、金さんは「そりや疝氣だあね」と云つた。ところへ二十五六の薄い髻を生やした男がどぶんと飛び込んだ。すると、からだに付いていた石鹼が垢と共に浮きあがる。鉄氣のある水を透かして見た時のようにきらきらと光る。その隣りに頭の禿げた爺さんが五分刈を捕えて何か弁じている。双方共頭だけ浮かしているのみだ。「いやこう年をとつては駄目さね。人間もやきが廻つちや若い者には叶わないよ。しかし湯だけは今でも熱いのでないと心持が悪くてね」「旦那なんか丈夫なものですぜ。そのくらい元氣がありや結構だ」「元氣もないのさ。ただ病氣をしないだけさ。人間は悪い事さえしなけりやあ百二十までは生きるもんだからね」「へえ、そんなに生きるもんですか」「生きるとも百二十までは受け合う。御維新前

牛込に曲淵まがりぶちと云う旗本はたもとがあつて、そこにいた下男は百三十だつたよ」「そいつは、よく生きたもんですね」「ああ、あんまり生き過ぎてつい自分の年を忘れてね。百までは覚えていました。それから忘れてしまいましたと云つてたよ。それでわしの知つていたのが百三十の時だったが、それで死んだんじゃない。それからどうなつたか分らない。事によるとまだ生きてるかも知れない」と云いながら槽ふねから上あがる。髯ひげを生はやしている男は雲母きららのようなものを自分の廻りに蒔まき散らしながら独ひとりでにやにや笑つていた。入れ代つて飛び込んで来たのは普通一般の化物とは違つて背中せなかに模様画をほり付けている。岩見重太郎いわみじゅうたろうが大刀だいとうを振り翳かざして蟒うわばみを退治たいじるところのようだが、惜しい事に未だ竣功しゅんこうの期に達せんので、蟒はどこにも見えない。従つて重太郎先生いささか拍子抜けの気味に見える。飛び込みながら「篋棒べらぼうに温ぬ

るいや」と云った。するとまた一人続いて乗り込んだのが「こりやどうも……もう少し熱くなくっちゃあ」と顔をしかめながら熱いのを我慢する気色けしきとも見えたが、重太郎先生と顔を見合せて「やあ親方」と挨拶あいさつをする。重太郎は「やあ」と云ったが、やがて「民さんはどうしたね」と聞く。「どうしたか、じゃんじゃんが好きだからね」「じゃんじゃんばかりじゃねえ……」「そうかい、あの男も腹のよくねえ男だからね。——どう云うもんか人に好かれねえ、——どう云うものだから、——どうも人が信用しねえ。職人てえものは、あんなもんじゃねえが」「そうよ。民さんなんざあ腰が低いんじゃねえ、頭ずが高たけえんだ。それだからどうも信用されねえんだね」「本当によ。あれで一ついぱし腕があるつもりだから、——つまり自分の損だあな」「白銀町しろかねちようにも古い人が亡なくなつてね、今じゃ桶屋おけやの元さんと煉瓦屋れんがやの大將と

親方ぐれえな者だあな。こちとらあこうしてここで生れたもんだが、民さんなんざあ、どこから来たんだか分りやしねえ」「そうよ。しかしよくあれだけになつたよ」「うん。どう云うもんか人に好かれねえ。人が交際つきあわねえからね」と徹頭徹尾民さんを攻撃する。

天水桶はこのくらいにして、白い湯の方を見るとこれはまた非常な大入おおいりで、湯の中に人が這入はいつてると云わんより人の中に湯が這入つてると云う方が適當である。しかも彼等はすこぶる悠々閑々たる物で、先刻さつきから這入るものはあるが出る物は一人もない。こう這入つた上に、一週間もとめておいたら湯もよごれるはずだと感心してなおよく槽おけの中を見渡すと、左の隅に圧しつけられて苦沙弥先生が真赤まっかになつてすくんでいる。可哀かわいそうに誰か路をあけて出してやればいいのと思うのに誰も動き

そうにもしなければ、主人も出ようとする気色けしきも見せない。ただじつとして赤くなっているばかりである。これはご苦勞な事だ。なるべく二錢五厘の湯錢を活用しようと云う精神からして、かように赤くなるのだろうか、早く上がらんと湯氣ゆけにあがるがしゅうおもと主思いの吾輩は窓の棚たなから少なからず心配した。すると主人の一軒置いて隣りに浮いてる男が八の字を寄せながら「これはちと利きき過ぎるようだ、どうも背中せなかの方から熱い奴がじりじり湧わいてくる」と暗に列席の化物に同情を求めた。「なあにこれがちようどいい加減です。藥湯はこのくらいでないと利ききません。わたしの国などではこの倍も熱い湯へ這入ります」と自慢らしく説き立てるものがある。「一体この湯は何に利くんでしよう」と手拭たたを畳たたんで凸凹頭でこぼこあたまをかくした男が一同に聞いて見る。「いろいろなものに利きますよ。何でもいいてえんだからね。豪氣ごうぎ

だあね」と云つたのは瘠やせた黄瓜きゅうりのような色と形とを兼ね得たる顔の所有者である。そんなに利く湯なら、もう少しは丈夫そうになれそうなものだ。「薬を入れ立てより、三日目か四日目がちようどいいようです。今日等きょうなどは這入り頃ですよ」と物知り顔に述べたのを見ると、膨ふくれ返つた男である。これは多分垢肥あかぶとりだろう。「飲んでも利きましうか」とどこからか知らないが黄色い声を出す者がある。「冷ひえた後あとなどは一杯飲んで寝ると、奇きた体に小便に起きないから、まあやつて御覧なさい」と答えたのは、どの顔から出た声か分らない。

湯槽ゆづねの方はこれぐらいにして板間いたまを見渡すと、いるわいるわ絵にもならないアダムがずらりと並んで各勝手次第おのおのな姿勢で、勝手次第なところを洗っている。その中にもつとも驚ろくべきのは仰向けあおむに寝て、高い明あかり取とりを眺ながめているのと、腹這はらばいに

なつて、溝みぞの中を覗のぞき込んでゐる両アダムである。これはよほど閑ひまなアダムと見える。坊主が石壁を向いてしゃがんでゐると後うしろから、小坊主がしきりに肩を叩たたいてゐる。これは師弟の關係上三介さんすけの代理を務つとめるのであらう。本当の三介もゐる。風邪かぜを引いたと見えて、このあついのにちゃんちゃんを着て、小判形こばんなりの桶おけからざあと旦那の肩へ湯をあびせる。右の足を見ると親指の股ごに呉紹ごろの垢擦あかすりを挟はさんでゐる。こちらの方では小桶こおけを慾張つて三つ抱え込んだ男が、隣りの人に石鹼シャボンを使え使えと云いながらしきりに長談議をしてゐる。何だろうと聞いて見るとこんな事を言つてゐた。「鉄砲は外国から渡つたもんだね。昔は斬り合ひばかりさ。外国は卑怯だからね、それであんなものが出来たんだ。どうも支那じゃねえようだ、やっぱり外国のようだ。わとうない和唐内わとうないの時にや無かつたね。和唐内はやはり清和源氏さ。なん

でも義経が蝦夷えぞから満洲へ渡つた時に、蝦夷の男で大変学がくのできる人がくつ付いて行つたてえ話しだね。それでその義経のむすこが大明たいみんを攻めたんだが大明じゃ困るから、三代將軍へ使をよこして三千人の兵隊を借かしてくれろと云うと、三代様さんだいさまがそいつを留めておいて帰さねえ。——何とか云つたつけ。——何でも何とか云う使だ。——それでその使を二年とめておいてしまいに長崎で女郎じようろうを見せたんだがね。その女郎に出来た子が和唐内さ。それから国へ歸つて見ると大明は国賊に亡うしぼされていた。……」何を云うのかさっぱり分らない。その後ろに二十五六の陰気な顔をした男が、ぼんやりして股の所を白い湯でしきりにたでている。腫物はれものか何かで苦しんでいると見える。その横に年の頃は十七八で君とか僕とか生意気な事をべらべら喋舌しゃべつてるのはこの近所の書生だろう。そのまた次に妙な背中せなかが見える。尻の中

から寒竹かんちくを押し込んだように背骨せぼねの節が歴々ありありと出ている。そうしてその左右に十六むさしに似たる形が四個ずつ行儀よく並んでいる。その十六むさしが赤く爛ただれて周囲まわりに膿うみをもっているのもある。こう順々に書いてくると、書く事が多過ぎて到底吾輩の手際てぎわにはその一斑いっぽんさえ形容する事が出来ん。これは厄介な事をやり始めた者だと少々辟易へきえきしていると入口の方に浅黄木綿あさぎもめんの着物をきた七十ばかりの坊主がぬつと見あらわれた。坊主は恭しくこれらの裸体の化物に一礼して「へい、どなた様も、毎日相変らずありますがとう存じます。今日は少々御寒うございますから、どうぞ御緩ごゆっくり——どうぞ白い湯へ出たり這入はいつたりして、ゆとりと御あつたまり下さい。——番頭さんや、どうか湯加減をよく見て上げてな」とよどみなく述べ立てた。番頭さんは「おい」と答えた。和唐内は「愛嬌あいぎょうものだね。あれでなくては商買しょうばい

は出来ないよ」と大に爺さんを激賞した。吾輩は突然この異な
爺さんに逢つてちよつと驚ろいたからこつちの記述はそのまま
にして、しばらく爺さんを専門に觀察する事にした。爺さんは
やがて今上り^{あが}立て^たの四つばかりの男の子を見て「坊ちゃん、こ
ちらへおいで」と手を出す。小供は大福を踏み付けたような爺
さんを見て大変だと思つたか、わーつと悲鳴を揚^あげてなき出す。
爺さんは少しく不本意の気味で「いや、御泣きか、なに？ 爺
さんが恐^{こわ}い？ いや、これはこれは」と感嘆した。仕方がない
ものだからたちまち機鋒^{きほう}を転じて、小供の親に向つた。「や、こ
れは源さん。今日は少し寒いな。ゆうべ、近江屋^{おうみや}へ這入つた泥
棒は何と云う馬鹿な奴じゃの。あの戸の潜^{くぐ}りの所を四角に切り
破つての。そうしてお前の。何も取らずに行^いんだげな。御巡^{おまわ}
りさんか夜番でも見えたものであろう」と大に泥棒の無謀^{びんしょう}を憫笑

したがまた一人を捉らまえて「はいはい御寒う。あなた方は、御若いから、あまりお感じにならんかの」と老人だけにただ一人寒がつている。

しばらくは爺さんの方へ氣を取られて他の化物の事は全く忘れていたのみならず、苦しそうにすくんでいた主人さえ記憶の中から消え去った時突然流しと板の間の中間で大きな声を出すものがある。見ると紛れもなき苦沙弥先生である。主人の声の図抜けて大いなるのと、その濁つて聴き苦しいのは今日に始まつた事ではないが場所が場所だけに吾輩は少からず驚ろいた。これは正しく熱湯の中に長時間のあいだ我慢をして浸つておつたため逆上したに相違ないと咄嗟の際に吾輩は鑑定をつけた。それも単に病氣の所為なら咎むる事もないが、彼は逆上しながらも充分本心を有しているに相違ない事は、何のためにこの法外

の胸間どうまじえ声を出したかを話せばすぐわかる。彼は取るにも足らぬ
生意氣書生なまいきを相手に大人気おとなげもない喧嘩を始めたのである。「もつ
と下がれ、おれの小桶に湯が這入はいつていかん」と怒鳴るのは無論
主人である。物は見ようでもなるものだから、この怒号
をただ逆上の結果とばかり判断する必要はない。万人のうちに
一人くらいは高山彦九郎たかやまひくろうが山賊を叱しつしたようだけに解釈し
てくれるかも知れん。当人自身もそのつもりでやった芝居かも
分らんが、相手が山賊をもつて自らおらん以上は予期する結果
は出て来ないに極きまっている。書生は後ろうしを振り返つて「僕はも
とからここにいたのです」とおとなしく答えた。これは尋常の
答で、ただその地を去らぬ事を示しただけが主人の思い通りに
ならんので、その態度と云い言語と云い、山賊として罵ののり返すべ
きほどの事でもないのは、いかに逆上の気味の主人でも分つて

いるはずだ。しかし主人の怒号は書生の席そのものが不平なのではない、先刻さつきからこの兩人は少年に似合わず、いやに高慢ききな、利いた風の事ばかり併ならべていたので、始終それを聞かされた主人は、全くこの点に立腹したものと見える。だから先方でおとなしい挨拶をしても黙って板の間へ上がりはせん。今度は「何だ馬鹿野郎、人の桶おけへ汚ない水をぴちゃぴちゃ跳はねかす奴があるか」と喝かつし去った。吾輩もこの小僧を少々心憎く思っていたから、この時心中にはちよつと快哉かいさいを呼んだが、学校教員たる主人の言動としては穏おだやかならぬ事と思うた。元来主人はあまり堅過ぎていかん。石炭のたき殻がら見たようにかさかさしてしかもいやに硬い。むかしハンニバルがアルプス山を超こえる時に、路の真中に当って大きな岩があつて、どうしても軍隊が通行上の不便邪魔をする。そこでハンニバルはこの大きな岩へ醋すをか

けて火を焚たいて、柔かにしておいて、それから鋸のこぎりでこの大岩を
蒲鉾かまぼこのように切つて滞りなく通行をしたそうだ。主人のごとく
こんな利目ききめのある薬湯へ煮うだるほど這入はいつても少しも機能のな
い男はやはり醋をかけて火炙ひあぶりにするに限ると思う。しからず
んば、こんな書生が何百人出て来て、何十年かかったつて主人
の頑固がんこは癒なおりつこない。この湯槽ゆふねに浮いているもの、この流し
にごろごろしているものは文明の人間に必要な服装を脱ぎ棄て
る化物の団体であるから、無論常規常道をもつて律する訳には
いかん。何をしたつて構わない。肺の所に胃が陣取つて、和唐
内が清和源氏になつて、民さんが不信用でもよかろう。しかし
一たび流しを出て板の間に上がれば、もう化物ではない。普通
の人類の生息せいそくする娑婆しやばへ出たのだ、文明に必要な着物をきる
のだ。従つて人間らしい行動をとらなければならんはずである。

今主人が踏んでいるところは敷居である。流しと板の間の境にある敷居の上であつて、当人はこれから^{かんげんゆしよく}歡言愉色、^{えんてんかつだつ}円転滑脱の世界に逆戻りをしようと言ふ間際である。その間際ですらかくのごとく頑固であるなら、この頑固は本人にとつて牢^{ろう}として抜くべからざる病氣に相違ない。病氣なら容易に矯正する事は出来まい。この病氣を癒^{なお}す方法は愚考によるとただ一つある。校長に依頼して免職して貰^{すなわ}う事即ちこれなり。免職になれば融通の利^きかぬ主人の事だからきつと路頭に迷うに極^{きま}つてゐる。路頭に迷う結果はのたれ死にをしなければならぬ。換言すると免職は主人にとつて死の遠因になるのである。主人は好んで病氣をして喜こんでいるけれど、死ぬのは大嫌^{だいきらひ}である。死なない程度において病氣と云ふ一種の贅^{ぜい}沢がしていたいのである。それだからそんなに病氣をしていると殺すぞと嚇^{おど}かせば臆病なる主人

の事だからびりびりと悸え^{ふる}上がるに相違ない。この悸え上がる時に病氣は奇麗に落ちるだろうと思う。それでも落ちなければそれまでの事さ。

いかに馬鹿でも病氣でも主人に変わりはない。一飯君^{いっはん}恩を重んずと云う詩人もある事だから猫だつて主人の身の上を思わない事はあるまい。氣の毒だと云う念が胸一杯になつたため、ついそちらに氣が取られて、流しの方の觀察を怠^{おこ}たつていると、突然^{ゆづね}白い湯槽^{ゆづね}の方面に向つて口々に罵^{ののし}る聲が聞える。ここにも喧嘩が起つたのかと振り向くと、狭い柘榴口^{ざくろぐち}に一寸^{いっすん}の余地もないくらいに化物が取りついて、毛のある脛^{はつあき}と、毛のない股と入り乱れて動いている。折から初秋^{はつあき}の日は暮るるになんなんとして流しの上は天井まで一面の湯氣が立て籠^こめる。かの化物の犇^{ひしめ}く様^{さま}がその間から朦朧^{もうろう}と見える。熱い熱いと云う聲が吾輩の耳を

貫ぬいて左右へ抜けるように頭の中で乱れ合う。その声には黄
なのも、青いのも、赤いのも、黒いのもあるが互に疊かさなりかかっ
て一種名状すべからざる音響を浴場内に漲みなぎらす。ただ混雑と迷
乱とを形容するに適した声と云うのみで、ほかには何の役にも
立たない声である。吾輩は茫然ぼうぜんとしてこの光景に魅入みいられたば
かり立ちすくんでいた。やがてわーわーと云う声が混乱の極度
に達して、これよりはもう一步も進めぬと云う点まで張り詰め
られた時、突然無茶苦茶に押し寄せ押し返している群むれの中から
一大長漢がぬつと立ち上がった。彼の身みの丈たけを見ると他ほかの先生
方よりはたしかに三寸くらいは高い。のみならず顔から髯ひげが生
えているのか髯の中に顔が同居しているのか分らない赤つらを
反そり返して、日盛りに破れ鐘かねをつくような声を出して「うめろ
うめろ、熱い熱い」と叫ぶ。この声とこの顔ばかりは、かの紛々ふんぶん

と縛もつれ合う群衆の上に高く傑出して、その瞬間には浴場全体がこの男一人になったと思わるるほどである。超人だ。ニーチェのいわゆる超人だ。魔中の大王だ。化物の頭梁とうりょうだ。と思つて見ていると湯槽ゆふねの後ろうしでおいと答えたものがある。おやとまともそちらに眸ひとみをそらすと、暗檐あんたんとして物色も出来ぬ中に、例のちゃんちゃん姿の三介さんすけが砕けよと一塊ひとかたまりの石炭を竈かまどの中に投げ入れるのが見えた。竈かまどの蓋ふたをぐぐつて、この塊かたまりりがぱちぱちと鳴るときに、三介の半面がぱつと明るくなる。同時に三介の後ろうしにある煉瓦れんがの壁かが暗やみを通して燃えるごとく光つた。吾輩は少々物凄ものすごくなったから早々そうそう窓から飛び下りて家いえに帰る。帰りながらも考えた。羽織を脱ぎ、猿股さるまたを脱ぎ、袴はかまを脱いで平等になろうと力つとめる赤裸々の中には、また赤裸々の豪傑が出て来て他の群小を圧倒してしまう。平等はいくらはだかになったって得られ

るものではない。

帰つて見ると天下は太平なもので、主人は湯上がりの顔をテラテラ光らして晚餐ばんさんを食っている。吾輩が椽側えんがわから上がるのを見て、のんきな猫だなあ、今頃どこをあるいているんだらうと云つた。膳の上を見ると、錢ぜにのない癖に二三品御菜おかずをならべている。そのうちに肴さかなの焼いたのが一疋びきある。これは何と称する肴か知らんが、何でも昨日きのうあたり御台場近辺おだいばでやられたに相違ない。肴は丈夫なものだと説明しておいたが、いくら丈夫でもこう焼かれたり煮られたりしてはたまらん。多病にして残喘ざんぜんを保つ方がよほど結構だ。こう考えて膳そばの傍に坐つて、隙すきがあつたら何か頂戴しようと、見るごとく見ざるごとく装よそおつていた。こんな装い方を知らないものはとうていうまい肴は食えないと諦あきらめなければいけない。主人は肴をちよつと突つついたが、うまくな

いと云う顔付をして箸はしを置いた。正面に控ひかえたる妻君はこれまた無言のまま箸じようげの上下に運動する様子、主人の両顎りようがくの離合開闔りごうかいこうの具合を熱心に研究している。

「おい、その猫の頭をちよつと撲ぶつて見ろ」と主人は突然細君に請求した。

「撲てば、どうするんですか」

「どうしてもいいからちよつと撲つて見ろ」

「そうですかと細君は平手ひらてで吾輩の頭をちよつと敲たたく。痛くも何ともない。

「鳴かんじやないか」

「ええ」

「もう一返ぺんやつて見ろ」

「何返ぺんやったって同じ事じゃありませんか」と細君また平手で

ぽかと参る^{まい}。やはり何ともないから、じつとしていた。しかしその何のためたるやは智慮深き吾輩には頓^{とん}と了解し難い。これが了解出来れば、どうかこうか方法もあろうがただ撲つて見ろだから、撲つ細君も困るし、撲たれる吾輩も困る。主人は二度まで思い通りにならるので、少々焦れ気味^{きみ}で「おい、ちよつと鳴くようにぶつて見ろ」と云つた。

細君は面倒な顔付で「鳴かして何になさるんですか」と問ひながら、またびしやりとおいでになった。こう先方の目的がわかれば訳はない、鳴いてさえやれば主人を満足させる事は出来るのだ。主人はかくのごとく愚物^{ぐぶつ}だから厭^{いや}になる。鳴かせるためなら、ためと早く云えば二返も三返も余計な手数^{てすう}はしなくてもすむし、吾輩も一度で放免になる事を二度も三度も繰り返えられる必要はないのだ。ただ打^ぶつて見ろと云う命令は、打つ事

それ自身を目的とする場合のほかには用うべきものでない。打つのは向うの事、鳴くのはこつちの事だ。鳴く事を始めから予期して懸つて、ただ打つと云う命令のうちに、こつちの随意たるべき鳴く事さえ含まつてゐるやうに考えるのは失敬千万だ。他人の人格を重んぜんと云うものだ。猫を馬鹿にしている。主人の蛇蝎だかつのごとく嫌う金田君ならやりそうな事だが、赤裸々をもつて誇る主人としてはすこぶる卑劣である。しかし実のところ主人はこれほどけちな男ではないのである。だから主人のこの命令は狡猾こうかつの極きよくに出いでたのではない。つまり智慧ちえの足りないところから湧わいた子こ子ごのやうなものと思惟しする。飯を食えば腹が張るに極きまつてゐる。切れれば血が出るに極きまつてゐる。殺せば死ぬに極きまつてゐる。それだから打ぶてば鳴くに極きまつてゐると速断をやつたんだろう。しかしそれはお気の毒だが少し論理に合はな

い。その格で行くと川へ落ちれば必ず死ぬ事になる。天麩羅^{てんぷら}を食えば必ず下痢^{げり}する事になる。月給をもらえば必ず出勤する事になる。書物を読めば必ずえらくなる事になる。必ずそうなくては少し困る人が出来てくる。打てば必ずかなければならんとなると吾輩は迷惑である。目白の時の鐘と同一に見倣^{みな}されては猫と生れた甲斐^{かい}がない。まず腹の中でこれだけ主人を凹^{へこ}ましておいて、しかる後にやゝと注文通り鳴いてやった。

すると主人は細君に向つて「今鳴いた、に、や、あ、と云う声は感投詞か、副詞か何だか知つてるか」と聞いた。

細君はあまり突然な問なので、何にも云わない。実を云うと吾輩もこれは洗湯の逆上^{きんじよがっぺき}がまださめなためだろうと思つたくらいだ。元来この主人は近所合壁^{きんじよがっぺき}有名な変人で現にある人はたしかに神経病だとまで断言したくらいである。ところが主人の

自信はえらいもので、おれが神経病じゃない、世の中の奴が神経病だと頑張がんばっている。近辺のものが主人を犬々と呼ぶと、主人は公平を維持するため必要だとか号して彼等を豚々ぶたぶたと呼ぶ。実際主人はどこまでも公平を維持するつもりらしい。困ったものだ。こう云う男だからこんな奇問を細君むかに対つて呈出するのだ。主人に取つては朝食前あさめしまえの小事件かも知れないが、聞く方から云わせるとちよつと神経病に近い人の云いそうな事だ。だから細君は煙けむに捲まかれた気味で何とも云わない。吾輩は無論何とも答えようがない。すると主人はたちまち大きな声で

「おい」と呼びかけた。

細君は吃驚びっくりして「はい」と答えた。

「そのはいは感投詞か副詞か、どっちだ」

「どっちですか、そんな馬鹿氣た事はどうでもいいじゃありません」

せんか」

「いいものか、これが現に国語家の頭脳を支配している大問題だ」

「あらまあ、猫の鳴き声ですか、いやな事ねえ。だって、猫の鳴き声は日本語じゃあないじゃありませんか」

「それだからさ。それがむずかしい問題なんだよ。比較研究と云うんだ」

「そう」と細君は利口だから、こんな馬鹿な問題には関係しない。「それで、どっちだか分ったんですか」

「重要な問題だからそう急には分らんさ」と例の肴をさかなむしやむしや食う。ついでにその隣にある豚と芋のいもにころばしを食う。

「これは豚だな」「ええ豚でござんす」「ふん」と大軽蔑の調子をもつて飲み込んだ。「酒をもう一杯飲もう」と杯さかずきを出す。

「今夜はなかなかあがるのね。もう大分だいぶん赤くなつていらつしやいますよ」

「飲むとも——御前世界で一番長い字を知ってるか」

「ええ、前の関白太政大臣でしさきょう」

「それは名前だ。長い字を知ってるか」

「字つて横文字ですか」

「うん」

「知らないわ、——御酒はもういいでしょう、これで御飯になさいな、ねえ」

「いや、まだ飲む。一番長い字を教えてやろうか」

「ええ。そうしたら御飯ですよ」

「Archaiomesidonophrunicherata と云う字だ」

「出鱈でたらめ目でしめょう」

「出鱈目なものか、希臘語だ」
ギリシヤゴ

「何という字なの、日本語にすれば」

「意味はしらん。ただ綴り^{つづ}りだけ知ってるんだ。長く書くと六寸三分くらいにかける」

他人なら酒の上で云うべき事を、正気で云っているところがすこぶる奇観である。もつとも今夜に限って酒を無暗^{むやみ}にのむ。

平生なら猪口^{ちよこ}に二杯ときめているのを、もう四杯飲んだ。二杯でも随分赤くなるところを倍飲んだのだから顔が焼火箸^{やけひばし}のようにはてつて、さも苦しそうだ。それでもまだやめない。「もう一杯」

と出す。細君はあまりの事に

「もう御よしになったら、いいでしょう。苦しいばかりですわ」
と苦々^{にがにが}しい顔をする。

「なに苦しくつてもこれから少し稽古するんだ。大町桂月^{おおまちけいげつ}が飲

めと云った」

「桂月って何です」さすがの桂月も細君に逢つては一文いちもんの価値もない。

「桂月は現今一流の批評家だ。それが飲めと云うのだからいいに極きまっているさ」

「馬鹿をおつしやい。桂月だつて、梅月だつて、苦しい思をして酒を飲めなんて、余計な事ですわ」

「酒ばかりじゃない。交際をして、道楽をして、旅行をしろといった」

「なおわるいじゃありませんか。そんな人が第一流の批評家なの。まああきれた。妻子のあるものに道楽をすすめるなんて……」

「道楽もいいさ。桂月が勧めなくつても金さえあればやるかも知れない」

「なくって仕合せだわ。今から道楽なんぞ始められちゃあ大変ですよ」

「大変だと云うならよしてやるから、その代りもう少し夫を大事にして、そうして晩に、もつと御馳走を食わせろ」

「これが精一杯のところですよ」

「そうかしらん。それじゃ道楽は追って金が這入り次第やる事にして、今夜はこれでやめよう」と飯茶碗を出す。何でも茶漬を三ぜん食ったようだ。吾輩はその夜豚肉三片と塩焼の頭を頂戴した。

八

垣巡りと云う運動を説明した時に、主人の庭を結い繞らして

ある竹垣の事をちよつと述べたつもりであるが、この竹垣の外がすぐ隣家、即ち南隣みなみどなりの次郎じろちゃんのことと思つては誤解である。家賃は安いがそこは苦沙弥先生くしゃみである。与よつちちゃんや次郎ちゃんなどと号する、いわゆるちゃん付きの連中と、薄っ片ぺちな垣一重を隔てて御隣り同志の親密なる交際は結んでおらぬ。この垣の外は五六間の空地あきちであつて、その尽くるところに檜ひのきが蒼然こんもりと五六本なら併なんでいる。椽側えんがわから拝見すると、向うは茂った森で、ここに往む先生は野中の一軒家に、無名の猫を友にして日月じつげつを送る江湖こうこの処士しよしであるかのごとき感がある。但ただし檜の枝は吹聴ふいちようするごとく密生しておらるので、その間あいだから群鶴館ぐんかくかんという、名前だけ立派な安下宿の安屋根が遠慮なく見えるから、しかく先生を想像するのにはよほど骨の折れるのは無論である。しかしこの下宿が群鶴館なら先生の居きよはたしかに臥竜窟がりようくつくらいな価値は

ある。名前に税はかからんから御互にえらそうな奴を勝手次第に付ける事として、この幅五六間の空地が竹垣を添うて東西に走る事約十間、それから、たちまち鉤かぎの手に屈曲して、臥竜窟の北面を取り囲んでいる。この北面が騒動の種である。本来なら空地を行き尽してまたあき地、とか何とか威張つてもいいくらいに家の二側を包んでいるのだが、臥竜窟がりようくつの主人は無論窟内の靈猫れいびようたる吾輩すらこのあき地には手こずっている。南側に檜ひのきが幅を利きかしているごとく、北側には桐きりの木が七八本行列している。もう周囲一尺くらいにのびているから下駄屋さえ連れてくればいい価ねになるんだが、借家しゃくやの悲しさには、いくら気が付いても実行は出来ん。主人に対しても気の毒である。せんだつて学校の小使が来て枝を一本切つて行つたが、そのつぎに來た時は新らしい桐の俎まないた下駄げたを穿はいて、この間の枝でこしらえまし

たと、聞きもせんに吹聴ふいちやうしていた。ずるい奴だ。桐はあるが吾輩及び主人家族にとつては一文にもならない桐である。玉を抱いだいて罪ありと云う古語があるそうだが、これは桐を生はやしてぜに銭なしと云つてもしかるべきもので、いわゆる宝の持ち腐ぐされである。愚ぐなるものは主人にあらず、吾輩にあらず、家主やぬしの伝兵衛である。いないかな、いないかな、下駄屋はいないかなと桐の方で催促しているのに知らん面かおをして屋賃やちんばかり取り立てにくる。吾輩は別に伝兵衛に恨うらみもないから彼の悪口あつこうをこのくらいにして、本題に戻つてこの空地あきちが騒動の種であると云う珍譚ちんだんを紹介仕つかまつるが、決して主人にいつてはいけない。これぎりの話である。そもそもこの空地に関して第一の不都合なる事は垣根のない事である。吹き払い、吹き通し、抜け裏、通行御免天下晴れての空地である。あると云うと嘘をつくようでもろしくな

い。実を云うとあつたのである。しかし話しは過去へ溯さかのらんと
原因が分らない。原因が分らないと、医者でも処方しよほうに迷惑
する。だからここへ引き越して来た当時からゆつくりと話し始
める。吹き通しも夏はせいせいして心持ちがいいものだ、不用
心だつて金のないところに盗難のあるはずはない。だから主人
の家に、あらゆる堀へい、垣ないし、乃至は乱杭らんぐい、逆茂木さかもぎの類は全く不要で
ある。しかしながらこれは空地の向うに住居すまいする人間もしくは
動物の種類如何いかんによつて決せらるる問題であらうと思う。従つ
てこの問題を決するためには勢い向う側に陣取つてゐる君子の
性質を明かにせんければならん。人間だか動物だか分らない先
に君子と称するのははなはだ早計のようではあるが大抵君子で
間違はない。梁上りようじようの君子などと云つて泥棒さえ君子と云う世の
中である。但ただしこの場合における君子は決して警察の厄介にな

るような君子ではない。警察の厄介にならない代りに、数でこ
なした者と見えて沢山いる。うじやうじやいる。落雲館らくうんかんと称す
る私立の中学校——八百の君子をいやが上に君子に養成するた
めに毎月二円の月謝を徴集する学校である。名前が落雲館だか
ら風流な君子ばかりかと思うと、それがそもそもの間違になる。
その信用すべからざる事は群鶴館ぐんかくかんに鶴の下りざるごとく、臥竜
窟に猫がいるようなものである。学士とか教師とか号するもの
に主人苦沙弥君のごとき気違のある事を知った以上は落雲館の
君子が風流漢ばかりでないと云う事がわかる訳だわけ。それがわか
らんと主張するならまず三日ばかり主人のうちへ宿りとまに来て見
るがいい。

前申ぜんすごとく、ここへ引き越しの当時は、例の空地あきちに垣がな
いので、落雲館の君子は車屋の黒のごとく、のそのそと桐畠きりばたけに

這入り込んできて、話をする、弁当を食う、笹の上に寝転ぶ——
いろいろの事をやったものだ。それから弁当の死骸即ち竹の
皮、古新聞、あるいは古草履、古下駄、ふると云う名のつくもの
を大概ここへ棄てたようだ。無頓着なる主人は存外平気に構え
て、別段抗議も申し込まずに打ち過ぎたのは、知らなかったの
か、知っても咎めんつもりであつたのか分らない。ところが彼
等諸君子は学校で教育を受くるに従つて、だんだん君子らしく
なつたものと見えて、次第に北側から南側の方面へ向けて蚕食
を企だてて来た。蚕食と云う語が君子に不似合ならやめてもよ
ろしい。但しほかに言葉がないのである。彼等は水草を追うて
居を變ずる沙漠の住民のごとく、桐の木を去つて檜の方に進ん
で来た。檜のある所は座敷の正面である。よほど大胆なる君子
でなければこれほどの行動は取れんはずである。一兩日の後彼

等の大胆はさらに一層の大を加えて大々胆だいだいたんとなつた。教育の結果ほど恐しいものはない。彼等は単に座敷の正面に逼せまるのみならず、この正面において歌をうたいだした。何と云う歌か忘れてしまつたが、決して三十一文字みそひともじの類たぐいではない、もつと活潑かつぱつで、もつと俗耳ぞくじに入り易やすい歌であつた。驚ろいたのは主人ばかりではない、吾輩までも彼等君子の才芸に嘆服たんぷくして覚えず耳を傾けたくらいである。しかし読者もご案内であろうが、嘆服と云う事と邪魔と云う事は時として両立する場合がある。この両者がこの際はか図らずも合して一となつたのは、今から考えて見ても返す返す残念である。主人も残念であつたろうが、やむを得ず書齋から飛び出して行つて、ここは君等の這入はいる所ではない、出給えと云つて、二三度追ひ出したようだ。ところが教育のある君子の事だから、こんな事でおとなしく聞く訳がない。追ひ出

されればすぐ這入る。這入れれば活潑なる歌をうたう。高声こうせいに談話をする。しかも君子の談話だから一風違いっふうつて、おめえだの知らねえのと云う。そんな言葉は御維新前ごいつしんまえは折助おりすけと雲助くもすけと三助さんすけの専門的知識に属していたそうだが、二十世紀になつてから教育ある君子の学ぶ唯一の言語であるそうだ。一般から輕蔑けいべつせられたる運動が、かくのごとく今日こんにち歡迎せらるるようになったのと同じの現象だと説明した人がある。主人はまた書斎から飛び出してこの君子流の言葉にもつとも堪能かんのうなる一人を捉つかまえて、なぜここへ這入るかと詰問したら、君子はたちまち「おめえ、知らねえ」の上品な言葉を忘れて「ここは学校の植物園かと思ひました」とすこぶる下品な言葉で答えた。主人は将来を戒いましめて放してやった。放してやるのは亀の子のようでおかしいが、實際彼は君子の袖そでを捉とらえて談判したのである。このくらいやかま

しく云つたらもうよかろうと主人は思っていたそうだ。ところが実際は女媧氏じよかしの時代から予期と違うもので、主人はまた失敗した。今度は北側から邸内を横断して表門から抜ける、表門をがらりとあけるから御客かと思うと桐畠の方で笑う声がある。形勢はますます不穏である。教育の功果はいよいよ顕著になってくる。気の毒な主人はこいつは手に合わんと、それから書斎へ立て籠こもつて、恭うやうやしく一書を落雲館校長に奉つて、少々御取締をと哀願した。校長も鄭重ていぢゆうなる返書を主人に送つて、垣をすから待つてくれと云つた。しばらくすると二三人の職人が来て半日ばかりの間に主人の屋敷と、落雲館の境に、高さ三尺ばかりの四つ目垣が出来上がった。これでようよう安心だと主人は喜こんだ。主人は愚物である。このくらいの事で君子の挙動の変化する訳がない。

全体人にからかうのは面白いものである。吾輩のような猫で
 すら、時々^きは当家の令嬢にかかつて遊ぶくらいだから、落雲
 館の君子が、氣の利かない苦沙弥先生にからかうのは至極^{しごく}もつ
 ともなところで、これに不平なのは恐らく、からかわれる当人
 だけであろう。からかうと云う心理を解剖して見ると二つの要
 素がある。第一からかわれる当人が平氣ですましていてはなら
 ん。第二からかう者が勢力において人数において相手より強く
 なくてはいかん。この間主人が動物園から帰つて来てしきりに
 感心して話した事がある。聞いて見ると駱駝^{らくだ}と小犬の喧嘩を見
 たのだそう^だ。小犬が駱駝の周囲を疾風のごとく廻転して吠え^ほ
 立てると、駱駝は何の氣もつかずに、依然として背中^{せなか}へ瘤^{こぶ}をこ
 しらえて突つ立ったままであるそう^だ。いくら吠えても狂つて
 も相手にせんので、しまいには犬も愛想^{あいそ}をつかしてやめる、実

に駱駝は無神経だと笑っていたが、それがこの場合の適例である。いくらからかうものが上手でも相手が駱駝と来ては成立しない。さればと云つて獅子や虎のように先方が強過ぎても者にならん。からかいかけるや否や八つ裂きにされてしまう。からかうと齒をむき出して怒る、怒る事は怒るが、こつちをどうする事も出来ないと言ふ安心のある時に愉快は非常に多いものである。なぜこんな事が面白いと言ふとその理由はいろいろある。まずひまつぶしに適している。退屈な時には髯の数さえ勘定して見たくなる者だ。昔し獄に投ぜられた囚人の一人は無聊のあまり、房の壁に三角形を重ねて画いてその日をくらしたと云う話がある。世の中に退屈ほど我慢の出来にくいものはない、何か活気を刺激する事件がないと生きているのがつらいものだ。からかうと云うのもつまりこの刺激を作つて遊ぶ一種の娯楽で

ある。但し多少先方を怒らせるか、じらせるか、弱らせるか、弱く
ては刺激にならんから、昔しからかう、と云う娯楽に耽る
ものは人の氣を知らない馬鹿大名のような退屈の多い者、もし
くは自分のなぐさみ以外は考うるに暇なきほど頭の発達が幼稚
で、しかも活氣の使い道に窮する少年かに限っている。次には
自己の優勢な事を實地に証明するものにはもつとも簡便な方法
である。人を殺したり、人を傷けたり、または人を陥れたりし
ても自己の優勢な事は証明出来る訳であるが、これらはむしろ
殺したり、傷けたり、陥れたりするのが目的のときによるべき
手段で、自己の優勢なる事はこの手段を遂行した後に必然の結
果として起る現象に過ぎん。だから一方には自分の勢力が示し
たくつて、しかもそんなに人に害を与えたくないと言ふ場合に
は、からかうのが一番御恰好である。多少人を傷けなければ自

己のえらい事は事実の上に証拠だてられない。事実になつて出て来ないと、頭のうちに安心していても存外快樂のうすいものである。人間は自己を恃たのむものである。否恃み難い場合でも恃みたいものである。それだから自己はこれだけ恃める者だ、これなら安心だと云う事を、人に対して実地に応用して見ないと気がすまない。しかも理窟りくつのわからない俗物や、あまり自己が恃みになりそうもなくて落ちつきのない者は、あらゆる機会を利用して、この証券を握ろうとする。柔術使が時々人を投げて見たくなるのと同じ事である。柔術の怪しいものは、どうか自分より弱い奴に、ただの一返ぺんでいいから出逢つて見たい、素人しろうとでも構わないから抛なげて見たいと至極危険な了見を抱いだいて町内をあるくのもこれがためである。その他にも理由はいろいろあるが、あまり長くなるから略する事に致す。聞きたければ鯉節かつぶし

の一折ひとおりも持つて習いにくるがいい、いつでも教えてやる。以上に説くところを参考して推論して見ると、吾輩かんがえの考では奥山おくやまの猿さると、学校の教師がからかうには一番手頃である。学校の教師をもつて、奥山の猿に比較しては勿体もったいない。——猿に対して勿体ないのではない、教師に対して勿体ないのである。しかしよく似ているから仕方がない、御承知の通り奥山の猿は鎖くさりで繋がつながれている。いくら歯をむき出しても、きやつきやつ騒いでも引き搔かかれる氣遣きづかいはない。教師は鎖で繋がれておらない代りに月給で縛られている。いくらからかつたつて大丈夫、辞職して生徒をぶんなぐる事はない。辞職をする勇氣のあるようなものなら最初から教師などをして生徒の御守おもりは勤めないはずである。主人は教師である。落雲館の教師ではないが、やはり教師に相違ない。からかうには至極しじく適当で、至極あんちよく安直で、至極無事な男

である。落雲館の生徒は少年である。からかう事は自己の鼻を高くする所以ゆえんで、教育の功果として至当に要求してしかるべき権利とまで心得ている。のみならずからかい、もしなければ、活気に充ちた五体と頭脳を、いかに使用してしかるべきか十分じつぶんの休暇中持てあまして困っている連中である。これらの条件が備われれば主人は自おのからからかわれ、生徒は自おのからからかう、誰から云わしても毫ごうも無理のないところである。それを怒おこる主人は野暮やばの極、間拔の骨頂でしょう。これから落雲館の生徒がいかに主人にからかったか、これに對して主人がいかに野暮を極めたかを逐一かいてご覧に入れる。

諸君は四つ目垣とはいかなる者であるか御承知であらう。風通しのいい、簡便な垣である。吾輩などは目の間から自由自在に往来する事が出来る。こしらえたつて、こしらえなくなつて

同じ事だ。然し落雲館の校長は猫のために四つ目垣を作ったのではない、自分が養成する君子が潜くぐられんために、わざわざ職人を入れて結ゆい繞めぐらせたのである。なるほどいくら風通しがよく出来ていても、人間には潜くぐれそうにない。この竹をもつて組み合せたる四寸角の穴をぬける事は、清国しんこくの奇術師張世尊ちようせいそんその人といえどもむずかしい。だから人間に対しては充分垣の機能をつくしているに相違ない。主人がその出来上ったのを見て、これならよかろうと喜んだのも無理はない。しかし主人の論理には大なる穴がある。この垣よりも大いなる穴がある。吞舟どんしゅうの魚をも洩もらすべき大穴がある。彼は垣は踰こゆべきものにあらざるとの仮定から出立している。いやしくも学校の生徒たる以上はにかに粗末の垣でも、垣と云う名がついて、分界線の区域さえ判然すれば決して乱入される氣遣はないと仮定したのである。次

に彼はその仮定をしばらく打ち崩^{くず}して、よし乱入する者があつても大丈夫と論断したのである。四つ目垣の穴を潜^{くぐ}り得る事は、いかなる小僧といえどもとうてい出来る氣遣はないから乱入の虞^{おそれ}は決してないと速定^{そくてい}してしまつたのである。なるほど彼等が猫でない限りはこの四角の目をぬけてくる事はしまい、したくても出来まいが、乗り踰^こえる事、飛び越える事は何の事もない。かえつて運動になつて面白いくらいである。

垣の出来た翌日から、垣の出来ぬ前と同様に彼等は北側の空地へばかりぽかりと飛び込む。但^{ただ}し座敷の正面までは深入りをしてしない。もし追い懸けられたら逃げるのに、少々ひまがいるから、予め逃げる時間を勘定^{あらかじ}に入れて、捕^{とら}えらるる危険のない所で遊^{ゆうよく}弋^{よく}をしている。彼等が何をしているか東の離れにいる主人には無論目に入^いらない。北側の空地^{あきち}に彼等が遊弋^{よく}している状態

は、木戸をあけて反対の方角から鉤かぎの手に曲つて見るか、または後架こうかの窓から垣根越しに眺ながめるよりほかに仕方がない。窓から眺める時はどこに何がいるか、一目明瞭いちもくに見渡す事が出来るが、よしや敵を幾人見出したからと云つて捕える訳には行かぬ。ただ窓の格子こうしの中から叱りつけるばかりである。もし木戸から迂回うかいして敵地を突こうとすれば、足音を聞きつけて、ぽかりぽかりと捉つかまる前に向う側へ下りてしまう。脇脇おつとせいがひなたぼっこをしているところへ密猟船が向つたような者だ。主人は無論後架で張り番をしている訳ではない。と云つて木戸を開いて、音がしたら直ぐ飛び出す用意もない。もしそんな事をやる日には教師を辞職して、その方専門にならなければ追つかない。主人方の不利を云うと書斎からは敵の声だけ聞えて姿が見えないのと、窓からは姿が見えるだけで手が出せない事である。この

不利を看破したる敵はこんな軍略を講じた。主人が書齋に立て籠こもつてしていると探偵した時には、なるべく大きな声を出してわあわあ云う。その中には主人をひやかすような事を聞こえよがしに述べる。しかもその声の出所を極めて不分明にする。ちよつと聞くと垣の内で騒いでいるのか、あるいは向う側であばれているのか判定しにくいようにする。もし主人が出懸けて来たら、逃げ出すか、または始めから向う側にいて知らん顔をする。また主人が後架へ——吾輩は最前からしきりに後架後架ときたない字を使用するのを別段の光栄とも思つておらん、実は迷惑千万であるが、この戦争を記述する上において必要であるからやむを得ない。——即ち主人が後架へまかり越したと見て取るときすなわは、必ず桐の木の附近を徘徊はいかいしてわざと主人の眼につくようにする。主人がもし後架から四隣しりんに響く大音を揚げて怒鳴りつけ

れば敵は周章^{あわ}てる気色^{けしき}もなく悠然^{ゆうぜん}と根拠地^{こんこち}へ引きあげる。この軍略を用いられると主人ははなはだ困却する。たしかに這入^{はい}つてゐるなと思つてステッキを持つて出懸けると寂然^{せきぜん}として誰もいない。いないかと思つて窓からのぞくと必ず一二人這入^{はい}つてゐる。主人は裏へ廻つて見たり、後架から覗^{のぞ}いて見たり、後架から覗^{のぞ}いて見たり、裏へ廻つて見たり、何度言つても同じ事だが、何度云つても同じ事を繰り返している。奔命^{ほんめい}に疲れるとはこの事である。教師が職業であるか、戦争が本務であるかちよつと分らないくらい逆上^{ぎやくじやう}して来た。この逆上の頂点に達した時に下の事件が起つたのである。

事件は大概逆上^{のぼ}から出る者だ。逆上とは読んで字のごとく逆^{さか}かさに上^{のぼ}るのである、この点に關してはゲーレンもパラセルサスも旧弊^{けんぺい}なる扁鵲^{へんじやく}も異議^{いぎ}を唱^{とな}うる者は一人もない。ただどこへ

逆かさに上るかのぼが問題である。また何が逆かさに上るかが議論のあるところである。古来歐洲人の伝説によると、吾人の体内には四種の液が循環しておったそうだ。第一に怒液と云う奴がある。これが逆かさに上ると怒り出す。第二に鈍液と名づくるがある。これが逆かさに上ると神経が鈍くなる。次には憂液、これは人間を陰気にする。最後が血液、これは四肢を壮にする。その後人文が進むに従つて鈍液、怒液、憂液はいつの間になくなって、現今に至つては血液だけが昔のように循環していると云う話した。だからもし逆上する者があらば血液よりほかにあるまいと思われる。しかるにこの血液の分量は個人によつてちゃんと極まっている。性分によつて多少の増減はあるが、まず大抵一人前に付五升五合の割合である。だによつて、この五升五合が逆かさに上ると、上つたところだけは熾んに活動す

るが、その他の局部は欠乏を感じて冷たくなる。ちようど交番焼打の当時巡査がことごとく警察署へ集つて、町内には一人もなくなつたやうなものだ。あれも医学上から診断をすると警察の逆上と云う者である。でこの逆上を癒やすには血液を従前のごとく体内の各部へ平均に分配しなければならん。そうするには逆かさに上つた奴を下へ降さなくてはならん。その方にはいろいろある。今は故人となられたが主人の先君などは濡れ手拭を頭にあてて炬燵にあたつておられたそうだ。頭寒足熱は延命息災の徴と傷寒論しょうかんろんにも出ている通り、濡れ手拭は長寿法において一日も欠くべからざる者である。それでなければ坊主の慣用する手段を試みるがよい。一所不住の沙門雲水行脚の衲僧は必ず樹下石上を宿とすとある。樹下石上とは難行苦行のためではない。全くのぼせを下げるために六祖が米を舂きながら考え出

した秘法である。試みに石の上に坐つてご覧、尻が冷えるのは
当り前だろう。尻が冷える、のぼせが下がる、これまた自然の
順序にして毫も疑を挟むべき余地はない。かようにいろいろな
方法を用いてのぼせを下げる工夫は大分発明されたが、まだの
ぼせを引き起す良方が案出されないのは残念である。一概に考
えるとのぼせは損あつて益なき現象であるが、そうばかり速断
してならん場合がある。職業によると逆上はよほど大切な者で、
逆上せんと何にも出来ない事がある。その中でもっとも逆上を
重んずるのは詩人である。詩人に逆上が必要なる事は汽船に石
炭が欠くべからざるような者で、この供給が一日でも途切れる
と彼れ等は手を拱こまぬいて飯を食うよりほかに何等の能もない凡人
になつてしまう。もつとも逆上は氣違いみようの異名で、氣違にならな
いと家業かぎようが立ち行かんとあつては世間体せけんていが悪いから、彼等の仲

間では逆上を呼ぶに逆上の名をもつてしない。申し合せてインスピレーション、インスピレーションとさも勿体^{もったい}そうに称^{とな}えている。これは彼等が世間を瞞^{まん}着^{ちやく}するために製造した名でその実は正に逆上である。プレートーは彼等の肩を持つてこの種の逆上を神聖なる狂気と号したが、いくら神聖でも狂気では人が相手にしない。やはりインスピレーションと云う新發明の売薬のような名を付けておく方が彼等のためによからうと思う。しかし蒲^{かまぼこ}鉾^この種^こが山芋^{やまいも}であるごとく、観音^{かんのん}の像が一寸八分の朽木^{くちぎ}であるごとく、鴨^{かも}南^{なん}蛮^{ばん}の材料が烏であるごとく、下宿屋^{ぎやうや}の牛鍋^{ぎゅうなべ}が馬肉であるごとくインスピレーションも実は逆上である。逆上であつて見れば臨時の気違である。巢鴨へ入院せずに済むのは単に臨時気違であるからだ。ところがこの臨時の気違を製造する事が困難なのである。一生涯^{いっしょうがいの}の狂人はかえつて出来安いが、筆

を執とつて紙に向う間あいだだけ氣違にするのは、いかに巧てうしや者な神様でもよほど骨が折れると見えて、なかなか拵こしらえて見せない。神が作つくってくれん以上は自力で拵えなければならん。そこで昔こんにちから今日まで逆上術もまた逆上とりのけ術と同じく大おおに学者の頭腦を悩ました。ある人はインスピレーションを得るために毎日渋柿を十二個ずつ食った。これは渋柿を食べば便秘する、便秘すれば逆上は必ず起るといふ理論から来たものだ。またある人はかん徳利を持つて鉄砲風呂へ飛び込んだ。湯の中で酒を飲んだら逆上するに極きまつていふと考えたのである。その人の説によるとこれで成功しなければ葡萄酒ぶどうしゆの湯をわかして這はい入れば一返ぺんで功能があると信じ切っている。しかし金がないのでついに実行する事が出来なくて死んでしまったのは氣の毒である。最後に古人の真似をしたらインスピレーションが起るだろうと思いつ

いた者がある。これはある人の態度動作を真似ると心的状態もその人に似てくると云う学説を応用したのである。酔っぱらいのように管くだを捲まいていっていると、いつの間まにか酒飲みのような心持になる、坐禅をして線香一本の間我慢しているとどこことなく坊主らしい気分になれる。だから昔からインスピレーションを受けた有名の大家の所作しよさを真似れば必ず逆上するに相違ない。聞くとところによればユーゴーは快走船ヨットの上へ寝転ねころんで文章の趣向を考えたそうだから、船へ乗って青空を見つめていれば必ず逆上受合うけあいである。スチーヴンソンは腹這はらばいに寝て小説を書いたそうだから、打うつ伏ふしになつて筆を持てばきつと血が逆さかさに上のってくる。かようにいろいろな人がいろいろの事を考え出したが、まだ誰も成功しない。まず今日こんにちのところでは人為的逆上は不可能の事となっている。残念だが致し方がない。早晚随意にイン

スピレーションを起し得る時機の到来するは疑うたがいもない事で、吾輩は人文のためにこの時機の一日も早く来らん事を切望するのである。

逆上の説明はこのくらいで充分だろうと思うから、これよりいよいよ事件に取りかかる。しかしすべての大事件の前には必ず小事件が起るものだ。大事件のみを述べて、小事件を逸するのは古来から歴史家の常おちいに陥る弊竇へいとうである。主人の逆上も小事件に逢う度に一層の劇甚げきじんを加えて、ついに大事件を引き起したのであるからして、幾分かその発達を順序立てて述べないと主人がいかに逆上しているか分りにくい。分りにくいと主人の逆上は空名に帰して、世間からはよもやそれほどでもなかつたと見くびられるかも知れない。せつかく逆上しても人から天晴あつぱれな逆上と謡うたわれなくては張り合がないだろう。これから述べる事

件は大小に係らず主人に取つて名誉な者ではない。事件その物が不名誉であるならば、責めて逆上なりとも、正銘の逆上であつて、決して人に劣るものでないと云う事を明かにしておきたい。主人は他に対して別にこれと云つて誇るに足る性質を有しておらん。逆上でも自慢しなくてはほかに骨を折つて書き立ててやる種がない。

落雲館に群がる敵軍は近日に至つて一種のダムダム弾を發明して、十分の休暇、もしくは放課後に至つて熾に北側の空地に向つて砲火を浴びせかける。このダムダム弾は通称をボールととなえて、搗粉木の大きな奴をもつて任意これを敵中に発射する仕掛である。いくらダムダムだつて落雲館の運動場から発射するのだから、書齋に立て籠つてる主人に中る氣遣はない。敵といえども弾道のあまり遠過ぎるのを自覚せん事はないのだけ

ど、そこが軍略である。旅順の戦争にも海軍から間接射撃を行つて偉大な功を奏したと云う話であれば、空地へころがり落つるボールといえども相当の効果を収め得ぬ事はない。いわんや一発を送る度^{たび}に総軍力を合せてわーと威嚇性^{いかくせい}大音声^{だいおんじよう}を出す^{いだ}にいてをやである。主人は恐縮の結果として手足に通う血管が収縮せざるを得ない。煩悶^{はんもん}の極^{きよく}そこいらを迷付^{まぎつ}いている血が逆さ^{さか}に上^{のぼ}るはずである。敵の計^{はかりごと}はなかなか巧妙と云うてよろしい。昔^{むか}し希臘^{ギリシャ}にイスキラスと云う作家があつたそうだ。この男は学者作家に共通なる頭を有^はしていたと云う。吾輩のいわゆる学者作家に共通なる頭とは禿^{はげ}と云う意味である。なぜ頭が禿げるかと云えば頭の營養不足で毛が生長するほど活気がないからに相違ない。学者作家はもつとも多く頭を使うものであつて大概は貧乏^{きま}に極^{きま}っている。だから学者作家の頭はみんな營養不足でみ

んな禿げている。さてイスキラスも作家であるから自然の勢いきおい禿げなくてはならん。彼はつるつる然たる金柑頭きんかんあたまを有しておつた。ところがある日の事、先生例の頭——頭に外行よそゆきも普段ふだん着もないから例の頭に極つてゐるが——その例の頭を振り立て振り立て、太陽に照らしつけて往来をあるいていた。これが間違ひのものである。禿げ頭を日にあてて遠方から見ると、大変よく光るものだ。高い木には風があたる、光かる頭にも何かあたらなくてならん。この時イスキラスの頭の上に一羽の鷺わしが舞つていたが、見るとどこかで生捕いけどつた一疋びきの亀を爪の先に攫つかんだままである。亀、スッポンなどは美味に相違ないが、希臘時代から堅い甲羅こうらをつけている。いくら美味でも甲羅つきではどうする事も出来ん。海老えびの鬼殻焼おにがらやきはあるが亀の子の甲羅煮は今でさえないくらいだから、当時は無論なかつたに極つてゐる。さす

がの鷲わしも少々持て余した折柄おりから、遙はるかの下界にぴかと光った者がある。その時鷲はしめたと思った。あの光ったものの上へ亀の子を落したなら、甲羅は正まさしく砕けるに極きわまつた。砕けたあとから舞い下りて中味なかみを頂戴ちやうだいすれば訳はない。そうだそうだと覗のぞいを定めて、かの亀の子を高い所から挨拶も無く頭の上へ落した。生憎あいにく作家の頭の方が亀の甲より軟らかであつたものだから、禿はめちやめちやに碎けて有名なるイスキラスはここに無惨むざんの最後を遂げた。それはそうと、解げしかねるのは鷲の了見である。例の頭を、作家の頭と知つて落したのか、または禿岩と間違えて落したもののか、解決しよう次第で、落雲館の敵とこの鷲とを比較する事も出来るし、また出来なくもなる。主人の頭はイスキラスのそれのごとく、また御歴おれき々の学者のごとくぴかぴか光つてはおらん。しかし六畳敷にせよいやくも書斎と号する一室を

控^{ひか}えて、居眠りをしながらも、むずかしい書物の上へ顔を翳^{かざ}す
以上は、学者作家の同類と見倣^{みな}さなければならん。そうすると
主人の頭の禿^かげておらんのは、まだ禿^かげるべき資格がないから
で、その内に禿^かげるだろうとは近々^{きんきん}この頭の上に落ちかかるべ
き運命であろう。して見れば落雲館の生徒がこの頭を目懸けて
例のダムダム丸^{がん}を集注するのは策のもつとも時宜^{じぎ}に適したもの
と云わねばならん。もし敵がこの行動を二週間継続するならば、
主人の頭は畏怖^{いふ}と煩悶^{はんもん}のため必ず營養の不足を訴えて、金柑^{きんかん}と
も薬缶^{やかん}とも銅壺^{どうこ}とも変化するだろう。なお二週間の砲撃を食^{くら}え
ば金柑は潰^{つぶ}れるに相違ない。薬缶は洩^もるに相違ない。銅壺なら
ひびが入るにきまつている。この睹易^{みやす}き結果を予想せんで、あ
くまでも敵と戦鬪を継続しようと苦心するのは、ただ本人たる
苦沙弥先生のみである。

ある日の午後、吾輩は例のごとく椽側へ出て午睡をして虎になつた夢を見ていた。主人に鶏肉けいにくを持つて来いと云うと、主人がへえと恐る恐る鶏肉を持つて出る。迷亭が来たから、迷亭に雁がんが食いたい、雁鍋がんべへ行つて誂あつらえて来いと云うと、蕪かぶの香かうの物ものと、塩煎餅しおせんべいといつしよに召し上がりますと雁の味が致しますと例のごとく茶羅ちやらッ銚ぼこを云うから、大きな口をあいて、うーと唸うなつて嚇おどしてやつたら、迷亭は蒼あおくなつて山下やましたの雁鍋は廃業致しましたがいかが取り計はからいましょうかと云つた。それなら牛肉で勘弁するから早く西川へ行つてロースを一斤取つて来い、早くせんと貴様から食い殺すぞと云つたら、迷亭は尻はしよを端折かつて馳かけ出した。吾輩は急にからだが大きくなつたので、椽側一杯に寝そべつて、迷亭の帰るのを待ち受けていると、たちまち家中うちじゅうに響く大きな声がしてせつかくの牛ぎゅうも食わぬ間に夢がさめて吾に

帰った。すると今まで恐る恐る吾輩の前に平伏していたと思いのほかの主人が、いきなり後架こうかから飛び出して来て、吾輩の横腹をいやと云うほど蹴けたから、おやと思ううち、たちまち庭下駄をつつかけて木戸から廻つて、落雲館の方へかけて行く。吾輩は虎から急に猫と収縮したのだから何となく極きまりが悪くもあり、おかしくもあつたが、主人のこの権幕と横腹を蹴けられた痛さとで、虎の事はすぐ忘れてしまった。同時に主人がいよいよ出馬して敵と交戦するな面白いわいと、痛いのを我慢して、後あとを慕つて裏口へ出た。同時に主人がぬすつ、とうと怒鳴る声が聞える、見ると制帽をつけた十八九になる倔強くつきやうな奴が一人、四ツ目垣を向うへ乗り越えつつある。やあ遅かつたと思ううち、彼の制帽は馳け足の姿勢をとつて根拠地の方へ韋駄天いだてんのごとく逃げて行く。主人はぬすつ、とうが大おおに成功したので、またもぬす

つ、とうと高く叫びながら追いかけて行く。しかしかの敵に追いつくためには主人の方で垣を越さなければならん。深入りをすれば主人自らみづかが泥棒になるはずである。前申ぜんす通り主人は立派なる逆上家である。こう勢いきおいに乗じてぬすつ、とうを追ひ懸ける以上は、夫子ふうし自身がぬすつ、とうに成つても追ひ懸けるつもりと見えて、引き返す気色けしきもなく垣の根元まで進んだ。今一步で彼はぬすつ、とうの領分はいに入らなければならんと云う間際まぎわに、敵軍の中から、薄い髻ひげを勢なく生はやした将官がこのこと出馬して来た。両人ふたりは垣を境に何か談判している。聞いて見るとこんなつまらない議論である。

「あれは本校の生徒です」

「生徒たるべきものが、何で他の邸内ひとへ侵入するのですか」

「いやボールがつい飛んだものですから」

「なぜ断つて、取りに來ないのでですか」

「これから善く注意します」

「そんなら、よろしい」

りゆうとうこう

竜騰虎鬬の壯觀があるだろうと予期した交渉はかくのごとく散文的なる談判をもつて無事に迅速に結了した。主人の壯さかんなるはただ意気込みだけである。いざとなると、いつでもこれでおしまいだ。あたかも吾輩が虎の夢から急に猫に返つたような觀がある。吾輩の小事件と云うのは即ちこれすなわである。小事件を記述したあとには、順序として是非大事件を話さなければならん。

主人は座敷の障子を開いて腹這はらばいになつて、何か思案している。恐らく敵に対して防禦策ぼうぎよさくを講じているのだろう。落雲館は授業中と見えて、運動場は存外静かである。ただ校舎の一室で、倫

理の講義をしているのが手に取るように聞える。朗々たる音声でなかなかうまく述べ立てているのを聴くと、全く昨日敵中から出馬して談判の衝に当った將軍である。

「……で公德と云うものは大切な事で、あちらへ行つて見ると、
仏蘭西でも独逸でも英吉利でも、どこへ行つても、この公德の
行われておらん国はない。またどんな下等な者でもこの公德を
重んぜぬ者はない。悲しいかな、我が日本に在つては、未だこ
の点において外国と拮抗する事が出来ないのである。で公德と申
すとか何か新しく外国から輸入して来たように考える諸君もある
かも知れんが、そう思うのは大なる誤りで、昔人も夫子の道一
もつこれつらぬ、忠恕のみ矣と云われた事がある。この恕と申す
のが取りも直さず公德の出所である。私も人間であるから時には
大きな声をして歌などうたつて見たくなる事がある。しかし

私が勉強している時に隣室のものなどが放歌するのを聴くと、
どうしても書物の読めぬのが私の性分である。であるからして
自分が唐詩選でも高声こうせいに吟じたら気分が晴々せいせいしてよかろうと思
う時ですら、もし自分のように迷惑がる人が隣家に住んでおつ
て、知らず知らずその人の邪魔をするような事があつてはすま
んと思うて、そう云う時はいつでも控ひかえるのである。こう云う
訳だから諸君もなるべく公德を守つて、いやしくも人の妨害に
なると思う事は決してやつてはならのである。……」

主人は耳を傾けて、この講話を謹聴していたが、ここに至つ
てにやりと笑つた。ちよつとこのにやりの意味を説明する必要
がある。皮肉家がこれをよんだらこのにやりの裏うちには冷評的分
子が交つていると思うだろう。しかし主人は決して、そんな人
の悪い男ではない。悪いと云うよりそんなに智慧ちえの発達した男

ではない。主人はなぜ笑ったかと云うと全く嬉しくつて笑ったのである。倫理の教師たる者がかように痛切なる訓戒を与えるからはこの後は永久ダムダム弾の乱射を免がれるに相違ない。のち 当分のうち頭も禿げずにすむ、逆上は一時に直らんでも時機さえくれば漸次回復するだろう、濡れ手拭を頂いて、炬燵にあたらなくとも、樹下石上を宿としなくとも大丈夫だろうと鑑定したから、にやにやと笑ったのである。借金はず返す者と二十世紀の今日にもやはり正直に考えるほどの主人がこの講話を真面目に聞くのは当然であろう。

やがて時間が来たと見えて、講話はぱたりとやんだ。他の教室の課業も皆一度に終った。すると今まで室内に密封された八百の同勢は鬨の声をあげて、建物を飛び出した。その勢と云うものは、一尺ほどな蜂の巣を敲き落したごとくである。ぶんぶ

ん、わんわん云うて窓から、戸口から、開きから、いやしくも穴の開あいてゐる所なら何の容赦もなく我勝ちに飛び出した。これが大事件の発端である。

まず蜂の陣立てから説明する。こんな戦争に陣立ても何もあるものかと云うのは間違つてゐる。普通の人には戦争とさえ云えば沙河しやかとか奉天ほうてんとかまた旅順りよじゅんとかそのほかに戦争はないもののごとくに考へてゐる。少し詩がかった野蛮人になると、アキリスがヘクトーの死骸を引きずつて、トロイの城壁を三匝さんそうしたとか、燕えんびと張飛ちやうはんきやうじやうはちが長坂橋に丈八の蛇矛だばうを横よこえて、曹操そうそうの軍百万人を睨にらめ返したとか大袈裟おおげさな事ばかり連想する。連想は当人の随意だがそれ以外の戦争はないものと心得るのは不都合だ。太古蒙昧たいこもうまいの時代に在あつてこそ、そんな馬鹿氣た戦争も行われたかも知れん、しかし太平へいの今日こんにち、大日本国帝都の中心においてかくのご

とき野蛮的行動はあり得べからざる奇蹟に属している。いかに騒動が持ち上がったても交番の焼打以上に出る氣遣きづかいはない。して見ると臥竜窟主人の苦沙弥先生と落雲館裏八百の健児との戦争は、まず東京市あつて以来の大戦争の一として数えてもしかるべきものだ。左氏さしが鄢陵えんりやうの戦を記するに当つてもまず敵の陣勢から述べている。古来から叙述に巧みなるものは皆この筆法を用いるのが通則になっている。だによつて吾輩が蜂の陣立てを話すのも仔細しさいなからう。それでまず蜂の陣立ていかんと見てみると、四つ目垣の外側に縦列を形かたちづくつた一隊がある。これは主人を戦闘線内に誘致する職務を帯びた者と見える。「降参しねえか」「しねえしねえ」「駄目だ駄目だ」「出てこねえ」「落ちねえかな」「落ちねえはずはねえ」「吠えて見ろ」「わんわん」「わんわん」「わんわんわんわん」これから先は縦隊総がかりとなつ

て呐喊とつかんの声を揚げる。縦隊を少し右へ離れて運動場の方面には砲隊が形勝の地を占めて陣地を布しいている。臥竜窟がりようくつに面して一人の将官が搗粉木すりこぎの大きな奴を持って控ひかえる。これと相對して五六間の間隔をとつてまた一人立つ、搗粉木のあとにまた一人、これは臥竜窟に顔をむけて突つ立っている。かくのごとく一直線にならんで向い合っているのが砲手である。ある人の説によるとこれはベースボールの練習であつて、決して戦闘準備ではないそうだ。吾輩はベースボールの何物たるを解せぬ文盲漢もんもうかんである。しかし聞くところによればこれは米国から輸入された遊戲で、今日中学程度こんにち以上の学校に行わるる運動のうちでもつとも流行するものだそうだ。米国は突飛とつびな事ばかり考え出す国柄であるから、砲隊と間違えてもしかるべき、近所迷惑の遊戲を日本人に教うべくだけそれだけ親切であつたかも知れない。ま

た米国人はこれをもつて真に一種の運動遊戲と心得ているのだ
ろう。しかし純粹の遊戲でもかように四隣を驚かすに足る能力
を有している以上は使いようで砲撃の用には充分立つ。吾輩の
眼をもつて觀察したところでは、彼等はこの運動術を利用して
砲火の功を収めんと企てつつあるとしか思われない。物は云い
ようでどうでもなるものだ。慈善の名を借りて詐偽さぎを働らき、
インスピレーションと号して逆上をうれしが^{もと}る者がある以上は
ベースボールなる遊戲の下に戦争をなさ^{もと}んとも限らない。或る
人の説明は世間一般のベースボールの事であろう。今吾輩が記
述するベースボールはこの特別の場合に限らるるベースボール
即ち攻城的砲術である。^{すなわ}これからダムダム弾を発射する方法を
紹介する。直線に布しかれたる砲列の中の一人が、ダムダム弾を
右の手に握つて播粉木の所有者に抛ほうりつける。ダムダム弾は何

で製造したか局外者には分らない。堅い丸い石の団子のようなものを御鄭寧ごていねいに皮でくるんで縫い合せたものである。前申ぜんす通りこの弾丸が砲手の一人の手中を離れて、風を切つて飛んで行く、向うに立つた一人が例の搗粉木をやつと振り上げて、これを敲たたき返す。たまには敲たたき損そこなつた弾丸が流れてしまう事もあるが、大概はポカンと大きな音を立てて弾はね返る。その勢は非常に猛烈なものである。神経性胃弱なる主人の頭を潰つぶすくらいは容易に出来る。砲手はこれだけで事足るのだが、その周囲附近には弥次馬兼援兵が雲霞うんかのごとく付き添うている。ポカーンと搗粉木が団子に中あたるや否やわー、ぱちぱちぱちと、わめく、手を拍うつ、やれやれと云う。中あたつたろうと云う。これでも利きかねえかと云う。恐れ入らねえかと云う。降参かと云う。これだけならまだしもであるが、敲たたき返された弾丸は三度に一度必ず

臥竜窟邸内へころがり込む。これがころがり込まなければ攻撃の目的は達せられなのである。ダムダム弾は近來諸所で製造するが随分高価なものであるから、いかに戦争でもそう充分な供給を仰ぐ訳に行かん。大抵一隊の砲手に一つもしくは二つの割である。ポンと鳴る度にこの貴重な弾丸を消費する訳には行かん。そこで彼等はたま拾ひろいと称する一部隊を設けて落弾おちだまを拾ってくる。落ち場所がよければ拾うのに骨も折れないが、草原とか人の邸内へ飛び込むとそう容易たやすくは戻つて来ない。だから平生ならなるべく労力を避けるため、拾い易やすい所へ打ち落すはずであるが、この際は反対に出る。目的が遊戯にあるのではない、戦争に存するのだから、わざとダムダム弾を主人の邸内に降らせる。邸内に降らせる以上は、邸内へ這入はいつて拾わなければならん。邸内に這入るもつとも簡便な方法は四つ目垣を越えるに

ある。四つ目垣のうちで騒動すれば主人が怒り出さなければならん。しからずんば兜かぶとを脱いで降参しなければならん。苦心のあまり頭がだんだん禿かぶげて来なければならん。

今しも敵軍から打ち出した一弾は、照準しょうじゅん誤あやまず、四つ目

垣を通り越して桐きりの下葉を振り落して、第二の城壁すなわ即ち竹垣に

命中した。随分大きな音である。ニュートンの運動律第一に曰いわ

くもし他の力を加うるにあらざれば、一度ひとたび動き出したる物体

は均一の速度をもつて直線に動くものとす。もしこの律のみに

よつて物体の運動が支配せらるるならば主人の頭はこの時にイ

スキラスと運命を同じくしたであろう。幸さいわいにしてニュートンは

第一則を定むると同時に第二則も製造してくれたので主人の頭

は危うきうちに一命を取りとめた。運動の第二則に曰く運動の

変化は、加えられたる力に比例す、しかしてその力の働く直線の

方向において起るものとす。これは何の事だか少しくわかり兼ねるが、かのダムダム弾が竹垣を突き通して、障子しょうじを裂き破つて主人の頭を破壊しなかつたところをもつて見ると、ニュートンの御蔭おかげに相違ない。しばらくすると案のごとく敵は邸内に入り込んで来たものと覺しく、「ここか」「もつと左の方か」などと棒でもつて笹ささの葉を敲き廻る音がする。すべて敵が主人の邸内へ乗り込んでダムダム弾を拾う場合には必ず特別な大きな声を出す。こつそり這入つて、こつそり拾つては肝心かんじんの目的が達せられん。ダムダム弾は貴重かも知れないが、主人にからかうのはダムダム弾以上に大事である。この時のごときは遠くから弾の所在地は判然している。竹垣に中あたつた音も知っている。中つた場所も分っている、しかしてその落ちた地面も心得ている。だからおとなしくして拾えば、いくらでもおとなしく拾え

る。ライブニッツの定義によると空間は出来得べき同在現象の秩序である。いろはにほへとはいつでも同じ順にあらわれてくる。柳の下には必ず鰯いさながいる。蝙蝠こうもりに夕月はつきものである。垣根にボールは不似合かも知れぬ。しかし毎日毎日ボールを人の邸内に抛ほうり込む者の眼に映ずる空間はたしかにこの排列に慣なれている。一眼ひとめ見ればすぐ分る訳だ。それをかくのごとく騒さわぎ立てるのは必竟ひつきようずるに主人に戦争を挑いどむ策略である。

こうなつてはいかに消極的な主人といえども応戦しなければならぬ。さつき座敷のうちから倫理の講義をきいてにやにやしていた主人は奮然として立ち上がった。猛然として馳かけ出した。驀然ばくぜんとして敵の一人を生捕いけとった。主人にしては大出来である。大出来には相違ないが、見ると十四五の小供である。髯ひげの生はえている主人の敵として少し不似合だ。けれども主人はこれで

沢山だと思つたのだろう。詫^わび入るのを無理に引つ張つて椽側^{えんがわ}の前まで連れて来た。ここにちよつと敵の策略について一言^{いちげん}する必要がある、敵は主人が昨日^{きのう}の権幕^{けんまく}を見てこの様子では今日も必ず自身で出馬するに相違ないと察した。その時万一逃げ損じて大僧^{おおぞう}がつらまつては事面倒になる。ここは一年生か二年生くらいな小供を玉拾いにやつて危険を避けるに越した事はない。よし主人が小供をつらまえて愚図^{ぐずぐず}愚図^{りくつ}理窟^こを捏ね廻したつて、落雲館の名誉には関係しない、こんなものを大人気^{おとなげ}もなく相手にする主人の恥辱^{ちじよく}になるばかりだ。敵の考はこうであつた。これが普通の人間の考で至極^{しごく}もつともなところである。ただ敵は相手が普通の人間でないと云う事を勘定のうちに入れるのを忘れたばかりである。主人にこれくらいの常識があれば昨日だつて飛び出しはしない。逆上は普通の人間を、普通の人間の程度

以上に釣るし上げて、常識のあるものに、非常識を与える者である。女だの、小供だの、車引きだの、馬子だのと、そんな見境みさかいのあるうちは、まだ逆上を以て人に誇るに足らん。主人のごとく相手にならぬ中学一年生を生捕いけどつて戦争の人質とするほどの見でなくては逆上家の仲間入りは出来ないのである。可哀かわいそうなのは捕虜である。単に上級生の命令によつて玉拾いなるぞうひよう雑兵の役を勤めたるところ、運まわるく非常識の敵将、逆上の天才に追い詰められて、垣越える間まもあらばこそ、庭前に引き据すえられた。こうなると敵軍は安閑と味方の恥辱を見ている訳に行かない。我も我もと四つ目垣を乗りこして木戸口から庭中に乱れ入る。その数は約一ダースばかり、ずらりと主人の前に並んだ。大抵は上衣うわぎもちよつ着きもつけておらん。白シャツの腕をまめんくつて、腕組をしたのがある。綿めんネルの洗いざらしを申し訳に背

中だけへ乗せているのがある。そうかと思うと白の帆木綿ほもめんに黒い縁ふちをとつて胸の真中に花文字を、同じ色に縫いつけた洒落者しやれものもある。いずれも一騎当千の猛将と見えて、丹波たんばの国は笹山から昨夜着し立てでござると云わぬばかりに、黒く逞たくましく筋肉が発達している。中学などへ入れて學問をさせるのは惜しいものだ。漁師りようしか船頭にしたら定めし国家のためになるだろうと思われくらいである。彼等は申し合せたごとく、素足に股引ももひきを高くまくつて、近火の手伝にでも行きそうな風体ふうていに見える。彼等は主人の前にならんだぎり黙然もくねんとして一言も発しない。主人も口を開ひらかない。しばらくの間双方共睨にらめくらをしているなかにちよつと殺氣がある。

「貴様等はぬすつ、とうか」と主人は尋問した。大氣だいきえん燄である。奥歯で齧かみ潰つぶした癰癰玉かんしやくだまが炎となつて鼻の穴から抜けるので、小

鼻が、いちじるしく怒^{いか}つて見える。越^え後^{ちご}獅子^{じし}の鼻は人間が怒^{おこ}つた時の恰好^{かつこう}を形^{かた}どつて作^{つく}つたものである。それでなくてはあんなに恐^{おそ}しく出来るものではない。

「いえ泥棒ではありません。落雲館の生徒です」

「うそをつけ。落雲館の生徒が無断で人の庭宅に侵入する奴があるか」

「しかしこの通りちゃんと学校の徽章^{きしょう}のついている帽子^{かぶ}を被^{かぶ}つています」

「にせものだろう。落雲館の生徒ならなぜむやみに侵入した」

「ボールが飛び込んだものですから」

「なぜボールを飛び込ました」

「つい飛び込んだんです」

「怪^けしからん奴だ」

「以後注意しますから、今度だけ許して下さい」

「どこの何者かわからん奴が垣を越えて邸内に闖入ちんにゆうするのを、

そう容易たやすく許されると思うか」

「それでも落雲館の生徒に違いないんですから」

「落雲館の生徒なら何年生だ」

「三年生です」

「きつとそうか」

「ええ」

主人は奥の方を顧かえりみながら、おいこらこらと云う。

埼玉生れの御三おさんが襖ふすまをあけて、へえと顔を出す。

「落雲館へ行って誰か連れてこい」

「誰を連れて参ります」

「誰でもいいから連れてこい」

おもむき

下女は「へえ」と答えが、あまり庭前の光景が妙なのと、使の趣が判然しないのと、さつきからの事件の発展が馬鹿馬鹿しいので、立ちもせず、坐りもせずにやにや笑っている。主人はこれでも大戦争をしているつもりである。逆上の敏腕を大に振っているつもりである。しかるところ自分の召し使たる当然こつちの肩を持つべきものが、真面目な態度をもつて事に臨まのみか、用を言いつけるのを聞きながらにやにや笑っている。まます逆上せざるを得ない。

「誰でも構わんから呼んで来いと云うのに、わからんか。校長でも幹事でも教頭でも……」

「あの校長さんを……」下女は校長と云う言葉だけしか知らないのである。

「校長でも、幹事でも教頭でもと云っているのにわからんか」

「誰もおりませんでしたら小使でもよろしゅうございますか」

「馬鹿を云え。小使などに何が分かるものか」

ここに至つて下女もやむを得んと心得たものか、「へえ」と云つて出て行つた。使の主意はやはり飲み込めのである。小使でも引張つて来はせんかと心配していると、あに計らんや例の倫理の先生が表門から乗り込んで来た。平然と座に就くを待ち受けた主人は直ちに談判にとりかかる。

「ただ今邸内にこの者共が乱入致して……」と忠臣蔵のような古風な言葉を使ったが「本当に御校おんこうの生徒でしようか」と少々皮肉に語尾を切つた。

倫理の先生は別段驚いた様子もなく、平気で庭前ひとみにならんでいる勇士を一通り見廻わした上、もとのごとく瞳を主人の方にかえして、下しものごとく答えた。

「さようみんな学校の生徒であります。こんな事のないように始終訓戒を加えておきますが……どうも困ったもので……なぜ君等は垣などを乗り越すのか」

さすがに生徒は生徒である、倫理の先生に向つては一言いちごんもないと見えて何とも云うものはない。おとなしく庭の隅にかたまつて羊の群むれが雪に逢つたように控ひかえている。

「丸たまが這入はいるのも仕方がないでしょう。こうして学校の隣りに住んでゐる以上は、時々はボールも飛んで来ましょう。しかし……あまり乱暴ですからな。仮令たとひ垣を乗り越えるにしても知れないように、そつと拾つて行くなら、まだ勘弁のしようもあります……」

「ごもつともで、よく注意は致しますが何分多人数たにんずの事で……よくこれから注意をせんといかんぜ。もしボールが飛んだら表

から廻つて、御断りをして取らなければいかん。いいか。――
広い学校の事ですからどうも世話ばかりやけて仕方がないです。
で運動は教育上必要なものでありますから、どうもこれを禁ず
る訳には参りかねるので。これを許すといひ御迷惑になるよう
な事が出来ませんが、これは是非御容赦を願いたいと思います。
その代り向後こうごはきつと表門から廻つて御断りを致した上で取ら
せますから」

「いや、そう事が分かれればよろしいです。球たまはいくら御投げに
なつても差支さしつかえはないです。表からきてちよつと断わつて下さ
れば構いません。ではこの生徒はあなたに御引き渡し申します
からお連れ帰りを願います。いやわざわざ御呼び立て申して恐
縮です」と主人は例によつて例のごとく竜頭蛇尾りゅうとうだびの挨拶をする。
倫理の先生は丹波の笹山を連れて表門から落雲館へ引き上げる。

吾輩のいわゆる大事件はこれで一とまず落着を告げた。何のそれが大事件かと笑うなら、笑うがいい。そんな人には大事件でないまでだ。吾輩は主人の大事件を写したので、そんな人の大事件を記したのではない。尻が切れて強弩の末勢などと悪口するものがあるなら、これが主人の特色である事を記憶して貰いたい。主人が滑稽文の材料になるのもまたこの特色に存する事を記憶して貰いたい。十四五の小供を相手にするのは馬鹿だと云うなら吾輩も馬鹿に相違ないと同意する。だから大町桂月は主人をつらまえて未だ稚氣を免がれずと云うている。

吾輩はすでに小事件を叙し了り、今また大事件を述べ了ったから、これより大事件の後に起る余瀾を描き出だして、全篇の結びを付けるつもりである。すべて吾輩のかく事は、口から出任せのいい加減と思う読者もあるかも知れないが決してそんな軽率

な猫ではない。一字一句の裏に宇宙の一大哲理を包含するは無論の事、その一字一句が層々連続すると首尾相応じ前後相照らして、瑣談織話さだんせんわと思つてうつかりと読んでいたものが忽然豹変して容易ならざる法語となるんだから、決して寝ころんだり、足を出して五行ごとに一度に読むのだなどと云う無礼を演じてはいけない。柳宗元りゅうそうげんは韓退之かんたいしの文を読むごとに薔薇しょうびの水で手を清めたと云うくらいだから、吾輩の文に対してもせめて自腹じばらで雑誌を買つて来て、友人の御余りを借りて間に合わすと云う不始末だけはない事に致したい。これから述べるのは、吾輩みづか自ら余瀾と号するのだけれど、余瀾ならどうせつまらんに極きまつてゐる、読まんでもよからうなどと思うと飛んだ後悔をする。是非しまいまで精読しなくてはいかん。

大事件のあつた翌日、吾輩はちよつと散歩がしたくなつたか

ら表へ出た。すると向う横町へ曲がろうと云う角で金田の旦那と鈴木とうの藤さんとうがしきりに立ちながら話をしている。金田君は車うちで自宅へ帰るところ、鈴木君は金田君の留守を訪問して引き返す途中で兩人ふたりがばったりと出逢ったのである。近来は金田の邸内も珍らしくなくなつたから、滅多めつたにあちらの方角へは足が向かなかつたが、こう御目に懸つて見ると、何となく御懐おなつかしい。鈴木にも久々ひさびさだから余所よそながら拝顔の栄を得ておこう。こゝう決心してのそのそ御両君の佇立ちよりつしておらるる傍そば近く歩み寄つて見ると、自然両君の談話が耳に入る。これは吾輩の罪ではない。先方が話しているのがわるいのだ。金田君は探偵さえ付けて主人の動静を窺うかがうくらいの程度の良心を有している男だから、吾輩が偶然君の談話を拝聴したつて怒おこらるる氣遣きづかいはあるまい。もし怒られたら君は公平と云う意味を御承知ないのである。

とにかく吾輩は両君の談話を聞いたのである。聞きたくて聴いたのではない。聞きたくもないのに談話の方で吾輩の耳の中へ飛び込んで来たのである。

「只今御宅へ伺いましたところで、ちょうどよい所で御目にかかりました」と藤^{とう}さんは鄭^{てい}寧^{ねい}に頭をびよこつかせる。

「うむ、そうかえ。実はこないだから、君にちよつと逢いたいと思つていたがね。それはよかつた」

「へえ、それは好都合でございました。何かご用で」

「いや何、大した事でもないのさ。どうでもいいんだが、君でないと出来ない事なんだ」

「私に出来る事なら何でもやりましょう。どんな事で」

「ええ、そう……」と考えている。

「何なら、御都合のとき出直して伺いましょう。いつが宜^{よろ}しゆ

う、ございますか」

「なあに、そんな大した事じゃ無いのさ。——それじゃせつかくだから頼もうか」

「どうか御遠慮なく……」

「あの変人ね。そら君の旧友さ。苦沙弥とか何とか云うじゃないか」

「ええ苦沙弥がどうしましたか」

「いえ、どうもせんがね。あの事件以来胸糞むなくそがわるくつてね」

「ごもつともで、全く苦沙弥は剛慢ですから……少しは自分の社会上の地位を考えているといいのですけれども、まるで一人天下ですから」

「そこさ。金に頭はさげん、実業家なんぞ——とか何とか、いろいろ小生意気な事を云うから、そんなら実業家の腕前を見せ

てやろう、と思つてね。こないだから大分弱^{だいぶ}らしているんだが、やっぱり頑張^{がんば}っているんだ。どうも剛情な奴だ。驚ろいたよ」

「どうも損得と云う觀念の乏^{とぼ}しい奴ですから無暗^{むやみ}に瘦我慢を張るんでしよう。昔からああ云う癖のある男で、つまり自分の損になる事に気が付かないんですから度^どし難^{がた}いです」

「あははほんとに度^どし難^{がた}い。いろいろ手を易^かえ品^かを易^かえてやつて見るんだがね。とうとうしまいに学校の生徒にやらした」

「そいつは妙案ですな。利目^{ききめ}がございましたか」

「これにやあ、奴も大分困^{だいぶ}つたようだ。もう遠からず落城するに極^{きま}っている」

「そりや結構です。いくら威張つても多勢^{たぜい}に無勢^{ぶぜい}ですからな」

「そうさ、一人じゃあ仕方がねえ。それで大分弱^{だいぶ}つたようだが、まあどんな様子か君に行つて見て来てもらおうと云うのさ」

「はあ、そうですね。なに訳はありません。すぐ行つて見ましよう。容子は帰りがけに御報知を致す事にして。面白いでしょう、あの頑固なのが意氣銷沈しているところは、きつと見物ですよ」
「ああ、それじゃ帰りに御寄り、待つてゐるから」

「それでは御免蒙ります」

おや今度もまた魂胆だ、なるほど実業家の勢力はえらいものだ、石炭の燃殻のような主人を逆上させるのも、苦悶の結果主人の頭が蠅滑りの難所となるのも、その頭がイスキラスと同様の運命に陥るのも皆実業家の勢力である。地球が地軸を廻転するのは何の作用かわからないが、世の中を動かすものはたしかに金である。この金の功力を心得て、この金の威光を自由に發揮するものは実業家諸君をおいてほかに一人もない。太陽が無事に東から出て、無事に西へ入るのも全く実業家の御蔭である。今ま

ではわからずやの窮措大きゆうそだいの家に養なわれて実業家の御利益ごりやくを知らなかったのは、我ながら不覚である。それにしても冥頑不靈めいがんふれいの主人も今度は少し悟らずばなるまい。それでも冥頑不靈で押し通す了見だと危あぶない。主人のもつとも貴重する命があぶない。彼は鈴木君に逢つてどんな挨拶をするのか知らん。その模様で彼の悟り具合も自おのずから分明ぶんみょうになる。愚図愚図してはおられん、猫だつて主人の事だから大に心配になる。早々鈴木君をすり抜けて御先へ帰宅する。

鈴木君はあいかわらず調子のいい男である。今日は金田の事などはおくびにも出さない、しきりに当り障りさわのない世間話を面白そうにしている。

「君少し顔色が悪いようだぜ、どうかしやせんか」

「別にどこも何ともないさ」

「でも蒼いぜ、用心せんといかんよ。時候がわるいからね。よるは安眠が出来るかね」

「うん」

「何か心配でもありやしないか、僕に出来る事なら何でもするぜ。遠慮なく云い給え」

「心配って、何を？」

「いえ、なければいいが、もしあればと云う事さ。心配が一番毒だからな。世の中は笑って面白く暮すのが得だよ。どうも君はあまり陰気過ぎるようだ」

「笑うのも毒だからな。無暗に笑うと死ぬ事があるぜ」

「冗談云っちゃいけない。笑う門には福来るさ」

「昔し希臘にクリシッパスと云う哲学者があつたが、君は知る

まい」

「知らない。それがどうしたのさ」

「その男が笑い過ぎて死んだんだ」

「へえー、そいつは不思議だね、しかしそりや昔の事だから……」

「昔しだつて今だつて変りがあるものか。驢馬ろばが銀の井どんぶりから

無花果いちじゅくを食うのを見て、おかしくつてたまらなくつて無暗むやみに笑つ

たんだ。ところがどうしても笑いがとまらない。とうとう笑い

死にに死んだんだあね」

「はははしかしそんなに留とめ度どもなく笑わなくつてもいいさ。

少し笑う——適宜てきぎに、——そうするといいい心持ちだ」

鈴木君がしきりに主人の動静を研究していると、表の門ががらがらとあく、客来きやくらいかと思うとそうでない。

「ちよつとボールが這入はいりましたから、取らして下さい」

下女は台所から「はい」と答える。書生は裏手へ廻る。鈴木

は妙な顔をして何だいと聞く。

「裏の書生がボールを庭へ投げ込んだんだ」

「裏の書生？　裏に書生がいるのかい」

「落雲館と云う学校さ」

「ああそうか、学校か。随分騒々しいだろうね」

「騒々しいの何のつて。碌々勉強も出来やしない。僕が文部大

臣なら早速閉鎖を命じてやる」

「ハハハ大分怒ったね。何か癩に障る事でも有るのかい」

「あるのないのつて、朝から晩まで癩に障り続けた」

「そんなに癩に障るなら越せばいいじゃないか」

「誰が越すもんか、失敬千万な」

「僕に怒ったって仕方がない。なあに小供だあね、打ちやつておけばいいさ」

「君はよからうが僕はよくない。昨日は教師を呼びつけて談判してやった」

「それは面白かったね。恐れ入ったろう」

「うん」

この時また門口かどぐちをあけて「ちよつとボールが這入はいりましたから取らして下さい」と云う声がする。

「いや大分だいぶん来るじゃないか、またボールだぜ君」

「うん、表から来るように契約したんだ」

「なるほどそれであんなにくるんだね。そうーか、分った」

「何が分ったんだい」

「なに、ボールを取りにくる原因がさ」

「今日はこれで十六返目だ」

「君うるさくないか。来ないようにしたらいいじゃないか」

「来ないようにするつたつて、来るから仕方がないさ」

「仕方がないと云えばそれまでだが、そう頑固がんこにしていなくて
もよからう。人間は角かどがあると世の中を転ころがって行くのが骨が
折れて損だよ。丸いものはごろごろどこへでも苦くなしに行ける
が四角なものはころがるに骨が折れるばかりじゃない、転がる
たびに角がすれて痛いものだ。どうせ自分一人の世の中じゃな
し、そう自分の思うように人はならないさ。まあ何だね。どう
しても金のあるものに、たてを突いちや損だね。ただ神経ばか
り痛めて、からだは悪くなる、人は褒ほめてくれず。向うは平気な
ものさ。坐すわつて人を使いさえすればすむんだから。多勢たぜいに無勢ぶぜい
どうせ、叶かなわないのは知れているさ。頑固がんこもいいが、立て通す
つもりでいるうちに、自分の勉強に障さったり、毎日の業務に煩はん
を及ぼしたり、とどのつまりが骨折り損の草臥くたびれ儲もうけだからね」

「ご免なさい。今ちよつとボールが飛びましたから、裏口へ廻つて、取つてもいいですか」

「そらまた来たぜ」と鈴木君は笑っている。

「失敬な」と主人は真赤まっかになっている。

鈴木君はもう大概訪問の意を果したと思つたから、それじゃ失敬きちと来たまゑと帰つて行く。

入れ代つてやつて来たのが甘木先生あまきである。逆上家が自分で

逆上家だと名乗る者は昔むかしから例が少ない、これは少々変だな

と覺さとつた時は逆上さうげの峠はもう越している。主人の逆上は昨日きのうの

大事件の際に最高度に達したのであるが、談判も竜頭蛇尾たる

に係かかわらず、どうかこうか始末がついたのでその晩書齋でつくづ

く考えて見ると少し変だと気が付いた。もつとも落雲館が変な

のか、自分が変なのか疑うたがいを存する余地は充分あるが、何しろ変

に違ない。いくら中学校の隣に居を構えたつて、かくのごとく
年が年中肝癰かんしやくを起しつづけはちと変だと気が付いた。変であつ
て見ればどうかしなければならん。どうするつたつて仕方がな
い、やはり医者いしやの薬でも飲んで肝癰かんしやくの源みなもとに賄賂わいろでも使つて慰撫いぶ
するよりほかに道はない。こう覚さとつたから平生かかりつけの甘
木先生を迎えて診察を受けて見ようと云う量見りやうけんを起したのであ
る。賢か愚か、その辺は別問題として、とにかく自分の逆上に
気が付いただけは殊勝しゆしようの志、奇特きどくの心得と云わなければならん。
甘木先生は例のごとくにここにこと落ちつき払つて、「どうです」
と云う。医者は大抵どうですと云うに極きまつてる。吾輩は「ど
うです」と云わない医者はどうも信用をおく氣にならん。

「先生どうも駄目ですよ」

「え、何そんな事があるものですか」

「一体医者の薬は利きくものでしょうか」

甘木先生も驚ろいたが、そこは温厚ちようじやの長者だから、別段激し

た様子もなく、

「利かん事もないです」と穏おだやかに答えた。

「私わたしの胃病なんか、いくら薬を飲んでも同じ事ですぜ」

「決して、そんな事はない」

「ないですか。少しは善くなりますかな」と自分の胃の事を人に聞いて見る。

「そう急なおには、癒なりません、だんだん利ききます。今でももとより大分だいぶんよくなっています」

「そうですかな」

「やはり肝かん癪しやくが起りますか」

「起りますとも、夢にまで肝かん癪しやくを起します」

「運動でも、少しなさつたらいいでしょう」

「運動すると、なお肝癰が起ります」

甘木先生もあきれ返つたものと見えて、

「どれ一つ拝見しましょうか」と診察を始める。診察を終るのを待ちかねた主人は、突然大きな声を出して、

「先生、せんだつて催眠術のかいてある本を読んだら、催眠術を応用して手癖のわるいんだの、いろいろな病氣だのを直す事が出来ると書いてあつたですが、本当でしょうか」と聞く。

「ええ、そう云う療法もあります」

「今でもやるんですか」

「ええ」

「催眠術をかけるのはむずかしいものでしょうか」

「なに訳はありません、私^{わたし}などもよく懸けます」

「先生もやるんですか」

「ええ、一つやって見ましようか。誰でも懸からなければならん理窟りくつのものです。あなたさえ善よければ懸けて見ましよう」

「そいつは面白い、一つ懸けて下さい。私わたしもとうから懸かつて見たいと思つたんです。しかし懸かりきりで眼が覚さめないと困るな」

「なに大丈夫です。それじゃやりましよう」

相談はたちまち一決して、主人はいよいよ催眠術を懸けらるる事となつた。吾輩は今までこんな事を見た事がないから心ひそかに喜んでその結果を座敷の隅から拝見する。先生はまず、主人の眼からかけ始めた。その方法を見ていると、両眼りようがんの上瞼うわまぶたを上から下へと撫なでて、主人がすでに眼を眠ねむっているにも係からず、しきりに同じ方向へくせを付けたがつている。しばらくす

ると先生は主人に向つて「こうやつて、まぶた瞼を撫でていると、だんだん眼が重たくなるでしょう」と聞いた。主人は「なるほど重くなりますな」と答える。先生はなと同じように撫でおろし、撫でおろし「だんだん重くなりますよ、ようござんすか」と云う。主人もその気になったものか、何とも云わずに黙っている。同じ摩擦法はまた三四分繰り返される。最後に甘木先生は「さあもう開あきませんぜ」と云われた。可かわい哀そう想に主人の眼はとうとう潰つぶれてしまった。「もう開かんですか」「ええもうあきません」主人は默然もくねんとして目を眠っている。吾輩は主人がもう盲目めくらになったものと思ひ込んでしまった。しばらくして先生は「あけるなら開いて御覧なさい。とうていあけないから」と云われる。「そうですか」と云うが早いか主人は普通の通り両眼りょうがんを開いていた。主人はにやにや笑いながら「懸かりませんな」と云

うと甘木先生も同じく笑いながら「ええ、懸りません」と云う。催眠術はついに不成功に^{おわ}了る。甘木先生も帰る。

その次に来たのが——主人のうちへこのくらい客の来た事はない。交際の少ない主人の家にしてはまるで嘘^{うそ}のようである。しかし来たに相違ない。しかも珍客が来た。吾輩がこの珍客の事を一言でも^{いちごん}記述するのは単に珍客であるがためではない。吾輩は先刻申す通り大事件の余瀾^{よらん}を描き^{えが}つつある。しかしてこの珍客はこの余瀾を描く^{あた}に方^{あた}つて逸すべからざる材料である。何と云う名前か知らん、ただ顔の長い上に、山羊^{やぎ}のような髯^{ひげ}を生^はやしている四十前後の男と云えばよからう。迷亭の美学者たるに對して、吾輩はこの男を哲学者と呼ぶつもりである。なぜ哲学者と云うと、何も迷亭のように自分で振り散らすからではない、ただ主人と對話する時の様子を拝見しているといかにも哲学者

らしく思われるからである。これも昔むかしの同窓と見えて兩人共
応対振りは至極しごく打ち解けた有様だ。

「うん迷亭か、あれは池に浮いてる金魚きんぎょ魅よふのようにふわふわし
ているね。せんだつて友人を連れて一面識もない華族の門前を
通行した時、ちよつと寄つて茶でも飲んで行こうと云つて引つ
張り込んだそうだが随分呑氣のんきだね」

「それでどうしたい」

「どうしたか聞いても見なかつたが、——そうさ、まあ天稟てんびんの奇
人だろう、その代り考も何もない全く金魚魅だ。鈴木か、——
あれがくるのかい、へえー、あれは理窟りくつはわからんが世間的に
は利口な男だ。金時計は下げられるたちだ。しかし奥行きがな
いから落ちつきがなくつて駄目だ。円滑えんかつ円滑と云うが、円滑の
意味も何もわかりはせんよ。迷亭が金魚魅ならあれは藁わらで括くくつ

た蒟蒻だこんにやくね。ただわるく滑なめらかでぶるぶる振ふるえているばかりだ」
主人はこの奇警きけいな比喩ひゆを聞いて、大おおに感心したものらしく、
久し振りでハハハと笑った。

「そんなら君は何だい」

「僕か、そうさな僕なんかは——まあ自然じねん薯じよくらいなところだ
ろう。長くなつて泥の中に埋うまつてるさ」

「君は始終泰然として気楽なようだが、羨うらやましいな」

「なに普通の人間と同じようにしているばかりさ。別に羨まれ
るに足るほどの事もない。ただありがたい事に人を羨む気も起
らんから、それだけいいね」

「会計は近頃豊かかね」

「なに同じ事さ。足るや足らずさ。しかし食うているから大丈
夫。驚かないよ」

「僕は不愉快で、肝癰かんしやくが起つてたまらん。どつちを向いても不平ばかりだ」

「不平もいいさ。不平が起つたら起してしまえば当分はいい心持ちになれる。人間はいろいろだから、そう自分のように人にもなれと勧めたつて、なれるものではない。箸はしは人と同じように持たんと飯が食いにくい、自分の麵麵パンは自分の勝手に切るのが一番都合がいいようだ。上手じようずな仕立屋で着物をこしらえれば、着たてから、からだに合つたのを持つてくるが、下手へたの裁縫屋したてやに誂あつらえたら当分は我慢しないと駄目さ。しかし世の中はうまくしたもので、着ているうちには洋服の方で、こちらの骨格に合わしてくるから。今の世に合うように上等な両親が手際てぎわよく生んでくれれば、それが幸福なのさ。しかし出来損できそなつたら世の中に合わないで我慢するか、または世の中で合わせるまで

辛抱するよりほかに道はなからう」

「しかし僕なんか、いつまで立っても合いそうにないぜ、心細いね」

「あまり合わない背広せびろを無理にきると綻ほころびる。喧嘩けんかをしたり、自殺をしたり騒動が起るんだね。しかし君なんかただ面白くないと云うだけで自殺は無論しやせず、喧嘩だつてやつた事はあ
るまい。まあまあいい方だよ」

「ところが毎日喧嘩ばかりしているさ。相手が出て来なくつても怒つておれば喧嘩だろう」

「なるほど一人喧嘩ひとりげんかだ。面白いや、いくらでもやるがいい」

「それがいやになった」

「そんならよすさ」

「君の前だが自分の心がそんなに自由になるものじゃない」

「まあ全体何がそんなに不平なんだい」

主人はここにおいて落雲館事件を始めとして、今戸焼いまどやきの狸たぬきから、ぴん助、きしやごそのほかあらゆる不平を挙げて滔々とうとうと哲学者の前に述べ立てた。哲学者先生はだまって聞いていたが、ようやく口を開ひらいて、かように主人に説き出した。

「ぴん助やきしやごが何を云ったって知らん顔をしておればいいじゃないか。どうせ下らんのだから。中学の生徒なんか構う価値があるものか。なに妨害になる。だって談判しても、喧嘩をしてもその妨害はとれんのじゃないか。僕はそう云う点になると西洋人より昔むかしの日本人の方がよほどえらいと思う。西洋人のやり方は積極的積極的と云って近頃大分流行だいぶんはやるが、あれは大なる欠点を持っているよ。第一積極的と云ったって際限がない話しだ。いつまで積極的にやり通したって、満足と云う域とか

完全と云う境さかいにいけるものじゃない。向に檜むこうがあるだろう。あれが目障りめざわになるから取り払う。とその向うの下宿屋がまた邪魔になる。下宿屋を退去させると、その次の家が癩しかに触る。どこまで行っても際限のない話しき。西洋人の遣り口やぐちはみんなこれさ。ナポレオンでも、アレキサンダーでも勝って満足したものは一人もないんだよ。人が氣に喰わん、喧嘩をする、先方が閉口ほうていしない、法庭へ訴える、法庭で勝つ、それで落着と思うのは間違さ。心の落着は死ぬまで焦あせつたつて片付く事があるものか。寡人政治かじんせいじがいかなから、代議政体だいぎせいたいにする。代議政体がいかなから、また何かにしたくなる。川が生意氣だつて橋をかける、山が氣に喰わんと云つて隧道トンネルを堀る。交通が面倒だと云つて鉄道を布しく。それで永久満足が出来るものじゃない。さればと云つて人間だものどこまで積極的に我意を通す事が出来るものか。

西洋の文明は積極的、進取的かも知れないがつまり不満足で一生をくらす人の作った文明さ。日本の文明は自分以外の状態を変化させて満足を求めるのじゃない。西洋と大に違おおいうところは、根本的に周囲の境遇は動かすべからざるものと云う一大仮定の下もとに発達しているのだ。親子の關係が面白くないと云つて歐洲人のようにこの關係を改良して落ちつきをとろうとするのではない。親子の關係は在來のままであらうてい動かす事が出来んものとして、その關係の下もとに安心を求むる手段を講ずるにある。夫婦君臣の間柄もその通り、武士町人の區別もその通り、自然その物を觀みるのもその通り。——山があつて隣国へ行かれないと云う工夫をする。山を崩すと云う考を起す代りに隣国へ行かんでも困らないと云う工夫をする。山を越さなくとも満足だと云う心持ちを養成するのだ。それだから君見給え。禪ぜん家でも儒じゅ家でもきつと

根本的にこの問題をつらまえる。いくら自分がえらくても世の中はとうてい意のごとくなるものではない、落日らくじつを回めぐらす事も、加茂川を逆さかに流す事も出来ない。ただ出来るものは自分の心だけだからね。心さえ自由にする修業をしたら、落雲館の生徒がいくら騒いでも平気なものではないか、今戸焼の狸でも構わんでおられそうなものだ。ぴん助なんか愚ぐな事を云つたらこの馬鹿野郎とすましておれば仔細しさいなからう。何でも昔しの坊主は人に斬きり付けられた時電光影裏でんこうえいりに春風しゅんぷうを斬るとか、何とか洒落しやれた事を云つたと云う話だぜ。心の修業がつんで消極の極に達するとこんな靈活な作用が出来るのじゃないかしらん。僕なんか、そんなむずかしい事は分らないが、とにかく西洋人風の積極主義ばかりがいいと思うのは少々誤まつているようだ。現に君がいくら積極主義に働いたって、生徒が君をひやかしにくるのを

どうする事も出来ないじゃないか。君の権力であの学校を閉鎖するか、または先方が警察に訴えるだけのわるい事をやれば格別だが、さもない以上は、どんなに積極的に出たつたて勝てつこないよ。もし積極的に出るとすれば金の問題になる。多勢に無勢の問題になる。換言すると君が金持に頭を下げなければならんと云う事になる。衆を恃む小供に恐れ入らなければならんと云う事になる。君のような貧乏人でしかもたつた一人で積極的に喧嘩をしようと云うのがそもそも君の不平の種さ。どうだ分つたかい」

主人は分つたとも、分らないとも言わずに聞いていた。珍客が帰つたあとで書齋へ這入つて書物も読まずに何か考えていた。

鈴木とうの藤さんは金と衆とに従えと主人に教えたのである。甘木先生は催眠術で神経を沈めると助言したのである。最後の珍

客は消極的の修養で安心を得ると説法したのである。主人がいずれを^{えら}択ぶかは主人の随意である。ただこのままでは通されな^きいに極まつている。

九

主人は痘痕^{あばたづら}面である。御維新前^{ごいつしんまえ}はあ^ごば^いた^つも大分流行^{だいぶんはや}つたものだそうだが日英同盟の今日^{こんにち}から見ると、こんな顔はいささか時候^{おく}後れの感がある。あ^あば^あた^あの衰退は人口の増殖と反比例して近き将来には全くその迹^{あと}を絶つに至るだろうとは医学上の統計から精密に割り出されたる結論であつて、吾輩のごとき猫といえども毫^{ごう}も疑^ぎを挟^さむ余地のないほどの名論である。現今地球上にあ^あば^あた^あつ面^{つら}を有して生息している人間は何人くらいあるか知ら

んが、吾輩が交際の区域内において打算して見ると、猫には一匹もない。人間にはたつた一人ある。しかしてその一人が即ち主人である。はなはだ気の毒である。

吾輩は主人の顔を見る度に考える。まあ何の因果でこんな妙な顔をして臆面なく二十世紀の空気を呼吸しているのだろう。昔なら少しは幅も利いたか知らんが、あらゆるあばたが二の腕へ立ち退きを命ぜられた昨今、依然として鼻の頭や頬の上へ陣取つて頑として動かないのは自慢にならんのみか、かえつてあばたの体面に関する訳だ。出来る事なら今のうち取り払つたらよさそうなものだ。あばた、自身だつて心細いに違いない。それとも党勢不振の際、誓つて落日を中天に挽回せずんばやまずと云う意気込みで、あんなに横風に顔一面を占領しているのか知らん。そうするとこのあばたは決して輕蔑の意をもつて視るべ

きものでない。とうとう滔々たる流俗に抗するばんこふま万古不磨の穴の集合体であつて、大におおい吾人の尊敬に値するでこぼこ凸凹と云つてよろ宜しい。ただきたならしいのが欠点である。

主人の小供のときに牛込の山伏町にあさだそうはく浅田宗伯と云う漢法の名医があつたが、この老人が病家を見舞うときには必ずかごに乗つてそりそりと参られたそうだ。ところが宗伯老が亡くなられてその養子の代になつたら、かごがたちまち人力車にかっこんとう変じた。だから養子が死んでそのまた養子が跡をつ続いだら葛根湯がアンチピリンに化けるかも知れない。かごに乗つて東京市中を練りあるくのは宗伯老の当時ですらあまり見つともいいものでは無かつた。こんな真似をして澄すましていたものは旧弊な亡者もうじゃと、汽車へ積み込まれる豚と、宗伯老とのみであつた。

主人のあばたもその振わざる事においては宗伯老のかごと一

般で、はたから見ると気の毒なくらいだが、漢法医にも劣らざる頑固^{がんこ}な主人は依然として孤城落日のあばた^{あばた}を天下に曝露^{ばくろ}しつつ毎日登校してリードルを教えている。

かくのごとき前世紀の紀念を満面に刻^{こく}して教壇に立つ彼は、その生徒に対して授業以外に大^{だい}なる訓戒を垂れつつあるに相違ない。彼は「猿が手を持つ」を反覆するよりも「あばた^{あばた}の顔面に及ぼす影響」と云う大問題を造作^{ぞうさ}もなく解釈して、不言の間^{ふげん}にその答案を生徒に与えつつある。もし主人のような人間が教師として存在しなくなつた暁^{あかつき}には彼等生徒はこの問題を研究するため^{ため}に図書館もしくは博物館へ馳けつけて、吾人がミイラによつて埃及人^{エジプトじん}を髣髴^{ほうふつ}すると同程度の労力を費^{つひ}やさねばならぬ。この点^{てん}から見ると主人の痘痕^{あばた}も冥々^{めいめい}の裡^{うち}に妙な功德^{くどく}を施こしている。

もつとも主人はこの功德を施こすために顔一面に疱瘡を種え付けたのではない。それでも実は種え疱瘡をしたのである。不幸にして腕に種えたと思つたのが、いつの間にか顔へ伝染していたのである。その頃は小供の事で今のよう^{いろけ}に色気もなにもなかったものだから、痒い^{かゆ}痒いと云いながら無暗^{むやみ}に顔中引き搔いたのだそう^かだ。ちょうど噴火山が破裂してラヴァが顔の上を流れたようなもので、親が生んでくれた顔を台なしにしてしまった。主人は折々細君に向つて疱瘡をせぬうちは玉のような男子であつたと云つてゐる。浅草の観音様^{かんのんさま}で西洋人が振り反つて見た^{かえ}くらい奇麗だつたなどと自慢する事さえある。なるほどそうかも知れない。ただ誰も保証人のいないのが残念である。

いくら功德になつても訓戒になつても、きたない者はやつぱりきたないものだから、物心^{ものしころ}がついて以来と云うもの主人は大^{おお}

にあ、ば、た、について心配し出して、あらゆる手段を尽してこの醜態を揉み潰つぶそうとした。ところが宗伯老のかごと違って、いやになったからと云うてそう急に打ちやられるものではない。今だに歴然と残っている。この歴然が多少氣にかかると思えて、主人は往来をあるく度毎にあ、ば、た、面を勘定してあるくそうだ。今日何人あ、ば、た、に出逢つて、その主は男か女か、その場所は小川町の勧工場かんこうばであるか、上野の公園であるか、ことごとく彼の日記につけ込んである。彼はあ、ば、た、に関する智識においては決して誰にも譲るまいと確信している。せんだつてある洋行帰りの友人が来た折などは、「君西洋人にはあ、ば、た、があるかな」と聞いたくらいだ。するとその友人が「そうだな」と首を曲げながらよほど考えたあとで「まあ滅多めったにないね」と云つたら、主人は「滅多になくつても、少しはあるかい」と念を入れて聞き返

えした。友人は氣のない顔で「あつても乞食か立ん坊だよ。教育のある人にはないようだ」と答えたら、主人は「そうかなあ、日本とは少し違うね」と云った。

哲学者の意見によつて落雲館との喧嘩を思い留つた主人はその後書齋に立て籠つてしきりに何か考えている。彼の忠告を容れて静坐の裡に靈活なる精神を消極的に修養するつもりかも知れないが、元來が氣の小さな人間の癖に、ああ陰氣な懷手ばかりしては碌な結果の出ようはずがない。それより英書でも質に入れて芸者から喇叭節でも習つた方が遙かにましだとまでは氣が付いたが、あんな偏屈な男はとうてい猫の忠告などを聴く氣遣はないから、まあ勝手にさせたらよかろうと五六日は近寄りもせずに暮した。

今日はあれからちようど七日目である。禪家などでは一七日

を限つて大悟して見せるなどと凄じい勢で結跏する連中もある事だから、うちの主人もどうかなつたろう、死ぬか生きるか何とか片付いたろうと、のそのそ椽側から書斎の入口まで来て室内の動静を偵察に及んだ。

書斎は南向きの六畳で、日当りのいい所に大きな机が据えてある。ただ大きな机ではわかるまい。長さ六尺、幅三尺八寸高さこれにかなうと云う大きな机である。無論出来合のものではない。近所の建具屋に談判して寝台兼机として製造せしめたる稀代の品物である。何の故にこんな大きな机を新調して、また何の故にその上に寝て見ようなどという了見を起したもののか、本人に聞いて見ない事だから頓とわからない。ほんの一時の出来心で、かかる難物を担ぎ込んだのかも知れず、あるいはことによると一種の精神病者において吾人がしばしば見出すごとく、

縁もゆかりもない二個の観念を連想して、机と寝台を勝手に結び付けたものかも知れない。とにかく奇抜な考えである。ただ奇抜だけで役に立たないのが欠点である。吾輩はかつて主人がこの机の上へ昼寝をして寝返りをする拍子ひょうしに椽側へ転げ落ちたのを見た事がある。それ以来この机は決して寝台に転用されないようである。

机の前には薄っぺらなメリンスの座布団ざぶとんがあつて、煙草たばこの火で焼けた穴が三つほどかたまつてゐる。中から見える綿は薄黒い。この座布団の上に後ろ向きにかしこまつてゐるのが主人である。鼠色によごれた兵児帯へこおびをこま結びにむすんだ左右がだらりと足の裏へ垂れかかっている。この帯へじやれ付いて、いきなり頭を張られたのはこないだの事である。滅多めったに寄り付くべき帯ではない。

まだ考えているのか下手へたの考と云う喩たとえもあるのにと後ろうしろから覗のぞき込んで見ると、机の上でいやにぴかぴかと光ったものがある。吾輩は思わず、続け様に二三度瞬まばたきをしたが、こいつは変だとまぶしいのを我慢してじつと光るものを見つめてやった。するとこの光りは机の上で動いている鏡から出るものだと言う事が分った。しかし主人は何のために書斎で鏡などを振り舞わしているのであろう。鏡と云えば風呂場にあるに極きまっている。現に吾輩は今朝風呂場でこの鏡を見たのだ。この鏡ととくに云うのは主人のうちにはこれよりほかに鏡はないからである。主人が毎朝顔を洗ったあとで髪を分けるときにもこの鏡を用いる。

——主人のような男が髪を分けるのかと聞く人もあるかも知れぬが、實際彼は他ほかの事に無精ぶしようなるだけそれだけ頭ていねいを丁寧にする。吾輩が当家に参つてから今に至るまで主人はいかなる炎熱の日

といえども五分刈に刈り込んだ事はない。必ず二寸くらいの長さにして、それを御大^{ごたい}そうに左の方で分けるのみか、右の端^{はじ}をちよつと跳ね返して澄^{すま}している。これも精神病の徴候かも知れない。こんな氣取つた分け方はこの机と一向調和しないと思うが、あえて他人に害を及ぼすほどの事でないから、誰も何とも云わない。本人も得意である。分け方のハイカラなのはさておいて、なぜあんなに髪を長くするのかと思つたら実はこう云う訳^{わけ}である。彼のあばたは単に彼の顔を侵蝕^{しんしょく}せるのみならず、とくの昔^{むか}に脳天まで食い込んでいるのだそうだ。だからもし普通の人のように五分刈や三分刈にすると、短かい毛の根本から何十となくあばたがあらわれてくる。いくら撫^なでても、さすつてもぽつぽつがとれない。枯野に螢^{ほたる}を放つたようなもので風流かも知れないが、細君の御意^{ごい}に入らんのは勿論^{もちろん}の事である。髪さえ

長くしておけば露見しないですむところを、好んで自己の非をあば曝くにも当らぬ訳だ。なろう事なら顔まで毛を生やして、こっちのあばないさいたも内済にしたいくらいなところだから、ただで生える毛をぜに銭を出して刈り込ませて、私は頭蓋骨ずがいこつの上まで天然痘てんねんとうにやられましたよと吹聴ふいちようする必要はあるまい。——これが主人の髪を長くする理由で、髪を長くするのが、彼の髪をわけける原因で、その原因が鏡を見る訳で、その鏡が風呂場にある所以ゆえんで、しこうしてその鏡が一つしかないと云う事実である。

風呂場にあるべき鏡が、しかも一つしかない鏡が書齋に来ていりこんびようる以上は鏡が離魂病かかに罹ったのかまたは主人が風呂場から持つて来たに相違ない。持つて来たとすれば何のために持つて来たのだらう。あるいは例の消極的修養に必要な道具かも知れない。昔むかし或る学者が何とかいう智識とを訪うたら、和尚おしょう両肌を抜いで

軋^{かわら}を磨^ましておられた。何をこしらえなさると質問をしたら、なにさ今鏡を造ろうと思うて一生懸命にやっておるところじやと答えた。そこで学者は驚ろいて、なんぼ名僧でも軋を磨して鏡とする事は出来まいと云うたら、和尚からからと笑いながらそうか、それじややめよ、いくら書物を読んでも道はわからぬのもそんなものじやろと罵^{のの}つたと云うから、主人もそんな事を聞き囁^{かじ}つて風呂場から鏡でも持つて来て、したり顔に振り廻しているのかも知れない。大分物騒^{だいぶん}になつて来たなと、そつと窺^{うかが}つている。

かくとも知らぬ主人ははなはだ熱心なる容子^{ようす}をもつて一張来^{いつちようらい}の鏡を見つめている。元来鏡というものは気味の悪いものである。深夜^{ろうそく}蠟燭を立てて、広い部屋のなかで一人鏡を覗^{のぞ}き込むにはよほどの勇氣がいるそうだ。吾輩などは始めて当家の令嬢か

ら鏡を顔の前へ押し付けられた時に、はつと仰天^{ぎやうてん}して屋敷のまわりを三度馳^かけ回ったくらいである。いかに白昼といえども、主人のようにかく一生懸命に見つめている以上は自分で自分の顔が怖^{こわ}くなるに相違ない。ただ見てさえあまり気味のいい顔じゃない。ややあつて主人は「なるほどきたない顔だ」と独り言^{ひとごと}を云った。自己の醜を自白するのはなかなか見上げたものだ。様子から云うとたしかに氣違^{しよさ}の所作だが言うことは真理である。これがもう一步進むと、己^{おの}れの醜惡な事が怖^{こわ}くなる。人間は吾身が怖ろしい悪党であると云う事実を徹骨徹髓に感じた者でない。と苦勞人とは云えない。苦勞人でないとどうてい解脱^{げだつ}は出来ない。主人もここまで来たらついでに「おお怖^{こわ}い」とでも云いそうなものであるがなかなか云わない。「なるほどきたない顔だ」と云ったあとで、何を考え出したか、ぷうつと頬^ほつぺたを膨^{ふく}

らました。そうしてふくれた頬つぺたを平手^{ひらて}で二三度叩^{たた}いて見る。何のまじないだか分らない。この時吾輩は何だかこの顔に似たものがあるらしいと云う感じがした。よくよく考えて見るとそれは御三^{おさん}の顔である。ついでだから御三の顔をちよつと紹介するが、それはそれはふくれたものである。この間さる人が穴守^{あなもり}稲荷^{いなぎ}から河豚^{ふぐ}の提灯^{ちようちん}をみやげに持つて来てくれたが、ちよ^{あなもりいなぎ}うどあの河豚^{ふぐ}提灯^{ちようちん}のようにふくれてゐる。あまりふくれ方が残酷なので眼は両方共紛失^{ふんしつ}している。もつとも河豚のふくれるのは万遍なく真丸^{まんまる}にふくれるのだが、お三とくると、元来の骨格が多角性であつて、その骨格通りにふくれ上がるのだから、まるで水気^{すいき}になやんでゐる六角時計のようなものだ。御三が聞いたらさぞ怒^{おこ}るだろうから、御三はこのくらいにしてまた主人の方に帰るが、かくのごとくあらん限りの空気をもつて頬^ほつぺた

をふくらませたる彼は前申す通り手のひらで頬^{ほっ}ぺたを叩きながら「このくらい皮膚が緊張するとあばたも眼につかん」とまたひとり語^{ごと}をいった。

こんどは顔を横に向けて半面に光線を受けた所を鏡にうつして見る。「こうして見ると大変目立つ。やっぱりまともに日の向いてる方が平^{たい}に見える。奇体な物だなあ」と大分感心した様子であつた。それから右の手をうんと伸^のびして、出来るだけ鏡を遠距離に持つて行つて静かに熟視している。「このくらい離れるとそんなでもない。やはり近過ぎるといかん。——顔ばかりじゃない何でもそんなものだ」と悟つたようなことを云う。次に鏡を急に横にした。そうして鼻の根を中心にして眼や額や眉^{まゆ}を一度にこの中心に向つてくしゃくしゃとあつめた。見るからに不愉快な容貌^{ようぼう}が出来上つたと思つたら「いやこれは駄目だ」と当人

も気がついたと見えて早々やめてしまった。「なぜこんなに毒々しい顔だろう」と少々不審の体で鏡を眼を去る三寸ばかりの所へ引き寄せる。右の人指しゆびで小鼻を撫でて、撫でた指の頭を机の上にあつた吸取り紙の上へ、うんと押しつける。吸い取られた鼻の膏が丸るく紙の上へ浮き出した。いろいろな芸をやるものだ。それから主人は鼻の膏を塗抹した指頭を転じてぐいと右眼の下瞼を裏返して、俗に云うべっかんこうを見事にやつて退けた。あばたを研究しているのか、鏡と睨め競をしているのかその辺は少々不明である。気の多い主人の事だから見ているうちにいろいろになると見える。それどころではない。もし善意をもって蒟蒻問答的に解釈してやれば主人は見性自覚の方便としてかように鏡を相手にいろいろな仕草を演じているのかも知れない。すべて人間の研究と云うものは自己を研究する

のである。天地と云い山川さんせんと云い日月じつげつと云い星辰せいしんと云うも皆自己いみようの異名に過ぎぬ。自己を措おいて他に研究すべき事項は誰人たれびとにも見出し得ぬ訳だ。もし人間が自己以外に飛び出す事が出来たら、飛び出す途端に自己はなくなってしまう。しかも自己の研究は自己以外に誰もしてくれる者はない。いくら仕てやりたくても、貰いたくても、出来ない相談である。それだから古来の豪傑はみんな自力で豪傑になった。人のお蔭で自己が分るくらいなら、自分の代理に牛肉を喰わして、堅いか柔かいか判断の出来る訳だ。朝あしたに法を聴き、夕ゆうべに道を聴き、梧前灯下ごぜんとうかに書巻を手にするのは皆この自証じしようを挑撥するの方便ちようほうの具ぐに過ぎぬ。人の説く法のうち、他の弁ずる道のうち、乃至ないしは五車ごしゃにあまる蠹紙堆裏としたいりに自己が存在する所以ゆえんがない。あれば自己の幽霊である。もつともある場合において幽霊は無霊むれいより優るかも知れない。影を

追えば本体に逢着する時がないとも限らぬ。多くの影は大抵本体を離れぬものだ。この意味で主人が鏡をひねくつてゐるならだいぶ大分話せる男だ。エピックタスなどを鵜呑うのみにして学者ぶるよりも遙はるかにましだと思う。

鏡は己惚うぬぼれの醸造器であるごとく、同時に自慢の消毒器である。

もし浮華虚栄の念をもつてこれに對する時はこれほど愚物を煽動せんどうする道具はない。昔から増上慢ぞうじょうまんをもつて己おのれを害し他そのを戕こうた事蹟じせきの三分の二はたしかに鏡の所作しよさくである。仏国革命の当時物好きな御医者さんが改良首きり器械を発明して飛んだ罪をつくつたように、始めて鏡をこしらえた人も定めし寢覚ねざめのわるい事だろう。しかし自分に愛想あいその尽きかけた時、自我の萎縮した折は鏡を見るほど葉になる事はない。妍醜けんしゆうりようぜん瞭然だ。こんな顔でよくまあ人で候そうろうと反そりかえつて今日こんにちまで暮らされたものだとい氣が

つくにきまつている。そこへ気がついた時が人間の生涯しょうがい中もつともありがたい期節である。自分で自分の馬鹿を承知じかくせいばかしているほど尊たつとく見える事はない。この自覚性馬鹿の前にはあらゆるえらがり、屋がことごとく頭を下げて恐れ入らねばならぬ。当人は昂然こうぜんとして吾を輕侮けいぶ嘲笑ちようしやうしているつもりでも、こちらから見るとその昂然たるところが恐れ入って頭を下げている事になる。主人は鏡を見て己おのれの愚を悟るほどの賢者ではあるまい。しかし吾が顔に印せられる痘痕とうこんの銘めいくらいは公平に読み得る男である。顔の醜いのを自認するのは心の賤いやしきを会得えとくする楷梯かいていにもなろう。たのもししい男だ。これも哲學者からやり込められた結果かも知れぬ。

かように考えながらなお様子をうかがっていると、それとも知らぬ主人は思う存分あ、かんべ、えをしたあとで「大分だいぶん充血して

いるようだ。やつぱり慢性結膜炎だ」と言いながら、人さし指の横つらでぐいぐい充血した瞼をこすり始めた。大方痒いのだらうけれども、たださえあんなに赤くなっているものを、こう擦こすつてはたまるまい。遠からぬうちに塩鯛しおだいの眼玉のごとく腐爛ふらんするにきまつてる。やがて眼を開ひらいて鏡に向つたところを見ると、果せるかなどんよりとして北国の冬空のように曇つていた。もつとも平常ふだんからあまり晴れ晴れしい眼ではない。誇大な形容詞を用いると混沌こんとんとして黒眼と白眼が剖判ほうはんしないくらい漠然ぼくぜんとしてゐる。彼の精神が朦朧もうろうとして不得要領底ていに一貫してゐるごとく、彼の眼も曖々然あいあいぜん昧々然まいまいぜんとして長えに眼窩がんかの奥に漂ただようてゐる。これは胎毒たいどくのためだとも云うし、あるいは疱瘡ほうそうの余波だとも解釈されて、小さい時分はだいぶ柳の虫や赤蛙の厄介になつた事もあるそうだが、せつかく母親の丹精も、あるにその甲斐かいあ

らばこそ、今日^{こんにち}まで生れた当時のままでぼんやりしている。吾輩ひそかに思うにこの状態は決して胎毒や疱瘡のためではない。彼の眼玉がかように晦^{かい}渋^{じゅう}溷^{こん}濁^{だく}の悲境に彷徨^{ほうこう}しているのは、とりも直さず彼の頭脳が不透^{ふとう}不明^{ふめい}の実質から構成されていて、その作用が暗^{あん}澹^{たん}溟^{めい}濛^{もう}の極に達しているから、自然とこれが形体の上にあらわれて、知らぬ母親にいらぬ心配を掛けたんだろう。煙たつて火あるを知り、まなこ濁^ぐつて愚^ぐなるを証す。して見ると彼の眼は彼の心の象徴で、彼の心は天保^{てんぽう}銭^{せん}のごとく穴があいているから、彼の眼もまた天保銭と同じく、大きな割合に通用しないに違^{ちが}ない。

今度は髻^{ひげ}をねじり始めた。元来から行儀のよくない髻でみんな思い思いの姿勢をとつて生^はえている。いくら個人主義が流行^はやる世の中だつて、こう町々^{まちまち}に我儘^{わがまま}を尽くされては持主の迷惑は

さこそと思いやられる、主人もここに鑑かんみるところあつて近頃はおおい大に訓練を与えて、出来る限り系統的に按排あんばいするように尽力している。その熱心の効果こうかは空むなしからずして昨今ようやく歩調が少しとこのうようになつて来た。今までは髯はが生えておつたのであるが、この頃は髯を生やしているのだと自慢するくらいになつた。熱心は成効の度に応じて鼓舞こぶせられるものであるから、吾が髯の前途有望なりと見てとつて主人は朝な夕な、手がすいておれば必ず髯ひげに向つて鞭撻べんたつを加える。彼のアムビシヨンは独逸ドイツ皇帝陛下のように、向上の念の熾さかんな髯を蓄たくわえるにある。それだから毛孔けあなが横向であらうとも、下向であらうとも聊ちやうどか頓着なく十把じつぱひ一とからげに握にぎつては、上の方へ引つ張り上げる。髯もさぞかし難儀であらう、所有主たる主人すら時々は痛い事もある。がそこが訓練である。否いやでも応でもさかには扱こき上げる。

門外漢から見ると気の知れない道楽のようであるが、当局者だけは至当の事と心得ている。教育者がいたずらに生徒の本性を撓ためて、僕の手柄を見給えと誇るようなもので毫ごうも非難すべき理由はない。

主人が満腔まんこうの熱誠をもつて髯を調練していると、台所から多角性の御三おさんが郵便が参りましたと、例のごとく赤い手をぬつと書斎の中へ出した。右手に髯をつかみ、左手に鏡を持った主人は、そのまま入口の方を振りかえる。八の字の尾に逆さか立ちだを命じたような髯を見るや否や御多角おたかくはいきなり台所へ引き戻して、ハハハハと御釜おかまの蓋ふたへ身をもたして笑った。主人は平気なものである。悠々ゆうゆうと鏡をおろして郵便を取り上げた。第一信は活版ずりで何だかいかめしい文字が並べてある。読んで見ると
拝啓はいきよ愈御多祥いよいよ奉賀候回顧すれば日露の戦役は連戦連勝

の勢いきおいに乗じて平和克復を告げ吾忠勇義烈なる将士は今や過半万歳声裡りに凱歌を奏し国民の歡喜何ものか之これに若しかん曩さきに宣戰の大詔煥發たいしやうかんぱつせらるるや義勇公に奉じたる将士は久しく万里の異境に在りて克よく寒暑の苦難を忍び一意戰鬪に従事し命めいを国家に捧げたるの至誠は永く銘して忘るべからざる所なり而して軍隊の凱旋は本月を以て殆ほとんど終了を告げんとす依つて本会は来る二十五日を期し本区内一千有余の出征將校下士卒に対し本区民一般を代表し以て一大凱旋祝賀会を開催し兼て軍人遺族を慰藉いしやせんが為め熱誠これ之を迎え聊感謝の微衷びちゆうを表し度就たくつては各位の御協賛を仰ぎ此盛典を挙さ行するの幸さいわいを得ば本会の面目不これにすぎず過之と存候間何卒御賛成そろ奮ふるつて義捐ぎえんあらんことを只管希望の至に堪たえず候敬具そろ

とあつて差し出し人は華族様である。主人は黙読一過のちの後直ち

に封の中へ巻き納めて知らん顔をしている。義捐などは恐らくしそうにない。せんだつて東北凶作の義捐金を二円とか三円とか出してから、逢う人毎に義捐をとられた、とられたと吹聴ふいちようしているくらいである。義捐とある以上は差し出すもので、とられるものでないには極きまつてゐる。泥棒にあつたのではあるまいし、とられたとは不穩当である。しかるにも関せず、盜難にでも罹かかつたかのごとくに思つてゐるらしい主人がいかに軍隊の歡迎だと云つて、いかに華族様の勧誘だと云つて、強談ごうだんで持ちかけたらいざ知らず、活版の手紙くらいで金錢を出すような人間とは思われない。主人から云えば軍隊を歡迎する前にまず自分を歡迎したのである。自分を歡迎した後あとなら大抵のものは歡迎しそうであるが、自分が朝夕ちようせきに差し支つかえる間は、歡迎は華族様に任まかせておく了見らしい。主人は第二信を取り上げたが「や、

これも活版だ」と云つた。

時下秋冷こうの候そうに候処貴家益々御隆盛の段 奉賀がしあげたてまつり上候その陳れ

ば本校儀も御承知の通り一昨々年以来二三野心家のために

妨げられ一時其極に達そうらえどもし候得共是れ皆不肖針作ふしようしんざくが足らざる

所に起因すと存じ深く自ら警むみづかる所あり臥薪嘗胆其がしんしやうたんの苦辛

の結果漸ようやく茲ここに独力以て我が理想に適するだけの校舎新

築費を得るの途を講じ候其そのは別義にも御座なく別冊裁縫秘

術綱要と命名せる書冊出版の義に御座候本書は不肖針作しんざくが

多年苦心研究せる工芸上の原理原則に法のつとり真に肉を裂き

血を絞るの思を為なして著述せるものに御座候因そのつて本書を

普あまねく一般の家庭へ製本実費に些少さしやうの利潤を附づいて御購求ごこうきゆうを

願しどい一面斯道發達の一助となすと同時に又一面には僅少きんしやうの

利潤を蓄積して校舎建築費に当つる心算つもりに御座候依そのつては

近頃何共恐縮の至りに存じ候えども本校建築費中へ御寄附
被成下と御思召し茲に呈供仕候秘術綱要一部を御購求の上
御侍女の方へなりとも御分与被成下候て御賛同の意を御表
章被成下度伏して懇願仕候勿々敬具

大日本女子裁縫最高等大学院

校長 縫田針作 九拝

とある。主人はこの鄭重なる書面を、冷淡に丸めてぽんと屑籠
の中へ抛り込んだ。せつかくの針作君の九拝も臥薪嘗胆も何の
役にも立たなかつたのは氣の毒である。第三信にかかる。第三
信はすこぶる風変りの光彩を放っている。状袋が紅白のだんだ
らで、飴ん棒の看板のごとくはなやかなる真中に珍野苦沙弥先
生虎皮下と八分体で肉太に認めてある。中からお太さんが出る

かどうだか受け合わないが表^{おもて}だけはすこぶる立派なものだ。

若^もし我を以て天地を律すれば一口^{ひとくち}にして西江^{せいこう}の水を吸いつ

くすべく、若^もし天地を以て我を律すれば我は則^{すなわ}ち陌上^{はくじよう}の塵の

み。すべからく道^いえ、天地と我と什^{いんも}麼の交渉がある。……

始めて海鼠^{なまこ}を食い出^{いだ}せる人は其胆力に於て敬すべく、始め

て河豚^{ふぐ}を喫^{きつ}せる漢は其勇氣に於^{おい}て重んずべし。海鼠^{くら}を食え

るものは親鸞^{しんらん}の再来にして、河豚^{ふぐ}を喫^{きつ}せるものは日蓮^{にちれん}の分

身なり。苦沙弥先生の如きに至^{ただかんびよう}つては只干瓢^{すみそ}の酢味噌を知

るのみ。干瓢^{くら}の酢味噌を食^{くら}つて天下の士たるものは、われ

未^{いま}だ之^{これ}を見ず。……

親友^{なんじ}も汝^{なんじ}を売るべし。父母^{ふぼ}も汝^{わたくし}に私あるべし。愛人も汝を

棄^{ふつき}つべし。富貴^{もと}は固より頼みがたかるべし。爵禄^{しやくろく}は一朝^{いちちよう}に

して失^{かひ}うべし。汝の頭中に秘蔵する學問には黴^はが生えるべ

し。汝何を恃たのまんとするか。天地の裡うちに何をたのまんとするか。神？ 神は人間の苦しまぎれに捏造でつぞうせる土偶どぐうのみ。人間のせつな糞ぐその凝結せる臭骸のみ。恃たのむまじきを恃たのんで安しと云う。咄々とつとつ、醉漢みだ漫りに胡乱うろんの言辞を弄して、蹣跚まんさんとして墓に向う。油尽きて灯とう自おのずから滅す。業尽きて何物をか遺のこす。苦沙弥先生よろしく御茶でも上げれ。……

人を人と思わざれば畏おそる所なし。人を人と思わざるものが、吾を吾と思わざる世いきどおを憤いるは如何いかに。権貴榮達の士は人を人と思わざるに於て得たるが如し。只他ただひとの吾を吾と思わぬ時に於て怫然ふっぜんとして色を作なす。任意に色を作し来れ。馬鹿野郎。……

吾の人を人と思うとき、他ひとの吾を吾と思わぬ時、不平家は発作的ほっさてきに天降あまくだる。此発作的活動を名づけて革命という。革

命は不平家の所為にあらず。権貴榮達の士が好んで産する所なり。朝鮮に人參多し先生何が故に服せざる。

在巢鴨

天道公平

再拝

針作君は九拝であつたが、この男は単に再拝だけである。寄附金の依頼でないだけに七拝ほど横風おうふうに構えている。寄附金の依頼ではないがその代りすこぶる分りにくいものだ。どこの雑誌へ出しても没書になる価値は充分あるのだから、頭腦の不透明をもつて鳴る主人は必ず寸断ずたずたに引き裂いてしまふだろうと思おもひのほか、打ち返し打ち返し読み直している。こんな手紙に意味があると考えて、あくまでその意味を究めようという決心かも知れない。およそ天地の間かんにわからんものは沢山あるが意味をつけてつかないものは一つもない。どんなむずかしい文章

でも解釈しようとすれば容易に解釈の出来るものだ。人間は馬鹿であると云おうが、人間は利口であると云おうが手もなくわかる事だ。それどころではない。人間は犬であると云つても豚であるとか云つても別に苦しむほどの命題ではない。山は低いと云つても構わん、宇宙は狭いと云つても差し支^{つか}えはない。烏が白くて小町が醜婦で苦沙弥先生が君子でも通らん事はない。だからこんな無意味な手紙でも何とか蚊^かとか理窟^{りくつ}さえつけられとうとも意味はとれる。ことに主人のように知らぬ英語を無理矢理にこじ附けて説明し通して来た男はなおさら意味をつけたがるのである。天氣の悪るいになぜグード・モーニングですかと生徒に問われて七日間^{なぬかかん}考えたり、コロンバスと云う名は日本語で何と云いますかと聞かれて三日三晩かかつて答を工夫するくらいな男には、干瓢^{かんぴょう}の酢味噌^{すみそ}が天下の土であろうと、朝鮮の

仁参にんじんを食つて革命を起そうと随意な意味は随処わに湧き出る訳である。主人はしばらくしてグード・モーニング流にこの難解ごんくな言句を呑み込んだと見えて「なかなか意味深長だ。何でもよほど哲理を研究した人に違ちがない。天晴あつぱれな見識けんしだ」と大變賞賛した。この一言いちごんでも主人の愚ぐなところはよく分るが、翻ひるがえつて考えて見るといささかもつともな点もある。主人は何に寄らずわからぬものをありがたがる癖を有している。これはあながち主人に限つた事でもなからう。分らぬところには馬鹿に出来ないものが潜伏して、測るべからざる辺には何だか氣高けだかい心持ふいちようが起るものだ。それだから俗人はわからぬ事をわかつたように吹聴するにも係かかわらず、学者はわかつた事をわからぬように講釈する。大学の講義でもわからん事を喋しゃべ舌る人は評判がよくつてわかる事を説明する者は人望がないのでもよく知れる。主人がこの手紙に敬服

したのも意義が明瞭であるからではない。その主旨が那邊なへんに存するかほとんど捕え難いからである。急に海鼠なまこが出て来たり、せつな糞ぐそが出てくるからである。だから主人がこの文章を尊敬する唯一の理由は、道家で道德經を尊敬し、儒家で易經を尊敬し、禪家ぜんけで臨濟錄りんざいろくを尊敬すると一般で全く分らんからである。但しただ全然分らんでは気がすまんから勝手な註釈をつけてわかつた顔だけはする。わからんものをわかつたつもりで尊敬するのは昔から愉快なものである。——主人は恭うやうやしく八分体の名筆を巻き納めて、これを机上に置いたまま懷手ふところをして冥想めいそうに沈んでいる。

ところへ「頼む頼む」と玄関から大きな声で案内を乞う者がある。声は迷亭のようだが、迷亭に似合わずしきりに案内を頼んでいる。主人は先から書齋のうちでその声を聞いているのだ

が懷手のまま毫も動こうとしない。取次に出るのは主人の役目でないという主義か、この主人は決して書齋から挨拶をした事がない。下女は先刻洗濯石鹼さつきせんたくシヤボンを買いに出た。細君は憚りはばかである。すると取次に出べきものは吾輩だけになる。吾輩だつて出るのはいやだ。すると客人は沓脱くつぬぎから敷台へ飛び上がつて障子を開け放つてつかつか上り込んで来た。主人も主人だが客も客だ。座敷の方へ行つたなと思うと襖ふすまを二三度あけたり閉たてたりして、今度は書齋の方へやつてくる。

「おい冗談じやうだんじゃない。何をしているんだ、御客さんだよ」

「おや君か」

「おや君かもしれないもんだ。そこにいるなら何とか云えばいいのに、まるで空家あきやのようじゃないか」

「うん、ちと考え事があるもんだから」

「考えていたって通れ、くらいは云えるだろう」

「云えん事もないさ」

「相変らず度胸がいいね」

「せんだってから精神の修養を力めて^{つと}いるんだもの」

「物好きだな。精神を修養して返事が出来なくなつた日には来客は御難だね。そんなに落ちつかれちゃ困るんだぜ。実は僕一人来たんじやないよ。大変な御客さんを連れて来たんだよ。ちよつと出て逢つてくれ給え」

「誰を連れて来たんだい」

「誰でもいいからちよつと出て逢つてくれたまえ。是非君に逢いたいと云うんだから」

「誰だい」

「誰でもいいから立ちたまえ」

主人は懐手ふところのままぬつと立ちながら「また人を担かつぐつもりだろう」と椽側えんがわへ出て何の気もつかずに客間へ這入はいり込んだ。すると六尺の床を正面に一個の老人が肅然しゆくぜんと端坐たんざして控ひかえている。主人は思わず懐から両手を出してぺたりと唐紙からかみの傍そばへ尻を片づけてしまった。これでは老人と同じく西向きであるから双方共挨拶のしようがない。昔堅氣むかしかたぎの人は礼義はやかましいものだ。「さあどうぞあれへ」と床の間の方を指して主人を促うながす。主人は両三年前までは座敷はどこへ坐つても構わんものと心得ていたのだが、その後ごある人から床の間の講釈を聞いて、あれは上段まの間の變化したもので、上使じやうしが坐わる所だと悟つて以来決して床の間へは寄りつかない男である。ことに見ず知らずの年長者が頑がんと構えているのだから上座じやうざどころではない。挨拶さえ碌ろくには出来ない。一応頭をさげて

「さあどうぞあれへ」と向うの云う通りを繰り返した。

「いやそれでは御挨拶が出来かねますから、どうぞあれへ」

「いえ、それでは……どうぞあれへ」と主人はいい加減に先方の口上を真似ている。

「どうもそう、御謙遜ごけんそんでは恐れ入る。かえって手前が痛み入る。どうか御遠慮なく、さあどうぞ」

「御謙遜では……恐れますから……どうか」主人は真赤まっかになつて口をもごもご云わせている。精神修養もあまり効果がないようである。迷亭君は襖ふすまの影から笑いながら立見をしていたが、もういい時分だと思つて、後ろうしろから主人の尻を押しやりながら「まあ出たまえ。そう唐紙からかみへくつついては僕が坐る所がない。遠慮せずに前へ出たまえ」と無理に割り込んでくる。主人はやむを得ず前の方へすり出る。

「苦沙弥君これが毎々君に噂をする静岡の伯父だよ。伯父さんこれが苦沙弥君です」

「いや始めて御目にかかります、毎度迷亭が出て御邪魔を致す
そうで、いつか参上の上御高話を拝聴致そうと存じておりまし
たところ、幸い今日は御近所こんにちを通行致したもので、御礼かたがた旁伺つ
た訳で、どうぞ御見知りおかれまして今後共宜しく」と昔し風
な口上を淀みなく述べたてる。主人は交際の狭い、無口な人間
である上に、こんな古風な爺さんじいとはほとんど出会った事がな
いのだから、最初から多少場うての気味で辟易へきえきしていたところ
へ、滔々とうとうと浴びせかけられたのだから、朝鮮仁参も飴ん棒の状
袋もすっかり忘れてしまつてただ苦しまぎれに妙な返事をする。

「私も……私も……ちよつと伺がうはずでありましたところ……
何分よろしく」と云い終つて頭を少々畳から上げて見ると老人

は未だに平伏いましているので、はつと恐縮してまた頭をぴたりと着けた。

老人は呼吸を計つて首をあげながら「私ももとはこちらに屋敷あも在つて、永らく御膝元でくらしただけですが、瓦解がかいの折にあちらへ参つてからとんと出てこんのでな。今来て見るとまるで方角も分らんくらいで、——迷亭にでも伴つれてあるいてもらわんと、とても用達ようたしも出来ません。滄桑そうそうの変へんとは申しながら、どこにゆうこく御入国以来三百年も、あの通り將軍家の……」と云いかけると迷亭先生面倒だと心得て

「伯父さん將軍家もありがたいかも知れませんが、明治の代よも結構ですぜ。昔は赤十字なんてものもなかったでしょう」

「それはない。赤十字などと称するものは全くない。ことに宮様の御顔を拝むなどと云う事は明治の御代みよでなくては出来ぬ事

だ。わしも長生きをした御蔭でこの通り今日こんにちの総会にも出席するし、宮殿下の御声もきくし、もうこれで死んでもいい」

「まあ久し振りで東京見物をするだけでも得ですよ。苦沙弥君、伯父はね。今度赤十字の総会があるのでわざわざ静岡から出て来てね、今日いっしょに上野へ出掛けただが今その帰りがけなんだよ。それだからこの通り先日僕が白木屋へ注文したフロックコートを着ているのさ」と注意する。なるほどフロックコートを着ている。フロックコートは着ているがすこしもからだに合わない。袖そでが長過ぎて、襟えりがおつ開ひらいて、背中せなかへ池が出来て、腋わきの下が釣るし上がっている。いくら不恰好ぶかつこうに作ろうと云ったつて、こうまで念を入れて形を崩くずす訳にはゆかないだろう。その上白シャツと白襟しろえりが離れ離れになって、仰あおむくと間のどぼとけから咽喉のど仏が見える。第一黒い襟飾りが襟に属しているのか、シャツに属

しているのか判然はんぜんしない。フロックはまだ我慢が出来るが白髪しらがのチョン髷まげはなはだ奇観である。評判の鉄扇てつせんはどうかと目を注つげると膝の横にちゃんと引きつけている。主人はこの時ようやく本心に立ち返って、精神修養の結果を存分に老人の服装に応用して少々驚いた。まさか迷亭の話ほどではなからうと思つていたが、逢つて見ると話以上である。もし自分のあばたが歴史的研究所の材料になるならば、この老人のチョン髷まげや鉄扇はたしかにそれ以上の価値がある。主人はどうかしてこの鉄扇の由来を聞いて見たいと思つたが、まさか、打ちつけに質問する訳には行かず、と云つて話を途切らすのも礼に欠けると思つて「だいぶ人が出ましたろう」と極めて尋常きわな問をかけた。

「いや非常な人で、それでその人が皆わしをじろじろ見るので——どうも近来は人間が物見高くなつたようだがすな。昔むかしは

あんなではなかったが」

「ええ、さよう、昔はそんなではなかったですな」と老人らしい事を云う。これはあながち主人が知^しつ高振^{たかぶ}りをした訳ではない。ただ朦朧^{もうろう}たる頭脳から好い加減に流れ出す言語と見れば差^さし支^{つか}えない。

「それにな。皆この甲割^{かぶとわ}りへ目を着けるので」

「その鉄扇は大分^{だいぶん}重いものでございましょう」

「苦沙弥君、ちよつと持つて見たまえ。なかなか重いよ。伯父さん持たして御覧なさい」

老人は重たそうに取り上げて「失礼ですが」と主人に渡す。京都の黒谷^{くろだに}で参詣^{さんけい}人^{にん}が蓮生坊^{れんしょうぼう}の太刀^{たち}を戴^{いた}くようなかたで、苦沙弥先生しばらく持つていたが「なるほど」と云つたまま老人に返却した。

「みんながこれを鉄扇鉄扇と云うが、これは甲割かぶとわりと称となえて鉄扇とはまるで別物で……」

「へえ、何にしたものでございましょう」

「兜を割るので、——敵の目がくらむ所を撃うちとつたものですが。
くすのきまさしげ楠正成時代から用いたようで……」

「伯父さん、そりや正成の甲割ですかね」

「いえ、これは誰のかわからん。しかし時代は古い。建武時代けんむじだいの作かも知れない」

「建武時代かも知れないが、寒月君は弱っていましたぜ。苦沙弥君、今日帰りにちょうどいい機会だから大学を通り抜けるついでに理科へ寄つて、物理の実験室を見せて貰つたところがね。この甲割が鉄だものだから、磁力の器械が狂つて大騒しやうぎさ」

「いや、そんなはずはない。これは建武時代の鉄で、性しやうのいい

鉄だから決してそんな虞おそれはない」

「いくら性のいい鉄だつてそうはいきませんよ。現に寒月がそう云つたから仕方がないです」

「寒月というのは、あのガラス球だまを磨すつている男かい。今の若さに気の毒な事だ。もう少し何かやる事がありそうなものだ」

「可愛想かわいそうに、あれだつて研究でさあ。あの球を磨り上げると立派な学者になれるんですからね」

「玉を磨すりあげて立派な学者になれるなら、誰にでも出来る。わしにでも出来る。ビードロやの主人にでも出来る。ああ云う事をする者を漢土かんどでは玉人きゆうじんと称したもので至つて身分の軽いものだ」と云いながら主人の方を向いて暗に賛成を求める。

「なるほど」と主人はかしこまっている。

「すべて今の世の学問は皆形けいじか而下の学でちよつと結構なようだ

が、いざとなるとすこしも役には立ちませんでな。昔はそれと違つて侍は皆命懸けいのちがの商買しょうばいだから、いざと云う時に狼狽ろうばいせぬように心の修業を致したもので、御承知でもあらつしやろうがなかなか玉を磨つたり針金を縋よつたりするような容易たやすいものではなかつたのがすよ」

「なるほど」とやはりかしこまつている。

「伯父さん心の修業と云うものは玉を磨る代りに懷手ふところをして坐り込んでるんでしよう」

「それだから困る。決してそんな造作ぞうさのないものではない。孟子もうしは求放心きゆうほうしんと云われたくらいだ。邵康節しやうかうせつは心要放しんようほうと説いた事もある。また仏家ぶつかでは中峯和尚ちゆうほうおしょうと云うのが具不退転ぐふたいてんと云う事を教えている。なかなか容易には分らん」

「とうてい分りつこありませんね。全体どうすればいいんです」

「御前は沢菴たくあんぜんじ禪師ふどうちしんみょうろくの不動智神妙録というものを讀んだ事があるかい」

「いいえ、聞いた事ありません」

「心をどこに置こうぞ。敵の身の働はたらきに心を置けば、敵の身の働に心を取らるるなり。敵の太刀たちに心を置けば、敵の太刀に心を取らるるなり。敵を切らんとするところに心を置けば、敵を切らんとするところに心を取らるるなり。わが太刀に心を置けば、我太刀に心を取らるるなり。われ切られじとすることを置けば、切られじとすることを置かかまえ。人の構に心を置けば、人の構に心を取らるるなり。とかく心の置きどころはないとある」

「よく忘れずに暗誦あんしやうしたものです。伯父さんもなかなか記憶がいい。長いじゃありませんか。苦沙弥君分ったかい」

「なるほど」と今度もなるほどですましてしまった。

「なあ、あなた、そうでござりましょう。心をどこに置こうぞ、敵の身の働に心を置けば、敵の身の働に心を取らるるなり。敵の太刀に心を置けば……」

「伯父さん苦沙弥君はそんな事は、よく心得ているんですよ。近頃は毎日書齋で精神の修養ばかりしているんですから。客があつても取次に出ないくらい心を置き去りにしているんだから大丈夫ですよ」

「や、それは御奇^{ごきどく}特な事で——御前などもちとごいっしよにやつたらよかろう」

「へへへそんな暇はありませんよ。伯父さんは自分が楽なからだだもんだから、人も遊んでると思つていらつしやるんでしよ
う」

「實際遊んでるじゃないかの」

「ところが閑中かんちゅうおのず自ぼうから忙ぼうありでね」

「そう、粗忽そこつだから修業をせんといかないと云うのよ、忙中自おのずから閑かんありと云う成句せいくはあるが、閑中自かんちゅうおのずら忙ぼうありと云うのは聞いた事がない。なあ苦沙弥さん」

「ええ、どうも聞きませんように」

「ハハハハそうなつちやあ敵かなわない。時に伯父さんどうです。久し振りで東京の鰻うなぎでも食つちやあ。竹葉ちくようでも奢おごりましょう。これから電車で行くとすぐです」

「鰻も結構だが、今日はこれからすい原はらへ行く約束があるから、わしはこれで御免ごうむを蒙こうむろう」

「ああ杉原すぎはらですか、あの爺じいさんも達者ですな」

「杉原すぎはらではない、すい原はらさ。御前はよく間違ばかり云つて困る。」

他人の姓名を取り違えるのは失礼だ。よく気をつけんといけな
い」

「だって杉原とかいてあるじゃありませんか」
すぎはら

「杉原と書いてすい原と読むのさ」
すきはら

「妙ですね」

「なに妙な事があるものか。名目読みと云つて昔からある事さ。
きゆういん 蚯蚓わみようを和名でみみずと云う。あれは目見ずの名目よみで。蝦蟇がま
の事をかいると云うのと同じ事さ」

「へえ、驚ろいたな」

「蝦蟇を打ち殺すと仰向きにかえる。あおむそれを名目読みにかいる
と云う。透垣すぎがきをすい垣がき、莖立くきたちをくく立、皆同じ事だ。杉原すいはらをす
ぎ原などと云うのは田舎いなかものの言葉さ。少し気を付けないと人
に笑われる」

「じゃ、その、すい、原へこれから行くんですか。困ったな」

「なに厭いやなら御前は行かんでもいい。わし一人で行くから」

「一人で行けますかい」

「あるいてはむずかしい。車を雇つて頂いて、ここから乗つて行こう」

主人は畏かしこまつて直ちに御三おさんを車屋へ走らせる。老人は長々と挨拶をしてチヨン鬚頭まげあたまへ山高帽をいただいて帰つて行く。迷亭はあとへ残る。

「あれが君の伯父さんか」

「あれが僕の伯父さんさ」

「なるほど」と再び座蒲団ざぶたんの上に坐つたなり懷手ふところをして考え込んでゐる。

「ハハハ豪傑だろう。僕もああ云う伯父さんを持つて仕合せな

ものさ。どこへ連れて行つてもあの通りなんだぜ。君驚ろいたろう」と迷亭君は主人を驚ろかしたつもりで大に喜んでいる。おお

「なにそんなに驚きやしない」

「あれで驚かなけりや、胆力の据すわつたもんだ」

「しかしあの伯父さんはなかなかえらいところがあるようだ。精神の修養を主張するところなぞは大に敬服おおいしていい」

「敬服していいかね。君も今に六十くらいになるとやつぱりあの伯父見たように、時候おくれになるかも知れないぜ。しつかりしてくれたまえ。時候おくれの廻り持ちなんか気が利きかないよ」

「君はしきりに時候おくれを気にするが、時と場合によると、時候おくれの方がえらいんだぜ。第一今の学問と云うものは先へ先へと行くだけで、どこまで行つたつて際限はありやしない。

とうてい満足は得られやしない。そこへ行くと東洋流の学問は消極的で大に味がある。あじわい心そのものの修業をするのだから」とせんだって哲学者から承わった通りを自説のように述べ立てる。「えらい事になつて来たぜ。何だか八木独仙君やぎどくせんのような事を云つてゐるね」

八木独仙と云う名を聞いて主人ははつと驚ろいた。実はせんだって臥竜窟がりようくつを訪問して主人を説服に及んで悠然ゆうぜんと立ち帰った哲学者と云うのが取も直さずこの八木独仙君であつて、今主人が鹿爪しかづめらしく述べ立てている議論は全くこの八木独仙君の受売なのであるから、知らんと思つた迷亭がこの先生の名を間不容髪かんふようはつの際に持ち出したのは暗に主人の一夜作りの仮鼻かりばなを挫くじいた訳になる。

「君独仙の説を聞いた事があるのかい」と主人は剣呑けんおんだから念

を推^おして見る。

「聞いたの、聞かないのつて、あの男の説ときたら、十年前学校にいた時分と今日^{こんにち}と少しも変りやしない」

「真理はそう変るものじゃないから、変らないところがたのもしいかも知れない」

「まあそんな鼻^{ひいき}負があるから独仙もあれで立ち行くだね。第一八木と云う名からして、よく出来てるよ。あの髯^{ひげ}が君全く山羊^{やぎ}だからね。そうしてあれも寄宿舎時代からあの通りの恰好^{かつこう}で生えていたんだ。名前の独仙なども振^{ふる}ったものさ。昔^{むか}し僕のところへ泊りがけに来て例の通り消極的の修養と云う議論をしてね。いつまで立つても同じ事を繰り返してやめなないから、僕が君もう寝^ねようじゃないかと云うと、先生気楽なものさ、いや僕は眠くないとすまし切つて、やつぱり消極論をやるには迷惑したね。

仕方がないから君は眠くならうけれども、僕の方は大変眠いのだから、どうか寝てくれたまえと頼むようにして寝かしたまではよかつたが——その晩鼠ねずみが出て独仙君の鼻のあたまを噛かつてね。夜なかに大騒ぎさ。先生悟つたような事を云うけれども命は依然として惜しかつたと見えて、非常に心配するのさ。鼠の毒が総身そうしんにまわると大変だ、君どうかしてくれと責めるには閉口したね。それから仕方がないから台所へ行つて紙片かみぎれへ飯粒を貼はつてごまかしてやつたあね」

「どうして」

「これは舶来こうやくの膏藥こうやくで、近来独逸ドイツの名医が發明したので、印度人などの毒蛇に噛かまれた時に用いると即効があるんだから、これさえ貼つておけば大丈夫だと云つてね」

「君はその時分からごまかす事に妙を得ていたんだね」

「……すると独仙君はああ云う好人物だから、全くだと思つて安心してぐうぐう寝てしまったのさ。あくる日起きて見ると膏藥の下から糸屑いとくずがぶらさがつて例の山羊髯やぎひげに引つかかつていたのは滑稽こっけいだつたよ」

「しかしあの時分より大分だいぶんえらくなつたようだよ」

「君近頃逢つたのかい」

「一週間ばかり前に来て、長い間話しをして行つた」

「どうりで独仙流の消極説を振り舞わすと思つた」

「実はその時大おおに感心してしまつたから、僕も大に奮発して修養をやるうと思つてるところなんだ」

「奮発は結構だがね。あんまり人の云う事を真まに受けると馬鹿を見るぜ。一体君は人の言う事を何でもかでも正直に受けるからいけない。独仙も口だけは立派なものだがね、いざとなると

御互と同じものだよ。君九年前の大地震を知ってるだろう。あの時寄宿の二階から飛び降りて怪我をしたものは独仙君だけなんだからな」

「あれには当人大分説だいぶんがあるようじゃないか」

「そうさ、当人に云わせるとすこぶるありがたいものさ。禅の機鋒きほうは峻峭しゅんしょうなもので、いわゆる石火せつかの機きとなると怖こわいくらい早く物に応ずる事が出来る。ほかのものが地震だと云って狼狽うろたえているところを自分だけは二階の窓から飛び下りたところに修業の効があらわれて嬉しいと云って、跛びっこを引きながらうれしかった。負惜みの強い男だ。一体禅ぜんとか仏ぶつとか云って騒ぎ立てる連中ほどあやしいのはないぜ」

「そうかな」と苦沙弥先生少々腰が弱くなる。

「この間来た時禅宗坊主の寝言ねごと見たような事を何か云ってつた

ろう」

「うん電光影裏でんこうえいりに春風しゅんぷうをきるとか云う句を教えて行つたよ」

「その電光さ。あれが十年前からの御箱おはこなんだからおかしいよ。

無覚むかくぜんじ禪師の電光ときたら寄宿舎中誰も知らないものはないくら

いだつた。それに先生時々せき込むと間違えて電光影裏でんこうえいりを逆さかさ

まに春風影裏に電光をきると云うから面白い。今度ためして見

たまえ。向むこうで落ちつき払つて述べたてているところを、こつち

でいろいろ反対するんだね。するとすぐ顛倒てんととうして妙な事を云う

よ」

「君のようないたずらものに逢つちや叶かなわない」

「どつちがいたずら者だか分りやしない。僕は禪坊主だの、悟つ

たのは大嫌だ。僕の近所に南蔵院なんぞういんと云う寺があるが、あすこに八

十ばかりの隠居がいる。それでこの間の白雨ゆうだちの時寺内じないへ雷らいが落

ちて隠居のいる庭先の松の木を割きいてしまった。ところが和尚おしょう泰然として平気だと云うから、よく聞き合わせて見るとから騒つんばなんだね。それじゃ泰然たる訳さ。大概そんなものさ。独仙も一人で悟つていればいいのだが、ややともすると人を誘い出すから悪い。現に独仙の御蔭で二人ばかり氣狂きがいにされているからな」

「誰が」

「誰がつて。一人は理野陶然りのとうぜんさ。独仙の御蔭で大おおに禅学ぜんがくに凝り

固こまつて鎌倉へ出掛けて行つて、とうとう出先で氣狂きがいになつて

しまった。円覚寺えんがくじの前に汽車の踏切りがあるだろう、あの踏切

り内うちへ飛び込んでレールの上で座禅をするんだね。それで向う

から来る汽車をとめて見せると云う大氣焰だいきえんさ。もつとも汽車の

方で留とどめてくれたから一命だけはとりとめたが、その代り今度

は火に入いつて焼やけず、水に入いつて溺おぼれぬ金剛こんごう不壊ふえのからだだと
号じないして寺内はすいけの蓮池はいへ這入いつてぶくぶくあるき廻まわつたもんだ」

「死んだかい」

「その時も幸さいわい、道場の坊主が通りかかって助けてくれたが、その

後東京へ歸かえつてから、とうとう腹膜炎で死んでしまった。死んだのは腹膜炎だが、腹膜炎になつた原因は僧堂で麦飯や万年漬まんねんづけを食たつたせいだから、つまるところは間接に独仙が殺したようなものさ」

「むやみに熱中するのも善よし悪あししだね」と主人はちよつと氣味のわるいという顔付をする。

「本当にさ。独仙にやられたものがもう一人同窓中にある」

「あぶないね。誰だい」

「立町老梅君たちまちろうばいくんさ。あの男も全く独仙にそそのかされて鰻うなぎが天上

するような事ばかり言っていたが、とうとう君本物になつてしまつた」

「本物たあ何だい」

「とうとう鰻が天上して、豚が仙人になつたのさ」

「何の事だい、それは」

「八木が独仙なら、立町は豚仙^{ぶたせん}さ、あのくらい食い意地のきかない男はなかつたが、あの食意地と禅坊主のわる意地^{へいはつ}が併^{へい}発したのだから助からない。始めは僕らも気がつかなかつたが今から考えると妙な事ばかり並べていたよ。僕のうちなどへ来て君あの松の木へカツレツが飛んできやしませんかの、僕の国では蒲^{かまぼこ}鉾が板へ乗つて泳いでいますのつて、しきりに警句を吐いたものさ。ただ吐いているうちはよかつたが君表のどぶ^{きん}へ金とんを掘りに行きましよう^{うな}と促^{うな}がすに至つては僕も降参したね。それ

から二三日するとついに豚仙になつて巢鴨へ收容されてしまつた。元来豚なんぞが氣狂になる資格はないんだが、全く独仙の御蔭であすこまで漕ぎ付けたんだね。独仙の勢力もなかなかえらいよ」

「へえ、今でも巢鴨にいるのかい」

「いるだんじやない。自大狂じだいきようで大氣焰だいきえんを吐いている。近頃は立

町老梅なんて名はつまらないと云うので、自ら天道公平みずかと号して、天道の権化ごんげをもつて任じている。すさまじいものだよ。まあちよつと行つて見たまえ」

「天道公平？」

「天道公平だよ。氣狂の癖にうまい名をつけたものだね。時々こうへいは孔平こうへいとも書く事がある。それで何でも世人が迷つてゐるからぜひ救つてやりたいと云うので、むやみに友人や何かへ手紙を出

すんだね。僕も四五通貫ったが、中にはなかなか長い奴があつて不足税を二度ばかりとられたよ」

「それじゃ僕の所へ来たのも老梅から来たんだ」

「君の所へも来たかい。そいつは妙だ。やつぱり赤い状袋だらう」

「うん、真中が赤くて左右が白い。一風変つた状袋だ」

「あれはね、わざわざ支那から取り寄せるのだそうだよ。天の道は白なり、地の道は白なり、人は中間に在^あつて赤しと云う豚仙の格言を示したんだつて……」

「なかなか因縁^{いんねん}のある状袋だね」

「氣狂だけに大に凝^こつたものさ。そうして氣狂になつても食意地だけは依然として存しているものと見えて、毎回必ず食物の事がかいてあるから奇妙だ。君の所へも何とか云つて来たろう」

「うん、海鼠なまこの事がかいてある」

「老梅は海鼠が好きだったからね。もっともだ。それから？」

「それから河豚ふぐと朝鮮仁参ちようせんじんじんか何か書いてある」

「河豚と朝鮮仁参の取り合せは旨いね。うまおおかた河豚を食って中あたつたら朝鮮仁参を煎せんじて飲めとでも云うつもりなんだろう」

「そうでもないようだ」

「そうでなくても構わないさ。どうせ氣狂だもの。それつきりかい」

「まだある。苦沙弥先生御茶でも上がれと云う句がある」

「アハハハ御茶でも上がればきびし過ぎる。それで大おおに君をやり

込めたつもりに違ない。大出来だ。天道公平君万歳だ」と迷亭

先生は面白がつて、大に笑い出す。主人は少からざる尊敬をもつて反覆誦どくしょうした書翰しよかんの差出人が金箔きんぱくつきの狂人であると知つて

から、最前の熱心と苦心が何だか無駄骨のような気がして腹立たしくもあり、また瘋癲病者の文章をさほど心勞して翫味したかと思うと恥ずかしくもあり、最後に狂人の作にこれほど感服する以上は自分も多少神経に異状がありはせぬかとの疑念もあるので、立腹と、慚愧と、心配の合併した状態で何だか落ちつかない顔付をして控えている。

折から表格子をあららかに開けて、重い靴の音が二た足ほど沓脱に響いたと思つたら「ちよつと頼みます、ちよつと頼みます」と大きな声がする。主人の尻の重いに反して迷亭はまたすこぶる気軽な男であるから、御三の取次に出るのも待たず、通れと云いながら隔ての中の間を二た足ばかりに飛び越えて玄關に躍り出した。人のうちへ案内も乞わずにつかつか這入り込むところは迷惑のようだが、人のうちへ這入った以上は書生同様

取次を務めるからはなはだ便利である。いくら迷亭でも御客さんには相違ない、その御客さんが玄関へ出張するのに主人たる苦沙弥先生が座敷へ構え込んで動かん法はない。普通の男ならあとから引き続いて出陣すべきはずであるが、そこが苦沙弥先生である。平氣に座布団の上へ尻を落ちつけている。但し落ちつけているのと、落ちついてゐるのは、その趣は大分似てゐるが、その実質はよほど違う。

玄関へ飛び出した迷亭は何かしきりに弁じていたが、やがて奥の方を向いて「おい御主人ちよつと御足労だが出てくれたまえ。君でなくつちや、間に合わない」と大きな声を出す。主人はやむを得ず懐手のままのそりのそりと出てくる。見ると迷亭君は一枚の名刺を握ったまましやがんで挨拶をしている。すこぶる威厳のない腰つきである。その名刺には警視庁刑事巡查吉田虎蔵

とある。虎蔵君と並んで立っているのは二十五六の背せいの高い、いなせな唐とう棧せんずくめの男である。妙な事にこの男は主人と同じく懷手をしたまま、無言で突つ立たっている。何だか見たような顔だと思つてよくよく觀察すると、見たようなところじゃない。この間深夜御來訪になつて山やまの芋いもを持つて行かれた泥棒君である。おや今度は白昼公然と玄關からおいになつたな。

「おいこの方は刑事かた巡查でせんだつての泥棒をつらまえたから、君に出頭しろと云うんで、わざわざおいになつたんだよ」

主人はようやく刑事が踏み込んだ理由が分つたと見えて、頭をさげて泥棒の方を向いて鄭てい寧ねいに御辭儀をした。泥棒の方が虎蔵君より男振りがいいので、こつちが刑事だと早はや合がてん点てんをしたのだらう。泥棒も驚ろいたに相違ないが、まさか私わたしが泥棒ですよと断わる訳にも行かなかつたと見えて、すまして立っている。

やはり懐手のままである。もつとも手錠てじようをはめているのだから、出そうと云つても出る氣遣きづかいはない。通例のものならこの様子で、たいていはわかるはずだが、この主人は当世の人間に似合わず、むやみに役人や警察をありがたがる癖がある。御上おかみの御威光となると非常に恐しいものと心得ている。もつとも理論上から云うと、巡查などは自分達が金を出して番人に雇つておくのだから、いの事は心得ているのだが、実際に臨むといやにへえへえする。主人のおやじはその昔場末の名主であつたから、上の者にぴよこぴよこ頭を下げて暮した習慣が、因果となつてかように子に酬むくつたのかも知れない。まことに氣の毒な至りである。

巡查はおかしかったと見えて、にやにや笑いながら「あしたね、午前九時までに日本堤にほんづつみの分署まで来て下さい。——盗難品は何と何でしたかね」

「盗難品は……」と云いかけたが、あいにく先生たいがい忘れて
いる。ただ覚えているのは多々良三平たたらさんぺいの山の芋だけである。山
の芋などはどうでも構わんと思つたが、盗難品は……と云いか
けてあとが出ないのはいかにも与太郎よたろうのようで体裁ていさいがわるい。
人が盗まれたのならいざ知らず、自分が盗まれておきながら、明
瞭の答が出来んのは一人前いちにんまえではない証拠だと、思い切つて「盗
難品は……山の芋一箱」とつけた。

泥棒はこの時よほどおかしかつたと見えて、下を向いて着物
の襟えりへあごを入れた。迷亭はアハハハと笑いながら「山の芋が
よほど惜しかつたと見えるね」と云つた。巡査だけは存外真面
目である。

「山の芋は出ないようだがほかの物件はたいがい戻つたようで
す。——まあ来て見たら分るでしょう。それでね、下げ渡した

ら請書うけしょが入るから、印形いんぎようを忘れずに持つておいでなさい。――

九時までに来なくつてはいかん。にほんづつみぶんしよ日本堤分署です。――浅草警

察署かんかつないの管轄内の日本堤分署です。――それじゃ、さようなら

と独りひとで弁じて帰つて行く。泥棒君も続いて門を出る。手が出

せないの、門をしめる事が出来ないから開け放しのまま行つてしまった。恐れ入りながらも不平と見えて、主人は頬をふく

らして、ぴしやりと立て切った。

「アハハハ君は刑事を大變尊敬するね。つねにああ云う恭謙きやうけんな

態度を持つてるといい男だが、君は巡査ていねいだけに鄭寧ていねいなんだから

困る」

「だつてせつかく知らせて来てくれたんじゃないか」

「知らせに来るつたつて、先は商売だよ。当り前にあしらつてりや沢山だ」

「しかしただの商売じゃない」

「無論ただの商売じゃない。探偵と云ういけすかない商売さ。あたり前の商売より下等だね」

「君そんな事を云うと、ひどい目に逢うぜ」

「ハハハそれじゃ刑事の悪口わるくちはやめにしよう。しかし刑事を尊敬するのは、まだしもだが、泥棒を尊敬するに至つては、驚かざるを得んよ」

「誰が泥棒を尊敬したい」

「君がしたのさ」

「僕が泥棒に近付きがあるもんか」

「あるもんかつて君は泥棒にお辞儀をしたじゃないか」

「いつ？」

「たつた今平身低頭へいしんていとうしたじゃないか」

「馬鹿あ云つてら、あれは刑事だね」

「刑事があんななり、をするものか」

「刑事だからあんななり、をするんじゃないか」

「頑固^{がんこ}だな」

「君こそ頑固だ」

「まあ第一、刑事が人の所へ来てあんなに懷手^{ふところ}なんかして、突立^{つった}つているものかね」

「刑事だつて懷手をしないととは限るまい」

「そう猛烈にやつて来ては恐れ入るがね。君がお辞儀をする間あいつは始終あのままで立っていたのだぜ」

「刑事だからそのくらいの事はあるかも知れんさ」

「どうも自信家だな。いくら云つても聞かないね」

「聞かないさ。君は口先ばかりで泥棒だ泥棒だと云つてるだけ」

で、その泥棒がはいるところを見届けた訳じゃないんだから。ただそう思つて独りひとで強情を張つてるんだ」

迷亭もここにおいてとうてい済度さいどすべからざる男と断念したものと見えて、例に似ず黙つてしまった。主人は久し振りで迷亭を凹へこましたと思つて大得意である。迷亭から見ると主人の価値は強情を張つただけ下落したつもりであるが、主人から云うと強情を張つただけ迷亭よりえらくなつたのである。世の中にはこんな頓珍漢とんちんかんな事はままある。強情さえ張り通せば勝つた氣でいるうちに、当人の人物としての相場は遙はるかに下落してしまふ。不思議な事に頑固の本人は死ぬまで自分は面目めんぼくを施こしたつもりかなにかで、その時以後人が輕蔑けいべつして相手にしてくれないのだとは夢にも悟り得ない。幸福なものである。こんな幸福を豚的幸福と名づけるのだそうだ。

「ともかくもあした行くつもりかい」

「行くとも、九時までに来いと云うから、八時から出て行く」

「学校はどうする」

「休むさ。学校なんか」と擲^たきつけるように云つたのは壮^{さかん}なものであった。

「えらい勢^{いきおい}だね。休んでもいいのかい」

「いいとも僕の学校は月給だから、差し引かれる氣遣^{きづかい}はない、大丈夫だ」と真直に白状してしまった。ずるい事もずるいが、単純なことも単純なものだ。

「君、行くのはいいが路を知ってるかい」

「知るものか。車に乗って行けば訳はないだろう」とぷんぷんしている。

「静岡の伯父に譲らざる東京通なるには恐れ入る」

「いくらでも恐れ入るがいい」

「ハハハ日本堤分署と云うのはね、君ただの所じゃないよ。吉原よしわらだよ」

「何だ？」

「吉原だよ」

「あの遊廓のある吉原か？」

「そうさ、吉原と云やあ、東京に一つしかないやね。どうだ、行つて見る気かい」と迷亭君またからかいかける。

主人は吉原と聞いて、そいつはと少々しゅんじゅん逡巡ていの体であつたが、

たちまち思い返して「吉原だろうが、遊廓だろうが、いったん行くと云つた以上はきつと行く」と入らざるところに力味りきんで見せた。愚人は得てこんなところに意地を張るものだ。

迷亭君は「まあ面白からう、見て来たまえ」と云つたのみであ

る。^{ひとはらん}一波瀾を生じた刑事事件はこれで一先^{ひとま}ず落着^{らくちやく}を告げた。迷亭はそれから相変らず駄弁^{ろう}を弄して日暮れ方、あまり遅くなる^{おこ}と伯父に怒られると云つて帰つて行つた。

迷亭が帰つてから、そこそこに晩飯をすまして、また書齋へ引き揚げた主人は再び^{きようしゆ}拱手して下のように考え始めた。

「自分が感服して、大^{おお}に見習^{おおい}おうとした八木独仙君も迷亭の話しによつて見ると、別段見習うにも及ばない人間のようである。

のみならず彼の唱道するところの説は何だか非常識で、迷亭の云う通り多少^{ふうてんてき}瘋癲的系統に属してもおりそうだ。いわんや彼は^{れつき}歴乎とした二人の氣狂^{きちがい}の子分を有している。はなはだ危険である。滅多^{めった}に近寄ると同系統内に引き摺^ひり込まれそうである。自分^{てんどうこうへいことじつみようたちましろうばい}が文章の上において驚嘆の余、これこそ大見識を有している偉人に相違ないと思ひ込んだ天道公平事実名立町老梅は純然

たる狂人であつて、現に巢鴨の病院に起居している。迷亭の記述が棒大のざれ言にもせよ、彼が瘋癲院中に盛名を擅ま^{ほしい}まに^{みずか}して天道の主宰をもつて自ら任ずるは恐らく事実であらう。こう云う自分もことによると少々ござっているかも知れない。同氣相求め、同類相集まると云うから、氣狂の説に感服する以上は——少なくともその文章言辞に同情を表する以上は——自分もまた氣狂に縁の近い者であるだろう。よし同型中に鑄化^{ちゅうか}せられんでも軒^{なら}を比べて狂人と隣り合^{きよ}せに居^{ぼく}を卜するとすれば、境の壁を一重打ち抜いていつの間^まにか同室内に膝を突き合せて談笑する事がないとも限らん。こいつは大変だ。なるほど考えて見るとこのほどじゆうから自分の腦の作用は我ながら驚くくらい奇上^{きじょう}に妙^{みょう}を点^{へん}じ変^{ぽう}傍^{ちん}に珍^{ちん}を添^{のう}えて^{しゅういつせき}いる。腦漿一勺の化学的變化はとにかく意志の動いて行為となるところ、発して言辞と化す

る^{あたり}辺には不思議にも中庸を失した点が多い。舌^{ぜつじょう}上に竜泉なく、
腋^{えきか}下に清風^{せいふう}を生ぜざるも、齒^{しこん}根に狂臭^{きやうしゅう}あり、筋頭^{きんとう}に瘋味^{ふうみ}あるを
いかんせん。いよいよ大変だ。ことによるともうすでに立派な
患者^{さいわい}になっているのではないかしらん。まだ幸^{さいわい}に人^{きずつ}を傷けたり、
世間の邪魔になる事をし出かさんからやはり町内を追払われず
に、東京市民として存在しているのではなからうか。こいつは
消極の積極のと云う段じゃない。まず脈^{みやく}搏^{はく}からして検査しなく
てはならん。しかし脈には変りはないようだ。頭は熱いかしら
ん。これも別に逆上の気味でもない。しかしどうも心配だ。」
「こう自分と氣^き狂^{ちがひ}ばかりを比較して類似の点ばかり勘定してい
て、どうしても氣狂の領分を脱する事は出来そうにもない。こ
れは方法がわるかった。氣狂を標準にして自分をそつちへ引き
つけて解釈するからこんな結論が出るのである。もし健康な人

を本位にしてその傍へ自分を置いて考えて見たらあるいは反対の結果が出るかも知れない。それにはまず手近から始めなくてはいいかん。第一に今日来たフロックコートの伯父さんはどうだ。心をどこに置こうぞ……あれも少々怪しいようだ。第二に寒月はどうだ。朝から晩まで弁当持参で球ばかり磨いている。これも棒組だ。第三にと……迷亭？ あれはふざけ廻るのを天職のように心得ている。全く陽性の氣狂に相違ない。第四はと……金田の妻君。あの毒惡な根性は全く常識をはずれている。純然たる氣じるしに極つてゐる。第五は金田君の番だ。金田君には御目に懸つた事はないが、まずあの細君を恭しくおつ立てて、琴瑟調和しているところを見ると非凡の人間と見立てて差支えあるまい。非凡は氣狂の異名であるから、まずこれも同類にして置いて構わない。それから、——まだあるある。落雲館の諸君

子だ、年齢から云うとまだ芽生えだが、躁狂そうきやうの点においては一世を空むなしゅうするに足る天晴あつぱれな豪べいごうのものである。こう数え立てて見ると大抵のものは同類のようである。案外心丈夫になつて来た。ことによると社会はみんな氣狂の寄り合かも知れない。氣狂が集合して鎬しのぎを削けずつてつかみ合い、いがみ合い、罵ののり合い、奪い合つて、その全体が団体として細胞のように崩くずれたり、持ち上つたり、持ち上つたり、崩れたりして暮して行くのを社会と云うのではないか知らん。その中で多少理窟りくつがわかつて、分別のある奴はかえつて邪魔になるから、瘋癲院ふうてんいんというものを作つて、ここへ押し込めて出られないようにするのではないかしらん。すると瘋癲院に幽閉されているものは普通の人で、院外にあばれているものはかえつて氣狂である。氣狂も孤立している間はどこまでも氣狂にされてしまふが、団体となつて勢力が出

ると、健全の人間になつてしまふのかも知れない。大きな氣狂が金力や威力を濫用らんようして多くの小氣狂しょうきちがいを使役しえきして乱暴を働いて、人から立派な男だと云われている例は少くない。何が何だか分らなくなつた」

以上は主人が当夜けいけい瑣々たる孤灯もとの下で沈思熟慮した時の心的作用をありのままに描き出したものである。彼の頭腦の不透明なる事はここにも著るしくあらわれている。彼はカイゼルに似た八字髯はちじひげを蓄たくわうるにもかかわらず狂人と常人の差別さえなし得ぬぼんくらくらいの凡倉である。のみならず彼はせつかくこの問題を提供して自己の思索力に訴えながら、ついに何等の結論に達せずしてやめてしまった。何事によらず彼は徹底的に考える腦力のない男である。彼の結論の茫漠ぼうぼくとして、彼の鼻孔から迸出ほうしゅつする朝日の煙のごとく、捕捉ほそくしがたきは、彼の議論における唯一の

特色として記憶すべき事実である。

吾輩は猫である。猫の癖にどうして主人の心中をかく精密に記述し得るかと疑うものがあるかも知れんが、このくらいな事は猫にとって何でもない。吾輩はこれで読心術を心得ている。いっ心得たなんて、そんな余計な事は聞かんでもいい。ともかくも心得ている。人間の膝ひざの上へ乗って眠っているうちに、吾輩は吾輩の柔かな毛衣けころもをそつと人間の腹にこすり付ける。すると一道の電気が起つて彼の腹の中のいきさつが手にとるように吾輩の心眼に映ずる。せんだつてなどは主人がやさしく吾輩の頭を撫なで廻しながら、突然この猫の皮を剥はいでちやんちやんにしたらさぞあたたかであらうと飛んでもない了見りようけんをむらむらと起したのを即座に気取けどつて覚えずひやつとした事さえある。怖い事だ。当夜主人の頭のなかに起つた以上の思想もそんな訳合わけあい

で幸さいわいにも諸君にご報道する事が出来るように相成つたのは吾輩
の大おおに栄誉おおいとするところである。但ただし主人は「何が何だか分ら
なくなつた」まで考えてそのあとはぐうぐう寝てしまったので
ある、あすになれば何をどこまで考えたかまるで忘れてしまふ
に違ちがひない。向後こうごもし主人が氣狂きちがいについて考える事があるとすれ
ば、もう一返ぺん出直して頭から考え始めなければならぬ。そうす
ると果してこんな径路けいろを取つて、こんな風に「何が何だか分ら
なくなる」かどうか保証出来ない。しかし何返考え直しても、
何条なんじょうの径路をとつて進むうとも、ついに「何が何だか分らなく
なる」だけはたしかである。

「あなた、もう七時ですよ」と襖越^{ふすまこ}しに細君が声を掛けた。主人は眼がさめてゐるのだから、寝てゐるのだから、向うむきになつたぎり返事もしない。返事をしないのはこの男の癖である。ぜひ何とか口を切らなければならぬ時はうんと云う。このうんも容易な事では出てこない。人間も返事がうるさくなるくらい無精^{ぶしよう}になると、どことなく趣^{おもむき}があるが、こんな人に限つて女に好かれた試しがない。現在連れ添う細君ですら、あまり珍重しておらんようだから、その他は推^おして知るべしと云つても大した間違はなからう。親兄弟に見離され、あかの他人の傾城^{けいせい}に、可愛がらりようはずがない、とある以上は、細君にさえ持てない主人が、世間一般の淑女に気に入るはずがない。何も異性間に不人望な主人をこの際ことさらに暴露^{ばくろ}する必要もないのだが、本人において存外な考え違をして、全く年廻りのせいで細君に

好かれないのだなどと理窟をつけていると、迷まよの種であるから、自覚の一助にもなろうかと親切心からちよつと申し添えるまでである。

言いつけられた時刻に、時刻がきたと注意しても、先方がその注意を無にする以上は、向むこうをむいてうんさえ発せざる以上は、その曲きょくは夫にあつて、妻にあらざると論定したる細君は、遅くなつても知りませんよと云う姿勢で箒ほうきとはたきを担かついで書斎の方へ行つてしまった。やがてぱたぱた書斎中を叩たたき散らす音がするのは例によつて例のごとき掃除を始めたのである。一体掃除の目的は運動のためか、遊戯のためか、掃除の役目を帯びぬ吾輩の関知するところでないから、知らん顔をしていれば差さし支つかえないようなものの、こここの細君の掃除法のごときに至つてはすこぶる無意義のものと云わざるを得ない。何が無意義であるか

と云うと、この細君は単に掃除のために掃除をしているからである。はたきを一通り障子しょうじへかけて、箒を一応畳の上へ滑すべらせる。それで掃除は完成した者と解釈している。掃除の源因及び結果に至つては微塵みじんの責任だに背負つておらん。かるが故に奇麗な所は毎日奇麗だが、ごみのある所、ほこりの積つている所はいつでもごみが溜たまつてほこりが積つている。告朔こくさくの餼羊きようと云う故事こじもある事だから、これでもやらんよりはましかも知れない。しかしやつても別段主人のためにはならない。ならないところを毎日毎日御苦勞にもやるところが細君のえらいところである。細君と掃除とは多年の習慣で、器械的の連想をかたちづくつて頑がんとして結びつけられているにもかかわらず、掃除の実に至つては、妻君がいまだ生れざる以前のごとく、はたきと箒が発明せられざる昔のごとく、毫ごうも挙あがつておらん。思うにこの

両者の関係は形式論理学の命題における名辞のごとくその内容のいかんにかかわらず結合せられたものであらう。

吾輩は主人と違つて、元来が早起の方だから、この時すでに空腹になつて参つた。とうていうちのもののさえ膳ぜんに向わぬさきから、猫の身分をもつて朝めしに有りつける訳のものではないが、そこが猫の浅ましきで、もしや煙の立つた汁の香においが鮑貝あわびがいの中から、うまそうに立ち上つておりはすまいかと思うと、じつとしていられなくなつた。はかない事を、はかないと知りながら頼みにするときは、ただその頼みだけを頭の中に描いて、動かずに落ちついてゐる方が得策であるが、さてそうは行かぬ者で、心の願と實際が、合うか合わぬか是非とも試験して見たくなる。試験して見れば必ず失望するにきまつてる事ですら、最後の失望を自ら事実の上に受取るまでは承知出来んものである。

みずか

吾輩はたまらなくなつて台所へ這出した。まずへ、つ、つ、の影にある鮑貝あわびがいの中を覗のぞいて見ると案に違たがわず、夕べ舐なめ尽したまま、闐然げきぜんとして、怪しき光が引窓を洩もる初秋の日影にかがやいていはつあきる。御三おさんはすでに炊たき立たての飯を、御櫃おほちに移して、今や七輪しちりんにかけた鍋なべの中をかきまぜつつある。釜かまの周囲には沸わき上がつて流れたした米の汁が、かさかさに幾条いくすじとなくこびりついて、あるものは吉野紙を貼はりつけたごとくに見える。もう飯も汁も出ているのだから食わせてもよさそうなものだと思つた。こんな時に遠慮するのはつまらない話だ、よしんば自分の望通りにならなくつたつて元々で損は行かないのだから、思い切つて朝飯の催促をしてやろう、いくら居候いそうろうの身分だつてひもじいに変りはない。と考え定めた吾輩はにやあにやあと甘えるごとく、訴うるがごとく、あるいはまた怨えんずるがごとく泣いて見た。御三

はいつこう顧みる景色けしきがない。生れついでのお多角たかくだから人情に疎うといのはとうから承知の上だが、そこをうまく泣き立てて同情を起させるのが、こつちの手際てぎわである。今度はにやごにやごとやつて見た。その泣き声は吾ながら悲壮おんの音を帯びて天涯てんがいの遊子ゆうしをして断腸の思あらしむるに足ると信ずる。御三は恬てんとして顧みない。この女は聾つんばなのかも知れない。聾では下女が勤まる訳わけがないが、ことによると猫の声だけには聾なのだろう。世の中には色盲しきもうというのがあつて、当人は完全な視力を具えているつもりでも、医者から云わせると片輪かたわだそうだが、この御三は声盲せいもうなのだろう。声盲だつて片輪に違いない。片輪のくせにいやに横風おうふうなものだ。夜中なぞでも、いくらこつちが用があるから開けてくれると云つても決して開けてくれた事がない。たまに出してくれたと思うと今度はどうしても入れてくれない。

夏だつて夜露は毒だ。いわんや霜しもにおいてをやで、軒下に立ち明かして、日の出を待つのは、どんなに辛いつらかとうてい想像が出来るものではない。この間しめ出しを食つた時などは野良犬の襲撃を蒙こうむつて、すでに危うく見えたところを、ようやくの事で物置の家根やねへかけ上あがつて、終夜顫ふるえつづけた事さえある。これ等は皆御三の不人情から胚胎はいたいした不都合である。こんなものを相手にして鳴いて見せたつて、感応かんのうのあるはずはないのだが、そこが、ひもじい時の神頼み、貧のぬすみに恋のふみと云うくらいだから、たいていの事ならやる気になる。にやごおうにやごおうと三度目には、注意を喚起するためにことさらに複雑なる泣き方をして見た。自分ではベトヴェンのシンフォニーにも劣らざる美妙おんの音と確信しているのだが御三には何等の影響も生じないようだ。御三は突然膝をついて、揚げ板を一枚はね除の

けて、中から堅炭の四寸ばかり長いのを一本つかみ出した。それからその長い奴を七輪しちりんの角でぽんぽんと敲たたいたら、長いのが三つほどに碎けて近所は炭の粉で真黒くなつた。少々は汁の中へも這入はいつたらしい。御三はそんな事に頓着する女ではない。直ちにくだけたる三個の炭を鍋なべの尻から七輪の中へ押し込んだ。とうてい吾輩のシンフォニーには耳を傾けそうにもない。仕方がないから悄然しやうぜんと茶の間の方へ引きかえそうとして風呂場の横を通り過ぎると、ここは今女の子が三人で顔を洗つてゐる最中で、なかなか繁昌はんじやうしている。

顔を洗うと云つたところで、上の二人が幼稚園の生徒で、三番目は姉の尻についてさえ行かれないくらい小さいのだから、正式に顔が洗えて、器用に御化粧が出来るはずがない。一番小さいのがバケツの中から濡ぬれ雑巾ぞうきんを引きずり出してしきりに顔

中撫^なで廻わしている。雑巾で顔を洗うのは定めし心持ちがわる
からうけれども、地震がゆるたびにおも、ちろいわと云う子だか
らこのくらいの事はあつても驚ろくに足らん。ことによると八
木独仙君より悟つているかも知れない。さすがに長女は長女だ
けに、姉をもつて自ら任^{みずか}じているから、うがい茶碗をからから
かんと抛^{ほうりだ}出して「坊やちゃん、それは雑巾よ」と雑巾をとり
にかか。坊やちゃんもなかなか自信家だから容易に姉の云う事
なんか聞きそうにしない。「いやーよ、ばぶ」と云いながら雑巾
を引つ張り返した。このばぶなる語はいかなる意義で、いかな
る語源を有しているか、誰も知つてゐるものがない。ただこの坊
やちゃんが癩癩^{かんしゃく}を起した時に折々ご使用になるばかりだ。雑巾
はこの時姉の手と、坊やちゃんの手で左右に引つ張られるから、
水を含んだ真中からぼたぼた^{しずく}雪^たが垂れて、容赦なく坊やの足に

かかる、足だけなら我慢するが膝のあたりがしたたか濡れる。坊やはこれでも元禄げんろくを着ているのである。元禄とは何の事だろ。だんだん聞いて見ると、中形ちゆうがたの模様なら何でも元禄だそうだ。一体だれに教わつて来たものか分らない。「坊やちゃん、元禄が濡れるから御よしなさい、ね」と姉が洒落しやれた事を云う。その癖くせこの姉はついこの間まで元禄と双六すじろくとを間違えていた物識りである。

元禄で思い出したからついでに喋舌しゃべつてしまふが、この子供の言葉ちがいをやる事は夥おびただしいもので、折々人を馬鹿にしたような間違を云つてゐる。火事で茸きのこが飛んで来たり、御茶おちやの味噌みその女学校へ行つたり、恵比寿えびす、台所だいどころと並べたり、或る時などは「わたしや藁店わらだなの子じゃないわ」と云うから、よくよく聞き糺ただして見ると裏店うらだなと藁店を混同していたりする。主人はこんな間違を

聞くたびに笑っているが、自分が学校へ出て英語を教える時などは、これよりも滑稽な誤謬ごびゅうを真面目になつて、生徒に聞かせるのだらう。

坊やは——当人は坊やとは云わない。いつでも坊ばと云う——元禄が濡れたのを見て「元げんど、こがべたい、」と云つて泣き出した。元禄が冷たくては大変だから、御三が台所から飛び出して来て、雑巾を取上げて着物を拭ふいてやる。この騒動中比較的に静かであつたのは、次女のすん子嬢である。すん子嬢は向うむきになつて棚の上からころがり落ちた、お白粉しろいの瓶びんをあけて、しきりに御化粧を施ほどこしている。第一に突つ込んだ指をもつて鼻の頭をキューと撫なでたから豎たてに一本白い筋が通つて、鼻のありかがいささか分明ぶんめいになつて来た。次に塗りつけた指を転じて頬の上を摩擦したから、そこへもつてきて、これまた白いかたま

りが出来上った。これだけ装飾がととのつたところへ、下女がはいって来て坊ばの着物を拭いたついでに、すん子の顔もふいてしまった。すん子は少々不満の体に見えた。

吾輩はこの光景を横に見て、茶の間から主人の寝室まで来てもう起きたかとひそかに様子をうかがって見ると、主人の頭がどこにも見えない。その代り十文半ともんはんの甲の高い足が、夜具の裾すそから一本食はみ出している。頭が出ていては起こされる時に迷惑だと思つて、かくもぐり込んだのであろう。亀の子のような男である。ところへ書斎の掃除をしてしまった妻君がまた箒ほうきとはたきを担かついでやってくる。最前さいぜんのように襖ふすまの入口から

「まだお起きにならないのですか」と声をかけたまま、しばらく立って、首の出ない夜具を見つめていた。今度も返事がない。細君は入口から二歩ふたあしばかり進んで、箒をとんと突きながら「ま

だなんですか、あなた」と重ねて返事を承わる。この時主人はすでに目が覚めて^さいる。覚めているから、細君の襲撃にそなうるため、あらかじめ夜具の中に首もろとも立て籠^{こも}つたのである。首さえ出さなければ、見逃^{みのが}してくれる事もあるうかと、詰まらない事を頼みにして寝ていたところ、なかなか許しそうもない。しかし第一回の声は敷居の上で、少くとも一間の間隔があつたから、まず安心と腹のうちで思っていると、とんと突いた箒が何でも三尺くらいの距離に追つていたにはちよつと驚ろいた。のみならず第二の「まだなんですか、あなた」が距離においても音量においても前よりも倍以上の勢を以て夜具のなかまで聞えたから、こいつは駄目だと覚悟をして、小さな声でうんと返事をした。

「九時までにはいらつしやるのでしよう。早くなさらないと間に

合いませんよ」

「そんなに言わなくても今起きる」と夜着よぎの袖口そでぐちから答えたのは奇観である。妻君はいつでもこの手を食つて、起きるかと思つて安心していると、また寝込まれつけているから、油断は出来な
いと「さあお起きなさい」とせめ立てる。起きると云うのに、な
お起きろと責めるのは氣に食わんものだ。主人のごとき我儘者わがままもの
にはなお氣に食わん。ここにおいてか主人は今まで頭から被かぶつ
ていた夜着を一度に跳はねのけた。見ると大きな眼を二つとも開あ
いている。

「何だ騒々しい。起きると云えば起きるのだ」

「起きるとおつしやつてもお起きなさらんじゃありませんか」

「誰がいつ、そんな嘘うそをついた」

「いつでもですわ」

「馬鹿を云え」

「どつちが馬鹿だか分りやしない」と妻君ぷんとして箒を突いて枕元に立っているところは勇ましかった。この時裏の車屋の子供、八っちゃんおこが急に大きな声をしてワーと泣き出す。八っちゃんおこは主人が怒り出しさえすれば必ず泣き出すべく、車屋のかみさんから命ぜられるのである。かみさんは主人が怒るたんびに八っちゃんこづかいを泣かして小遣になるかも知れんが、八っちゃんおふくろこそいい迷惑だ。こんな御袋おふくろを持ったが最後朝から晩まで泣き通しに泣いていなくてはならない。少しはこの辺の事情を察して主人も少々怒るのを差し控ひかえてやったら、八っちゃんの寿命が少しは延びるだろうに、いくら金田君から頼まれたって、こんな愚ぐな事をするのは、天道公平君よりもはげしくおいでになつてゐる方だと鑑定してもよからう。怒るたんびに泣かせら

れるだけなら、まだ余裕もあるけれども、金田君が近所のゴロツキを備^{やと}つて今戸焼^{いまどやき}をきめ込^いむたびに、八っちゃん^{やき}は泣かねばならのである。主人が怒るか怒らぬか、まだ判然しないうちから、必ず怒るべきものと予想して、早手廻しに八っちゃん^{やき}は泣いているのである。こうなると主人が八っちゃん^{やき}だか、八っちゃん^{やき}が主人^{やき}だか判然しなくなる。主人にあてつけるに手数^{てすう}は掛らない、ちよつと八っちゃん^{やき}に剣突^{けんつく}を食わせれば何の苦もなく、主人の横^{よこ}つ面^{つら}を張つた訳になる。昔^{むか}し西洋で犯罪者を所刑にする時に、本人が国境外に逃亡^ひして、捕^{とら}えられん時は、偶像をつくつて人間の代りに火^ひあぶりにしたと云うが、彼等のうちに西洋の故事に通曉^{つうぎょう}する軍師があると見えて、うまい計略を授けたものである。落雲館と云い、八っちゃん^{やき}の御袋と云い、腕のきかぬ主人にとつては定めし苦手^{にがて}であろう。そのほか苦手は

いろいろある。あるいは町内中ことごとく苦手かも知れんが、ただいまは関係がないから、だんだん成し崩しに紹介致す事にする。

八つちゃんの泣き声を聞いた主人は、朝っぱらからよほど癩癩かんしゃくが起つたと見えて、たちまちがぼと布団ふとんの上に起き直つた。こ
うなると精神修養も八木独仙も何もあつたものじゃない。起き
直りながら両方の手でゴシゴシゴシと表皮のむけるほど、頭中
引き搔かき廻す。一カ月も溜かつてゐるフケは遠慮なく、頸筋くびすじやら、
寝巻の襟えりへ飛んでくる。非常な壯観である。髯ひげはどうだと思
ふとこれはまた驚ろくべく、ぴん然とおっ立っている。持主が怒おこつ
てゐるのに髯えだけ落ちついてゐてはすまないとしても心得たもの
か、一本一本に癩癩かんしゃくを起して、勝手次第の方角へ猛烈なる勢を
もつて突進している。これとてもなかなかの見物みものである。昨日きのう

は鏡の手前もある事だから、おとなしく独^{ドイツ}乙皇帝陛下の真似をして整列したのであるが、一晚寝れば訓練も何もあつた者ではない、直ちに本来の面目に帰つて思い思いの出^いで立^{たち}に戻るのである。あたかも主人の一夜作りの精神修養が、あくる日になると拭^{ぬぐ}うがごとく奇麗に消え去つて、生れつゝの野猪^{やちよてき}的本領が直ちに全面を暴露^{きた}し来るのと一般である。こんな乱暴な髯をもっている、こんな乱暴な男が、よくまあ今まで免職にもならず教師が勤まつたものだと思うと、始めて日本の広い事がわかる。広ければこそ金田君や金田君の犬が人間として通用しているのでもあろう。彼等が人間として通用する間は主人も免職になる理由がないと確信しているらしい。いざとなれば巢鴨^{はがき}へ端書を飛ばして天道公平君に聞き合せて見れば、すぐ分る事だ。

この時主人は、昨日^{きのう}紹介した混沌^{こんとん}たる太古の眼を精一杯に見

張つて、向うの戸棚をきつと見た。これは高さ一間を横に仕切つて上下共各二枚の袋戸をはめたものである。下の方の戸棚は、ふとん すそ布団の裾とすれすれの距離にあるから、起き直った主人が眼をあきさえすれば、天然自然ここに視線がむくように出来ている。見ると模様を置いた紙がところどころ破れて妙な腸があらさはらわたまに見える。腸にはいろいろながある。あるものは活版摺で、あるものは肉筆である。あるものは裏返しで、あるものは逆さまである。主人はこの腸を見ると同時に、何がかいてあるか読みたくなつた。今までは車屋のかみさんでも捕つかえて、鼻づらを松の木へこすりつけてやろうくらいにまで怒おこっていた主人が、突然この反古紙ほごがみを読んで見たくなるのは不思議のようであるが、こう云う陽性の癩癩持ちには珍らしくない事だ。小供が泣くときもなかに最中の一つもあてがえばすぐ笑うと一般である。主人が昔むか

し去る所の御寺に下宿していた時、襖ふすま一と重えを隔てて尼が五六人いた。尼などと云うものは元来意地のわるい女のうちでもつとも意地のわるいものであるが、この尼が主人の性質を見抜いたものと見えて自炊の鍋なべをたたきながら、今泣いた鳥がもう笑つた、今泣いた鳥がもう笑つたと拍子を取つて歌つたそうだが、主人が尼が大嫌になつたのはこの時からだと云うが、尼は嫌きらにせよ全くそれに違ひない。主人は泣いたり、笑つたり、嬉しがつたり、悲しがつたり人一倍もする代りにいずれも長く続いた事がない。よく云えば執着がなくて、心機しんきがむやみに転ずるのだろうが、これを俗語に翻訳してやさしく云えば奥行のない、薄うすっ片ぺらの、鼻はなっ張はりだけ強いだつ子である。すでにだつ子である以上は、喧嘩をする勢で、むつくと刎はね起きた主人が急に氣をかえて袋戸ふくろどの腸を読みにかかるのももつともと云わねばなるまい。第

一に眼にとまつたのが伊藤博文の逆さか立たちである。上を見ると明治十一年九月廿八日とある。韓かん國こく統監とうかんもこの時代から御布令おふれの尻尾しっぽを追つ懸けてあるいていたと見える。大将この時分は何をしていたんだろうと、読めそうにないところを無理によむとおおくらぎよう大蔵卿とある。なるほどえらいものだ、いくら逆か立ちしても大蔵卿である。少し左の方を見ると今度は大蔵卿横になつて昼寝をしている。もつともだ。逆か立ちではそう長く続く氣遣きづかいはない。下の方に大きな木板もくばんで汝なはと二字だけ見える、あとが見たいがあいにく露出しておらん。次の行には早くの二字だけ出ている。こいつも読みたいがそれぎれで手掛りがない。もし主人が警視庁の探偵であつたら、人のものでも構わずに引つpegすかも知れない。探偵と云うものには高等な教育を受けたものがないから事実を挙げるためには何でもする。あれは始末ゆに行

かないものだ。願ねがくばもう少し遠慮をしてもらいたい。遠慮をしなければ事実は決して挙げさせない事にしたらよからう。聞くとところによると彼等は羅織らしきき虚構をもつて良民を罪おとしに陥れる事さえあるそうだ。良民が金を出して雇つておく者が、雇主を罪にするなどときてはこれまた立派な氣狂きちがいである。次に眼を転じて真中を見ると真中には大分県おおいたけんが宙返りをしている。伊藤博文でさえ逆か立ちをするくらいだから、大分県が宙返りをするのは当然である。主人はここまで読んで来て、双方にぎへ握り拳こぶしをこしらえて、これを高く天井に向けて突きあげた。あくびの用意である。

このあくびがまた鯨くじらの遠吠とおぼえのようにすこぶる変調を極きわめた者であつたが、それが一段落を告げると、主人はのそのそと着物をきかえて顔を洗いに風呂場へ出掛けて行つた。待ちかねた細

君はいきなり布団ふとんをまくつて夜着よぎを畳んで、例の通り掃除をはじめ。掃除が例の通りであるごとく、主人の顔の洗い方も十年一日のごとく例の通りである。先日紹介をしたごとく依然としてがーがー、げーげーを持続している。やがて頭を分け終つて、西洋手拭てぬぐいを肩へかけて、茶の間へ出御しゅつぎよになると、超然として長火鉢の横に座を占めた。長火鉢と云うと櫂けの如輪木じよりんもくか、銅あかの総落そうおとしで、洗髪あらいがみの姉御が立膝で、長煙管ながぎせるを黒柿くろがきの縁ふちへ叩きつける様を想見する諸君もないとも限らないが、わが苦沙弥先生くしゃみの長火鉢に至つては決して、そんな意気なものではない、何で造つたものか素人しらうとには見当けんとうのつかんくらい古雅なものである。長火鉢は拭き込んでてら光るところが身上しんしようなのだが、この代物しろものは櫂きりか桐きりか元来不明瞭な上に、ほとんど布巾ふきんをかけた事がないのだから陰気で引き立たざる事夥おびただしい。こんなもの

をどこから買つて来たかと云うと、決して買った覚おぼえはない。そんなら貰ったかと聞くと、誰もくれた人はないそうだ。しからば盗んだのかと糺ただして見ると、何だかその辺が曖昧あいまいである。昔し親類に隠居がおつて、その隠居が死んだ時、当分留守番を頼まれた事がある。ところがその後一戸を構えて、隠居所を引き払う際に、そこで自分のもののように使つていた火鉢を何の気もなく、つい持つて来てしまったのだそうだ。少々たちが悪いようだ。考えるとたちが悪いようだがこんな事は世間に往々ある事だと思ふ。銀行家などは毎日人の金をあつかいつけているうちに人の金が、自分の金のように見えてくるそうだ。役人は人民の召使である。用事を弁じさせるために、ある権限を委托した代理人のようなものだ。ところが委任された権力を笠かさに着て毎日事務を処理していると、これは自分が所有している権力

で、人民などはこれについて何らの喙くちばしを容いる理由がないものだなどと狂つてくる。こんな人が世の中に充満している以上は長火鉢事件をもつて主人に泥棒根性があると断定する訳には行かぬ。もし主人に泥棒根性があるとすれば、天下の人にはみんな泥棒根性がある。

長火鉢の傍そばに陣取つて、食卓を前に控ひかえたる主人の三面には、さつきぞうきん先刻雑巾で顔を洗つた坊おちやばと御茶の味噌しろういびんの学校へ行くと、ん子とお白粉しろいびん饅まんに指を突き込んだすん子が、すでに勢揃せいぞろいをして朝飯を食っている。主人は一応この三女子の顔を公平に見渡した。とん子の顔は南蛮鉄なんばんてつの刀の鐔つばのような輪廓りんかくを有している。すん子も妹だけに多少姉の面影おもかげを存ぞんして琉球塗りゅうきゅうぬりの朱盆しゅぼんくらいな資格はある。ただ坊ただばに至いたつては独ひとり異彩を放つて、面長おもながに出来上つている。但し豎たてに長いのなら世間にその例もすくなくないが、

この子のは横に長いのである。いかに流行が変化し易く^{やす}つたつて、横に長い顔がはやる事はなからう。主人は自分の子ながらも、つくづく考える事がある。これでも生長しなければならぬ。生長するところではない、その生長の速^{すみや}かなる事は禪寺^{ぜんでら}の筍^{たけのこ}が若竹に変化する勢で大きくなる。主人はまた大きくなつたなと思うたんびに、後ろ^{うし}から追手^{おつて}にせまられるような気がしてひやひやする。いかに空漠^{くうぼく}なる主人でもこの三令嬢が女であるくらいは心得ている。女である以上はどうか片付けなくてはならんくらいも承知している。承知しているだけで片付ける手腕のない事も自覚している。そこで自分の子ながらも少しく持て余しているところである。持て余すくらいなら製造しなければいいのだが、そこが人間である。人間の定義を云うとほかに何にもない。ただ入^いらざる事を捏造^{ねつぞう}して自ら苦^みしんでいる者だと云

えば、それで充分だ。

さすがに子供はえらい。これほどおやじが処置に窮しているとは夢にも知らず、楽しそうにご飯をたべる。ところが始末におえないのは坊ばである。坊ばは当年とつて三歳であるから、細君が気を利^きかして、食事のときには、三歳然たる小形の箸^{はし}と茶碗をあてがうのだが、坊ばは決して承知しない。必ず姉の茶碗を奪い、姉の箸を引^きつたくつて、持ちあつかい悪い^{にく}奴を無理に持ちあつかっている。世の中を見渡すと無能無才の小人ほど、いやにのさばり出て柄^{がら}にもない官職に登りたがるものだが、あの性質は全くこの坊ば時代から萌芽^{ほうが}しているのである。その因^よつて来^{きた}るところはかくのごとく深いのだから、決して教育や薰陶^{くんとう}で癒^{なお}せる者ではないと、早くあきらめてしまふのがいい。

坊ばは隣りから分捕^{ぶんと}つた偉大なる茶碗と、長大なる箸を専有

して、しきりに暴威を擅ほしいままにしている。使いこなせない者をむやみに使おうとするのだから、勢いきおい暴威を逞たくましくせざるを得ない。坊ばはまず箸の根元を二本いつしよに握ったままうんと茶碗の底へ突込んだ。茶碗の中は飯が八分通り盛り込まれて、その上に味噌汁が一面に漲みなぎっている。箸の力が茶碗へ伝わるやいなや、今までどうか、こうか、平均を保っていたのが、急に襲撃を受けたので三十度ばかり傾いた。同時に味噌汁は容赦なくだらだらと胸のあたりへこぼれた。坊ばはそのくらいな事で辟易へきえきする訳がない。坊ばは暴君である。今度は突き込んだ箸を、うんと力一杯茶碗の底から刎はね上げた。同時に小さな口を縁ふちまで持つて行つて、刎はね上げられた米粒を這入はいるだけ口の中へ受納した。打ち洩もらされた米粒は黄色な汁と相和して鼻のあたまと頬ほつぺたと頤あごとへ、やつと掛声をして飛びついた。飛びつき損じて畳

の上へこぼれたものは打算ださんの限りでない。随分無分別な飯の食
い方である。吾輩は謹つつしんで有名なる金田君及び天下の勢力家に
忠告する。公等こうらの他をあつかう事、坊ばの茶碗と箸をあつかう
がごとくんば、公等こうらの口へ飛び込む米粒は極めて僅少きんしょうのもので
ある。必然の勢をもつて飛び込むにあらず、戸迷とまどいをして飛び込
むのである。どうか御再考わざらを煩わづらわしたい。世故せこにたけた敏腕家
にも似合しからぬ事だ。

姉のとん子は、自分の箸と茶碗を坊りやくだつばに掠奪されて、不相応
に小さな奴をもつてさつきから我慢していたが、もともと小さ
過ぎるのだから、一杯にもつた積りでも、あんとあけると三口
ほどで食ってしまう。したがって頻繁ひんぱんに御はちの方へ手が出る。
もう四膳かえて、今度は五杯目である。とん子は御はちの蓋ふたを
あけて大きなしやもじを取り上げて、しばらく眺ながめていた。こ

れは食おうか、よそうかと迷っていたものらしいが、ついに決心したものと見えて、焦こげのなさそうなところを見計ひとしやくつて一掬いしやもじの上へ乗せたまでは無難ぶなんであつたが、それを裏返して、ぐいと茶碗の上をこいたら、茶碗に入はいりきらん飯は塊かたまつたまま畳の上へ転ころがり出した。とん子は驚ろく景色けしきもなく、こぼれた飯を鄭寧ていねいに拾い始めた。拾つて何にするかと思つたら、みんな御はちの中へ入れてしまった。少しきたないようだ。

坊ばが一大活躍を試みて箸を刎はね上げた時は、ちようどとん子が飯をよそいおわ了つた時である。さすがに姉は姉だけで、坊ばの顔のいかにも乱雑なのを見かねて「あら坊ばちゃん、大変よ、顔が御ごぜん粒だらけよ」と云いながら、早速さつそく坊ばの顔の掃除にとりかかる。第一に鼻のあたまに寄寓きぐうしていたのを取払う。取払つて捨てると思のほか、すぐ自分の口のなかへ入れてしまった

のには驚ろいた。それから頬ほつぺたにかかる。ここには大分群だいぶんぐんをなして数かずにしたら、両方を合せて約二十粒もあつたろう。姉は丹念に一粒ずつ取つては食い、取つては食い、とうとう妹の顔中にある奴を一つ残らず食つてしまった。この時ただ今まではおとなしく沢庵たくあんをかじつていたすん子が、急に盛り立ての味噌汁の中から薩摩芋さつまいものくずれたのをしゃくい出して、勢よく口の内ほうへ抛り込んだ。諸君も御承知であろうが、汁にした薩摩芋の熱したのほど口中こうちゆうにこたえる者はない。大人おとなですら注意しないと火傷やけどをしたような心持ちがする。ましてすん子のごとき、薩摩芋に経験の乏しい者は無論狼狽ろうばいする訳である。すん子はワツと云いながら口中こうちゆうの芋を食卓の上へ吐き出した。その二三片ぺんがどう云う拍子か、坊ばの前まですべつて来て、ちようどいい加減な距離でとまる。坊ばは固もとより薩摩芋が大好きである。大好

きな薩摩芋が眼の前へ飛んで来たのだから、早速箸を抛り出して、手攫てづかみにしてむしやむしや食つてしまった。

先刻さつきからこの体ていたらくを目撃していた主人は、一言も云わずに、専心自分の飯を食い、自分の汁を飲んで、この時はすでに楊枝ようじを使つてゐる最中であつた。主人は娘の教育に関して絶体的放任主義を執とるつもりと見える。今に三人が海老茶式部えびちやしきぶか鼠式部ねずみしきぶかになつて、三人とも申し合せたように情夫じょうふをこしらえて出奔しゅつぽんしても、やはり自分の飯を食つて、自分の汁を飲んで澄まして見てゐるだろう。働きのない事だ。しかし今の世の働きのあると云う人を拝見すると、嘘をついて人を釣る事と、先へ廻つて馬の眼玉を抜く事と、虚勢を張つて人をおどかす事と、鎌かまをかけて人を陥おとしれる事よりほかに何も知らないようだ。中学などの少年輩みょうなまでが見様見真似みようみなねに、こうしなくては幅きが利かないと心

得違とくちがひいをして、本来なら赤面してしかるべきのを得々と履行りこうして未来の紳士だと思つてゐる。これは働き手と云うのではない。ごろつき手と云うのである。吾輩も日本の猫だから多少の愛国心はある。こんな働き手を見るたびに撲なぐつてやりたくなる。こんなものが一人でも殖ふえれば国家はそれだけ衰える訳である。こんな生徒のいる学校は、学校の恥辱であつて、こんな人民のいる国家は国家の恥辱である。恥辱であるにも関らず、ごろごろ世間にごろついているのは心得がたいと思う。日本の人間は猫ほどの気概もないと見える。情なさけない事だ。こんなごろつき手に比べると主人などは遙はるかに上等な人間と云わなくてはならん。意気地のないところが上等なのである。無能なところが上等なのである。猪口才ちよこざいでないところが上等なのである。

かくのごとく働きのない食い方をもつて、無事に朝食あさめしを済ま

したる主人は、やがて洋服を着て、車へ乗つて、日本堤分署へ出頭に及んだ。格子こうしをあけた時、車夫に日本堤という所を知つてゐるかと思ひたら、車夫はへへへと笑つた。あの遊廓のある吉原の近辺の日本堤だぜと念を押したのは少々滑稽こっけいであつた。

主人が珍らしく車で玄関から出掛けたあとで、妻君は例のごとく食事を済ませて「さあ学校へおいで。遅くなりますよ」と催促すると、小供は平気なもので「あら、でも今日は御休みよ」と支度したくをする景色けしきがない。「御休みなものですか、早くなさい」と叱しかるように言つて聞かせると「それでも昨日きのう、先生が御休だつて、おつしやつてよ」と姉はなかなか動じない。妻君もここに至つて多少変に思つたものか、戸棚こよみから暦を出して繰り返して見ると、赤い字でちゃんと御祭日と出ている。主人は祭日とも知らずに学校へ欠勤届を出したのだらう。細君も知らずに郵便箱

へ抛り込んだのだろう。ただし迷亭に至つては實際知らなかつたのか、知つて知らん顔をしたのか、そこは少々疑問である。この発明におやと驚ろいた妻君はそれじゃ、みんなでおとなしく御遊びなさいと平生いづもの通り針箱を出して仕事に取りかかる。その後ご三十分間は家内平穩、別段吾輩の材料になるような事件も起らなかつたが、突然妙な人が御客に來た。十七八の女学生である。踵かかとのまがつた靴を履はいて、紫色の袴はかまを引きずつて、髪を算盤珠そろばんだまのようにふくらまして勝手口から案内も乞こわずに上つて來た。これは主人の姪めいである。学校の生徒だそうだが、折々日曜にやつて來て、よく叔父さんと喧嘩をして歸つて行く雪江ゆきえとか云う奇麗な名のお嬢さんである。もつとも顔は名前ほどでもない、ちよつと表へ出て一二町あるけば必ず逢える人相である。

「叔母さん今日は」と茶の間へつかつか這入^{はい}つて来て、針箱の横へ尻をおろした。

「おや、よく早くから……」

「今日は大祭日ですから、朝のうちにちよつと上がろうと思つて、八時半頃から家^{うち}を出て急いで来たの」

「そう、何か用があるの？」

「いいえ、ただあんまり御無沙汰をしたから、ちよつと上がつたの」

「ちよつとでなくつていいから、緩^{ゆる}くり遊んでいらつしやい。今に叔父さんが帰つて来ますから」

「叔父さんは、もう、どこへかいらしたの。珍らしいのね」

「ええ今日はね、妙な所へ行つたのよ。……警察へ行つたの、妙でしょう」

「なぜそんなに眠いんでしょう。きつと神経衰弱なんでしょう」

「何ですか」

「本当にむやみに怒る方かたね。あれでよく学校が勤まるのね」

「なに学校じゃおとなしいんですって」

「じゃなお悪るいわ。まるで蒟蒻閻魔こんにやくえんまね」

「なぜ？」

「なぜでも蒟蒻閻魔なの。だって蒟蒻閻魔のようじゃありませんか」

「ただ怒るばかりじゃないのよ。人が右と云えば左、左と云えば右で、何でも人の言う通りにした事がない、——そりや強情ですよ」

「天探女あまのじやくでしょう。叔父さんはあれが道楽なのよ。だから何かさせようと思つたら、うらを云うと、こつちの思い通りになる

のよ。こないだ蝙蝠傘こうもりを買ってもらう時にも、いらない、いらないって、わざと云ったら、いらない事があるものかって、すぐ買つて下すつたの」

「ホホホ旨いうまのね。わたしもこれからそうしよう」

「そうなさいよ。それでなくっちゃ損だわ」

「こないだ保険会社の人に来て、是非御這入おはいんなさいって、勧めているんでしょう、——いろいろ訳わけを言つて、こう云う利益があるの、ああ云う利益があるのって、何でも一時間も話をしたんですが、どうしても這入らないの。うちだつて貯蓄はなし、こうして小供は三人もあるし、せめて保険へでも這入ってくれとよつぽど心丈夫なんですけれども、そんな事は少しも構わないんですもの」

「そうね、もしもの事があると不安心だわね」と十七八の娘に

似合しからん世帯染しよたいじみたことを云う。

「その談判を蔭で聞いていると、本当に面白いのよ。なるほど保険の必要も認めないではない。必要なものだから会社も存在しているのだろう。しかし死なない以上は保険に這入はいる必要はないじゃないかつて強情を張っているんです」

「叔父さんが？」

「ええ、すると会社の男が、それは死ななければ無論保険会社はいりません。しかし人間の命と云うものは丈夫なように脆もろいもので、知らないうちに、いつ危険が逼せまっているか分りませんと云うとね、叔父さんは、大丈夫僕は死なない事に決心をしてるって、まあ無法な事を云うんですよ」

「決心したって、死ぬわねえ。わたしなんか是非及第きゆうだいするつもりだったけれども、とうとう落第してしまつたわ」

「保険社員もそう云うのよ。寿命は自分の自由にはなりません。決心で長^なが生き^いが出来るものなら、誰も死ぬものはございませんって」

「保険会社の方が至^し当^{とう}ですわ」

「至当でしょう。それがわからないの。いえ決して死なない。誓って死なないって威張るの」

「妙ね」

「妙ですとも、大妙^{おおみょう}ですわ。保険の掛金を出すくらいなら銀行へ貯金する方が遥^{はる}かにましだってすまし切っているんですよ」

「貯金があるの？」

「あるもんですか。自分が死んだあとなんか、ちつとも構う考^{かんが}へないんですよ」

「本当に心配ね。なぜ、あんななんでしょう、ここへいらつしや

る方^{かた}だって、叔父さんのようなのは一人もいないわね」

「いるものですか。無類ですよ」

「ちつと鈴木さんにでも頼んで意見でもして貰うといいんですよ。ああ云う穏^{おだ}やかな人だとよっぽど楽^{らく}ですがねえ」

「ところが鈴木さんは、うちじゃ評判^{へいばん}がわるいのよ」

「みんな逆^{さか}なのね。それじゃ、あの方^{かた}がいいでしょう——ほらあの落ちついてる——」

「八木さん？」

「ええ」

「八木さんには大分^{だいぶ}閉口^{へいこう}しているんですがね。昨日^{きのう}迷亭^{めいてい}さんが来て悪口^{あくこう}をいったものだから、思ったほど利^きかないかも知れない」

「だっていいじゃありませんか。あんな風に鷹揚^{おうよう}に落ちついて

いれば、——こないだ学校で演説をなすつたわ」

「八木さんが？」

「ええ」

「八木さんは雪江さんの学校の先生なの」

「いいえ、先生じゃないけども、しゆくとくふじんかい淑徳婦人会のときに招待して、

演説をして頂いたの」

「面白かつて？」

「そうね、そんなに面白くもなかったわ。けども、あの先生が、あんな長い顔なんでしょう。そうして天神様のような髯ひげを生やしているもんだから、みんな感心して聞いていてよ」

「御話しつて、どんな御話なの？」と妻君が聞きかけていると

椽側えんがわの方から、雪江さんの話し声をききつけて、三人の子供がどたばた茶の間へ乱入して来た。今までは竹垣の外の空地あきちへ出

て遊んでいたものであろう。

「あら雪江さんが来た」と二人の姉さんは嬉しそうに大きな声を出す。妻君は「そんなに騒がないで、みんな静かにして御坐わりなさい。雪江さんが今面白い話をなさるところだから」と仕事を隅へ片付ける。

「雪江さん何の御話し、わたし御話しが大好き」と云ったのはとん子で「やっぱりかちかち山の御話し？」と聞いたのはすん子である。「坊ばも御はなち」と云い出した三女は姉と姉の間から膝を前の方に出す。ただしこれは御話をうけたま承わると云うのではない、坊ばもまた御話を仕ると云う意味である。^{つかまつ}「あら、また坊ばちゃんの話だ」と姉さんが笑うと、妻君は「坊ばはあとでなさい。雪江さんの御話がすんでから」と賺かして見る。坊ばはなかなか聞きそうにない。「いやーよ、ばぶ」と大きな声を出す。

「おお、よしよし坊ばちゃんからなさい。何と云うの？」と雪江さんは謙遜けんそんした。

「あのね。坊たん、坊たん、どこ行くのつて」

「面白いのね。それから？」

「わたちは田圃たんぼへ稲刈いに」

「そう、よく知つてる事」

「御前がくうと邪魔だまになる」

「あら、くうとじゃないわ、くるとだわね」ととん子が口を出す。坊ばは相変らず「ばぶ」と一喝いっかつして直ちに姉を辟易へきえきさせる。

しかし途中で口を出されたものだから、続きを忘れてしまつて、あとが出て来ない。「坊ばちゃん、それぎりなの？」と雪江さんが聞く。

「あのね。あとでおならは御免ごめんだよ。ふう、ふうふうつて」

「ホホホホ、いやだ事、誰にそんな事を、教わったの？」

「御三に」
おたん

「わるい御三ね、そんな事を教えて」と妻君は苦笑をしていたが「さあ今度は雪江さんの番だ。坊やおとなしく聞いているのですよ」と云うと、さすがの暴君も納得なつとくしたと見えて、それぎり当分の間は沈黙した。

「八木先生の演説はこんなのよ」と雪江さんがとうとう口を切つた。「昔ある辻つじの真中に大きな石地蔵があつたんですつてね。ところがそこがあいにく馬や車が通る大変賑にぎやかな場所だもんだから邪魔になつて仕様がないうでね、町内のものが大勢寄つて、相談をして、どうしてこの石地蔵を隅の方へ片づけたらよからうつて考えたんですつて」

「そりや本当にあつた話なの？」

「どうですか、そんな事は何とおつしやらなくつてよ。――

でみんながいろいろ相談をしたら、その町内で一番強い男が、そりや訳はありません、わたし^{もうはだ}がきつと片づけて見せますつて、一人でその辻へ行つて、^{もうはだ}両肌を抜いで汗を流して引つ張ったけれども、どうしても動かないんですつて」

「よつぽど重い石地藏なのね」

「ええ、それでその男が疲れてしまつて、うちへ歸つて寝てしまつたから、町内のものはまた相談をしたんですね。すると今

度は町内で一番利口な男が、^{わたし}私に任せて御覧なさい、一番やつ

て見ますからつて、重箱のなかへ牡丹餅^{ぼたもち}を一杯入れて、地藏の

前へ来て、『ここまでおいで』と云いながら牡丹餅を見せびら

かしたんだつて、地藏だつて食意地^{くいじ}が張つてゐるから牡丹餅で釣

れるだろうと思つたら、少しも動かないんだつて。利口な男は

これではいけないと思つてね。今度は瓢箪ひょうたんへお酒を入れて、その瓢箪を片手へぶら下げて、片手へ猪口ちよこを持つてまた地藏さんの前へ来て、さあ飲みたくはないかね、飲みたければここまでおいでと三時間ばかり、からかつて見たがやはり動かないんですって」

「雪江さん、地藏様は御腹おなかが減へらないの」ととん子がきくと「牡丹餅が食べたいな」とすん子が云つた。

「利口な人は二度共しくじつたから、その次には贗札にせざつを沢山こしらえて、さあ欲しいだろう、欲しければ取りにおいでと札を出したり引つ込ましたりしたがこれもまるで益やくに立たないんですって。よつぽど頑固がんこな地藏様なのよ」

「そうね。すこし叔父さんに似ているわ」

「ええまるで叔父さんよ、しまいに利口な人も愛想あいそをつかしてや

めてしまったんですとき。それでそのあとからね、大きな法螺ほらを吹く人が出て、私わたしならきつと片づけて見せますからご安心なさいときも容易たやすい事のように受合つたそうです」

「その法螺を吹く人は何をしたんです」

「それが面白いのよ。最初にはね巡査の服をきて、付け髯ひげをして、地蔵様の前へきて、ここから、動かんとその方のためにならんど、警察で棄てておかんど威張つて見せたんですとき。今の世に警察の仮声こわいろなんか使つたつて誰も聞きやしないわね」

「本当ね、それで地蔵様は動いたの？」

「動くもんですか、叔父さんですもの」

「でも叔父さんは警察には大変恐れ入っているのよ」

「あらそう、あんな顔をして？ それじゃ、そんなに怖こわい事はないわね。けれども地蔵様は動かないんですつて、平気でいるん

ですとき。それで法螺吹は大変怒つて、巡査の服を脱いで、付け髯を紙屑籠へ抛り込んで、今度は大金持ちの服装をして出て来たそうです。今の世で云うと岩崎男爵のような顔をするんですとき。おかしいわね」

「岩崎のような顔つてどんな顔なの？」

「ただ大きな顔をするんでしょう。そうして何もしないで、また何も云わないで地蔵の周りを、大きな巻煙草をふかしながら歩行あるいているんですとき」

「それが何になるの？」

「地蔵様を煙けむに捲まくんです」

「まるで嘸はなし家の洒落しやれのようね。首尾よく煙けむに捲まいたの？」

「駄目ですわ、相手が石ですもの。ごまかしもたいていにすればいいのに、今度は殿下さまに化けて来たんだつて。馬鹿ね」

「へえ、その時分にも殿下さまがあるの？」

「有るんでしょう。八木先生はそうおっしゃってよ。たしかに殿下様に化けたんだって、恐れ多い事だが化けて来たって——
第一不敬じゃありませんか、法螺吹きの分際で」

「殿下って、どの殿下さまなの」

「どの殿下さまですか、どの殿下さまだって不敬ですわ」

「そうね」

「殿下さまでも利きかないでしょう。法螺吹きもしようがないから、とても私わたしの手際てぎわでは、あの地藏はどうする事も出来ませんと降参をしたそうです」

「いい気味ね」

「ええ、ついちやうえぎでに懲役ちやうえぎにやればいいのに。——でも町内のものは大層も気を揉もんで、また相談を開いたんですが、もう誰も引き

受けるものがないんで弱ったそうです」

「それでおしまい？」

「まだあるのよ。一番しまいに車屋とゴロツキを大勢雇って、地蔵様の周りをまわをわいわい騒いであるいたんです。ただ地蔵様をいじめて、いたたまれないようにすればいいと云って、夜昼交替こうたいで騒ぐんだって」

「御苦労様ですこと」

「それでも取り合わないんですとき。地蔵様の方も随分強情ね」
「それから、どうして？」と、とん子が熱心に聞く。

「それからね、いくら毎日毎日騒いでも騷げんが見えないので、大分だいぶんみんなが厭いやになつて来たんですが、車夫やゴロツキは幾日いくんちでも日当にっとうになる事だから喜んで騒いでいましたとき」

「雪江さん、日当つてなに？」と、とん子が質問をする。

「日当と云うのはね、御金の事なの」

「御金をもらつて何にするの？」

「御金を貰つてね。……ホホホいやなすん、子さんだ。——そ

れで叔母さん、毎日毎晩から騒ぎをしていますとね。その時町

内に馬鹿竹と云つて、何も知らない、誰も相手にしない馬鹿が

いたんですつてね。その馬鹿がこの騒ぎを見て御前方は何でそ

んなに騒ぐんだ、何年かかつても地蔵一つ動かす事が出来ない

のか、可哀想なものだ、と云つたそうですつて——」

「馬鹿の癖にえらいのね」

「なかなかえらい馬鹿なのよ。みんなが馬鹿竹の云う事を聞い

て、物はためしだ、どうせ駄目だろうが、まあ竹にやらして見

ようじゃないかとそれから竹に頼むと、竹は一も二もなく引き

受けたが、そんな邪魔な騒ぎをしないでまあ静かにしろと車引

やゴロツキを引き込まして飄然ひようぜんと地蔵様の前へ出て来ました」

「雪江さん飄然ひようぜんて、馬鹿竹のお友達？」ととん子が肝心かんじんなところで奇問を放ったので、細君と雪江さんはどつと笑い出した。

「いいえお友達じゃないのよ」

「じゃ、なに？」

「飄然と云うのはね。——云いようがないわ」

「飄然て、云いようがないの？」

「そうじゃないのよ、飄然と云うのはね——」

「ええ」

「そら多々良三平さんたたらさんぺいを知ってるでしょう」

「ええ、山の芋をくれてよ」

「あの多々良さん見たようなを云うのよ」

「多々良さんは飄然なの？」

「ええ、まあそうよ。——それで馬鹿竹が地蔵様の前へ来て懷手ふところをして、地蔵様、町内のものが、あなたに動いてくれと云うから動いてやんなさいと云ったら、地蔵様はたちまちそうか、そんなら早くそう云えばいいのに、とのこのこ動き出したそうです」

「妙な地蔵様ね」

「それからが演説よ」

「まだあるの？」

「ええ、それから八木先生がね、今日は御婦人の会でありますこんにち

が、私がかような御話をわざわざ致したのは少々考があるので、

こう申すと失礼かも知れませんが、婦人というものはとかく物をするのに正面から近道を通って行かないで、かえって遠方から廻りくどい手段をとる弊へいがある。もつともこれは御婦人に限つた事でない。明治の代よは男子といえども、文明の弊を受けて多

少女性的になつてゐるから、よくいらざる手数と労力を費やして、これが本筋である、紳士のやるべき方針であると誤解してゐるものが多いようだが、これ等は開化の業に束縛された畸形児である。別に論ずるに及ばん。ただ御婦人に在つてはなるべくただいま申した昔話を御記憶になつて、いざと云う場合にはどうか馬鹿竹のような正直な了見で物事を処理していただきたい。あなた方が馬鹿竹になれば夫婦の間、嫁姑の間に起る忌わしき葛藤の三分一はたしかに減ぜられるに相違ない。人間は魂胆があればあるほど、その魂胆が祟つて不幸の源をなすので、多くの婦人が平均男子より不幸なのは、全くこの魂胆があり過ぎるからである。どうか馬鹿竹になつて下さい、と云う演説なの」「へえ、それで雪江さんは馬鹿竹になる気なの」「やだわ、馬鹿竹だなんて。そんなものになりたくはないわ。

金田の富子さんなんぞは失敬だつて大変怒つてよおこ

「金田の富子さんて、あの向横町むこうよこちょうの？」

「ええ、あのハイカラさんよ」

「あの人も雪江さんの学校へ行くの？」

「いいえ、ただ婦人会だから傍聴に来たの。本当にハイカラね。どうも驚ろいちまうわ」

「でも大変いい器量だつて云うじゃありませんか」

「並ですわ。御自慢ほどじゃありませんよ。あんなに御化粧をすればたいいていの人はよく見えるわ」

「それじゃ雪江さんなんぞはそのかたのように御化粧をすれば金田さんの倍くらい美しくなるでしょう」

「あらいやだ。よくつてよ。知らないわ。だけど、あの方は全かたくつくり過ぎるのね。なんぼ御金があつたつて——」

「つくり過ぎても御金のある方がいいじゃありませんか」

「それもそうだけれども——あの方こそ、かた少し馬鹿竹になつた方がいでしょう。無暗むやみに威張るんですもの。この間もなんとか云う詩人が新体詩集を捧げたつて、みんなに吹聴ふいちようしているんですもの」

「東風さんでしょう」

「あら、あの方が捧げたの、よつぽど物数奇ものずきね」

「でも東風さんは大変真面目なんですよ。自分じゃ、あんな事をするのが当前あたりまえだとまで思つてるんですもの」

「そんな人があるから、いけないんですよ。——それからまだ面白い事があるの。こないだ此間ここだれか、あの方の所ところへ艶書えんしよを送つたものがあるんだつて」

「おや、いやらしい。誰なの、そんな事をしたのは」

「誰だかわからないんだって」

「名前はないの？」

「名前はちゃんと書いてあるんだけれども聞いた事もない人だつて、そうしてそれが長い長い一間ばかりもある手紙でね。いろいろな妙な事がかいてあるんですとき。私があなたを恋つてい^{わたし}るのは、ちようど宗教家が神にあこがれているようなものなの、あなたのためならば祭壇に供える小羊となつて屠^{ほふ}られるのが無上の名誉であるの、心臓の形^{かた}ちが三角で、三角の中心にキューピッドの矢が立って、吹き矢なら大当りであるの……」

「そりや真面目なの？」

「真面目なんですとき。現にわたしの御友達のうちでその手紙を見たものが三人あるんですもの」

「いやな人ね、そんなものを見せびらかして。あの方は寒月さ

んのとこへ御嫁に行くつもりなんだから、そんな事が世間へ知れちゃ困るでしょうにね」

「困るどころですか大得意よ。こんだ寒月さんが来たら、知らして上げたらいいでしょう。寒月さんはまるで御存じないんでしょう」

「どうですか、あの方は学校へ行つて球たまばかり磨いていらつしやるから、大方知らないでしょう」

「寒月さんは本当にあの方を御貫おもらいになる気なんでしょうかね。御気の毒だわね」

「なぜ？ 御金があつて、いざつて時に力になつて、いいじゃありませんか」

「叔母さんは、じきに金、金つて品ひんがわるいのね。金より愛の方が大事じゃありませんか。愛がなければ夫婦の関係は成立し

やしないわ」

「そう、それじゃ雪江さんは、どんなところへ御嫁に行くの？」

「そんな事知るもんですか、別に何もないんですもの」

雪江さんと叔母さんは結婚事件について何か弁論を逞しくし

ていると、さつきから、分らないなりに謹聴していると、ん子が

突然口を開いて「わたしも御嫁に行きたいな」と云いだした。

この無鉄砲な希望には、さすが青春の氣に満ちて、大に同情を

寄すべき雪江さんもちよつと毒氣を抜かれた体であつたが、細

君の方は比較的平氣に構えて「どこへ行きたいの」と笑ながら

聞いて見た。

「わたしねえ、本当はね、招魂社へ御嫁に行きたいんだけれど

も、水道橋を渡るのがいやだから、どうしようかと思つてるの」

細君と雪江さんはこの名答を得て、あまりの事に問い返す勇

気もなく、どつと笑い崩れた時に、次女のすん子が姉さんに向つてかような相談を持ちかけた。

「御ねえ様も招魂社がすき？　わたしも大すき。いつしよに招魂社へ御嫁に行きましよう。ね？　いや？　いやなら好いわ。わたし一人で車へ乗つてさつきと行つちまうわ」

「坊ばも行くの」とついには坊ばさんまでが招魂社へ嫁に行く事になった。かように三人が顔を揃えて招魂社へ嫁に行けたら、主人もさぞ楽であろう。

ところへ車の音ががらがらと門前に留つたと思つたら、たちまち威勢のいい御帰りと云う声が出た。主人は日本堤分署から戻つたと見える。車夫が差出す大きな風呂敷包を下女に受け取らして、主人は悠然と茶の間へ這入つて来る。「やあ、来たね」と雪江さんに挨拶しながら、例の有名なる長火鉢の傍へ、ぽか

りと手に携たずさえた徳利様のものを抛ほうり出した。徳利様と云うのは純然たる徳利では無論ない、と云つて花活はないけとも思われぬ、ただ一種異様の陶器であるから、やむを得ずしばらくかように申したのである。

「妙な徳利ね、そんなものを警察から貰つていらしたの」と雪江さんが、倒れた奴を起しながら叔父さんに聞いて見る。叔父さんは、雪江さんの顔を見ながら、「どうだ、いい恰好かつこうだろう」と自慢する。

「いい恰好なの？　それが？　あんまりよかあないわ？　油壺あぶらつぼ

なんか何で持つていらつしたの？」

「油壺なものか。そんな趣味のない事を云うから困る」

「じゃ、なあに？」

「花活はないけさ」

「花活にしちや、口が小さい過ぎて、いやに胴が張ってるわ」
「そこが面白いんだ。御前も無風流だな。まるで叔母さんと拵
ぶところなしだ。困ったものだな」と独りで油壺を取り上げて、
障子の方へ向けて眺めている。

「どうせ無風流ですわ。油壺を警察から貰ってくるような真似
は出来ないわ。ねえ叔母さん」叔母さんはそれどころではない、
風呂敷包を解いて皿眼になつて、盗難品を検べている。「おや驚
ろいた。泥棒も進歩したのね。みんな、解いて洗い張をしてあ
るわ。ねえちよいと、あなた」

「誰が警察から油壺を貰ってくるものか。待つてるのが退屈だ
から、あすこいらを散歩しているうちに堀り出して来たんだ。
御前なんぞには分るまいがそれでも珍品だよ」

「珍品過ぎるわ。一体叔父さんはどこを散歩したの」

「どこつて日本堤^{にほんづつみ}界限^{かいわい}さ。吉原へも這^{はい}入^いつて見た。なかなか盛^{さかん}な所だ。あの鉄の門を觀^みた事があるかい。ないだろう」

「だれが見るもんですか。吉原なんて賤業婦^{せんぎようふ}のいる所へ行く因縁^{いんねん}がありませんわ。叔父さんは教師の身で、よくまあ、あんな所へ行かれたものねえ。本当に驚ろいてしまうわ。ねえ叔母さん、叔母さん」

「ええ、そうね。どうも品数^{しなかず}が足りないようだ事。これでみんな戻^{かへ}つたんでしょうか」

「戻^{かへ}らんのは山の芋ばかりさ。元来九時に出頭しろと云いながら十一時まで待たせる法があるものか、これだから日本の警察はいかん」

「日本の警察がいけないって、吉原を散歩しちやなおいけないわ。そんな事が知れると免職になつてよ。ねえ叔母さん」

「ええ、なるでしょう。あなた、私の帯の片側かたかわがないんです。何だか足りないと思つたら」

「帯の片側くらいあきらめるさ。こつちは三時間も待たされて、大切な時間を半日潰つぶしてしまつた」と日本服に着代えて平氣に火鉢へもたれて油壺を眺ながめている。細君も仕方がないと諦あきらめて、戻つた品をそのまま戸棚へしまい込んで座に帰る。

「叔母さん、この油壺が珍品ですとき。きたないじゃありませんか」

「それを吉原で買つていらしつたの？　まあ」

「何がまあだ。分りもしない癖に」

「それでもそんな壺なら吉原へ行かなくつても、どこにだつてあるじゃありませんか」

「ところがないんだよ。滅多めったに有る品ではないんだよ」

「叔父さんは随分石地蔵いしじぞうね」

「また小供の癖に生意気を云う。どうもこの頃の女学生は口が悪くついていかん。ちと女大学でも読むがいい」

「叔父さんは保険が嫌きらひでしょう。女学生と保険とどっちが嫌なの？」

「保険は嫌ではない。あれは必要なものだ。未来の考のあるものは、誰でも這入はいる。女学生は無用の長物だ」

「無用の長物でもいい事よ。保険へ這入ってもいない癖に」
「来月から這入るつもりだ」

「きつと？」

「きつとだとも」

「およしなきいよ、保険なんか。それよりかその懸金かけきんで何か買った方がいいわ。ねえ、叔母さん」叔母さんにはやにや笑つてい

る。主人は真面目になつて

「お前などは百も二百も生きる気だから、そんな呑気のんきな事を云うのだが、もう少し理性が発達して見ろ、保険の必要を感じずるに至るのは当前あたりまえだ。ぜひ来月から這入るんだ」

「そう、それじゃ仕方がない。だけどこないだのように蝙蝠傘こうもりを買つて下さる御金があるなら、保険に這入る方がましかも知れないわ。ひとがいりません、いりませんと云うのを無理に買つて下さるんですもの」

「そんなにいらなかつたのか？」

「ええ、蝙蝠傘なんか欲かえしくないわ」

「そんなら還かえすがいい。ちようど、とん子が欲かえしがつてゐるから、あれをこつちへ廻してやろう。今日持つて来たか」

「あら、そりや、あんまりだわ。だつて苛ひどいじゃありませんか、

せつかく買つて下すつておきながら、還せなんて」

「いらないと云うから、還せと云うのさ。ちつとも苛くはない」

「いらぬ事はいらぬんですけれども、苛いわ」

「分らん事を言う奴だな。いらぬと云うから還せと云うのに苛い事があるものか」

「だつて」

「だつて、どうしたんだ」

「だつて苛いわ」

「愚^ぐだな、同じ事ばかり繰り返している」

「叔父さんだつて同じ事ばかり繰り返しているじゃありませんか」

「御前が繰り返すから仕方がないさ。現にいらぬと云つたじゃないか」

「そりや云いましたわ。 いらぬ事はいらぬですけれども、
還すのは厭いやですもの」

「驚ろいたな。 没分曉わからずやで強情なんだから仕方がない。 御前の学
校じゃ論理学を教えないのか」

「よくつてよ、どうせ無教育なんですから、何とでもおつしや
い。 人のものを還せだなんて、他人だつてそんな不人情な事は
云やしない。 ちつと馬鹿竹ばかたけの真似でもなさい」

「何の真似をしる？」

「ちと正直たんぱくに淡泊たんぱくになさいと云うんです」

「お前は愚物の癖にやに強情だよ。 それだから落第するんだ」
「落第したつて叔父さんに学資は出して貰やしないわ」

雪江げんさんは言げんここに至いたつて感に堪たえざるもののごとく、 澹然さんぜん
として一掬いっさくの涙なんだを紫はかまの袴はかまの上に落した。 主人は茫乎ぼうことして、そ

の涙がいかなる心理作用に起因するかを研究するもののごとく、袴の上と、俯うつつ向いた雪江さんの顔を見つめていた。ところへ御三おさんが台所から赤い手を敷居越そくに揃そろえて「お客さまがいらつしやいました」と云う。「誰が来たんだ」と主人が聞くと「学校の生徒さんでございます」と御三は雪江さんの泣顔を横目に睨にらめながら答えた。主人は客間へ出て行く。吾輩も種取り兼人けん間研究のため、主人に尾びして忍しのびやかに椽えんへ廻まわった。人間を研究するには何か波瀾がある時を択えらばないと一向結果いつくうが出て来ない。平生は大方の人が大方の人であるから、見ても聞いても張合のないくらい平凡である。しかしいざとなるとこの平凡が急に靈妙なる神秘的作用のためにむくむくと持ち上がって奇なもの、変なもの、妙なもの、異いなもの、一と口に云えば吾輩猫共おうふうから見てすこぶる後学になるような事件が至るところに横風おうふうにあら

われてくる。雪江さんの紅涙こうるいのごときはまさしくその現象の一つである。かくのごとく不可思議、不可測ふかそくの心を有している雪江さんも、細君と話をしているうちはさほども思わなかつたが、主人が帰ってきて油壺ほうを抛り出すやいなや、たちまち死竜しりゅうに蒸汽唧筒じようきポンプを注ぎかけたるごとく、勃然ぼつぜんとしてその深奥しんおうにして窺知きちすべからざる、巧妙なる、美妙なる、奇妙なる、靈妙なる、麗質れいしつを、惜気もなく発揚おほし了つた。しかしてその麗質は天下の女性にょしやうに共通なる麗質である。ただ惜しい事には容易にあらわれて来ない。否いやあらわれる事は二六時中間断なくあらわれているが、かくのごとく顯著しやくぜんに灼然炳乎しやくぜんへいことして遠慮なくはあらわれて来ない。幸にして主人のように吾輩の毛をややともすると逆さに撫なでたがる旋毛曲つむじまがりの奇特家きどくかがおつたから、かかる狂言も拝見が出来たのであろう。主人のあとさえついてあるけば、どこ

へ行つても舞台の役者は吾知らず動くに相違ない。面白い男を
旦那様にいただ載いて、短かい猫の命のうちにも、大分だいぶん多くの経験が
出来る。ありがたい事だ。今度のお客は何者であらう。

見ると年頃は十七八、雪江さんと追おつ、返かつつの書生であ
る。大きな頭を地じの隙すいて見えるほど刈り込んで団子だんごつ鼻ばなを顔
の真中にかためて、座敷の隅の方に控ひかえている。別にこれと云
う特徴もないが頭蓋骨ずがいこつだけはすこぶる大きい。青坊主に刈つて
さえ、ああ大きく見えるのだから、主人のように長く延ばした
ら定めし人目を惹ひく事だろう。こんな顔にかぎつて学問はあま
り出来ない者だとは、かねてより主人の持説である。事実はそ
うかも知れないがちよつと見るとナポレオンのようですこぶる
偉観である。着物は通例の書生のごとく、薩摩さつまがすり緋かすりか、久留米くるめが
すりかまた伊予いよ緋かすりか分らないが、ともかくも緋と名づけられた

る^{あわせ}裕を袖短かに着こなして、下には襦^シ衣も襦^ジ袷もないようだ。
素^す裕や素^す足は意気なものだそうだが、この男のはなはだむき苦
しい感じを与える。ことに畳の上に泥棒のような親指を歴然と
三つまで印^{いん}しているのは全く素足の責任に相違ない。彼は四つ
目の足跡の上へちゃんと坐つて、さも窮屈そうに畏^かしこまつて
いる。一体かしこまるべきものがおとなしく控^{ひか}えるのは別段気
にするにも及ばんが、毬^{いがり}栗頭のつんつるてんの乱暴者が恐縮し
ているところは何となく不調和なものだ。途中で先生に逢つて
さえ礼をしないのを自慢にするくらいの連中が、たとい三十^{きようけん}分
でも人並に坐るのは苦しいに違ない。ところを生れ得て恭謙^{きようけん}の
君子、盛徳^{ちようしや}の長者であるかのごとく構えるのだから、当人の苦
しいにかかわらず傍^{はた}から見ると大分^{だいぶん}おかしいのである。教場も
しくは運動場であんなに騒々しいものが、どうしてかように自

己を箝束^{かんそく}する力を具^{そな}えているかと思うと、憐れにもあるが滑稽^{こつけい}でもある。こうやって一人ずつ相對^{あいたい}になると、いかに愚駭^{ぐがい}なる主人といえども生徒に對して幾分かの重みがあるように思われる。主人も定めし得意であらう。塵積^{ちり}つて山をなすと云うから、微々たる一生徒も多勢^{たぜい}が聚合^{しゅうごう}すると侮^{あなど}るべからざる団体となつて、排斥運動^{はいせき}やストライキをしでかすかも知れない。これはちようど臆病者が酒を飲んで大胆になるような現象であらう。衆を頼んで騒ぎ出すのは、人の氣に酔つ払つた結果、正氣を取り落したるものと認めて差支^{さしつか}えあるまい。それでなければかように恐れ入ると云わんよりむしろ悄然^{しょうぜん}として、自ら襖^{みずか}に押し付けられていくくらいな薩摩緋^{ふすま}が、いかに老朽だと云つて、苟^{かりそ}めにも先生と名のつく主人を輕蔑^{けいべつ}しようがない。馬鹿に出来る訳がない。

主人は座布団ざぶとんを押しやりながら、「さあお敷き」と云つたが
 毬栗先生はかたくなつたまま「へえ」と云つて動かない。鼻の
 先に剥はげかかつた更紗さらさの座布団が「御乗んなさい」とも何とも
 云わずに着席している後ろうしろに、生きた大頭がつくねんと着席し
 ているのは妙なものだ。布団は乗るための布団で見詰めるため
 に細君が勧工場から仕入れて来たのではない。布団にして敷か
 れずんば、布団はまさしくその名誉を毀損きそんせられたるもので、
 これを勧めたる主人もまた幾分か顔が立たない事になる。主人
 の顔を潰つぶしてまで、布団と睨にらめくらをしている毬栗君は決して
 布団その物が嫌きらいなのではない。実を云うと、正式に坐つた事は
 祖父じいさんの法事の時のほかは生れてから滅多めったにないので、先さつ
 きからすでにしびれが切れかかつて少々足の先は困難を訴えて
 いるのである。それにもかかわらず敷かない。布団が手持無沙

汰に控ひかえているにもかかわらず敷かない。主人がさあお敷きと云うのに敷かない。厄介な毬栗坊主だ。このくらい遠慮するなら多人数集たにんずまつた時もう少し遠慮すればいいのに、学校でもう少し遠慮すればいいのに、下宿屋でもう少し遠慮すればいいのに。すまじきところへ氣兼きがねをして、すべき時には謙遜けんそんしない、否大に狼藉おおい ろうぜきを働らく。たちの悪るい毬栗坊主だ。

ところへ後ろうしの襖ふすまをすうと開けて、雪江さんが一碗の茶を恭うやうやしく坊主に供した。平生なら、そらサヴェジ・チーが出たと冷ひやかすのだが、主人一人に対してすら痛み入いっている上へ、妙齡にょしょうの女性が学校で覚え立ての小笠原流で、乙おつに氣取おおいつた手つきをして茶碗を突きつけたのだから、坊主は大に苦悶くもんの体ていに見え
る。雪江さんは襖ふすまをしめる時に後ろからにやにやと笑った。して見ると女は同年輩でもなかなかえらいものだ。坊主に比すれ

ば遙かに度胸が据わっている。ことに先刻の無念にはらはらと流した一滴の紅涙のあとだから、このにやにやがさらに目立つて見えた。

雪江さんの引き込んだあとは、双方無言のまま、しばらくの間は辛防していたが、これでは業をするようなものだと気がついた主人はようやく口を開いた。

「君は何とか云ったけな」

「古井……」

「古井？ 古井何とかだね。名は」

「古井武右衛門」

「古井武右衛門——なるほど、だいぶ長い名だな。今の名じゃない、昔の名だ。四年生だったね」

「いいえ」

「三年生か？」

「いいえ、二年生です」

「甲の組かね」

「乙です」

「乙なら、わたしの監督だね。そうか」と主人は感心している。実はこの大頭は入学の当時から、主人の眼についているんだから、決して忘れるどころではない。のみならず、時々夢に見るくらい感銘した頭である。しかし呑気な主人はこの頭とこの古風な姓名とを連結して、その連結したものをまた二年乙組に連結する事が出来なかったのである。だからこの夢に見るほど感心した頭が自分の監督組の生徒であると聞いて、思わずそう、かと心の裏で手を拍ったのである。しかしこの大きな頭の、古い名の、しかも自分の監督する生徒が何のために今頃やって来

たのか頓とんと推諉すいりよう出来ない。元来不人望な主人の事だから、学校の生徒などは正月だろうが暮だろうがほとんど寄りついた事がない。寄りついたのは古井武右衛門君をもつて嚙矢こうしとするくらいな珍客であるが、その来訪の主意がわからんには主人もおおいに閉口しているらしい。こんな面白くない人の家うちへただ遊びにくる訳もなからうし、また辞職勧告ならもう少し昂然こうぜんと構え込みそうだし、と云つて武右衛門君などが一身上の用事相談があるはずがないし、どっちから、どう考えても主人には分らない。武右衛門君の様子を見るとあるいは本人自身にすら何で、ここまで参つたのか判然しないかも知れない。仕方がないから主人からとうとう表向に聞き出した。

「君遊びに来たのか」

「そうじゃないんです」

「それじゃ用事かね」

「ええ」

「学校の事かい」

「ええ、少し御話ししようと思つて……」

「うむ。どんな事かね。さあ話したまえ」と云うと武右衛門君下を向いたぎり何にも言わない。元来武右衛門君は中学の二年生にしてはよく弁ずる方で、頭の大きい割に脳力は発達しておらんが、喋舌る事においては乙組中鏘々たるものである。現にせんだつてコロンバスの日本訳を教えろと云つて大に主人を困らしたはまさにこの武右衛門君である。その鏘々たる先生が、最前から吃の御姫様のようにもじもじしているのは、何か云わくのある事でなくてはならん。単に遠慮のみとはとうてい受け取られない。主人も少々不審に思つた。

「話す事があるなら、早く話したらいいじゃないか」

「少し話にくい事で……」

「話にくい？」と云いながら主人は武右衛門君の顔を見たが、先方は依然として俯向うつむきになつてゐるから、何事とも鑑定が出来ない。やむを得ず、少し語勢を変えて「いいさ。何でも話すがいい。ほかに誰も聞いていやしな。わたしも他言たごんはしないから」と穏おだやかにつけ加えた。

「話してもいいでしょうか？」と武右衛門君はまだ迷つてゐる。

「いいだろう」と主人は勝手な判断をする。

「では話しますが」といいかけて、毬栗頭いがぐりあたまをむくりと持ち上げ

て主人の方をちよつとまばしそうに見た。その眼は三角である。主人は頬をふくらまして朝日の煙を吹き出しながらちよつと横を向いた。

「実はその……困った事になつちまつて……」

「何が？」

「何がって、はなはだ困るものですから、来たんです」

「だからさ、何が困るんだよ」

「そんな事をする考はなかつたんですけれども、浜田^{はまだ}が借せ借せと云うもんですから……」

「浜田と云うのは浜田平助^{へいすけ}かい」

「ええ」

「浜田に下宿料でも借したのかい」

「何そんなものを借したんじゃないやありません」

「じゃ何を借したんだい」

「名前を借したんです」

「浜田が君の名前を借りて何をしたんだい」

「艶書えんしよを送ったんです」

「何を送った？」

「だから、名前は廃よして、投函役とうかんやくになると云ったんです」

「何だか要領を得んじやないか。一体誰が何をしたんだい」

「艶書えんしよを送ったんです」

「艶書を送った？ 誰に？」

「だから、話しにくいと云うんです」

「じゃ君が、どこかの女に艶書を送ったのか」

「いいえ、僕じやないんです」

「浜田が送ったのかい」

「浜田でもないんです」

「じゃ誰が送ったんだい」

「誰だか分らないんです」

「ちつとも要領を得ないな。では誰も送らんのかい」

「名前だけは僕の名なんです」

「名前だけは君の名だつて、何の事だかちつとも分らんじやないか。もつと条理を立てて話すがいい。元来その艶書を受けた当人はだれか」

「金田むこうよこちようつて向横丁にいる女です」

「あの金田という実業家か」

「ええ」

「で、名前だけ借したとは何の事だい」

「あすこの娘がハイカラで生意気だから艶書を送ったんです。

——浜田が名前がなくちやいけないって云いますから、君の名前をかけて云ったら、僕のじゃつまらない。古井武右衛門の方がいいって——それで、とうとう僕の名を借してしまつたん

です」

「で、君はあすこの娘を知ってるのか。交際でもあるのか」

「交際も何もありやしません。顔なんか見た事ありません」

「乱暴だな。顔も知らない人に艶書をやるなんて、まあどう云う了見で、そんな事をしたんだい」

「ただみんながあいつは生意気で威張ってるて云うから、からかってやったんです」

「ますます乱暴だな。じゃ君の名を公然とかいて送ったんだな」
「ええ、文章は浜田が書いたんです。僕が名前を借して遠藤が夜あすこのうちまで行つて投函して来たんです」

「じゃ三人で共同してやったんだね」

「ええ、ですけども、あとから考えると、もしあらわれて退学にでもなると大変だと思つて、非常に心配して二三日は寝ら

にさんち

れないんで、何だか茫ぼんやりしてしまいました」

「そりやまた飛んでもない馬鹿をしたもんだ。それで文明中学二年生古井武右衛門とでもかいたのかい」

「いいえ、学校の名なんか書きやしません」

「学校の名を書かないだけまあよかった。これで学校の名が出て見るがいい。それこそ文明中学の名誉に関する」

「どうでしょう退校になるでしょうか」

「そうさな」

「先生、僕のおやじさんは大変やかましい人で、それにお母つかさんが継母まははですから、もし退校にでもなろうもんなら、僕あ困つちまうです。本当に退校になるでしょうか」

「だから滅多めったな真似をしないがいい」

「する気でもなかったんですが、ついやってしまったんです。」

退校にならないように出来ないでしうか」と武右衛門君は泣き出し、そんな声をしてしきりに哀願に及んでいる。襖ふすまの蔭かげでは、最前さいぜんから細君と雪江さんがくすくす笑っている。主人は飽あくまでももつたいぶつて「そうさな」を繰り返している。なかなか面白い。

吾輩が面白いというと、何がそんなに面白いと聞く人があるかも知れない。聞くのはもつともだ。人間にせよ、動物にせよ、己おのれを知るのは生涯しょうがいの大事である。己おのれを知る事が出来さえすれば人間も人間として猫より尊敬を受けてよろしい。その時は吾輩もこんないたずらを書くのは気の毒だからすぐさまやめてしまふつもりである。しかし自分で自分の鼻の高さが分らないと同じように、自己の何物かはなかなか見当けんとうが付き悪わるくいと見えて、平生から軽蔑けいべつしている猫に向つてさえかような質問をかけるの

であろう。人間は生意気なようでもやはり、どこか抜けている。万物の霊だなどどこへでも万物の霊を担かついであるくかと思うと、これしきの事実が理解出来ない。しかも恬てんとして平然たるに至つてはちと一噓いっきやくを催したくなる。彼は万物の霊を背せなか中へ担かついで、おれの鼻はどこにあるか教えてくれ、教えてくれと騒ぎ立てている。それなら万物の霊を辞職するかと思うと、どう致して死んでも放しそうにしない。このくらい公然と矛盾をして平気でいられれば愛嬌あいぎょうになる。愛嬌になる代りには馬鹿をもつて甘あまんじなくてはならん。

吾輩がこの際武右衛門君と、主人と、細君及雪江嬢を面白がるのは、単に外部の事件が鉢合はちあわせをして、その鉢合はちあわせが波動を乙おつなところに伝えるからではない。実はその鉢合はちあわの反響が人間の心こゝろに個々別々の音色ねいろを起すからである。第一主人はこの事件

に對してむしろ冷淡である。武右衛門君のおやじさんがいかに
やかましくつて、おつかさんがいかに君を継子ままこあつかいにしよ
うとも、あんまり驚ろかない。驚ろくはずがない。武右衛門君
が退校になるのは、自分が免職になるのとは大に趣おもむきが違ちがう。千
人近くの生徒がみんな退校になったら、教師も衣食みちの途に窮す
るかも知れないが、古井武右衛門君一人の運命がどう変化しよ
うと、主人の朝夕ちようせきにはほとんど関係がない。関係の薄いところ
には同情も自おのずから薄い訳である。見ず知らずの人のために眉まゆを
ひそめたり、鼻をかんだり、嘆息をするのは、決して自然の傾向
ではない。人間がそんなに情深い、思いやりのある動物である
とははなはだ受け取りにくい。ただ世の中に生れて來た賦税ふぜいと
して、時々交際のために涙を流して見たり、氣の毒な顔を作つ
て見せたりするばかりである。云わばごまかし性せい表情で、実を

云うと大分骨^{だいふ}が折れる芸術である。このごまかしをうまくやるものを芸術的良心の強い人と云つて、これは世間から大変珍重される。だから人から珍重される人間ほど怪しいものはない。試して見ればすぐ分る。この点において主人はむしろ拙^{せつ}な部類に属すると云つてよろしい。拙だから珍重されない。珍重されないから、内部の冷淡を存外隠すところもなく発表している。彼が武右衛門君に対して「そうさな」を繰り返しているのも這裏^{しやり}の消息はよく分る。諸君は冷淡だからと云つて、けつして主人のような善人を嫌つてはいけない。冷淡は人間の本来の性質であつて、その性質をかくそうと力^{つと}めないのは正直な人である。もし諸君がかかる際に冷淡以上を望んだら、それこそ人間を買い被^{かぶ}つたと云わなければならない。正直ですら払底^{ふつてい}な世にそれ以上を予期するのは、馬琴^{ばきん}の小説から志乃^{しの}や小文吾^{こぶんご}が抜け

だして、向う三軒両隣へ八犬伝が引き越した時でなくては、あ
てにならない無理な注文である。主人はまずこのくらいにして、
次には茶の間で笑ってる女連に取りかかるが、これは主人の冷
淡を一步向へ跨いで、滑稽の領分に躍り込んで嬉しがっている。
この女連には武右衛門君が頭痛に病んでいる艶書事件が、仏陀
の福音のごとくありがたく思われる。理由はないただありがた
い。強いて解剖すれば武右衛門君が困るのがありがたいのであ
る。諸君女に向って聞いて御覧、「あなたは人が困るのを面白
がって笑いますか」と。聞かれた人はこの問を呈出した者を馬
鹿と云うだろう、馬鹿と云わなければ、わざとこんな問をかけ
て淑女の品性を侮辱したと云うだろう。侮辱したと思うのは事
実かも知れないが、人の困るのを笑うのも事実である。である
とすれば、これから私の品性を侮辱するような事を自分でして

お目にかけますから、何とか云っちゃいやよと断わるのと一般である。僕は泥棒をする。しかしけっして不道德と云つてはならん。もし不道德だなどと云えば僕の顔へ泥を塗つたものである。僕を侮辱したものである。と主張するようなものだ。女はなかなか利口だ、考えに筋道が立っている。いやしくも人間に生れる以上は踏んだり、蹴^けたり、どやされたりして、しかも人が振りむきもせぬ時、平気でいる覚悟が必用であるのみならず、唾を吐きかけられ、糞をたれかけられた上に、大きな声で笑われるのを快よく思わなくてはならない。それでなくてはかように利口な女と名のつくものと交際は出来ない。武右衛門先生もちよつとしたはずみから、とんだ間違をして大に恐れ入つてはい^{おおい}るようなものの、かように恐れ入つてるものを蔭で笑うのは失敬だとかうらひは思ふかも知れないが、それは年が行かない稚^ち氣^き

というもので、人が失礼をした時に怒るのを気が小さいと先方では名づけるそうだから、そう云われるのがいやならおとなしくするがよろしい。最後に武右衛門君の心行きをちよつと紹介する。君は心配の権化である。かの偉大なる頭脳はナポレオンのそれが功名心をもつて充満せるがごとく、まさに心配をもつてはちきれんとしている。時々その団子つ鼻がびくびく動くのは心配が顔面神経に伝つて、反射作用のごとく無意識に活動するのである。彼は大きな鉄砲丸を飲み下したごとく、腹の中にいかんともすべからざる塊まりを抱いて、この両三日処置に窮している。その切なさの余り、別に分別の出所もないから監督と名のつく先生のところへ出向いたら、どうか助けてくれるだろうと思つて、いやな人の家へ大きな頭を下げにまかり越したのである。彼は平生学校で主人にからかったり、同級生を煽動

して、主人を困らしたりした事はまるで忘れてゐる。いかにか
らかおうとも困らせようとも監督と名のつく以上は心配してく
れるに相違ないと信じてゐるらしい。随分単純なものだ。監督
は主人が好んでなつた役ではない。校長の命によつてやむを得
ずいただゐている、云わば迷亭の叔父さんの山高帽子の種類で
ある。ただ名前である。ただ名前だけではどうする事も出来な
い。名前がいざと云う場合に役に立つなら雪江さんは名前だけ
で見合が出来る訳だ。武右衛門君はただに我儘わがままなるのみならず、
他人は己おのれに向つて必ず親切でなくてはならんと云う、人間を
買い被かぶつた仮定から出立してゐる。笑われるなどとは思も寄ら
なかつたろう。武右衛門君は監督の家うちへ来て、きつと人間につ
いて、一の真理を發明したに相違ない。彼はこの真理のために
将来ますます本当の人間になるだろう。人の心配には冷淡にな

るだろう、人の困る時には大きな声で笑うだろう。かくのごとくにして天下は未来の武右衛門君をもつて充たみされるであらう。金田君及び金田令夫人をもつて充たされるであらう。吾輩は切に武右衛門君のために瞬時も早く自覚して真人間まにんげんになれん事を希望するのである。しからずんばいかに心配するとも、いかに後悔するとも、いかに善に移るの心が切実なりとも、とうてい金田君のごとき成功は得られのである。いな社会は遠からずして君を人間の居住地以外に放逐するであらう。文明中学の退校どころではない。

かように考えて面白いなと思つていると、格子こうしががらがらとあいて、玄関しょうじの障子の蔭から顔が半分ぬうと出た。

「先生」

主人は武右衛門君に「そうさな」を繰り返していたところへ、

先生と玄関から呼ばれたので、誰だろうとそつちを見ると半分ほど筋違すじかいに障子から食はみ出している顔はまさしく寒月君である。

「おい、御這入おはいり」と云つたぎり坐つてゐる。

「御客ですか」と寒月君はやはり顔半分で聞き返している。

「なに構わん、まあ御上おあがり」

「実はちよつと先生を誘いに來たんですがね」

「どこへ行くんだい。また赤坂かい。あの方面はもう御免だ。せんだつては無闇むやみにあるかせられて、足が棒のようになった」

「今日は大丈夫です。久し振りに出ませんか」

「どこへ出るんだい。まあ御上おあがり」

「上野へ行つて虎の鳴き声を聞こうと思うんです」

「つまらんじゃないか、それよりちよつと御上おあり」

寒月君はとうてい遠方では談判不調と思つたものか、靴を脱い

でのそのそ上がつて来た。例のごとく鼠色ねずみいろの、尻につぎの中あたつたずぼんを穿はいているが、これは時代のため、もしくは尻の重いために破れたのではない、本人の弁解によると近頃自転車の稽古を始めて局部に比較的多くの摩擦を与えるからである。未来の細君をもつて矚目しよくもくされた本人へ文ふみをつけた恋の仇あだとは夢にも知らず、「やあ」と云つて武右衛門君に軽く会釈えしやくをして椽側えんがわへ近い所へ座をしめた。

「虎の鳴き声を聞いたつて詰らないじゃないか」

「ええ、今じゃいけません、これから方々散歩して夜十一時頃になつて、上野へ行くんです」

「へえ」

「すると公園内の老木は森々しんしんとして物凄ものすじいでしょう」

「そうさな、昼間より少しは淋さみしいだろう」

「それで何でもなるべく樹きの茂つた、昼でも人の通らない所を
択よつてあるいていると、いつの間まにか紅塵こうじん万丈の都会に住んで
る気はなくなつて、山の中へ迷い込んだような心持ちになるに
相違ないです」

「そんな心持ちになつてどうするんだい」

「そんな心持ちになつて、しばらく佇たたずんでいるとたちまち動物
園のうちで、虎が鳴くんです」

「そう旨うまく鳴くかい」

「大丈夫鳴きます。あの鳴き声は昼でも理科大学へ聞えるくら
いなんですから、深夜げきせき闐寂しぼうとして、四望人なく、鬼氣肌はだえに逼せま
つて、魑魅鼻ちみを衝つく際さいに……」

「魑魅鼻を衝くとは何の事だい」

「そんな事を云うじゃありませんか、怖こわい時に」

「そうかな。あんまり聞かないようだが。それで」

「それで虎が上野の老杉ろうさんの葉をことごとく振り落すような勢で鳴くでしょう。物凄いでさあ」

「そりや物凄いだろう」

「どうです冒険に出掛けませんか。きっと愉快だろうと思うんです。どうしても虎の鳴き声は夜なかに聞かなくっちゃ、聞いたとはいわれないだろうと思うんです」

「そうさな」と主人は武右衛門君の哀願に冷淡であるごとく、寒月君の探検にも冷淡である。

この時まで默然もくねんとして虎の話を羨ましうらやそうに聞いていた武右

衛門君は主人の「そうさな」で再び自分の身の上を思い出したと見えて、「先生、僕は心配なんですが、どうしたらいいでしょう」とまた聞き返す。寒月君は不審な顔をしてこの大きな頭を

見た。吾輩は思う仔細しさいあつてちよつと失敬して茶の間へ廻る。

茶の間では細君がくすくす笑いながら、京焼の安茶碗に番茶なみなみを浪々と注いで、アンチモニの茶托ちやたくの上へ載せて、

「雪江さん、憚りさま、これを出して来て下さい」
はばか

「わたし、いやよ」

「どうして」と細君は少々驚ろいた体で笑いはたと留める。てい

「どうしてでも」と雪江さんはやにすました顔を即席にこしらえて、傍そばにあつた読売新聞の上にのしかかるように眼を落した。

細君はもう一応きようしやう協商を始める。

「あら妙な人ね。寒月さんですよ。構やしないわ」

「でも、わたし、いやなんですもの」と読売新聞の上から眼を放さない。こんな時に一字も読めるものではないが、読んでいないなどとあばかれたらまた泣き出すだろう。

「ちつとも恥かしい事はないじやありませんか」と今度は細君笑いながら、わざと茶碗を読売新聞の上へ押しやる。雪江さんは「あら人の悪るい」と新聞を茶碗の下から、抜こうとする拍子に茶托ちやたくに引きかかつて、番茶は遠慮なく新聞の上から畳の目へ流れ込む。「それ御覧なさい」と細君が云うと、雪江さんは「あら大変だ」と台所へ馳かけ出して行つた。雑巾ぞうきんでも持つてくる了りようけん見だろう。吾輩にはこの狂言がちよつと面白かつた。

寒月君はそれとも知らず座敷で妙な事を話している。

「先生障子しょうじを張り易かえましたね。誰が張つたんです」

「女が張つたんだ。よく張れているだろう」

「ええなかなかうまい。あの時々おいでになる御嬢さんが御張りになったんですか」

「うんあれも手伝つたのさ。このくらい障子が張れば嫁に行

く資格はあると云つて威張つてゐるぜ」

「へえ、なるほど」と云いながら寒月君障子を見つめている。

「こつちの方は平たいらですが、右の端はじは紙が余つて波が出来ていますね」

「あすこが張りたてのところで、もつとも経験の乏とぼしい時に出
来上つたところさ」

「なるほど、少し御手際おてぎわが落ちますね。あの表面は超絶的ちようぜつてきぎよくせん曲線
でどうてい普通のファンクションではあらわせないです」と、
理学者だけにむずかしい事を云うと、主人は

「そうさね」と好い加減な挨拶をした。

この様子ではいつまで嘆願をしても、どうてい見込がな
いと思ひ切つた武右衛門君は突然かの偉大なる頭蓋骨ずがいこつを畳の上
にお圧しつけて、無言の裡うちに暗に訣別けつべつの意を表した。主人は「帰る

かい」と云った。武右衛門君は悄然^{しやうぜん}として薩摩下駄を引きずつて門を出た。可愛想^{かわいそう}に。打ちやつて置くと巖頭^{がんとう}の吟^{ぎん}でも書いてけごんのたき華巖滝から飛び込むかも知れない。元を糺^{ただ}せば金田令嬢のハイカラと生意氣から起った事だ。もし武右衛門君が死んだら、幽霊になつて令嬢を取り殺してやるがいい。あんなものが世界から一人や二人消えてなくなつたつて、男子はすこしも困らない。寒月君はもつと令嬢らしいのを貰うがいい。

「先生ありや生徒ですか」

「うん」

「大変大きな頭ですね。学問は出来ますか」

「頭の割には出来ないがね、時々妙な質問をするよ。こないだ
 coronバスを訳して下さいって大に弱^{おおい}つた」

「全く頭が大き過ぎますからそんな余計な質問をするんでしょ

う。先生何とおっしゃいました」

「ええ？　なあに好い加減な事を云つて訳してやった」

「それでも訳す事は訳したんですか、こりやえらい」

「小供は何でも訳してやらないと信用せんからね」

「先生もなかなか政治家になりましたね。しかし今の様子では、何だか非常に元気がなくつて、先生を困らせるようには見えな
いじゃありませんか」

「今日は少し弱つてるんだよ。馬鹿な奴だよ」

「どうしたんです。何だかちよつと見たばかりで非常に可哀想
になりました。全体どうしたんです」

「なに愚^ぐな事さ。金田の娘に艶書^{えんしよ}を送ったんだ」

「え？　あの大頭がですか。近頃の書生はなかなかえらいもんですね。どうも驚ろいた」

「君も心配だろうが……」

「何ちつとも心配じゃありません。かえつて面白いです。いくら、艶書が降り込んだつて大丈夫です」

「そう君が安心していれば構わないが……」

「構わんですとも私はいつこう構いません。しかしあの大頭が艶書をかいたと云うには、少し驚ろきますね」

「それがさ。^{じょうだん}冗談にしたんだよ。あの娘がハイカラで生意気だから、からかつてやろうつて、三人が共同して……」

「三人が一本の手紙を金田の令嬢にやつたんですか。ますます奇談ですね。一人前の西洋料理を三人で食うようなものじゃありませんか」

「ところが手分けがあるんだ。一人が文章をかく、一人が投函^{とうかん}する、一人が名前を借す。で今来たのが名前を借した奴なんだが

ね。これが一番愚^ぐだね。しかも金田の娘の顔も見ただ事がないつて云うんだぜ。どうしてそんな無茶な事が出来たものだろう」

「そりゃ、近来の大出来ですよ。傑作ですね。どうもあの大頭が、女に文^{ふみ}をやるなんて面白いじゃありませんか」

「飛んだ間違にならあね」

「なになつたつて構やしません、相手が金田ですもの」

「だって君が貰うかも知れない人だぜ」

「貰うかも知れないから構わないんです。なあに、金田なんか、構やしません」

「君は構わなくつても……」

「なに金田だつて構やしません、大丈夫です」

「それならそれでいいとして、当人があとになつて、急に良心に責められて、恐ろしくなつたものだから、大^{おお}に恐縮して僕の

うちへ相談に来たんだ」

しおしお

「へえ、それであんなに悄悄しおしおとしているんですか、気の小さい子と見えますね。先生何とか云っておやんなすったんでしょ」

「本人は退校になるでしよかつて、それを一番心配しているのさ」

「何で退校になるんです」

「そんな悪い、不道德な事をしたから」

「何、不道德と云うほどでもありませんやね。構やしません。

金田じゃ名誉に思つてきつと吹聴ふいちようしていますよ」

「まさか」

かわいそう

「とにかく可愛想ですよ。そんな事をするのがわるいとしても、あんなに心配させちゃ、若い男を一人殺してしまえますよ。ありや頭は大きいが人相はそんなにわるくありません。鼻なんか

ぴくぴくさせて可愛いです」

「君も大分迷亭見たように呑気のんきな事を云うね」

「何、これが時代思潮です、先生はあまり昔むかし風ふうだから、何でもむずかしく解釈なさるんです」

「しかし愚ぐじゃないか、知りもしないところへ、いたずらに艶書えんしよを送るなんて、まるで常識をかいてるじゃないか」

「いたずらは、たいがい常識をかいていませう。救つておやんなさい。功德くどくになりますよ。あの容子ようすじゃ華嚴けげんの滝へ出掛けますよ」

「そうだな」

「そうなさい。もつと大きな、もつと分別のある大僧共おおぞうがそれぞれところじゃない、わるいいたずらをして知らん面かおをしていますよ。あんな子を退校させるくらいなら、そんな奴らを片かたっ端はしか

ら放逐でもしなくっちゃ不公平でさあ」

「それもそうだね」

「それでどうです上野へ虎の鳴き声をききに行くのは」

「虎かい」

「ええ、聞きに行きましょう。実は二三日中^{にさんちうち}にちよつと帰国し

なければならぬ事が出来ましたから、当分どこへも御伴^{おとも}は出来ませんから、今日は是非いつしよに散歩をしようと思つて来たんです」

「そうか帰るのかい、用事でもあるのかい」

「ええちよつと用事が出来たんです。——ともかくも出ようじやありませんか」

「そう。それじゃ出ようか」

「さあ行きましょう。今日は私が晚餐^{ばんさん}を奢^{おご}りますから、——そ

れから運動をして上野へ行くとちょうど好い刻限です」としきりに促がすものだから、主人もその氣になつて、いっしょに出掛けて行つた。あとでは細君と雪江さんが遠慮のない声でげらげらけらけらからからと笑つていた。

十一

床の間の前に碁盤を中に据えて迷亭君と独仙君が対坐してゐる。

「ただはやらない。負けた方が何か奢るんだぜ。いいかい」と迷亭君が念を押すと、独仙君は例のごとく山羊髯を引つ張りながら、こう云つた。

「そんな事をする、せつかくの清戯を俗了してしまふ。かけ

などで勝負に心を奪われては面白くない。成敗せいはいを度外において、

白雲の自然しぜんに岫しゅうを出でて冉々ぜんぜんたるごとく心持ちで一局を了して

こそ、個中こちゅうの味はわかるものだよ」

「また来たね。そんな仙骨を相手にしちや少々骨が折れ過ぎる。

宛然えんぜんたる列仙伝中の人物だね」

「無絃むげんの素琴そきんを弾じさ」

「無線の電信をかけかね」

「とにかく、やろう」

「君が白を持つのかい」

「どっちでも構わない」

「さすがに仙人だけあつて鷹揚おうようだ。君が白なら自然の順序とし

て僕は黒だね。さあ、来たまえ。どこからでも来たまえ」

「黒から打つのが法則だよ」

「なるほど。しからば謙遜^{けんそん}して、定石^{じようせき}にここいらから行こう」

「定石にそんなのはないよ」

「なくつても構わない。新奇発明の定石だ」

吾輩は世間が狭いから碁盤と云うものは近来になつて始めて
拝見したのだが、考えれば考えるほど妙に出来ている。広くも
ない四角な板を狭苦しく四角に仕切つて、目が眩^{くら}むほどごたご
たと黒白の石をならべる。そうして勝つたとか、負けたとか、死
んだとか、生きたとか、あぶら汗を流して騒いでいる。高が一
尺四方くらいの面積だ。猫の前足で掻^かき散らしても滅茶滅茶に
なる。引き寄せて結べば草の庵^{いおり}にて、解くればもとの野原なり
けり。入らざるいたずらだ。懐手^{ふてしうで}をして盤を眺めている方が遙^{はる}
かに気楽である。それも最初の三四十目^{もく}は、石の並べ方では別
段目障^{めざわ}りにもならないが、いざ天下わけ目と云う間際^{まぎわ}に覗^{のぞ}いて

見ると、いやはや御氣の毒な有様だ。白と黒が盤から、こぼれ落ちるまでに押し合つて、御互にギューギュー云つてゐる。窮屈だからと云つて、隣りの奴にどいて貰う訳にも行かず、邪魔だと申して前の先生に退去を命ずる権利もなし、天命とあきらめて、じつとして身動きもせず、すくんでゐるよりほかに、どうする事も出来ない。碁を発明したものは人間で、人間の嗜好が局面にあらわれるものとすれば、窮屈なる碁石の運命はせせこましい人間の性質を代表していると云つても差支えない。人間の性質が碁石の運命で推知する事が出来るものとすれば、人間とは天空海濶の世界を、我からと縮めて、己れの立つ両足以外には、どうあつても踏み出せぬように、小刀細工で自分の領分に縄張りをするのが好きなんだと断言せざるを得ない。人間とほしいて苦痛を求めるものであると一言に評してもよからう。

呑氣^{のんき}なる迷亭君と、禪機^{ぜんき}ある独仙君とは、どう云う了見か、今

日に限って戸棚から古碁盤を引きずり出して、この暑苦しい
たずらを始めたのである。さすがに御兩人御揃い^{おそろ}の事だから、
最初のうちは各自任意の行動をとって、盤の上を白石と黒石が
自由自在に飛び交わしていたが、盤の広さには限りがあつて、
横^{よこ}縦^{たて}の目盛りは一手^{ひとて}ごとに埋^{うま}つて行くのだから、いかに呑氣で
も、いかに禪機があつても、苦しくなるのは当り前である。

「迷亭君、君の碁は乱暴だよ。そんな所へ這入^{はい}ってくる法はな
い」

「禪坊主の碁にはこんな法はないかも知れないが、本因坊^{ほんいんぼう}の流
儀じゃ、あるんだから仕方がないさ」

「しかし死ぬばかりだぜ」

「臣死をだも辞せず、いわんや彘肩^{ていけん}をやと、一つ、こう行くか

な」

「そうおいでになったと、よろしい。薫風南みなみより来つて、殿閣びりよう微涼を生ず。こう、ついでおけば大丈夫なものだ」

「おや、ついだのは、さすがにえらい。まさか、つぐ気遣きづかいはな
かろうと思つた。ついで、くりやるな八幡鐘はちまんがねをと、こうやつた
ら、どうするかね」

「どうするも、こうするもないさ。一剣天に倚よつて寒し——え
え、面倒だ。思い切つて、切つてしまえ」

「やや、大変大変。そこを切られちゃ死んでしまふ。おい冗談じようだん
じゃない。ちよつと待つた」

「それだから、さつきから云わん事じゃない。こうなつてると
ころへは這入はいれるものじゃないんだ」

「這入つかまつつて失敬仕り候。ちよつとこの白をとつてくれたまえ」

「それも待つのかい」

「ついでにその隣りのも引き揚げて見てくれたまえ」

「ずうずうしいぜ、おい」

「Do you see the boy か。——なに君と僕の間柄じゃないか。そんな水臭い事を言わずに、引き揚げてくれたまえな。死ぬか生きるかと云う場合だ。しばらく、しばらくつて花道から馳^かけ出してくるところだよ」

「そんな事は僕は知らんよ」

「知らなくつてもいいから、ちよつとどけたまえ」

「君さつきから、六返^{ぺん}待^{まち}つたをしたじゃないか」

「記憶のいい男だな。向後^{こうご}は旧に倍し待^{まち}つたを仕^{つかまつ}り候。だから

ちよつとどけたまえと云うのだあね。君もよッぽど強情だね。

座禅なんかしたら、もう少し捌^{さば}けそうなものだ」

「しかしこの石でも殺さなければ、僕の方は少し負けになりそうだから……」

「君は最初から負けても構わない流じゃないか」

「僕は負けても構わないが、君には勝たしたくない」

「飛んだ悟道だ。相変らず春風影裏しゅんぷうえいりに電光でんこうをきつてるね」

「春風影裏じゃない、電光影裏だよ。君のは逆さかだ」

「ハハハハもうたいてい逆さかになっていい時分だと思ったら、やはりたしかなところがあるね。それじゃ仕方がないあきらめるかな」

「生死事大ししょうじだい、無常迅速むじょうじんそく、あきらめるさ」

「アーメン」と迷亭先生今度はまるで関係のない方面へぴしやりと一石いつせきを下くだした。

床の間の前で迷亭君と独仙君が一生懸命に輸贏しゅえいを争っている

と、座敷の入口には、寒月君と東風君が相ならんでその傍に主人が黄色い顔をして坐っている。寒月君の前に鰹節かつぶしが三本、裸のまま畳の上に行儀よく排列してあるのは奇観である。

この鰹節の出処しゅつしよは寒月君の懷ふところで、取り出した時は暖あつたく、手のひらに感じたくらい、裸ながらぬくもっていた。主人と東風君は妙な眼をして視線を鰹節の上に注いでいると、寒月君はやがて口を開いた。

「実は四日ばかり前に国から帰つて来たのですが、いろいろ用事があつて、方々馳かけあるいていたものですから、つい上かられなかつたのです」

「そう急いでくるには及ばないさ」と主人は例のごとく無愛嬌ふあいぎような事を云う。

「急いで来んでもいいのですけれども、このおみやげを早く献上けんじよう

しないと心配ですから」

「鰹節じゃないか」

「ええ、国の名産です」

「名産だつて東京にもそんなのは有りそうだぜ」と主人は一番大きな奴を一本取り上げて、鼻の先へ持つて行つて臭いにおをかいで見る。

「かいだつて、鰹節の善惡よしあしはわかりませんよ」

「少し大きいのが名産たる所以ゆえんかね」

「まあ食べて御覧なさい」

「食べる事はどうせ食べるが、こいつは何だか先が欠けてるじゃないか」

「それだから早く持つて来ないと心配だと云うのです」

「なぜ？」

「なぜって、そりや鼠^{ねずみ}が食ったのです」

「そいつは危険だ。滅多^{めった}に食うとペストになるぜ」

「なに大丈夫、そのくらいかじったって害はありません」

「全体どこで噛^{かじ}ったんだい」

「船の中ですよ」

「船の中？ どうして」

「入れる所がなかったから、ヴァイオリンといっしよに袋のなかへ入れて、船へ乗ったら、その晩にやられました。鰹^{かつぶし}節だけなら、いいのですけれども、大切なヴァイオリンの胴を鰹節と間違えてやはり少々噛^{かじ}りました」

「そそつかしい鼠だね。船の中に住んでると、そう見境^{みさかい}がなくなるものかな」と主人は誰にも分らん事を云って依然として鰹節を眺^{なが}めている。

「なに鼠だから、どこに住んでもそそっかしいのでしょう。だから下宿へ持って来てもまたやられそうだね。劍呑^{けんのん}だから夜^よるは寢床の中へ入れて寢ました」

「少しきたないようだぜ」

「だから食べる時にはちよつとお洗いなさい」

「ちよつとくらいじや奇麗にやなりそうもない」

「それじゃ灰汁^{あく}でもつけて、ごしごし磨いたらいいでしょう」

「ヴァイオリンも抱いて寢たのかい」

「ヴァイオリンは大き過ぎるから抱いて寢る訳には行かないんですが……」と云いかけると

「なんだつて？ ヴァイオリンを抱いて寢たつて？ それは風流だ。行く春や重たき琵琶^{びわ}のだき心と云う句もあるが、それは遠き^{かみ}その上の事だ。明治の秀才はヴァイオリンを抱いて寢なくつ

ちや古人を凌ぐ訳には行かないよ。かい巻に長き夜守るやヴアイオリンはどうだい。東風君、新体詩でそんな事が云えるかい」と向うの方から迷亭先生大きな声でこっちの談話にも関係をつける。

東風君は真面目で「新体詩は俳句と違ってそう急には出来ません。しかし出来た暁にはもう少し生霊の機微に触れた妙音が出ます」

「そうかね、生霊はおがらを焚いて迎え奉るものと思つてたが、やつぱり新体詩の力でも御来臨になるかい」と迷亭はまだ碁をそつちのけにして調戲ている。

「そんな無駄口を叩くとまた負けるぜ」と主人は迷亭に注意する。迷亭は平気なもので

「勝ちたくても、負けたくても、相手が釜中の章魚同然手も足

も出せないのだから、僕も無聊ぶりようでやむを得ずヴァイオリンの御仲間つかまつを仕るのさ」と云うと、相手の独仙君はいささか激した調子で

「今度は君の番だよ。こつちで待つてゐるんだ」と云い放った。

「え？　もう打ったのかい」

「打ったとも、とうに打ったさ」

「どこへ」

「この白をはすに延ばした」

「なあるほど。この白をはすに延ばして負けにけりか、そんならこつちはと——こつちは——こつちはこつちはとて暮れにけりと、どうもいい手がないね。君もう一返打たしてやるから勝手なところへ一目いちもく打ちたまえ」

「そんな碁があるものか」

「そんな碁があるものかなら打ちましょう。——それじゃこのかど地面へちよつと曲がつて置くかな。——寒月君、君のヴァイオリンはあんまり安いから鼠が馬鹿にして噛かじるんだよ、もう少しいいのを奮発して買うさ、僕が以太利亜イタリヤから三百年前の古物こぶつを取り寄せてやろうか」

「どうか願います。ついでにお払いの方も願いたいもので」

「そんな古いものが役に立つものか」と何にも知らない主人はいつかつ一喝にして迷亭君を極きめつけた。

「君は人間の古物こぶつとヴァイオリンの古物こぶつと同一視しているんだろう。人間の古物でも金田某のごときものは今だに流行しているくらいだから、ヴァイオリンに至つては古いほどがいいのさ。

——さあ、独仙君どうか御早く願おう。けいまさのせりふじやないが秋の日は暮れやすいからね」

「君のようなせわしない男と碁を打つのは苦痛だよ。考える暇も何もありやしない。仕方がないから、ここへ一目^{いちもく}入れて目にしておこう」

「おやおや、とうとう生かしてしまった。惜しい事をしたね。まさかそこへは打つまいと思つて、いささか駄弁^{ふる}を振つて肝胆^{かんたん}を砕いていたが、やッぱり駄目か」

「当り前さ。君のは打つのじゃない。ごまかすのだ」

「それが本因坊流、金田流、当世紳士流さ。——おい苦沙弥先生、さすがに独仙君は鎌倉へ行つて万年漬を食つただけあつて、物に動じないね。どうも敬々服々だ。碁はまづいが、度胸^{すわ}は据つてゐる」

「だから君のような度胸のない男は、少し真似をするがいい」と主人^{うし}が後ろ^{むき}向のままで答えるやいなや、迷亭君は大きな赤い舌

をぺろりと出した。独仙君は毫も関せざるもののごとく、「さあ君の番だ」とまた相手を促した。うなが

「君はヴァイオリンをいつ頃から始めたのかい。僕も少し習おうと思うのだが、よつぽどむずかしいものだそうだね」と東風君が寒月君に聞いている。

「うむ、一と通りなら誰にでも出来るさ」

「同じ芸術だから詩歌しうかの趣味のあるものはやはり音楽の方でも上達が早いだろうと、ひそかに恃むところがあるんだが、どうだろう」

「いいだろう。君ならきつと上手になるよ」

「君はいつ頃から始めたのかね」

「高等学校時代さ。——先生わたく私のヴァイオリンを習い出した顛末てんまつをお話しした事がありましたかね」

「いいえ、まだ聞かない」

「高等学校時代に先生でもあつてやり出したのかい」

「なあに先生も何もありやしない。独習さ」

「全く天才だね」

「独習なら天才と限つた事もなからう」と寒月君はつんとする。天才と云われてつんとするのは寒月君だけだろう。

「そりゃ、どうでもいいが、どう云う風に独習したのかちよつと聞かしたまえ。参考にしたいから」

「話してもいい。先生話しましょうかね」

「ああ話したまえ」

「今では若い人がヴァイオリンの箱をさげて、よく往来などがあるいておりますが、その時分は高等学校生で西洋の音楽などをやったものはほとんどなかったのです。ことに私のおつた学

校は田舎いなの田舎で麻裏草履あさうらぞうりさえないと云うくらいな質朴な所でしたから、学校の生徒でヴァイオリンなどを弾ひくものはもちろん一人もありません。……」

「何だか面白い話が向うで始まったようだ。独仙君いい加減に切り上げようじゃないか」

「まだ片づかない所が二三箇所ある」

「あつてもいい。大概な所なら、君に進上する」

「そう云ったつて、貰う訳にも行かない」

「禅学者にも似合わん几帳面きちようめんな男だ。それじゃ一気呵成いつきかせいにやつ

ちまおう。——寒月君何だかよつぽど面白そうだね。——あの

高等学校だろう、生徒が裸足はだしで登校するのは……」

「そんな事はありません」

「でも、皆みんななはだして兵式体操をして、廻れ右をやるんで足の

皮が大変厚くなつてると云う話だぜ」

「まさか。だれがそんな事を云いました」

「だれでもいいよ。そうして弁当には偉大なる握り飯を一個、
なつみかん

夏蜜柑のように腰へぶら下げて来て、それを食うんだつて云う
じゃないか。食うと云うよりむしろ食いつくんだね。すると中
心から梅干が一個出て来るそうだ。この梅干が出るのを樂しみに
塩気のない周囲を一心不乱に食い欠いて突進するんだと云う
が、なるほど元氣旺盛おうせいなものだね。独仙君、君の氣に入りそう
な話だぜ」

「質朴剛健でたのもししい氣風だ」

「まだたのもししい事がある。あすこには灰吹きはいふがないそうだ。
僕の友人があすこへ奉職をしている頃吐月峰とげつほうの印いんのある灰吹き
を買いに出たところが、吐月峰どころか、灰吹と名づくべきも

のが一個もない。不思議に思つて、聞いて見たら、灰吹きなどは裏の藪やぶへ行つて切つて来れば誰にでも出来るから、売る必要はないと澄まして答えたそうだ。これも質朴剛健の氣風をあらわす美譚びだんだろう、ねえ独仙君」

「うむ、そりやそれでいいが、ここへ駄目を一つ入れなくちやいけない」

「よろしい。駄目、駄目、駄目と。それで片づいた。——僕はその話を聞いて、実に驚いたね。そんなところで君がヴァイオリンを独習したのは見上げたものだ。惇独けいどくにして不羣ふぐんなりと楚辞そじにあるが寒月君は全く明治の屈原くつげんだよ」

「屈原はいやですよ」

「それじゃ今世紀のウエルテルさ。——なに石を上げて勘定をしる？ やに物堅ものがたい性質ただね。勘定しなくつても僕は負けてる

からたしかだ」

「しかし極^{きま}りがつかないから……」

「それじゃ君やつてくれたまえ。僕は勘定所じゃない。一代の才人ウエルテル君がヴァイオリンを習い出した逸話を聞かなくっちゃ、先祖へ済まないから失敬する」と席をはずして、寒月君の方へすり出して来た。独仙君は丹念に白石を取っては白の穴を埋^うめ、黒石を取っては黒の穴を埋めて、しきりに口の内で計算をしている。寒月君は話をつづける。

「土地柄がすでに土地柄なのに、私の国のものがまた非常に頑固^{がんこ}なので、少しでも柔弱なものがおつては、他県の生徒に外聞がわるいと云つて、むやみに制裁を嚴重にしましたから、ずいぶん厄介でした」

「君の国の書生と来たら、本当に話せないね。元来何だつて、紺^{こん}

の無地の袴はかまなんぞ穿はくんだい。第一だいちあれからして乙おつだね。そうして塩風に吹かれつけているせいかな、どうも、色が黒いね。男だからあれで済むが女があればじゃさぞかし困るだろう」と迷亭君が一人這入はいると肝心かんじんの話はどつかへ飛んで行ってしまう。

「女もあの通り黒いのです」

「それでよく貰い手があるね」

「だって一国中いっごくじゅうことごとく黒いのですから仕方ありません」

「因果いんがだね。ねえ苦沙弥君」

「黒い方がいいだろう。生なまじ白いと鏡を見るたんびに己惚おのぼれが出

ていけない。女と云うものは始末におえない物件だからなあ」

と主人は喟然きぜんとして大息たいそくを洩もらした。

「だって一国中ことごとく黒ければ、黒い方で己惚うぬぼれはしませんか」と東風君がもつともな質問をかけた。

「ともかくも女は全然不必要な者だ」と主人が云うと、
「そんな事を云うと妻君が後でご機嫌がわるいぜ」と笑いなが
ら迷亭先生が注意する。

「なに大丈夫だ」

「いないのかい」

「小供を連れて、さつき出掛けた」

「どうれで静かだと思つた。どこへ行つたのだい」

「どこだか分らない。勝手に出てあるくのだ」

「そうして勝手に帰ってくるのかい」

「まあそうだ。君は独身でいいなあ」と云うと東風君は少々不
平な顔をする。寒月君はにやにやと笑う。迷亭君は

「妻さいを持つとみんなそう云う氣になるのさ。ねえ独仙君、君な
ども妻君難の方だろう」

「ええ？　ちよつと待った。四六二十四、二十五、二十六、二十七と。狭いと思つたら、四十六目もくあるか。もう少し勝つたつもりだったが、こしらえて見ると、たつた十八目の差か。――何だつて？」

「君も妻君難だろうと云うのさ」

「アハハハ別段難でもないさ。僕の妻さいは元來僕を愛しているのだから」

「そいつは少々失敬した。それでこそ独仙君だ」

「独仙君ばかりじゃありません。そんな例はいくらでもありませんよ」と寒月君が天下の妻君に代つてちよつと弁護の労を取つた。

「僕も寒月君に賛成する。僕の考では人間が絶対いぎの域いに入るには、ただ二つの道があるばかりで、その二つの道とは芸術と恋

だ。夫婦の愛はその一つを代表するものだから、人間は是非結婚をして、この幸福を完まつうしなければ天意に背くそむ訳だと思うんだ。——がどうでしょう先生」と東風君は相変らず真面目で迷亭君の方へ向き直った。

「御名論だ。僕などはとうてい絶対の境きょうに這入はいれそうもない」「妻さいを貰えばなお這入れやしない」と主人はむずかしい顔をして云った。

「ともかくも我々未婚の青年は芸術の靈氣にふれて向上の一路を開拓しなければ人生の意義が分からないですから、まず手始めにヴァイオリンでも習おうと思つて寒月君にさつきから經驗譚けいけんたんをきいているのです」

「そうそう、ウェルテル君のヴァイオリン物語を拝聴するはずだったね。さあ話し給え。もう邪魔はしないから」と迷亭君が

ようやく鋒鋦ほうぼうを収めると、

「向上の一路はヴァイオリンなどで開ける者ではない。そんな遊戯ゆうぎざんまい三昧で宇宙の真理が知れては大変だ。這裡しやりの消息を知ろうと思えばやはり懸崖けんがいに手を撒さつして、絶後ぜつごに再び蘇よみがえる底ていの気魄きはくがなければ駄目だ」と独仙君はもったい振って、東風君に訓戒じみた説教をしたのはよかつたが、東風君は禪宗のぜの字も知らない男だから頓とんと感心したようすもなく

「へえ、そうかも知れませんが、やはり芸術は人間の渴仰かつぎょうの極致を表わしたものだと思いますから、どうしてもこれを捨てる訳には参りません」

「捨てる訳に行かなければ、お望み通り僕のヴァイオリン談をして聞かせる事にしよう、で今話す通りの次第だから僕もヴァイオリンの稽古をはじめめるまでには大分苦心だいふをしたよ。第一買

うのに困りましたよ先生」

「そうだろう麻裏草履あさうらぞうりがない土地にヴァイオリンがあるはずがない」

「いえ、ある事はあるんです。金も前から用意して溜めたから差支さしかえないのですが、どうも買えないのです」

「なぜ？」

「狭い土地だから、買っておればすぐ見つかります。見つからば、すぐ生意気だと云うので制裁を加えられます」

「天才は昔から迫害を加えられるものだからね」と東風君はおおい大に同情を表した。

「また天才か、どうか天才呼ばわりだけは御免蒙ごめんこうむりたいね。それでね毎日散歩をしてヴァイオリンのある店先を通るたびにあれが買えたら好かろう、あれを手に抱かかえた心持ちはどんなだろ

う、ああ欲しい、ああ欲しいと思わない日は一日もなかったのです」
いちんち

「もつともだ」と評したのは迷亭で、「妙に凝こつたものだね」と解げしかねたのが主人で、「やはり君、天才だよ」と敬服したのは東風君である。ただ独仙君ばかりは超然として髻ひげを撫ねんしている。

「そんな所にどうしてヴァイオリンがあるかが第一ご不審かも知れないですが、これは考えて見ると当り前の事です。なぜと云うとこの地方でも女学校があつて、女学校の生徒は課業として毎日ヴァイオリンを稽古しなければならいのですから、あるはずですよ。無論いいはありません。ただヴァイオリンと云う名が辛かろうじてつくくらいのものであります。だから店でもあまり重きをおいていないので、二三挺いっしょに店頭へ吊つるしておくのです。それがね、時々散歩をして前を通るときに風が

吹きつけたり、小僧の手が障^{さわ}つたりして、そら音^ねを出す事があります。その音^ねを聞くと急に心臓が破裂しそうな心持で、いても立つてもいられなくなるんです」

「危険だね。水癩^{みずてんかん}癩^{ひとでんかん}、人癩^{ひとでんかん}癩^{ひとでんかん}と癩^{ひとでんかん}癩^{ひとでんかん}にもいろいろ種類があるが君のはウエルテルだけあつて、ヴァイオリン癩^{ひとでんかん}癩^{ひとでんかん}だ」と迷亭君が冷やかすと、

「いやそのくらい感覚が鋭敏でなければ真の芸術家にはなれないですよ。どうしても天才肌だ」と東風君はいよいよ感心する。

「ええ実際癩^{てんかん}癩^{てんかん}かも知れませんが、しかしあの音色^{ねいろ}だけは奇体ですよ。その後今日^{ごこんにち}まで随分ひきましたがああのくらい美しい音^ねが出た事がありません。そうさ何と形容していいでしょう。とうてい言いあらわせないです」

「琳琅^{りんろう}瑇瑁^{ぎゆうそう}として鳴るじゃないか」とむずかしい事を持ち出し

たのは独仙君であつたが、誰も取り合わなかつたのは氣の毒である。

「私が毎日毎日店頭を散歩しているうちにとうとうこの靈異な音^ねを三度ききました。三度目にどうあつてもこれは買わなければならぬと決心しました。仮令^{たとひ}国のものから譴責^{けんせき}されても、他県^{けいべつ}のものから輕蔑^{けいべつ}されても——よし鉄拳制裁^{てつけんせいざい}のために絶息^{ぜつそく}しても——まかり間違つて退校の処分を受けても——、こればかりは買わずにいられないと思ひました」

「それが天才だよ。天才でなければ、そんなに思ひ込める訳のものじゃない。羨^{うらやま}しい。僕もどうかして、それほど猛烈な感じを起して見たいと年来心掛けているが、どうもいけないね。音楽会などへ行つて出来るだけ熱心に聞いているが、どうもそれほどに感興が乗らない」と東風君はしきりに羨^{うら}やましがつてい

る。

「乗らない方が仕合せだよ。今でこそ平気で話すようなもののその時の苦しみはとうてい想像が出来るような種類のものではなかった。——それから先生とうとう奮発して買いました」

「ふむ、どうして」

「ちょうど十一月の天長節の前の晩でした。国のものは揃そろつて泊りがけに温泉に行きましたから、一人もいません。私は病氣だと云つて、その日は学校も休んで寝ていました。今晚こそ一つ出で行つて兼かねて望みのヴァイオリンを手に入れようと、床の中でその事ばかり考えていました」

「偽病けびようをつかつて学校まで休んだのかい」

「全くそうです」

「なるほど少し天才だね、こりや」と迷亭君も少々恐れ入った

様子である。

「夜具の中から首を出していると、日暮れが待遠^{まちどお}でたまりません。仕方がないから頭からもぐり込んで、眼を眠^{ねむ}って待って見ましたが、やはり駄目です。首を出すと烈しい秋の日が、六尺の障子^{しょうじ}へ一面にあたつて、かんかんするには癩癩^{かんしやく}が起りました。上の方に細長い影がかたまつて、時々秋風にゆすれるのが眼につきます」

「何だい、その細長い影と云うのは」

「渋柿の皮を剥^むいて、軒へ吊^つるしておいたのです」

「ふん、それから」

「仕方がないから、床^{とこ}を出て障子をあけて椽側^{えんがわ}へ出て、渋柿の甘干^{あまぼ}しを一つ取つて食いました」

「うまかつたかい」と主人は小供みたような事を聞く。

「うまいですよ、あの辺の柿は。とうてい東京などじゃあの味はわかりませんね」

「柿はいいがそれから、どうしたい」と今度は東風君がきく。

「それからまたもぐって眼をふさいで、早く日が暮ればいいがと、ひそかに神仏に念じて見た。約三四時間も立ったと思う頃、もうよかろうと、首を出すとあにはからんや烈しい秋の日は依然として六尺の障子を照らしてかんかんする、上の方に細長い影がかたまつて、ふわふわする」

「そりゃ、聞いたよ」

「何返もあるんだよ。なんべんそれから床を出て、障子をあけて、甘干しの柿を一つ食つて、また寢床へ這入はいつて、早く日が暮ればいいと、ひそかに神仏に祈念をこらした」

「やつぱりもとのところじゃないか」

「まあ先生そう焦^せかずに聞いて下さい。それから約三四時間夜具の中で辛抱^{しんぼう}して、今度こそもうよかろうとぬつと首を出して見ると、烈しい秋の日は依然として六尺の障子へ一面にあたつて、上の方に細長い影がかたまつて、ふわふわしている」

「いつまで行つても同じ事じゃないか」

「それから床を出て障子を開けて、椽側^{えんがわ}へ出て甘干しの柿を一つ食つて……」

「また柿を食つたのかい。どうもいつまで行つても柿ばかり食つてて際限がないね」

「私もじれったくてね」

「君より聞いてる方がよっぽどじれったいぜ」

「先生はどうも性急^{せうかち}だから、話がしにくくつて困ります」

「聞く方も少しは困るよ」と東風君も暗^{あん}に不平を洩^もらした。

「そう諸君が御困りとある以上は仕方がない。たいていにして切り上げましょう。要するに私は甘干しの柿を食つてはもぐり、もぐつては食い、とうとう軒端のきばに吊つるした奴をみんな食つてしまいました」

「みんな食つたら日も暮れたろう」

「ところがそう行かないので、私が最後の甘干しを食つて、もうよかろうと首を出して見ると、相変らず烈しい秋の日が六尺の障子へ一面にあたつて……」

「僕あ、もう御免だ。いつまで行つても果はてしがない」

「話す私も飽あき飽きします」

「しかしそのくらい根気があればたいいの事業は成就じょうじゆするよ。だまつてたら、あしたの朝まで秋の日がかんかんするんだろう。全体いつ頃にヴァイオリンをかう気なんだい」ときすがの迷亭

君も少し辛抱^{しんぼう}し切れなくなつたと見える。ただ独仙君のみは泰然として、あしたの朝まででも、あさつての朝まででも、いくら秋の日がかんかんしても動ずる気色^{けしき}はさらにない。寒月君も落ちつき払つたもので

「いつ買う気だとおっしゃるが、晩になりさえすれば、すぐ買
いに出掛けるつもりなのです。ただ残念な事には、いつ頭を出
して見ても秋の日がかんかんしているものですから——いえそ
の時の私^{わたくし}の苦しみと云つたら、とうてい今あなた方の御じれ
になるどころの騒ぎじゃないです。私は最後の甘干を食つても、
まだ日が暮れないのを見て、泣然^{げんぜん}として思わず泣きました。東
風君、僕は実に情け^{なさ}なくって泣いたよ」

「そうだろう、芸術家は本来多情多恨だから、泣いた事には同
情するが、話はもつと早く進行させたいものだね」と東風君は

人がいいから、どこまでも真面目で滑稽な挨拶こっけいをしている。

「進行させたいのは山々だが、どうしても日が暮れてくれないものだから困るのさ」

「そう日が暮れなくちや聞く方も困るからやめよう」と主人がとうとう我慢がし切れなくなつたと見えて云い出した。

「やめちやなお困ります。これからがいよいよ佳境に入るところですから」

「それじゃ聞くから、早く日が暮れた事にしたらよからう」

「では、少しご無理なご注文ですが、先生の事ですから、枉まげて、ここは日が暮れた事に致しましょう」

「それは好都合だ」と独仙君が澄まして述べられたので一同は思わずどつと噴き出した。

「いよいよ夜に入よつたので、まず安心とほつと一息ついて鞍懸村くらかけむら

の下宿を出ました。私は性来騒々しい所が嫌きらですから、わざと便利な市内を避けて、人迹稀じんせきまれな寒村の百姓家にしばらく蝸牛かぎゅうの庵いおりを結んでいたので……」

「人迹の稀まれなはあんまり大袈裟おおげさだね」と主人が抗議を申し込むと「蝸牛かぎゅうの庵いおりも仰山ようさんだよ。床の間なしの四畳半くらいにしておく方が写生的で面白い」と迷亭君も苦情を持ち出した。東風君だけは「事實はどうでも言語が詩的で感じがいい」と褒めほめた。独仙君は真面目な顔で「そんな所に住んでいては学校へ通うのが大変だろう。何里くらいあるんですか」と聞いた。

「学校まではたった四五丁です。元来学校からして寒村にあるんですから……」

「それじゃ学生はその辺にだいぶ宿をとつてゐるんでしょう」と独仙君はなかなか承知しない。

「ええ、たいていな百姓家には一人や二人は必ずいます」

「それで人迹稀なんですか」と正面攻撃を喰^{くら}わせる。

「ええ学校がなかったら、全く人迹は稀ですよ。……で当夜の服

装と云うと、手織^{ており}木綿^{もめん}の綿入^{きんボタン}の上へ金釦^{きんボタン}の制服^{がいとう}外套^{がいとう}を着て、外

套^{ずきん}の頭巾^{ずきん}をすぼりと被^{かぶ}つてなるべく人の目につかないような注

意^いをしました。折柄^{おりから}柿落葉^{かきふ}の時節^{ときふし}で宿^{しゆく}から南郷^{なんごう}街道^{かいどう}へ出るまで

は木^この葉^はで路^{みち}が一杯^{いっぱい}です。一歩^{ひとあし}運^{はこ}ぶごとにがさがさするのが気

にかかります。誰^{たれ}かあとをつけて来^きそうでたまりません。振り

向^{むか}いて見^みると東嶺^{とうれいじ}寺^じの森^{もり}がこんもりと黒^{くろ}く、暗^{くら}い中に暗^{くら}く写^{うつ}つ

ています。この東嶺^{とうれいじ}寺^じと云^いうのは松平^{まつだいら}家の菩提^{ぼだい}所^{しよ}で、庚申^{こうしん}山の

麓^{ふもと}にあつて、私の宿^{しゆく}とは一丁^{いっちやう}くらいしか隔^{へだた}つていない、すこぶ

る幽邃^{ゆうすい}な梵刹^{ぼんせつ}です。森^{もり}から上^{うへ}はのべつ幕^{まく}なしの星月^{せいげつ}夜^やで、例^{れい}の

天^{てん}の河^がが長瀬^{ながせ}川^{がわ}を筋違^{すじかい}に横切^{よこきり}つて末^{すえ}は——末^{すえ}は、そうですね、

まず布哇ハワイの方へ流れています……」

「布哇は突飛だね」と迷亭君が云った。

たかのだいまち

「南郷街道をついに二丁来て、鷹台町から市内に這入つて、古城町こじようまちを通つて、仙石町せんごくまちを曲つて、喰代町くいしろちようを横に見て、通町とおりちようを一丁目、

二丁目、三丁目と順に通り越して、それから尾張町おわりちよう、名古屋町なごやちよう、

しやちほこちよう 浦鉾町かまぼこちよう……」

鯨鉾町、蒲鉾町……」

「そんなにいろいろな町を通らなくてもいい。要するにヴァイオリンを買つたのか、買わないのか」と主人がじれつたそうに聞く。

「楽器のある店は金善かねぜん即ち金子善兵衛方ですから、まだなかなかです」

「なかなかでもいいから早く買うがいい」

「かしこまりました。それで金善方へ来て見ると、店にはラン

プがかんかんともつて……」

「またかんかんか、君のかんかんは一度や二度で済まないんだから難渋するよ」と今度は迷亭が予防線を張った。

「いえ、今度のかんかんは、ほんの通り一返のかんかんですから、別段御心配には及びません。……灯影にすかして見ると例のヴァイオリンが、ほのかに秋の灯を反射して、くり込んだ胴の丸みに冷たい光を帯びています。つよく張った琴線の一部だけがきらきらと白く眼に映ります。……」

「なかなか叙述がうまいや」と東風君がほめた。

「あれだな。あのヴァイオリンだなと思うと、急に動悸がして足がふらふらします……」

「ふふん」と独仙君が鼻で笑った。

「思わず馳け込んで、隠袋から蝦蟇口を出して、蝦蟇口の中か

ら五円札を二枚出して……」

「とうとう買ったかい」と主人がきく。

「買おうと思いましたが、まてしばし、ここが肝心かんじんのところだ。
滅多めったな事をしては失敗する。まあよそうと、際きわどいところで思
い留まりました」

「なんだ、まだ買わないのかい。ヴァイオリン一挺でなかなか
人を引っ張るじゃないか」

「引っ張る訳じゃないんですが、どうも、まだ買えないんです
から仕方ありません」

「なぜ」

「なぜって、まだ宵よいの口で人が大勢通るんですもの」

「構わんじゃないか、人が二百や三百通ったって、君はよつぽ
ど妙な男だ」と主人はぷんぷんしている。

「ただの人なら千が二千でも構いませんがね、学校の生徒が腕まくりをして、大きなステッキを持つて徘徊はいかいしているんだから容易に手を出せませんよ。中には沈澱ちんでん党などと号して、いつまでもクラスの底に溜まつて喜んでるのがありますからね。そんなのに限つて柔道は強いのですよ。滅多めったにヴァイオリンなどには手出しは出来ません。どんな目に逢あうかわかりません。私だつてヴァイオリンは欲しいに相違ないですけれども、命はこれでも惜しいですからね。ヴァイオリンを弾ひいて殺されるよりも、弾かずに生きてる方が楽ですよ」

「それじゃ、とうとう買わずにやめたんだね」と主人が念を押す。

「いえ、買ったのです」

「じれつたい男だな。買うなら早く買うさ。いやならいやでい

いから、早くかたをつけたらよきそうなものだ」

「えへへへ、世の中の事はそう、こつちの思うように埒^{らち}があくもんじゃありませんよ」と云いながら寒月君は冷然と「朝日」へ火をつけてふかし出した。

主人は面倒になつたと見えて、ついと立つて書齋へ這入^{はい}つたと思つたら、何だか古ぼけた洋書を一冊持ち出して来て、ごろりと腹這^{はらばい}になつて読み始めた。独仙君はいつの間^まにやら、床の間の前へ退去して、独り^{ひと}で基石を並べて一人相撲^{ひとりずもう}をとっている。せつかくの逸話もあまり長くかかるので聴手が一人減り二人減つて、残るは芸術に忠実なる東風君と、長い事にかつて辟易^{へきえき}した事のない迷亭先生のみとなる。

長い煙をふうと世の中へ遠慮なく吹き出した寒月君は、やがて前同様の速度をもつて談話をつづける。

「東風君、僕はその時こう思つたね。とうていこりや宵の口は駄目だ、と云つて真夜中に来れば金善は寝てしまうからなお駄目だ。何でも学校の生徒が散歩から帰りつくして、そうして金善がまだ寝ない時を見計らつて来なければ、せつかくの計画が水泡に帰する。けれどもその時間をうまく見計うのがむずかしい」

「なるほどこりやむずかしからう」

「で僕はその時間をまあ十時頃と見積つたね。それで今から十時頃までどこかで暮さなければならぬ。うちへ帰つて出直すのは大変だ。友達のうちへ話しに行くのは何だか気が咎^{とが}めるように面白くなし、仕方がないから相当の時間がくるまで市中を散歩する事にした。ところが平生ならば二時間や三時間はぶらぶらあるいているうちに、いつの間^まにか経つてしまうのだがそ

の夜に限つて、時間のたつのが遅いの何のつて、——千秋せんしゅうの思とはあんな事を云うのだらうと、しみじみ感じました」ときも感じたらしい風をしてわざと迷亭先生の方を向く。

「古人を待つ身につらき置炬燵おきごたつと云われた事があるからね、また待たるる身より待つ身はつらいともあつて軒に吊られたヴァイオリンもつらかつたらうが、あてのない探偵のようるにうろる、まごつるている君はなるおさらるつらいだらう。累々として喪家そうかの犬のごとし。いや宿のない犬ほどる気の毒なものはる實際ないよ」

「犬は残酷ですね。犬に比較された事はこれでもまだありませんよ」

「僕は何だか君の話をきくと、昔むかしの芸術家の伝を読むるような気持がして同情の念に堪たえない。犬に比較したのは先生の冗談じやうだんだからる氣に掛けずるに話を進行したまるえ」と東風君は慰藉いしやした。

慰藉されなくても寒月君は無論話をつづけるつもりである。

「それから徒町から百騎町ひやつきまちを通つて、両替町から鷹匠町たかじようまちへ出て、

県庁の前で枯柳の数を勘定して病院の横で窓の灯ひを計算して、

紺屋橋こんやばしの上で巻煙草まきたばこを二本ふかして、そうして時計を見た。……」

「十時になつたかい」

「惜しい事にならないね。——紺屋橋を渡り切つて川添に東へ

上のぼつて行くと、按摩あんまに三人あつた。そうして犬がしきりに吠え

ましたよ先生……」

「秋の夜長に川端で犬の遠吠をきくのはちよつと芝居がかりだ

ね。君は落人おちゆうどと云う格だ」

「何かわるい事でもしたんですか」

「これからしようと云うところさ」

「可哀相かわいそうにヴァイオリンをかうのが悪い事じゃ、音楽学校の生

徒はみんな罪人ですよ」

「人が認めない事をすれば、どんないい事をしてでも罪人さ、だから世の中に罪人ほどあてにならないものはない。耶蘇ヤソもあんな世に生れれば罪人さ。好男子寒月君もそんな所でヴァイオリンを買えば罪人さ」

「それじゃ負けて罪人としておきましょう。罪人はいいですが十時にならないのには弱りました」

「もう一返ぺん、町の名を勘定するさ。それで足りなければまた秋の日をかかんかんさせるさ。それでもおっつかなければまた甘干しの渋柿を三ダースも食うさ。いつまでも聞くから十時になるまでやりたまえ」

寒月先生はにやにやと笑った。

「そう先せんを越されては降参するよりほかはありません。それ

じや一足飛びに十時にしてしまひましょう。さて御約束の十時
になつて金善かねぜんの前へ来て見ると、夜寒の頃ですから、さすが目貫めぬき
りりようがえちよう
の両替町もほとんど人通りが絶えて、向からくる下駄の音さえ
淋さみしい心持ちです。金善ではもう大戸をたてて、わずかに潜りくぐ
戸とだけを障子しょうじにしています。私は何となく犬に尾けられたよう
な心持で、障子をあけて這入はいるのに少々薄気味がわるかつたで
す……」

この時主人はきたならしい本からちよつと眼をはずして、「お
いもうヴァイオリンを買ったかい」と聞いた。「これから買うと
ころです」と東風君が答えると、「まだ買わないのか、実に永い
な」と独り言ひとりごとのように云つてまた本を読み出した。独仙君は無
言のまま、白と黒で碁盤を大半埋うずめてしまった。

「思い切つて飛び込んで、頭巾ずきんを被かぶつたままヴァイオリンをく

れと云いますと、火鉢の周囲に四五人小僧や若僧がかたまつて話をしていたのが驚いて、申し合せたように私の顔を見ました。私は思わず右の手を挙げて頭巾をぐいと前の方に引きました。おいヴァイオリンをくれと二度目に云うと、一番前にいて、私の顔を覗き込む^{のぞ}ようにしていた小僧がへえと覚束^{おぼつか}ない返事をして、立ち上がつて例の店先に吊^つるしてあつたのを三四挺一度に卸^{おろ}して来しました。いくらかと聞くと五円二十銭だと云います……」

「おいそんな安いヴァイオリンがあるのかい。おもちゃじやないか」

「みんな同価^{どうね}かと聞くと、へえ、どれでも変りはございませぬ。みんな丈夫に念を入れて拵^{こし}らえてございますと云いますから、蝦蟇^{がまぐち}口のなかから五円札と銀貨を二十銭出して用意の大風呂敷を出してヴァイオリンを包みました。この間^{あいだ}、店のものは話を

中止してじつと私の顔を見えています。顔は頭巾でかくしてあるから分る氣遣きづかいはないのですけれども何だか氣がせいいて一刻も早く往来へ出たくて堪たまりません。ようやくの事風呂敷包を外套がいとうの下へ入れて、店を出たら、番頭が声を揃そろえてありがとうと大きな声を出したのにはひやつとしました。往来へ出てちよつと見廻して見ると、幸誰さいわいもないようですが、一丁ばかり向むから二三人して町内中に響けとばかり詩吟をして来ます。こいつは大変だと金善の角を西へ折れて濠端ほりばたを薬王師道やくおうじみちへ出て、はんの木村から庚申山こうしんやまの裾すそへ出てようやく下宿へ歸りました。下宿へ歸つて見たらもう二時十分前でした」

「夜通しあるいていたようなものだね」と東風君が氣の毒そうに云うと「やつと上がった。やれやれ長い道中双六どうちゆうすいろくだ」と迷亭君はほつと一と息ついた。

「これからが聞きどころですよ。今までは単に序幕です」

「まだあるのかい。こいつは容易な事じゃない。たいていのものは君に逢っちゃ根気負けをするね」

「根気はとにかく、ここでやめちゃ仏作って魂入れずと一般ですから、もう少し話します」

「話すのは無論隨意さ。聞く事は聞くよ」

「どうです苦沙弥先生も御聞きになつては。もうヴァイオリンは買つてしまいましたよ。ええ先生」

「こん度はヴァイオリンを売るところかい。売るところなんか聞かなくつてもいい」

「まだ売るとこじゃありません」

「そんならなお聞かなくてもいい」

「どうも困るな、東風君、君だけだね、熱心に聞いてくれるの

は。少し張合が抜けるがまあ仕方がない、ざつと話してしまおう」

「ざつとでなくてもいいから緩ゆるくり話したまえ。大変面白い」
「ヴァイオリンはようやくの思で手に入れたが、まず第一に困ったのは置き所だね。僕の所へは大分だいぶ人が遊びにくるから滅多めったな所へぶらさげたり、立て懸けたりするとすぐ露見してしまう。穴を掘って埋めちや掘り出すのが面倒だろう」

「そうさ、天井裏へでも隠したかい」と東風君は気楽な事を云う。

「天井はないさ。百姓家だもの」
ひやくしやうや

「そりや困つたろう。どこへ入りたい」

「どこへ入れたと思う」

「わからないね。戸袋のなかか」

「いいえ」

「夜具にくるんで戸棚へしまったか」

「いいえ」

東風君と寒月君はヴァイオリンの隠れ家^{かく}についてかくのごとく問答をしているうちに、主人と迷亭君も何かしきりに話している。

「こりや何と読むのだい」と主人が聞く。

「どれ」

「この二行さ」

「何だつて？ Quid aliud est mulier nisi amicitiae inimica……」

こりや君^{ラテンで}羅匈語じゃないか」

「羅匈語は分つてゐるが、何と読むのだい」

「だつて君は平生羅匈語が読めると云つてゐるじゃないか」と迷

亭君も危険だと見て取つて、ちよつと逃げた。

「無論読めるさ。読める事は読めるが、こりや何だい」

「読める事は読めるが、こりや何だは手ひどいね」

「何でもいいからちよつと英語に訳して見ろ」

「見ろは烈しいね。まるで従卒のようだね」

「従卒でもいいから何だ」

「まあ羅旬語などはあとにして、ちよつと寒月君のご高話を拝聴つかまつ仕ろうじゃないか。今大変なところだよ。いよいよ露見するか、しないか危機一髪と云う安宅あたかの関せきへかかつてるんだ。――

ねえ寒月君それからどうしたい」と急に乗気になつて、またヴァイオリンの仲間入りをする。主人は情けなくも取り残された。寒月君はこれに勢を得て隠し所を説明する。

「とうとう古つづらの中へ隠しました。このつづらは国を出る

時御祖母^{おばあ}さんが餞別にくれたものですが、何でも御祖母さんが嫁にくる時持つて来たものだそうです」

「そいつは古物^{こぶつ}だね。ヴァイオリンとは少し調和しないようだ。ねえ東風君」

「ええ、ちと調和せんです」

「天井裏だつて調和しないじゃないか」と寒月君は東風先生をやり込めた。

「調和はしないが、句にはなるよ、安心し給え。秋淋^{あきさび}しつづらにかくすヴァイオリンはどうだい、両君」

「先生今日は大分俳句^{だいぶん}が出来ますね」

「今日に限った事じゃない。いつでも腹の中で出来てるのさ。僕の俳句における造詣^{ぞうけい}と云ったら、故子^{こしきし}規子も舌を捲^まいて驚ろいたくらいのものさ」

「先生、子規さんとは御つき合でしたか」と正直な東風君は真率^{しんそつ}な質問をかける。

「なにつき合わなくつても始終無線電信で肝胆相照らしていたもんだ」と無茶苦茶を云うので、東風先生あきれて黙ってしまつた。寒月君は笑いながらまた進行する。

「それで置き所だけは出来た訳だが、今度は出すのに困つた。ただ出すだけなら人目を掠^{かす}めて眺^{なが}めるくらいはやれん事はないが、眺めたばかりじゃ何にもならない。弾^ひかなければ役に立たない。弾けば音が出る。出ればすぐ露見する。ちようど木^{むくげ}槿垣^{がき}を一重隔てて南隣りは沈^{ちん}澱組^{でんぐみ}の頭領が下宿しているんだから剣^{けん}呑^{のん}だね」

「困るね」と東風君が気の毒そうに調子を合わせる。

「なるほど、こりや困る。論より証拠音が出るんだから、小督^{ことく}

の局つぼねも全くこれでしくじったんだからね。これがぬすみ食をす
るとか、贗札にせざつを造るとか云うなら、まだ始末がいいが、音曲おんぎよくは
人に隠しちや出来ないものだからね」

「音さえ出なければどうでも出来るんですが……」

「ちよつと待った。音さえ出なけりやと云うが、音が出なくて
も隠かくし了おおせないのがあるよ。昔むかし僕等が小石川の御寺で自炊を
している時分に鈴木みりんの藤とうさんと云う人がいてね、この藤さんが
大変味淋みりんがすきで、ビールの徳利とっくりへ味淋を買つて来ては一人で
楽しみに飲んでいたのさ。ある日藤とうさんが散歩に出たあとで、
よせばいいのに苦沙弥君がちよつと盗んで飲んだところが……」
「おれが鈴木みりんの味淋などをのむものか、飲んだのは君だぜ」と
主人は突然大きな声を出した。

「おや本を読んでるから大丈夫かと思つたら、やはり聞いている

ね。油断の出来ない男だ。耳も八丁、目も八丁とは君の事だ。なるほど云われて見ると僕も飲んだ。僕も飲んだには相違ないが、発覚したのは君の方だよ。——両君まあ聞きたまえ。苦沙弥先生元来酒は飲めないのだよ。ところを人の味淋だと思つて一生懸命に飲んだものだから、さあ大変、顔中真赤まっかにはれ上つてね。いやもう二目ふためとは見られないありさまさ……」

「黙っている。羅甸語ラテン語も読めない癖に」

「ハハハハ、それで藤さんとうが帰つて来てビールの徳利をふつて見ると、半分以上足りない。何でも誰か飲んだに相違ないと云うので見廻して見ると、大将隅の方に朱泥しゅでいを練りかためた人形のようにかたくなつていらあね……」

三人は思わず哄然こうぜんと笑い出した。主人も本をよみながら、くすくすと笑つた。独りひと独仙君に至つては機外きがいの機きを弄ろうし過ぎて、

少々疲労したと見えて、碁盤の上へのしかかつて、いつの間にやら、ぐうぐう寝ている。

「まだ音がしないもので露見した事がある。僕が昔し姥子うばこの温泉に行つて、一人のじじいと相宿になつた事がある。何でも東京の呉服屋の隠居か何かだつたがね。まあ相宿だから呉服屋だろうが、古着屋だろうが構う事はないが、ただ困つた事が一つ出来てしまった。と云うのは僕は姥子うばこへ着いてから三日目に煙草たばこを切らしてしまつたのさ。諸君も知つてゐるだろうが、あの姥子と云うのは山の中の一軒屋でただ温泉に這入はいつて飯を食うよりほかにどうもこうも仕様のない不便の所さ。そこで煙草を切らしたのだから御難だね。物はないとなるとなお欲しくなるもので、煙草がないなと思うやいなや、いつもそんなでないのが急に呑みたくなり出してね。意地のわるい事に、そのじじいが風

呂敷に一杯煙草を用意して登山しているのさ。それを少しずつ出しては、人の前で胡坐あぐらをかいて呑みたいだろうと云わないばかりに、すばすばふかすのだね。ただふかすだけなら勘弁のしようもあるが、しまいには煙を輪に吹いて見たり、豎たてに吹いたり、横に吹いたり、乃至は邯鄲夢かんたんゆめの枕まくらと逆に吹いたり、または鼻から獅子の洞入りほらい、洞返りほらがえに吹いたり。つまり呑みびらかすんだね……」

「何です、呑みびらかすと云うのは」

「衣装道具いしやうどうぐなら見せびらかすのだが、煙草だから呑みびらかすのさ」

「へえ、そんな苦しい思いをなさるより貰ったらいでしょう」

「ところが貰わないね。僕も男子だ」

「へえ、貰っちゃいけないんですか」

「いけるかも知れないが、貰わないね」

「それでどうしました」

「貰わないで偷んだ」

「おやおや」

「奴さん手拭てぬぐいをぶらさげて湯に出掛けたから、呑むならここだ
と思つて一心不乱立てつづけに呑んで、ああ愉快だと思つ間まも
なく、障子しょうじがからりとあいたから、おやと振り返ると煙草の持
ち主さ」

「湯には這入らなかつたのですか」

「這入ろうと思つたら巾着きんちやくを忘れたのに気がついて、廊下から
引き返したんだ。人が巾着でもとりやしまいし第一それからが
失敬さ」

「何とも云えませんね。煙草の御手際おてぎわじゃ」

「ハハハハじじいもなかなか眼識があるよ。巾着はとにかくだが、じいさんが障子をあげると二日間の溜め呑みをやった煙草の煙りがむつとするほど室のなかに籠^{へや}つてゐるじゃないか、悪事千里とはよく云つたものだね。たちまち露見してしまった」

「じいさん何とかいいましたか」

「さすが年の功だね、何にも言わずに巻煙草を五六十本半紙にくるんで、失礼ですが、こんな粗葉^{そは}でよろしければどうぞお呑み下さいましと云つて、また湯壺^{ゆづぼ}へ下りて行つたよ」

「そんなのが江戸趣味と云うのでしょうか」

「江戸趣味だか、呉服屋趣味だか知らないが、それから僕は爺さんとおおい^{おおい}に肝胆相照^{かんたんあいて}らして、二週間の間面白く逗留^{とまりゆう}して帰つて来たよ」

「煙草は二週間中爺さんの御馳走になつたんですか」

「まあそんなところだね」

「もうヴァイオリンは片ついたかい」と主人はようやく本を伏せて、起き上りながらついに降参を申し込んだ。

「まだです。これからが面白いところです、ちょうどいい時ですから聞いて下さい。ついでにあの碁盤の上で昼寝をしている先生——何とか云いましたね、え、独仙先生、——独仙先生にも聞いていただきたいな。どうですあんなに寝ちや、からだに毒ですぜ。もう起してもいいでしょう」

「おい、独仙君、起きた起きた。面白い話がある。起きるんだよ。そう寝ちや毒だとさ。奥さんが心配だとさ」

「え」と云いながら顔を上げた独仙君の山羊髯やぎひげを伝わって垂涎よだれが一筋長々と流れて、蝸牛かたつむりの這った迹あとのように歴然と光っている。

「ああ、眠かつた。山上の白雲わが懶ものうきに似たりか。ああ、いい心持ちに寝ねたよ」

「寝たのはみんなが認めているのだがね。ちつと起きちゃどうだい」

「もう、起きてもいいね。何か面白い話があるかい」

「これからいよいよヴァイオリンを——どうするんだったかな、苦沙弥君」

「どうするのかな、とんと見当けんとうがつかない」

「これからいよいよ弾くところですよ」

「これからいよいよヴァイオリンを弾くところだよ。こつちへ出て来て、聞きたまえ」

「まだヴァイオリンかい。困ったな」

「君は無絃むげんの素琴そきんを弾ずる連中だから困らない方なんだが、寒月

君のは、きいきいびいびい近所合壁へ聞えるのだから大に困つてるところだ」

「そうかい。寒月君近所へ聞えないようにヴァイオリンを弾くほう方を知らんですか」

「知りませんね、あるなら伺いたいもので」

「伺わなくても露地の白牛を見ればすぐ分るはずだが」と、何だか通じない事を云う。寒月君はねぼけてあんな珍語を弄するのだろうと鑑定したから、わざと相手にならないで話頭を進めた。

「ようやくの事で一策を案出しました。あくる日は天長節だから、朝からうちにいて、つづらの蓋をとって見たり、かぶせて見たり一日そわそわして暮らしてしまいましたがいよいよ日が暮れて、つづらの底で蟬が鳴き出した時思い切つて例のヴァイ

オリンと弓を取り出しました」

「いよいよ出たね」と東風君が云うと「滅多に弾くとあぶないよ」と迷亭君が注意した。

「まず弓を取って、切先から鰐元までしらべて見る……」

「下手な刀屋じゃあるまいし」と迷亭君が冷評した。

「實際これが自分の魂だと思うと、侍が研ぎ澄した名刀を、長夜の灯影で鞘払をする時のような心持ちがするものですよ。私は弓を持ったままぶるぶるとふるえました」

「全く天才だ」と云う東風君について「全く癩癩だ」と迷亭君がつけた。主人は「早く弾いたらよかろう」と云う。独仙君は困ったものだと言ふ顔付をする。

「ありがたい事に弓は無難です。今度はヴァイオリンを同じくら
ソバ
ンプの傍へ引き付けて、裏表共よくしらべて見る。この間約五分
あいだ

間、つづらの底では始終蟬こおろぎが鳴いていると思つて下さい。……」

「何とでも思つてやるから安心して弾くがいい」

「まだ弾きやしません。——幸いヴァイオリンも疵きずがない。これなら大丈夫とぬつくと立ち上がる……」

「どつかへ行くのかい」

「まあ少し黙つて聞いて下さい。そう一句毎に邪魔をされちや話が出来ない。……」

「おい諸君、だまるんだとき。シーシー」

「しゃべるのは君だけだぜ」

「うん、そうか、これは失敬、謹聴謹聴」

「ヴァイオリンを小脇に抱かい込んで、草履ぞうりを突つかけたまま二三歩草の戸を出たが、まてしばし……」

「そらおいでなすつた。何でも、どつかで停電するに違ないと

思つた」

「もう帰つたつて甘干しの柿はないぜ」

「そう諸先生が御まぜ返しになつてははなはだ遺憾いかんの至りだが、東風君一人を相手にするより致し方がない。——いいかね東風君、二三歩出たがまた引き返して、国を出るとき三円二十錢で買った赤毛布あかげつとを頭から被かぶつてね、ふつとランプを消すと君真暗闇まつくらやみになつて今度は草履ぞうりの所在地ありかが判然しなくなつた」

「一体どこへ行くんだい」

「まあ聞いてたまい。ようやくの事草履を見つけて、表へ出ると星月夜に柿落葉、赤毛布にヴァイオリン。右へ右へと爪先上りつまさきあがに庚申山こうしんやまへ差しかかつてくると、東嶺寺とうれいじの鐘がボーンと毛布けつとを通して、耳を通して、頭の中へ響き渡つた。何時なんじだと思う、君」

「知らないね」

「九時だよ。これから秋の夜長をたった一人、山道八丁を大平おおだいらと云う所まで登るのだが、平生なら臆病な僕の事だから、恐しくつてたまらないところだけでも、一心不乱となると不思議なもので、怖いにも怖くないにも、毛頭そんな念はてんで心の中に起らないよ。ただヴァイオリンが弾きたいばかりで胸が一杯になつてゐるんだから妙なものさ。この大平と云う所は庚申山の南側で天気の良い日に登つて見ると赤松の間から城下が一目に見下せる眺望佳絶の平地で——そうさ広さはまあ百坪ひゃくへいもあるうかね、真中に八畳敷ほどな一枚岩があつて、北側は鵜沼うぬまの沼と云う池つづきで、池のまわりは三抱えもあるうと云う樟くすのきばかりだ。山のなかだから、人の住んでる所は樟脳しょうのうを採る小屋が一軒あるばかり、池の近辺は昼でもあまり心持ちのいい場所じゃない。幸い工兵が演習のため道を切り開いてくれたから、登るの

に骨は折れない。ようやく一枚岩の上へ来て、毛布けつとを敷いて、
ともかくもその上へ坐つた。こんな寒い晩に登つたのは始めて
なんだから、岩の上へ坐つて少し落ち着くと、あたりの淋さみしさ
が次第次第に腹の底へ沁しみ渡る。こう云う場合に人の心を乱す
ものはただ怖いと云う感じばかりだから、この感じさえ引き抜
くと、余るところは咬々冽々こうこうれつれつたる空霊の気だけになる。二十分
ほど茫然ぼうぜんとしてゐるうちに何だか水晶で造つた御殿のなかに、
たつた一人住んでるような氣になった。しかもその一人住んで
る僕の中から——いやからだばかりじゃない、心も魂もこと
ごとく寒天か何かで製造されたごとく、不思議に透すき徹とちつてし
まって、自分が水晶の御殿の中にいるのだから、自分の腹の中に
水晶の御殿があるのだから、わからなくなつて来た……」

「飛んだ事になつて来たね」と迷亭君が真面目にからかうあと

に付いて、独仙君が「面白い境界だ」^{きょうがい}と少しく感心したようすに見えた。

「もしこの状態が長くつづいたら、私はあすの朝まで、せつかくのヴァイオリンも弾かずに、茫^{ぼん}やり一枚岩の上に坐つてたかも知れないです……」

「狐でもいる所かい」と東風君がきいた。

「こう云う具合で、自他の区別もなくなつて、生きてゐるか死んでゐるか方角のつかない時に、突然^{うし}後ろの古沼の奥でギャーと云う声がした。……」

「いよいよ出たね」

「その声が遠く反響を起して満山の秋の梢^{こずえ}を、野分^{のわき}と共に渡つたと思つたら、はつと我に歸つた……」

「やつと安心した」と迷亭君が胸を撫^なでおろす真似をする。

「大死たいしいちばんけんこんあらた一番乾坤新なり」と独仙君は目くばせをする。寒月君にはちつとも通じない。

「それから、我に帰つてあたりを見廻わすと、庚申山こうしんやま一面はしんとして、雨垂れほどの音もしない。はてな今の音は何だろうと考えた。人の声にしては鋭すぎるし、鳥の声にしては大き過ぎるし、猿の声にしては——この辺によもや猿はおるまい。何だろう？ 何だろうと云う問題が頭のなかに起ると、これを解釈しようとするので今まで静まり返っていたやからが、紛然ふんぜんざつぜん然じゅうぜんとしてあたかもコンノート殿下歓迎の当時における都人もつ士狂乱の態度を以て脳裏をかけ廻る。そのうちに総身そうしんの毛穴が急にしやうちゅうあいて、焼酎を吹きかけた毛脛けずねのように、勇氣、胆力、分別、沈着などと号するお客様がすうすうと蒸発して行く。心臓が肋骨の下でステテコを踊り出す。両足が紙鳶たこのうなりのよう

に震動をはじめ。これはたまらん。いきなり、毛布けつとを頭からかぶつて、ヴァイオリンを小脇に掻かい込んでひよろひよると一枚岩を飛び下りて、一目散に山道八丁を麓ふもとの方へかけ下りて、宿へ帰つて布団ふとんへくるまつて寝てしまった。今考えてもあんな気味のわるかつた事はないよ、東風君

「それから」

「それでおしまいさ」

「ヴァイオリンは弾かないのかい」

「弾きたくつても、弾かれないじゃないか。ギヤーだもの。君だつてきつと弾かれないよ」

「何だか君の話は物足りないような気がする」

「気がしても事実だよ。どうです先生」と寒月君は一座を見廻わして大得意のようすである。

「ハハハハこれは上出来。そこまで持つて行くにはだいぶ苦心
惨憺たるものがあつたのだらう。僕は男子のサンドラ・ベロニ
が東方君子の邦くにに出現するところかと思つて、今が今まで真面
目に拝聴していたんだよ」と云つた迷亭君は誰かサンドラ・ベロ
ニの講釈でも聞くかと思のほか、何にも質問が出ないので「サ
ンドラ・ベロニが月下に豎琴たてごとを弾いて、以太利亞風イタリアふうの歌を森の
中でうたつてるところは、君の庚申山こうしんやまへヴァイオリンをかかえ
て上のぼるところと同曲にして異巧なるものだね。惜しい事に向う
は月中げつちゅうの嫦娥じようがを驚ろかし、君は古沼ふるぬまの怪狸かいりにおどろかされたの
で、際きわどいところで滑稽こっけいと崇高の大差を来たした。さぞ遺憾いかんだ
らう」と一人で説明すると、

「そんなに遺憾ではありません」と寒月君は存外平氣である。
「全体山の上でヴァイオリンを弾こうなんて、ハイカラをやる

から、おどかされるんだ」と今度は主人が酷評を加えると、
「好漢こうかんこの鬼窟きくつり裏に向つて生計を営む。惜しい事だ」と独仙君は嘆息した。すべて独仙君の云う事は決して寒月君にわかつたためしがない。寒月君ばかりではない、おそらく誰にでもわかないだろう。

「そりゃ、そうと寒月君、近頃でも矢張り学校へ行つて珠たまばかり磨いてるのかね」と迷亭先生はしばらくして話頭を転じた。
「いえ、こないだうちから国へ帰省していたもんですから、暫時ざんじ中止の姿です。珠ももうあきましたから、実はよそうかと思つてゐるんです」

「だって珠が磨けないと博士にはなれんぜ」と主人は少しく眉をひそめたが、本人は存外気楽で、

「博士ですか、エへへへ。博士ならもうならなくつてもいい

んです」

「でも結婚が延びて、双方困るだろう」

「結婚って誰の結婚です」

「君のさ」

「私が誰と結婚するんです」

「金田の令嬢さ」

「へええ」

「へえって、あれほど約束があるじゃないか」

「約束なんかありやしません、そんな事を言い触^ふらすなあ、向うの勝手です」

「こいつは少し乱暴だ。ねえ迷亭、君もあの一件は知ってるだろう」

「あの一件た、鼻事件かい。あの事件なら、君と僕が知ってるば

かりじゃない、公然の秘密として天下一般に知れ渡つてゐる。現に万朝まんちようなどでは花嫁と云う表題で両君の写真を紙上に掲ぐるの榮はいつだろう、いつだろうって、うるさく僕のところへ聞きにくるくらいだ。東風君などはすでに鴛鴦歌えんおうかと云う一大長篇を作つて、三箇月前ぜんから待つてゐるんだが、寒月君が博士にならないばかりで、せつかくの傑作も宝の持ち腐れになりそうで心配でたまらないそうさ。ねえ、東風君そうだろう」

「まだ心配するほど持ちあつてはいませんが、とにかく満腹の同情をこめた作を公けにするつもりです」

「それ見たまえ、君が博士になるかならないかで、四方八方へ飛んだ影響が及んでくるよ。少ししつかりして、珠を磨いてくれたまえ」

「へへへいろいろ御心配をかけて済みませんが、もう博士に

はならないでもいいのです」

「なぜ」

「なぜって、私にはもう歴然^{れつき}とした女房があるんです」

「いや、こりやえらい。いつの間に秘密結婚をやったのかね。油断のならない世の中だ。苦沙弥さんただ今御聞き及びの通り寒月君はすでに妻子があるんだとさ」

「子供はまだですよ。そう結婚して一と月もたたないうちに子供が生れちゃ事でさあ」

「元来いつどこで結婚したんだ」と主人は予審判事見たような質問をかける。

「いつつて、国へ帰ったら、ちゃんと、うちで待ってたのです。今日先生の所へ持って来た、この鰹節^{かつお}は結婚祝に親類から貰ったんです」

「たつた三本祝うのはけちだな」

「なに沢山のうちを三本だけ持って来たのです」

「じゃ御国の女だね、やつぱり色が黒いんだね」

「ええ、真黒です。ちょうど私には相当です」

「それで金田の方はどうする気だい」

「どうする気でもありません」

「そりや少し義理がわるかろう。ねえ迷亭」

「わるくもないさ。ほかへやりや同じ事だ。どうせ夫婦なんてものは闇の中で鉢合せをするようなものだ。要するに鉢合せをしないで済むところをわざわざ鉢合せするんだから余計な事さ。すでに余計な事なら誰と誰の鉢が合ったって構いっこないよ。ただ気の毒なのは鴛鴦歌えんおうかを作った東風君くらいなものさ」

「なに鴛鴦歌は都合によつて、こちらへ向け易かえてもよろしゆ

うございます。金田家の結婚式にはまた別に作りますから」

「さすが詩人だけあって自由自在なものだね」

「金田の方へ断わつたかい」と主人はまだ金田を気にしている。

「いいえ。断わる訳がありません。私の方でくれとも、貰いた
いとも、先方へ申し込んだ事はありませんから、黙っていれば
沢山です。——なあに黙つても沢山ですよ。今時分は探偵が
十人も二十人もかかつて一部始終残らず知れていますよ」

探偵と云う言語を聞いた、主人は、急に苦い顔をことばして

「ふん、そんなら黙っている」と申し渡したが、それでも飽あき
足らなかつたと見えて、なお探偵について下しものような事をさも
大議論のように述べられた。

「不用意の際に人の懷中を抜くのがスリで、不用意の際に人の
胸中を釣るのが探偵だ。知らぬ間まに雨戸をはずして人の所有品

を偷むぬすのが泥棒で、知らぬ間に口を滑すべらして人の心を読むのが探偵だ。ダンビラを畳の上へ刺して無理に人の金銭を着服するのが強盗で、おどし文句をいやに並べて人の意志を強しうるのが探偵だ。だから探偵と云う奴はスリ、泥棒、強盗の一族でとうてい人の風上かざかみに置けるものではない。そんな奴の云う事を聞くと癖になる。決して負けるな」

「なに大丈夫です、探偵の千人や二千人、風上に隊伍を整えて襲撃したつて怖こわくはありません。珠磨たますりの名人理学士水島寒月でさあ」

「ひやひや見上げたものだ。さすが新婚学士ほどあつて元氣旺盛おうせいなものだね。しかし苦沙弥さん。探偵がスリ、泥棒、強盗の同類なら、その探偵を使う金田君のくまごごときものは何の同類だろう」
「熊坂長範くまざかちやうはんくらいなものだろう」

「熊坂はよかつたね。一つと見えたる長範が二つになつてぞ失せにけりと云うが、あんな鳥金からすがねで身代しんだいをつくつた向横丁むこうよこちようの長範なんかは業ごうつく張りの、慾張り屋だから、いくつになつても失せる氣遣きづかいはないぜ。あんな奴につかまったら因果だよ。生涯しょうがいたるよ、寒月君用心したまえ」

「なあに、いいですよ。ああら物々し盗人ぬすびとよ。手並はさきにも知りつらん。それにも懲こりず打ち入るかつて、ひどい目に合せてやりまさあ」と寒月君は自若ほうしとして宝生流しょうりゆうに氣燄きえんを吐はいて見せる。

「探偵と云えば二十世紀の人間はたいてい探偵のようになる傾向があるが、どう云う訳だろう」と独仙君は独仙君だけに時局問題には関係のない超然たる質問を呈出した。

「物価が高いせいでしょう」と寒月君が答える。

「芸術趣味を解しないからでしよう」と東風君が答える。

「人間に文明の角つのが生えて、金米糖こんべいとうのようにいらいらするからさ」と迷亭君が答える。

今度は主人の番である。主人はもったい振ぶった口調で、こんな議論を始めた。

「それは僕が大分だいぶん考えた事だ。僕の解釈によると当世人の探偵的傾向は全く個人の自覚心の強過ぎるのが原因になっている。僕の自覚心と名づけるのは独仙君の方で云う、見性成仏けんしやうじやうぶつとか、自己は天地と同一体だとか云う悟道の類たぐいではない。……」

「おや大分だいぶんむずかしくなつて来たようだ。苦沙弥君、君にしてそんな大議論を舌頭ぜつとうに弄ろうする以上は、かく申す迷亭も憚はばりながら御あとで現代の文明に対する不平を堂々と云うよ」

「勝手に云うがいい、云う事もない癖に」

「ところがある。大^{おお}にある。君なぞはせんだつては刑事巡查を神のごとく敬^{うやま}い、また今日は探偵をスリ泥棒に比し、まるで矛盾^{へんげ}の変怪だが、僕などは終始一貫父母未生^{ふもみしやういぜん}以前からただ今に至るまで、かつて自説を変じた事のない男だ」

「刑事は刑事だ。探偵は探偵だ。せんだつてはせんだつてで今日は今日だ。自説が変らないのは発達しない証拠だ。下愚^{かぐ}は移らずと云うのは君の事だ。……」

「これはきびしい。探偵もそうまともにくると可愛^{かわい}いところがある」

「おれが探偵」

「探偵でないから、正直でいいと云うのだよ。喧嘩はおやめおやめ。さあ。その大議論のあとを拝聴しよう」

「今の人の自覚心と云うのは自己と他人の間に截然^{せつぜん}たる利害の

鴻溝こうこうがあると云う事を知り過ぎていと云う事だ。そうしてこの自覚心なるものは文明が進むにしたがつて一日一日と鋭敏になつて行くから、しまいには一挙手一投足も自然天然とは出来ないようになる。ヘンレーと云う人がスチーヴンソンを評して彼は鏡のかかった部屋はいに入つて、鏡の前を通る毎ごとに自己の影を写して見なければ気が済まぬほど瞬時も自己を忘るる事の出来ない人だと評したのは、よく今日の趨勢こんにち すうせいを言いあらわしている。寝てもおれ、覚さめてもおれ、このおれが至るところにつけまつわつてゐるから、人間の行為言動が人工的にコセつくばかり、自分で窮屈になるばかり、世の中が苦しくなるばかり、ちやうど見合をする若い男女の心持ちで朝から晩までくらさなければならぬ。悠々ゆうゆうとか從容しやうようとか云う字は劃かくがあつて意味のない言葉になつてしまふ。この点において今代きんだいの人は探偵的である。

泥棒的である。探偵は人の目を掠^{かす}めて自分だけうまい事をしよう^いと云う商売だから、勢^{いきおい}自覚心が強くならなくては出来ん。泥棒も捕^{つか}まるか、見つかるかと云う心配が念頭を離れる事がないから、勢自覚心が強くならざるを得ない。今の人はどうしたら己^{おの}れの利になるか、損になるかと寝ても醒^さめても考えつづけたから、勢探偵泥棒と同じく自覚心が強くならざるを得ない。二六時中キョトキョト、コソコソして墓^いに入るまで一刻の安心も得ないのは今の人の心だ。文明の咒^{じゆそ}詛だ。馬鹿馬鹿しい」

「なるほど面白い解釈だ」と独仙君が云い出した。こんな問題になると独仙君はなかなか引込^{ひっこ}んでいない男である。「苦沙弥君の説明はよく我^{わが}意を得ている。昔^{むか}しの人は己れを忘れろと教えたものだ。今の人は己れを忘れるなと教えるからまるで違う。二六時中己れと云う意識をもつて充満している。それだから二

六時中太平の時はない。いつでも焦熱地獄だ。天下に何が薬だと云つて己れを忘れるより薬な事はない。三更月さんこうげつかむがに下入無我とはこの至境を咏えいじたものさ。今の人は親切をしても自然をかいている。英吉利イギリスのナイスなどと自慢する行為も存外自覺心が張り切れそうになっている。英国の天子が印度インドへ遊びに行つて、印度の王族と食卓を共にした時に、その王族が天子の前とも心づかず、つい自国の我流を出して馬鈴薯じゃがいもを手攫てづかみで皿へとつて、あとから真赤まっかになつて愧はじ入つたら、天子は知らん顔をしてやはり二本指で馬鈴薯を皿へとつたそうだ……」

「それが英吉利趣味ですか」これは寒月君の質問であつた。

「僕はこんな話を聞いた」と主人が後あとをつける。「やはり英国のある兵營で聯隊の士官が大勢して一人の下士官を御馳走した事がある。御馳走が済んで手を洗う水を硝子鉢ガラスばちへ入れて出した

ら、この下士官は宴会になれんと見えて、硝子鉢を口へあてて中の水をぐうと飲んでしまった。すると聯隊長が突然下士官の健康を祝すと云いながら、やはりフンガー・ボールの水を一口に飲み干したそうだ。そこで並みいる士官も我劣らじと水盃を挙げて下士官の健康を祝したと云うぜ」

「こんな噺もあるよ」とだまつてる事の嫌な迷亭君が云った。「カーライルが始めて女皇に謁した時、宮廷の礼に嫻わぬ変物の事だから、先生突然どうですと云いながら、どさりと椅子へ腰をおろした。ところが女皇の後ろに立っていた大勢の侍従や官女がみんなくすくす笑い出した——出したのではない、出そうとしたのさ、すると女皇が後ろを向いて、ちよつと何か相図をしたら、多勢の侍従官女がいつの間にかみんな椅子へ腰をかけて、カーライルは面目を失わなかったと云うんだが随分御念の

入った親切もあつたもんだ」

「カーライルの事なら、みんなが立つてても平氣だったかも知れませんか」と寒月君が短評を試みた。

「親切の方の自覺心はまあいいがね」と独仙君は進行する。「自覺心があるだけ親切をするにも骨が折れる訳になる。氣の毒な事さ。文明が進むに従つて殺伐の氣がなくなる、個人と個人の交際がおだやかになるなどと普通云うが大間違いさ。こんなに自覺心が強くつて、どうしておだやかになれるものか。なるほどちよつと見るとごくしずかで無事なようだが、御互の間は非常に苦しいのさ。ちようど相撲が土俵の真中で四つよに組んで動かないようなものだろう。はたから見ると平穩至極だが当人の腹は波を打っているじゃないか」

「喧嘩けんかも昔むかしの喧嘩は暴力で圧迫するのだからかえつて罪はな

かつたが、近頃じゃなかなか巧妙になつてゐるからなおなお自覺心が増してくるんだね」と番が迷亭先生の頭の上に廻つて来る。

「ベーコンの言葉に自然の力に従つて始めて自然に勝つとあるが、今の喧嘩は正にベーコンの格言通りに出来上つてゐるから不思議だ。ちやうど柔術のようなものさ。敵の力を利用して敵を斃^{たお}す事を考える……」

「または水力電気のようなものです。水の力に逆らわないでかえつてこれを電力に変化して立派に役に立たせる……」と寒月君が言いかけると、独仙君がすぐそのあとを引き取つた。「だから貧^{ひん}時には貧^{ひん}に縛^{ばく}せられ、富^ふ時には富^ふに縛^{ばく}せられ、憂^{ゆう}時には憂^{ゆう}に縛^{ばく}せられ、喜^き時には喜^きに縛^{ばく}せられるのさ。才人は才^たに斃^{たお}れ、智者は智に敗れ、苦沙弥君のような癩癩^{かんしゃくも}持ちは癩癩^{かんしゃくも}を利用さえすればすぐに飛び出して敵のぺてんに罹^{かか}る……」

「ひやひや」と迷亭君が手をたたくと、苦沙弥君はにやにや笑いながら「これでなかなかそう甘くは行かないのだよ」と答えたなら、みんな一度に笑い出した。

「時に金田のようなのは何で斃れるだろう」

「女房は鼻で斃れ、主人は因業いんごうで斃れ、子分は探偵で斃れか」

「娘は？」

「娘は——娘は見た事がないから何とも云えないが——まず着倒れか、食い倒れ、もしくは呑んだくれの類たぐいだろう。よもや恋い倒れにはなるまい。ことによると卒塔婆小町そとばこまちのように行き倒れになるかも知れない」

「それは少しひどい」と新体詩を捧げただけに東風君が異議を申し立てた。

「だから応無所住おうむしよじゅう而生其心にしようごしんと云うのは大事な言葉だ、そう云う

境界に至らんと人間は苦しくてならん」と独仙君しきりに独りきようがい
悟つたような事を云う。

「そう威張るもんじゃないよ。君などはことによると電光影裏でんこうえいりにさか倒れをやるかも知れないぜ」

「とにかくこの勢で文明が進んで行つた日にや僕は生きてるのはいやだ」と主人がいい出した。

「遠慮はいらないから死ぬき」と迷亭が言下ごんかに道破どうはする。

「死ぬのはなおいやだ」と主人がわからん強情を張る。

「生れる時には誰も熟考して生れるものは有りませんが、死ぬ時には誰も苦にすると見えますね」と寒月君がよそよそしい格言をのべる。

「金を借りるときには何の気なしに借りるが、返す時にはみんな心配するのと同じ事さ」とこんな時にすぐ返事の出来るのは

迷亭君である。

「借りた金を返す事を考えないものは幸福であるごとく、死ぬ事を苦にせんものは幸福さ」と独仙君は超然として出世間的である。

「君のように云うとつまり図太いのが悟つたのだね」

「そうさ、禪語に鉄牛面てつぎゅうめんの鉄牛心てつぎゅうしん、牛鉄面の牛鉄心と云うのがある」

「そうして君はその標本と云う訳かね」

「そうでもない。しかし死ぬのを苦にするようになったのは神經衰弱と云う病氣が発明されてから以後の事だよ」

「なるほど君などはどこから見ても神經衰弱以前の民だよ」

迷亭と独仙が妙な掛合かけあいをのべつにやっていると、主人は寒月東風二君を相手にしてしきりに文明の不平を述べている。

「どうして借りた金を返さずに済ますかが問題である」

「そんな問題はありせんよ。借りたものは返さなくちやなりませんよ」

「まあさ。議論だから、だまって聞かがいい。どうして借りた金を返さずに済ますかが問題であるごとく、どうしたら死なずに済むかが問題である。いな問題であつた。鍊金術れんきんじゆつはこれである。すべての鍊金術は失敗した。人間はどうしても死ななければならん事が分明ぶんみやうになつた」

「鍊金術以前から分明ですよ」

「まあさ、議論だから、だまって聞いている。いいかい。どうしても死ななければならん事が分明になつた時に第二の問題が起る」

「へえ」

「どうせ死ぬなら、どうして死んだらよからう。これが第二の問題である。自殺クラブはこの第二の問題と共に起るべき運命を有している」

「なるほど」

「死ぬ事は苦しい、しかし死ぬ事が出来なければなお苦しい。神經衰弱の国民には生きている事が死よりもはなはだしき苦痛である。したがって死を苦にする。死ぬのが厭^{いや}だから苦にするのではない、どうして死ぬのが一番よからうと心配するのである。ただたいていのものは智慧^{ちえ}が足りないから自然のままに放擲^{ほうてき}しておくうちに、世間がいじめ殺してくれる。しかし一と癖あるものは世間からなし崩しにいじめ殺されて満足するものではない。必^{かな}ずや死に方に付いて種々考究^{こうご}の結果、嶄新^{ざんしん}な名案を呈出するに違ない。だからして世界向後^{こうご}の趨勢^{すうせい}は自殺者が増加して、

その自殺者が皆独創的な方法をもつてこの世を去るに違ない」

「だいぶぶつそう大分物騒な事になりますね」

「なるよ。たしかになるよ。アーサー・ジョーンズと云う人のかいた脚本のなかにしきりに自殺を主張する哲学者があつて……」

「自殺するんですか」

「ところが惜しい事にしないのだがね。しかし今から千年も立てばみんな実行するに相違ないよ。万年ののち後には死と云えば自殺よりほかに存在しないもののように考えられるようになる」

「大変な事になりますね」

「なるよきつとなる。そうなると自殺も大分研究が積んで立派な科学になつて、落雲館のような中学校で倫理の代りに自殺学を正科として授けるようになる」

「妙ですな、傍聴に出たいくらいのもですね。迷亭先生御聞

きになりましたか。苦沙弥先生の御名論を」

「聞いたよ。その時分になると落雲館の倫理の先生はこう云うね。諸君公德などと云う野蛮の遺風を墨守ぼくしゆしてはなりません。世界の青年として諸君が第一に注意すべき義務は自殺である。しかして己おのれの好むところはこれを人に施ほどこして可なる訳だから、自殺を一步展開して他殺にしてもよろしい。ことに表の窮措大きゆうそだい珍野苦沙弥氏のごときものは生きてござるのが大分苦痛のように見受けらるるから、一刻も早く殺して進ぜるのが諸君の義務である。もつとも昔と違ちがつて今日は開明の時節であるから槍やり、薙刀なぎなたもしくは飛道具たぐいの類を用いるような卑怯ひきような振舞をしてはなりません。ただあてこすりの高尚なる技術によつて、からかい殺すのが本人のため功德くどくにもなり、また諸君の名誉にもなるのであります。……」

「なるほど面白い講義をしますね」

「まだ面白い事があるよ。現代では警察が人民の生命財産を保護するのを第一の目的としている。ところがその時分になると巡査が犬殺しのような棍棒こんぼうをもつて天下の公民を撲殺ぼくさつしてあるく。……」

「なぜです」

「なぜって今の人間は生命いのちが大事だから警察で保護するんだが、その時分の国民は生きてるのが苦痛だから、巡査が慈悲のために打ち殺ぶしてくれるのさ。もつとも少し気の利きいたものは大概自殺してしまうから、巡査に打殺うちころされるような奴はよくよく意気地なし、自殺の能力のない白痴もしくは不具者に限るのさ。それで殺されたい人間は門口かどぐちへ張札をしておくのだね。なにしただ、殺されたい男ありとか女ありとか、はりつけておけば巡査

が都合のいい時に巡^{まわ}つてきて、すぐ志望通り取計つてくれるのさ。死骸かね。死骸はやっぱり巡查が車を引いて拾つてあるくのさ。まだ面白い事が出来てくる。……」

「どうも先生の冗談^{じようたん}は際限がありませんね」と東風君は^{おおい}大に感心している。すると独仙君は例の通り^{やぎひげ}山羊髯を気にしながら、のそのそ弁じ出した。

「冗談と云えば冗談だが、予言と云えば予言かも知れない。真理に徹底しないものは、とかく眼前の現象世界に束縛せられて^{ほうまつ}泡沫^{むげん}の夢幻を永久の事実と認定したがるものだから、少し飛び離れた事を云うと、すぐ冗談にしてしまう」

「燕雀^{えんじゃく}焉^{いざく}んぞ大鵬^{たいほう}の志^{こころざし}を知らんやですな」と寒月君が恐れ入ると、独仙君はそうさと云わぬばかりの顔付で話を進める。

「昔^{むか}しスペインにコルドヴァと云う所があつた……」

「今でもありやしないか」

「あるかも知れない。今昔の問題はとにかく、その風習として日暮れの鐘がお寺で鳴ると、家々の女がことごとく出て来て河へ這入はいつて水泳をやる……」

「冬もやるんですか」

「その辺はたしかに知らんが、とにかく貴賤老若きせんろうにやくの別なく河へ飛び込む。但し男子ただは一人も交らない。ただ遠くから見ている。遠くから見ていると暮色蒼然ぼしよくそうぜんたる波の上に、白い肌はだえが模糊もことして動いている……」

「詩的ですね。新体詩になりますね。なんと云う所ですか」と東風君は裸体らたいが出さえすれば前へ乗り出してくる。

「コルドヴァさ。そこで地方の若いものが、女といつしよに泳ぐ事も出来ず、さればと云つて遠くから判然その姿を見る事も

許されないのを残念に思つて、ちよつといたずらをした……」
「へえ、どんな趣向だい」といたずらと聞いた迷亭君は^{おお}大に嬉しがる。

「お寺の鐘つき番に^{わいろ}賄賂を使つて、日没を合図に撞く鐘を一時
間前に鳴らした。すると女などは^{あさはか}浅墓なものだから、そら鐘が
鳴つたと云うので、めいめい^{かし}河岸へあつまつて半襦袢、^{はんじゅばん}半股引
の服装でざぶりと水の中へ飛び込んだ。飛び込みはした
ものの、いつもと違つて日が暮れない」

「^{はげ}烈しい秋の日がかんかんしやしないか」

「橋の上を見ると男が大勢立つて^{なが}眺めている。恥ずかしいがど
うする事も出来ない。大に赤面したそうだ」

「それで」

「それでさ、人間はただ眼前の習慣に迷わされて、根本の原理

を忘れるものだから氣をつけないと駄目だと云う事さ」

「なるほどありがたい御説教だ。眼前の習慣に迷わされの御話を僕も一つやろうか。この間ある雑誌をよんだら、こう云う詐欺師さぎしの小説があつた。僕がまあここで書画骨董店こつとうてんを開くとする。で店頭ふくに大家の幅や、名人の道具類を並べておく。無論贗物にせものじゃない、正直正銘しょうじきしょうめい、うそいつわりのない上等品ばかり並べておく。上等品だからみんな高価にきまつてる。そこへ物数奇ものずきな御客さんが来て、この元信もとのぶの幅はいくらだねと聞く。六百円なら六百円と僕が云うと、その客が欲しい事はほしいが、六百円では手元に持ち合せがないから、残念だがまあ見合せよう」

「そう云うときまつてるかい」と主人は相変らず芝居しばい氣ぎのない事を云う。迷亭君はぬからぬ顔で、

「まあさ、小説だよ。云うとしておくんだ。そこで僕がなに代だい

は構いませんから、お氣に入つたら持つていらつしやいと云う。客はそうも行かないからと躊躇^{ちゆうちゆう}する。それじゃ月賦^{げつぷ}でいただきましょう、月賦も細く、長く、どうせこれから御贔屓^{ごひいき}になるんですから——いえ、ちつとも御遠慮には及びません。どうです月に十円くらいじゃ。何なら月に五円でも構いませんと僕が極^{ごく}きさくに云うんだ。それから僕と客の間に二三の問答があつて、とど僕が狩野法眼^{かのうほうげん}元信の幅を六百元ただし月賦十円払込の事で売渡す」

「タイムスの百科全書見たようですね」

「タイムスはたしかだが、僕のはすこぶる不慥^{ふたしか}だよ。これからがいよいよ巧妙なる詐偽に取りかかるのだけ。よく聞きたまえ月十円ずつで六百元なら何年で皆済^{かいさい}になると思う、寒月君」

「無論五年でしょう」

「無論五年。で五年の歲月は長いと思うか短かいと思うか、独仙君」

「一念万年、いちねんばんねん ばんねんいちねん短かくもあり、短かくもなしだ」

「何だそりや道歌どうかか、常識のない道歌だね。そこで五年の間毎月十円ずつ払うのだから、つまり先方では六十回払えばいいのだ。しかしそこが習慣の恐ろしいところで、六十回も同じ事を毎月繰り返していると、六十一回にもやはり十円払う気になる。六十二回にも十円払う気になる。六十二回六十三回、回を重ねるにしたがつてどうしても期日がくれば十円払わなくては気が済まないようになる。人間は利口のようにだが、習慣に迷って、根本を忘れると云う大弱点がある。その弱点に乗じて僕が何度でも十円ずつ毎月得をするのさ」

「ハハハハまさか、それほど忘れっぽくもならないでしょう」と

寒月君が笑うと、主人はいささか真面目で、

「いやそう云う事は全くあるよ。僕は大学の貸費たいひを毎月毎月勘定せずに返して、しまいに向から断むじやうわられた事がある」と自分の恥を人間一般の恥のように公言した。

「そら、そう云う人が現にここにいるからたしかなものだ。だから僕の先刻さつき述べた文明の未来記を聞いて冗談などと笑うものは、六十回でいい月賦しやうがひを生しやうがひ涯えい払はらって正当だと考とえる連中だ。ことに寒月君や、東風君のような経験とほの乏しい青年諸君は、よく僕らの云う事を聞いてたまされないようにしなくっちゃいけない」

「かしこまりました。月賦は必ず六十回限りの事に致します」

「いや冗談のようだが、實際参考になる話ですよ、寒月君」と独仙君は寒月君に向いだした。「たとえばですね。今苦沙弥君か

迷亭君が、君が無断で結婚したのが穩当おんとうでないから、金田とか云う人に謝罪しろと忠告したら君どうです。謝罪するの見ですか」

「謝罪は御容赦にあずかりたいですね。向うがあやまるなら特別、私の方ではそんな慾はありません」

「警察が君にあやまれと命じたらどうです」

「なおなお御免蒙ごめんこうむります」

「大臣とか華族ならどうです」

「いよいよもって御免蒙ります」

「それ見たまえ。昔と今とは人間がそれだけ變つてゐる。昔は御上おかみの御威光なら、何でも出来た時代です。その次には御上の御威光でも出来ないものが出来てくる時代です。今の世はいかに殿下でも閣下でも、ある程度以上に個人の人格の上にのしかかる事

が出来ない世の中です。はげしく云えば先方に権力があればあるほど、のしかかれるものの方では不愉快を感じて反抗する世の中です。だから今の世は昔むかしと違って、御上の御威光だから、出来ないのだと云う新現象のあらわれる時代です、昔しのものから考えると、ほとんど考えられないくらいな事柄が道理で通る世の中です。世態人情の変遷と云うものは実に不思議なもので、迷亭君の未来記も冗談だと云えば冗談に過ぎないのだが、その辺の消息を説明したものとすれば、なかなか味あじわいがあるじゃないですか」

「そう云う知己ちぎが出てくると是非未来記の続きが述べたくくなるね。独仙君の御説のごとく今の世に御上の御威光を笠かさにきたり、竹槍の二三百本を恃たのみにして無理を押し通そうとするのは、ちようどカゴへ乗って何でも蚊かでも汽車と競争しようとするの、時

代後れの頑物——まあわからずやの張本、烏金の長範先生くらいのものであるから、黙って御手際を拝見していればいいが——僕の未来記はそんな当座間に合せの小問題じゃない。人間全体の運命に関する社会的現象だからね。つらつら目下文明の傾向を達観して、遠き将来の趨勢を卜すると結婚が不可能の事になる。驚ろくなかれ、結婚の不可能。訳はこうさ。前申す通り今の世は個性中心の世である。一家を主人が代表し、一郡を代官が代表し、一国を領主が代表した時分には、代表者以外の人間には人格はまるでなかった。あつても認められなかった。それががらりと変ると、あらゆる生存者がことごとく個性を主張し出して、だれを見ても君は君、僕は僕だよと云わぬばかりの風をするようになる。ふたりの人が途中で逢えばうぬが人間なら、おれも人間だぞと心の中で喧嘩を買いながら行き違ふ。それだけ個人

が強くなった。個人が平等に強くなったから、個人が平等に弱くなった訳になる。人がおのれを害する事が出来にくくなった点において、たしかに自分は強くなったのだが、滅多に人の身の上に手出しがなくなつた点においては、明かに昔より弱くなつたんだらう。強くなるのは嬉しいが、弱くなるのは誰もありがたくないから、人から一毫も犯されまいと、強い点をあくまで固守すると同時に、せめて半毛でも人を侵してやろうと、弱いところは無理にも^{ひろ}拡げたくなる。こうなると人と人の間に空間がなくなつて、生きてるのが窮屈になる。出来るだけ自分を張りつめて、はち切れるばかりにふくれ返つて苦しがつて生存している。苦しいから色々な方法で個人と個人との間に余裕を求める。かくのごとく人間が自業自得で苦しんで、その苦し紛れに案出した第一の方案は親子別居の制さ。日本でも山の中

へ這入つて見給え。一家一門いっけいちもんことごとく一軒のうちにごろごろしている。主張すべき個性もなく、あつても主張しないから、あれで済むのだが文明の民はたとい親子の間でもお互に我儘わがままを張れるだけ張らなければ損になるから勢いきおい両者の安全を保持するためには別居しなければならない。歐洲は文明が進んでいるから日本より早くこの制度が行われている。たまたま親子同居するものがあつても、息子むすこがおやじから利息のつく金を借りたり、他人のように下宿料を払つたりする。親が息子の個性を認めてこれに尊敬を払えばこそ、こんな美風が成立するのだ。この風は早晩日本へも是非輸入しなければならん。親類はとくに離れ、親子は今日こんにちに離れて、やつと我慢しているようなものの個性の発展と、発展につれてこれに対する尊敬の念は無制限にのびて行くから、まだ離れなくては楽が出来ない。しかし親子兄弟の

離れたる今日、もう離れるものはない訳だから、最後の方案として夫婦が分れる事になる。今の人の考ではいつしよにいるから夫婦だと思つてゐる。それが大きな了見違いさ。いつしよにいるためにはいつしよにいるに充分なるだけ個性が合わなければならぬだらう。昔しなら文句はないさ、異体同心とか云つて、目には夫婦二人に見えるが、内実は一人前いちにんまえなんだからね。それだから偕老同穴かいろうどうけつとか号して、死んでも一つ穴の狸に化ける。野蛮なものさ。今はそうは行かないやね。夫はあくまでも夫で妻はどうしたつて妻だからね。その妻が女学校であんどんばかま行灯袴はを穿はいて牢ろうこ乎こたる個性を鍛きたえ上げて、束髪姿で乗り込んでくるんだから、とても夫の思う通りになる訳がない。また夫の思い通りになるような妻なら妻じゃない人形だからね。賢夫人になればなるほど個性は凄すごいほど發達する。發達すればするほど夫と合わなく

なる。合わなければ自然の勢いきおい夫と衝突する。だから賢妻と名がつく以上は朝から晩まで夫と衝突している。まことに結構な事だが、賢妻を迎えれば迎えるほど双方共苦しみの程度が増してくる。水と油のように夫婦の間には截然せつぜんたるしきりがあつて、それも落ちついて、しきりが水平線を保つていればまだしもだが、水と油が双方から働らきかけるのだから家のなかは大地震のように上がったり下がったりする。ここにおいて夫婦雑居は相互の損だと云う事が次第に人間に分つてくる。……」

「それで夫婦がわかるんですか。心配だな」と寒月君が云つた。

「わかれる。きつとわかれる。天下の夫婦はみんな分れる。今まではいっしょにいたのが夫婦であつたが、これからは同棲どうせいしているものは夫婦の資格がないように世間から目もくされてくる」

「すると私などは資格のない組へ編入される訳ですね」と寒月君は際どい^{きわ}ところでのろけを云った。

「明治の御代^{みよ}に生れて幸さ。僕などは未来記を作るだけあつて、頭脳が時勢より一二歩ずつ前へ出ているからちゃんと今から独身でいるんだよ。人は失恋の結果だなどと騒ぐが、近眼者の視^みるところは実に憐れなほど浅薄なものだ。それはとにかく、未来記の続きを話すところさ。その時一人の哲学者が天降^{あまくだ}つて破天荒の真理を唱道する。その説に曰^{いわ}くさ。人間は個性の動物である。個性を滅すれば人間を滅すると同結果に陥^{おちい}る。いやしくも人間の意義を完^{まった}からしめんためには、いかなる価^{あた}を払うとも構わなからこの個性を保持すると同時に発達せしめなければならん。その陋^{ろう}習に縛せられて、いやいやながら結婚を執行するのは人間自然の傾向に反した蛮風であつて、個性の発達せざる蒙昧^{もうまい}の

時代はいざ知らず、文明の今日こんにちなおこの弊竇へいとうに陥おちいつて恬てんとして顧かえりみないのははなはだしき謬見びゅうけんである。開化の高潮度に達せる今代きんだいにおいて二個の個性が普通以上に親密の程度をもつて連結され得べき理由のあるべきはずがない。この覩易みやすき理由はあるにも関らず無教育の青年男女が一時の劣情に駆られて、漫みだりに合ごう盃きんの式を挙ぐるは悖德没倫はいとくぼつりんのはなはだしき所為である。吾人は人道のため、文明のため、彼等青年男女の個性保護のため、全力を挙げこの蛮風に抵抗せざるべからず……」

「先生私はその説には全然反対です」と東風君はこの時思い切つた調子でぴたりと平手ひらてで膝頭ひざがしらを叩いた。「私の考では世の中に何が尊たつといと云つて愛と美ほど尊いものはないと思います。吾々を慰藉いしやし、吾々を完全にし、吾々を幸福にするのは全く両者の御蔭であります。吾人の情操を優美にし、品性を高潔にし、同情

を洗鍊するのは全く両者の御蔭であります。だから吾人はいつの世いづくに生れてもこの二つのものを忘れることが出来ないです。この二つの者が現実世界にあらわれると、愛は夫婦と云う関係になります。美は詩歌^{しいか}、音楽の形式に分れます。それだからいやしくも人類の地球の表面に存在する限りは夫婦と芸術は決して滅する事はなからうと思ひます」

「なければ結構だが、今哲学者が云つた通りちゃんと滅してしまふから仕方がないと、あきらめるさ。なに芸術だ？ 芸術だつ

て夫婦と同じ運命に帰着するのさ。個性の発展というのは個性の自由と云う意味だろう。個性の自由と云う意味はおれはおれ、人は人と云う意味だろう。その芸術なんか存在出来る訳がないじゃないか。芸術が繁昌するのは芸術家と享受者^{きようじゆしや}の間に個性の一致があるからだろ。君がいくら新体詩家だつて踏張^{ふんば}つても、

君の詩を読んで面白いと云うものが一人もなくつちや、君の新体詩も御氣の毒だが君よりほかに読み手はなくなる訳だろう。えんおうか鴛鴦歌をいく篇作つたつて始まらないやね。幸いに明治の今日こんにちに生れたから、天下が挙こぞつて愛読するのだろうか……」

「いえそれほどでもありません」

「今でさえそれほどでなければ、人文じんぶんの発達した未来即ち例の一

大哲学者が出て非結婚論を主張する時分には誰もよみ手はなく

なるぜ。いや君のだから読まないのじゃない。人々個々にんにんこのお

の特別の個性をもつてゐるから、人の作つた詩文などは一向面白

くないのさ。現に今でも英国などではこの傾向がちゃんとあら

われてゐる。現今英国の小説家中でもっとも個性のいちじるし

い作品にあらわれた、メレジスを見給え、ジエームスを見給え。

読み手は極めて少ないじやないか。少ない訳わけさ。あんな作品は

あんな個性のある人でなければ読んで面白くないんだから仕方がない。この傾向がだんだん発達して婚姻が不道德になる時分には芸術も完く滅亡^{まつた}さ。そうだろう君のかいたものは僕にわからなくなる、僕のかいたものは君にわからなくなった日にや、君と僕の間には芸術も糞もないじゃないか」

「そりやそうですけれども私はどうも直覺的にそう思われな
いんです」

「君が直覺的にそう思われなければ、僕は曲覺^{きよくかくてき}的にそう思う
まです」

「曲覺的かも知れないが」と今度は独仙君が口を出す。「とにかく人間に個性の自由を許せば許すほど御互の間が窮屈^{かうくつ}になるに相違ないよ。ニーチェが超人なんか担^{かつ}ぎ出すのも全くこの窮屈のやりどころがなくなつて仕方なしにあんな哲学に変形したも

のだね。ちよつと見るとあれがあゝの男の理想のように見えるが、ありや理想じゃない、不平さ。個性の發展した十九世紀にすくんで、隣りの人には心置なく滅多に寝返りも打てないから、大將少しやけになつてあんな乱暴をかき散らしたのだね。あれを読むと壮快と云うよりむしろ氣の毒になる。あの声は勇猛精進ゆうもうしょうじんの声じゃない、どうしても怨恨痛憤えんこんつうふんの音だおん。それもそのはずさ昔は一人えらい人があれば天下翕然きゆうぜんとしてその旗下にあつまるのだから、愉快なものさ。こんな愉快が事実に出てくれば何もニーチェ見たように筆と紙の力でこれを書物の上にあらわす必要がない。だからホーマーでもチェヴィ・チエーズでも同じく超人的な性格を写しても感じがまるで違ふからね。陽気ださ。愉快にかいてある。愉快な事実があつて、この愉快な事実を紙に写しかえたのだから、苦味にがみはないはずだ。ニーチェの時代は

そうは行かないよ。英雄なんか一人も出やしない。出たつて誰も英雄と立てやしない。昔は孔子こうしがたった一人だったから、孔子も幅を利きかしたのだが、今は孔子が幾人もいる。ことによると天下がことごとく孔子かも知れない。だからおれは孔子だよと威張つても圧おしが利かない。利かないから不平だ。不平だから超人などを書物の上だけで振り廻すのさ。吾人は自由を欲して自由を得た。自由を得た結果不自由を感じて困っている。それだから西洋の文明などはちよつといいようでもつまり駄目なものさ。これに反して東洋じゃ昔しから心の修行をした。その方が正しいのさ。見給え個性発展の結果みんな神経衰弱を起して、始末がつかなくなった時、王者おうしやの民蕩々たみとうとうたりと云う句の価値を始めて発見するから。無為むゐにして化かすと云う語の馬鹿に出来ない事を悟るから。しかし悟つたつてその時はもうしようがない。

アルコール中毒に罹^かつて、ああ酒を飲まなければよかつたと考
えるようなものさ」

「先生方は大分厭^{だいぶ}世的な御説のようだが、私は妙ですね。いろ
いろ伺つても何とも感じません。どう云うものでしょう」と寒
月君が云う。

「そりや妻君を持ち立てだからさ」と迷亭君がすぐ解釈した。
すると主人が突然こんな事を云い出した。

「妻^{さい}を持つて、女はいいものだなと思うと飛んだ間違になる。
参考のためだから、おれが面白い物を読んで聞かせる。よく聴
くがいい」と最前書齋^{さいぜん}から持つて来た古い本を取り上げて「こ
の本は古い本だが、この時代から女のわるい事は歴然と分つて
る」と云うと、寒月君が

「少し驚きましたな。元来いつ頃の本ですか」と聞く。「タマ

ス・ナツシと云つて十六世紀の著書だ」

「いよいよ驚ろいた。その時分すでに私の妻の悪口を云つたものがあるんですか」

「いろいろ女の悪口があるが、その内には是非君の妻も這入る訳だから聞くがいい」

「ええ聞きますよ。ありがたい事になりましたね」

「まず古来の賢哲が女性觀を紹介すべしと書いてある。いいかね。聞いてるかね」

「みんな聞いてるよ。独身の僕まで聞いてるよ」

「アリストートル曰く女はどうせ碌でなしなれば、嫁をとるなら、大きな嫁より小さな嫁をとるべし。大きな碌でなしより、小さな碌でなしの方が災^{わざわい}少なし……」

「寒月君の妻君は大きいかい、小さいかい」

「大きな碌でなしの部ですよ」

「ハハハハ、こりや面白い本だ。さああとを読んだ」

「或る人問う、いかなるかこれ最大奇蹟。さいだいきせき賢者答えて曰く、貞

婦……」

「賢者つてだれですか」

「名前は書いてない」

「どうせ振られた賢者に相違ないね」

「次にはダイオジニスが出ている。或る人問う、妻を娶るめといずれの時においてすべきか。ダイオジニス答えて曰く青年は未だいまし、老年はすでに遅し。とある」

「先生樽たるの中で考えたね」

「ピサゴラス曰くいわ天下に三の恐るべきものあり曰く火、曰く水、曰く女」

「希臘ギリシャの哲學者などは存外うかつ迂濶な事を云うものだね。僕に云わせると天下に恐るべきものなし。火に入いつて焼けず、水に入いつて溺れず……」だけで独仙君ちよつと行き詰る。

「女に逢つてとろけずだろう」と迷亭先生が援兵に出る。主人はさつきとあとを読む。

「ソクラチスは婦女子を御ぎよするは人間の最大難事と云えり。デモスセニス曰く人もしその敵を苦しめんとせば、わが女を敵に与うるより策の得たるはあらず。家庭の風波に日となく夜よとないく彼を困憊こんばい起つあたわざるに至らしむるを得ればなりと。セネカは婦女と無学をもつて世界における二大厄とし、マークス・オーレリアスは女子は制御し難き点において船舶に似たりと云い、プロータスは女子が綺羅きらを飾るの性癖をもつてその天稟てんびんの醜おこを蔽おほうの陋策ろうさくにもとづくものとせり。ヴァレリアスかつて書

をその友某におくつて告げて曰く天下に何事も女子の忍んでなし得ざるものあらず。願わくは皇天^{あわれみ}憐を垂れて、君をして彼等の術中に陥らしむるなかれと。彼また曰く女子とは何ぞ。友愛の敵にあらずや。避くべからざる苦しみにあらずや、必然の害にあらずや、自然の誘惑にあらずや、蜜^{みつ}に似たる毒にあらずや。もし女子を棄つるが不徳ならば、彼等を棄てざるは一層の呵責^{かしゃく}と云わざるべからず。……」

「もう沢山です、先生。そのくらい愚妻のわる口を拝聴すれば申し分はありません」

「まだ四五ページあるから、ついでに聞いたらどうだ」

「もうたいていにするがいい。もう奥方の御帰りの刻限だろう」と迷亭先生がからかい掛けると、茶の間の方で

「清や、清や」と細君が下女を呼ぶ声がする。

「こいつは大変だ。奥方はちゃんというぜ、君」

「ウフフフ」と主人は笑いながら「構うものか」と云った。

「奥さん、奥さん。いつの間に御^ま帰りですか」

茶の間ではしんとして答がない。

「奥さん、今のを聞いたんですか。え？」

答はまだない。

「今のはね、御主人の御考ではないですよ。十六世紀のナツシ君の説ですから御安心なさい」

「存じません」と妻君は遠くで簡単な返事をした。寒月君はくすくすと笑った。

「私も存じませんで失礼しましたアハハハハ」と迷亭君は遠慮なく笑つてると、門口^{かどぐち}をあらあらしくあけて、頼むとも、御免とも云わず、大きな足音がしたと思つたら、座敷の唐紙が乱暴

にあいて、多々良三平君の顔がその間からあらわれた。たたらさんぺい

三平君今日はいつに似ず、真白なシャツに卸立ておろしたのフロックを着て、すでに幾分か相場そうばを狂わせてる上へ、右の手へ重そうに下げた四本の麦酒ビールを纏まとぐるみ、鰹節かつぶしの傍そばへ置くと同時に挨拶めざまもせず、どつかと腰を下ろして、かつ膝を崩したのは目覚めざましい武者振である。

「先生胃病は近來いいですか。こうやって、うちにばかりいなさるから、いかんたい」

「まだ悪いとも何ともいやしない」

「いわんばつてんが、顔色はよかなかごたる。先生顔色きいが黄きいですばい。近頃は釣がいいです。品川から舟を一艘雇うて——私はこの前の日曜に行きました」

「何か釣れたかい」

「何も釣れません」

「釣れなくつても面白いのかい」

「こうぜん浩然の気を養うたい、あなた。どうですあなたがた。釣に行つた事がありますか。面白いですよ釣は。大きな海の上を小舟で乗り廻わしてあるくのですからね」と誰彼の容赦なく話しかける。

「僕は小さな海の上を大船で乗り廻してあるきたいんだ」と迷亭君が相手になる。

「どうせ釣るなら、くじら鯨か人魚でも釣らなくっちゃ、詰らないです」と寒月君が答えた。

「そんなものが釣れますか。文学者は常識がないですね。……」

「僕は文学者じゃありません」

「そうですか、何ですかあなたは。私のようなビジネス・マン

になると常識が一番大切ですからね。先生私は近来よつぽど常識に富んで来ました。どうしてもあんな所にいると、傍はたが傍はただから、おのずから、そうなってしまうのです」

「どうなってしまうのだ」

「煙草たばこでもですね、朝日や、敷島しきしまをふかしては幅きが利きかんです」と云いながら、吸口に金箔きんぱくのついた埃及煙草エジプトを出して、すばすば吸い出した、

「そんな贅沢ぜいたくをする金があるのかい」

「金はなかばってんが、今にどうかなるたい。この煙草を吸つてると、大変信用が違います」

「寒月君が珠を磨くよりも楽な信用でいい、手数てすうがかからない。軽便信用だね」と迷亭が寒月にいうと、寒月が何とも答えない間に、三平君は

「あなたが寒月さんですか。博士にや、とうとうならんですか。あなたが博士にならんものだから、私が貰う事にしました」

「博士をですか」

「いいえ、金田家の令嬢です。実は御氣の毒と思うたです。しかし先方では是非貰うてくれ貰うてくれと云うから、とうとう貰う事に極め^きました、先生。しかし寒月さんに義理がわるいと思つて心配しています」

「どうか御遠慮なく」と寒月君が云うと、主人は

「貰いたければ貰つたら、いいだろう」と曖昧^{あいまい}な返事をする。

「そいつはおめでたい話だ。だからどんな娘を持つても心配するがものはないんだよ。だれか貰うと、さつき僕が云つた通り、ちゃんとこんな立派な紳士の御^{むこ}嬢さんが出来たじゃないか。東風君新体詩の種が出来た。早速とりかかりたまえ」と迷亭君が

例のごとく調子づくると三平君は

「あなたが東風君ですか、結婚の時に何か作ってくれませんか。すぐ活版にして方々へくばります。太陽へも出してもらいます」

「ええ何か作りましょう、いつ頃御入用ですか」
ごろ にゆうよう

「いつでもいいです。今まで作ったうちでもいいです。その代りです。披露のとき呼んで御馳走するです。ひろうシャンパンを飲ませるです。君シャンパンを飲んだ事がありますか。シャンパンは旨いです。うま——先生披露会うまのときに楽隊を呼ぶつもりですが、東風君の作を譜にして奏したらどうでしょう」

「勝手にするがいい」

「先生、譜にして下さらんか」

「馬鹿云え」

「だれか、このうちに音楽の出来るものはおらんですか」

「落第の候補者寒月君はヴァイオリンの妙手だよ。しつかり頼んで見たまえ。しかしシャンパンくらいじゃ承知しそうもない男だ」

「シャンパンもですね。一瓶ひつびん四円や五円のじゃよくないです。私の御馳走するのはそんな安いんじゃないですが、君一つ譜を作ってくれませんか」

「ええ作りますとも、一瓶二十銭のシャンパンでも作ります。なんならただでも作ります」

「ただは頼みません、御礼はするです。シャンパンがいやなら、こう云う御礼はどうです」と云いながら上着の隠袋かくしのなかから七八枚の写真を出してばらばらと畳の上へ落す。半身がある。全身がある。立ってるのがある。坐ってるのがある。袴はかまを穿はいてるのがある。振袖ふりそでがある。高島田がある。ことごとく妙齡の女

子ばかりである。

「先生候補者がこれだけあるです。寒月君と東風君にこのうちどれか御礼に周旋してもいいです。こりやどうです」と一枚寒月君につき付ける。

「いいですね。是非周旋を願いましょう」

「これでもいいですか」とまた一枚つきつける。

「それもいいですね。是非周旋して下さい」

「どれをです」

「どれでもいいです」

「君なかなか多情ですね。先生、これは博士の姪めいです」

「そうか」

「この方は性質が極ごくいいです。年も若いです。これで十七です。

——これなら持参金が千円あります。——こつちのは知事の娘

です」と一人で弁じ立てる。

「それをみんな貰う訳にやいかないでしょうか」

「みんなですか、それはあまり慾張りたい。君一夫多妻主義いつふたひいしゆぎですか」

「多妻主義じゃないですが、肉食論者にくしよくろんしやです」

「何でもいいから、そんなものは早くしまつたら、よかろう」と主人は叱りつけるように言い放つたので、三平君は

「それじゃ、どれも貰わんですね」と念を押しながら、写真を一枚一枚にポケットへ収めた。

「何だいそのビールは」

「お見やげでござります。前祝まえいわいに角かどの酒屋で買うて来ました。

一つ飲んで下さい」

主人は手を拍うつて下女を呼んで栓せんを抜かせる。主人、迷亭、独

仙、寒月、東風の五君は恭しくコップを捧げて、三平君の艶福えんぶくを祝した。三平君は大に愉快な様子でおおい

「ここにいる諸君を披露会に招待しますが、みんな出てくれますか、出てくれるでしょうね」と云う。

「おれはいやだ」と主人はすぐ答える。

「なぜですか。私の一生に一度の大礼たいれいですばい。出てくんなさらんか。少し不人情のごたるな」

「不人情じゃないが、おれは出ないよ」

「着物がありませんか。羽織と袴はかまくらいどうでもしますたい。ち

と人中ひとなかへも出るがよかたい先生。有名な人に紹介して上げます」

「真平まっぴらご免めんだ」

「胃病なのおが癒なりますばい」

「癒さらんでも差支さしつかえない」

「そげん頑固張りなさるならやむを得ません。あなたはどうです来てくれますか」

「僕かね、是非行くよ。出来るなら媒酌人たるの栄を得たいくらいのものだ。シャンパンの三々九度や春の宵。——なに仲人は鈴木とうの藤さんだつて？ なるほどそこいらだろうと思つた。これは残念だが仕方がない。仲人が二人出来ても多過ぎるだろう、ただの人間としてまさに出席するよ」

「あなたはどうです」

「僕ですか、一竿風月閑生計、人釣いつかんのふうげつかんせいけい白蘋紅蓼間ひとはつりすはくひんこうりようのかん」

「何ですかそれは、唐詩選ですか」

「何だかわからんです」

「わからんですか、困りますな。寒月君は出てくれるでしょうね。今までの関係もあるから」

「きつと出る事にします、僕の作つた曲を楽隊が奏するのを、きき落すのは残念ですからね」

「そうですね。君はどうです東風君」

「そうですね。出て御両人の前で新体詩を朗読したいです」

「そりや愉快だ。先生私は生れてから、こんな愉快な事はないです。だからもう一杯ビールを飲みます」と自分で買って来たビールを一人でぐいぐい飲んで真赤まっかになった。

短かい秋の日はようやく暮れて、巻煙草の死骸しがいが算を乱す火鉢

のなかを見れば火はとくの昔に消えている。さすが呑氣のんきの連中

も少しく興が尽きたと見えて、「大分遅だいぶんおそくなつた。もう帰ろうか」とまず独仙君が立ち上がる。つづいて「僕も帰る」と口々

に玄関に出る。寄席よせがはねたあとのように座敷は淋しくなつた。

主人は夕飯ゆうはんをすまして書斎に入る。妻君は肌寒はださむの襦袢じゅばんの襟えりを

かき合せて、洗い晒しあらざらの不断着を縫う。小供は枕を並べて寝る。
下女は湯に行つた。

呑氣のんきと見える人々も、心の底を叩いて見ると、どこか悲しい音がする。悟つたようでも独仙君の足はやはり地面のほかは踏まぬ。気楽かも知れないが迷亭君の世の中は絵にかいた世の中ではない。寒月君は珠磨たますりをやめてとうとうお国から奥さんを連れて来た。これが順当だ。しかし順当が永く続くと定めし退屈だろう。東風君も今十年したら、無暗に新体詩を捧げる事の非を悟るだろう。三平君に至つては水に住む人か、山に住む人かちと鑑定がむずかしい。生涯しょうがい三鞭酒シヤンパンを御馳走して得意と思う事が出来れば結構だ。鈴木とうの藤さんはどこまでも転ころがつて行く。転がれば泥がつく。泥がついても転がれぬものよりも幅が利きく。猫と生れて人の世に住む事もはや二年越しになる。自分

ではこれほどの見識家はまたとあるまいと思うていたが、先達（せんだつ）でカーテル・ムルと云う見ず知らずの同族が突然大気燄（だいきえん）を揚げたので、ちよつと吃驚（びつくり）した。よくよく聞いて見たら、実は百年前に死んだのだが、ふとした好奇心からわざと幽霊（ゆうれい）になつて吾輩を驚かせるために、遠い冥土（めいど）から出張したのだそうだ。この猫は母と対面をするとき、挨拶のしるしとして、一匹の肴（さかな）を啣（くわ）えて出掛けたところ、途中でとうとう我慢がし切れなくなつて、自分で食つてしまつたと云うほどの不孝ものだけあつて、才気もなかなか人間に負けぬほどで、ある時などは詩を作つて主人を驚かした事もあるそうだ。こんな豪傑がすでに一世紀（いせき）も前に出現（ひん）しているなら、吾輩のような碌（ろく）でなしはとうに御暇（おいとま）を頂戴（ていだい）して無何有郷（むかうのきよう）に帰臥（きが）してもいいはずであつた。

主人は早晚胃病で死ぬ。金田のじいさんは慾でもう死んでい

る。秋の木の葉は大概落ち尽した。死ぬのが万物の定業で、生きていてもあんまり役に立たないなら、早く死ぬだけが賢いかも知れない。諸先生の説に従えば人間の運命は自殺に帰するそうだ。油断をすると猫もそんな窮屈な世に生れなくてはならなくなる。恐るべき事だ。何だか気がくさくさして来た。三平君のビールでも飲んでちと景気をつけてやろう。

勝手へ廻る。秋風にがたつく戸が細目にあいてる間から吹き込んだと見えてランプはいつの間にか消えているが、月夜と思われて窓から影がさす。コップが盆の上に三つ並んで、その二つに茶色の水が半分ほどたまっている。硝子の^{ガラス}中のものは湯でも冷たい気がする。まして夜寒の月影に照らされて、静かに火消壺^{ひけしづば}とならんでいるこの液体の事だから、唇をつけぬ先からすでに寒くて飲みたくもない。しかしものは試した。三平などはあれ

を飲んでから、真赤まっかになつて、熱苦あつくしい息遣いきづかいをした。猫だつて飲めば陽氣にならん事もあるまい。どうせいつ死ぬか知れぬ命だ。何でも命のあるうちにしておく事だ。死んでからああ残念だと墓場の影から悔くやんでもおつつかない。思い切つて飲んで見ろと、勢よく舌を入れてぴちやぴちややつて見ると驚いた。何だか舌の先を針でさされたようにぴりりとした。人間は何の酔興すいきようでこんな腐つたものを飲むのかわからないが、猫にはとても飲み切れない。どうしても猫とビールは性しやうが合わない。これは大変だと一度は出した舌を引込ひっこめて見たが、また考え直した。人間は口癖のように良薬口に苦にがしと言つて風邪かぜなどをひくと、顔をしかめて変なものを飲む。飲むから癒なおるのか、癒るのに飲むのか、今まで疑問であつたがちようどいい幸さいわいだ。この問題をビールで解決してやろう。飲んで腹の中までにがくなつたらそ

れまでの事、もし三平のように前後を忘れるほど愉快になれば空前の儲け者で、近所の猫へ教えてやってもいい。まあどうなるか、運を天に任せて、やつつけると決心して再び舌を出した。眼をあいていると飲みにくいから、しつかり眠って、またぴちやぴちや始めた。

吾輩は我慢に我慢を重ねて、ようやく一杯のビールを飲み干した時、妙な現象が起った。始めは舌がぴりぴりして、口中が外部から圧迫されるように苦しかったのが、飲むに従ってようやく楽になつて、一杯目を片付ける時分には別段骨も折れなくなつた。もう大丈夫と二杯目は難なくやつつけた。ついでに盆の上にこぼれたのも拭うがごとく腹内に収めた。

それからしばらくの間は自分で自分の動静を伺うため、じつとすくんでいた。次第にからだが暖かになる。眼のふちがぼうつ

とする。耳がほてる。歌がうたいたくなる。猫じや猫じやが踊りたくなる。主人も迷亭も独仙も糞を食くらえと云う気になる。金田のじいさんを引搔ひつかいてやりたくなる。妻君の鼻を食い欠きたくなる。いろいろになる。最後にふらふらと立ちたくなる。起たつたらよたよたあるきたくなる。こいつは面白いとそとへ出たくなる。出ると御月様今晚はと挨拶したくなる。どうも愉快だ。

陶然とはこんな事を云うのだろうと思ひながら、あてもなく、そこかしこと散歩するような、しないような心持でしまりのない足をいい加減に運ばせてゆくと、何だかしきりに眠い。寝ているのだか、あるいてるのだか判然しない。眼はあけるつもりだが重い事夥おびただしい。こうなればそれまでだ。海だろうが、山だろうが驚ろかないんだと、前足をぐにやりと前へ出したと思う途端ぼちゃんと音がして、はつと云ううち、——やられた。ど

うやられたのか考える間まがない。ただやられたなと気がつくか、つかないのにあとは滅茶苦茶になつてしまった。

我に帰つたときは水の上に浮いている。苦しいから爪でもつて矢鱈やたらに搔かいたが、搔けるものは水ばかりで、搔くとすぐもぐつてしまう。仕方がないから後足で飛び上つておいて、前足で搔いたら、がりりと音がしてわずかに手応てごたえがあつた。ようやく頭だけ浮くからどこだろうと見廻みまわわすと、吾輩は大きな甕かめの中に落ちてゐる。この甕は夏まで水葵みずあおいと称する水草みずくさが茂つていたがその後鳥の勘公が来て葵を食い尽した上に行水ぎょうすいを使う。行水を使えば水が減る。減れば来なくなる。近来は大分減だいぶつて鳥が見えないなと先刻さつき思つたが、吾輩自身が鳥の代りにこんな所で行水を使おうなどとは思ひも寄らなかつた。

水から縁ふちまでは四寸余よもある。足をのばしても届かない。飛

び上つても出られない。呑氣のんきにしていれば沈むばかりだ。もがけばがりがりとして甕に爪があたるのみで、あたたつた時は、少し浮く気味だが、すべればたちまちぐつともぐる。もぐれば苦しいから、すぐがりがりをやる。そのうちからだが疲れてくる。気は焦あせるが、足はさほど利きかなくなる。ついにはもぐるために甕を搔くのか、搔くためにもぐるのか、自分でも分りにくくなつた。

その時苦しいながら、こう考えた。こんな呵責かしゃくに逢うのはつまり甕から上へあがりた**い**ばかりの願である。あがりた**い**のは山々であるが上**が**れないのは知れ切つて**い**る。吾輩の足は三寸に足らぬ。よし水の面おもてにからだ**が**浮いて、浮いた所から思う存分前足をのばしたつて五寸にあまる甕の縁に爪のかかりようがない。甕のふちに爪のかかりよう**が**なければいくらも搔がいても、

あせつても、百年の間身を粉にしても出られっこない。出られないと分り切っているものを出ようとするのは無理だ。無理を通そうとするから苦しいのだ。つまらない。自ら求めて苦しんで、自ら好んで拷問に罹っているのは馬鹿氣ている。

「もうよそう。勝手にするがいい。がりがりはこれぎりご免蒙るよ」と、前足も、後足も、頭も尾も自然の力に任せて抵抗しない事にした。

次第に楽になつてくる。苦しいのだからありがたいのだから見当がつかない。水の中にいるのだから、座敷の上にいるのだから、判然しない。どこにどうしていても差支えはない。ただ楽である。否楽そのものすらも感じ得ない。日月を切り落とし、天地を粉塵にして不可思議の太平に入る。吾輩は死ぬ。死んでこの太平を得る。太平は死ななければ得られぬ。南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏。

ありがたいありがたい。

後註

- 一 「なります」は底本では「なります。」
- 二 「曾呂崎」は底本では「曾兄崎」
- 三 ルビの「か」は底本では「け」
- 四 「惜しい」は底本では「措しい」
- 五 ルビの「あいづりよう」は底本では「あいずりよう」
- 六 「amicitiae」は底本では「amiciiae」

吾輩は猫である

底本：「夏目漱石全集 1」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和 62）年 9 月 29 日第 1 刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

1971（昭和 46）年 4 月～1972（昭和 47）年 1 月

入力：柴田卓治

校正：渡部峰子（一）、おのしげひこ（二、五）、田尻幹二（三）、高橋真也（四、七、八、十、十一）、しず（六）、瀬戸さえ子（九）

1999 年 9 月 17 日公開

2010 年 11 月 2 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。